
ちょっと違うZEROの使い魔の世界で貴族？生活します

うにうに

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ちよつと違うZEROの使い魔の世界で貴族？生活します

【Nコード】

N1431N

【作者名】

うにうに

【あらすじ】

この作品は、ゼロの使い魔の二次創作作品です。オリ主に加えオリキャラ・戦女神キャラが多数出てきます。ストーリーは最終的に、かなり原作を外れますので嫌な方はリターンお願いします。初投稿作品ですのでよろしくお願いします。

オリ主（転生・原作知識有り）は、前世では人見知りする上嘔吐きだった。こんなオリ主ですが、夢は平和で静かな老後を送ること。残念ながら、この夢を実現するには原作介入必至っばい。だが、戦争するのは嫌。裏工作で切り抜けるにしても、金が足りない。コネ

が足りない。名声が足りない。そして何より目立ちたくない！！これは、金を稼いで強くなるしかない。領地経営・盗み・錬金・鍛冶で稼ぐぞ！！（ストーリーは割とシリアス分多目？）オリ主はチートだが最強じゃありません。

感想・誤字指摘は歓迎ですが、厳しい突っ込みはご遠慮ください泣きますので。暴走した時は、生温かい目で見守ってね。

430万pv67万ユニーク突破しました。ありがとうございます。

プロローグ（前書き）

初投稿ですのでよろしくお願いします。

誤字脱字のご指摘は歓迎ですが、厳しい突っ込み等は、マジ泣きますので自重お願いします。

多少、過激な表現もしたのでR15と残酷描写ありはつけさせていただきました。

プロローグ

思えば、何をやっても中途半端な人生だったと思う。

苦しさに痛む胸を押さえながら、ふと……そんな事を思った。

ただ漠然と分かる事は、自分の人生がもう終るという事だ。

今までの人生で、体験したことが頭の中で高速で再生される。何故かずっと昔に忘れてしまった事まで、鮮明に頭の中で流れていく。これが走馬灯って奴かな？等と思いきってしまった。

口数が少ないけど、俺を愛してくれた父と母。

子供の頃に、入り浸っていた近所の鍛冶屋。

時に厳しく、時に優しく接してくれた剣の師匠や兄弟子達。

時々、趣味の体験旅行に付き合ってくれた友人達。

趣味で執筆した小説を、ボロクソ言いながらも感想をくれた友人。

ゲームの事で、よく語り合った親友。

失業後も、よく連絡をくれた元同僚。

彼女は、……居た事ないです。（やめよう。涙が出て来る）

人見知りが激しく、友人こそ少なかったものの、中途半端なりに
恵まれた人生だったと思う。

多分、心臓麻痺かな。などと、まるで他人事のように思いなが
ら倒れる。

意識が薄れていく……………

妙に眠い……………

それなのに孤独感だけがくつきりと大きく……………

これが……………

……死か。

ふと気付くと、暗い場所にいた。暗いが、全く何も見えないと言
う程では無い。目の前に、大きな河のようなものが見える。その中
に、大きな門のようなものまで確認できた。幻想的なのに、どこか
畏怖を感じる門だ。

「ここは……？」

見慣れない場所に、つい疑問が口から漏れ出てくる。

「……は、冥き途」

「……っ!？」

答えてくれる相手が居るとは、微塵も思ってもみなかったのだからかなり驚いてしまった。あわてて、声がした方に振り向く。

「ひっ……!？」

情けない声が、自分の口から漏れ出てへたり込んでしまった。だが、それも仕方がないだろう。目の前に、化け物が居るのだから。化け物は頭が三つある巨大な犬だった。こいつがその気になれば、俺を楽にひと飲み出来るだろう大きさがある。

本能的に逃げ出したいと思っても、体がすくんでしまって動けない。

「……ケルちゃんが怖いのか？」

明らかにパニックを起こしかけていたが、その一言でまるで水をかけられたように冷静になる。見ると化け物(たしか、ケルベロスだったか)に、金髪の少女が跨っていた。よく見るとケルベロスの目にも、理性の光がある。怖がるのは失礼だったか？

「えっと……君は？」

「ん……ナベリウス」

冷静さを幾分取り戻したが、状況の方はサッパリつかめず漠然と問いかけてしまった。返ってきた答えは、おそらく名前だろう。

(ナベリウス? ……ソロモン72柱のか? って事は、魔神ですか? この少女が? いや、この少女(魔神?)がその気ならとっくに襲われてる。落ち着いて対処すれば大丈夫だ)

少女(魔神?)の答えに、せっかく取り戻した冷静さを再び手放しかけたが、必死に自分に言い聞かせ持ち直す。

「見回り終わったわ」

そんな時、新しい声が聞こえた。声の方を向くと、なんか禍々しい槍がふよふよと飛んで来ていた。再び絶句している俺を余所に、槍?とナベリウスが何か話している。よく見ると、槍を持った半透明な少女が見え隠れしていた。

(幽体? この子は幽霊なのか?)

ナベリウスと幽霊が、「異常無し」等の話が終ると二人?がこちらを向いた。

「これは何?」

幽霊が、ナベリウスに問いかける。

「分からない」

「そう……、なら聞いてみた方が早い。あなたは何者ですか?」

幽霊が問いかけてくる。ここは素直に答えた方が、よさそうな気がする。

「えっと、……多分死者だと思う。名前は……ってあれ？ 思い出せない。他は、思い出せるのに……。なんで、名前だけが」

「そう、名前を失っているのね。でも、危険は……無さそうね」

自分の名前を思い出せず焦っている俺に、幽霊少女が槍を消して近づいてくる。そのまま俺の額に右手を当て、目をつぶり意識を集中した。そして、次の瞬間目を見開いた。

「……おかしい」

「なにが？」

幽霊少女の言葉に、問い返したのは俺ではなくナベリウスだった。

「肉体とのリンクが、完全に途絶えてしまっているから、死者なのは間違いない。でも、魂が僅かだけ欠けてる。本来ならそこから力が抜けて、消滅してしまうはずなのに。これで意識が有る上に、記憶も有るなんてありえない。……何か、強力な加護でも受けているのかしら」

「どう言う事だ？ 幽霊さん。出来れば説明して欲しいんだが」

「ム……。私は、リタ。……リタ・セミフよ」

今度こそ問い返すが、幽霊さん発言が、お気に召さなかったようだ。少し不満そうな顔をしているが、名乗っていなかったの、ここは流してもらいようだ。正直に言って、ありがたい。

「あなたは、肉体との繋がりが完全に途絶えているから、死者なのは間違いないわ。でも、魂が欠けてしまっているのに、魂が維持できている。それは本来ならあり得ないこと。例えるなら、水で満たされたコップの底に穴を開けても、水がこぼれ落ちないようなもの。消滅しないのは、何かしらの加護や力を受けているからだと思うのだけど……」

リタはそこまで説明すると、首をひねり黙ってしまった。どうやら、本当に分からないようだ。

「まあ……。状況は何となく分かった。これから俺は如何すれば良い？」

「本来ならこの門を通って、輪廻の輪に戻るの。その為には、今生の業を洗い流す必要が有る。でもその際に、業と一緒に加護や力も洗い流されてしまうから」

リタが難しい顔をしている。目線でナベリウスに助けを求めたようだ。ナベリウスも顔を横に振っている。どうやら俺の存在は、この二人にとって相当な珍事らしい。

「えーと、要するに俺は消滅するしかないと……」

「そうは言っていないけど。……魂を一度分解して再構築でもしない限り、消滅は避けられない。ちなみに、私たちでは絶対に無理よ。私達よりずっと高位の存在でないと。それこそ、主神クラスでもなければ……」

二人とも見ず知らずの俺の為に、必死に手を考えてくれているのは好感が持てる。二人とも美人で可愛いし。そんな2人を困らせて

いるのが、自分だと思うと心苦しくなる。

「その主神クラスには、どこに行けば会えるのかな？」

俺の質問に二人とも目をそらした。まあ、二人の態度に予想はしていたが。

「……あっ！」

その時ナベリウスが声をあげた。俺とリタの視線が、ナベリウスに向かう。しかし、何か名案が浮かんだわけではないようだ。ナベリウスの視線を追うと、そこに薄らと光る玉のようなものが浮いていた。

「それ人の魂ね。ここで人の形がとれないのは、どうしてかしら？」

リタがそう呟きながら近づき、手をかざして目を瞑り意識を集中する。

「どうやら、貴方のお仲間の様よ」

「どう言う事だ？」

リタの呟きに、俺は思わず聞き返した。

「この子は、肉体とのリンクがまだ切れていない。でも、この子も魂も貴方と同じように欠けてしまっている。消滅していないのは、貴方と同じ理由だと思う。それと人の形がとれないのは、生まれた直後にここに来てしまったから。纏うべき霊体の形を、認識出来ないせいね。恐らくだけど、産声もあげることが出来なかったの

だと思っ」

リタの語気が若干弱くなる。この子か両親か、もしくは両方に同情したのだろうか？

「そうか、俺のお仲間なんだな。魂つてのは、触っても大丈夫なのか？」

「……大丈夫」

答えたのはナベリウスだった。礼を言い、魂に近づき右手を伸ばす。軽い気持ちで、少し撫でてやるだけのつもりだった。

しかし、触れた瞬間にそれは起こった。その魂は俺の右手の内部に侵入し、腕の中を通りそのまま心臓部分（俺の霊体の核・魂が有る場所）へと進み、俺の魂とこの子の魂がぶつかった。その瞬間、俺は人の姿を保てずに魂だけの姿になる。何が起こったか、俺は全く理解できなかった。

「……融合？」

ナベリウスは呟き、近くで見ていたリタは絶句していた。だが俺は、そんな事を気にする余裕は無かった。魂に恐ろしい激痛が走ったからだ。それは例えるなら、頭を開かれ脳を捏ね回されているような感覚・激痛・悪寒が走る。また同時に、自分が自分ではなくなっていく感覚。これは、浸食されている？いや、逆に浸食しているのかもしれない。意識が混乱し、自分が何者かさえ分からなくなっていく。

「……………!？」

「……………!？」

どれだけ、時間が経ったのだろうか？ 何日？ 何時間？ 何分？ 何秒？ いや、ひよつとしたら一瞬の出来事だったのかもしれない。

声が……聞こえる。いや聞こえるのではない。声を感じるのだ。何となくだが、この声がリタとナベリウスの物だと分かった。どうやら心配してくれているようだ。とりあえず激痛も悪寒も引いたので、もう大丈夫だと伝える。それは声にはならなかったが、二人には伝わったようだ。リタは胸をなでおろし、ナベリウスは頷いた。

「ナベリウス。さっきの融合って、如何言う事？」

リタがナベリウスに質問を投げかける。

「融合。二つの魂が一つになり補いあった」

ナベリウスの言葉を聞いたリタは、一つになった魂に手をかざした。そして目を閉じ意識を集中する。

「すごい！！魂の欠けが綺麗になくなって。それに、……力強い

魂。二人分だからかな？ あの子の時に感じた、肉体へのラインもまだ生きている。これは、奇跡と呼んで良いほど本当にすごい。こんな貴重な体験、セリカ様と旅をしていた時以来」

リタは彼女にしては珍しく、本当に嬉しそうだ。それはナベリウスも同様の様で、口元には少しだけ笑みが浮かんでいる。

「リタ。この魂の融合は、おそらく誰かによって仕組まれたもの。でも、本来なら消滅するはずだった魂が、再び生を受け輪廻の輪に還って逝く。これは私たちにとって祝福すべき事」

ナベリウスも余程嬉しいのか、饒舌になっている。

その時、あたりを強く優しい光が包んだ。

「これは……大いなる意思」

「大いなる意思？」

ナベリウスの呟きに、リタが復唱で答える。

「デイル＝リフィーナではない、どこかにいる神様」

ナベリウスが答える間にも、光は融合した魂に集まって行く。

どうやら魂を肉体へ転送するようだ。

「また、会いましょう。名も亡き誰か」

「じゃ……………」

そして光が消え去った。

「何かあれ、ちょっとだけセリカ様に似てたね」

「……うん」

その場には冥き途の管理者だけが残された。

「この滅びゆく世界に、運命を変える一つの因子たれ」

融合した魂は、確かにその言葉を聞いた。

プロローグ（後書き）

初っ端からゼロ魔のゼの字も出てきません。

これで良いのでしょうか？次回からハルケギニアへ行きますが。

初回から、オリ主以外はすべてゲストキャラ（戦女神）

この二人（リタ・ナベリウス）は、是非今後も出していききたいです。
オリ主、臨死体験（タイガー道場）しまくりか？

あと気付いた方もいらっしやると思いますが、作者は寄生獣大好き
です。

感想お待ちしております。

第一話 ハルケギニアで生まれてみた

黒髪の男アズロック・ユース・ド・ドリユアスは、気ばかりが焦っていた。

先ほどから扉の前を行ったり来たり。近くにある椅子に腰かけたかと思えば立ち上がり、また扉の前をウロウロする。時々トイレに行っては、すぐ帰ってくる。とにかく落ちつかなかった。普段の彼は冷静沈着で、部下の信頼も厚い良い男のだが、残念ながら今の彼はただの挙動不審な男である。

「まだか……まだ産まれんのか!!」

彼の口から何度も発せられている言葉である。

「旦那様!! 落ち着いてください!! 旦那様も奥様も使用人達も、出来ることは全て行いました。後は奥様を信じて待ちましょう」

老執事が彼を落ち着かせようと声をかける。

「オーギュスト。分かっている!!……分かってはいるが!!」

アズロックは老執事に詰め寄りそうになったが、それが無意味で理不尽な行動である事に気付き止まった。

そしてアズロックは「解っている」と、繰り返し口にしながら椅子に座る。だが5分と持たずに、またウロウロし始める。老執事オーギュストは、ため息を吐きながらも強く言う事が出来ない。もちろん、主である事もあるが普段の彼ならば、言うべき所では確りと

諫言を言うタイプの人間である。アズロックは普段はそんな老執事を深く信頼しているし、諫言を深く受け止める度量が有るのだが、今だけは空の彼方へ吹き飛んでしまっていた。このままでは我慢できずに、扉を開けて中に突入しかねない。

これは妻の出産に対して、もう何もできない事への無力感が原因だろう。そこで老執事は、自らの主を落ち着かせる為「出来る事を、用意する事にした」。

「旦那様。始祖ブリミルに祈りを奉げてはいかがでしょう？ 加護を頂けるかもしれません」

老執事は平民出の為、始祖ブリミルなど全く信仰してなかったが、この出産が無事に済むのなら、これからは熱心に信仰しても良いと本気で思っていた。正直に言えば「溺れる者は藁をもつかむ」と、言う奴だ。

それは主であるアズロックも同様である。ドリユアス夫妻は、共に親が大貴族の妾の子供だった。当然、領地や財産など分け与えられるはずもなく、苦しい生活を送っていた。そんな生活をどうにかする為には、軍務につき手柄を立てるしか無かったのだ。

だが軍に入ってからには、幸運に恵まれていたと思う。上司（ヴァリエール公爵）に恵まれた事も大きかったが、何より妻のシルフィアに出会えた事が、何にも代えがたい幸運だった。二人は軍の任務で出会い、互いめずらしい黒髪であった事と境遇が似ていた事が幸いし、トントン拍子に話が進み結婚することとなった。

二人の実力は、非常に高かった。アズロックは、メインが土のスクウェアでサブが水のライン。妻のシルフィアは、メインが風のス

クウエアでサブが水のラインである。順調に手柄を立て、今では子爵の位と領地を手に入れている。だがここまで来るにも、決して平坦な道では無かった。貴族達の僻みや嫉妬が原因で、数々の嫌がらせを受けて来た。無茶な任務を押し付けられて、死にかけたことも一度や二度では無い。ロマリアの糞坊主共は、苦勞して貯めた貯えを奪うだけでは飽き足らず、異端審問にかけられ処刑されそうになった事もある。ヴァリエール公爵が助けられなければ、今頃生きてはいなかっただろう。

表向きはともかく、ハツキリ言ってドリユアス夫妻は始祖ブリミルを全く信じていなかった。それでも弱っている時は、何かにすがりつきたいものである。

「シルフィアは本当に大丈夫か？ああ……始祖ブリミルよ。どうか我が最愛の妻を、お守りください。そして生まれ来る我が子を、無事ハルケギニアにお導きください。お願いいたします。どうか……どうか……始祖ブリミルよ。今度こそ……今度こそ……お願いいたします」

アズロツクはそう唱え、必死に始祖ブリミルに祈った。顔は今にも泣き出しそうだった。そう、彼が必死になるのも理由があったのだ。ドリユアス夫妻は、以前に一度出産を経験している。生まれきたのは、女の子だった。しかしその赤子は、唯の一度も泣く事は無かった。今から4年ほど前の話だ。

アズロツクが始祖に祈りをささげ始めて、どれほどの時間が経っただろう。数時間経っただろうか？いや、ひよっとしたら数分しか経っていないのかもしれない。少なくともアズロツクにとって、その時間は無限にも等しい永い永い時間だった。

突然妻が居る扉の向こうが騒がしくなった。だが……産声が聞こえない。考えまいとしても、4年前の悪夢が思い出される。もう……嫌な予感しかしない。

「いやあああああーーーーー！！！」

その時妻の悲鳴が、屋敷中に響いた。アズロックは祈るような気持ちで、扉を開けて部屋に飛び込む。そこで見たのは生まれたばかりの赤ん坊を抱き、唯泣き叫ぶ血まみれの妻の姿だった。

（嘘だ！！嘘だ！！嘘だ！！嘘だあ！！嘘だあ！！嘘だあ
ーーーー！！！！ また、またなのか？ 我が子は、泣いてくれないのか？ 笑ってくれないのか？）

目の前には我が子を抱き、唯泣き叫ぶ最愛の妻の姿。すぐに妻の元へ行き、泣かない赤ん坊ごと妻を抱き締める。

全てに裏切られたような気分だ。自分の可能な範囲で、出産に良いとされる秘薬を買い求めた。戦線では我ら夫妻が抜けた穴を埋める為、上司や部下同僚達はかなりの無理をしてくれた。使用人達は最高の環境を整えてくれた。自分の周りにいる人間は、すべての者達が全力を尽くしてくれた。なのに何故だ。怒りの持って行き場が見つからない。周りの者達に、あたるわけにはいかない。始祖ブリミルに、怨み言を言った所で気が晴れる事は決して無い。まして、妻や泣いてくれない我が子にあたるなど、あってはならない。

その時いつの間に夜の帳が下りたのか、窓の外に皮肉にも美しい星が爛々と輝いていた。まるで当てつけのように感じた。アズロックの怒りは、全てがその星に向かった。

夫は妻の言葉に、嬉しそうに頷く。

「おお。そうだ。この子は星に助けられた。ならば、星にちなんだ名前にしなければならん」

「はい」

正直に言えば、名前など何十通りも考えていた。が、今この瞬間それら全てが、我が子に相応しくないと考えてくる。この星の奇跡の子には……。

「星に正義を、輝かしい契約を！！」

私は、この子に名前をここに決めた。

この子の名は、ギルバート・アストレア・ド・ドリユアスだ」

第一話 ハルケギニアで生まれてみた（後書き）

第一話できました。

タイトルの割に、出来上がったのはギャグもパロも一切なし。
どうしてこうなった？

答え 作者の実力不足だ。

本当に、すみませんでした。

第二話 カルチャーショック！！母上何か隠していませんか？

あの光に包まれて、どれ位の時間が経っただろう？意識というものが、ほとんど表に出る事は無く唯、暖かいぬくもりに包まれていた。僕と俺が融合「じっさいあいにあいで」して私になる。

まるで幸せな夢を見ているようだ。何一つ変化のない日常。

だが、そこに自由は無かった。例えば自らの足で歩くこともできなし、立ち上がることもすらできない。意識すら縛られ、自由に思考することすらできない。そう、そこから抜け出す力さえ今の自分にはなかった。

僕にとって此処は力ない自分を、守ってくれる場所だった。

俺にとって此処は自由を縛りつけ、閉じ込められる場所だった。

では、私にとって此処は如何いう場所なのだろう？

また、意識が浮上する。目の前には、優しく笑いかけてくれる黒髪の女性。この人が、僕の母親なのは何故かすぐに判った。抱きしめられた時に感じた鼓動が、ずっと僕を守ってくれた鼓動だったからだ。

僕にとって、この人は最愛の母親。

俺にとって、この人は赤の他人。

私にとって、この人はもう一人の母親。

また意識が沈んでいく。目覚める度に、僕と俺が無くなり私になってゆく。それでも、僕と俺に絶望は無い。ただ、私になるだけのだから。

僕にとって、此処は守っていききたい場所だから。

俺にとって、此処は……まあ、もう一つの家だからな。

私にとって、此処は失ってはならない大切な場所だから。

願わくば、次の目覚めですべて私になってますように。

気がつくと、僕と俺は完全に私になっていた。先ず今の状況を整理する。先にリタが言っていたように、あの子……いや僕が冥の途に来てしまったのは、生まれてすぐ産声を上げる前だったのは間違いない様だ。そして、あれから1年と2カ月（1歳の誕生日か

ら月カレンダーを2回捲られた) 経っていた。魂がなじむのに、これ程の時間がかかるのか。

この1年と2カ月の記憶は、断片的ではあるが私の頭の中にある。その情報を整理しよう。

初めは家族構成からだ。確認しているのが、父と母と自分の3人のみ。兄弟や姉妹は、確認できなかったので居ないのだろう。祖母も同様に居ないようだ。別居が既に死別しているか？この辺りは不明だな。

次に周りの環境について考えてみよう。この家は使用人が居る事や、家具・調度品・屋敷の大きさから見て、かなり裕福な家のようにだ。(祖父母は別居の線が濃厚か?) だが、文明レベルが良く分からない。使用人達が、蝋燭やランタンを使用しているのを見た記憶がある。だが、母上が棒のようなものを軽く振っただけで、照明が点灯した記憶があるのだ。

・・・なんでさ？

まあ、分からない事は放っておいて次に移動方法だ。今の1歳と2月の私では、ハイハイと伝い歩きがやつとか。えっと、俺だった頃も含めると・・・34歳と3カ月か・・・結構な年だな。

・・・マ・テ・ヨ・・・トイレどうする？

そうか俺が言外に言っていたのは、こう言うことか。私は初めて、俺の苦悩が分かったような気がした。精神年齢が、30歳過ぎの赤ん坊大人にオムツ交換か、精神的には地獄だったのだろうな。そういう趣味は無かったし。私は心の中で俺に同情する。

しかし、今からは他人事？ではない。如何にかしなければ、大いなる意思が言っていた。『この滅びゆく世界に、運命を変える一つの因子たれ』を実行する前に、私が精神的に死ぬ！！

とにかく、・・・とにかく今すぐ対策だ！！

まず一番の解決方法は、一人でトイレに行けるようになることだが、これは問題点がいくつかある。

1・トイレの場所が分からない。

これはハイハイと伝い歩きを駆使すれば、自分で探索し発見することが可能だろう。とりあえず解決可能な範囲だ。

2・トイレの使い方が分からない。

これは、実際トイレを見てみないと分からない。場合によっては可能かもしれないが、一番危惧しているのはお尻を拭く紙がない可能性が有る事。母上の謎の照明点灯を無視すれば、今いる世界は俺の世界で言う中世・ヨーロッパの時代に対応するっぽい。この時代では紙は貴重品だ。トイレトペーパーが有るとは思えない。

3・トイレの作りが私の体格に対応していない可能性がある。

これが一番の問題だ。トイレの形状が壺で、排泄物を溜め後で捨てに行く場合。私の体格では、使用不可能だろう。もっと最悪なのは、ぼつとん式のトイレの場合だ。下手したら落ちる。その場合、最悪死ぬ可能性すらある。そうでなくとも汚物まみれだ。間違いなく次から監視がつく。それ以前に、だれかが責任取らされるかもしれない。

他には、外でしてしまうという手もあるにはあるか。だがこの手

は、使えて1度か2度が限界かな。まず間違いない見つかって、連れ戻され監視がつく。なんかお先真つ暗だな……。もう鬱になつてきた。こうなったら、構わず部屋の中で……。っ!? そうだよ、おまるだよ。おまるなら、中世・ヨーロッパ時代なら有るはずだ。よし早速作戦を練らねば……。

フリーフィンゲ
一人脳内会議開始……

まずは、今回のミッション内容の確認だ。ターゲットはおまる。

これは発見さえできれば、後はどうにかなる。最悪ターゲットの淵を握りしめ、泣けばなんとかなる。問題はターゲットまでたどり着けるかどうかだ。ターゲットが、格納場所として最も有力なのは一階の物置部屋だ。現在位置は、二階の寝室なのでどうやって一階まで通らなければならぬ。また、使用人に発見された場合。現状では、逃亡はまず不可能だ。また、一度でも失敗すると監視がつく。失敗が許されんミッションだ。私の体格を考えれば、今回のスニークミッションは困難を極める。だが私の人としての尊厳の為に絶対成功させてみせる!!

フリーフィンゲ
一人脳内会議終了……

(よし、ミッションスタートだ)

まずは、手早くベツトから降りる。その際、転がって頭打ったけど気にしない。

(……。すみません。本当は無茶苦茶痛いです。しかし私の人間としての尊厳に比べれば、この程度耐えて見せる!!)

すぐにハイハイで、まっすぐドアに向かう。壁立ちでノブに触ると、アツサリとドアは開いてくれた。(よし、ラッキー)そのまま

壁歩きで、記憶の断片にあった物置部屋へと向かう。が、目の前に最初の難所が待ち構えていた。

そう……階段だ。まず周りをよく観察する。階段には運のよい事に、手すりには手が届かないが階段一段毎に、手すりを支える支柱が立っていた。また、使用人の姿もない。

よし、今ならば行ける。支柱に確りつかまり、一段一段慎重に下りていく。途中で二階の階段付近を、メイドが通過した時は、肝を冷やしたが下りきる事が出来た。

後はこの廊下を渡り切れれば、目的地だ。ここで気を引き締めなおし、伝い歩きで一路物置部屋へ向かう。運のよい事に危惧していた使用人との遭遇はなし、物置部屋の扉を目の前でとらえた。そこで重大な見落としに気付いた。物置部屋に鍵がかかっている可能性だ。くっ……。なんたる間抜けだ。だが諦めるわけにはいかない。一縷の望みをかけて、扉を引っ張ってみる。なんと、大した抵抗もなく、開いてしまったではないか。しかも、入口のすぐ近くにターゲットを発見。すぐに床に座り、ハイハイ体勢移行し物置部屋に入ろうとした瞬間……。

(なんじゃこりやあぁー……………!!!)
「ああああああぁー……………!!!」

突然体がふよふよと宙に浮かび上がり、ターゲットから遠ざかっていく。全く信じられない、いったい何が起こったのか？突然の事に理解が追いつかない。

そして終点には、母上がいらっしやいました。ふよふよと飛んできた私を、両手で抱き締めるようにキヤッチします。とつてもイイ

笑顔です。ですがあまりの事態に私は、完全に固まってしまいました。

「もう。ダメじゃないの、こんな所に一人で来ちゃ〜」

母上のハイテンション特上機嫌ぶりに、思わずドン引きした私を誰も責められないと思いたい。

(母上が壊れた？なにゆえ？)

「もう、レベテーション位でこんなに驚いて。こんな、初級魔法でダメよ〜」

(なんだってええええー！！！！！)

「えええああああー！！！！！」

(マホウって、魔法ですか？・・・いや、魔神や幽霊に会った事ある以上いまさらか)

「もうすぐ、お兄さんになるんだから。もっと確りしてよね〜」

(なんですとおおおー！！！！！)

「おおおうとうとうー！！！！！」

(兄って弟か妹が生まれるのか？あー、だから上機嫌なのか？)

その時、母上の私を抱く力がキュツと少しだけ強まった。

「大丈夫。ギルバートちゃんは、ちゃんと泣いてくれたんだもの。

今度の子も大丈夫。あの子のようには、絶対にならない。そう・・・

・絶対」

(え？)

「う」

(母上？今震えてた？あの子って……)

「さあ、部屋へ戻るわよ」

そう言った母上は、先ほどの気味の悪いくらい上機嫌な母上に戻っていた。

(とっ、そつだ。おまる……………!!!)

「あつづつづつづつ……………!!!」

「おっ、元気いいわね。っとそつだおしめ大丈夫かな」

(ちーがーう……………!!!)

「あああつづつづつ……………!!!」

私は抵抗むなく、寝室へ連行されてしまいました。

(この時私の頭の中では、どっかの大佐が「スネーク」と連呼していました。そのうち、「スネーク」から「らりるれろ」変わるんだろーな。いや、もう考えないようにしよう。)

それから、しばらく恥辱の日々を過ごすことになってしまったのです。

(何でだろう・・・。目から汗がたくさん出て来たよ)

第二話 カルチャーショック!!母上何か隠していませんか?(後書き)

早々に、メタル アネタに走ってしまいました。

プレステ3買ったほうが良いかな?と思う今日この頃。

どうしよう、時々キャラが勝手に動く。

へたレな証拠か。

第三話 私は無力 母ぶっちゃける

こんにちは。先日発覚しましたが、私の名前はギルバートと言っ
らしいです。え？知ってたって？まあ気にしない。とりあえず先日
の続きです。

あれから数日が経過しましたが、未だに恥辱の日々が続いていま
す。その後もおまるをゲットする為に、何度もミッションを発動し
ました。が、すべて失敗に終わっています。原因は監視がついた事
もありますが、何故か使用人の士気がやたらと高いこと。残念なが
ら2度目以降のミッションは、全て階段前で捕獲されています。

……なんですか。（怒）

……とりあえず。冷静になろう。

とにかく屋敷内に違和感がある。使用人たちは母上と私を、なる
べく一緒に居させようとする。原因は恐らく、あの時の母上の態度
が関係していると思われる。あの子とは、誰の事なのだろう？まだ
言葉を完全に理解できていないのが痛い。他にも分かった事がある
し、まとめてみるか。

- 1 現在、母上は妊娠中である。
- 2 使用人達が、一丸となるような事である。
- 3 過去に、母上はあの子という存在と何かがあった。
- 4 現状、屋敷の中に存在しないあの子。
- 5 私が、少なからずかわっている？
- 6 使用人達の口振りだと、妊娠が発覚したのは最近である。
- 7 母上のお腹が、最近発覚したにしては大きすぎる。

以上が今現在分かっている事だ。流石にここまで分かれば、誰でも分かるような気がする。まず間違いなく、私には兄か姉がいる。そして恐らく、その兄か姉は生きていない。母上は妊娠を隠していた可能性が高い。死因が事故か病気なら、母上の態度が変なのも説明がつかないし、妊娠を隠す理由にならない。となると……、死因は流産か出産の失敗か……。

(……重い……)

現状では、私は母上に何にもしてあげられない。何か言葉をかける事さえも……。いや母上の側において、成功例である私自身をアピールすれば、多少は気がまぎれるかもしれないが……。

(早く喋れるようになりたい)

そう思いながら、言葉を早く覚えようと誓ったのでした。

(……無力だ……)

でも、トイレも忘れてないよ。

母上はあれから出かけなくなりました。動くのが辛いのか、もしくは流産が怖いのか……。恐らく両方なのだろう。母上が家にいるので、話相手(もっとも、聞く一辺倒だが)は主に私がしてい

る。おかげで、言葉は完璧？に理解できた。時間が有れば絵本も読んでくれるので、文字も少しずつだが覚え始めた。

それよりも今気になるのは、母上から聞いた話の内容だ。私が一々反応するので、母上也調子に乗ったのかもしくは不安で饒舌になったか、多くの事を話してくれた。聞き出した内容を、まとめると以下のとおりである。

- 1 ・この世界が、ハルケギニアという名前である。
- 2 ・この国は、トリステイン王国という国である。
- 3 ・他にも、アルビオン王国、ガリア王国、帝政ゲルマニア、ロマリア連合皇国という国がある。
- 4 ・この世界は、始祖ブリミルを神様として崇めている。
- 5 ・父上と母上は、表向き始祖ブリミルを信仰しているが、全く信じていない。
- 6 ・私のフルネームは、ギルバート・アストレア・ド・ドリユアスである。
- 7 ・父上のフルネームは、アズロツク・ユーシス・ド・ドリユアスである。
- 8 ・母上のフルネームは、シルフィア・ローズ・ド・ドリユアスである。
- 9 ・父上と母上は軍属である。上司はヴァリエール公爵である。
- 10 ・ここは、王都トリスタニアの南南西に位置するドリユアス領である。
- 11 ・ドリユアス領のすぐ東にはモンモランシ領がある。
- 12 ・ドリユアス領内にある、タルブ村産のワインがお気に入りである。でも、妊娠中なので今は飲めない。
- 13 ・ヴァリエール公爵夫人と、モンモランシ伯爵夫人も妊娠中である。おそらく、母上と同時期に出産する。
- 14 ・ヴァリエール公爵には、既に2人の娘がいる。

15・コモンマジックと4系統魔法。そして、伝説の虚無魔法がある。

16・私の祖父母は、大貴族の妾の子である。その為、父上と母上は苦勞した。

17・ドリュアス領では、平民を差別していない。その為、領民には好かれている。

18・父上は、土のスクウェア。母上は、風のスクウェアである。あと、二人ともサブで水のラインである。

19・ドリュアス領のすぐ南西に、魔の森という広大な森が広がっている。

20・私の名前を、命名したのは父上である。(怒)

大まかにはこんな所である。・・・ちよって待ってくれ。どっかで、聞いたことが有る単語が大量にあるのだが。って言うか、危険な発言オオスギです母上。不安なのは分かったから、兎に角落ち着けて言うか私が落ち着け。

(・・・とりあえず。冷静に・・・冷静に・・・)

聞いているうちは、偶然だなとか同じ地名や設定があるライトノベルを、俺が読んだ記憶があるな〜などと思っていました。ここまで来ると、どう考えても偶然じゃないでしょう。

それから母上。「異端審問で、殺されかけちゃった」などと可愛く言われても、反応に困りますから。

(しかし・・・そっか・・・ゼロの使い魔・・・か)

そう言えは、昔俺が面白い話を聞いてたな。確か、「物語と因子の流転」だったか。

創られた物語は、因子となり世界より漏れ出る。因子は、新たな世界を創りだす。創られた世界は、因子を還す。世界が、因子を取り込み人は新たな物語を紡ぎだす。

だつたかな？

例えば、リタ・セミフもナベリウスも俺がプレイした事がある、ゲームのキャラクターに特長が一致する。タイトルは戦女神だったな。小説だろうとゲームだろうと、物語には変わらないか。

因子に創られた世界だろうとその逆だろうと、たとえ全くの見当違いでも此処は私達にとつての現実であり故郷だ。大いなる意思が言っていた「この滅びゆく世界に、運命を変える一つの因子たれ」これは、この世界で生き滅び運命を否定しろって事なのか。

(上等だ。その運命を否定してやる!!)

もし、滅びが正しいなどと言う奴がいれば、

その幻想、ぶち壊す!!!)

それと、父上後で殴ります。アストレアって女名じゃないですか。
(怒)

第三話 私は無力 母ぶっちゃける（後書き）

ようやく（早々にか？）、オリ主は大義名分をえました。
「物語と因子の流転」は、前々から考えていたものです。
オリジナルのつもりなのですが、いかがでしょうか？
まだまだ、原作キャラも出るのも先の話（予定）ですが
この先、いったいどうなるのでしょうか？
書いてる本人が、一番わかりません。

第四話 今後の考察とへタレな父の告白

こんにちは、ギルバート・A・ド・ドリユアスです。え？Aが何の略かですって？・・・一応、アストライオスと言っておきます。

最近になって、立て続けにいろいろな事が発覚して知恵熱が出そうです。本当になんでこんな事になったのでしょうか？

それはそれとして突然ですが、俺に名前をつけました。理由は考えてる途中で混乱して、自分で分けが分からなくなるからです。後は、この知識の対外的な言い訳が欲しいからです。

名前は”マギ”にしました。意味は、東方の三博士（賢者）・魔法使い。誰かが、「進み過ぎた化学は魔法と変わらない」と言っていたし。あえて、単体系マクスにしなかったのは、「俺は私と僕を含めて俺である」という自負があるからです。

対外的には、『東の世界』ロバ・アル・カリイエから来た私の恩師にして、父上か母上の友人（故人）という事にしようと思っっています。いずれ、父上と母上には「冥き途にて、魂を癒し知識をくれた恩人」と紹介するつもりです。彼がいなければ、私は産声を上げる事が出来なかつたか・・・。父上と母上は、受け入れてくれると思います。

さて今後についてですが、いろいろ考えました。まず気になるのが、原作との差違です。私というイレギュラーが存在する以上、原作とまったく同じと言う訳にはいきません。また極端な事をして原作から外れ過ぎると、せつかくの原作知識があまり役に立たなくな

ります。

先ずは、マギが持っている原作知識についてまとめます。

ゼロの使い魔19巻（未完）

タバサの冒険3巻（短編）

烈風のカリン2巻（未完）

以上です。見事にライトノベル一色です。とは言え、十分すぎるほどの武器です。

現状分かっている差違は、私を別にすると魔の森という森です。瑣末過ぎて、原作で名前さえ出てこないだけなら良いのですが。

次に目標と今後の方針です。

目標は「平和で、静かな老後をおくる」です。あれ？私はなんで、こんなに枯れてるんだらう？

方針は「戦争を回避し、領民（国民）に負担をかけず原作より状況を改善する」です。綺麗事を言うな！！と、思うかもしれませんが私にとっては譲れません。

この方針では、リッシュモンやゴンドランといった腐った貴族の排除が効果的である考えます。またワルド子爵は、裏切らせないのが良いでしょう。味方にできれば、心強いが敵に回せば厄介な事この上ないです。幸い原作知識という武器があるし、私は結構嘔吐きですから。

どの道戦争を否定した以上、裏工作で切り抜けるしかありません。

最大の敵はジョセフ王か？正直勝てる気がしません。それとこの路線でいく以上、目立ちすぎるのはダメです。あくまで「多少腕の立つ青二才」程度の評価が望ましいです。暗殺とか怖いし。

とりあえず裏工作を行う上で、足りない物とその対策を考えてみました。

1．資金

これは解決が難しい問題だ。しかしマギの知識を利用すれば、決して不可能ではない。問題は初期資金と土地の確保だ。現状のドリユアス領で、それが可能かが問題だ。

2．コネクション

今のところ、私が知っている有力貴族は、両親の上司にあたるヴァリエール公爵だ。ここは、公爵に取り入りコネクションを広げるのが一番の近道だろう。

3．名声

兎に角、大きなことを成して周りから認められるしかない。これも、マギの知識を利用すれば十分に可能な範囲だ。

4．実力（政治手腕）

これは場数を踏むしかない。マギの頃は人見知りする為、交友範囲を絞りこみ狭く深い付き合いをしていた。この方面でマギの経験は、ほとんど役に立たない。

問題点は山積み状態です。特に目立ちたくないという最初の前提に、ことごとく反するのがキツイです。ある程度は誤魔化せますが、如何考えても限界があります。資金を稼ぐのは当然ですが、暗殺等は実力をつけて対応するしか手は有りません。

兎に角、赤ん坊の状態では何にも出来ないので、早く大きくなりたいです。

あれから、かなりの時間が経ちました。

言葉の方ですが、喋るトレーニングは意外に楽でした。最初に喉を鳴らすコツさえつかめば、マギの頃のと領ですぐ喋れるようになりました。それでも発音には、結構苦労しましたが。ちなみに目立ちたくないの、出来ない振りをしています。が流石にまずいと思い、最初に「まあまあ」と口にしたときは、母上にめがっさ喜ばれました。

(・・・なんか良心がものすごく痛みます)

文字の方は単語もかなり覚ええました。正直に言うと習得スピードが、尋常じゃないです。マギの時には英語の習得にあれだけ苦労したのに。・・・すいません。嘘言いました。マギの時に英語は、ちっとも習得できていません。

そしてやっと一人で、歩けるようになりました。まあ、まだまだ危なっかしいですが。

そのおかげか・・・やっと・・・やっと、我が目の前に待ちに待ったおまるが・・・。感動で涙が出そうです。あまりに嬉し

かったので、下を脱ぎ・おまるに跨り・排泄し・尻を拭き・再び下を穿くと言う一連の流れを、メイドの目の前でやってやりました。かなり驚いて、固まっていました。しかも、それをメイド長にそのまま報告したらしく、寝ぼけるな！！お説教をもらっていました。ザマー三口。もう、お前に下の世話にならねえよ！！

思えばトイレに行きたくなる度に、脱走していました。（屋敷の中ですと、絨毯などの掃除でシヤレにならない）しかし毎回パターンが決まっているかのように、同じ事を繰り返しました。

トイレに行きたくなる。 脱走 失敗 拘束 漏らす 恥辱の罰ゲーム

毎回このパターンなのです。しかも、このメイド10代後半で若いんです。終いには「抱っこすると漏らす」と言う、不名誉な誤解を受けていました。しかし、これでやっと私の名誉は回復する事でしょう。その後何故かトイレの度に、涙目で睨まれることとなりました。こっち見んな、後ろ向け！！・・・流石に、ちょっと可哀想か？あとで、何か埋め合わせしよう。このメイドは、たしかミリアって名前だったな。

そう言えば、おまる登場直前に事件がありました。いつも通り、恥辱の罰ゲームを受けた私は寝室で、見慣れない一冊の本を発見したのです。興味本位で開いてみると、それは18で発禁な本でした（文章のみ）。そこにミアアが、オムツの処理を終え帰ってきました。恥ずかしくなり、私は思わずその本を隠してしまいました。その後ミアアが、焦って何かを探していたので、持主は間違いなくミアアだと分かりました。この状況に本をなかなか返せずにいると、母上に本を発見されてしまったのです。母上はその本を、パラパラと流し読みをした後で一言。

「……………持主は誰？」

(母上!!!怖いです!!!)

業務内容に私の監視が含まれているミアは、その時同じ部屋に居ました。見るとミアは顔を青くしながら、変な汗を流し震えています。しかし余程あの本が惜しいのか、それとも後で発覚するのが怖かったのか、震えながら手を挙げ名乗り出ます。

その後私は、すぐにメイド長に預けられ部屋を追い出されます。帰ってきたときには、母上もミアも何故か笑顔でした。

……………いつたい何が有った？

いよいよ母上の出産が、目前に迫っています。しかし父上が全然帰って来ないので。思い出してみると、母上が家に閉じこもってから、一度も父上を見かけていません。使用人達も、父上が帰ってこないのを、心配しているようです。そこで、思い切って母上に聞いてみます。

「ばあばあ、いない、どこ？」

その言葉に、一瞬驚きすぐに喜びそして最後に、「王都よ」と咳きながら目をそらしました。

(いったい何が有った?)

それ以上は、何も聞けませんでした。

それから数日後。ようやく父上が帰ってきました。しかも、同僚らしき人に引きずられながら。同僚らしき人に、執事のオーギュストが対応しています。オーギュストは、何度も同僚らしき人に頭を下げています。同僚らしき人は、笑いながら「気にするな」と言っていました。結構良い人のようです。

少しだけ、話が聞こえましたが名前はゼツサルと言うらしいです。?あれ、マンティコア隊の隊長?あんまり、ごつく無かったし髭面でもなかったな?結構、若いみたいだけど同一人物か?

同僚らしき人は、かなり忙しいらしく父上を引き渡すと、すぐに帰ってしまいました。

父上は、そのまま母上のところに連行されます。そして、母上の前に立った父上は一言。

「すまなかった。・・・その、怒鳴ったりして悪かった」

と、言って頭を下げました。

「・・・いいの。最初に約束破ったのは、私なのだから」

母上は、そう言って首を横に振りました。そして、熱い抱擁を交わしています。

(この馬鹿夫婦、この大事な時に喧嘩してたのか?)

私はこの状況に、呆れてしまいます。見るとオーギュストさんは、溜息をついていました。他の使用人も、一様に疲れたような顔をしています。

(まあ、一件落着かな? 後は、赤ん坊が無事産まれてくれれば・・・)

そう思い、母上と弟か妹の無事を祈りました。

まあ、メイドに抱っこされたたままじゃ格好つかないんだけどね。

それから、二日後に陣痛が始まったのです。早々に父上と私は、部屋の外に放り出されます。心配ですが父上と私には、待つ事以外に出来ません。正直に言わせてもらえば、父上の挙動不審ぶりは目を見張るものが有ります。

先程から立ったり座ったり。扉の前をウロウロしたり。私を抱き上げては、下ろしてみたり。トイレに行っては、直ぐに戻ってきたり。何故か、星に向かって祈り始めたり。(何をやっているんだこの人は?)

そして終には、私を連れて隣室へ入ります。話をしていれば、気分がまぎれるとも思ったのでしょうか。私に向かって、今の自分の

思いを吐露していきます。正直、勘弁してほしいです。

そして、ヒートアップしてきた父上は、危険な発言（始祖プリミルの否定）をし始めます。

（この・・・似た者夫婦）

気が済むまで話を聞くと、父上は少し冷静になったようです。

「本当は、もっと大きくなってから話すつもりだったが・・・」
と、区切りました。

（はいはい、どうせまた同じ話を聞かせるつもりでしょ）

私が投げやりにそう思っていると、父上はぽつぽつと話し始めました。

最初の話は、母上が気にしていたあの子の話でした。あの子の名前は、ユリア・マース・ド・ドリユアス。そしてその子は、産まれても産声を上げる事なく逝ってしまったそうです。その時の事を思い出したのか、手が僅かに震えていました。

次に話し始めたのは、母上と何故喧嘩になったかです。なんでも私を身ごもった時も、母上は妊娠を隠したそうです。しかしその時は、使用人が気付き直ぐにバレました。今後絶対に、妊娠は隠さないと約束したそうです。

しかし今回も、母上は言い出せませんでした。一人目で知った絶望は、消えたわけではなかったのです。そして、二人目の時の周り

の過剰な反応も、母上を引かせました。言わなければと思いつつも、言い出せませんでした。そうこうしている内に、前回発覚した時より経過が進んでしまい、さらに言い出せなくなる。結局父上が気付くまで、母上は言い出せませんでした。そこから口論になり、大喧嘩に発展。しかし当然ながら父上は、妊娠した母上を攻撃できませんでした。結局母上は、一方的に父上をボコボコにして家に逃げたそうです。

あまりの内容に、絶句してしまいました。

しかも上司と同僚は、かなり初期の段階で母上の妊娠に気づいていたそうです。父上が気がついた時には、フォローは全て終わっていたそうです。

「私はそんなに鈍いのかな？」

そんな父上の言葉に、目を逸らすことで返事をしてあげました。

話は私の事に移りました。私も産まれてすぐに、産声を上げなかったそうです。あまりの事態に、私ごと母上を抱きしめ、当てつけのように爛々と輝く星に向かって叫んだそうです。

「我が子を返せ」・・・と。

その瞬間星が強く光り、私が泣き始めたと言っています。父上は私の事を「星の奇跡の子」と、言いました。その時の父上は、本当に嬉しそうです。

（だから先ほど星に祈っていたのか。・・・それよりも気になるのは、僕と姉で死亡状況が酷似し過ぎている事ですね。とても偶然

とは思えません)

私はそう思いながらも、話を止めようとは思いませんでした。

続いて上司や同僚達が、如何に無理をして協力してくれたか長々と話してくれます。

(父上は、本当に良い上司と同僚に巡り合えたのですね)

そこでは、私も感謝の念で胸がいっぱいになりました。まだ父上の話は続きます。

次はある商人の話でした。その商人は、王宮に出入りを許されるほどの大商人だそうです。その商人ペドロは、平民を差別しない父上と母上を気に入ったらしく、いつも割引をしてくれるそうです。

母上が一人目を妊娠中に、体調を崩した事があったそうです。ペドロはどこかでその話を聞きつけ、態々妊娠中でも使用できる珍しい秘薬を持ってきてくれたそうです。しかも料金半額で譲ってくれたそうです。母上は、秘薬を飲むと随分と楽になったと言っていたそうです。

ペドロは私の時も今回も同様に、同じ秘薬を半額で売ってくれたそうです。

(母上が妊娠中に秘薬を飲んだ？商人がそんなに値引きするか？むしろ今回の様なケースなら、吹っ掛けて来るはず。そんな甘い商人が、王宮に出入りできるほど出世できるのか？)

私は思考の海に落ちそうになりましたが、なんとか踏み止まりま

す。

「まあ、……今回は使う暇が無かったがな」

と、父上は笑いました。

「せっかく、譲ってはもらったのな」

眩きながら父上は、ポケットから小瓶を取り出しました。

(現物が有る？確認できないかな？)

そんな事を考えていると……。

「おぎやややああああー！！！！！！！！！！！」

突然、赤ん坊の泣き声が部屋に轟きました。父上は驚いて、小瓶を取り落とします。

しかし父上は、私と小瓶をほつたらかしにして母上の元へ走って行ってしまいました。

私の目の前には、父上を取り落とした小瓶が転がっていました。

(父上。……マースは男性名です)

第四話 今後の考察とへたれな父の告白（後書き）

非常に迷った。

分けが分からなくなった。

書くことは、決まっているのに肉付けすると途端に変になる。

実力不足は、理解していたけどここまで酷いとは。

もっと、落ち着いて書くようにしよう。

皆様感想待ってます。

よろしく願います。

第五話 今度は私が告白か？

こんにちは。ギルバートです。ただ今、屋敷の中はお祭りムードです。産まれたのは女の子でした。父上など、先程から目尻が下がりはなしです。

(私の時もこんな感じだったのかな？)

等と感慨にふけてみます。

「坊ちゃん、仲間外れでお寂しいですか？」

声をかけてきたのは、老執事のオーギュストでした。その隣には、メイド長のアンナがいます。二人とも、笑顔を隠し切れていませんでした。

(プロ根性か？ 仕事中には言え、こんな時くらい堂々と笑えば良いのに)

等と誤ってしまいました。

「坊ちゃんの時は、もっと大騒ぎだったのですぞ。旦那様曰く、星の奇跡の子ですからな」

(その星の奇跡の子って、恥ずかしいからやめてほしいのですが・・・)

オーギュストは、とうとう笑顔が隠しきれなくなりニヤニヤ笑いだしました。つられたのか、アンナも笑顔になりました。オーギュ

ストは、なおも話し続けます。

「今回も旦那様は、私達使用人にご温情を下さるでしょう。恐らく坊ちゃんの時と同じ、特別手当と交代での休暇ですか。私も急に孫娘の顔が見たくなりました」

(あーあ。嬉しそうな顔しちゃって)

「おぎややあぁー！ー！ー！ー！」

その時、赤ん坊の泣き声と共に、和やかなムードが突然吹き飛びました。爆心地は、父上と母上の様です。何故か、思いつきり睨み合っています。

「あなたは、ネーミングセンス無さ過ぎなんです」

妹をあやししながら、母上が平坦な声で言い切ります。

「そんなことは無い」

声を荒げる事なく、父上が負けじと言い返します。

「この子を見て。どうしてレオなんて名前が出てくるんですか？」

「何を言う、子猫のように愛らしいではないか。そして、名前にするなら強そうな方が良くはないか？」

(父上。いくらなんでも流石にそれは無いです)

私は思わず心の中で、突っ込みを入れます。父上はこのままでは

言い負かされると思ったのか、オーギュストに視線で援軍要請をしました。流石のオーギュストも、目を逸らして拒否しました。アナも、同様に視線を逸らします。

「そもそもマースとレオは男性名。アストレアは女性名です。どうして性別と反対の名前を付けたがるのですか？」

母上が畳みかけます。平坦な声が非常に怖いです。

「子猫ならキティでは駄目なのですか？」

父上はぐうの音も出ません。母上の完全勝利で、決着がつきました。そして私は、父上にとどめを刺します。黒い笑みが出ないように注意しながら父上に近づき、父上の服を手で引き振り向いてもらいます。自分を指さし、首をかしげながら……

「女の子？」

と、聞いてやりました。父上、完全撃沈。ザマーミロ。

その後、すぐに父上と母上で話し合い。妹の名前が、決定しました。

アナスタシア・キティ・ド・ドリユアス

うん。まとも？と言うか許容範囲内だ。キティはどうかと思うが、意味は、目覚める子猫もしくは復活する子猫でしょうか？

アナスタシアは、目覚める女・復活する女という意味です。これには、父上と母上のトラウマが多分に反映されているのを、私は知

っています。

妹を囲み、幸せそうにしている父上と母上そして使用人達。本来なら、5年前には既にあつたかもしれない光景。

これ以上、この家が踏みにじられてたまるか！なら、危険だろうと何だろうとやる。父上と母上は、絶対に受け入れてくれる。元々、話す予定だったんだ。もう、躊躇なんかできるか。

そうさ、もしこの小瓶の中身が原因で、姉上と僕が死んだのなら、もう、この家は目の敵にされている。一刻の猶予も無い。

父上が、軍務に戻る前にマギの事を話す。

そして、この小瓶の中身を調べてもらう。

・・・そう。絶対に。絶対にだ。

小瓶をギュッとにぎる。

・・・認めよう手が震えている。やはり私は拒絶されるのが怖いんだ。

次の日から父上と母上は、妹に独占されてしまいました。正直に言うと、ちょっと嫉妬を覚えます。こちらとしては、心の準備をす

る事が出来るのでありがたいのですが。今なら、妊娠を打ち明けられなかった母上の気持ちも、少しだけ理解できます。

父上と母上が話しているのを聞きましたが、父上が王都に出発するのが5日後らしいです。

つまり5日の有余が有る。と、思うのは間違いです。実際には父上と母上にも、落ち着いて考える時間が必要ですし、こんな荒唐無稽な話を信じてくれるかが疑わしいです。

ですが、説得力を持たせるのも難しいです。唯一異常と確認できるのが、私自身が突然流暢に喋り出す事位しか無いからです。ならば話術で論破するしかありません。それで信じてもらった上で、受け入れてくれるのか？

(……弱気になるな！！もう後がないと思え。……そうだ。実際父上が薬を使わなかったのは、今回だけだが、これが悪意ある毒薬なら3回中2回使わなかった事になる。犯人は父上が、見破っていると思うかもしれない。そうならば良くて証拠の隠滅。最悪の場合、家族全員死ぬ事になる)

私は、自分が言い出せなかった場合に生じる最悪のパターンを考え、自分に発破をかけます。

これからする話は、当然使用人まで巻き込めません。純粹に、父上と母上だけに聞いてもらわなければなりません。それならば、狙うは母上が乳母と交代する就寝直前がよいでしょう。万が一を考え、最初にサイレントで聞き耳封じをしなければなりません。

話すのは今夜だ。出来るはずだ！いや、やるんだ！！

・・・そして、夜の帳が下りる。

いつもなら眠くなる時間ですが、今日は全く眠気が訪れません。一度寝たふりをして、ミリアを部屋から追い出します。寝室には、十分な量の月明が差し込んでいました。ベットの上で、窓から月を眺めながら、父上と母上の帰りを待ちます。

暫くすると、父上と母上が寝室に帰って来ました。父上と母上は、私がまだ起きているのに驚いた様です。そして私がまとう雰囲気、戸惑いを見せ・・・。

母上は、私に眠るように促しました。

父上は、私を睨みつけて来ました。

通常なら母親の方が、子供の微細な変化に敏感なはずです。しかし母上は、私の変化を理解するのを拒否しました。父上は優秀な軍人のようです。いつもの柔和な感じが消え失せ、私を強く警戒しています。

その場の空気を否定するように、母上が数歩前に出て口を開きました。

「ギルバートちゃん。もう夜も遅いから寝ましょね」

母上の目には、懇願するような色が有りました。ひょっとしたら、私の事を一番理解しているのは、母上なのかもしれませぬ。しかし

理解出来る事と、受け入れられる事は全くの別物です。そんな母上の声無き懇願を、私は踏みじらなければなりません。

私は意を決すると、口を開きました。

「父上。母上。大切なお話が有ります」

「……………!!」

母上は呆然としながら、首を僅かに左右に振るだけでした。目には涙が浮かんでいます。

一方で父上の警戒心は、一気に跳ね上がり杖に手が伸びました。

「人に聞かれたくありません。サイレントをお願いします」

「……………分かった」

父上は呆然と立ち尽くす母上を促し、サイレントをかけさせようとしています。母上がたどたどしく呪文を口にし、魔法を唱えます。すると部屋の中に、僅かな圧迫感を感じるようになりました。

「これで聞き耳の心配はないぞ」

父上の声に、私は正直驚きを隠せませんでした。

（あの精神状態でも、魔法が確り発動するのか？もしそうなら、母上は本当に優秀なメイジなんだな）

3人でテーブルに着きます。父上と母上が、寄り添うように椅子

に座り。そして対面方向に在る椅子に、私が座ります。

さあ、まずは自己紹介から始めましょう。

第五話 今度は私が告白か？（後書き）

なんか最近ネガ状態です。

文章が全く書けません。

とりあえず、烈風の姫騎士2巻を、読み忘れていたことが発覚。
これから読みます。

第六話 親子のカタチ

こんばんは。ギルバートです。私の目の前に警戒心バリバリの父上と、今にも泣きそうな母上がいます。しかもテーブルに着くだけで、ドキドキものでした。何故かと言うと、椅子が高かったからです。一発で、座れたのは幸運でした。本当に1歳と8カ月には、現在進行形で辛い状況です。

「さて、いろいろと聞きたい事もあるでしょうが、まずは自己紹介をしましょう」

その言葉に、父上の目がスツと細まります。そこにあるのは、歴戦の戦士が持つ威圧感。私は、こんな人を説き伏せなければならぬのですか？何時ものちよつと間抜けで愛らしい父上は、一体何処へ行ってしまったのでしょうか？

「私の名は、ギルバート・アストレア・ド・ドリユアス。貴方達の息子です」

父上は顔色を一切変えませんでした。表情もピクリともしません。しかし思いきり拳を握ったのが、分かりました。母上は少しずつですが、落ち着きを取り戻して来ている様です。

「そして、もう一つの名は”マギ”と言います」

父上は未だ無言。こちらを、ただひたすら観察しています。

「まず誤解して欲しくないのは、私はあなた方の敵ではありません」

「それを、如何信じると？」

「ここでやっと父上が発言しました。真直ぐにこちらの目を見えます。当然、こちらでも視線を外すわけにはいきません。」

「まあ、そうですね。いきなり、目の前に現れた正体不明の存在を、信じると言うのは無理な話です」

父上と母上は無言のままです。

「しかし、今まで一緒にいた息子は信じられませんか？まあ、振り返っていただければ、不自然な点がいくらでも出てくると思います」

父上の眉間に皺が寄りました。一方で母上は、完全にフラットな表情になります。

「私が此処に居るのは、1年と8か月前からです。そして目覚めたのは半年前です」

父上の眉間の皺が、深くなりました。母上は相変わらず、フラットな表情です。

「1年と8カ月前に、何が有ったか説明しても良いですか？」

父上も、母上も微動だにしません。

「1年と8カ月まえ、何が有ったか説明しても良いですか？」

もう一度同じ事をききます。先に父上が頷き、しびしびといった

感じて母上が頷きました。

「覚悟は有りますか？」

母上の表情が引き攣ります。すぐに父上が母上の手を取り、二人は目線を合わせ頷きあいました。

(アツアツじゃないですか)

「ではまず、予備知識から説明します」

そこで魂と輪廻について説明します。父上と母上は難しい顔をしていました。

そして一呼吸置いてから、いよいよ本題に入ります。

二人目の子供が、一度死んだ事。

魂が消滅しかけた、僕と俺が出会い私になった事。

その時、繋がりが残っていたこの身体に入った事。

今は、もう私しか存在しない事。

マギとは、俺の知識でしかない事。

そして、大いなる意思の事。

流石に、原作知識の事は話しませんでした。

一言一言に、誠心誠意気持ちを込めて説明しました。・・・そして。

「純粋な貴方達の子供である。ギルバートは、もう存在しません」

最後に、残酷に言い切りました。

この時、覚悟が有りました。

殴られる覚悟。

追い出される覚悟。

泣かれる覚悟。

流石に、殺される覚悟は有りませんでした。

父上が母上を、抱き寄せました。その表情は沈痛そのものです。母上の顔は、父上の胸に隠れていて、見てとる事が出来ませんでした。しかしその肩が、震えているのだけは分かりました。

「一晩・・・。シルフィアと話し合いたい」

「分かりました」

私は椅子から降りて、部屋から出て行くこととします。

「待て」

父上の声に私は動きを止めますが、振り返る事は出来ませんでした。

「私達が外にでる。今日は此処で寝ろ」

そう言って二人は、寝室を出て行きました。

……ベットに戻り、横になりましたが正直に言って、とても眠れる精神状態ではありません。私は拒否される事への不安と、もっと良い伝え方があったのではないかと、いう想いが頭から離れません。

(父上と母上を信じるしかない。それに全て正直に話したのは、私自身ができる最大の誠意だ)

何度も同じ自問自答を繰り返します。そうしている内に、窓の外は白み始めていました。

朝起きるには少し早い時間に、父上と母上は戻って来ました。父上と母上は酷い顔をしています。

「おい、酷い顔をしているぞ」

父上の、第一声がそれでした。

「それはお互い様かと」

父上に言い返します。母上は父上の影に隠れてよく見えません。

「……確かに。だが、お前の顔はもっと酷い」

（余計なお世話です）

「そんなに、拒絶されるのが怖かったか？」

この一言に、私は動揺を隠す事が出来ませんでした。ビクッと震え、思わず目が泳ぎます。

「結論を出した。続きだ。テーブルに着け」

私はのそのそと、昨晚と同じ椅子に座ろうとします。ですが上手く椅子に座れず、椅子ごと倒れてしまいました。正直、情けなかつたです。抑えきれず、目から涙が溢れてきました。

そんな私を、助け起こしてくれる人がいました。

「ははっえ？」

つい、そう呼んでしまいました。涙を拭くと、すぐ隣に父上もいます。

「まったく情けない。それでも私の息子か？」

「……えっ？」

そこにあつたのは、私が願ひ続けた答えでした。しかし、直ぐに反応することができません。これは夢なのではないか？とさえ思えてきます。

母上が、私を黙って抱きしめてくれました。その感触は、これが夢ではないと私に教えてくれました。私は、母上にすがりつき年相応に、泣きだしてしまいました。

第六話 親子のカタチ（後書き）

物語の、基礎がようやく出来たような気がします。

次回は、怪しい小瓶の中身についてやるつもりです。

感想お待ちしております。

第七話 小瓶の中身と魔の森

おはようございます。ギルバートです。父上と母上に、ようやく話す事が出来ました。しかしまだ全部ではありません。何故この時期に態々話したのか、ある意味においてここからが本題です。

しかし母上が、かなり辛そうです。出産からアナスタシアの世話まで、碌に眠ることもできなかったでしょう。そこに今回の件です。恐らく乳母がいなければ、倒れていたでしょう。

(なんか、物凄く罪悪感を感じるのですが)

そこで父上は、母上に少し眠るように促します。最初は首を横に振っていましたが、父上が言い聞かせるとしぶしぶベットへ入りま

す。

「母さんが少し眠るから、続きは別の部屋で話そうか」

流石は父上です。まだ話が終わっていない事に、気づいていました。私は頷くと、父上の後を追いました。

父上はいったんアナスタシアの居る部屋に行き、母上が疲れて寝ている事を伝えます。

目的地は母上が出産する時に、父上に話を聞かされた部屋でした。サイレントをかけなくて大丈夫か、私は少し心配になりました。

「ここと寝室には、聞き耳防止用のマジックアイテムがある。・・・
今起動する」

しかしそんな心配は、杞憂だったようです。あれ……それなら、あの時なんでサイレントを使ったのでしょうか？

「あれはあの状態でも、魔法を使えると思わせるブラフだ。実際は、同じマジックアイテムを起動させたただけだ。それとギルバートが、魔力の流れが見えるか確認したかった」

（ここまでできる人が、簡単に騙されるとは思えませんね）

先程まで、真っ黒だった疑惑はどんどん、白くなっていきます。

「申し訳ありません。父上。どうやら、杞憂の可能性が高そうです」

「言ってみる」

正直に言うと、背筋が寒くなる思いだったが答える事にする。まずは隠し持っていた、秘薬の小瓶を取り出し父上に渡します。

「そうか、ギルバートが持っていたのか探していたんだ。で、これがどうしたんだ？」

「父上。先程まで私はこの薬が原因で、姉上と僕が死んだ可能性が高い、と考えていました」

その可能性は、今は限りなく低い。

「確かにあの時の話だけ聞けば、そう思うかもしれない。しかし私がこの秘薬を購入したのは、王宮の中だ。当然、秘薬搬入には厳しくチェックする監査役が居るし、仕入れ・搬入の伝票も確り残ってい

る。また王宮に出入りするには、一定以上の地位を持つ貴族の紹介状が複数必要だ。問題が起これば、その貴族の顔を潰す事になる」

確かに、可能性は限りなく低いです。だからこそ思ったのです。

可能性は、低いですが0じゃないのです。父上は軍人です。物事を、素早く効率よく片づけなければならぬ立場の人間です。当然、可能性の高いものに執着するでしょう。しかし今欲しいのは、0か100かの断定です。

「父上。可能性は、確かに低いです。しかし、今欲しいのは「クロならクロ」「シロならシロ」という断定です」

父上は少し考えてから、口を開きました。

「・・・分かった。秘薬の成分を鑑定しよう。ただし、秘薬の事は私とシルフィアでは分からね。信用おける者・・・。そうだな、モンモランシ伯にでもお願いしよう」

「ありがとうございます。・・・それから、マギの知識はゲルマニアよりも、かなり進んだ知識が多数含まれています。この領地の為、ぜひ活用したいと考えています。しかし異端審問が怖いので、マギの事はロバ・アル・カリイエ出身で私の恩師にして、父上か母上の知人と言う事にしてください。その上で適当な所で、故人としていただければ良いと思います」

父上が他には？と聞いてきたので、いいえと返事を返しました。父上はマジックアイテムの解除をする為、私に背中を向けました。

「今回は残念ながら、空振りの可能性が高い。だが私達を慮って、勇気を出して告白してくれた事嬉しく思う」

「あ……。ハイ!!」

父上の言葉は、私にとって本当に嬉しい物でした。本当に、全て話せて良かったです。今回伝えるべき事は、全て伝える事が出来ました。

だからでしょう。緊張の糸が、プツリと切れました。同時に私の意識は、暗転したのです。

目が覚めると目に飛び込んできたのは、見慣れた天井でした。父上が運んでくれたのだろうか？周りを確認する為、首を動かしました。

布が擦れる音で、私が目覚めたのに気付いたのでしよう。父上が、こちらに來ます。

「目が覚めたか？私も少し仮眠をとって、今お茶をしていた所だ」
見るとテーブルの上に、お菓子と紅茶が出てます。そう言えば、お腹がすいたな。……あれ？母上は、如何したんだろう？使用人がいるから、喋れないですね。

「母さんはアナスタシアの所に行っているぞ」

私が視線をさまよわせると、先回りするかのように父上が答えません。

「それより、腹は減っていないか？」

私は素直に頷きました。父上が声をかけると、少ししてから麦粥を用人が持つて来てくれました。年相応の振りをする為、大人しくミリアに食べさせられました。

「父さんはこれから、モンモランシ伯の所へ行かねばならない。おとなしく留守番してるんだぞ」

「あい」

とりあえず、年相応っぽく返事をしてみます。

食事が終わり、用人達が後片付けの為退室しました。

「ギルバート。これをお前に預ける」

二人だけになると、父上が鍵を渡してくれました。

「これは書庫の鍵だ。蔵書量はハッキリ言って少ないが、今のお前には十分な量だろう」

「ありがとうございます」

この後父上は、直ぐに出かけて行きました。見送りの際、グリフオンに騎乗した父上は凄くカッコ良かったです。

私は早速書庫にきました。確かに蔵書量は、少なく全部で50冊前後くらいでしょうか？種類は、初級魔法入門から上級魔法書・ルーン文字大全等の魔法関連の書籍。亜人幻獣図鑑など辞典。また、イーヴァルデイの勇者等の物語小説も有りました。

正直に言うと、どこから読もうか迷ってしまいます。そこで、ふと別の棚に目を向けるとそこは、地図などの資料が収められている棚が有りました。資料は、ラベル付のトレイに小分けにされよく整理されていました。そのラベルの中に、こう書いあるトレイ有ったのです。

魔の森 と・・・。

気になったので、見てみることにしました。幸い棚の下方の段に置かれていたので、私でも十分届く高さでした。一枚一枚、手書きで書かれた資料をめくって行きます。結果分かった事は、原作で名前が出てこないのが、不思議だということでした。分かりやすく、まとめてみましょう。

- 1 . 魔の森とは、多種多様な幻獣・魔獣・亜人の住処である。
- 2 . 最近は、落ち着いてきたが今も拡大を続けている。
- 3 . 切り開こうとすると、亜人が襲いかかってくる。
- 4 . 森に、火を放つと幻獣・魔獣が人間に報復行動にでる。
- 5 . 幻獣・魔獣が、森外で暴れると便乗して亜人が出てくる。
- 6 . 亜人が森の外で暴れると、そこから木が生えてきて森が一気に広がる。
- 7 . 永い時間をかけて、非常に広大な広さになっている。

なんですか？この森は。国も下手に手が出せず、これ以上広がらないよう防備を固めているだけですか？・・・しかし、これだけ

ではいまいち広さが伝わらない？

トリステイン王国、ほぼ中央に位置する王都トリスタニア。トリスタニアの南、ガリア国境とのほぼ中間に位置するラ・ロシエール。ラ・ロシエール南西に、位置するドリユアス領。東端は、このドリユアス領の直ぐ南まで伸びている。西は、海に達している。北は、ドリユアス領やや北の緯度まで。ドリユアス領と、そのすぐ西にあるクールーズ領が、魔の森に食い込む形だ。南は、ガリア国境付近まで。それも、ラグドリアン湖西部にある国境沿いの、ブレス火山とテール山脈に阻まれての事だ。広さだけなら、トリステイン王国の約20分の1に達する。

「ご理解いただけたでしょうか？とてつもなく、広いのです。」

幸い下手に森に手を出さなければ、今は大きな被害が出ないようです。が、馬鹿な貴族は何処にでもあります。非常に心配です。

「さて、魔の森についてはこんなものですか？」

おっと、いつの間にかかなり時間がたっていた様です。今日は、ここまでにしましょう。資料を元に戻し、さっさと寝室に帰りますか……。

「……ん？ミア？いつからそこに居たのですか？」

服を引っ張っても、反応が無いので放っておく事にしました。

その日、何故かミアはメイド長に叱られてました。

次の日の夕方、父上がモンモランシ領から帰ってきました。母上と一緒に、父上を迎えます。早速結果を聞く為に、寝室へ移動します。今回は、母上も一緒に話を聞きます。

先程から少し気になりますが、父上は何かイライラしているようです。もしかして、当たりだったか？

「結果から言おう。やはり空振りだった」

しかし父上から出てきた言葉は、私の期待を裏切るものでした。

「それにしても、何かイライラしているようですが？」

ひょっとして、何かあったのだろうか？

「この秘薬だ。この秘薬自体は、何処にでもある物だった。それを、あんな法外な値段で売りつけるとは、馬鹿にしていると思えん。本来この秘薬は、1エキュールでお釣りがくる値段なのだ。それを、半額で40エキュールだと？ふざけるな！！しかも、本来の用途が儀式後の魔法陣など、魔力を含むインクを落とす為の洗剤だ」

父上がまくしたてるように、言いました。相当、頭にきているようです。母上も、笑顔ですが雰囲気やたら怖いです。

父上と母上が、怒るのも良く分かります。しかし、このまま聞き流す事は出来ない事実が有ります。

「待つてください。母上この秘薬を飲んだ時、体調が回復したんですよね？」

母上はキョトンとしながらも、すぐに返事をしてくれました。

「ええ。確かに薬を飲んだ後、体調が回復したわ」

「何故だ？この秘薬は人間には、毒にも薬にもならないと聞いたのだが」

暫く3人で、うんうん唸ってみました。

そして私に、引つかるものが有りました。そこから理論を、組み立てて行きます。

「父上。母上。あくまで仮説なのですが、聞いていただけますか？」

二人が頷く残確認してから、私は口を開きました。

「魂と輪廻転生の話は、以前したと思います。この話は、さらにその先を推論したものです」

そう言って、話し始める。まだ、推論が完璧では無いので、説明もつつかえつつかえでした。

話を要約すると、母親が子供を身ごもった時、魂を輪廻の環からどうやって引っ張ってくるのか？と言う物です。

父上と母上も、難しい顔になりました。

す！！ペドロ殺す！！ペドロ殺す！！ペドロ殺す！！ペドロ殺す！！
！！！！！！

これには私も父上も、流石に引きます。勘弁してください。ここから先の話が、出来ないじゃないですか。とりあえず、母上を無視して話を続けます。

この秘薬の効果は、立証されていません。母体には薬になり、胎児には致死の毒となる。こんな、秘薬の効果など立証するには、それこそ人体実験しかありません。それは始祖ブリミルの名において、否定されるでしょう。また、何処にもある秘薬です。証拠など、見つけるのはほぼ不可能でしょう。

「さらに、先程の推論を誰かに話せばどうなるか？」

「……異端か」

父上が重々しく呟きます。この時母上の呟きは、聞こえなくなっていました。

「感情的になって、ペドロを襲撃すればこちらが犯罪者ですね」

「くそつ……！！我が子の敵も取れんとは何たる屈辱」

父上は本当に悔しそうです。

ここで母上が、突然立ち上がりました。顔は笑顔です。ですが威圧感は、明らかに上がってます。これが伝説の、コ・ロ・ス笑みか？流石に不味いと思ったのか、父上が母上を気絶させます。

杖を取り上げ、手を背中で縛りつけベットに転がします。ついでに、足も縛ります。

「父上もやる時はやりますね」

「これ位できなければ、シルフィアとは付き合えんよ」

父上が遠い目をします。

(父上が、普段鈍いのは母上の性格が激しいからなのでは?)

一瞬だけ頭に浮かんだ感情を、直ぐに追い払います。

「シルフィアが目を覚ましたら、どうやって落ち着かせよう?」

私には無理です。父上。助けを求めるように、こちらを見ないでください。

「あの……、がんばってください」

そう言っつて、私は寢室から逃げ出しました。なぜか、父上は追いかけてきませんでした。

(あつ……。父上に今後の危険について、話すのを忘れていました。まあ、後でも良いでしょう)

そんな事を考えていると、突然身体が浮かび上がります。

原因はミリアに拘束された事でした。

結局私は、寝室に連れ戻されました。扉を開くと同時に、父上の悲鳴が聞こえました。

ミアは、二人の状態（手足を縛られている母と、母に噛みつき攻撃くらう父）を確認すると、速攻で私を引き渡し逃げて行きました。

（……おぼえてろ）

この戦いは、母上が力尽きるまで続けました。

この後、縛られたままの母上を、父上と二人がかりで理詰めにして説得しました。

「この件は、必ず黒幕がいます。末端だけで、黒幕は見逃してもよいのですか？」

特に、この言葉が効いたようです。

そして、母上は何時暴走するか分からないので、父上の説得して軍を引退させました。敵を打つときに、戦線に復帰するのが条件でした。

第七話 小瓶の中身と魔の森（後書き）

赤ん坊編、もうとっくに終わっているはずだったのにおかしいな？まあいつか。

オリジナルな、地理が出てきました。独自解釈の、魂召喚も出てきました。

この作品は、これからどこへ行くのでしょうか？

感想待ってます。

第八話 領地経営と鍛錬だ！！妹観察日記はサボり気味

こんにちは。ギルバートです。最近になって、非常に頭に来る事がありました。残念ながら、お返しをするのはだいぶ先になりそうです。非常に不本意です。

まあ私より、母上のご機嫌の方が危険なのですが。

父上には、今後の危険性を十分に話し合い王都に行ってもらいました。ついでに、本を送ってもらおうよう頼みました。

これから、領地経営と自己のパワーアップに努めていきたいと思っています。死にたくないですし。

領地経営は、主に母上に矢面に立って頂きました。しかし、意外にやれることが少ないのです（主に、予算的な意味で）。やりたい事を、まとめてみましたが殆ど実行不可能だったのです。あと心配なのは亜人の被害ですが、母上が領地守備隊を監督し出したので問題無しです。守備隊からは訓練が厳しすぎて死ぬ、と苦情が入ったらしいですが……。

（そう言えば守備隊の訓練日に、母上が「ストレス解消になったわ」と上機嫌でした）

……とりあえず、実行するのは以下の三件です。

?1 領地内の、衛生管理と衛生法の導入。

内容は、清掃員雇用・公衆トイレ設置・違反者の罰則。

効果は、疫病対策と肥料確保。

詳細

町や村の、衛生環境を改善する。これにより疫病の発生を、未然に防ぐ。また公衆トイレから、人糞を集め肥料にする。

? 2 商会の設立。(マギ商会)

内容は、そのまま自前の商会の設立です。

効果は、出荷額の増加による増収。

詳細

商人の中には、魔の森が近い事を理由に、物品を不当に安く買いたたく者が居るようです。よって、正当な値段で物品を取引する商会を、立ち上げる事にしました。マギ商会は領内有志が、立ち上げた商会としておきます。

? 3 寺子屋の設立。(学費無料)

内容は、平民用の簡易学校を創る事。

効果は、平民の学力とモラルの最低限確保と優秀な平民の確保

詳細

これにより、失業を減らし盗賊等に身を落とす平民を無くします。そして優秀な者を発掘し、優先して雇い入れる。

以上です。初期の人材確保が難しいですが、それは母上に伝手が有るそうです。偉大な母上を持って、私は幸せです。

次に、自己のパワーアップについてです。体力面では今無理をすると、正常な成長の妨げになるので、1時間〜2時間の散歩程度に控えたいと思います。勉強面は初級魔法入門から、じっくりやるつもりです。それから良く眠る事。後は段階的に、メニューを修正していく事にしました。

こんなところでしょうか?この状態でしばらく動かし、問題があ

れば修正する事にします。

妹を観察してみました。うん、赤ん坊ですね。母乳を飲み、ウンチして寝るだけ。所詮1カ月です。今は観察してもしようがないかな。と、言うわけで領地の事と、自分の事に集中します。

3カ月が経ちました。今月は、ケンの月（10月）です。私は2歳になります。妹はまだ4カ月です。

父上が帰ってきました。残念ながらペドロの事は、進展が無いようです。ただ、こちらが警戒しているのを気付かれたのか、暗殺等の直接殺すような行動には出なかったようです。秘薬の事は可能性有として、ヴァリエール公爵にのみ報告したそうです。

領地経営の報告書が、母上の所に来ていたので見せてもらいました。

? 1 衛生管理と衛生法

領民の理解を早い段階で、得られたようです。町や村は清潔になりました。肥料は発酵時間（約1年必要）が全く足りないのです、結局土メイジに《鍊金》してもらったそうです。肥料は無償で、農村に配られました。ただ《鍊金》した肥料は質が低いので、今後自然発酵を行うようにするそうです。

? 2 商会の設立

まだ軌道には乗っていませんが、領民からは評判が良いようです。一部では「悪い商人に、お金を取られなくなった」と、感謝されて

いるようです。守備隊の中には、実家の事等で恩義を感じ、進んで護衛をする者もいたようです。

まだ黒字は出せませんが、この調子なら1年以内に黒字を出せそうです。

?3 寺子屋の設立

通う者はそこその人数になったようです。しかし、まだまだ理解を示さない者達があります。特に、農村部で多いです。子供も働き手であると、認識しているからでしょう。正直に言って、芳しくありません。

要対策ですね

寺子屋以外は順調です。しかしこのままでは、平民間に格差が大きくなってしまいます。そうなれば、軋轢から抗争なんて事になりかねません。少し早いですが、屯田兵を設立した方が良いでしょうか？しかし、予算がな……。赤字覚悟か？いや赤字は不味い仕方がないので、まだ保留するしか無いです。

妹？相変わらずです。まだ赤ちゃんですので。でも少し大きくなりましたね。

また3カ月が経ちました。今月はヤラの月（1月）で、始祖の降臨祭があります。みんな休みですが、守備隊は半分が居残りです。亜人からすれば、「始祖の降臨祭？そんなのかんけーねー！！」です。すから。せつかくの始祖の降臨祭を、血の降臨祭にするわけにはいきません。まあ、始祖なんか信じちゃいませんけど。

降臨祭ですので、父上も帰ってきました。相変わらず進展が無いようです。相手には、完全に警戒されてしまった様です。しかも予想以上の大物貴族が、関わっているかもしれないとの事。無理は、しないでほしいです。

続いて領地経営の経過です。

?1 衛生管理と衛生法（最終報告）

領民に定着したようです。発酵施設も、郊外に設置できました。1年後には、質の良い肥料が出来始めるでしょう。今後の物流・管理は、マギ商会に委託します。

?2 商会の設立

幸運な事に優良な取引先を、一件見つける事が出来ました。今後は黒字が見込めるでしょう。また、これを足掛かりに他の取引先を開拓していくようです。家（ドリュアス子爵家）の、後押しのおかげかな？

?3 寺子屋の設立

町では予想より早く、理解者が増えています。ただ、農村部では相変わらずです。

要対策です

商会の方が、予想外に上手く行っています。また、基本税収も上がってきたので、屯田兵の設立も近く可能でしょう。設立準備を、そろそろ始めたいと思います。

妹はまだ7か月で、相変わらずです。まだまだ、赤ん坊・・・
赤ん坊・・・。

えっ？パワーアップは如何したかって？勉学面は、現在ルーン文字の勉強に入っています。しかし、魔法関係は感覚的な物が多く、実際使えるようになるまで停止しています。体力面は、相変わらず歩いています。少しだけ、走るのも追加しました。

また、3カ月が経ちました。フェオの月（4月）です。魔法学院の入学の時期ですが、私にはまだ関係ないですね。

領地経営は新しい動きがありました。ドリュアス領に流民が入って来たのです。（60人強）どうやら、南方の村が魔の森に吞まれたようです。原因はアホ貴族が、魔の森にファイヤーボールを打ち込んだ事だそうです。・・・如何にかしなければ。（怒）

?2 商会の設立（最終報告）

順調に取引先を増やしています。もう軌道に乗ったと見て良いでしょう。今後はドリュアスの下部組織として、活動してもらいましょう。

?3 寺子屋の設立（最終報告）

屯田守備隊の設立。これを、公布しただけで子供達は、ほぼ例外なく寺子屋に来るようになりました。（現金な人達）おかげさまで、もう何も問題ないです。

?4 屯田守備隊の設立

内容は、農耕作業員兼警護部隊の新規設立。

効果は、農地拡大・寺子屋支援・有事の際の出兵要員。

詳細

兵員を農作業に従事させる事により、体を鍛える。また農作業を手伝うのは、老人夫妻や寺子屋に行っている子供がいる家優先とする。これにより、親に子供は寺子屋に行かせた方が得と思わせる。また、現地自警団と合同訓練により、自警団の錬度も共に増強する。

?5 人材派遣（流民の対処）

内容は、人材派遣。

効果は、人員不足解消・流民の効率的就業。

詳細

流民の生活を、一時的にドリユアス家で見ると（待遇はギリギリ飢えない程度）。また、その間厳しく教育（読み書き・計算等）を施す。条件に合致する人間を、人員不足で困っている場所へ派遣する。試用期間を経て、問題無いと判断された場合そのままそこに就職させる。逆に問題ありとされた場合は、戻して（地獄の）再教育を施す。また、派遣先が一時的な手伝いとして、人員を欲していた場合は再教育は無し（低い給料有）とする。

こんな所でしょうか？まさか自分が派遣する側になるとは、夢にも思いませんでした。実はマジは、派遣切りで失業してましたから。・・・複雑です。

母上は人材派遣の提案を、快く引き受けてくれました。ホツとしながら部屋を出ようとした所で、母上に捕まりました。

「当然ギルバートちゃんは、手伝ってくれるよね？主に書類仕事とか・・・あとは書類仕事とか・・・特に書類仕事とか・・・」

（母上。とっても怖いです。それから書類仕事は、そんなにお嫌い

ですか？)

私はこの時(楽そうな気がしますけど)などと、考えていました。しかし甘かった。目疲れるし肩こるし、2歳がやる仕事じゃありません!!何より1枚に、やたらと時間かかり過ぎです!!見ると、母上も辛そうにしています。

「あーあ。偏在でも使えれば・・・」

「それよーーーーー!!」

私の軽口に、母上は大声を上げ出ていきます。そして、しばらく経ってから6人の母上が入ってきます。その後母上は、文字通り6倍の速さで書類を片づけました。

この後私は書類仕事を、必ず手伝わされるようになりました。

(私は悪くないと思うのだが?)

まあ、書類は1日で終わりのはずもなかったのです。

起床 トレーニング 勉強 書類仕事(手伝い) 就寝。

最近はこのサイクルが、毎日続くのです。正直、無茶苦茶キツイです。この毎日、流民が全員就職できるまでの4ヶ月間続きました。

そして、今日の前に妹が居ます。1歳と2カ月。そう、私が目覚めたときと同じくらいです。

私は今、自己嫌悪で自分をなぐってやりたいです。．．．いや、本当にやりませんよ。

皆様は、人の振り見て我が振り直せ。と、言う言葉をご存知ですか？

他人のやっている動作や態度が良くないと感じたら、自分は他人に対して同じようなことをしていないか、良く考え該当するものがあれば反省し直す。

そう妹を観察していると、私が如何に変な赤ん坊か実感させられました。

赤ん坊は、嫌な感じになれば泣くのです。かつて私は母上と父上の愚痴を、大人しく黙って聞いていました。しかし、そこに絶対成功する回避方法が有ったのです。

ズバリ！！泣く！！．．．ズバリ！！そうでしょう！！

これだけで、あの長ったらしい愚痴が回避できたのです。双子ならマネできたのに。などと場違いに思っています。

領地の状態も上向き、このまま放っておけば税収は上がっていきます。

他にも出来る事はありますが、派手にやると異端審問が怖いので、領地経営はこの辺で自重しようと思います。

母上が何か言ってきた時に、意見する位にしようと思います。

第八話 領地経営と鍛錬だ！！妹観察日記はサボり気味（後書き）

やっとできました。

みなさんから見て、不自然な点は無いですでしょうか？
がんばって見たのですが、一人ではこれが限界です。

感想お待ちしております。

それと、軽めの突っ込みもお待ちしております。
できる限り、修正しようと思います。

第九話 報告書再提出？貴族は屑が多すぎです！！

こんにちは。ギルバートです。ただ今母上の呼び出しで、執務室に向かっている所です。散歩中に、いきなり窓から呼ばれました。

そう言えば、自分を鍛えているのに何もやっていない気がします。

だって、仕方がないじゃないですか。この未成熟な身体は無理をすれば、正常な成長を阻害してしまうのですから。

せめて、4歳から5歳になれば多少話が変わってくるのですが。

あとは魔法の事です。もう杖を持たせてくれても、良いのではないのでしょうか？常識的に考えてダメなのでしょうが、何とかならないでしょうか？杖の仕組みが解らないから、自作もできませんし。

領地経営も目立たずに出来る事は、思いつく限りやりました。後は領内の畑がどんどん広がって、勝手に収穫量が増え増収になるはずです。更に余裕が出来た平民は、良い道具を買おうとするでしょう。これにより、効率が上がり更なる増収につながる。この状況に、笑いが止まりません。

おっと、ようやく母上の執務室に着きました。周りに人が居ない事を確認し、割と力を込めてノックします。（私のノックは、聞こえないらしい。2歳10カ月ではしかたないか）

「入りなさい」

返事を受けて入室します。何故か母上は、難しい顔をしています。

た。

なんでも、今回（4か月前）の魔の森拡大事件について、報告書の再提出を王都から求められたそうです。流民をドリュアス領で受け入れたのが、そんなに問題なのでしょうか？

今回の魔の森の拡大は、どこそのアホ貴族がファイヤーボールを、魔の森に打ち込んだ事が原因と聞いています。その詳細を母上は報告書にまとめ、王都へ送ったと聞いています。報告書に、何か不備でもあったのでしょうか？

（めんどいですね）

この時私は、正直そう思いました。だとしても、私を誰も責められないと思います。次の母上の一言を、聞くまでは……。

「流民の中に、魔の森に火をつけて逃げた者が居ると言ってきたのよ」

「しかし、状況を見れば……」

「しかも、ドリュアス領に犯人がいると……」

言いがかりもここまで来ると、逆に感心してしまいます。

「このままでは、査察団を送り込んでくるわ。後は、どうなるか……」

母上の言葉に、私の頭に最悪の想像が浮かんで来ます。

当然、魔の森を利用して他の貴族を落としめようとした貴族は過去に何人もいました。ですが、今回ほど見え見えの手は過去に無いでしょう。

敵のシナリオは、こうです。

このまま、無理やり査察団を送りつける。

領内を、探す振りして南の魔の森に移動。

魔の森に、火を放ち逃走。

火を放ったのは、ドリュアス領に逃げ込んだ犯人。

これは、ドリュアス家の領地監督不行き届きである。

この責任は、ドリュアス家にある。

最悪だ！！何を言っても、言い訳とされるでしょう。

「しかし査察団を理由なく拒否したり、怪しい査察官を捕まえたりすれば……」

「二心あり。……と、いう事にされるわね。多少無理があったとしても」

本当に最悪だ！！

これまで父上と母上は、取れうる限りの対策はとって来ました。

- 1 ・領内は許可ない者は飛行禁止とした。
- 2 ・魔の森付近の道は許可ない者は通行禁止とした。
- 3 ・魔の森付近の道を通行する者は護衛という名の監視をつけた。
- 4 ・領の出入り口に関所を設け出入りする者を調べ手形を発行した。
- 5 ・手形が無い者は身分に関わらず守備隊が職務質問することとし

- た。
- 6・守備隊は職務質問の結果任意同行を求める事を許可した。
- 7・職務質問・任意同行を拒否した者は逮捕出来る事とした。
- 8・魔の森付近の守備隊は地元出身の信用おける者だけとし徹底的に教育した。
- 9・新しく領内に入った者は魔の森から遠い北部や東部に住まわせた。

これ程の、決まりが出来ていたのです。特に、1〜7は魔の森を使った過去の事件から、王が認めたものであり、強力な行使力を誇っています。当然、規定違反を犯した守備隊員の罰も厳しいのですが、これは余談です。

当然の事ですが、魔の森に関する事件を起こした者の罰は、非常に重いです。

国土に害成す逆賊として、罰せられるのですから当然と言えば当然です。罰則は一族だけでなく、状況によっては同僚上司にまで及ぶ事も有ります。

この状況なら、まともな貴族なら魔の森に絶対に手を出しません。また足の速い騎獣は関所で引つかかるし、飛行可能な騎獣は目立つ為、必ず領地の包囲網に引つかかる。徒歩や馬では、火を付けた後幻獣や魔獣・亜人から逃げる事は不可能です。よって、やれと言われて引き受ける者は居ないでしょう。

ですが今回は、それらを犯人探しの名目ですべて無視できます。

どうにかして、アホ貴族が犯人で流民は被害者であると、認めさせねばドリュアス家は終わります。

「兎に角、分かっている事をまとめてみましょう。アズロックからも、手紙が来ているし」

母上の言に私は頷きました。

そもそもこのような状況になったのは、アホ貴族が原因です。どうしてこれ程の状況が有るのに、魔の森へファイヤーボールなど打ち込んだのでしょうか？

流民達の話を、まとめるところになります。

ドリユアス領を出て、南のガリア国境へ向かい、道のり四分の一の場所にある村が、今回の惨劇の舞台である。

その村の西側に、魔の森拡大防止の為の砦が有った。この砦のおかげで、住民は亜人の被害に怯える事なく暮らしていた。

その日、亜人討伐の祝賀会が砦で行われていた。貴族は例外なく酒が入り、酔っていた。些細なことから、貴族同士の口論になり決闘に発展。魔法を使い始めた。

そのうち、一人の貴族の放とうとしたファイヤーボールが制御に失敗。魔の森に着弾。威力自体は、大した事が無かったものの、運悪く近くにマンティコアが居た。

マンティコアは、反撃の為砦を攻撃。砦の貴族と交戦状態になる。

当然、砦に複数の貴族がいたことから、交戦は派手なものになる。

魔法が流れ弾となり、次々に魔の森に着弾。

そのせいか、当然と言えば当然か魔の森から次々に幻獣・魔獣の増援が現れ群れを生じた。最終的には、群れの数30を超えていた。

交戦開始直後、皆で働いていた村人が逃げ出した。

村人は村に逃げ帰り、危険を知らせた。報告を聞いた村長の判断は早く、村人達は早々に避難開始。

だが悪い事に、亜人がこの混乱に乗じて皆に攻め込んできた。ここで皆の士気は瓦解。逃げ出す者が出始めた。

やがて亜人達は、村にたどり着き荒らし始める。

全て終わったのは、朝日が昇ってからだった。

亜人が去った後、村を見てみると既に所々木が生え始めていた。

村人達は、村を棄てる事を決断。

一部は、モンモランシ領へ逃げたが殆どの者がドリユアス領へ。

当初86人いた流民は、亜人の襲撃で散り散りになり、最終的には63人しか生きて、ドリユアス領へたどり着けなかった。犠牲になった、23人の中には高齢だった村長も含まれていた。

以上が事の顛末である。

(ハードだ。ハードすぎる。そして村長貴族より優秀だ)

続いて、父上の手紙に書いてあった情報です。

村が魔の森に吞まれた日より2カ月が経ち。傷の治療が済んだ貴族達は、トリスタニアに護送されてきた。そこで、裁判が始められた。最初のうちは、事態を深刻に受け止めたのか、大人しくしていた。だが裁判中に貴族の一人が突然、自分達は無実だと主張し始めた。

森に火をつけ自分達だけ逃げたから、平民に被害が出なかったと主張したのだ。

(なんて屑ばかりだ。村長に謝れ!!)

現場が森に吞まれてしまった為、再調査出来ずにいるとモンモラシ領に逃げ込んだ村人が、数人見つかったのだ。村人の発言は、皆から逃げてきた村人が村長に危険を知らせ、避難したというものだった。この言葉を曲解して、信憑性有りとされてしまったのだ。

さらに屑共が自分達の無実を、始祖ブリミルに誓ったものだからさあ大変。

恐らく誰かからの入れ知恵なのだろう。その辺りを父上達が調査してくれているそうだ。

ほんと、屑ども絞め殺してやりたい。(怒)

第九話 報告書再提出？貴族は屑が多すぎです！！（後書き）

自信がない。ここ違うなどの突っ込みお待ちしております。

特に、対策のあたり。

でも、あんまり強く叩かないでね。泣くから。

感想お待ちしております。

今のところ、査察問題をあっさり解決するか引つ張るか悩んでいます。たぶん、あっさり解決の方に逃げると思う。頭パンクするし。

第十話 貴族は愚か者？まとも（立派）な人もいますよ

こんにちは。ギルバートです。今とてもピンチです。現状を打破するには、如何すれば良いでしょうか？凄く頭痛いです。

正直に言うと、父上に期待するしかない状況です。それでも、何もしないで待っている訳にはいきません。元流民達に、何か証拠になる物が無いか協力を求めます。

元流民達は協力的でした。派遣待機中こそ、不満を言っていました。だが、ドリユアスでの生活は明らかに、以前の生活より豊かだからです。

しかし、証言はいくらでも出てきますが、証拠となるとまったく出てきませんでした。

部下からは現場の調査案も出しましたが、現場は魔の森に吞まれています。犠牲を覚悟し調査を強行するにしても、かなりの大戦力が必要になる上とても実が有るとは思えません。

何より領の防衛を、疎かにする訳には行きません。敵がその隙を待っているかもしれないからです。むしろ、そこが本命なのかもしれません。

モンモランシ伯にも、協力をお願いしました。モンモランシ伯も今回の事に腹を立てていたらしく、二つ返事で了承してくれました。

まあ、アホ貴族の明らかな嘘は伯爵も理解していたし、何より自領に魔の森の浸食が近づくといい、実害まで伴っているのです。

なにより、平民に責任をなすりつければ助かる。などと言う前例を作れば、今後魔の森は一気に拡大するでしょう。これは、全ての貴族が避けたい事態だと思いたいです。

そんな中、王都で動きがありました。アホ貴族共の嘘を、非難する貴族が増え始めたのです。切っ掛けは、ヴァリエール公爵の発言でした。

「平民に責任転嫁すれば良い、という前例を作ってはならん！！もしこれを許せば、魔の森はあっという間にこのトリスティンを飲み込むであろう。それは、魔の森拡大を今まで防いできた先人達への冒涇である！！」

かっこいいです。無茶苦茶かっこいいです。そして、私が言えない事言ってくれました。是非、生でこの言葉を聞きたかったです。

この発言を真つ先に支持したのは、ドリユアス家・モンモランシ家・クールズ家です。

ドリユアス家・モンモランシ家は、当事者なので当たり前ですが、クールズ家は現在西と南を魔の森に囲まれています。この上、東にあるドリユアス家が魔の森に吞まれれば、クールズ家はお終いです。

続いて、魔の森に隣接させている領を持つ家と、グラモン家が支持を発表します。

魔の森に領地を隣接させている家は、クールズ家の事は他人事ではないのです。グラモン家は、代々続く軍人の家系。アホ貴族を、

許しておけなかったのでしょうか。アホ貴族を、美しくないと思断じていたそうです。

ここで勢いがついたのでか、公爵の発言を支持する声は瞬く間に貴族達の間にも、広がっていったそうです。終いにはアホ貴族の実家も、勘当に加え公爵の発言を支持する始末です。

入れ知恵をしていた貴族も、この状況でアホ貴族を見捨てたようです。

周りが全て敵になったアホ貴族は、悪いのは自分たちじゃないと訴えますが、もはやその言葉に耳を傾ける者はいませんでした。

一部の貴族は、それでも念の為と査察を推奨していました。おそらく、彼らが今回の黒幕なのでしょう。しかし、その目論見はアホ貴族によって碎かれることとなったのです。

アホ貴族は、差出人不明の手紙を提出したのです。そこには、全てを平民のせいにするれば助かるという内容が、書かれていたそうです。だから、自分達は悪くないと主張したのです。

ホントにアホです。始祖ブリミルに誓ったでしょう。

これには、王宮が騒然となりました。黒幕達も、流石にここまで阿呆とは思っていませんでした。査察の話は、あつという間に消滅。ドリユアス家は、つかの間の平穏が約束されたのです。

そしてヴァリエール公爵。本当にありがとうございます。

アホ貴族が、本当に阿呆で助かった。

第十話 貴族は愚か者？まとも（立派）な人もいますよ（後書き）

解決編です。短くて済みません。

下手に、話を膨らませたり続きを書こうとしたら、私の実力では無理と判断しました。

多少（かなり？）、ご都合主義ほくなりましたが楽しんでいただけると幸いです。

感想・ご意見お待ちしています。

第十一話 さあ訓練だ！でもまず道具だ！！

こんにちは。ギルバートです。アホ共のおかげで、命拾いしました。お陰さまで、少しの間平穏な生活が送れそうです。

裁判中、アホ貴族のおかげで敵側の人間をある程度絞り込む事が出来ました。そう最後までドリユアス領に、査察団を送るべきとしていた者達です。

それは、高等法院の関係者でした。

ペドロを王宮に紹介した貴族も大半が、高等法院の息がかかった貴族だった為、間違いないでしょう。

相手が判明したとは言っても、証拠をつかんだわけではないです。これから少しずつ少しずつ証拠を集めていき、言い逃れできない所で捕まえるしかありません。

まだまだ時間がかかりそうだ。と、父上がぼやいていました。母上はそんな父上を、優しくねぎらっていました。

(あんまり、人の前でラブラブ空間創らないでほしい)

そして私は3歳になりました。そろそろ訓練メニューを、増やしていきたいと思います。

今までは、ウォーキング・ランニング・軽い柔軟を行ってきまし

たが、いよいよ剣を振るトレーニングを始めたいと思います。・・・
・長かった。

マギは、小太刀二刀使いでした。加えて、大太刀（野太刀）と匕首も良く使っていました。これらを状況により、持ち替えて相手を攪乱しながら、必殺の一撃をきめるのがスタイルでした。しかしそれは、マギの完成されたスタイルではありません。

マギには、剣の師匠が3人居ました。一人は、小太刀二刀による変幻自在な攻めを得意とする者。もう一人は、大太刀で剣の結界を創り僅かな隙を狙った者を匕首で狩る者。二人とも、良い師であり兄弟子でした。

そして、マギを含めこの3人の共通の師である人。師は、変則二刀と居合術を得意とする人でした。マギが目指したのは、この人です。

しかし、師であり目標である人が早くに亡くなり、マギは家庭の事情も重なり、剣の道を諦めてしまいました。その際2人の兄弟子は、惜しみながらもマギの決断を支持してくれました。

マギは、落ち着きたいときはよく木刀で素振りをしていました。あるいは、マギは天性の剣士だったのかもしれない。マギが、多趣味だったのも剣に代わる物を、探していたからなのでしょうか？

おっと、話がそれました。剣の稽古の話でした。ここは、やはり木刀でしょうか。これを体格に合わせて、長さや重りを変えていくのがベストでしょう。

そうと決まれば、先ず木刀を作らねば・・・木は手頃なのが、

薪用の倒木に幾つかあるな。後は、これを削る為の小刀か何かあれば……ない。魔法が使えれば錬金で一発なのに。っと、無い物ねだりしても意味が無い。……探すか人に聞くしかありませんね。

最初に見つけたのは、アンナとミーアメイド長そして流民生活中に、天涯孤独となり家で引き取ったディーネ（4歳）ですね。アンナがミーアに、お説教をしていました。それを、ディーネがオロオロしながら見ています。

（今度は何事だ？）

聞いていると、どうも私の事が関係しているらしいです。どうも、このままではらちが明かない気がするので、話しかけてみることにしました。

「どーしたの？」

とりあえず、年相応ぼく話しかけてみます。

「ああ、ギルバート坊ちゃん。なんでもありませんよ。なんでも……」

明らかに、アンナは何か誤魔化しています。視界の端に、ミーアがこつちを睨んでいるのが見えました。

（うん。全然怖くない）

大型犬相手に、猫が必死に威嚇しているみたいです。目に涙ため

て、必死に怖い顔をしようとしています。

今のミア見てると、やたら嗜虐心が刺激されます。良かったです
ね、私にそういう趣味が無くて。

まあ察するに、ミアがディーネに私が如何に変かを力説。そこ
にアンナ登場 お説教。というパターンのようです。何だかんだい
って、アンナは優しいから問題ないでしょう。今は、自分の用件優
先です。

「ナイフ欲しい。・・・ある？」

三人の動きが、ピタリと止まりました。

(あつ……。良く考えたら、3歳児にナイフ欲しいって言われ
て、はいそうですかって渡す奴いない)

アンナとミアが、再起動する前にディーネが話しかけてくる。

「ナイフは危ないよ？」

「うん。そーだね。あきらめる」

これ以上言及される前に、さっさと撤退する事にしました。

撤退成功。

ここは素直に、母上に木刀欲しいとねだるべきでした。しかし母
上に木刀とは言え剣をねだるのは、凄く嫌な予感がします。守備隊

の件も、ある事ですし。

まあ、なんとかなるでしょう。いくら母上でも、3歳児を虐待しようとは思わないでしょう。・・・タブン。

今日は守備隊の訓練も、何処かへの訪問予定も無かったはずなので、執務室か寝室もしくはテラスを探せば居るはずです。

まずは執務室です。早速ノックします。

「コラ〜。ギルバートちゃん、悪戯しちゃだめよ〜」

来客中。後にしろの返事（暗号）が、返ってきました。ちなみに「ギルバートちゃん、遊んでほしいの〜」は、来客中だけど入ってきなさいの暗号です。

母上と私の間で、ノックのたたき方を以前から決めてあります。その為母上は、すぐに私だと気付いたのです。万が一の為に、ノック位置も聞き分けています。だてに風のスクウェアではないのです。

まあ屋敷の人間ならともかく、外部の人間に私の事をばらすわけにはいかないのです。

ウオーキングで時間を潰していると、来客が終わったようです。なので、再び執務室に行きます。そして再びノックします。

「入りなさい」

私は執務室に入ります。

「どうしたの？」

「実は、そろそろ剣を振る練習を始めようと思います。それで・・・」

母上の顔が、一瞬フラットな表情になったと思ったら、満面の笑顔になります。

「木剣が、欲しいの？」

「いえ、少し形が違う木刀という物が欲しいのです。それも、サイズの違う物を複数です」

母上は、興味津津といった感じで形状を聞いて来ます。

一方で私の頭の中では、アラートがけたたましく鳴っています。

「私がすぐに作ってあげるわ」

拙い！！このままでは特訓という名の虐待が・・・。

「いえ、小刀かナイフを貸していただければ自作します。その方が、微調整もきくハズですので・・・」

なんとか断ろうと、言い繕いましたが無理だったようです。

「なら、そばで見ててあげる。終わったら、稽古付けてあげる」

「しかし、剣を振れるようになる為の物ですから。いきなり、振り回すのは怪我の元だと思います」

「大丈夫。ちゃんと手加減するから。それとも、私と訓練したくないの？」

笑顔に殺気がこもりました。怖くてつい「お願いします」と、言っ
てしまいました。

(終わった。・・・まあ、諦めが肝心か)

と、それより気になる事が有ります。

「ところで、先程の来客は誰だったのですか？」

「元同僚よ、私が抜けたせいで大変だったって愚痴って行ったわ。・・・
・それと、敵の黒幕だけど今のままじゃ、逮捕は難しいそうよ。証
拠が少なすぎて、なにか新しいアクションでも起こしてくれないと
無理だって」

母上が悔しそうな顔をする。

「それが分かっているから、相手もしばらく動かない？」

私の質問に、母上は無言で答えていた。

それから、二日が経ちました。ようやく、木刀が完成です。試し

に振ってみます。

ブオ~~~~ン

ブオ~~~~ン

この音は、私からすると絶望的な音なのですが、母上は物凄い笑顔でこちらを見えています。まるで玩具を与えられた、子供の目です。

ためしに、木刀大太刀から木刀小太刀二刀に持ち替え、型を一つやってみます。

ブオ~~~~ン

ブオ~~~~ン

ブオ~~~~ン

ブオ~~~~ン

つるっ……ゴン。

転んでぶつけた痛みは、大した事ありませんでしたが、正直これはショックです。なんか冗談抜きで、涙が出そうです。

「もう、まだ体は3歳なんだから、無理しちゃだめよ」

母上の優しさが、今はつらいです。でも、これで稽古が無くなるかも……。ラッキーなのか？

「私が特訓してあげるから、泣かないの」

すみません。私が甘かったようです。

それから暫くして、私はようやく解放されました。二度と母上の前で、剣の訓練はしまいと思いました。と言っても、無理なんだろうなと思いました。とりあえず3歳だから無理するな発言は、私の気のせいだったようです。

母上の、どS・・・。

「ギルバートちゃん、なんか言った？」

(何時の間に！！さっき屋敷に入って行ったよね！?)

「いえ、母上なんでもありません」

「そう？明日も一緒に特訓しましょうね」

あっ・・・。目から水が・・・。

第十一話 さあ訓練だ！でもまず道具だ！！（後書き）

おもいのまま、書いてみました。

今回は、結構趣味全開です。

そう、変則二刀が趣味全開です。

感想お待ちしております。

第十二話 家の親は懐深いです！？不味いかも？

こんにちは。ギルバートです。母上の特訓が辛いです。このまま無理すると、某黒いシスコン二刀剣士の二の舞になりそうです。あつちは追い詰められて、自発的ですが（あれ、誰かに砕かれたような気も）こっちは強制です。冗談抜きで、本当に勘弁してください。……本気で泣きそうです。

しかし何だかんだ言って、結局母上の特訓を耐えてる自分が恨めしい。唯一の救いは、まだ実戦形式の模擬戦が無い事でしょうか？

以前に守備隊から聞きましたが、母上は実戦形式の模擬戦で大暴れた事があるそうです。その時はボコボコにされて、二日間目を覚まさなかった者もいたと聞いています。その人は「水メイジが居なかったら、どうなっていたか……」と、ガタガタ震えていました。

（……あな恐ろしや）

とりあえず妹が大きくなって、剣術をやらせれば私の負担が減るかな？などと、外道な事を考えてしまっ私は悪く無いと思いたいです。

結局母上は、私を鍛えるなぶるのが楽しくてしょうがないようなので、それを何とかしなければいけません。しかし対策が全く思いつきません。

（いっそ家出でもしてやるか？）

いえ……、これはこれで危険です。それにそんな不義は、絶対にできません。父上と母上はこの世界で、真の意味で私を受け入れてくれた人なのですから。まあ、結局我慢しろ……と言うわけですね。

突然ですが最近、ディーネと仲良くなりました。やはり年が近いのが、良いのかもしれませんが。無理してお姉さんぶる所が、可愛いのです。

始めて会った時は、薄汚れていて髪はボサボサ。ボロボロの服の為か、男か女かも良く分からない状態でした。

それが今では、髪は綺麗な金髪のアートで、目は澄んだ碧眼をしています。うん。将来美人になるな。

この前ディーネにねだられて、おままごとをさせられました。恥ずかしかったのですが、我慢してやり切りました。

しかし私は知っている。ミアが影から覗き、密に笑っていたのを……。

(……フツ……オボエテロヨ……オバサン)注ミ
ミアは現在二十歳です。

おっと、いけないいけない。昔、精神は肉体に引っ張られると言った人が居ましたが、最近私は思考回路が子供っぽくなってきたよう気がします。……注意せねば。

それよりも、あまり良くない事が分かりました。それはディーネの血筋です。本人曰く。

「お爺ちゃんのお爺ちゃんのお婆ちゃんは、とっても偉い貴族様と愛し合ってたんだって。でも、しがらみってゆーのがあって結婚できなかつたんだって」

本人は、そう言っていました親の形見が持ち物に見過ごせない物が有りました。家紋付きの指輪と、オルゴールでした。オルゴールには、蓋の裏に小さく文字が彫ってありました。

祝福できぬ愛しい我が子にこれを贈る。

許されるなら健やかに育つ事をここに祈る

つまり、平民の娘と恋仲になり子供を作ったあげく、周りに許してもらえず家から追い出した？いや、追い出されてしまった……か。

次に、指輪の家紋を見ます。

えーと……。モンモランシ家の家紋ですね。見なかった事に出来ないでしょうか？

仕方が無いので、母上に相談する事にします。

「いいんじゃない。家はそう言っの気にしないし。いっその事、養子にでもしちやおつか？」

テキスト過ぎます!!!母上!!!

それから暫くして、父上が帰ってくると養子の話はトントン拍子に進み、ディーネがメイジである事が確認されると正式に決定してしまいました。

（大丈夫か？この家）

私は本気で、心配になってしまいました。しかし父上と母上が話を立ち聞きしてしまい、そんな考えを改める事にしました。

「あの子……、ディーネだけど。幸せになれると良いわね」

「ああ。ディーネは、私達が進むかもしれない未来の形だ。幸せになってもraitai」

父上と母上の境遇を思い出し、私は自分が恥ずかしくなりました。また、二人の度量の大きさと心のありように、私は尊敬の念さえ抱きました。そして、そこに自分も救われている事に気づき、改めて感謝しました。

さて、今日も地獄の時間がやってきました。あれ？母上の横に、何故かディーネが居ます。

「今日から一緒に訓練します」

ディーネが胸を張って、元気に宣言してくれました。私は思わず母上を見ましたが、とても良い笑顔です。

「さあ、始めましょうか。先ず最初に、柔軟とランニングからね。」

ディーネは身体は柔軟で、180度開脚をやって見せました。意外にも体力も有り、私と同じ距離を平気な顔で走り切りました。正直に言って驚きです。

「次は素振りね。ディーネちゃんはこれを……。」

母上が細い木剣を取り出した所で、ディーネが私から木刀小太刀を一本ひったくりました。そして手振りで、木刀小太刀を振り始めます。不格好ながら、振り方は間違っていない。恐らく私が木刀を振っているのを、どこかで見ていたのでしょう。

「ディーネちゃん。それはギルバートちゃんのためから、こっち使いましょうね。」

「別にいいよ……。まだ予備もあるし。」

その時母上が、一瞬怖い顔をしました。何故？私は何も悪い事を、していないはずなのですが。すると母上は、自身の持っている木剣をやたらとディーネに勧めます。

（ああ。そう言う事ですか）

私は合点が行きました。私の剣術は、日本刀と言うハルケギニアでは、特殊な形をした刀を使います。つまり母上にとって、私の剣術は門外漢であり教える事が出来ないのです。そこでディーネに、

自分の知る剣術を教えようとしていたのでしょう。ここでディーネが日本刀を使ったら、自分だけ仲間外れになるとでも思ったのでしょうか？

母上は、自分の武器であるレイピアの利点について、ディーネに説いていきます。しかし、ディーネは納得しません。そしてディーネは、何故剣を習いたいか話し始めます。

父親が居ない事。唯一の肉親である母親が、亜人に殺された事。もう自分のような想いをする人を、作りたくない事。また家族を無くすのは嫌だと……。

だから、亜人と戦う為の剣を習いたい。当然武器も、対亜人戦に向いた物を使いたい。と、主張しました。

残念ながらレイピアは、対人戦それも1対1の個人戦に向いた武器です。一方で対亜人戦を考えると、レイピアはともお勧めできる武器ではありません。突きの一発程度では、亜人を仕留める事が出来ないからです。むしろ抜けなくなれば、あつという間に丸腰です。

これには母上も、折れるしかありません。

(これは、事前に誰かに話を聞いていたな。オーギュストあたりか？)

しかし諦めきれないのか、母上は尚も食い下がります。

「なら他に対亜人向きで、ディーネちゃんに向いた武器を探しましょう。……ね……ね」

(母上必死だな。おー、ディーネ困ってる困ってる)

「そっだ！ギルバートちゃんが使おうとしている武器の特徴は？」

あれ？矛先がこちらに向きました。まあ、嘘を吐く理由は無いですね。でも、いきなり全部の説明は無理です……。とりあえず要約して、簡単に説明するしかないですね。

「日本刀。片刃で独特の反りと薄さ軽さが特徴で、切ってよし・突いてよし・打って良しの優良な武器。特に切る事に特化していて、一流の日本刀と使い手がそろつと鉄さえも切り裂く。ただし使用者に高い熟練度が求められ、未熟な者が使うとすぐに刃がダメになりたり折れたり曲がつたりしてしまつ。《固定化》や《硬化》を使えば多少は改善できるだろうが、亜人戦にはとてもお勧めできない。もちろん、それを覆す技量が有れば話は別だが……」

ここまで話して、ディーネがキョトンとしているのが気になりました。

(あつ……。ヤバ……。まあいつか)

「ディーネちゃん。ギルバートつたら、こついう変わった子なのよ。どつ思つ？」

「えつ……。いや……。あの、その……。えつと」

ディーネは絶賛パニック中です。……。あつ、なんか和む。

母上は良い顔で笑っています。やっぱりDSですねこの人。

結局、全て（原作知識以外）話させていたいただきました。正直に言
って、拒絶されたらどうしようか心配でした。

しかし意外にも、すんなり信じ誰にも喋らないと約束してくれま
した。流石に変に思い、理由を聞いてみました。

「ロマリア大嫌い！！」

この一言が返ってきました。お願いだから、危険な発言は控えま
しょう。

ちなみに最終的にディーネが選んだ武器は、よりにもよってバス
タードソード。そんなマニアックな武器を、何故選んだのでしょ
うか？母上はその後、いじけていました。

そして今日も元気に訓練です。ディーネも実質初日（本当の初日
は武器選びで終わった）に、弱音を吐いていましたが、なんとか頑
張っています。

「お母様、遅いね」

「うん。遅いね」

既に柔軟と走りこみを終え、軽く素振りを始めていました。いつもなら、嬉々として一番最初に来るのに変ですね。

それから暫くして、ようやく母上が来ました。しかし服装が、動きやすい訓練着では無く正装です。

「ギルバートちゃん。ディーネちゃん。ごめんなさい。これから、クールズ領へ行かなければならないの」

「何かあったのですか？」

「クールズ家の次期当主。アラン・レイ・ド・クールズが、魔の森の調査中に行方不明になったらしいの」

クールズと言えば、ドリユアスの直ぐ西にある土地ですね。

「彼は優秀な貴族だったの。そうね、・・・魔の森の調査を任せられるほど、優秀な貴族だった。と言えば分かるかしら」

私は頷きました。一方ディーネは、キョトンとしています。

「彼が居なくなれば、クールズ家は弱体化するわ」

ここで私は、ようやく母上の危惧している事が分かりました。母上は私が理解したのを確認すると、足早に去って行きました。

クールズ領が弱体化し魔の森に吞まれば、ドリユアス領は南だけでなく西も警戒しなければいけなくなります。

それだけなら、まだ何とかなるだけの体力はドリユアス領にはあります。ですが対応するには、領内の大規模な再編成がどうしても必要になります。それは一時的に、高等法院にいる奴らに無防備な背中をさらすという事です。

「……不味いな」

私の口から、思わずそんな言葉が漏れました。

「ねえ……、なにがまずいの？」

デイーネは一人だけ置いていかれて、不満そうに首を傾げていました。

第十二話 家の親は懐深いです！？不味いかも？（後書き）

ディーネちゃんはかわいいです。

イメージはセイバーちゃん4歳。（あくまでもイメージ）

うにうにの文才では全く表現できていないのが悔やまれます。

感想お待ちしております。

リタとナベリウスそろそろ再登場させたいな……。

でも、ちょっと無理あるか？どうしよう。

第十三話 姉弟仲良くそして文化考察？

こんにちは。ギルバートです。最近になって姉が増えました。家の親は懐が深いのか？それとも考えなしなのか？良く分かりませんがしかし私も、そこに救われているので文句はありません。

さて、少し面倒な事になりそうです。クールズ家の次期当主行方不明は、流石にキツイです。そして今後が、危ぶまれます。これからいつたいどうなるのでしょうか？

母上は数日間は戻らないようです。よってその間は、ディーネと二人で訓練をしなければいけません。母上には言えませんが、私もディーネも凄く喜んでいます。なんとと言ってもその間は、地獄（母の訓練）から解放されるのですから。

訓練終了後、お互い後片付けをし身を清めるため別れます。身体を拭き、サツパリしてから居間に移動しゆつくりと休みます。いつもなら、自室（ディーネが養子になった時にもらった）でグツタリしているところです。

そこへ、ディーネが入って来ました。特に使用人も客もないので、普通に挨拶をしました。

「お疲れ様。ディーネ。今日はお互い、部屋から出る余裕が有ったみたいだね」

「うん。おつかれさま」

そこで会話が途切れてしまいました。良く考えたら私の正体を話

して以来、まともに会話した覚えが無いです。

午前中は、私は書庫へこもって勉強。ディーネは礼儀作法の勉強。午後からは、合流して一緒に訓練しますが会話と言える物は殆ど無いです。その後は、お互い疲れ切りバタンキュー。食事中はテーブルマナーの勉強も兼ねているので、碌に会話もできない状態です。夕食後はお互い早く寝たい為、就寝の挨拶で一日終了。

これから姉弟として過ごすのに、この状況は良くないです。今回の事は良い機会なので、思い切ってディーネに話しかけて見る事にしました。

「私の正体に吃驚したかい？」

「うん。ビックリはしたけど・・・」

「ひょっとして、どう接して良いか解らない？」

あつ、ディーネが固まった。どうやら図星のようです。

「確かに、三十路過ぎのおじさんと融合したけど私は見た目通り3歳だよ」「マギ。ごめん」

「んー」

ディーネが頭を抱えて唸っていますが、それで問題が解決するわけでもないです。

「折角だから、今からディーネではなく姉上と呼ばうか？」

「うー」

ディーネは何故か、とても嫌そうな顔をしました。姉の威厳を示せると思っているのですか？

「私の方が、一応は年下ですから……」

そう呼ぶのは当たり前だろうか？と、ゼスチャーします。しかしそこが癪に障ったのか、ディーネは言い返してきました。

「中身、おじさんのくせに」

クリティカルです。今の言葉は、私の心を真芯でとらえ砕きました。イタイです。

「当たり前前的事を言ったのに、なんですかそれは？」

「こっちも、本当のこと」

お互い、無言になり睨み合います。

そして、……

「ハツハハハハハハハハ」

「フッフッフッフッフッフッフ」

お互い顔をそらして、笑ってしまいました。まるで、睨めっこの引き分けのようです。

ひとしきり笑うと、お互い変な緊張感は無くなっていました。

「これからもよろしく、ア・ネ・ウ・エ」

「ディーネよ、ギル」(怒)

「分かりました。ディーネ」

そう言ってお互いまた、笑ってしまいました。

ディーネとの蟠りをとく事が出来たので、今日は大収穫です。これでこれからディーネとは、気軽に喋って行けそうです。そう言えば、アナスタシアの事を最近ほったらかしですね。

「そうだ。ディーネ。これからナスの所に、行きませんか？」

「な……ナスウ……？」

「アナスタシアの愛称です。変ですか？」

「うん。変！すっごく変！！」

私は「そーかな？」と、首をひねってしまいました。

「ギルって、そう言うところ。お父様そっくり」

「ばっ……馬鹿な！！そんなはずは……」

正直に言わせてもらえば、これが今日一番のダメージでした。

その後今日一番のダメージを無理やり忘れ、アナスタシアの所に向かいます。到着しノックすると、乳母が返事をしたのでそのまま部屋に入ります。

「アナスタシアを見に来たの」

ディーネが代表して答えます。

「ちょうど良かったです。今オムツを交換したばかりなんです。これを、処理したいので少しの間見ていてくれませんか？それと抱きたくても、私が戻ってきてからにしてくださいね」

ベビーベットなので、落ちるなどの心配は有りません。私達が無理に抱こう等しなければ、問題無いと判断したのでしょうか。ハイと返事をする、乳母は部屋を出て行きました。随分信用されていますね。

見ているだけではつまらないので、私はアナスタシアのホッペを指で突いて見ました。

「やあー」

恐らく「嫌だ」と、言いたいのでしょう。泣かれても困るので、これ以上は自重しておきました。

ディーネを見ると、全くもう……と言いたそうな表情をしていました。

「そうだ！わたし達兄弟になったんだから、私の秘密の歌教えてあげる。絶対人に教えちゃダメだよ」

「?・・・分かった」

返事をする、ディーネが息を吸って歌い始めました。

「~~~~~」

ディーネの口から、紡がれるのはハルケギニアの言葉では有りませんでした。

(うん・・・。あれ?英語?)

「~~~~~」

ディーネの口から、変わらず英語の歌詞とメロディが紡がれていきます。

(いや、でも間違いないよな?)

「~~~~~」

たしかこれは、イギリスの民謡だったはず。

(何故?ディーネがこの歌を知っている?)

「~~~~~」

「ちょ・・・ちょっと待って」

「?・・・どうしたの?」

「その歌は何処で聞いたの?」

私の質問に、ディーネは首を傾げながらも答えてくれました。

「お母さんが、たまに歌ってくれた。お父さんの、故郷の歌だって・・・」

「故郷ってどこ?」

「わかんない。とつても、遠いところだってお母さん言ってた」

あまりの事態に、思考が止まってしまいます。必死に頭を再起動させ、この事実を検討してみます。

ディーネの父親は、地球のイギリス出身か? いや、あるいは父方の祖父母かも・・・。

「お父さんのお父さんと、お父さんのお母さんは知ってる?」

「?お父さんの故郷にいて、遠いから会えないってお母さんが言ってた」

ほぼ確定。ディーネの父親は、あちらの世界イギリスからこちらに迷い込んで来た可能性が高いです。それならば、ディーネのロマリア嫌いの原因ってもしかして。

「お父さんが、いないのってロマリアの人が・・・?」

「うん。異端審問だって。気に入らない人や、お金を出さない人を連れていっちゃうんだって」

恐らくですが、現代知識を利用して一旗揚げようとしたんでしよう。そしてロマリアの糞坊主に、目をつけられた。もしくは糞坊主の恐喝に応じなかったか、あるいは止めようとして……。

私は心の中で、デイーネの父親の冥福を祈りました。

そして思考の海に、身を投げ出します。

デイーネの父親・オールドオスマンの恩人・シエスタの祖父。サイトは別口にしても、最低でも3人の人間がハルケギニアに渡って来ている。ガンダールヴの槍の召喚と考えるなら、オールドオスマンの恩人はロケットランチャー。シエスタの祖父は零戦。そう考えるとデイーネの父親も、何かしらの武器の召喚に巻き込まれたと言う事か。

事例がこれだけとはとても思えない。ひよっとしたら、かなりの人数がハルケギニアに迷い込んで来ているのではないだろうか？

元の場所も恐らくだが、イギリス・ベトナム・日本と見事にはばけている。ある程度条件があるにしても、地球の何処からでも迷い込むと見た方が良いだろう。

良く考えると、ハルケギニアが地球で言う中世・近世の欧州と、非常によく似た文化体系をしているのは何故か考えた事が無かった。地球とハルケギニアは、全く違う文化を持っていて然るべきなのだ。

それは魔法と言う、独自の文化であり強力な力が有るからだ。

原因は恐らく、ハルケギニアの文化体系に中世・近世の欧州人が大きな影響を与えたと見るのが自然だ。恐らく槍の召喚に巻き込まれ、地球から迷い込んできた中世・近世の欧州人が、ハルケギニアの支配者階級に取り入り、大きな影響を与えたのだ。

それならば、地球から渡って来た人間が残した軌跡が、全くないのは何故だろうか？恐らく亜人や魔獣・幻獣・盗賊に、すぐに殺されてしまうから。それを免れたとしても、ディーネの父親のように異端審問で処刑。生き残るにはシエスタの祖父の様に、目立たず静かに暮らす事か……。

まかり間違つて、貴族に取り入りハルケギニアに大きな影響を残したとしても、この世界では貴族ではない者の記録など残そうとしないだろう。むしろ抹消の対象か。

しかし地球から来た者の影響は、閉鎖的な平民にはかなり出るだろう。通常なら、平民のコミュニティー（街や村）が外から影響を受けるのは、行商人・旅人あとは出稼ぎから帰って来た身内くらいだ。そこに、地球から来た者が定住し地球の文化を伝えたらどうなるか。

恐らく元の文化と大きく乖離していなければ、受け入れられるだろう。

そう言えば、文化の中には名前も含まれている。名前はトリスティン王国なら、フランス人名が使われるが平民はどうなのだろうか？その影響はやがて、貴族にも出始めるのではないだろうか？

現に私の周りには、フランス人名ではない人物が結構いる。そう言う私もその一人だ。家の家庭の内情からすると、影響が出るのが早くても不思議ではない。

・・・そして「ゴン!!」・・・イタイ。

「何するんだよ!!」

「呼んでも返事しないからでしょ」

叩かなくても良いと思う。見ると乳母がもう帰って来ていました。外も暗くなっています。かなりの時間を、思考の海で過ごしていた様です。と言うか、お腹すいた。もう夕飯の時間か。

夕飯を食べ終わり、素早く部屋に帰り私は思考の続きを始める事にしました。

何故ハルケギニアは、今の文化レベルで止まっているのか？それは恐らく、科学技術が魔法を脅かすほど発展し始めたのが・・・。

その時ノックの音で、現実に戻されました。

返事をする、入って来たのはディーネでした。

「如何したんだい、こんな時間に？」

「さっきから何考えてるの？」

ああ、そうか。ディーネから見れば、自分の父親の話から私が考え事を始めるのです。気にならない方が、おかしいです。

私はディーネに当たり障りのない範囲で、地球とイギリスの事を話しました。話したのはそれだけでした。これ以上は、今は話さなくても良いでしょう。

(自分の父親と同じ境遇の人が居るなどと教えても、今のディーネは心を痛めるだけでしょうから)

話を聞くと満足したのか、ディーネは自分の部屋へ帰って行きました。

翌朝の昼すぎに、母上が帰って来ました。話を聞く為に執務室に向かいます。

(予定より帰りが早いですね)

そんな事を考えながら歩いていると、何故か後ろからヒヨコのようにディーネが着いて来ました。気になりましたが、今はそれどころではないので放っておきます。

ノックして許可を取ると、すぐに部屋に入ります。ディーネも私と一緒に、部屋に入って来ました。

「母上結果はどうでした？」

私は早速質問しました。ディーネは、私の横に並んでいます。

「残念ながら、死体で見つかったわ」

私はこの時、苦虫をかみつぶしたような顔になっていたでしょう。

「今は現当主のロベール殿が健在だけど、もう高齢だから……」

私は思わず眉間に皺を寄せ、右手を額に当ててしまいました。

「ただし、良い情報があるわ」

母上の言葉に、私は表情と右手を元に戻しました。

「ロベール殿には、妾との間に子供が居たの。その子供は、ヴァレールと言っただけ。かなり優秀よ……内政向きだけど」

最後の一言に、顔が若干ひきつります。

「家の領地で行った屯田守備隊について、いろいろ聞かれたわ。用兵の才能も、有りつてところ」

ほう、それなら期待できそうですね。

「ただし、魔法は火のラインメイジなの。ロベール殿やアランがトライアングルだったから、実力を疑問視する声も有ったの。それが周りの兵達に、不安となって広がっているわ」

アウツチ……それは厳しいです。

「補佐に信用できる優秀なメイジを付けて、不安は最小限に抑えたから暫くは大丈夫よ」

それならなんとかなるか？

「問題は妾の子供と言うところね。高等法院の連中が、かなり難色を示していたわ」

「それで母上は……」

「一応、ロベール殿とヴァレールにこっそり忠告はしておいたわ」

ヴァレール・ド・クールズが、頑張っしてほしいな。

「ところで先程から気になっていたんだけど、ディーネちゃんと随分仲良くなったのね」

(勘弁してください母上)

第十三話 姉弟仲良くそして文化考察？（後書き）

ディーネの可愛さが伝わらない。

でも、ディーネって予定ではヒロインじゃ……。

うん。考えないようにしよう。

それと、フランス人名ではない言い訳を試してみました。

これに関する、ご意見が欲しいです。

感想お待ちしております。

そろそろ、気分転換に別の話を書くのも良いかなと考えています。

ネギま 女オリ主物（パロ有り）

オリジナル物（パロ有り）

うん、やっぱりこっち（ゼロ魔）が一段落してからだな。

外伝一話 水精靈に憧れて

僕の名は、エドモンド・チャップマン。英国の片田舎で、平凡な人生を送って来た。父が海外ブランド輸入販売の企業を営んでいるので、その手伝いをしている。5人兄弟の末っ子なので、後を継げと言われる心配も無いから気ままな人生を送っている。そんな僕も大切な趣味がある。

そう僕は物語ファンタジーが好きだ。

子供の頃に、親に連れて行ってもらった劇が原因だ。

その劇は、戯曲「オンディーヌ」。

始めて見た舞台劇を、僕は面白いと思った。

初めは外国フランスの劇など、見ても理解できないと思っていた。しかしそれは間違いだった。

興味が出てきた僕は、少し調べてみた。出てきたのは、元ネタとなったドイツの「ウンディーネ」と言う物語だった。

僕は、興味が有ったので英訳された物を読んでみた。読み終わった頃には、僕はすっかり物語ファンタジーの世界に魅せられていた。

すっかりハマってしまった僕は、ドイツ語を必死に勉強し原文まで読んだ。

それから、アーサー王伝説・指輪物語・ケルト神話等のメジャー

な物からマイナーな物まで、かなりの量を読んだ。舞台となった土地が近い物は、実際に足を運んだ。物語の雰囲気、直に感じるのも楽しかった。

だから僕は胸を張って言えるだろう。

「僕の趣味は、読書と旅行だ」・・・と。

そしてこの趣味に目覚めさせた、フーケの「ウンディーネ」は僕にとって特別なものだった。

今日は、ある物語の舞台となった土地目的に旅行に出ている。

本来なら、楽しい旅行になるはずだった。しかし今回の旅行は、初めからケチのつきっぱなしだった。

空港で荷物を盗まれ、ようやく手元に帰って来たと思ったら、旅行かばんはズタズタで中身が半分以上減っていた。（幸い貴重品は肌身離さず持っていた為無事だった）同情したのか旅行代理店の人が、キャスター付きの大きなアタッシュケースをくれた。

しかし不幸は、それでは終わらなかった。旅行代理店のミスで、ホテルが物凄くボロい所が変わってしまったのだ。しかし荷物が無くなった時に良くしてもらったので、あまり文句を言えなかった。

更にはタクシーが突然これなくなり、バスを乗り継ぎ歩いて目的地に向かうはめになった。

今は山頂にある村を目指して、山道を歩いている。山道と言うには、整備されていて遊歩道のそれに近い。一本道で、道に迷う心配もない。しかし……

「荷物重いし、何より……寒い」

先程から人とすれ違わないのは、この寒さが原因だろう。僕もかなりの厚着をしているが、服の隙間から入って来る空気に、ついで身を震わせてしまう。地元の話では、「今日はかなり寒いが、天候の心配は無い」と言っていたので、雪や雨の心配は無いだろう。

（まあ、この状況で少しでも濡れたら、凍死コース一直線なので助かる）

そんな大げさ？な事を考えながら、僕は山頂の村を目指し歩いていく。

そこで周りの変化に気付いた。

「……霧？でも……何か変だ」

そう感じたのは、むしろ当然と言ってよいだろう。霧の発生の方が、兎に角変なのだ。普通霧は、いきなり現れる物ではない。しかしこの霧は、曇りガラスのメガネをかけたように様に一瞬で現れた。既に発生していたのなら、前を向いて歩いていた以上気付かない訳が無い。

そして霧のせいで服が湿って行く。今は霧の中にいるせいか、寒さは感じないが……。

(勘弁してくれよ。霧が晴れたら、元の気温に逆戻りだろ。凍死しちゃうよ)

この時僕はまだ、事態の深刻さに気付いていなかった。

霧は、どんどん濃くなり視界がゼロになった。

僕は一度立ち止まる。転んでケガをしては、つまらないからだ。服は濡れになり軽く絞るだけで、水が落ちて来るような状況だ。

(まさか……、この一本道で遭難は恥ずかしいな……)

僕は自分に冗談を言うように、心の中で呟く。その時、頬に僅かな空気の流れを感じた。

(風が出てきた？なら、霧はすぐに晴れるはず……)

予想通り暫く待つと、霧が少しずつ薄くなってきた。

この状況に、僕は少しほっとした。

(ちょうど中間地点位か？濡れの服では、元の気温は流石にキツイな。……どうしよう?)

今後について考え始めた時、それは起こった。突然の浮遊感が、僕の体を襲ったのだ。

(嘘だろ!!僕は地面の上にはいたはずなのに……)

ドボoooooooooooo!!!

僕はいつの間にか、水の中に落ちていた。

最悪な事に、防寒対策の厚着が仇となり上手く泳げない。

その上この状況に、パニックを起こしてしまった。

後はもう溺れるだけだ。

やがて力尽き、身体が水中に沈んでいく。

意識が闇に閉ざされるその時、僕の目の前に美しい女性が見えた。僕にはその女性が、憧れていた水の精霊ウンディーネに見えた。

僕はベットの上で、目を覚ました。

(先程までの事は、夢だったのだろうか?)

そんな疑問が、僕の頭の中を駆け巡った。冷静に考えれば、このような事有るはずが無い。

(しかし最後の女性が、夢の産物とは少し惜しいような気がする)

そんな事を一度考えてから、冷静に現状を分析し始めた。

(きつと山道で倒れた所で、夢を見たに違いない)

なら山道で倒れていた僕をここまで運び、介抱してくれた人物が

居るはずだ。先ずはその人に、お礼を言わなければ……。

僕は知らない天井を見ながら、そう考えていた。

すると部屋のドアが開き、一人の女性が入って来た。僕はその姿に見覚えが有った。夢に出てきた女性だ。

「……あら？ようやく目が覚めたのね」

「……ああ……君が助けてくれたのか？」

なんとかそう返答したものの、内心ではかなり焦っていた。

（あれは、夢じゃなかったのか？……いや、ひよっとしたら気絶する寸前に、彼女の姿を見ただけなのかもしれない。それで、夢に出てきて……）

「そうよ。ラグドリアン湖で溺れている貴方を、岸まで引っ張り上げたんだから。私一人だったから、大変だったのよ。そもそも、湖に落ちる可能性が有るのに、あんな恰好しているなんて自殺行為なのよ」

（ラグドリアン湖？聞いた事ないな……。いや、それ以前にここは何処だよ。あの時の事は、夢じゃなかったのか？それともまだ夢の中なのか？）

僕は訳が分からず、首を傾げてしまった。そんな僕に、女性は違和感を感じたようだ。

「ちょっと、大丈夫なの？まさか記憶喪失とか言わないよね？」

「それは大丈夫。でも……、少し混乱している」

僕の返答に「そう」と、言ってから女性は黙ってしまった。どうやら僕が話し始めるのを、待っていてくれるみたいだ。この心づかいは、今の僕には嬉しい。

「ありがとう。でも僕にも、よく分からないんだ。山道を歩いていたらはずなのに、霧が出たと思ったたらいきなり水中に投げ出されて……」

女性は僕の説明に、首を傾げていた。

「あなた……、貴族なの？」

（貴族？なんでそうなるんだ？）

僕が不思議に思っていると、女性は近くに畳んであった服を広げた。

僕が防寒の為に着ていた、ダウンジャケットだ。良く見ると、僕の荷物は全てこの部屋に有るようだ。

「この服の縫い目は、信じられないくらい細かくて均一よ。布地の原料は全く分からないけど、手触りからかなり上等な物だと分かる。これ程の物となると、そうとう裕福な貴族でも無ければ手に入らないわ」

（こんな物ちよっと頑張つてバイトすれば、買えるような代物なのに……。それに貴族？今の時代では特権を無くして、伝統と先

祖伝来の土地を守る為に生きている人たちだよな？基本的に生活は、
厳しいと聞いているが……）」

「それともどこかの大商人か何か？」

（僕と女性この人の間には、何か価値観の違いが有るようだ。いや……
、そんな生ぬるいものじゃない。こう……、前提からして致命的に違うような）

「ねえ……。聞いているの？」

「……うん」

なんとか頷いたが、僕はこの女性が未知の存在に思えてきた。

「やっぱり貴族かな？杖は無いようだけど、何も無い所からいきなり落ちてきたから、魔法で失敗でもした？」

（杖って何？魔法って何？）

僕は目の前の女性が、怖くなり完全に硬直してしまった。もう女性
性が何を言っているのかも、良く分からない状態だ。僕は目を閉じて
しまった。女性の声だけが聞こえる。そして情けない事に、自分
が震えている事も自覚できた。

少ししてから、女性は話すのを止めていた。そして、次の瞬間僕は
抱きしめられていた。

「大丈夫よ。ここには貴方を傷つける人は、いないから……」

そう言いながら、頭を撫でてきた。女性の鼓動が、額に伝わってくる。その鼓動は女性の言葉に、嘘は無いと思わせる何かが有った。・・・落ち着いてきた時、頭に当たる大きな二つの膨らみが気になったのは、僕が男である以上仕方が無かったと思いたい。

まずは、僕と女性の認識の差違を埋める為の話をする事にした。

そこで初めて、お互いの名前を知らない事に気付いた。思わず二人で、苦笑してしまった。

「僕はエドモンド。エドモンド・チャップマンだ。改めて助けられてありがとう」

「どう致しまして。私の名前はミレーヌよ」

名字が有る事に「貴族?」「貴族じゃない」と、一悶着有ったが何故かお互い笑っていた。

そこから二人の話は始まった。

その話は、お互いに信じ難いものだった。

魔法が存在しない所と、魔法が存在する所。

貴族が特権を無くした所と、貴族が支配する所。

異世界の存在。地球とハルケギニア。

お互いとても信じられない様な事が、次々に相手の口から出てくる。

僕は試しに外に出て、月を確認してみた。

空には二つの月があった。思わず目をこすり、もう一度確認したが、結果は変わらなかった。ここまでくれば、僕は信じるしかない。

一方でミレー又は、エドモンドの話を疑わなかった。

ミレー又はエドモンドが、ハルケギニアに来た瞬間を見ていた。虚空から突然現れたエドモンドに、初めは見間違いか魔法による物と思っていた。

しかしそんな魔法は、見た事も聞いたことも無い。着ている物や持ち物も、ハルケギニアでは考えられない物が多数あった。それこそ『場違いな工芸品』と、呼んで良いものまで。

ミレー又は小さいながらも、商会の経営者の一人娘だ。自分の見る目に自信が有ったし、商人としての知識にも自信が有った。父親の手伝いで取引の場に出て行くことも有ったし、最近では商人としての勘も働くようになった。と、自負している。

そんなミレー又の目・知識・勘。全てが「この男には何かある」と、告げていた。だからこそ両親の反対を押し切って、自分の部屋に男を運び込んだのだ。

もちろん警戒もしていた。当然、杖や武器を隠し持っていないか確認したし、ミレー又が大声を上げればすぐに商会の従業員が助け

に来るようにしていた。だがそれは杞憂だった。目の前の男は、唯の小娘である自分に怯えていたのだ。そしてその時、唐突に思った。
……この人は、私が守ってあげないと。

何故そう思ったかは、ミレー又自身にも分からなかった。一目惚れだったのか、看病している内に情が移ったか。どの道どんな理由だろうと、ミレー又はこの思いを否定する気は全く無かった。

一方で異世界に突然放り出されたエドモンドは、絶望していなかった。地球で語り継がれている物語や伝説に、この世界は酷似し過ぎていてからだ。ハルケギニアから地球に渡って来た人間が居ると確信したのだ。

最後にエドモンドが異世界人である事は、二人だけの秘密にする
と約束をした。

帰る方法を探すにしても、2・3日で見つかるとは思えない。それまでこの世界で生活はしなければならない。当然の話だが、部屋と生活必需品が必要になって来る。旅行中に、荷物ごとハルケギニアに飛ばされたが、水に落ちたせいで壊れた物が多数あった。不足した物は、買いそろえなければならない。

まずは現金が必要になる訳だが、ハルケギニアの通貨など持ち合わせていない。そこで現在持ち合わせている物を、売ってお金にする事にした。

荷物の中で売れそうな物を、検討する事にした。その際、ミレー

又にも手伝ってもらった。その結果、5種の品を売る事にした。

ダウンジャケット（超高級古着）×1着・小銭（コイン）×23枚・カラー写真（超精密絵）×9枚・壊れたポラロイドカメラ（場違いな工芸品）×1台・壊れた携帯ラジオ（場違いな工芸品）×1台

本・紙幣・菓子も売れただろうが、水につかってダメになっていたので売るのは断念した。服もダウンジャケットを除き、自分が着ていた物を人に渡すのに抵抗があったので止めておいた。「アタツシユケースも売ろう」と、ミレー又は言ってきたが貰い物だからと辞退した。

これらの品は、ミレー又の親が経営する商会で売却してくれる事になった。

売買契約書を作る為に、ミレー又は一度席をはずした。

ミレー又はかなりの大金が入ると言っていたが、僕は実感が無かった。地球ではこれらをすべて売っても、部屋一つまともに借りられない。不安が払拭できない僕は、アタツシユケースの中身を調べ始めた。

その時アタツシユケースの内装が、剥がれ掛けている事に気付いた。良く見ると外装と内装の間に、不自然な厚みが有った。不思議に思った僕は、内装を剥がしてみる事にした。そこに有った物は・
・。

「銃!!」

あまり事態に、目を見開き口から掠れた声が漏れだす。その時部

屋のドアが開き、ミレーヌが入ってきた。

「如何したの？」

僕の様子が変な事に気付き、ミレーヌが質問して来た。

「そ　それが、アタツシユケースの中に知らない銃が……」

ミレーヌの目が、アタツシユケースの中に有る銃を確認する。その時僕は、ミレーヌの反応が怖くなった。普通に考えて、銃を持っている人間が居れば警戒する。下手をすれば、この世界の警察に突きだされる可能性もある。その事に気付き、僕は動揺し震えだしてしまった。

「落ち着きなさい！！ここでは、銃くらい持っていたって如何って事無いから！！」

情けない話だが、ミレーヌに一喝されるとすぐに落ち着く事が出来た。

落ち着いた僕は、何故こんな物がアタツシユケースの中に有るか考え始めた。ミレーヌにも意見が貰えるよう、地球（英国）の銃刀法について説明した。それから、このアタツシユケースを手に入れた経緯も説明した。

二人で話し合った結果、銃密輸に巻き込まれたと結論が出た。知らないうちに、銃密輸の運び屋をやらされていたのだ。旅行代理店の人間がグルでは、回避のしようが無い。

（そして、捕まる時は僕一人か……）

悔しさが込み上げて来るが、先ずはハルケギニアでの当面の生活費だ。

改めて僕は銃を確認してみた。

銃身に（PYTHON 357 357 MAGNUM CT
G ）と刻印があり、弾も9mm弾50発（1箱分）ほど入っていた。

（コルト・パイソンか……。有名な銃だ。取引先の付き合いで、アメリカの射撃場で一度撃った事が有る。それより、こんな量が入っていて僕は気付かなかったのか……。）

「これどうする？場違いな工芸品は、高く売れると思うけど……」

躊躇いがちなその言葉に、僕は抵抗を感じた。この拳銃を売る事により使用され、僕の知らない誰かが死ぬのだ。そしてそれは、剣やナイフを売るのは話が別だ。ハルケギニアでは、製造不可能な超兵器（大げさか？）を気軽に売る気にはなれなかった。

「いや……。これはまだ売らない事にするよ。危険な武器だからね。自分の目で、信用できる人に託したいと思う」

僕がそう言うと、ミレー又は笑顔で頷いてくれた。

そのままミレー又の自室に居座る訳には行かず、部屋を出る事に

なった。行く所も金も無かったので、商会の客室を暫く借りる事になった。

部屋を移っても、ミレー又は僕に良くしてくれた。

僕は異世界の人間な為、ハルケギニアの常識に欠けている。それを解消しなければ、何時まで経っても一人で生活できない。そこでもミレー又は快く協力してくれた。

挨拶の仕方から始まり、礼儀作法・食事のマナー・一般常識・文字。極めつけはトイレ……。 (顔を赤くしながらも、丁寧に説明してくれた)

そのお返しに僕は、趣味で集めた地球の物語を話した。特にクイーの牛争いは盛り上がった。そしてミレー又が一番喜んだのが、イギリス民謡のだった。

エドモンドは、自分が知る全ての物語と民謡を話し歌うつもりだった。しかし何故か、悲恋の物語は語れなかった。特にその代表である、フーケの「ウンディーネ」は……。

何故だろうと？ 考えて見た。今の自分の状況が、まるで物語みただと気がついた。そして物語と今の自分に、どこか重なる物を感じている事に……。

その時気付いた。自分の中に、経験したことが無い感情が有るのを……。

……今はまだこの気持ち、何なのかよく分からない。少なくとも、お別れする時は笑顔でいたいと思った。

目を覚ましてから一月と少し、僕はハルケギニアでの生活に慣れ始めたていた。

この日の夕刻、商會を閉め後片付けをしているミレーヌを手伝っていた。すると突然、従業員の一人が興奮しながら取引明細書を持ってきた。どうやら、僕が出した品が売れたようだ。やはり気になるのか、ミレーヌの両親や他の従業員も作業を中断し集まって来た。

まだ文字が完璧じゃない僕に変わって、ミレーヌが読み上げてくれた。

ダウンジャケットは、商人に20エキューで売れた。小銭は、貴族の好事家に23枚で100エキュー。カラー写真は、貴族に1枚160エキュー。(絵師を教えると、しつこく聞かれた)ポラロイドカメラとラジオは、ロマリアの神官が二つで2000エキューの値段をつけた。

これら全ては、事前の打ち合わせ通り「東方から流れてきた」と言い張ってもらった。

売上金額の合計は、3560エキューになった。契約通り1割を商會の手数料として払って。後は、これまでの宿・食事代と命を救ってもらった礼として、200エキューも払えば十分か？

これで残りは、3004エキュー。

当面の生活費には、十分……いや多過ぎる金額だ。贅沢をし

なければ、20年以上暮らしていける。

しかし僕の最終目標は、地球に帰る事だ。その為には、有る程度の情報網が必要だ。そしてコネも必要ななる。それらが上手くいった場合、メイジへの依頼も必要になるかもしれない。その時は、依頼料として大金が必要になる。

当面の目標は「情報網の作成とコネを見つける事」そして、金銭の温存だ。

僕がそんな事を考えていると、ミレーヌが声をかけてきた。

「良かったわね。思ったより高値で売れて。父さんと母さんも、物凄く喜んでるわ。最初に貴方を連れて来た時は「そんな男捨ててこい」と、言ってたのに」

口では自分の両親に文句を言っていたが、顔は笑っていた。

「まあ、無理も無いんだけどね。普段うちでしている取引と比べて、取引額と儲けが10倍よ。ジュ・ウ・バ・イ!!!」

ミレーヌのテンションが、おかしな事になっている。気になって周りを見て見るが、みんな同じような状態だ。ミレーヌの言葉を、額面通りに受け取れば嬉しいのも良く分るが……。これ程か？

結局この日は、後片付けそっちのけで祝賀会に突入してしまった。

次の日、僕は二日酔いだったのに周りの人間は、何事も無かった

ように仕事をしていた。

お昼になって、大分回復した頃にミレーヌが来た。正直に言わせてもらうと、祝賀会の中盤以降の記憶が全く無い。ちよつと怖いのが、昨日の事を聞く事にした。

「昨日の事覚えてる？」

「私は大分お酒入っていたから。祝賀会の費用は、エドが持つって話くらいまでなら……」

(周りの奴らはこれを狙って、僕に酒をガンガン飲ませなのか)

相当後ろめたいのか、ミレーヌは僕と目を合わせようとしなかった。

「ごめんなさい。私も浮かれちゃってて、気付かなかった」

ミレーヌに謝られたが、僕はさほど気にしていなかった。元々お礼として、200エキュールほど渡すつもりだったのだ。その名目に祝賀会費が追加されるだけだ。つまり実質的には、商会のおごりなのである。

「気にしてないよ。それより、お父さん(商会長)に会わせてくれないかな」

僕がそう言うと、何故かミレーヌが動揺し始めた。口では「でも……それはまだ早いと……思う」などと、意味不明な事を呟いている。ハッキリ言って挙動不審だ。何かあったのだろうか？

「手形について、お願いしておきたい事が有るから」

取りあえず要件を言ってみた。何か勘違いしているみたいだし。ミレー又は一瞬無表情になると、その後不機嫌な表情を経由して元の表情に戻った。

(何か悪い事言ったかな?)

僕は不思議に思ったが、何となく聞くのが怖かったので流す事にした。

僕はミレー又にも、アポを取ってもらおうようにお願いした。今回は一商人として会う訳だから、キツチリ手順を踏まなければいけない。

部屋を出る時に「コイツ何も覚えてない。誤魔化す必要無かった」と、口にしていった。(ミレー又。思いつきり聞こえてるよ・・・)

結果は、すぐに会ってくれる事になった。

ミレー又にも案内され、商会長の執務室に通された。商会令嬢として、完璧なたち振る舞いだ。(ただし、漏れ出る超不機嫌オーラが無ければ)

そのまま執務室に通される。僕は入室の挨拶をし、次いで時間を割いてくれた事に礼を言おうと口を開いた。しかし、先に商会長に怒鳴られた。

「娘はやらんぞー!!」

「はあ?」

僕は思わず間抜けな声を上げてしまった。

「父さん！！エドは昨日の事、覚えていないって言ったでしょう」

「だが！！」

「父さん」

ミレーヌの声に、何か冷たい物が混じった。ハッキリ言って怖い。

「わ 分かった」

商会長は、しびしび頷いた。

（昨日、本当に何が有ったんだ？）

暫くして場が落ち着いて来たので、僕は要件を言う事にした。

「現金の受け取りについて、お願いが有ります」

僕の言葉に、商会長は一瞬で商人の顔になった。先程まで惚けたオジサンだったのが、とても信じられない。

「何だ？」

「400エキユーの手形を7枚。現金で200エキユー。そして、残りは手数料・祝賀会費・命を助けてもらった事と、その後お世話になったお礼として商会にお渡しします」

「良いのか？」

商會長に確認されたが、僕は頷いて返します。

「その代わり、今暫くここに置いてもらえないでしょうか？今は、行くあてがありませんので……」

商會長は、少し考えた後了承した。僕は礼を言ってから退室した。

僕はミレーヌに一般常識と文字を、早急に教えてもらえるようお願いした。この二つの欠如は、普通に生活するにも地球に帰る手段探すのにも大きな足かせになる。

ミレーヌは僕の為に、多くの時間を割いてくれた。

僕にとっては有りがたい話だが、このままでは恩ばかりが増え返す事が出来なくなってしまう。一時的に金銭を渡すのではなく、恒常的に儲けを見込める物を贈りたい。

そこで僕は、商会と取扱物資と流通ルートを分析してみた。

主に取り扱っているのは、平民用の食料・衣類等の生活必需品。少しだが、貴族用の高級品も取り扱っていた。取引額は、通常20〜50エキュー貴族用の高級品でも100〜350エキュー程度。活動範囲は、ラグドリアン湖北西部のモンモランシ領内が中心だ。

正直に言って難しい。この手の商品は、新しい市場の開拓は不可

能に近い。また、他の市場に手を出せば多くの敵を作る事になる。取扱商品を増やすのも、同じ理由から避けた方が無難だ。

そして何気なく地図を見てみると、気になる物が有った。魔の森と記された広大な森だ。

僕は気になってミレーヌに聞いてみた。幻獣・魔獣・亜人が多く住んでいて、まともな商人はまず近づかないそうだ。危険だし護衛を雇うと、商売にならないからだ。近づくのは、余程の命知らずか暴利目的の商人の位だそうだ。

(もしこの状況に、何らかの手が打てれば儲けを独占できる)

そう考えた僕は、何か手が無いか調べる事にした。

残念ながら調べれば調べるほど、現実的でない事が分かった。危険だけでなく下手に出入りし、守備隊に怪しいと思われるら牢獄行きだ。かと言って、守備隊に見逃してもらつた為には裏金を積むのは損を大きくするだけだ。

(何かお金以外で、守備隊に見逃してもらえれば良いのだが……)

その時、閃く物が有った。

守備隊の上層部は貴族だ。貴族が欲しがるのは、名誉であり功績だ。なら貴族に渡すのが、手柄であり功績ならどうだろうか？

僕の中で、出来ると言う確信が出来上がっていた。

早速ミレーヌの頼んで、商會長にこの計画を話す事にした。

魔の森近辺で商売するには、二つの大きなリスクが有る。

- 1．亜人に襲われる危険が有る。
- 2．守備隊に捕まる可能性が有る。

これらのリスクを、軽減もしくは解消するのが僕のアイディアだ。

僕は地図を取り出すと、魔の森の東に有る砦を指さす。

「魔の森とモンモランシ領の間^{トッパ}の領地には、王領なので領主が存在しません。そこで、ここ^{トッパ}の頭を味方につけます」

ミレーヌと商會長は、不可能だと目で言って来るがここは無視して続ける。次に、砦のすぐ東に有る村を指す。

「この村を中継地とし、王領内の他の村と取引します。外から取引するのも、この村に限定します」

本来なら守備隊は、避けるべき相手だ。それなのに、守備隊の目と鼻の先で取引する？正気とは思えない。二人の目に、冷やかな物が混じる。しかしそれも、僕の次の一言で変わる。

「王領内の税収は、如何なっているんでしょうか？」

二人は、突然の話題変換について行けずキョトンとする。

「王領内の品を、ちょっと安めでも適正価格の範囲内で定期的に買

「う商会有れば、ここの頭は協力したくなると思いませんか？」

僕の言い分を理解したんか、商会長が思わず立ち上がる。ミレー
又は理解できず、父の変化に驚くだけだった。僕の計画は要約する
と、守備隊を商会の護衛として利用すると言っ事だ。

「つまり商会には、護衛付きの旨い商売。領民には、安定した収入
国には、税収のアップ。皆の頭には、税収アップの功績。誰も損し
ないと思いませんか？護衛は巡回のついでに出来ますし。聞くこ
ろによると、平民の守備隊員は地元出身の者が多いとか。商会に、
恩義を感じてくれるかもしれませぬ」

僕は、営業モードで畳みかけた。

商会長は黙って考え込んでいる。リスクと儲けにを、天秤にかけ
ているのだろう。ミレー又は呆然としながら僕を見ていた。

暫くして、商会長は黙って右手を差し出す。僕は迷わず握手した。
そこで何かに気付いたように、商会長の動きが止まった。

「君の取り分は？」

何故か視線が、僕とミレー又を往復している。娘をよこせ、とで
も言われると思ったのだろうか？ここは冗談を言っ、場を和ませ
るべきか？

「では、ミレー又……」

僕がそう言った瞬間、商会長は顔を引き攣らせた。そしてミレー
又は、顔どころか手まで真っ赤になる。

「……の下で暫く働かせてください」

「「はあ？」」

「知識はある程度得られました。今度はそれを、経験として自分の物にしたいのです」

「分かった。許可しよう」

商会長が何故か、ニヤニヤしながら了承の返事をした。要件は終わったので、部屋を辞そうとした時突然襟首を掴まれた。そこには、フラットな表情のミレーヌが……。

(あっ……マス)

「バカアアー……!!」

商会にミレーヌの叫び声と、商会長の笑い声が響いた。

そこから展開が早かった。

小さな商会の利点であるネットワークの軽さを武器にして、モンモランシ伯に紹介状を書いてもらい、砦の頭^{トランプ}に話を付けた。足りない人員を揃え馬車と馬を購入し、あっという間に軌道に乗せてしまった。

活動開始から、わずか半年の早業であった。

何故こんなに早く軌道に乗せられたのだろうか？先ず第一に、モンモランシ家の対応の速かった事と後押しが上げられる。第二に、王領の村人達が非常に協力的だった事だ。これは中継地になる村の村長が、他の村に口利きしてくれたからだ。

村人たちは良い、しかしモンモランシ伯の対応の速さと後押しまでしてくれたのが気になった。僕はミレーヌにその理由を尋ねてみた。

すると出て来たのは、指輪とオルゴールだった。

それを少し見ただけで、理由は分かった。この件に関しては、もう口にしない事にした。これが表に出れば、モンモランシ伯の顔を潰しかねない。協力的な貴族を、態々敵にする事は無い。

それから暫くして、私生活面に大きな問題が出て来た。

エドモンドとミレーヌの関係だ。

エドモンドは最近になって漸く、商会の仕事を一人でこなせる様になって来た。同時にミレーヌから教わることも無くなり、二人でいる時間が極端に減った。エドモンドは寂しさも感じたが、それ以上ミレーヌに迷惑をかけずに済む事が嬉しかった。

しかしミレーヌにとっては、そうではなかった。

ミレーヌにとって、エドモンドは最初「不思議な人」だった。次

に震えてる彼を見て、「守ってあげる人」になった。

そして祝賀会の日、ミレー又はお酒が入り前後不覚になっていた。その時、お金持ちになったエドモンドに群がる、商会に勤める女達が目に入った。それが面白くなかったのか、周りの女達を押しつけエドモンドが自分の男であると宣言した。そして、自分の両親の目の前でエドモンドを押し倒しキスをしたのだ。次の日、二日酔いの頭でその話を聞き愕然とした。しかも、そのせいで商会の男達に不興を買い祝賀会費はエドモンド持ちになってしまったのだ。（逆にその程度で済んで良かった）もしもエドモンドの記憶が有れば、自殺を考えたかもしれない。

酒が入っていたとはいえ、信じられない大失態である。

それから暫くして、エドモンドが魔の森近くの王領で商売をしようと言い出した。しかも、成功すれば継続的に儲かる凄いい内容だ。これを機に、エドモンドはミレー又の部下になった。また、一緒に居られる時間が長くなった。

そしてエドモンドは順調に仕事を覚えて行き、とうとう一人で仕事をこなせる様になった。最初は、エドモンド一人で仕事が出来るようになり、嬉しく感じた。だが、二人の時間が日に日に減って行き気が付いたら、全く合わない日も出て来た。

そして気付いた。

エドモンドにとって、自分は命の恩人であり先生である事以外の関係は無いのだ。そしてその恩も、商会への貢献という形で十分過ぎるほど返してもらった。ちょっとした秘密は共有しているが、それもエドモンドを繋ぎ止めておくには弱過ぎる。

そして極めつけは、たまたま聞いたエドモンドの独り言だった。

「そろそろ、地球に帰る為の情報収集し始めないと……」

ミレーヌは焦った。

だからデートに誘った。身体を押し付けて、誘惑もした。終いは、酒を飲ませそのまま既成事実を作ろうとした。

エドモンドも、木の股から生まれた訳じゃない。ミレーヌの気持ちには、前から気付いていた。(気付いたのは、馬鹿と言われて思いつき殴られた時だが)

そして二人は、お互いの今後の為に腹に溜まったものを吐き出す事にした。会場にしたのは、近くに人の部屋が無いミレーヌの部屋だ。二人は、お互いの思いの丈のぶつけ合いを開始する。

「好きだから一緒になるの」

「好きだけど一緒になれない」

「もう一度家族や友人に会いたい」

「会えばいいでしょ」

「向こうに恋人でもいるの？」

「そんな者はいない」

「帰る方法を見つけない」

「見つければいいでしょ」

「私の事欲しく無いの？抱きたくないの？」

「欲しいし、抱きたいにきまつてる」

「僕は地球に戻りたいんだ」

「私も一緒に連れて行ってね」

もう既にミレーヌが、エドモンドを往なすだけになっていた。そう、最初の「好きだけど一緒になれない」の「好きだ」の部分でミレーヌの腹は据わったのだ。こう言う時、良い女は強いものである。

・・・

「運良く地球に行けても、戻ってこれないかも知れないんだぞ」

「なら地球でハルケギニアに渡る方法、探せば良いじゃない」

「ミレーヌの事、家族にどう説明するんだよ」

「正直に言えば」

時間は、既に1時間経っていた。エドモンドは疲れがピークに達していたが、一方でミレーヌはまだまだ余裕だった。

最後の方は、エドモンドが似たような言葉を繰り返すばかりだったが、ようやく負けを認めた。情けない限りである。

疲れた。でも・・・、心はスッキリした。そんな事を考えながら、ミレーヌの部屋を辞そうと立ち上がりドアへ向かった。

しかし、その動きを止められた。ミレーヌに抱きつかれたのだ。

「行っちゃヤダ」

(可愛い!!!……って、あれ?)

少し引つ張られたと思っただら、いつの間にかベットの上がだった。ミレーヌに押し倒された。

「ちょっと待って……、僕は……その、初めてで……」

「安心なさい。私も初めてだから」

尚もエドモンドは反論しようとしたが、唇で口をふさがれてしまった。

……

次の日の朝、エドモンドはミレーヌのベッドで目を覚ました。隣で裸のミレーヌが、寝息をたてている。

「ぐすん……食われてしまった」

エドモンドの口から、真底情けない声が漏れた。

既成事実を理由に、結婚が決まった。商会長は最後まで反対していたが、会長夫人が抑え込んだ。後で聞いた話によると、ミレーヌを焚きつけたのは会長夫人だったそうだ。会長夫人としても、エドモンドは出自が不明だがそれを補って余りある商才が有ると思っていた。しかも、両想いなら迷う事は無いと、むしろ「こんな優良物

件逃がすな」と語っていたらしい。

これを後で聞いたエドモンドは、呆然としながら「女って、怖い」と呟いた。

多少は嫉妬の声があったが、エドモンドとミレーヌの結婚は周りから祝福された。商売の方も、順調に利益を上げていた。そして、ミレーヌの懐妊。二人の人生は、幸せに満ち溢れていた。

「ねえ……エド。子供の名前考えている？」

「男の子なら、ローリン（湖の土地）で名前を考えている。女の子の場合は、ミレーヌに決めてもらおうかな……」

「えっ！！私が決めるの？……そんな事言って、本当は考えてあるんでしょっ？」

「えっ……と、その……なんだ。僕ばかりが決めてしまつては不公平だろう」

エドモンドは女の子の名前で、真つ先に思いついた名前を否定していた。それは、悲恋の物語のヒロインの名前と同じだったからだ。

「やっぱり考えてあるのね。ねえ、教えてよ」

「え……、あの……その……ウン・ディーネって名前……で」「ウンディーネじゃ、愛娘に失恋しろって言ってるみたいじゃないか」

「なんだ、やっぱり考えてあるんじゃないの」（ディーネが良い名前かも）

多少の行き違いがあったが、二人にとって幸せな会話だった。何事も無ければ、この行き違いが後日笑い話になっていた。だが、そうなる事は無かった。

その日の午後、商会に客が来た。ロマリアの神官だった。

僕も次期商会長として、その場に居る事となった。

神官の前口上は長ったらしく、かなりイライラしたが我慢した。

前口上も長かったが、本題も回りくどく頭にくるものだった。しかも要約すると、寄付をして欲しいと言う物だった。今の商会なら100〜200エキュ位なら余裕で出す事が出来る。ちょっと無理すれば、500エキュまでなら出せるかな……。などと考えていた。

「分かりました。当商会では、100エキュほど寄付させていただけます」

商会長の言葉に、神官は大げさに反応した。そして教会の財政が苦しいと、遠回しに言ってくる。

（嫌味ったらしい）

僕はこの時、嫌悪感を隠すのに必死だった。

「それでは、150エキュでどうですか？」

神官は、先程と同じ反応をした。商会長は寄付金を少しずつ釣り上げて行くが、神官は全く納得しなかった。最終的に、400エキユーまで釣り上げても納得しなかった。

「では、おいくらでしたらよろしいのですかな？」

商会長が堪らず神官に訪ねた。神官は嬉しそうに頷くと、金額を口にした。

「一万エキユー」

「「なっ！！」」

僕と商会長は、あまりの金額に固まってしまった。商会を丸ごと売り払っても、そんな金額にはならない。エドモンドの財産3000エキユーを足せば、何とか手の届く金額である。

「おや、まさか教会に寄付できないと仰るのですか？」

「寄付はします。ですが、とても払える金額ではありません。払える金額でしたら払います」

商会長は、堪らず金額の撤回を求めた。が、神官は困った様に首を横に振った。

「ご自分達だけ儲けて、困っている人達に救いの手を差し伸べないのは間違いですな。二週間後にまた来ますので、それまでに一万エキユー用意しておいてください」

そう言って神官は帰った。

商会長はすぐに動き出した。神官の素性を調べ、モンモランシ伯にも助けを求めた。

そして分かったのは、その神官の過去の問題行動の数々だった。何故そんな奴がトリスティンに居るのかと言うと、ガリアで事件を起こしたからだった。

その神官はガリア観光中に、懐が寂しくなった為同じ観光客で身なりが良い者を捕まえ、金をせびった。しかし観光客は、ゲルマニアの高位貴族でこれを拒否。頭にきた神官は、貴族を異端審問にかけ殺してしまっただ。当然、審問認可状は無い。ロマリア国内なら誤魔化せたが、ガリアでは誤魔化し切れなかった。通常なら神官職を没収の上、ゲルマニアに引き渡されるのだが、この神官は裏金を積んでこれを回避した。そして身を隠す為に、トリスティンに逃げて来たのだ。

既にその神官はトリスティンで、数件の恐喝傷害事件を起こしていた。これをネタにモンモランシ伯は、ロマリアに抗議文を作成し送った。後に同様の抗議文を、王家と連名で送ってくれりと約束してくれた。

流石に王家からの抗議文は、ロマリアと言えども無視できないだろう。しかしロマリアが対応するまで、どうしても時間がかかる。念の為ミレーヌには、指輪とオルゴールを持って身を隠してもらったことになった。

神官が宣言した期日になった。神官に対応するのは、僕と商会長夫妻だ。

「一万エキューは準備できましたかな？」

意気揚々とやって来た神官は、一人では無かった。傭兵風の男が、二人護衛にしていた。しかも、腰に杖を下げている。……メ
イジだ。

（念の為、銃「ルトバイソン」を持ってきて正解か？）

そう思いながら、懐に隠した弾が入った銃「ルトバイソン」を確認する。

「悪いが無理な物は無理だ。とても用意できる金額では無い」

商館長が答える。

「そうですねか残念です」

ここで異端審問をすると宣言すると言えば、審問認可状を出せと言えば良い。この神官は引くはずだ。しかし神官の態度は、驚くべき物だった。手で護衛二人に合図すると、護衛の一人がエア・ニードルを唱えたのだ。

エア・ニードルは、商会長に命中する。そして商会長は動かなくなつた。

「なっ！！義父さん！！」「あなた！！」

「君たちが悪いんですよ、王家の署名入りの抗議文など出そうとするから」

僕は神官を睨み付ける。義母さんは、必死に義父さんを揺すっている。

「だから君達には、神官に危害を加えた異端として死んでもらいます。君達の財産は、私が有効利用してあげますよ」

(・・・殺される)

状況は絶望的だ。相手はメイジ二人で、逃げ道もふさがれている。だが、死ねないと言う想いが僕を突き動かした。懐から銃コルトパイソンを取り出す。

「死んでたまるか!!」

そう叫びながら、六発の弾丸を全て放った。一人に付き、二発の弾丸が飛んでいく。エア・ニードルを放ったメイジは、胸に命中した。神官は、頭に命中した。二人とも即死だ。

最後のメイジには、右腕と右足に命中した。生きていたが、止めを刺す気にはなれなかった。それが、いけなかったのだらう。最後のメイジが、ファイヤー・ボールを発動した。

商会から突如火の手が上がり、二階に居に人間全員が逃げ遅れ死亡したと一時期話題になった。被害者は、商会長とその家族全員。そしてロマリアの神官と、その護衛二人だと。

調査に来たロマリアの神官が、証拠となりそうな物と金目の物を全部持ち去った。これを見ていた住民は、ロマリアの神官を陰でハイエナと罵っていた。

ミレーヌは王領に隠れていた。エドが始めた商売の、中継地にしていた村だ。村長の協力で、ミレーヌは不自由なく生活出来ていた。村長は出産を控えたミレーヌに、両親とエドモンドの死を知らせなかった。そして「神官の対応に忙しくエドモンドとご両親は来れない」と、ミレーヌに言っておいた。

時が過ぎ、ミレーヌは無事女の子を出産した。体力が少し回復し「エド達と相談して、早く名前決めないと」と、笑顔を見せるミレーヌに村長は家族の死を告げた。

それを聞いたミレーヌの憔悴は凄まじく、丸一日何も口にできなかった。

そんなミレーヌを救ったのが、産まれたばかりの赤ん坊だった。

ミレーヌの目に入ったのは、赤ん坊の髪の色だった。エドモンドと同じ金髪だ。そう言えば、自分も金髪だ。目の色も確かめたが碧眼だった。

（私たち親子は、三人とも金髪碧眼か・・・）

それから赤ん坊に、エドモンドの面影を見つける度に力がわいてきた。

（私は一人じゃない。この子が居るんだ）

そしてエドモンドが言っていた、女の子だった場合の名前を思い出した。

「貴方の名前は、ディーネよ」

赤ん坊を立派に育てると、亡き両親と最愛の夫に誓った。

ディーネはすくすくと成長した。子守歌代わりに、エドモンドが教えてくれたイギリス民謡を歌った。歌詞がハルケギニアの言葉では無かったので、人前では絶対に歌わなかった。しかし甘かった。ディーネが言葉より早く、民謡を覚えてしまったのだ。周りは言葉も碌に話せない子供の歌と、気にも留めなかったが正直生きた心地がしなかった。ディーネに民謡は秘密の歌だから、家族以外に聞かれてはダメと教えた。

ディーネにはロマリアの神官に、極力近づかない様に教育した。あの神官の様に、露骨なのは少ないと思うが警戒するに越した事は無い。しかし、少しやり過ぎたようだ。物凄いロマリア嫌いになってしまった。(まあいっか)

ディーネが3歳4カ月になった。そんなある晩、突然村人全員に集合が掛った。

村長の話では西の砦で、幻獣・魔獣と砦の貴族達が戦闘中らしい。「巫人が参戦すると、村が巻き込まれる可能性があるから一時非難する」と、村長は宣言した。

結果的に避難は正解だった。亜人達は村に侵入し、荒らしまわった。この時、村に居たらと思うとぞつとする。

しかし、安心するのは早かった。朝になり亜人が居なくなったので、村に戻る事になったのだ。万が一を考え村の若い者に、亜人が残っていないか偵察してもらった。亜人は居なかったが、既に木が生え始めていた。

そこで村長は貴重品だけ持ちだし、村を捨てることを決断した。

「反対する者もいたが、村長が現状を説くとみんな納得した。」

次に問題になったのは、何処へ行くかだ。行先候補は東のモンモランシ領か、北のドリュアス領だ。どちらに行くかは、個人の判断に任せると言うことになった。

ミレーヌはモンモランシ領に、行く訳には行かなかった。もし自分を知っている人間に出会えば、あの火事で生き残りが居たとされてしまう。ロマリアは神官以外の人間に、悪者になってもらいたいと考えているはずなので、ミレーヌが生きていれば犯人として捕まえ処刑するだろう。

そうなるとミレーヌの行先は、ドリュアス領以外無いのである。

先ず問題になるのが、目的地までの行程だ。ドリュアス領とモンモランシ領では、移動時間は子供や年寄りですく4日（歩いて2日、馬なら2時間程度）と同じだ。ドリュアス領に行く場合は、亜人に襲われるリスクが有るが水や果物等の食料の入手が容易で、荷物の量を最低限に抑えられる。一方でモンモランシ領へ行く場合は、道中に泉は無いし果物等の食料を入手出来ない。自然と必要な荷物の

量も増える為、体力の無い者はたどり着けない可能性が高い。

二つの領の状況も考慮しなければならぬ。ドリユアス領は現状人手不足で、職を持てる可能性が十分に有る。一方でモンモランシ領は、これと言った話が無い。恐らく流民では、職に就くのは難しいだろう。

元々魔の森が近い王領など、抜け出せるなら早々に抜け出している。浮浪者になるリスクと、この地に残るリスクを比べ、この地に残った人間たちなのである。加えて今の現状は、ここに居る殆どの者が無一文状態だ。結果殆どの者達が、ドリユアス領へ向かうと口にしていた。

結局94人中86人が、ドリユアス領に向かう選択をした。

村長は足の速い者を見つくりつて、ドリユアス領の関所まで現状を知らせに行くよう指示した。これで上手く行けば、ドリユアス領から助けが来てくれる。

最初の内は、亜人に襲われる心配はあまり無かった。実際問題、道沿いに居れば亜人は滅多に襲ってこないのだ。危険なのは果物を取りに魔の森に入る時と、夜間に火を焚いた時位だ。

初日は、亜人に襲われる事なく終わった。

2日目は森の中で、昼に小型の亜人であるゴブリンに出くわした。数は3体。恐らく斥候の類だろう。そうなると早々に、この場を離れなければならぬ。ゴブリンの本隊に出くわすものなら、全滅は決定した様なものだ。夜通し歩いてでも、遭遇地点から距離を取らなければならない。

3日目は午前中の内に、ゴブリンの斥候に森の中で3回も出くわした。出くわす度に1〜3人減った。街道に居る時は、森から顔を出すだけなので襲ってはこなかった。もしかしたら、本隊もかなり近いのかもしれない。

そして昼過ぎ頃、終にゴブリンの本隊と出くわしてしまった。ゴブリンの群れは、少なく見積もっても30匹はいた。ゴブリン達が現れたのは、後方だったので全員関所に向けて走った。しかし、ゴブリン達の方が足が速く距離は、あつという間に無くなってしまった。そして足の遅い者から順番に、ゴブリンの凶刃にかかって逝く。

ミレー又は最初はディーネに併走していたが、追いつかれると判断するとディーネを抱きかかえ走り出した。少しだけ距離を稼ぐ事が出来たが、体力は有限だ。足の動きがすぐに鈍くなる。気力だけで、身体を支え少しでも早く足を動かそうと努力する。

その時、前方に空を飛ぶ物が3つ見えた。

(あれは・・・グリフォン。人が乗ってる。騎獣だ!!ドリュアス領から助けが来たんだ!!)

その刹那、気を抜いてしまったのがいけなかった。ミレー又は、足をもつれさせ転んでしまった。なんとかディーネをかばい、左肩で地面に着地する。激痛が走るが、今はそれどころではない。視界の端に、ゴブリンが追いついて来ているのが見えたのだ。

(この子だけは、死なせない)

ミレー又はディーネに覆いかぶさった。自分の体を、ディーネの

盾にする心算だ。

(もう救援は目の前だ。それまで、絶対ディーネだけは傷つけさせない)

振り下ろされるゴブリンの凶刃。それでも、ミレーヌのディーネを抱く力は弱まる事は無い。そこに数匹のゴブリンが加わる。次々に振り上げ振り下ろされる刃。その度に、赤い飛沫が舞った。

「お母さん!？」

ディーネの体が、赤くて生温かい物で濡れて行く。

「お母さん!!お母さん!!」

ディーネが必死に叫ぶが、ミレーヌに答える余裕はない。

次の瞬間、周りのゴブリンが何かに吹き飛ばされた。そして、三つの何かが場を通り抜けた。その瞬間、空から影が舞い降りた。それは、剣を持った三人の人間だった。ゴブリンは、次々に剣士達の手で斬り倒されて逝く。

やがて悲鳴が収まり、その場が静かになった。

「護衛と種を処理する班に別れる!街道を吞まれる訳にはいかないぞ!!」

「お母さん!!」

「生きている子供が居るのか!？」

男の人が来て、お母さんを横に移し私を助け起こしてくれました。

「お母さん!!お母さん!!」

「……ああ」

「生きてる!!《治癒》だ!!」

グリフォンに乗っていた一人が、降りてこちらに駆け寄ってきました。

「……の子を……お……願い……し……」

「喋るな!!早く!!」

グリフォンから降りた人が、呪文を唱えながら最後の距離を詰めお母さんに触った瞬間、呪文を止めてしまいました。そして目を閉じ、首を僅かに横に振りました。

「くそう!!」

私を助け起こした人が、悔しそうに地面を殴りました。

今のお母さんを見て何となく理解した。

お母さんはもう動かない。お母さんはもう喋ってくれない。お母さんはもう抱きしめてくれない。お母さんはもう笑ってくれない。お母さんはもう……。

「いやああーーーーー!!」

私は気付いたら、お母さんに抱きつき泣いた。

やがて泣き疲れて、意識を失った。

次に目を覚ました時、私は馬車の中に居た。

「目が覚めたか？」

私に話しかけて来たのは、助け起こしてくれた人でした。

「取りあえず、コレ持つてろ」

渡された物は、お母さんが大事にしていた指輪とオルゴールが入った布袋でした。

「その……なんだ。形見だからな。失くすなよ」

私は布袋を抱きしめ、また泣いてしまいました。

「まあ……、今は泣けるだけ泣いとけ」

その人はそう言って、私の頭を撫でてくれました。

あれから、一週間と少し経っていました。私達は一カ所に集めら

れ、テントに住まわされました。あまり美味しくありませんが、「飯を貰えるだけで幸せです。何も考えずフラフラと歩いていると、話し声が聞こえました。」

「61人が、流民の対処をシルフィア様はどうするんだろう」

「まだ生き残りが居ないか搜索中だ。実際に昨日2人発見されて、こちらに護送中だ。」

「辛い人手が欲しい所は、いくらでもある」

「しかし再教育しないと、ドリユアス領では足を引っ張るだけだぞ」

どうやら私達をどうするか、話しているようです。その時、黒髪の男の子が目に入りました。私はその男の子に、何か違和感を感じ後を付けてみました。

(あれ?こつちに来たはずなのに見失ってしまいました)

キョロキョロしていると、不意に声をかけられました。

「こんな所で何しているの?」

声をかけて来たのは、黒髪の女性でした。

「男の子、いたから・・・」

嘘を吐く理由が無いので、正直に答えます。

「黒髪の子?」

「……うん」

「それならギルバートね。私はギルバートのお母さんでシルフィア。貴方のお名前は？」

「ディーネ」

「お父さんとお母さんは？」

「もういない」

「……兄弟はいる？」

私は首を横に振る。

「親しい大人の人は？」

私はまた首を横に振る。するとシルフィアさんは、近くに居た男の人に「他に孤児が居ないか調べなさい」と、命令しました。

「今からギルバートの所に案内してあげる」

手を引かれて行った先に居たのは、先程の男の子でした。

「ギルバート。しばらくこの子と遊んでなさい」

男の子は頷くと私の前に来ました。

「遊んであげる」

男の子がそう言って来ました。しかしどう見ても、私の方が年上です。

「私はディーネよ。お姉さんが遊んであげるの」

私は胸を張って言い切りました。

「えっ……。女の子？」

私はあんまりな発言に、ギルバートを睨みつけました。一方でギルバートは、苦笑いをしながら私から目を逸らしました。

私の今の格好は、赤黒く変色したボロボロの服と埃まみれのボサボサの髪です。おまけに、顔は泥で汚れていました。

（たしかに酷い恰好をしているけど、男の子に間違うのはあんまりだと思っ）

ギルバートは誤魔化す様に、私の手を取って走り出しました。

私は何故か、それが嬉しかった。

（今だけは、この手を引かせてあげる。でも次からは私が引く。だって、私の方がお姉さんだから……）

外伝一話 水精靈に憧れて（後書き）

やっちゃった。

初の外伝をねじ込みました。

でも後悔はしていない。

感想をお待ちしております。

第十四話 姉の初めての魔法

こんにちは。ギルバートです。ディーネとの関係を、新たに作り直す事が出来ました。理解者が増えてくれるのは、とても嬉しいです。

隣の領の次期当主は、残念なことになりましたが代わりに妾の子供である、ヴァレール・ド・クールズが頑張ってくれるようです。

ヴァレールはドリュアス領を手本とし、次々に領地改革案を実行していきました。もちろん母上は、ドリュアス領改革時の経験からアドバイスをしました。その見返りとして、ドリュアス領を手本とした事は黙っててもらいました。目立つ事は、高等法院に対する挑発行為になってしまうからです。

結果、クールズ領は発展しました。また魔の森警戒の抜本的な見直しを行い、効率化と安全性強化を行いました。

この甲斐あってか、ヴァレールは敏腕（次期）領主としてトリステイン王国では、名が知れ渡ることとなりました。

しかし、これを面白くないと思う者たちが居ました。他の貴族や高等法院の連中です。

皮肉な事に、ヴァレールに僻みと嫉妬が集中した為、ドリュアス家はその矛先から外れる事になったのです。ドリュアス家への嫌がらせや、妨害工作は一気に減りました。もちろん、油断は出来ませんが……。

そうこうしている内に、私は4歳になりました。今月はウィン
の月（12月）で、もうすぐディーネの5歳の誕生日です。

ディーネは早く魔法を使いたくて、父上と母上に杖をねだつて
いました。しかし答えは「大きくなるまで待て」でした。それでも、
粘り強く（しつこく）お願いすると、「5歳より訓練のみ許可する」
と、言わせたのです。

正直に言うと、無茶苦茶羨ましいです。

私も理詰めにして父上と母上を説得したのですが、残念ながら「
5歳になれば同じように訓練のみ許可する」と言われました。尚も
食らい下がりましたが、最終的に母上が切れて「鍛え直す」の一
言と共にとしごかれました。

そして杖との契約も済み、今日はディーネの初魔法授業です。講
師は母上自ら努めます。

私は後学の為、見学させていただきました。

授業内容はまず《念力》で、小石を浮かせる事から始まりました。
まず最初に、母上がお手本を見せます。小石は浮き上がり、宙を
ゆっくり移動し元の位置に落ちました。

続いてディーネの初挑戦です。呪文を唱え、杖を振りましたが小
石はびくともしません。

そこで母上は、ディーネを後ろから抱き締めるようにし自分の杖（軍杖）を握らせ、その上からディーネの手ごと杖を握ります。

「いい？落ち着いて目を閉じて、力の流れを感じるのよ」

そうやって《念力》を、発動します。小石は先ほどと同じ動きをし、同じ場所に落ちます。

「力の流れは感じられた？」

「はい。お母様」

「なら今度は目を開けて、力の流れを感じて」

母上はそのまま、もう一度《念力》を発動します。

「今度も感じられた？」

「はい」

ディーネの返事を確認すると、母上は自分の杖を回収しディーネから離れる。

「じゃあもう一回、一人でやってみましょうか」

「はい」

再度一人で挑戦しますが、なかなか成功させる事が出来ません。母上が「イメージが大切だ」と、言っています。それだけでは駄目

なのでしよう。

「ディーネちゃん。先程感じた力を、どう使って小石を動かすか考えてみて。それがそのまま、明確なイメージにつながるから」

母上の言葉えお少し考えてから、もう一度《念力》を唱えます。

今度は小石が宙に浮きました。しかしビックリした反動か、小石すぐに落っこちてしまいます。

「成功よ。今度は落ち着いて、宙で動かして御覧なさい」

「はい！！」

ディーネは元気良く返事すると、また《念力》を使い今度はユックリと宙を移動させ、元の場所に着地させました。

「あら、上手いじゃないの。最初はコモンマジックを、重点的に教えるからその心算でね」

「はい！！」

「それからコモンマジックを使うにも、自分の属性を把握しているかないかで、成功率が変わるから。今から、属性だけ確認しちゃうでしょう」

「はい」

母上はディーネが頷くのを確認し、説明を続けました。

「では、先ず火の《発火》から……」

母上がまず手本を見せるようです。母上の軍杖の先に、ポツと蠟燭の様に火が灯りました。

「ではやってみなさい」

母上は魔法を解除しながら、ディーネに言いました。

「はい」

母上と同じように、しますが火は一向に灯りませんでした。

「力の流れを感じられた？」

「はい。でも何というか……力がうまくながれない？」

「属性は火ではない様ね。続いて水の《凝縮》ね」

先程同様母上は、手本を見せました。軍杖の先に、バケツ1杯分くらいの水が現れます。それをそのまま杖を振って、投げ捨てました。飛んでった先で、バシヤツと盛大な音が鳴ります。

「ではやってみなさい」

「はい」

今度は、杖の先に水がコップ2〜3杯分発生しました。成功です。そしてそのまま魔法を、解除しました。水は重力に引かれて、地面に落ち跳ます。その所為で、少し服にかかってしまったようです。

「うー」

「もう……ドジね。次から気をつけようね。続いて風の《風》
《ウインド》ね」

母上が《風》を唱えると、母上の方から風が吹いてきました。

「はい。やってみなさい」

「はい」

ほんの少しですが、空気が流れました。

「あら、水ほどじゃないけど風もいけるみたいね。じゃあ、最後に
土の《鍊金》ね」

母上が《鍊金》を唱えると、両の拳大の泥団子が足元に出来上が
りました。

「最後。やってみなさい」

しかし火と同じで、何も起こりませんでした。

「力の流れは？」

「火と同じ。でも火より流れそうな気がする」

「なるほど。なるほど。ディーネちゃんは、水メイジねサブで風が
使えるのね」

ディーネの属性基準は、水＞風＞土＞火だ。

母上はとても嬉しそうです。ディーネがモンモランシ家の系譜だとすると、水メイジなのは妥当といえます。しかしサブとは言え風が使えた事に、母上はかなり喜んでいるようです。

(ディーネは母上が、どうしてこんなに嬉しそうなのか気付いていないのかな?)

そこには母上につられて、一緒に喜んでるディーネの姿がありました。

(気付いてないな。これから風系統の、地獄の特訓が待ってるのに……)

私は心の中で、ディーネに合掌しておきました。

それから母上とディーネは、やはり風系統の(地獄の)特訓をしていました。(水系統ほつたらかしで)この後、室内でコモンマジックの練習があるんだよな……。

母上は常時上機嫌でしたが、ディーネは目で私に助けを求めてきます。

(すみません。無理です。諦めてください……あつ、ディーネが物理的に空飛んだ)

恐ろしい。フライもレビティーションも念力も無しで、人が空飛んでます。どっかの映画で見た、竜巻で空飛んでる牛を思い出しました。

それでも魔法を使っているディーネを、羨ましく感じてしまうのは仕方が無いのかなと感じました。（変われって言われても全力で拒否するけど）

この生活（ディーネの地獄）は、私が5歳になるまでの約10ヶ月間続けられました。

第十四話 姉の初めての魔法（後書き）

少し煮詰まって来たので、もう少しゆっくり更新していこうと思います。

可愛いディーネを少し苛めてみた。こんな私は最低でしょうか？

感想お待ちしております。

第十五話 私の魔法は問題だ！！

こんにちは。ギルバートです。ヴァレール・ド・クルーズが頑張ってくれているので、ドリュアス家は助かっています。

ディーネは相変わらず、母上に鍛えられています。時々助けられるようお願いされますが、返事は全て「ごめんなさい」で返しています。

その時は涙目で睨まれますが、私も死にたくないので全力です。良心の呵責も、関係ありません。ええ、ありませんとも！！・・・ゴメンナサイ。

ヴァレールが敏腕（次期）領主になってから、何事もなく時間が経過していきます。私にとっては、平和な時間は歓迎ですが、裏で何が起きているか分からないので、こういった時間は高等法院（屑貴族）の奴らを片づけてからすごしたいです。

ああつ、忘れていました。ミアが寿退職したのです。相手はマギ商会の若手（カロン 23歳）で、ミアより年上です。確りした人で職場の信頼も厚い男だそうなので、抜けているミアにはちよつど良い人なのかもしれません。

最後の日に送別会が行われましたが、調子に乗って私が如何に変な子供か力説しアンナメイド長に怒られていました。最後まで締まらない人でしたが、幸せになってほしいです。

そして後少しで、私も魔法の訓練が許される歳になります。属性系統は土が良いです。やはり《錬金》は、男のロマンだと思いますから。

・・・ホントはお金を稼ぐのに、一番有利そうだからです。あと、母上の（地獄の）特訓を受けなくて済む！！（ここ重要）ディーネからは「風系統になれ」と、言われていますがノーサンキューです。

本音？は置いておくとして、マギは小さい頃から鍛冶場に入りにしていたり、治工具設計の仕事に就いたり、金属に何かと縁が有る一生を送っていました。その経験を生かせるのは、どう考えても土メイジです。これは間違いなく、今後の資金繰りに大きな影響を与えるでしょう。

そして父上と母上の属性から、私の属性は土か風である可能性が高いです。悲しい事に土と風は、相反する属性なのです。属性が風になれば土属性の《錬金》は、殆ど使えないと言って良いでしょう。それでは、今後非常に困るのです。

私は今後の為に、系統が土属性である事を祈らずにはいられませんでした。

5歳の誕生日に、子供にも使える小さな杖（ワンド）を送ってもらいました。早速翌日より部屋に籠り、杖との契約に挑みます。何をすれば良いか分からなかったのですが、取りあえず肌身離さず杖

を携帯してみました。それだけでは足りない判断し、杖を持って瞑想してみたり杖に語りかけたり（危ない人みたい）してみました。

終いにはマギの知識から契約らしき物を引っ張り出し、杖にキスしてみたり血を付けてみたりいろいろ試してみました。ですが一向に、契約できる気配がありません。結局即席で契約できるわけがないと悟り、杖を握り杖と同調するように意識しながら瞑想をしました。

結局契約の完了（杖との繋がりが意識できる）まで、4日かかりました。ディーネの時は、3日で完了したのに。

さて、運命の日がやってきました。ギャラリーはディーネと母上に、最近一人で歩き回れるようになったアナスタシア。そして偶然休みが取れた父上が、講師を務めてくれます。

まずはディーネの時と同じように、《念力》から始めます。

父上は小石で見本を見せてくれましたが、正直分かりません。力の流れと言うのが、全く実感できないからです。

取りあえず杖の先から力を伸ばし、小石を掴み動かすイメージでやってみます。しかし小石は、ピクリともしません。

父上は私の隣に来ると、自分の杖（軍杖）を握らせ母上と同じように私の手の上から杖を握り、手本を見せてくれます。その時力（魔力か？）の流れを感じる事が出来ました。

次は力（魔力）の流れを意識し、先程と同じイメージで《念力》を使ってみます。小石はゆっくりと浮かび上がり、宙を移動すると

元の位置に着陸しました。今度は完璧に、イメージ通り動きました。成功です。

「ほう。イメージが良いのか？なかなか上手いではないか」

「ありがとうございます」

「では、次は属性の確認だな。自分の属性を把握するのは、メイジにとって大切な事だ。これをしっかりと把握する事で、コモンマジックや系統魔法に必要な力加減を知る事ができる」

「はい」

「では、まず土系統から確認しよう。手本を見せるぞ……《錬金》」

父上の目の前で土が一カ所に集まり、泥人形が形作られます。大きさは私と同じくらいです。

「よし。ではやってみよ」

「はい」

先ほど見た、土が集まり人形を形作るイメージを頭に思い浮かべます。大きさは、私の頭くらいが良いでしょうか？イメージが完全に出来たところで、祈るような気持ちで《錬金》を実行します。

結果は、《錬金》を使った瞬間わかりました。乖離していた、魔力と肉体が魂に同化する感覚……。まるで、水が高きから低きに流れるように自然な力の流れ。

そして目の前に、イメージと寸分違わぬ土人形が居ました。

「ほう。見事なものだ。初めてにしては、良く出来ている。ディテールも、決して甘くは無い。良くやった。ギルバート見事だ」

父上が、感嘆の声を上げ喜び褒めてくれました。そして自分と同じ系統属性だった事に、喜んでくれているようです。

しかしここまで土と相性が良いと、相対する風は絶望的です。

案の定、母上とディーネは表情が完全にフラットになっています。アナスタシアが「すごい！！」と、言って無邪気に喜んでいるのが対照となり怖さ倍増です。ふと気付くとディーネの唇が、先程から同じ動きを繰り返しています。怖いけど、口の動きを読んでいます。

「う・ら・ぎ・り・も・の」

待て！生来の属性に関しては、どうしようもないだろう。父上もこの危機を感知したのか、目でどうする？と聞いてきます。私は同様に目で、スルーしましょうと返します。アイコンタクト完了。しかし父上は、次に風系統を検証する勇気が無かったようで……。

「次は、火の系統だ。手本を見せるぞ。……《発火》」

父上の杖の先に、火が灯ります。

「よし。ではやってみよ」

「はい。父上」

力を可燃ガスの一種とイメージし、杖先に供給そこで空気と混じり火が点く。このイメージで、《発火》を実行します。

土属性と比べると、あまりにも力の流れが悪い。なんとか火が灯るものの、維持するのは恐ろしく大変です。数秒維持しただけで、かなり精神力が持って行かれました。

「一応成功したな」

「はい。でも、きつ過ぎます。先程の火でも数十秒も維持したら、精神力が空になりそうです」

「属性相性は、それほど良くなさそうだな」

「はい」

「では次は、水の系統だ。……《凝縮》」

えっ……。風の系統を最後にするんですか？そう思っていると、父上の杖先にバケツ一杯分の水が現れます。現れた水を杖を振って飛ばし、バシヤツと派手な音をたてました。

「では、やってみよ」

「はい」

空気中の水分を、杖先にかき集めるイメージをします。そしてそのまま《凝縮》を、実行しました。

杖先に、コップ1〜2杯分の水が集まって来ました。土と比べると流石に劣りますが、火より明らかに力の流れが良いです。集まった水を、杖を振り投げ捨てました。

「また成功か」

「はい。火より力の流れがかなり良いです」

そこで父上の動きが止まりました。目でどうしよう?と聞いてきたので、続けるしかありませんと目で返しました。残念ながら、ここで止める事は許されないのです。父上は諦めたように、溜息を吐きました。

「最後に風の系統だ。……《風》ウインド」

父上の方から、風が流れて来ました。

「では、やってみよ」

父上から諦めの感情が伝わってきます。しかしここで成功させれば、今後の扱いが多少マシになるかもしれません。

空気を一つの塊とし、移動・循環させることで風を起こすイメージ。じっくり良くイメージし《風》を、実行しました。

(あれ……?)

驚いた事に、土系統と全く同じ感覚が有りました。私がイメージした通り、空気が循環し風を起こし続けています。私が魔法を解除すると、風もピタリと止みました。

父上もかなり驚き、固まっているようです。本来ならば土と風は相反し、両方得意なメイジなど存在しないハズなのです。

見ると母上とディーネも、目と大きく見開き固まっています。アナスタシアだけが「ぜんぶできたすごい」と、無邪気に喜んでいました。

兎に角。私の属性基準は 土∥風>水>火 です。

そして硬直から回復した父上が、夕食後にドリユアス家緊急家族会議を開くと宣言しました。

夕食を済ませた後、アナスタシアを除く全員が執務室（会議会場）に集まりました。原因が自分だと思つと、申し訳なく思つてしまいます。

議題は何故こうなつたかと、今後この事実を如何に隠していくかです。

「ギルバート。自分の属性について、何か思い当たる事はあるか？」

先ずは本人に聞くのが一番と言わんばかりに、父上が聞いてきます。実は自身を分析してみて、原因にあたりは付けてあります。

「私が一度死んで、二つの魂が融合して舞い戻つて来た話は覚えますか？」

この場にいる、全員が頷きました。

「恐らくですが、その魂の融合が原因だと思います」

父上と母上は、難しい顔をしディーネは首を傾げています。

「あくまで、仮説ですが……」

ここで私は、自分の仮説を話し始めます。

魔法を使うための能力は、親から子へ遺伝する。しかし、系統属性はどうなのだろうか？両親と違う系統属性の子供は、絶対に存在しないのだろうか？

答えは否である。そうなのだ。両親と違う属性を持つ子供は存在する。

ならばメイジの系統属性は、何によって決定されるのだろうか？肉体的特徴か？

そもそも人間を含む生物の体は、バランスによって成り立っている。

火属性が、少なすぎれば衰弱してしまう。

水属性が、少なすぎればカラカラになり干からびてしまう。

土属性が、少なすぎれば痩せ細り折れてしまう。

風属性が、少なすぎれば窒息して死んでしまう。

逆に多すぎれば、相反する属性に悪影響を与える。

よって肉体だけ見れば、全ての属性が使えなければおかしいのである。当然、体内の属性バランスを崩すリスク込みで。しかし現実には、そのような事は決して無い。相性の良い属性は有るだろうか。

肉体が関係無ければ、系統属性は何によって決定されるのだろうか？魂だろうか？

以前、母体は魂召喚の魔法陣の代わりにしていると仮説をたてたが、ここで召喚される魂は両親に影響されるのではなからうか？それならば、親と相性の良い魂が召喚される。

だがそれならば、もっと両親と違う属性の子供が生まれていて然るべきなのだ。(しかもこれだと、虚無属性の説明がつかない) 肉体でも魂でも無いなら、何が属性を決定しているのだろうか？

出た答えは精神である。事実ハルケギニアでは魔力の事を、精神力と表現しているではないか。そして精神とは、肉体と魂の影響をもろに受ける。これならば親子間の属性差異と、遺伝的魔法継承が説明できる。

ここで私の話に戻るが、1年と2カ月の時間をかけてギルバート^俺とマジは完全に融合を果たしギルバート^私となった。ならば融合前は精神が、二人分存在したのではないか？

「融合前の精神は、片方が土もう片方が風の系統属性だった。融合後の精神にも、融合前の属性系統が残った。よって私は、土と風の系統属性のメイジになった」

父上と母上は、相変わらず難しい顔をしている。ディーネは、最後の説明だけ何となく分かったのか頷いていた。私からすれば、今までの仮説は軒並み自信が有る物だしスジは通っていると思う。

「話は解った。それで、どう対策をとる？」

「実力者には隠しても、魔法を使えばバレてしまいます。得意な属性である、土と風を絶対に使わないようにする為、属性自体を水と偽るのが最良と思います。また、ブレイドの様な属性が色となつて出してしまう魔法は一切使えません。何色になるか解りませんが・・・少なくとも青や黄色では無いでしょう」

「なにも、そこまで徹底しなくても良いのではないか？土か風のことちらかを封印するだけでは？」

「中途半端は、命取りになります。ドリユアス家の長男は、無能で通した方が都合が良いです」

「そうか・・・確かに、そうだが・・・」

父上がそう言いながら、溜息を吐きました。

父上と母上からすれば、面白くない？いや辛いのだろう。自らの息子は安全の為とは言え、無能の汚名を背負わなければならないだから。

ちなみに、ブレイドの色は黒でした。とても、人には見せられ
ません。

第十五話 私の魔法は問題だ！！（後書き）

オリ主張すぎか？

でも、最強じゃないんだな。

なんでだろ？

答え、性格甘すぎる。

作者は、ヤングガンガン愛読していました。

ユーベルブラット カンバツーク！！

感想お待ちしております。

第十六話 領地視察と金儲け！？力量不足だ・・・

こんにちは。ギルバートです。まさか系統属性を確認しただけでこんな大ごとになるとは思いませんでした。せめて魔法は、思いつきり使ってみたかったです。

それと新しい情報が入ってきました。ヴァレールがとうとう我慢が限界に達したのか、クールズ家に嫌がらせをしていた馬鹿貴族を、名指しで罵倒したそうです。

馬鹿貴族達は、無礼だ若造かと騒ぎたてます。しかしヴァレールが、その馬鹿貴族達の嫌がらせや、不正の証拠を、王宮に提出したのです。しかしここで不正の証拠を出しても、敵の頭はとれません。トカゲの尻尾切りで、敵の頭には何の効果もありません。

しかしヴァレールの狙いは、そこではありませんでした。真の狙いは、尻尾切り後に有ったのです。

クールズ領は、魔の森拡大阻止の最前線。そのクールズ家の足を引っ張るのは、魔の森拡大を助長させる行為。よってこの者達は、国土を危険にさらす逆賊である。と、宣言したのです。

ヴァレールは徹底的に、馬鹿貴族を非難します。

そして馬鹿貴族の上司を、監督不行届きだと断じたのです。これにより、実際責任追及はできないものの、王宮での発言力をそぐ事が狙いだったようです。

しかし敵も、この土俵で長年戦ってきたつわものです。なんと尻尾だけでなく、頭まで切つて来たのです。先手を打つて、高等法院長が責任をとつて辞任を発表。しかし実際には、高等法院長の名前が変わつただけです。

ヴァレールの目論見は、見事に外されてしまいました。これにより、クールーズ家と高等法院の対立が表面化しました。

やがてこの対立は、クールーズ家と高等法院の対立から、ヴァリエール公爵家を筆頭に魔の森拡大を危惧する者達と、利権と嫉妬にまみれた狡賢い馬鹿貴族達の対立へと変化していきました。

前者は相手の尻尾を掴めない。後者は下手に動いて尻尾を出せない。そんな睨み合いが、長々と続く事になったのです。

ドリユアス家では、何事も無く時が進んでいます。私とディーネは木刀・木剣から、刃の潰してあるだけの模擬刀・模擬剣（ギルバート製作）を使って、訓練するようになりました。最初は重さの変化に身体が慣れず、かなり不格好で危なっかしかったです。今ではちゃんと剣を振れています。

アナスタシアも木剣（レイピア型）を母上に持たされ、剣の稽古を既に始めています。私が木刀を持たせようとしたら、母上に威嚇されました。（怖かったです。避けなきゃ死ぬ威嚇って・・・）

魔法の訓練ですが、私のせいで人に見られる訳にはいかなくなりましたので、屋敷裏の森の中で行う事になりました。ディーネは母上の魔法訓練ターゲットが、自分から私に移り喜んでいました。

母上。人間は飛べないのです。そしてメイジは、杖が無ければ浮けないのです。

だから……、杖をたたき落としたりうえそんな高いところまで吹き飛ばさないでええー！

……っは、失礼しました。

取りあえず訓練は順調です。

それから暫くして、母上が領地の視察に行くと言うので、お願いしたところ私も連れて行ってくれる事になりました。領地経営に関わるようになり、赤ん坊の頃一度だけ父上をお願いして以来です。今回は母上のグリフォンに便乗して、領内を見て回ります。

実際に見てみて、前回と比べ領内の生活水準は劇的に変化していました。私の提案でここまで変化したなら、やった甲斐が有るといふ物です。

ただ、気になる事が有りました。女の人が井戸に落ちそうになりながら、水を汲んでいたのです。正直言って、見ていて冷や冷やしました。家に戻ったら、手押しポンプを作ろうと思います。家の財政力なら、全ての井戸に設置しても余裕でしょう。元値は私の《錬金》でタダの為、設置費用のみです。しかも《固定化》を使えば、ずっと使えるのです。かなり、おいしいです。

そして最後に、タルブ村により食事をしました。ヨシエナヴェを、

母上と二人で食べました。驚いた事に多少違和感が有りますが、醤油が使われていました。私は（どうせ塩や他の調味料で、誤魔化しているんだろう）と、思っていたので嬉しい誤算です。

村の人に声をかけ、調味料について聞きます。醤油を作っている家に、案内してもらいました。

訪ねてみると、かなり慌てられました。まあ、いきなり領主夫人が子供連れて訪ねてくればそりゃ驚きます。取りあえず急いでいないので、相手が落ち着くのをゆくり待ちます。ほどなくして落ち着いたのか、真っ先に謝られました。母上はそれを、とても良い笑顔で許します。

（母上。相手が慌てふためく姿を見て、喜んでたな・・・）

とにかく、醤油の事について聞きます。この家はちゃんとした麹があり、醤油と味噌を作っていたのです。

（すばらしい。これは有益です！！特産になる！！）

私は手放しで、喜んでしまいましたが世の中そう甘くは無いです。話を聞くと、塩の値段が高い。そのため、出来上がった醤油と味噌も高額になる。また、塩自体の品質も問題で、どうしても苦味（違和感の正体）が出てしまう。以前、偶然海水塩を手に入れる機会に恵まれ、その時作成した醤油と味噌は、とてつもなく美味しかったとの事。私達が食べたヨシエナヴェは、かなり良い品質の醤油が使われていたそうです。

正直言って、かなりショックです。

塩の事を母上に聞きましたが、トリステイン王国内に塩の鉱脈は無く殆どをゲルマニアからの輸入に頼っているそうです。万が一塩の鉱脈が見つければ、王家に取り上げられるのはほぼ確定。海水から作る塩は、コストがかかり過ぎて目玉が飛び出るほど高いとの事。海さえあれば、マギの知識で安く塩を作れるのですが、残念ながらここには海がありません。また、技術提供で余所に作らせるにもリスクが高いです。今は諦めるしかないか……。悔しい。

取りあえずマギ商会に、海水塩を手に入れたらタルプ村に持っていくよう命令しておきました。

(あつ!!……零戦とシエスタ見るの忘れてた)

さて、いよいよ手押しポンプの作成です。材料ですが、アルミニウムを使用したいと思います。

なぜに、アルミニウム?と思うかもしれませんが。

《錬金》で作れる金属は、術者の価値観とイメージに大きく左右される様です。私の場合は、元素周期表に大きく影響されました。元素周期表の?が若いほど、楽に錬金出来るのです。ドットなら、クロムやマンガンまでで鉄は無理でした。また元になる材料に、目標の物質が含有されているほど楽です。アルミニウムなら、ボーキサイトから作るのが一番楽でしょう。まあ、マギの知識にも当然穴が有る為、他の有益な物を見落とす可能性も有りますが。

現状で《錬金》出来る金属の中で、有力なのが?13・アルミニ

ウムと？22・チタンでした。性能面ではチタンなのですが、同じ泥から作るならアルミニウムの方が《錬金》がかなり楽だからです。《固定化》かければ、性能面はあまり関係ありませんし。

さて、作成上問題なのが二つの弁とシリンダー部分です。パッキン部分は、《錬金》で現地溶接で対応すれば問題ないでしょう。

シリンダーと弁は、鑄型を作成し《錬金》で対応。シリンダー内の玉は、木を使用しました。精度のいらない他の部分は、適当に《錬金》しました。

そして、いよいよ試作品の完成です。シリンダーと弁の精度を出すのに非常に苦労しました。

早速、ドリユアス家の井戸に設置してみます。立会人は、母上・ディーネ・アナスタシア・オーギュストの4人です。あれ？母上とディーネにしか告知していないハズなのですが。なぜ、アナスタシアとオーギュストが居るのですか？

話を聞くとアナスタシアはディーネのおまけで、オーギュストは母上に声をかけられたからだそうです。どうやらオーギュストはかなり早い段階で、父上から私の事を聞いていたようです。それはアソナも同様らしく、二人で私のフォローをしてくれていたそうです。

（つい先日、アナスタシアに私の事を秘密にする約束をしたばかりなのに・・・）

気を取り直して、早速設置を開始したいと思います。まずはライ

トで、井戸底と深さを大まかに確認し、パイプを錬金で隙間なくつなぎ合わせます。レベーターションで、パイプを井戸に差し込み足りなければパイプを付けたし、多ければカットする。ちょうど良い長さになったら、パイプを井戸の縁に《錬金》で固定。次は井戸に、パイプを固定した側から3分の1ほど《錬金》で石蓋をし、石蓋の上を水平にする。パイプの上に手押しポンプを乗せ、空気が漏れないように《錬金》で固定。

よし設置完了。試しにポンプに少し水を入れ、ハンドルを動かしてみる。

「あっ！！水が出た！！」

アナスタシアが、嬉しそうな声を上げます。よし成功。最後にポンプとパイプに固定化をかけ、井戸に木で完全に蓋をしたら作業終了です。

念の為に、数日様子を見てみましたが問題は出ませんでした。使用人達にも、大好評でした。

ドリユアス領内の、井戸全てに手押しポンプを取り付ける事になりましたが、意外に数が少なくすぐに終わってしまいました。外に売り出すにしても、お金を出せるのは貴族だけでしようし、貴族が平民の為に大金を使うとは思えません。当然、大商人も同様でしょう。

残念ながら手押しポンプは、私の自己満足で終わってしまったようです。まあ領民が喜んでくれたので、良しとしておきましょう。

続いて《錬金》について、現状をまとめておこうと思います。

「希少金属を《錬金》して手っ取り早く儲けよう作戦」

これは以前から《錬金》で、どう儲けようか画策していた青写真です。しかし残念ながら《錬金》した金属は、不純物が多くとても売り物になりませんでした。そして不純物を分離精製するのは、ドットメイジでは無理でした。

ですが希望があります。それは、原子配列変換による錬金が可能な物質です。今の私の場合は、元素周期表？1・水素？25・マンガンまでです。

この範囲の物質は、《探知》ディテクトマジックで不純物を知覚し《錬金》。これを繰り返す事により、純度を高められるのです。（他のメイジが何故これをやらないのか不明。私に現代知識が有るからか？）

これを利用し、アルミニウムの純度をほぼ100%に上げた物をインゴットにし、軽銀としてマジ商会で5リールほど売りに出してもらいました。（入荷先は、東方から来た商人とした）

最初は見向きもされませんでした。見る目が有る人はいるものです。最後には、かなりの高値がついたそうです。

チタンについてですが、強度も高く非常に軽いので武器の素材としてはかなり優秀な金属です。この金属は、ばらまくのはあまり良くないと感じ自重しておきました。

あと、炭素は？6で今でも《錬金》が可能です。純粋な炭素から、ダイヤモンドを組上げるのが今の目標です。成功すれば、かなりの資金源になってくれるでしょう。アルミとケイ素で宝石が作れるでしょうが、こちらは合成と分離精製が出来てからで無ければ無理と判断しました。

さあ、早くランクアップしてもっと希少金属作って儲けるぞ〜
〜！！

第十六話 領地視察と金儲け！？力量不足だ……（後書き）

魔の森関係が進行しません。

主人公にとっては助かる展開か？

お金儲けに関しては主人公は実力不足すぎ。

そろそろ原作キャラを出そうと思います。

感想待っています。

第十七話 妹の魔法と招待状？

こんにちは。ギルバートです。楽しんで儲けようなど、甘かったよ
うです。タルブ村の醤油と味噌は、塩が原因で大量生産不可なうえ
高く美味しくない。手押しポンプは売れる要素皆無。《錬金》は、
努力しないととても儲けられない。うん。甘かった。

そうこうしている内に、時間ばかりが過ぎていきます。アナスタ
シアも、いよいよ5歳になります。私も魔法を始めて、1年と8カ
月になります。いまだ、ドットメイジですが……。

おっと、話が逸れました。アナスタシアは以前から、家族内で自
分だけ魔法の訓練に参加できない事を、不満に思っていたようです。

私が魔法の訓練を始めてから、しきりに「わたしも、やりたい」
と母上に言っていました。

しかし、帰ってきた答えは「5歳になるまで待て」でした。

当然です。私があれば説得したのに、駄目だったのです。アナ
スタシアだけ、例外とあり得ません。

……待てよ。そう言う事か。兄弟間で例外を認めれば、他の
兄弟が黙っていないのです。だから私の時あれほど納得していたの
に、返事はダメだったのか。アナスタシアとディーネに、私だけ特
別と認識させない為、兄弟間の優劣をつけない為、私の話を納得し
ながらも魔法の訓練を許可してくれなかったのか。理由を言わな
かったのは、私の反感がディーネとアナスタシアに行かないようにす

る為か……。

相変わらず、私は浅はかなようです。それなのに、あれほど食らい下があれば母上も切れて当然です。ここは、猛省せねば……。

そしてアナスタシアの誕生日に、私達と同じように小さな杖（ワンド）が送られます。誕生会は慎ましく終了し、次の日よりアナスタシアは杖との契約に挑みます。

驚いた事にアナスタシアは、2日で杖との契約を終え母上の指導の元、魔法の訓練を開始する事になりました。

私とディーネが、柔軟とランニング終えて戻ってくると既には、魔法発動訓練と系統属性確認が終わっていました。

（……速い）

母上には、どこか複雑さが見えるが物凄く上機嫌です。

私の時はディーネの訓練を見ていたので、早くスムーズに出来ました。しかしアナスタシアは、私以上に早く終わっています。正直に言わせてもらえば、信じがたいものがあると思いました。

ギルバートは知らなかったが、アナスタシアはかなり以前から入念に魔法訓練の準備をしていた。

書庫の鍵を母にねだり、書庫への入室を認めさせた。必死に文字を覚え、兄が読んでいた本は必死で読んだ。ルーン文字も、完全ではないが覚えた。

魔法は、力の流れが大切な事は解っていたので、姉から覚えた。
(当時、私生活で杖を持つ事を許され浮かれていた為、妹を膝上に乗せ気軽に《念力》を使った)

魔法は、イメージが大切と言う事も分かっていたので、いきなり全ての属性を成功させた兄のイメージが良いと思い、兄からイメージを聞き出した。(子供と思い、油断してつい喋ってしまった)

結果、碌に母の説明も聞かずに全ての魔法を一発成功。アナスタシアの属性基準は、母と全く同じ風>水>火>土だった。

なぜ、こんな幼子がここまでの事が出来たのだろうか？

原因はギルバートだ。

ギルバートは「この滅びゆく世界に、運命を変える一つの因子たれ」の言葉を実践する事に、ただただ夢中だった。そして、マギの分の精神年齢の高さがあった。

ディーネはギルバートに、姉上と呼ばれる事に居心地の悪さを感じていた。だがそれ以上に、ギルバートの姉でいたかった。だから姉として、自分の方が上であることを証明する為、必死に努力した。また実母との死別が、年相応な甘えを消し去っていた。

^母シルフィアはギルバートとディーネが原因で、子供の成長が早すぎる事に鈍感になっていた。

^父アズロツクは仕事で家になかなか帰れないので、気付く事が出来なかった。

そしてアナスタシアは、この環境に大きな孤独感を感じていた。家族は、いつも自分に笑いかけてくれた。だがふと気付くと、自分だけ蚊帳の外だ。だから、家族が何をしているか見てみた。やっている事は、魔法の座学だったり剣の稽古だった。

だから、母にねだって剣の稽古を始めた。

しかし兄の魔法訓練が始まると、屋敷の裏の森に訓練場所を移され自分だけ置いて行かれた。

だから、自分も魔法訓練を始めたいとねだった。

しかし、母は許してくれなかった。

だから焦った。如何にかしなければ、自分は見向きもされなくなるかもしれない。自分だけが、一人残され皆どこかへ行ってしまうかもしれない。

まだ幼子であるアナスタシアに、その不安は耐えられる物では無かった。

如何すれば良いのか？幼い頭で考えた。・・・そして、結論が出た。

・・・置いて行かれないように、追いついてもう離れなければいい。

ドリュアス家の人間は、皆どこか歪んでいるのだった。

魔法訓練は、アナスタシアも加わり順調に進んでいました。

アナスタシアは、母上の格好のターゲットになっていました。

このおかげ様で、私とディーネは自分の属性訓練をする余裕が出来ました。生贄になってくれた、アナスタシアには感謝しています。

訓練後にアナスタシアが、何かブツブツ言っていましたでしたが気にしない事にしました。

（なんか黒いオーラ出てませんか？止めてその年でヤンデレとかあり得ませんから）

あっ……。心配したディーネが話しかけます。とたんに、年相応の笑顔に戻りました。

私も側に行くと、どうやら母上のやり過ぎで立てないらしいです。仕方が無いので、屋敷までおぶってやることにしました。その後、アナスタシアはやたら上機嫌でした。

屋敷に戻ると、母上が待ち構えていました。私達三人に、緊張が走ります。

（母上。髭り足りなかったか？）byギルバート

(でもギル、あれだけやって流石にそれは……) b y デイネ

(うそ……いや……) b y アナスタシア

私達三人は今現在、アイコンタクトと僅かな所作で、ここまでのコミュニケーションが出来ようになっていました。だって母上はやたらカンが良くて、少しでも不満そうな顔を見ると、訓練量がやたらと増やすからです。

しかし私達の心配は、杞憂だったようです。

「今度、ヴァリエール公爵家の三女儿イズに友達を作る為に、同い年の子を呼ぶ事になったのよ」

「たしか、アナスタシアが同い年でしたね」

私が返事を返すと、母上は頷きました。

「そうなの。それでアナスタシアとモンモランシ伯の子供に、招待状が届いたの」

「家だけでなく、モンモランシ伯の子供も？」

「今は情勢が不安定だから、自重する筈だったんだけど……。王都で、公爵とモンモランシ伯爵とアズロックで、私が護衛に付けば安心して事になってしまっ……」

私は溜息を吐いてしまいました。

(いくら魔の森拡大阻止の為、この三家が仲が良いからって……)

。アナスタシアは、大丈夫なんだろうか？

「もちろん、ディーネちゃんとギルバートちゃんも一緒よ」

「私も？」

思わず出た言葉が、ディーネとハモってしまいました。

「明後日の朝、アズロックが帰って来るから。帰って来次第出発よ。一度モンモランシ伯の家によって、……えーと」

「モンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モンモランシ？」

母上が、名前らしきところで言い淀んだので言ってみました。しかも、凶星の様です。母上が、少しだけ渋い顔になりました。

「良く知ってたわね……。取りあえず、その子とその子の護衛と合流してヴァリエール公爵の屋敷へ向かうわよ」

「「はい！」「」」

私達は、元気に返事をしました。

いよいよ、原作キャラとのご対面です。情勢が情勢だけに、杖と剣は必須ですね。何事も無ければ、良いのですが……。

第十七話 妹の魔法と招待状？（後書き）

今回は、ちょっと手が止まってしまいました。

本当なら、モンモランシー出すところまで行く予定だったのに。

今後の展開、少し練り直そうかな？

などと、逃避する今日この頃です。

感想お待ちしております。

第十八話 盗賊？勸弁してください！！

おはようございます。ギルバートです。この情勢下ヴァリエール公爵の家に、遊びに行く事になってしまいました。本当に、果てしなく不安です。

そもそも、ヴァリエール公爵は自分の娘可愛さで、人の子供を危険にさらすような人なのでしょうか？

マ・サ・カ・・・困なんて事は・・・うん。流石に無い。・・・無い。無いよね・・・？

・・・落ち着け。・・・深呼吸・・・深呼吸。

それよりも公爵家にお邪魔するなら、コネを作っておきたいです。しかしどう気を引くかが問題ですね。マギを前面に出して、興味を引くのが一番有効です。・・・私、嘘つきですから。

朝と呼ぶには遅い時間に、父上は帰ってきました。かなり疲れた顔をしていました。父上もいろいろと、大変そうです。

さて、いよいよ出発です。これからモンモランシ伯爵の館に向かい、モンモランシー嬢とその護衛に合流して。その後、ヴァリエール公爵の館に向かいます。

私達が乗るのは、四人乗りの馬車です。護衛は、母上とその騎獣グリフォン。そして、守備隊から信用できる者2人に騎馬について来てもらいます。

危ないのはモンモランシ領を出てから、ヴァリエール公爵領に入るまでです。もちろんそれ以外でも、油断は出来ませんが。

何の問題も無く、モンモランシ伯爵の館に到着しました。緊張していたから、気付きませんでした。私とアナスタシアは自領から出るのが始めてです。

そう言えばマギが始めて旅行で国外に行った時、日本脱出と騒いでいた事を思い出しました。あの時はマギも若かったですね。

今はモンモランシ家の若い使用人に、到着を報せてもらっています。

しかし、でかい。なにが？って……館がです。ドリュアス家の3倍……いや、4倍はありますね。これで領内に、貧民がたくさん居るのはどうかと思います。しかし、母上曰く。

「トリスティン貴族の中で、モンモランシ伯は領地経営に熱心な人ね。ドリュアス領は、そういった意味では異常よ。平民の生活水準が高すぎるわ」

……との事。まあ、市場には活気があつたし、衛兵もちゃんと見回っていたので、そうなのかもしれません。確かに昔のドリュアス領と比べれば、今のモンモランシ領の方がはるかに豊かです。

ここで先程の若い使用人が、老執事を連れて戻ってきました。老執事が屋敷の中に、案内してくれるようです。

(家人の出迎えは無しか……。格下とはいえ、友好関係にある家なのに……)

母上はこの対応に、特に違和感を感じていないようです。貴族の対応は、これが当たり前なのかな？と、少しさびしい気持ちになりました。しかしそれが誤解である事がは、最初に通された部屋で解りました。

そう。その部屋は、寝室だったのです。

モンモランシ伯爵夫人は、ベットから上半身だけ起こすと「満足におもてなしできなく、てごめんなさい」と、言いました。母上は「気にしないで」と返します。モンモランシ夫人は、体調を崩しているようです。顔色も悪く、生気を感じません。しかし、母上は夫人と仲が良いのでしょうか？

「ごめんなさい、こんな時に体調崩すなんて……」

「あなたは、何時も頑張り過ぎなのよ……。もつと自分を大切にしなさい。今回の事は私に任せて、ゆっくり休んでなさい」

えーと。母上とモンモランシ夫人って、親しい？と言うか友人関係ですか？

「ええ。そうするわ。家のモンモランシーをよろしくね。シルフィア」

それからモンモランシーを、紹介してもらいました。まだ5歳だけあって、チビっ子です。既に髪は金髪縦ロールでした。

「私はディーネよ」

「ギルバートです」

「アナスタシア……」

ディーネだけがニコニコ笑顔で名乗り、私とアナスタシアはかなりぶっきらぼうな名乗りでした。ザ・人見知り発動です。情けないです。こんな小さな子に。

この状況でモンモランシーが誰に興味を示すかなど、論じるまでも無いでしょう。

「モ・・モンモランシー……です」

ディーネを見ながら、たどたどしく名乗ってくれました。

ディーネは良く出来ましたと言わんばかりに、モンモランシーに近づき優しく頭を撫でてあげます。モンモランシーも、嬉しそうに頭を撫でられています。

周りはその光景を、微笑ましく見守っています。一人の例外を除いて……。

そう。アナスタシアです。

アナスタシアからすれば、自分の姉を盗られたような感覚なのでしょう。モンモランシーに向けて、ギンツと目から敵対光線^{ビーム}を発射しています。

子供はその辺の勘が鋭い様で、モンモランシーはすぐにディーネの後ろに隠れてしまいました。

アナスタシアはそれが面白くなく、怒りのボルテージが上がって行きます。

私は仕方が無いので、アナスタシアを抱きしめ頭を撫でてあげます。

「うー……。うー……」

今の光景は、友達を怒らせた子供が姉の影に隠れ、怒った方は兄に慰められているまさにそれ。そこには兄妹と姉妹の姿が、確かにありました。

アナスタシアは唸っていましたが、大人しくなるまで撫でてあげました。

落ち着いたところで、アナスタシアをモンモランシーの前へ連れて行きます。

「こんな妹だけど、よろしくね」

私はモンモランシーの頭を撫でながら、お願いします。モンモランシーは元気に「はい!!」と、返事してくれました。

結局この日は、モンモランシ伯の館に一泊させていただきました。女の子連中は、一緒の部屋でパジャマパーティーらしきものをしていました。なんか、凄いい疎外感を感じます。私の周りには、男はいないのか?……友人欲しいです。寂しさのあまり、涙が出てき

そうです。

次の日には伯爵夫人に挨拶をし、ヴァリエール公爵の館に出発します。

モンモランシ伯爵夫人は護衛として、六人の剣士と二人のメイジをつけてくれました。

剣士六人は、モンモランシ領出身の信用のおける者達で構成されています。

メイジ二人は親が没落貴族で、親の代にモンモランシ伯に拾われた者達だそうです。二人とも火のメイジで、一人はラインもう一人はトライアングルだそうです。

ラインメイジは、名前がクレマン。無愛想で無口な敵ついオジサンですが、私達に接する所作に不器用ながら優しさを感じる人。戦闘スタイルは接近戦を主体とし、そのサポートに火系統魔法を使う変わり種です。

トリアングルメイジは、名前がアルノー。いつもニコニコしている気の良いオジサンで、戦闘スタイルは魔法戦を主体とし接近戦もこなすオールラウンダーです。

これだけでは、アルノーさんの方が強そうに聞こえますが、戦闘になるとクレマンさんの方が圧倒的に強いそうです。クレマンさんは敵の魔法を見切り接近戦に持ち込む天才で、アルノーさん曰く「魔法が無ければ、立派なメイジ殺しだ」との事。

二人とも私達の事を気に入ってくれて、独自の魔法理論を話してくれた。私とディーネは主にクレマンさんから話を聞き、アナスタシアはアルノーさんから主に話を聞かせてもらってました。

二人とも私を坊主と言って、頭をクシャクシャにするの止めてほしいです。

モンモランシ領から出て二日目、急にアルノーさんが話をしなくなりました。アナスタシアはその事で、私に愚痴を言っていました。

クレマンさんもアルノーさんの様子がおかしい事を、心配していました。

不安な点も有りましたが、旅は行程は問題無く消化されて行きました。そして今日ようやく、ヴァリエール公爵領に入る事が出来ました。ひとまず一番危険な場所は、通り抜けたのです。

しかし油断大敵とは、良く言ったものです。馬車の小窓から外を覗いていると、茂みに弓らしきものが見えたのです。私は声を上げようと思いますが、それより早く矢は放たれました。

矢は母上に向かって、飛んで行きました。母上も気づいていたのか、グリフオンの手綱を僅かに操作するだけで見事にかわします。そしてお返しとばかりに、エア・カッターを矢が飛んできた茂みに放ちました。

聞こえてきたのは、人の悲鳴でした。それと同時に、馬車も止まりました。

それを合図にしたかのように、近くの木や岩の影茂みから20人を超える盗賊達が現れたのです。しかも、その大半が杖（ワンド・スタッフ）を手にしていたのです。残る剣士数人も軍杖（杖が剣等の武器型）で、間違いないでしょう。なぜなら、弓で攻撃してきた仲間の死体をチラツと見て「これだから、魔法が使えねー屑は」などと、言っていたからです。

盗賊団の頭らしき男が、一歩前に出ました。

「よー。降参してくれねーかな。男は首切り落とすけど、女は可愛がってやるぜ」

頭の発言に周りの盗賊どもは、下品な笑い声を上げます。

私は母上の方を見ましたが、母上から何か怖い物が流れ出していました。久々に感じたから、すぐに解らなかつたのですが、これは殺気です。

「ならば、私が相手になりましょう。この《乱風》のシルフィアが……」

その瞬間確かに、盗賊達の動きが一瞬だけ止まりました。そう言えば母上の二つ名を聞くのは、これが初めてです。見るとモンモランシーとディーネも、固まっていました。解らないのは、私とアナスタシアだけのようです。

（知らぬは実子ばかりなり。ですか……）

盗賊達は動揺しているようです。口々に「聞いていない」とか「

楽な仕事じゃ無かったのか」などと、騒いでいます。その隙に母上は、偏在を5人作りだし戦闘準備を終えました。

「馬車を動かし、距離を取りますよ」

言ってきたのは、ドリユアス領から護衛してきた守備隊の一人です。所作からすると、盗賊達より母上の方を警戒しているようです。

・・・なんでさ？

戦闘開始とともに、馬車は勢い良く動き出します。その意味はすぐに分かりました。母上の攻撃は、エア・ストームやカッター・トルネードの様な範囲攻撃ばかりなのです。近くにいれば、確実に巻き込まれます。

しかし逃げる選択肢も、正解とは言えなかったようです。矢が次々に馬車に向かって、飛んで来ました。これを迎撃したのは、クレマンさんです。炎で矢を全て燃やし尽くし、全ての矢を防ぎました。今度の人数は8人程度で、メイジは居ないようです。しかし行く手を、完全に塞がれてしまいました。

自然と馬車は停止し、騎兵八人で迎撃します。当然メイジ二人は、援護と周囲の警戒にあたる形になります。クレマンさんとアルノーさんは何かあった時、馬上では対処しづらいと判断したのか下馬しています。

「妙だな・・・」

クレマンさんが呟きました。クレマンさんが馬車の側に居た為、ギリギリ聞こえました。私はクレマンさんの、次の言葉を待ちまし

た。

「この状況でこれ以上の増援が無い」

その時アルノーさんがクレマンさんに、近づいて来ました。アルノーさんがクレマンさんがにぶつかると、クレマンさんは目を大きく見開きます。

「なっ……坊主……に……げ……」

次の瞬間クレマンさんが、地面に倒れました。

(アルノーさんが、クレマンさんを刺した?)

ハッキリ言って目の前で起きた事が、信じられませんでした。その時、反射的に杖に手が伸びたのは、母上の教育の賜物でしょう。アルノーさんは、大きく一步馬車から距離を取ります。そしてアルノーさんの口から、ルーン詠唱が……。

この時私は、かつて無いほどの集中力を発揮していた。時がゆっくり流れる感覚。それはマギの時最後に見た、走馬灯の感覚と似ていた。周りの事が一気に、頭の中へ流れ込んで来る。

この詠唱は……フレイム・ボール。狙いは馬車。つまり私達。

アルノーが唱えようとしている魔法と目標が解かった。

ディーネも詠唱に入っているが、これは……ウォーター・シルド。

無理だ。ドットクラスのウォーター・シールドでは、トライアン
グルクラスのフレイルム・ボールは防げない。

母上は間に合わない。騎兵達は、こちらを気にする余裕さえ無い。
アナスタシアとモンモランシーは、状況がつかめず呆然とするばかり。

ここはどうする？答えはすぐに出できました。敵に魔法を撃たせなければ良い。それには如何すれば良い？簡単だ……。

コロセバイイ……。

そう思った瞬間、馬車から飛び出していた。一瞬で殺す為の魔法を、頭の中で検索する。系統魔法は、詠唱の関係でオール却下。なら、コモン・マジックだ。マジックアロー・マジックミサイル・ブレイドが、検索に引っかった。マジックアローとマジックミサイルは、確実に致命傷をあたえる自信が無い。成功率は6割前後。残念だが、4割も失敗する可能性がある。ならブレイドだ。刃を限界まで伸ばせば、確実に殺せる。

「ブレイド」

私の杖から、漆黒の刀身が現れる。私の全精神力をブレイドに叩きこみ、刀身を伸ばす。

私のブレイドの色に、アルノーは驚き一瞬詠唱が止まった。しかしすぐに冷静さを取り戻すと、もう一度大きくバックステップする。これだけで、ドットである私のブレイドは届かなくなった。ブレイ

ドを届かせる為に、間合いを一步詰めている間にフレイム・ボールが完成する。

タリナイ……。なら命も使え。解っているのか？自分の後ろに誰が居るのか……。

その時、精神力の増大を感じた。次の瞬間には、ブレイドは十分な長さへと伸びていた。

(ドットからラインへか)

そして私のブレイドが、剣道の片手面の軌道を最短でなぞる。だが間に合わなかったようだ。フレイム・ボールの魔法が完成する。

……。なら、魔法ごと切って捨てる。

都合の良い事に、私の斬撃の通り道に発動中のフレイム・ボールがある。なら剣の軌道を変える必要は無い。

ここでアルノーは、私のブレイドが更に伸びたことに気付き動揺した。目の前のドットメイジでは、届かない位置に下がった。なのに黒き断罪の刃は、自分を切断する。

信じられない。その時のアルノーの表情は、間違いなくそう語っていた。

ブレイドは、アルノーの右頭頂部から入り右目を通り口の右の方を抜け首から胸へ、この時左手ごとフレイム・ボールを切り裂いた。そして、ブレイドは腹を通過し左大腿部で刃が体外に抜けた。

・・・即死だ。

次の瞬間、私の視界は炎で埋め尽くされていた。

気付くと私は暗い場所にいた。ここは・・・？

第十八話 盗賊？勘弁してください！！（後書き）

ようやく、書きあがりました。

今回の話は、結構苦労しました。

楽しんでいただけたら幸いです。

感想お待ちしております。

第十九話 帰る場所

暗い。でも周りに、たくさんの人が居るのが解る。皆、同じ方向に向かって歩いている。私も同じように歩く。……ただ、歩く。

頭がボーとする。意識は濃い霧の中で、迷子になってしまった様だ。

ふと……このまま進んで良いのか？と頭に疑問が浮かんだ。

何となく、周りを見回してみる。そこに居たのは、死体・死体・死体・死体。

周りは死体で埋め尽くされていた。いや死体が歩くわけが無い。今周りにいるのは、死体では無く死者達だ。

漠然と理解した。このまま一緒に逝けば、自分と言う存在と引き換えに輪廻の環に戻る事が出来る。

だけど私は、それを嫌だと感じた。

ひと塊りになって、目的地に向かう死者達の中からのろのろと抜け出す。

目の前には河が有った。濡れる気になれず、周りを見渡す。

見えるのは、死者達と河そして下に向かう階段だけだった。それ以外は、ただ闇が広がるばかり。

何となく階段に向かう。単に濡れる気になれず、死者達の前を横切る気にもなれず、闇は怖いと感じたからだ。

階段は青暗い光で、照らされていた。だから足を踏み外す心配もない。ゆっくりと、一段一段下りていく。

すると、石造りの門が見えてきた。その門は、押すと簡単に開いたのでそのままぐる。同じような門がいくつか有ったので同じようにくぐった。途中に右にそれる小道があつたが、すべて無視した。

いつの間にか頭の中の霧は薄れて行き、自分の向かうべき場所に確信ができていた。

階段を下りきると、広い場所に出た。目の前に、大きな河と大きな門が確認できた。幻想的なのに、どこか畏怖を感じる門だ。

「ここは……?」

一度来た事がある場所。懐かしさに、あの時と同じ言葉が口から出てくる。

「ここは、冥き途。……貴方は、もう知っているでしょう」

「はい、私は知っています」

振り返ると、そこに懐かしい二人が……いや、二人と一匹がいました。

「お久しぶりです。リタ、ナベリウス。それに、ケルちゃん」

「久しぶり」

「……り」

リタは笑顔で、ナベリウスは目を閉じ僅かに微笑んで、返事を返してくれました。ケルベロスは尻尾を左右に振って、喜びを表現してくれました。

「また、死んでしまいました」

私は冗談でも言っているかのような、軽い口調で言いました。

「……」

「……」

しかし返って来たのは、重苦しい沈黙でした。二人にとって死者つまり死とは、慣れ親しんだ存在だと思っていました。しかし違ったようです。

思えば俺がここに来た時、二人は本気で俺の今後をを考えてくれました。二人は死者が新しい生を手に来るように、冥き途で案内人をしているのだから。死そのものに、慣れているわけではないでしょう。

……相変わらず。私は浅はかですね。

「ありがとう。悲しんでくれて。ありがとう。再開を喜んでくれて。そして、ごめんなさい。二人が死に慣れてると、思い込んでました」

私は心を込めて、お礼と謝罪を言いました。

「気にしないで。本当なら、貴方自身が一番辛いはずなのだから・・・。それに、さっきの沈黙は違うの。私達は貴方との再会を、手放して喜んでしまった。そこに、貴方の死が有ったのに・・・。ごめんなさい」

リタはそう言って、謝ってきました。ナベリウスもリタにならない、頭を軽く下げます。この二人の反応に、どこか救われた様な気がしました。

それから二人に、これまでの人生について話しました。

ハルケギニアの事。

トリステイン王国の事。

ドリュアス領の事。

使用人達の事。

父上と母上の事。

姉と妹の事。

短い人生と言っても、七年近い人生の話です。すべて話し終えた頃には、かなり時間が経っていました。話の途中ではよく笑顔を見せてくれた二人ですが、話が終わると途端に沈んだ表情になってし

まいます。

「気を落とさないください。本人がそれほど気にしていないのに、周りがこれじゃ気にならない物も気になってしまいます」

私はあえて、元気よく言い切りました。

「そうね……」

リタは私の言に、納得してくれたようです。ナベリウスも声にこそ出しましたが、頷いてくれました。

それから私は、リタとナベリウスの話を聞きました。やがて話題が変わり……。

「ところでギルは、これから如何したいの？ここに残りたいなら、私達に出来る事ならさせてもらおうわよ」

リタが話題を、これからの事に切り替えました。

「選択肢って、どれ位有るのですか？」

「大きく分けて、輪廻の環に戻るかここに残るか。そして残るにしてもどのような形で残るか、選ばなければならないわ」

「せっかく、友達が出来たのです。なるべく残りたいですね」

リタは頷き、説明を続けてくれました。

「残る場合は、誰かの使い魔か使徒になる方法と、私の様に自立し

た個体として自分を確立してしまう方法があるわ」

私はリタの説明が理解出来たので、それを示す為頷きました。

「使い魔が使徒になる場合は、私じゃ力が足りないからナベリウスと契約してもらうのが良いと思う」

リタがナベリウスに、確認するように聞きました。ナベリウスは、頷き肯定します。

「自立した個体になる場合は、それ相応の力が必要になるし当然リスクも高くなる。その代わり、この世界での自由が約束されるわ」

つまり楽で安全な隷属の道と、険しく危険な自由の道。この二つの、どちらの道にするか？と言う事ですね。これからも対等とは言いませんが、この二人と友人として付き合っていくには後者を選ぶべきです。

そう結論し自立の道を選ぶと、誓い声に出そうとした時その会話が聞こえました。リタとナベリウスの会話が、私の誓いを一瞬で粉々にしてくれたのです。

「契約方法は、何があるのかしら？」

「……性魔術が楽」

「それで良いの？」

「……いい」

・・・ちよつと待つてくれ。えつと・・・するの？誰が？私とナベリウスが？何を？XXX？でも大切な友人だぞ？したくないのか？したいに決まつてる！！でもそれは、今後友人として・・・でも、戦女神はエロゲだった気が・・・ちがう。そんなの今は、関係無い！！・・・大切な友人に。

私は一人で、絶賛パニック中。その間リタとナベリウスの話は、どンドン先に進んで行きます。

・・・ゴン！！・・・バタ。

「正気に戻った？・・・あれ？大丈夫？」

「いったい何が・・・ガクッ。」

暫くして、私は目を覚ましました。事情を聴くと、私を正気に戻す為にリタが槍で殴った様です。と言うか、そんな危険物（魔槍ドラブナ）で殴らないで下さい。下手したら、魂が消滅します。それに何か物凄く、既視感が有るのは気のせいでしょうか？

「リタ・・・やり過ぎ」

ナベリウスに指摘され、リタは気まずそうにしています。

「とにかく自立した個体になるのに、具体的にどれ位のリスクが有るのか確認したいの。それには魂と精神を、詳しく診る必要が有るの。だから無意識下で拒絶するように、意識的に私が診るのを受け入れてほしいの」

「分かりました」

リタの話は私にとって、有益な事なので二つ返事で返します。

「まずはリラックスして、心を落ち着かせて」

私は言う通りにします。

「次はイメージして。魂を私に、直接触らせるのを許すイメージ」

私はイメージします。もう術式が動き始めているのか、頭がぼーっとします。

「準備OKみたいね……。それじゃ行きます」

リタの顔が、私に近づいてきます。私は他人事のように、リタの顔を見ています。そして私とリタの唇が、重なりました。私は頭がぼーっとしていて、今起きている事が現実かどうかさえ判らない状態です。

そして必要な情報が集まったのか、リタが離れ術を解除しました。

私は今起きた事が、現実である事を自覚して顔が真っ赤になりました。その事が自分でも分かるほどです。私はパニックにならないように、落ち着くようとしていましたが必要無かったようです。

……。ゴン！……。バタ。

「……。天誅」

「……なんで？……ガクッ。」

少ししてから、私は目を覚ましました。私はまた、リタの危険物（魔槍ドラブナ）で殴られたようです。何故？

「ギルは肉体との繋がり^{ライン}が、ちゃんと生きてる」

「……え？」

私とナベリウスの声が重なります。

「つまりギルは、まだ戻るべき肉体が有るの。ギルの為に、少しでも役に立てればと思って唇を許したのに、いくらなんでもこのオチは無いと思う」

あつ、なんかナベリウスからも非難の視線が……。私は居た堪れなくなつて、身体を引き視線を逸らしてしまいます。

「次に来た時同じ事が有つても困るから、自分の状態くらい自覚できるように、霊体と魂の基本を叩きこんであげる」

あれ？今リタに母上が被って見えましたよ？

「しかし早く戻らないと、肉体がダメになつてしまふんじや」

「大丈夫。前回ギルが来てから^{ハルケキニア}そちらの時間で七年だけ^{ディル・リフイーナ}どこちらでは、何百年もの時間が経っているから」

え？そんなに時間の流れに差異が有るの？

「どの道自力で繋ラインがりをを伝い戻るにも、魂と肉体の繋ラインがりをを知覚できなければ無理よ」

リタの言葉には、全く反論の余地が有りませんでした。

「お願いします」（涙出そうです）

今頃、皆泣いてるかもな……。早く帰らないと。

リタとナベリウスの修業は、洒落になって無かったです。そう言えば、この二人綺麗で可愛いのに人外でしたっけ……。

でもリタとナベリウスが、私の修業を如何に早く終わらせるか、こっそり話し合っていたのを私は知っています。時間の流れに差違が有ると言っても、早く帰った方が良いに決まっていますから。

本当にリタとナベリウスには、感謝してもしきれません。

第十九話 帰る場所（後書き）

久々にリタとナベリウスを出せました。

リタとナベリウスが変と言う突っ込みは、なしの方向でお願いします。

作者補正が、かかっていますので。

この二人は、こまめに登場させたいけど無理です。

主人公が、死にかけるイベントが用意できませんから。

感想お待ちしております。

第二十話 ただいま！！でも誰も居ないし腹減った！！

ただ今戻りました。ギルバートです。やっと冥き途から帰還する事が出来ました。修業は厳しかったです。えっ？修業の内容？忘れさせてください……。オネガイダカラ……。

なのに、帰りは繋がりたどるだけでやたら楽でした。

なんでさ？

私は無事に、肉体に戻り目を覚ます事が出来ました。目を開けると、薄暗く室内の様です。そして周りには、誰もいませんでした。

まず先に、現状を確認します。私が寝かされていた部屋は、立派な作りになっていました。かなり高位貴族の館と、思われます。ベット近くのテーブルの上に、私の杖がありました。

状況から見て味方……。ヴァリエール公爵の館とみて良いでしょう。部屋が薄暗いのは、今が夜だからのようです。

次に身体の状態です。外傷は特に見当たりませんでした。軽く動かしただけで、身体がバキバキ音をたてました。寝たままで、結構な時間が経っていた様です。軽く柔軟をして、全身の筋肉と関節を柔らかくします。身体には特に違和感は、認められませんでした。

身体を触ってみましたが、火傷の痕は残っていないようです。ただし髪型は、坊主になっていました。

(残ってる髪は、1mm位か？伸ばすのに、時間がかかるな・・・泣きたい)

しかし、どうしても誰もいないのでしょうか？ひよっとして、私の事は誰も心配してくれなかったのでしょうか？いや・・・ソナハズハ・・・。

・・・それよりも、お腹が空きました。何か食べたいです。・・・かなり、切実に。

取りあえずこのまま寝る選択肢は無いとし、部屋の外に出る事にしました。

杖を回収し、ドアを開けて廊下に出ます。

(暗くてよく分からないけど、広いな・・・。でも、ライト使うと警備の人来るかもしれないし)

廊下に出て、初めに思った事がそれでした。

(モンモランシ家も広いと思いましたが、ヴァリエール家も負けていないですね)

廊下を適当に、歩いてみます。しかし、人を見つける事が出来ませんでした。

(ひよっとして、今は深夜なのか？)

先程から私の耳に入ってくる音は、虫の音と犬の鳴き声だけです。

(せめて調理場で、少し食料を分けてもらいたいけど……)

「ぐう~~~~」

恥ずかしい事に、お腹が鳴ってしまいました。

闇雲に歩いて、調理場にたどり着くには時間がかかると判断し、まずこの館の造りを把握する事にします。

目で確認するには、今は夜で暗すぎます。分かるのは外の景色から、現在地が一階であることぐらいです。そこで音で分かる事が無いか、試してみます。

まずは壁を適当に、コンコン叩いてみます。風のラインに成ったなら、音には敏感になっているはず。音の響き方で、館の造りが……分かりませんでした。ライン程度では、そこまで正確で詳細に音を感じる事が出来ないようです。それに良く考えたら、いくら音に敏感でも比較対象が無ければ、検証のしようが無いです。

しかし音の反響から、廊下の大凡の広さ位は分かりました。

(あれ?この館……、それほど大きくない様な気がする?ひょっとして、ヴァリエール公爵の屋敷では無い?)

「ここ何処ですか?」

思わず口に出してしまいます。

不安はありますが、とにかく次です。壁に手を当てて、館の建材を感じ取るうとしてみます。そこからは(何となく一階建ての様な

気がする?)程度のものでした。それも《固定化》や《硬化》が、使われていなければの話です。

(駄目だ……。全く分かりません。でも、土と風のラインに成った感覚は有ります)

結局、諦めて適当に歩きまわる事にします。暫く歩くと、渡り廊下がありました。渡り廊下の先には、大きな建物があります。

建物の廊下に明りが灯っていたので、暗くても建物の大きさが分かりました。どう小さく見積もっても、モンモランシ家の館の数倍有ります。

(今まで私が居たのは、来客用の離れですか?……。なら調理場は、普通本館に有るはず)

私は意を決して、渡り廊下を進み本館に侵入します。運良く本館に入っすぐの場所に、調理場を発見できました。おそらく家人と客人に、料理を出すのに都合のよい位置なのでしょう。

早速調理場に入り、食べ物を物色します。しかし出て来たのは、使用人用の黒っぽいパン(おそらくライ麦パン)とハシバミ草にベークン(らしき肉)とバターとチーズに塩他各種香辛料。他にも、良く分からない肉や野菜が有りましたがスルーします。

調理用具と薪はそろっているので、自力で料理する事にしました。使用人達を叩き起こすのも、気がひけますし。

先ず薪をかまどに入れて、魔法で火をつけます。火が安定するまで待って、網を敷き薄目に切ったライ麦パン2個分6枚にバターを

乗せて焼きます。焼きあがったら網を鉄板に変え、厚く切ったベーコンをジューシーに、薄切りにしたベーコンをカリカリに焼き上げ、塩他各種香辛料で味付けします。ハシバミ草も、軽く炙っておきます。（苦味緩和の処理）出来た物を、パン・ハシバミ草・チーズ・ジューシーベーコン・パン・ハシバミ草・チーズ・カリカリベーコン・パンの順番で重ねれば……。

「ベーコンハシバミチーズバーガーの完成です!!」

（勢いで命名したけど長いか？まあ、バーガーでいいか。それより、早く食せねば……）

もう既に「お腹がくうくうなりました」状態です。火だけ《凝縮》で消して、早速食べます。テーブルの上にバーガーと水を用意し、さあ食べるぞと大口を開けた瞬間、調理場入口から視線を感じました。

入口には、ピンクブロンドの女の子がいました。歳の頃は私より少し下位でしょう。寝間着も、上等な物を着ています。

……この娘はひょっとして。取りあえず食べるのを中止し、問いかけてみます。

「私はギルバート。……君は？」

聞いてみると急いで壁に身体を隠し、こちらを覗きこむようになりながら「ルイズ」と答えてくれました。

（この娘が虚無の担い手か……。マギは可哀想な娘。と、評していましたね。私個人としては例の件が無ければ、なるべく近づき

たくない人ですね……」

「もう遅いですから、早く部屋に帰って寝た方が良いでしょう」

反応がありません。私をじっと観察しています。

「喉が渴いているのですか？」

また反応なし。ですが時々視線が、私からバーガーに移っています。

「お腹が空いているのですか？」

今度は反応がありました。ルイズは、ビクツと身体を振るわせながら頷きました。

「二個あるから、一個食べますか？」

流石に私はお腹が空いている人の前で、堂々と自分だけ食べる事ができません。元々この食材は、公爵家の物ですし……。

私の誘いにルイズは警戒しながらも、空腹には勝てなかったようです。黙ってテーブルに付きました。

私は新たに皿を用意し、一個を移してルイズの前に出してやりまです。ですがルイズは、なかなか食べようとしません。

「どーやって食べるの？」

ああ、そう言う事か。

「特に作法はありません。サンドイッチと同じ様に、手で持ってそのまま食べます。その際、具が落ちないように注意してください」

ルイズは頷いてから、バーガーを手でつかみ齧り付きます。余程お腹が空いていたのか、凄い勢いでバーガーが減って行きます。まるで、普段食べさせてもらっていない子みたいだ。

そこで私も自分の分を手をつけようと、バーガーに手を伸ばしました。しかしその手を、途中で引っ込める羽目になったのです。

「ん~~~~!!.....み.....みず!!」

(まったく、そんなに急いで食べるから)

私はまだ手つかずだった自分の水を渡すと、ルイズは一気に飲み干します。私は新たに、自分用の水を取りに行きます。

帰ってくるるとルイズは、私のバーガーを凝視していました。

(これじゃ食べづらい)

「まだ足りないのですか？」

「えっ.....いえ、その.....」

(態度見れば丸分かりだつて言うのに、この娘は.....)

「まだ足りないのですか？」

「……はい」

念を押すと、ようやく肯定しました。

「あと何個食べたいのですか？」

「……二個」

「それを別にして、二個ですか？」

「……別で」

「分かりました。私の分含めて4個作ってきますので、先にそれ食べさせてください」

私は先程の薪から魔法で水分を分離し、手早く調理を始めます。

「ギルバート。あなた魔法が使えるのね……はぐ、もきゅ・もきゅ……」

「はい。もうすぐ七歳ですので。魔法を始めて、もうすぐ二年になります」

「……ゴクン。私はまだなの。魔法を使うときって、どんな感じなの？」

「流れですね」

「流れ？」

「そうです。力の流れを感じて、そこにイメージを乗せるのです。だから流れる力が、強過ぎて弱過ぎて魔法は成功しません。またイメージが曖昧だと、発動できないか正しい効力を発揮しません」

「そうなの？」

「はい。だから最初は魔法の発動訓練の後に、属性基準を調べるのです。これにより、流れの力加減を自覚するのです。結果として魔法の成功率が、圧倒的に変わってきます。まあ、これは我が家の教えなのですが……」

「ふーん」

と、ベーコンハシバミチーズバーガー四個出来上がり。皿に、二つずつ盛りつけます。ついでに、水差しに水を入れてテーブルに持って行きます。

「さて、食べましょうか」

ルイズは既に、バーガーに齧り付いています。私は（公爵家の令嬢がはしたくないな）などと思いつつ、食べ始めました。その時ふとルイズの食欲に、疑問がわきました。

「しかし、どうしてそんなにお腹が空いているのですか？」

私は何も考えずに、疑問をそのままぶつけました。女の子にそんな事を言えば、どうなるかなど全く考えていませんでした。

「ム……。ギルバートも、エレオノール姉さまと同じ事を言うのね」

ルイズは「ご機嫌斜めです」と、言わんばかりの態度になります。

「ひょっとして、三食を抑えているのですか？」

「だってエレオノール姉さまが、太るからってあんまり食べさせてくれないんだもん」

あー、そう言う事か。まあ姉妹間の問題は、姉妹で話し合っただけで済んでください。まあ、10年後にルイズの身長が低いのは、このせいかもしれません。逆に食べると、太るだけかもしれません。この件は、ノートタッチで行きましょう。取りあえず話題変換して、この話を終わりにする事にします。

「ところで、私の妹には会いましたか？」

「妹？」

「アナスタシアの事です」

「あつ。無いから気付かなかった。ギルバートも黒髪なのね」

(無いは余計だ!!無いは!!)

私は思わず、心の中で叫んでしまいます。

「モンモランシーも一緒に遊んだよ。・・・その後、エレオノール姉さまに怒られたけど。ディーネさんが、かばってくれなかったら・・・」

(・・・何やらかした)

「その後、・・・二人が優しくなった・・・」

聞かなかつた事にします。と言うか、食べ終わったしそろそろルイズは寝た方が良いと思うのです。まだ、船は漕ぎ出していませんが目が少し眠そうです。部屋に帰りつく前に、力尽きられても困ります。

「そろそろ眠いのではないですか？無理せずに、明日ゆっくり話しましょう」

「うん。・・・すこし眠い」

やはり、もう解散した方が良さそうですね。まあ、私は全然眠くないのですが。

「おやすみなさい」

「はい、お休みなさい」

ルイズに就寝の挨拶を返し別れると、私は館の中を少し歩く事にしました。ベットに入っても、眠れそうにないからです。

暫くしてから、足音が聞こえました。足音からして、たぶん大人の男の人だと思います。

私は予想が合っているか確かめたくなくて、足音の方に移動します。私の予想は的中していました。そこにいたのは、絵でしか見た事の無いモンモランシ伯爵だったのです。何故こんな時間に、モン

モランシ伯がここにいるのでしょうか？

私は確かめたくありません。モンモランシ伯爵の後を、つけてみます。

伯爵は部屋に入って行きました。すぐに部屋の前に移動して、中の音を拾います。部屋の中には、母上と知らない男の人二人（うち一人がモンモランシ伯）それに、知らない女の人一人で最低四人は居ました。拾った声と音から察するに、知らない男女はヴァリエール公爵と公爵夫人の様です。

中の人達は一通り挨拶をすると、機密性の高い話をするのかサイレントを使いました。これでは、中の声と音を拾えません。その場は諦めて、元の部屋に戻る事にしました。

離れに入った所で、使用人がこちらに走ってきます。

「あつ……」

しかし向こうは相当急いでいたらしく、暗がりには私に気付きませんでした。呼びとめようと思いましたが、既に距離が離れていました。

「まあいつか」

目覚めた事を母上達に、伝言をして欲しかったのですが……。まあ、それほど重要な話でも無いですし後でも十分でしょう。

この認識が甘すぎた事を、私は後で後悔する事になるのです。

第二十話 ただいま！！でも誰も居ないし腹減った！！（後書き）

原作のメインヒロイン？初登場です。

なぜだろう？ルイズはすごい健啖家なイメージがある。

感想お待ちしております。

感想少ないのは、作者が感想に過剰に反応するからか？

それとも、単純にこの作品が……

考えないようにしよう。

第二十一話 人見知り？嘘吐く時は関係ない！！

おはようございます。ギルバートです。初めて原作のメインヒロイン？に、会いました。まあ情報通り、美人にはなりそうでした。

それよりも、とにかく髪です。こんな坊主頭では、人前に出れません。個人的に坊主頭自体（多少寂しさ有るが）は、問題ありません。問題はとにかくこの髪型が、ハルケギニアでは目立つのです。朝になって鏡を見た時、この事実には驚愕然としました。

注 黒髪も、十二分に目立つがギルバートは気付いていない。

対策を考えましたが、思いつくのはカツラか帽子で隠すくらいです。結局カツラはすぐに用意できないので、帽子にしました。

すぐにでっち上げられる帽子は、やはり麦わら帽子でしょうか？
一から編むのは無理ですが、《錬金》で藁を布状にして形を整えれば、そこそこの物が出るはず。

早速藁を調達する為に、馬小屋に行きます。昨日の内に位置を確認しておいて、良かったと思います。

早朝の為に使用人達は、忙しそうにしています。母上達に伝言を頼みたかったのですが、忙しいところ邪魔するのも悪いので、真直ぐ馬小屋に向かいました。

問題無く馬小屋に到着し、藁を一束ゲットできました。しかしこの藁束量が、物凄く多いです。この藁束を持って部屋に戻ると、館内を藁だらけにしてしまうので、帽子作成は馬小屋の裏で行う事に

しました。

まずは藁を縦横に敷いて（一方だけだと、繊維の関係で破れやすい）《錬金》で、藁布を作ります。出来た藁布に、再度《錬金》で帽子の形に調整します。実際に被って、微調整すれば完成です。

完成品を見て、ちょっとカッコ悪いと思いました。藁を編んだ状態なら、藁本来の色でも見栄えはするのですが、布にしてしまったのでカッコ悪い印象になってしまいました。

（色を付けるにしても、染料が無ければ無理ですね……。いや、待てよ……。《錬金》で色付け出来ないか？）

試しに藁の切れ端に《錬金》で、色付けしてみます。薄く色がつかだけで、あまり綺麗とは言えません。

（そうだ《錬金》した金属の純度上げの要領で、色を濃く出来ないかな？）

途中で《探知》ディテクトマジックは、必要無い事に気付き《錬金》のみ繰り返しします。結果、綺麗な色を出す事が出来ました。

本命の帽子は、黒く染める事にしました。《錬金》を繰り返し、綺麗な漆黒に染め上げます。これだとデザイン的に物足りないので、イエローの鉢巻きを藁で作った帽子にくくりつけます。

帽子が完成したので、実際に被ってみます。まあ似合ってるかどうかは、鏡で確認ですね。

そこで余った藁を見ます。このまま馬小屋に突き返すのは、気が

引けました。折角なのでみんなの分も作って、プレゼントするのも良いなと思いました。心配かけたはずですし。

しかし全員分（4人分）となると、時間がかかります。母上に心配をかけてもなかったので、一度館に戻り使用人に目が覚めた事を伝えてもらうよう頼みました。

馬小屋裏で、帽子作成の続きを行います。帽子の形は、女の子用なので鍔を広めにしました。色は、ディーネがセルリアンブルー。モンモランシーが、スカーレット。アナスタシアが、ダークパール（ナス色）。ルイズは、・・・白でいいや。

同じように、帽子用のリボンを20色各1本用意しました。藁からここまで作るのに、かなりの時間と精神力を消耗しました。しかしお昼には、まだ少し時間が有るようです。

僅かに余った藁を、馬の餌箱に放り込み館に戻ります。

館に戻ると使用人を捕まえ、ディーネ達が居る場所へ案内してもらいました。

皆の居る部屋に入ると、アナスタシアがいきなり抱きついて来ました。そして、盛大に泣き始めます。

（心配していたのは分かったから、服に鼻水付けないでほしい・・・）

仕方が無いので、アナスタシアが泣き止むまで頭を撫でてやりま

暫くすると、アナスタシアが泣き止みました。

「ところで、その帽子は何ですか？」

ディーネが私が被っている帽子と、手に持っている色とりどりの帽子について聞いて来ました。

「黒は私のですが、他は心配かけたみんなへのプレゼントです」

私の言葉にディーネは嬉しそうに頷き、他は目を輝かせています。

「先ずは、赤がモンモランシーの分。白がルイズで、紫がアナスタシアの分」

そう言いながら、手渡していきます。そしてそこでいったん区切って、リボンを取り出します。ディーネが、（私には？）と目で聞いて来ましたので（ちよつと待て）と目で返します。

「それでこれが、帽子用のリボンだ」

黄色のリボンを取り、青い帽子に巻き綺麗に蝶結びを作ります。

実はこのリボンは、大きめに作った帽子のサイズ調整の意味があります。

「こうやって、リボンを帽子に巻くんだ。で、これがディーネの分」

そう言って、黄色いリボンがついた青い帽子をディーネに渡しました。

「リボンは一人5本までだぞ。ディーネは悪いけど、選ぶ順番を譲

ってください」

「はい」

ディーネは快く頷いてくれました。そうしている間に、ルイズとアナスタシアで欲しい色が被ってしまった様です。同じリボンの両端をつかみながら、睨み合いが始まっています。

「アナスタシア（とディーネ）には、後で好きな色を用意するからここは譲ってあげなさい」

アナスタシアは不満そうにしながらも、頷きリボンから手を離しました。

（うん。いい子いい子。家に帰ったら、もっと上等なりボンいっぱい用意してやるからな）

アナスタシアにアイコンタクトを送ると、今度は嬉しそうに頷いてくれました。

リボン争奪戦（ルイズ対モンモランシー戦）が、一段落すると昼食の時間になりました。そこでルイズが私（正確には私の頭）を見ながら注意して来ました。

「ギルバート。室内で帽子を被るのは良くないよ」

この注意に、私は溜息を吐きながら帽子を取ります。そこには、坊主頭が……。

「あつ……。髪の毛が無いから……。」

(だから……無いゆーな。私は、ハゲじゃない)

この言葉に全員の視線が、いったん私に集まります。そして三人の視線は、非難の視線となつてルイズに移ります。この状況にルイズだけが、ついて行けないようです。

「えつ……、なんで？わたし悪い事言つた？」

うん。言いました。

私の頭がどうしてこうなつたか、ディーネが説明しようとした所で、廊下が騒がしくなりました。

「あれ？何かあつたのかな？」

私は疑問に思い、ドアを開け廊下を確認します。そこには、使用人数人を引きずる母上の姿が……。

(な……何事ですか？)

その時、私と母上の目が合いました。まずい……、母上は今正気じゃない。

「……!!」

逃げようと思いましたが、間に合いませんでした。ドアごと吹っ飛ばされ、窓を突き破り外へ放り出されます。後少し《フライ》が遅ければ、頭から地面に着地するはめになっていました。

私はそのまま、突き破った窓から室内に戻ります。私も今の理不尽な一撃には、かなり頭に来ていました。

「何するんですか母上」

「何するんですか母上。じゃないわよ。私達がどれだけ心配したと思ってるの。このバカ息子!!」

「そんなに心配かけた、覚えは無いですけどね!!」

「デイーネちゃんの、ウォーター・シールドが間に合わなかったら今頃消し墨よ!!」

「あの時は、それ以外生き残るすが有りませんでした!!」

「それはそれ、三日ぶりに目を覚ましたのに、親に何も言わず遊びまわってるって如何いう事!!」

「遊びまわっていません!!」

この段階で使用人等の魔法が使え無い人は、既に避難してました。そして母上の次の一言で、デイーネとアナスタシアはルイズとモンモランシーを抱え、窓から逃げ出します。

「黙りなさい。アストレア!!」

ブチッ!!

「ははうえ〜。今の一言高くつきますよ……」

「やれるものなら、やってみなさい……ア・ス・ト・レ・ア」

私は、魔法の詠唱に入ります。《凝縮》《錬金》《発火》の順で、流れるように詠唱します。狙いは水素爆発です。

一方母上は、エア・ハンマーの詠唱に入ります。

そして……。

派手な爆音が、ヴァリエール公爵家の廊下に響きました。

その後私と母上は、廊下で気絶しているのが発見されました。

次の日目が覚めると、ヴァリエール公爵の所に連れていかれました。母上は平気な顔をしていますが、私は心配な事があります。廊下の事だけなら、過去の情報からヴァリエール公爵は許してくれると思います。

しかし私はヴァリエール公爵の気を引く為に、駆け引きをしなければならぬのです。念の為母上には、話を合わせるようお願いしておきました。

いよいよご対面です。

部屋に入ると、公爵と公爵夫人がいました。

「この度はご迷惑をおかけして、申し訳ありませんでした」

母上が謝罪をしました。それに合わせ私も頭を下げます。

「今回は不幸な偶然が重なっただけだ。よって、今回の事は不問とする」

(えっ……、いいの？ケガ人こそ居なかったけど、修理代は結構な額になると思うけど……)

私がそんな事を考えている間にも、母上達の話はどんどん進んでいきます。その話をまとめると、こんな感じですよ。

1・使用人達の連絡の行き違いが今回の原因である。

2・話を大げさにしたのはヴァリエール公爵である。(以下例)

「まさか、公爵家に賊が侵入したのか？」

「使用人には伝えるな混乱を招く訳にはいかん」

「信用できる者だけを使い搜索を行う」

3・公爵がシルフィア(母上)に待機を命じた。(ストレス増大の要因)

(ああ、今回の責任はヴァリエール公爵にも有るのか。それでも、不問は無いと思うのだが……)

しかし、ヴァリエール公爵がこのありさまで……もしかして、判断を鈍らせる何らかの要因があったのか……。

ここで話が終わりました。

母上は私を、公爵と公爵夫人に紹介してくれます。

「ギルバートです。よろしくお願ひします」

「うむ。《岩雨》と《乱風》の子となれば、期待せざるおえん。あの爆発魔法も侮れんしな」

ヴァリエール公爵は、一見上機嫌の様です。将来優秀な人材が、自分の配下に入ると考えているのでしょうか？しかし、油断は出来ません。と言うか、自分の家壊されて上機嫌とかあり得ないから。それでも、公爵の気を引く行動に出なければなりません。

「公爵様」

「なんだ」

「実はある人から、伝言を預かっていました」

「伝言？」

「はい。マギと言う、学者と商人を兼業している人からなのですが……」

「ほう。言ってみよ」

「はい。……爆発魔法の正体と対策を知っている。ご興味があればありましたら、一度お会いしたい。……以上です」

「爆発魔法？君が使った魔法か？」

「いえ、別物と聞いています。私が使った爆発魔法は、複数の系統魔法を組み合わせたものです。内容はマギが開発した秘伝ですので、勝手に話せませんが……。マギの話だと、コモン・マジック系

統魔法に関わらず、全ての魔法が爆発するらしいです。にわかには信じられません。……」

「そのような事、有るはずが無いだろう」

「はい。私もそう思います。しかしマギは、このような冗談を言うタイプの人間ではありません」

「ふむ……だが、会うわけにはいかんな」

「はい。そのように伝えておきます。お話を聞いていただき、ありがとうございました」

予想通りの話の流れです。これでルイズが魔法練習を始めれば、マギとのパイプとして繋がりが出来ます。この後は、マギを行方不明にしてしまえば良い。しかし、念は押しておくべきか？私は、もう一つのプランを実行する事にしました。

「ところでカーリー又様」

ターゲットは、公爵夫人のカーリー又様です。

「カーリー又様は、あの《烈風》のカーリン様と親しいと聞きました」

「そうね。親しいと言えば親しいわ」

（しらじらしい。本人が……）

「実はマギの友人がカーリン様のファンで、いろいろな事を調べたらしいのです」

「そうなの？」

「しかし出てくるのは、信じがたい話ばかりだったそうです」

「どんな内容？」

「はい。戦場で華々しい戦果をあげる一方で、私生活は酷いものだったと」

「それで？」

(うわ……怖い)

「なんでも奇抜な格好で王都を練り歩き、ユニコーン隊と派手に喧嘩をし、衛士隊を一度首になったとか……」

うわ。表情変わらないのに、一瞬血管が浮かんた。

「他にも吸血鬼の姉妹を捕まえて、每晚相手をさせていたとか……
・同室の同僚の男に毎晩夜這いをかけていたとか……
・酷いものではマリアン又様と愛人関係だとか……」

「情報源は？」

「いえ又聞ですので、分からないそうです。マギは僻みや嫉妬から来る、根も葉もない噂話だろうと言っていました。でも、その友人がマギを介して取り寄せた絵を、たまたま見る機会があったのですが……。その……凄かったです」

「どのような絵なの？」

「題名は、『烈風』のカリンの真の姿。二枚で対になった大きな絵なのですが、同じ服装で前からの絵と、後ろから振り返るような絵です。格好はユニコーン隊と喧嘩した時の物と、聞いています」

カリー又様の顔が、明らかに引き攣りました。

「上着はギンギラサテンイエロー。羽やレースがいつぱいついていて、マントには大きなマンティコア。真っ白なズボンには、尻尾付きで竜が刺繍され目玉は宝石。宝石だらけの蝶の形のマスクと、帽子には髑髏の模様入りでさらに水晶の大きな髑髏が付いていました。．．．あれ？．．．．．そう言えば、その絵のカリン様とカリー又様って似ているような．．．．」

「．．．．もう良いわ。忘れなさい．．．．。それから、先程の返答を変更します。マギと言う人に、会いましょう。そして、どんな手を使ってもその絵を処分しなければ．．．．」

「え．．．．、でも．．．．」

カリー又様は私の両肩をガシツとつかみ、物凄いプレッシャーをかけながら、私をがくがく揺らします。流石に見かねたのか、公爵と母上が私からカリー又様を引き離します。

「とにかく、出来るだけ早くマギと言う人に会わせなさい」

少しして落ち着いたカリー又様が、命令してきました。しかしここで、ハイと言うわけにはいきません。

「あの……。マギの使い魔が、逃げちゃいました」

窓を見ながら、そう言ってあげました。

「……な!」

これで目標達成です。公爵家は、マギに会いたい理由が増えました。内容は以下の通りです。

- 1 ・ルイズの爆発魔法について。
- 2 ・カリンの絵について。(処分的な意味)
- 3 ・カリンの黒歴史の口止め。
- 4 ・覗きの詰問。

一方でマギは、公爵家に接触したくない理由が出来ました。

- 1 ・友人を、貴族に売るわけにはいかない。
- 2 ・商人として、顧客情報を漏洩するわけにはいかない。(信用問題)
- 3 ・単純に《烈風》のカリンが怖い。
- 4 ・覗きの詰問は勘弁。

特に、4番の覗きの詰問がキツイです。下手をすれば、無礼討ち。そうでなくとも、いろいろ吐かされるでしょう。

パイプ役としては、問題がありません。しかし公爵家にとって、マギとの接点はドリユア家のみなので問題ありません。後は適当なところでマギを、行方不明か死亡したとすれば良いのです。強引な手を使うなら、ツェルプストー家に逃げると言えば……。

細工は流流仕上げを御ろつじろ……です。（おっと黒い笑いが、漏れそうになってしまいました）

カリー又様は尚も会わせるように言っただけでしたが、私は「マギは、友人を売るような真似はしないと思います」と、言っておきました。

話はこれで終了です。部屋を退出する際、カリー又様がなんだか憔悴していました。

（ちょっとやり過ぎたかな？……まあ、いっか）

私は母上と一緒に、来客用の離れに移動します。

母上は自分の部屋に、私を招き入れました。どうやら先程の話の補足があるようです。部屋に入ると鍵をかけ、サイレントで人に話を聞かれないようにします。

話の内容は、耳を疑う物でした。内容を以下にまとめます。

1. 今回の招待はヴァリエール公爵の発案である。
2. アホ貴族を抑えるのはヴァリエール公爵の仕事だった。
3. 今回の事は敵の末端の暴走が原因だった。
4. アルノーには歳の離れた妹がいた。
5. 敵の中に《制約》ギアス使いがいた。

以上の内容で、事の流れは以下の通りです。

ヴァリエール公爵は、完璧に敵を抑え込み手を出せない状況を作り上げた。

しかし、敵が末端を抑えきれずに暴走を許してしまう。その中に、優秀な《制約》が使用可能な水メイジがいた。

そこで敵は、護衛に着く予定のアルノーに目をつけた。アルノーには、妹がいたのでこれを拉致し《制約》で洗脳。アルノーに、モンモランシ伯を裏切るようにせまった。

だがアルノーは優秀で、妹が《制約》にかかっている事を初見で見破る。しかし敵に妹を人質にされ、アルノーは捕まってしまう。そしてアルノーも《制約》で、洗脳されてしまう。

結果……アルノーは私達を殺そうとした。

正直に言わせてもらえば、聞くに堪えない話でした。アルノーさんは、裏切り者でも敵でも無かったのです。そしてそんな人を私は……。

……コロシテシマッタ……。

吐き気が私を襲います。いつその事本当に吐いてしまえば、楽だったかも知れません。しかし更に、吐き気がする話が続きます。

アルノーさんの妹は、死体で見つかったそうです。

死体は酷い有様で、何度も暴力を振われた跡があったそうです。それだけでなく、何度も性的に乱暴された跡もあったそうです。しかし母上はこの時だけ、私から目を少しだけ逸らしました。

(母上の態度からして、おそらく死体はもっと酷い状態だった。それも子供相手に、そこまで話しても問題なく感じるほどに……)

これで敵を追い詰める証拠が、いくつも出てきたのは皮肉としか言いようがありません。

この事件の直後だけに、私が居なくなつたと報を受け母上達はおおいに焦ったそうです。

(それが、あの判断ミスにつながってしまったのか)

……この世界には、なんでこんなに腐った奴らが居るんだろ
う？

第二十一話 人見知り？嘔吐く時は関係ない！！（後書き）

今回は、主人公が凹んでる間に事態が急速展開する予定です。

感想お待ちしております。

第二十二話 凹みます！早く復活せねば

どうも……。ギルバートです。ただ今ベコベコに凹んでおます。

初めて人を殺しました。思い切りブレイドで、叩き切りました。

敵だった。仕方が無かった。そして、撃たねば撃たれていた。そう思い、頭からその事実を追い出していました。

事実、夜中に出歩いてみたり、自分で料理をしたり帽子作りを試みたりと、普通なら他人の家ではやらない事をしていました。それはじつとしていると、如何してもこの事を考えてしまう。と、無意識に感じていたからかもしれません。

しかし、現実には残酷でした。

アルノーさんは《制約》ギアスにより、操られていただけだったのです。

どんどん思考が、鬱な物になって行きます。もし、マジがまだ消えていなかったら、私になんと言ったのでしょうか？ひよっとして、笑い飛ばしてくれたでしょうか？それとも面白い突っ込みを入れて、気を紛らわせてくれたでしょうか？

（もし、マジがいれば……。初めての实战で、いきなり味方殺し。どっかの艦長の息子がよー！」と突っ込みを……。）

止めましょう。思考が、更に鬱になります。

兎に角じつとじていても気分は晴れないと思い、行動に出る事にしました。

これからもこの世界で生きていくには、避けて通れないと分かっているのです。

それなら（何時か向き合わなければならぬ現実なら、早い方が良い）と、自分に言い聞かせます。

先ずは私が意識を失った後現場で、何が有ったか知ろうと思いましたが。

話を聞く相手を求めて最初に見つけたのは、アナスタシアとモンモランシー（おまけでルイズ）でした。正直言ってこの子達に、あの時の事を聞いて良いのか考えてしまいます。しかしモンモランシーには、私のブレイドを見たか確認し必要なら口止めしなければなりません。

（先にディーネに話を聞いた方が、良さそうですね。もし、モンモランシーが目撃していれば、ディーネ達が先に口止めしているかもしれませんし……。もし見ていなければ、藪を突いて蛇を出す事になります）

三人に、ディーネの居場所を聞きましたが「知らない」と、返事が返ってきました。仕方が無いので、自力で探す事にします。

先ずはディーネの部屋に行きます。しかし空振りでした。そして、いきなり手詰まりです。

(他にディーネが行く場所は、何処かな？・・・駄目だ。全く思いつきません)

仕方が無いので適当に歩きながら、見かけた使用人に片っ端から聞いていきます。しかし、結局分かりませんでした。

(諦めて別の事するか?)

そう思った時、ひらめく物が有りました。ディーネも流石に子供の相手ばかりでは、疲れてしまいます。少しは気分転換をしたいと考えるのではないでしょうか?

(となると行先は、身体を動かせる所だな・・・。それも剣を振りまわせる場所か)

私はそう予想し、練兵場に向かう事にしました。私の予想通り、そこではディーネが剣の稽古をしていました。

「ディーネ。探したよ」

私が話しかけると、ディーネが稽古を中断しこちらを向きます。

「ギル。どうかしたのですか?」

「ディーネに少し話が有るんだ」

「急ぎですか?」

「いや。私も身体を動かしたいし、訓練の後でいいよ」

ディーネは頷くと、剣の稽古に戻りました。

「上がる前に、一回魔法無しで模擬戦しないか？」

「いいですよ」

私の提案にディーネは、剣を振りながら答えを返してくれました。

私は刀が無いので、手頃なサーベルを二本借りる事にしました。

よく柔軟をしてから、身体と剣をならすように型練習を始めます。

暫くすると、身体も程好くあつたまつて来ました。ディーネも、そろそろ上がるつもりの様です。

「では。一手お相手お願いします」

「受けて立ちましょう」

私の言葉に、ディーネがかえします。

私達はそれぞれ、構えをとります。ディーネは剣を両手で持ち、中段の構え。私は左右の手にサーベルを持ち、半身になり左手を前に突き出し、右手は相手から隠すように構えます。(レイピアに近い構えです)

先手は私を取りました。身体をディーネの方に倒し、左足を滑るように前に出し突きを放ちます。この動きに対して、ディーネは左やや後ろに避けます。右に避ければ左薙ぎと右突きが、下に避けれ

ば切り落としか左膝が飛んで来るからです。

ディーネはお返しとばかりに、私の頭に向けて左から剣を振りおろします。私は身体を右に倒し、頭の直撃を避けつつ右のサーベルで受け流します。このまま左サーベルで、ディーネを切りつけるつもりでした。

しかしディーネは、私とぶつかる様に距離を詰め、左膝の蹴りを私の腹に放ちます。私は後ろに跳びながら、左膝で蹴りを受けます。そしてその勢いを利用して、そのまま間合いを開けました。

「相変わらず強いですね。ディーネ」

「まさか、最後の膝がかわされるとは思いませんでした」

そのまま少しだけ睨み合い、今度はディーネから仕掛けてきました。私の左サーベルを力強く弾き、がら空きになった頭へ剣を振り下ろしたのです。（剣道の払い面）私は半歩後ろに下がり、簡単に回避します。

正直に言っつて、ディーネがこんな見え見えの攻撃をしてきた事に、疑問が頭をよぎります。しかしこの隙に、反撃しない手は有りません。私は半ば反射的に、右突きを放ちました。ここでディーネは左手を剣から離し、私の右突きをその手で右にはじいたのです。そのままディーネは、身体を独楽の様に回転させ……。

私が「しまった！！」と思った時には、ディーネの剣は私の首筋に突きつけられていました。

「参りました」

私の言葉に、デイーネは嬉しそうに頷きました。

お互い後片付けをして、いったん解散します。身体を清めた後、私の部屋に来てもらう約束をしました。

私が身体を清め、着替えを済ませてデイーネを待ちました。暫く待つと、デイーネが来てくれました。私はデイーネを部屋に招き入れ、鍵を閉めるとサイレントで聞き耳を封じます。

「話と言つのは襲撃の時の事です。私が気を失った後どうなったか、教えてほしいのです。視界が炎で埋め尽くされる所までは、覚えているのですが……」

デイーネは頷くと、話し始めました。

あの後私は気を失い、前のめりに倒れたそうです。一方でフレイルム・ボールは私に切られ、爆散したようそうです。爆散した炎はデイーネのウォーター・シールドで、その大部分を防ぐ事が出来たそうです。

「デイーネはドットメイジなのに、よく防げたね」

「残念。今の私は、水のラインメイジです」

デイーネが自慢げに、言って来ました。あの時私を助ける為に、その力を覚醒させたそうです。

「ありがとう。デイーネ。私もあの時力が覚醒して、土と風のラインメイジになりました」

ディーネが一瞬キョトンとし、納得いかないと言わんばかりに睨んできました。私は真剣な表情で、続きを促します。

ディーネのウォーター・シールドでは防げなかった炎が、倒れる途中の私の頭に命中し髪が燃え上がったそうです。すぐに《凝縮》で、火を消し止め《癒し》で治療を開始しました。モンモランシーが水の秘薬を持たされていた事も有り、火傷の痕は残らなかったそうです。

クレマンさんとアルノーさんは、この戦いで死亡。

騎兵八人中三人が重傷。四人が軽傷。（母上とディーネが、秘薬付きの《癒し》で治療したので、その場ですぐに全快しました）

母上は敵がラインメイジが三名だけで、後はドットメイジだった為かすり傷ひとつ無かったそうです。

「あの時、私のブレイドを目撃した人間は、何人いますか？」

「騎兵は全員大丈夫でした。気付いたら爆炎が上がっていた。と、言っていました。そのせいで隙ができ、ケガ人が出たそうですが・・・。モンモランシーもギルが飛び出した後、両手で顔を覆っていましたから、見られた心配は有りません。敵の方も問題なしです。そう言った意味では、運が良かったです」

「・・・そうか」

「これで、あの時の話は全部です」

ディーネがこれで終わりと、ジェスチャーしながら言ってきました。ディーネはあの事を知らないのか？それとも……。

「ディーネ」

「なんですか？」

「アルノーさんは、《制約》で操られているだけでした」

「……！？そうですか。知っていましたか」

やはりディーネは、知っていて隠していたようです。

「私は立派な、味方殺しですね……」

私は自嘲気味に、呟いてしまいました。

「ふざけた事言わないください。あの時ギルがやらなければ、私達は死んでいました。アルノーさんには気の毒ですが、あの場で私達が死んであげる義理は有りません」

「そうだけど……」

「アルノーさんの手で、私達を殺させる訳にはいかないでしょう？ギルはアルノーさんの手が、私達の……モンモランシーの血で汚れるのを防いだのです」

ああ。私は「アルノーさんを、主の家人殺しの汚名から守れた」と、言う事ですか。そう言う考え方も有るのですね。

私はまだ完全に心の整理が出来ませんでした。この考えに方に救いを感じる事が出来ました。

そして私達が、領地に帰る日になりました。ヴァリエール家全員で、見送りをしてくれました。

結局エレオノール様とカトレア様とは、挨拶をしただけで一言も会話をしませんでした。

エレオノール様とは良く顔を合わせましたが、すぐにルイズに説教を始めてしまうので、話をする事ができませんでした。（なんとなく、婚約を断る人達の気持ちが分かりました）

カトレア様と顔を合わせたのは、挨拶の時のみでした。ルイズ達はカトレア様の部屋に、良く出入りしていた様ですが、私は誘われなくてもカトレア様の部屋へ行きませんでした。

正直に言わせてもらえば、カトレア様の本質を言い当てる所が怖かったからです。アルノーさんの事が有ったばかりですし、何より自分が歪んでいる事は自覚しています。

（避けられている。と、思われていなければ良いですが……）

まあ、気にしても仕方がないですね)

帰ったらラインメイジになって出来る事が増えているので、いろいろ試してみる予定です。

何時までも引きずっている訳には、行きませんので……。

第二十二話 凹みます！早く復活せねば（後書き）

ちょっと予定変更で、主人公の復活を早めます。

だって、何時までもうだうだしててもウザいだけだから。

次は、魔の森に関する動きが有る予定です。

私は、バトルはちょっとダメっばいなと思いました。

感想お待ちしております。

第二十三話 馬鹿のヤケクソ恐ろしい

こんにちは。ギルバートです。無事にドリユアス領の館に、到着できました。帰りは襲撃など、一切ありませんでした。安全な旅つて、素晴らしいです。

そして帰って早々に、帽子用のリボン作りをさせられました。単色だけで無く、刺繍と模様つきの豪華な物も作られました。

(後でルイズやモンモランシーに自慢されると、また作るはめになるのか。これは時間と精神力の消費が、かなり大きいのに……)

アルノーさんの事ですが、まだ少しだけ引きずっています。しかしディーネのおかげで、だいぶ軽くなったような気がします。そして、架空の人物である(実在?)あの人の顔が頭をよぎりました。

「軽くなった気がする。……引きずり過ぎて……、すり減ったかな……」

思い出したセリフが、自然と声になって口から出ていきます。

(傍から見ると、イタイ人に見えるんだろうな……)

あの人も狂ってしまった尊敬する先輩を、世界の為仲間の為にその手にかけています。(注 マギ主観)

今ならあの人の気持ちも、少しだけ分かるような気がします……
。そして私はこのセリフを、借り物では無く自分の言葉として、

口にする日が来るのでしょうか？

そんな事を考えてから、アルノーさんの顔を思い出します。

その時部屋の入口に、人が居るのに気付きました。

・・・あれ？デイーネ？何時からそこに？まさか・・・、今の聞かれてた？

待って・・・、お願いだからそんな目で見ないでください。

(うう。恥ずかしさのあまり、涙出そうです)

何か言い訳しようと口を開きますが、こんな時に限って頭の回転は完全にストップしていました。

「あ・・・」

言葉が思い浮かばなかった為、私の口からそんな声が漏れます。デイーネに伸ばしかけた手は、途中で止まり宙をさまよわせ、結局引っ込めてしまいました。気まずさのあまり顔もそらしてしまいます。

デイーネはそんな私を確認すると、首を僅かに左右に動かし走って逃げ出します。

(今の私は、そんなに気持ち悪かったのでしょうか？何も走って逃げる事ないと思う・・・)

その後数日間、何故かデイーネは私に優しくかったです。

さて、馬鹿貴族共はどうなったでしょう。結果的に多大な犠牲を払った以上、生半可な結果では納得できません。

王都では犯人側に、禁呪（《制約》ギアスのこと）使いが居た為こちらの士気は高く敵側は動揺していました。当然この隙を逃す訳にはいきません。

ヴァリエール公爵が、敵の上層部に睨みを利かせ動きを封じます。そしてヴァレール・ド・クールズが、今回の証拠をもとに末端を逮捕していきます。

敵は叩けば埃が出る者達ばかりなので、逮捕者が出る度に新しい証拠が出てきます。

一人また一人と、逮捕者が王都へと送られて行きます。馬鹿貴族には、それが自らの滅びの足音に聞こえたでしょう。（ザマーミロ）

それよりも私達兄弟には、切実な問題があります。

それは……、母上です。

父上は敵を討つ時に、復帰を認める約束をしていました。しかし、領地の守備を蔑に出来ない状況の為、母上は領地から出られないのです。（母上まで領地不在になると、馬鹿貴族が自棄をおこして魔の森に突っ込んできた場合、止める手立てが無くなる可能性が有るからです）

母上も状況は理解しているので、文句は言いませんが当然ストレスが溜まります。

ここでストレスの発散口になるのは、私達の訓練になるわけで・・・。（注 守備隊は万が一の為に、待機させておかなければならない）

こんな状態なので、私達が敵が自棄をおこして欲しいと思ったのは、仕方が無いと事だと思えます。

しかしまさか本当に、自棄をおこして攻めて来るとは思いませんでした。敵の辞書には、我慢・神妙等の言葉が載っていないようです。

この日私達は、いつも通り訓練（今は母上にストレス発散）を行う為、森に移動しようとしていました。すると突然、ドンドンと花火の様な音になったのです。この音は緊急時に、関所やパトロール中の守備隊員がならず警報です。

私達はこの音に緊張しましたが、母上の顔を見て別の意味での寒気へと移行しました。母上の顔には、極上の笑顔が有ったのです。そう、寒気がするほどの極上の笑顔が・・・。

母上は私達に、館での待機を命じました。

その命令に私達は、ただ頷くことしかできませんでした。主に、恐怖と言う意味で。

母上は《偏在》を使うと、一人を除き騎獣舎に向かいます。残ったのは本体のようで、走って来た守備隊隊員から状況を聞き、次々に指示を出しながら去って行きました。

私はその中に「クルーズ領に、救援を送る準備をしろ」と、言う指示を聞きとりました。

私は母上が何故この様な事を言うのか、一瞬分かりませんでした。しかし冷静に考えてみると、この判断は適切です。現状馬鹿貴族に一番恨みがかつているのは、クルーズ家のヴァレルです。馬鹿貴族達はその戦力の大半を、クルーズ家に向けるでしょう。しかし敵は馬鹿で阿呆ですが、悪知恵だけは働きます。

《乱風》のシルフィアの名は、《烈風》のカリンと比べると知名度に大きな差が有りますが、軍関係者にはかなり有名です。

本来なら《乱風》のシルフィアが居るドリユアス領は、避けるべき地のはずです。しかしあえて戦力を割いたのは、囷の為と考えるのが妥当です。

(馬鹿貴族の狙いは、救援を遅らせて被害を拡大させる事)

しかし分かっているとしても、すぐに救援を出す訳には行きません。現状では敵の手がほぼ間違いないと言っても、絶対ではないのです。もし救援を出した後に、敵の全てがドリユアス領に来る事になれば、守りきれない可能性が高いです。

更に敵には、もっと簡単で確実な手が有ります。ドリユアス領を大きく迂回し、領外の南から一度魔の森に入り、魔法を放ち幻獣・魔獣達を引き連れ領内に突入する方法です。普段なら、証拠が残り

過ぎる為絶対に使わない手ですが、自棄になっただけでいけば話は別です。

モンモランシ伯には、この時の為に防衛線を敷いてもらっていますが、これを絶対の物と過信する訳にはいきません。

「ギル……。領は、大丈夫でしょうか？」

ここでディーネが、話しかけてきました。アナスタシアも不安そうにしています。

「ドリュアス領は問題ありません。守備隊は優秀ですし、母上と言う最大戦力が居ますから」

私は歩きながら説明します。

「敵の目標はクールズ家です。現状では、馬鹿共の一番恨みがかつていますし。ドリュアス領に仕掛けるのは、クールズ領への救援を遅らせる為の策でしょう」

ここで館の扉を潜り、中に入ります。

「だから家は、心配ありませんよ」

私は一度立ち止まり、アナスタシアの頭を撫でてやります。

「……うん」

アナスタシアは私の言葉を信じ、頷いてくれました。

しかしディーネは、私がドリュアス領は心配無いと言う一方で、

クールズ領を心配している事に気付いたようです。複雑な表情を
していました。

そこで稽古着から普段着に着替える為、いったん解散します。

ドリュアス家にとって、クールズ家の安否は重要な意味が
りま
す。理由は、防衛範囲の拡大による負担増加です。これだけで支
出
は大幅に増え、収入は落ち込みます。(働き手を防衛に駆り出す
か
ら)

そして一番重要なのが、トリステイン王国の国力です。

クールズ領のすぐ北は、王領です。クールズ領が魔の森に吞
ま
れれば、これ以上の拡大を阻止する為、防衛線を敷かねばなり
ま
せん。しかも王都トリスタニアまで、障害らしき障害が有りませ
ん。
防衛線は、これまでの規模とは比較にならないほど、大きな物とな
る
でしょう。

それは近隣の重要拠点である、ラ・ロシエールにも大きな影響を
与
えます。防衛線とアルビオンとの貿易航路が、近過ぎるせいです。
警
備の為に航路と運航スケジュールに制限がかけられ、貿易収入の
激
減が予想されます。

ただでさえトリステイン王国は、国力の乏しい国です。この防衛
費
増大と、貿易収入の激減に国が傾きかねません。

「本当に馬鹿貴族共は、自分の事しか考えてない。我がままを言う
だ
けなら、子供にでもできる。それが駄目なら、癩癩起こして人に
迷
惑かける。しかも、力(魔法)と身分を持つているから、下手な
テ
ロリストより性質が悪い」

私はつい口にしてしまったこの事実には、溜息しか出ませんでした。そして私はこの状況で、待つことしかできませんでした。

母上が帰って来たのは、それから四日後の昼でした。

母上は、かなり疲れて表情をしていました。しかし、話を聞かすにはいらませんでした。

「母上。お疲れの所申し訳ありませんが、話を……」

「分かってるわ」

私が言葉を言い切る前に、返事が返ってきました。そして母上は、今回の騒動の結果を話し始めました。

予想通り、敵の狙いはクールーズ家だったようです。ドリュアス領に来たのは、少数の飛行部隊のみでした。

ドリュアス領とモンモランシ領は、被害らしい被害を受けませんでした。しかし敵の囹作戦は、十分に成功してしまいました。

母上達は、囷にかなりの時間を取られてしまいました。飛行部隊は簡単に殲滅出来ました。しかし、飛行部隊の一人が最後に「地上に別働隊が居る」と、発言したのです。嘘と分かっているにもかかわらず、確認が必要でした。

迂回を狙った敵は、運良く全てモンモランシ伯が捕まえてくれたそうです。

ドリユアス領で別働隊を搜索している頃、敵の本隊はクールズ領内に突入しました。

ヴァレールも十分な準備を整えていたので、問題なく敵を迎え撃ちました。更に王都より敵を追ってきたヴァレールが、部下と共に挟撃をしかけました。これで敵を殲滅し、戦闘終了となるはずだったのです。

しかし、ここでクールズ家の守備隊が、ミスとは言えない小さなミスをしました。隊列が僅かに乱れたのです。この時敵の風竜が、強引に突破を仕掛けたのです。

結果。突破は成功しましたが、代償も大きく複数の魔法の直撃を受けます。

ここで残った敵が、ヴァレール達を足止めします。なんとか、グリフォン二体とヒポグリフを騎獣とした三人が、足止めを振り切り風竜を追います。しかし、手負いとは言え相手は風竜。簡単には、追いつけません。

結局、魔の森への突入を許してしまいます。敵は魔の森に、ファ

イヤー・ボール撃ちこみ逃げようと思いますが、そこで風竜が力尽き墜落してしまいます。

本来なら風竜の主が攻撃されて終了だったのですが、幻獣・魔獣達は追っていた三人も敵と判断し攻撃を仕掛けてきました。三人はこれ以上魔法を使い、幻獣・魔獣の数を増やす訳にもいかず、防戦に徹しました。

そこに敵を殲滅したヴァレール達が、合流します。

この状況にヴァレールがとった作戦は、逃げの一手でした。魔の森に逃げ込み隠れてやり過ぎすしかないと、判断したのです。

結果は成功。全員無事に、幻獣・魔獣を撒く事に成功したのです。

しかし、ここで不運な行き違いが発生します。

魔の森に消えたヴァレールを探す為、ロベール殿が大規模な搜索隊を組織し送り込んだのです。

ロベール殿は高齢の上に、既に妻と妾に先立たれ優秀だった息子アランを、魔の森で失っています。唯一残されたヴァレールを、失いたく無かったのでしょう。

結果的に領内の警備が手薄になり、その隙に侵入していた別働隊（騎馬）が、派手に動くのを許してしまったのです。

別働隊は北東から侵入。警備がきつい西と、ドリユアス領が近い南東を避け、南西に魔法を撃ちこみました。

ヴァレールが領地に戻った時、そこには地獄が広がっていました。

燃え上がる家々、無残に内臓を晒した領民達の死体。そしてこの光景を作りだした、幻獣・魔獣・亜人の姿。

しかしヴァレールは、激昂する訳にはいきませんでした。数人の部下に、増援と伝令を命じます。

作戦は幻獣・魔獣を魔の森に誘導し、先程と同じ要領で撤くことです。

ヴァレールは幻獣・魔獣を引き付け、魔の森まで誘導する事に成功しました。

一方で亜人の対応は、遅れに遅れました。搜索隊を組織し魔の森に向かわせた事により、余剰人員が居なかったのが原因です。

そこでロベール殿は、護衛と少ない兵員をつれて自ら亜人討伐に向かいました。

結果は……、酷いものでした。

亜人はドリユアス領からの救援により、なんとか撃退に成功。しかし、この戦闘でロベール殿が死亡。

今回の一件により、魔の森の浸食が進行し、南西からクールズ領全体の約四分の一が吞まれました。

そしてヴァレールはその後の搜索で、死体で発見されました。

本当に酷い。散々な結果です。

母上は全て話し終ると「眠りたい」と言って、寝室に引っ込んでしまいました。

しかし本当の最悪は、ここからでした。

今回の一件で父上に与えられた褒賞が、旧クールズ領のだったのです。領主が死んだばかりで、混乱している土地を貰っても嬉しくありません。更に魔の森に接する面積が、物凄く増えてしまいました。これはドリユア家にとって、マイナスになる褒賞です。ハッキリ言って要らないです。

なんでも「旧クールズ領を治められるのは、ドリユア子爵において他に無い」と、王からお言葉を頂いたそうです。国王よりそこまで言われてしまったら、トリステイン貴族として受けない訳にはいきません。その上で、父上は魔の森の調査を命じられました。

国王の本音は魔の森の拡大防止の為の費用を、ドリユア家に押し付けたかったようです。さらに今回の一件で、旧クールズ領の領民は貴族に対して、大きな不信感が有るはずで、クールズ領の発展に協力していたドリユア家に任せる事で、その不信を和らげるのが狙いのようです。

更にこの褒賞を、王に進言した人間が居ました。

新しい高等法院長です。

その名前に見覚えが有りました。

・・・リッシュモン。

見間違いか？と思いました、違うようです。

同名なだけか？と思い、父上に聞いてみます。

「リッシュモン殿か？確か10年前にダングルテールにて、疫病が発生した事が有った。その時汚れ役を買って出た、人格者と聞いている。それに、今回の逮捕劇の情報提供者だ」

（チ・ガ・イ・マ・ス。それ疫病じゃ無く、新教徒狩りだから。それに情報提供者？仲間を売って、自分の手柄にしたただけだろ）

多くの馬鹿貴族を失脚させて、安泰かと思っただらそうでもなかったようです。

第二十三話 馬鹿のヤケクソ恐ろしい(後書き)

最近、外伝を考えています。

書くのは、復帰後になりますか……。

ディーネの両親の出会いから、ギルバートとディーネの出会いまで
を書いたものです。

読みたい希望者居るのかな？

個人的には、書いてみたいかな。

感想お待ちしております。

第二十四話 刀を打つべし！！え？それどころじゃない？

こんにちは。ギルバートです。馬鹿貴族共の処分が終わり、これで枕を高くして眠れると思っていました。しかし現実には甘く無かったです。高等法院長の座に、あのリッシュモンが就きました。

頼りになる仲間だったクールズ家が倒れ、こちら側の戦力は大幅にダウンしています。

加えてドリユアス家は、混乱したクールズ領を押し付けられて動きを封じられました。

父上も王都から外され、領に帰って来ました。魔の森調査任務は名誉な事ですが、体良く中央から追い出されたと言うのが実情です。

何より痛いのが、ヴァリエール公爵引退の噂です。トリストイン王国の膿を、取り除き終わったと思ったのでしょうか。後任の選出と育成を始めています。これにより公爵の後釜に座ろうとする者達が、裏で醜い争いを始めました。

この様子では、公爵の引退は4〜5年後になるでしょう。

加えて高等法院内では、リッシュモンの一人勝ち状態です。これなら賄賂だろうが裏金だろうが、なんでも有りでしょう。

暫くは権力の掌握に集中するはずなので、動かないでしょうが油断をしていると、後ろからザックリやられます。

念の為父上と母上には、ダンゲルテールは疫病では無く新教徒狩

りの可能性が高いと、話しておきました。

……注意せねば。

クールズ領を併合して、一年の時間が経ちました。母上は当然ですが父上も魔の森の調査を放っておいて、領内の安定化に勤めていました。いくら大変だからと言って、私の事を領内の仕事に引きずり込まないで欲しかったです。本来なら、この時間を有意義に使いたかったのですが、領内の仕事に忙しく殆ど何も出来ませんでした。

それほど忙しいなら私達の訓練を取り止め、母上には領内の仕事に集中して欲しかったです。母上には、毎回ボコボコにされる私達の身にもなって欲しいです。まあ、仕事のストレス解消を兼ねているんでしょうが。

そしてようやく、領内も落ち着いて来ました。まだ父上と母上は手が離せない状況ですが、私の手伝いが必要無くなってきました。これを機に、いろいろと始めたいと思います。

そう言えば、ちょうど一年前のラドの月あたりから、ヴァリエール公爵夫人（カーリーヌ様）からの手紙が届くようになりました。内容見せてもらいましたが、ルイズが魔法練習を始めたのが原因です。

手紙の内容は、端々にマギを差し出せと遠回しに書いてありました。（うん。それ無理）手紙が来る度に、内容が少しずつストレートに変化していたので心配です。《烈風》のカリンが、ドリュアス家に攻めて来るのだけは勘弁して欲しいです。

母上が毎回失礼の無い様に、手紙の返答をしていました。しかし数がかさむと、流石にイライラする様です。手紙が来る度に「また返事書くのー！」と、言っていました。父上と母上は手紙よりも、やらなければならぬ事がたくさんあるのです。

当然この状況は、母上のストレスになります。そして当然のごとく、捌け口は私になります。見かねた父上が、返事を書く作業を母上と交代してくれました。

(・・・助かった。父上は命の恩人です)

領では未だ旧クルーズ領の対応で忙しいですが、手が開いてきた私にはやりたい事が有ります。何と言っても、ラインメイズになったのです。《錬金》を試してみましたが、?50・錫まで《錬金》出来るようになりました。そして分離精製と合成が、可能になったのです。(元素周期表?1~50まで限定)

そして何より、鉄の《錬金》が可能になった事。これは大きいです。(力説)

他にも、ニッケル・銅・銀・錫が《錬金》出来るようになります。ですが、何が無くとも鉄です!!

これで気兼ねなく、刀を作る事が出来るのです!!

と言う訳で父上をお願いして、鍛冶場を作る事にしました。最初は難色を示していましたが、私の熱意に押し切られたようです。最後には頷いてくれました。

父上と相談しながら、細かい事を決めて行きます。設置場所・レイアウト・炉と配管・道具類の作成。それらを父上と綿密に話し合い、決めて行きます。始まってしまえば、父上も漢オトコです。夢中になっただけでした。もう、のりのりです。

しかしこの時、気付くべきでした。父上の仕事の効率が落ちた分を、誰が肩代わりしていたのか……。

父上と二人で図面を引き、炉本下を4日かけて作成。（錬金は偉大です）熱効率もマギの知識で上がり、ハルケギニアでもトップクラスの高性能炉になりました。続いて鞆ふいしの作成です。これは意外に苦労しました。弁の作成が困難だったからです。その他の道具は、《錬金》で簡単に作れました。

ようやく鍛冶場の完成です。開始から完成まで、一週間かかってしまいました。

私と父上は完成を喜び合い、館に戻りました。そこには忙しそうに働く、母上の姿がありました。気炎の様なものが見えるのは、気のせいでしょうか？私には不安になり、父上を見ます。

「まずい……。夢中になり過ぎて、シルフィアに仕事を押し付けていた」

「なっ！……そう言えば私も最近、書類仕事を手伝っていません」

その時私達に気付いた母上が、こちらに近づいて来ました。

「アズロック ギルバート。小屋作りは終わったのかしら？」

(やばい。洒落にならない位怒ってる)

私と父上はアイコンタクトで、未完成と答える事にしました。(完成したと言ったら、鍛冶場が比喩無しで吹き飛ば)

「もう少しで完成なんだ」

「うん。もう少しです」

二人一緒にその場から逃げ出そうとしましたが、父上は捕まってしまうました。

「アズロックは仕事があるから残ってね」

母上は口元だけは笑顔で言いますが、目が笑っていませんでした。

(父上。仕事が終わったら、鍛冶場に来てください。母上の機嫌を直す方法を、検討しましょう) byギルバート

(わかった。仕事を片づけたらすぐに行く) by父

私は走って鍛冶場に戻ると、母上の機嫌を直す手を考え始め成した。ただ機嫌を直すだけでは、鍛冶場の安全は確保できるとは思えません。なら鍛冶場で生産できる武器か? いや、とても間に合うとは思えない。

鍛冶場設立最初にして最大の試練です。

兎に角母上に、この鍛冶場が有用であると思わせなくてはなりません。

せん。ならやはり、武器のプレゼントが一番効果的です。今の現状では出し惜しみは出来ません。

私は一度部屋に戻り、以前作っておいたチタンのインゴットを全部鍛冶場に運び込みます。

(母上の機嫌を直すには、実用性を確り持たせた上にデザイン性も追求しなければ)

必死にアイディアをひねり出した所で、父上がようやく来ました。

「どうだ？何か良い案は浮かんだか？」

「鍛冶場の存続にかかわるので、やはり武器をプレゼントするのが一番と思います」

「しかしシルフィアは、あれで武器には拘るぞ」

「はい。だからこれを使います」

私はチタンのインゴットを父上に渡しました。

「軽いな」

「チタンです。重さは鉄の半分以下で、強度は鋼鉄以上です」

「……なんと」

「後はこのチタンで、レイピアとマイニングゴーシュを作ってプレゼントすれば……」

父上は暫く考えてから頷いてくれました。

「確かにそれが、一番可能性が高そうだ」

「レイピアは実践的な物でありながら、デザイン性も持たせたいです。マインゴーシュは、使いやすさと母上の性格を考えて、ソードブレイカーの機能を付加しようと思います。イメージは、こんな感じです。《錬金》」

私が《錬金》を唱えると薪の形が変わり、翼の様なガードが付いたレイピアと刀身とガードの間に溝が付いたマインゴーシュが現れました。

「デザインが良いな・・・しかも、実戦向きな形状だ。これならシルフィアも満足するだろう」

「では、父上がレイピアを担当してください。私がマインゴーシュを担当します。完成しても《固定化》は、待ってください。とっておきの仕上げが有りますので」

二人で《錬金》を繰り返し、武器の形を整えて行きます。

「ギルバート。こっちは出来たぞ」

「待ってください。こっちも、もうすぐ終わります・・・。できたー！」

私が作ったマインゴーシュも中々だと思いますが、父上が作った

レイピアは凄かったです。私が作った見本より、数段実践的で美しいのです。デザインは一緒なのに、なんでここまで差が出来るのでしょうか？

「……すげえ」

「まだまだ子供には負けられんよ。で、とっておきの仕上げとは何だ？」

「こうするんです。《錬金》」

私は刀身に向けて、杖を振り下ろしました。

私が《錬金》を唱えると、刀身が七色に輝きました。チタンは刀身の表面に、薄く酸化被膜を形成しただけでこうなるのです。酸化被膜が厚過ぎても薄過ぎても、こうはいきません。以前していた練習の賜です。

「これは……。すばらしい」

父上が感嘆の声を上げています。

「これで母上も納得してくれるでしょうか？」

「十分だ」

「では父上。仕上げの《固定化》と《硬化》を、お願いします」

「任せろ」

父上が《固定化》と《硬化》を、重ねがけして完成しました。早速母上の所に持って行きます。

「シルフィア」「母上」

父上と二人で寝室に突入します。入った瞬間、殺気で死ぬかと思いましたが、ここで引き下がれば代わりに鍛冶場が死にます。

「シルフィア。私とギルバートからのプレゼントだ。受け取ってくれ」

父上はそう言って、レイピアとマインゴーシュを差し出しました。母上がそれを見ると、怒りが一瞬で吹き飛びました。

「これ。・・・綺麗」

母上がレイピアを手に取ると、軽さに驚きます。

「軽過ぎない？強度は大丈夫かしら？」

レイピアの美しさと軽さに、芯を抜いてある裝飾剣の疑いを持つたようです。

「新しい金属を使用しています。重さは鉄の半分以下で、強度は鋼鉄製の物より上ですよ。その上で父上の《固定化》と《硬化》を、重ねがけしてあります」

私の言葉に母上が驚きの声を上げます。

「シルフィア。明日になったら、ためし突きを試してみないか？」

「ええ。是非そうするわ」

母上のご機嫌は、完璧に治ったようです。

「シルフィア。その・・・すまなかった。シルフィアが喜んでくれると思って、鍛冶場に夢中になり過ぎた。それで負担をかけてしまったては、意味が無いのに・・・。本当にすまない」

「ごめんなさい」

父上が頭を下げたのに合わせて、私も謝りました。

「もう気にしてないわ」

父上と母上が、見つめあいラブラブ空間を作成しました。

(これ以上夫婦の寝室に、邪魔ものが居る事は無いですね)

「父上。母上。おやすみなさい」

私は寝室を辞しました。

朝食の時に母上が「朝食後に、新しい剣レイピアの試し突きをする」と宣言しました。そして新しい剣レイピアの美しさと軽さを、熱く語ります。当然それが、父上と私のプレゼントである事も・・・。

その時何故か、ディーネとアナスタシアの視線が痛かったです。

朝食も終わり、家族全員で中庭に移動しました。早速母上がレイピアを抜きます。日の光の下で見るレイピアの刀身は、照明で見た時より何倍も美しく見えました。ディーネとアナスタシアは、その刀身に心奪われているようです。

父上が試し突き用の泥人形を、《錬金》で三体作りだしました。

母上は泥人形に向かって、一体につき軌道の異なる突きを5〜6回放ちます。

戻ってきた母上はご満悦でした。どうやら満足いく使い心地だったようです。

続いて母上は、マインゴーシュを取り出しました。レイピアと同じように七色の光を放っているそれは、相手が居なければ使えません。

「アズロック。相手して」

「分かった」

父上が返事すると、二人は準備運動を始めました。

「母上。そのマインゴーシュは相手の剣を受けた時、接触部を滑らせて溝で受けてください。その後はソードブレイカーの要領で、相手の剣を折るなり落とすなりしてください」

「なるほど。この溝はそういう意味だったのね」

良く考えたら、父上と母上の模擬戦を見るのは初めてです。

私達は期待しましたが、どうやら父上と母上は本気は出さないようです。何合かレイピアを合わせると、母上が父上の杖剣レイピアをマインゴージュで受けました。マインゴージュを巧みに操り、ソードブレイカーの溝で父上の杖剣レイピアを受けます。

父上は自分の杖剣レイピアの強度に自信が有るのか、全く引こうとしませんでした。その時パキンという音と共に、父上の杖剣レイピアの刀身が地面に落ちました。

「馬鹿な……」

父上の口から、そんな声が漏れました。父上の杖剣レイピアは、当然《固定化》と《硬化》を重ねがけてありました。絶対に折れない自信が有ったのでしよう。私もこんなに簡単に折れるとは、思いませんでした。

一方母上は、まるで玩具を買ってもらった子供の様に目を輝かせています。

(相当嬉しいんだろうな)

「父上……。私が責任もって、父上の新しい杖剣レイピアを作りますから」

私は父上を慰めました。そんな私にディーネとアナスタシアが、詰め寄って来ました。

「私の分は？」

「父上の分が先です。杖が無ければ、仕事に支障が出ますから」

ディーネとアナスタシアは、不満の声を上げます。

「ギルバート。どの位で出来そうだ？」

「母上の剣で材料を使い果たしてしまいました。材料を一から《錬金》するとなると、付きつきりで一週間と言ったところですよ」

「……そうか」

ああ、父上の落ち込みオーラが倍增した。ソードブレイカー機能なんか、付けなきゃ良かった。しかも隠し通すつもりだったのに、家族内のみとは言えチタンを解禁してしまいました。

私は少しでも早く父上の杖剣レイピアを仕上げる為、《錬金》でチタンを作る作業をしていました。

そこに来客の知らせがありました。

私はこの時期に、客が来るのが信じられませんでした。ドリユアス家はクールズ領を吸収する為、今大変な時期なのです。客を歓迎している余裕は、残念ながら有りません。となると、余程大切な要件が有ると見て良いでしょう。

客間に入るとそこに居たのは、公爵夫人カリーヌ様でした。となると、要件は決まっています。

「ギルバート。マギの行先を聞いてないか？」

父上が聞いて来ます。事前の打ち合わせの通りです。

「私達が帰って来たら、すぐに旅に出たじゃないですか。あと2、3年は帰ってこないと言っていました」

私の言葉に、カリー又様の顔が歪みました。

「それは知っている。私が聞いているのは、マギの旅の目的地だ」

「いえ……。特に聞いていません。……。あ。ガリアとゲルマニアに行くみたいなのを言っていました。後は、ツエルプストーに行くかどうか迷っていると……。私が知っているのはそれ位ですね」

「爆発魔法について何か聞いていませんか？」

カリー又様が会話に割り込んで来ました。やっぱり来たか。

「去年も申しあげましたが、爆発魔法に関してはマギの秘伝なので、勝手にお話しできません」

ルイズには悪いけど、知らない振り。知らない振り。……。怖い。子供に殺気ぶつけないでください。

「違います。コモン・マジック系統魔法に関わらず、全ての魔法が爆発すると言った方です」

「ありえませんが。カリー又様は、そのような冗談を言った……。」

「あつたんです!!」

カリー又様は私の両肩を掴み、がくがく揺らします。

「やめ……止め……て……」

父上と母上が、私からカリー又様を引き離します。

「とにかくマギと言う人と連絡を取りなさい」

「ですから無理です。居場所さえ分からないのに」

「爆発魔法の真相と解決法を聞き出しなさい」

「だから、居場所も分からないのに無理です。公爵家は爆発魔法の真相を知るのを、一度正式に拒否しているじゃないですか。今更前言を撤回されても困ります。それに、マギはカリー又様を恐れています。《烈風》のカリンの正体は、カリー又様とマギに聞きました。絵の処分と口封じの為に、爆発魔法などと言っているようにしか聞こえません」

(やばい……、カリー又様の迫力に押されて言い過ぎた)

「なら、貴方が証人になりなさい!!」

(うわ……。地雷踏んだ!!)

カリー又様は私の襟首をつかむと、引きずって行くこととしました。

「待つてください。ギルバートは当家の跡取り息子です。猫ではないのですから、そんな簡単に連れて行かれては困ります!!」

(父上。まさかこの状況で、カリー又様に反論してくれるとは)

(杖剣^{レイビダ}作ってから行け) by父

失望のアイコンタクトでした。

「分かりました行きます」

(あれ?杖剣^{レイビダ}は?) by父

(知りません。暫くそのワンドで我慢してください) byギルバート

「ようやく観念しましたか」

カリー又様そのセリフは、私が犯罪者みたいだから止めてください。
い。

結局私は、ヴァリエール公爵領に行く事になってしまいました。

第二十四話 刀を打つべし!!え?それどころじゃない?(後書き)

まだ忙しいのに書きちゃいました。

暫くは鈍亀更新になると思います。

それから、外伝追加したのもよろしくお願いします。

感想お待ちしております。

第二十五話 ボマー？ボムボム

おはようございます。ギルバートです。公爵夫人カリーヌ様に連れられて、ラ・ヴァリエールに来ました。

領内は未だ大変なのに、何故私はこんな所に居るのでしょうか？

去年に滞在していたヴァリエール公爵の館が、目の前に有ります。更に今回は私一人だけです。

「さあ、入りなさい」

カリーヌ様に促され、館に入ります。

「ジェローム」

「はい」

カリーヌ様は私の事を、執事に簡単に説明します。一応、客人として扱ってくれるようです。

「ギルバート様。応接室にご案内いたします」

私は執事に案内されて、応接室に来ました。

「昼食の前に奥様よりお話が有りますので、こちらでお待ちください」

そう言って執事は退室しました。とりあえず、下座に座って待つ

事にしました。

「はあ~~~~」

私の口から溜息が出ます。

これから帰るまで、どれ位の日数が必要なのでしょう？その分だけ、刀を打てる時間が遠のいて行きますね……。帰りもマンティコアで送ってくれたとしても、相当なロスになります。娘が可愛いのは分かりますが、人の迷惑を考えてほしいです。自業自得なのは分かっていますが、やっぱり腹が立ちます。

一番最初にやって来たのは、ルイズでした。部屋のドアを開け、私しか居ないのを確認すると思いつきり落胆してくれました。どうやら、マギの事は聞いているようです。

……。喧嘩売ってるのか？いやここは、仕返するのも良いかな？……。主にカーリ又様に。ついでだから周りが権力の大きい者を、どう見てるか知ってもらおう。

「なんでギルバートがここに居るの？」

「カーリ又様に、人質として連れて来られました」

「！……母様が！？」

「帰してほしいくば、マギを差し出せつて事です。マギは旅に出ていて、連絡不能行先不明な上に少なくとも2〜3年は戻って来ません」

「……そんな。嘘よ……。母様がそんな事するはず無い！

「！」

「良かったですね。ルイズはカリーヌ様に愛されていますよ」

ルイズは私の言葉を聞いて、呆然としていました。その時ドアが開き、カリーヌ様が部屋に入ってきました。

「カトレアは体調を崩して、部屋で伏せているので出席しません」

ヴァリエール公爵は現在、王都から離れられないと聞いています。またエレオノール様は、夏季休暇が終わり魔法学院に戻っています。カトレア様が出席できないのは、私にとって幸運でしょう。カトレア様は、人間嘘発見器みたいところが有りますし……。(注 マギ主観)

「さて。ギルバート。これからの事ですが……」

「カリーヌ様。最初に一つよろしいでしょうか？」

「?……何かしら？」

「私の命は……、後どれ位ですか？」

カリーヌ様は心底「訳が分からない」と、言う顔をしていました。

「私の命……、その……私が処刑されるのは何時ですか？」

私が真剣な表情を作り、重ねて聞きました。

ルイズは私の質問内容に、ショックを受けたようです。この質問

は先程の話が真実でなければ、有り得ないからです。終には泣き出してしまいました。（物凄い良心が痛む）

・ ・ ・ S I D E カリーヌ

私は訳が分からず、今の状況を冷静に考えて見た。

初めに自分は、どんな手を使っても絵を処分し口を封じると口走ったらしい。（切羽詰まって何を口走ったか、よく覚えていない）

ドリユアス家にマギを差し出すよう、再三手紙を送った。そして手紙の内容は、焦った為か遠回しながら、脅迫と取れなくもない文脈も有った。

しびれを切らし直接交渉に行き、ドリユアス家の跡取り息子を一人だけ連れ帰って来た。公爵家の人間が、子爵家の跡取りをだ。普通に考えれば、人質以外の何物でもない。

その考えで行くと、この子が逃げないのは、逃げれば自分の家が潰されると思っているからか？

ヴァリエール家とドリユアス家は、この程度の事は笑って許せてしまうほど、親密な関係だと思っていた。（実際は大正解。ただし、立場上逆は洒落にならない）

ギルバートを連れて行く時の、アズロックの態度を思い出し背筋が寒くなる。（実際は、杖剣^{レイピア}の完成が遅れる事を渋っただけ）

一方でシルフィアの態度が、いつもと変わらなかった事に安堵を感じた。激情家のシルフィアが、いつもと同じ態度だったと言う事は、自分や公爵家を心底信じてくれていたと言う事だ。(今の両家にとってこれが普通)

そしてかつての怨敵、エスターシユ大公と今の自分が重なった。自己嫌悪で死にたい気分になった。だが、誤解は早々に解かなければ……。

- - - S I D E カリーヌ E N D

「どうやら誤解が有るようですね」

カリーヌ様の言葉に、ルイズがすがる様な眼を自分の母親に向きました。

「如何いう事ですか？」

私は先を促します。

「私がギルバートを連れて来たのは、額面どおりの意味しかありません。ルイズの失敗魔法を確認してもらい、マジ殿に私の言葉に嘘が無い事を報せて欲しいのです。他意は有りません。始祖ブリミルに誓っても良い」

騙し切った。……バレなくて良かった。今回は即興だったからな。

実際は言葉を2・3交わしただけで、時間にして数分と言ったところでしょう。しかし緊張感から、私はそれが数時間に感じていました。

緊張感から解放され、私は全身の力が抜けるのを感じました。

それは命の危機が誤解だと知り、緊張の糸が切れたように見えたのでしょう。カリー又様が言葉を続けます。

「誤解させてしまった事は謝ります。娘の事で焦っていたとはいえ、配慮が足りませんでした。その様子では、少し休んだ方が良さそうですね。ルイズの魔法を確認してもらうのは、明日にしましょう」

カリー又様の声には、切羽詰まった所が無くなっていました。どうやら、冷静さを取り戻してくれたようです。

昼食後客室に通され、ゆっくり・・・とは出来ませんでした。ルイズが押し掛けてきて、話相手をさせられたからです。

暫く話した後、思い立ったようにルイズが言いました。

「そつだ。ギルバート。ちいねえさまのお見舞いに行きましょう」

「駄目ですよ。体調が悪い人の部屋に、押し掛けるのは良くありません」

私はやんわりとルイズを宥めます。しかし、ルイズには通用しなかったようです。爆弾が返って来ました。

「ちいねえさまの事、嫌いなの？」

「っ!!……何故そうなるのですか？」

「だって……ギルバート。ちいねえさまの事避けてる」

私は凶星を指されて、硬直してしまいました。

別に私は、カトレア様が嫌いなわけではありません。ただ、苦手意識が有るだけです。

自分の歪みは認識していますが、人から改めて指摘されると傷つくのです。自覚している……それも気にしている自分の欠点を、改めて人に指摘される感覚と言えば分かるでしょうか？

もちろんカトレア様の優しさは、マギ知識だけでなく実感として理解しています。カトレア様が認識できる範囲では、私を傷つける様な言葉は控えてくれるでしょう。

しかし私は、自分がハルケギニアでどれだけ異質な存在かも自覚しています。カトレア様にとって何でもない言葉が、私の心をえぐる様な気がしてならないのです。

「大丈夫よ。ちいねえさま優しいから……」

ルイズなりに気を使っているのでしょう。カトレア様と私の間を、取り持つつもりの様です。ルイズにここまで気を使われると、顔かない訳には行きません。

「分かりました。お見舞いに行きましょう。しかし、手ぶらと言つ
のも……」

カトレア様の体調が良く遊びに行くなら関係ありませんが、お見
舞いとなると途端に手ぶらなのが気になってしまいます。

「帽子なんてどうかしら？エレオノールねえさまも、羨ましがって
いたし」

考え込んでしまった私に、ルイズが提案して来ました。

「いえ、あれは……」

「あの帽子。ギルバートが《錬金》で作ったのよね」

「……どうして!？」

何故ルイズが、あの帽子を《錬金》で作ったと知っているか気にな
りました。どう聞き出そうか考えていると、ルイズが先に答えを
言ってくれました。

「母様が言ってた。ギルバートの荷物に無かったし、誰かから買った
形跡も無かったって。ギルバートは、優秀な土メイジだって褒め
てた」

か カリーヌ様にばれてるうー!!

私が土と風の両方の系統属性を隠したのは、中途半端はダメと思
ったのが理由ですが、もう一つ理由があります。それは、土か風の
どちらかがばれた場合の保険です。そして、相手に一つの秘密を知

った事により満足させ、もう一つの系統属性を隠す為です。（最初の一回のみ有効）

（しかしこの保険を、こんなに早く使うはめになるとは……）

「分かりました。帽子で行きましょう。カトレア様には、どんな色が似合うと思いますか？」

そう言うとルイズは、途端に悩み始めました。

「ちいねえさまに似合う色……。水色？白？は、私と同じ色だし。緑……は違うかな。うーん」

「では、良い色を考えておいてください。その間に、帽子本体を作って来ますので」

私はルイズにそう言い残し、馬小屋に移動し手早く藁を調達します。そのまま前回と同じ要領で、無着色の帽子を作ります。カトレア様は日の光に弱そうなので、鍔をルイズ達の帽子より更に大きくしました。リボンも無地の物を、20本用意しました。

時間にして30分位でしょうか？部屋に戻ると、ルイズがまだ唸ってました。気のせいかな、泣きそうな顔をしています。

「何色が良いか分かんない」

「なら、ルイズとお揃いの白で良いですね？」

私は投げ遣りに聞きました。

「ちいねえさまとお揃い!!」

ルイズはその発想は無かったと言わんばかりに、目を輝かせ「白が良い。白じゃなきゃダメ」と言っただけ来ました。

まったく。これだから、おこちゃまは……。

「分かりました。後はやっておきますので、部屋に戻って下さい」

「ええー！ー！！」

ルイズが抗議の声を上げます。しかし、それも長くは続きませんでした。

私達の会話が、ノックの音で中断されたからです。

返事をする、入ってきたのはカーリーヌ様でした。

「母様!!……その……これは……」

カーリーヌ様に少し見られただけで、ルイズが拳動不審になります。

何も悪い事してないのに……。もしかして、男の部屋に遊びに来ているからか？

「もうすぐ、お稽古の時間ですよ」

カーリーヌ様は、ルイズに時間を示します。怒っている様な仕草は一切ありません。それに気付いたのか、ルイズは落ち着きを取り戻しました。

ひょっとしてカーリーヌ様は、母上より怖いのでしょうか？

「はい」

ルイズはガツカリしながら、部屋を出て行きました。しかし、カーリーヌ様は出て行きません。着色前の帽子を見て、目を細めました。

「その帽子は何ですか？」

「ルイズの発案なのですが、カトリア様にプレゼントしようと思いましたが。体調が回復して外を歩く時、いきなり日の光にあたり過ぎるのは良く無いですから」

私がそう言うと、カーリーヌ様は僅かに微笑み頷いてくれました。

別に怖く無いじゃないか。まあ、上に「怒らせなければ」が、付くけど。

「少し話をしましょうか」

カーリーヌ様に促され、テーブルにつきます。

「ギルバート。あなたは隠し事が多過ぎますね」

私は平然としながら「そうですか？」と、返しました。

「水系統メイジと言っておきながら、本当は土系統メイジね」

私は困った様な表情をします。

「はい。母上に土系統だとは言いつらくて、つい水系統だと言ってしまうました。発覚した時の母上は、この世の者とは思えないくらい怖かったです。しかもその時、既に公式に水系統だと触れ回った後だったので」

あらかじめ考えておいた、土系統が発覚した時の言い訳を披露しました。

「嘘はいけませんね。嘘は」

「はい。発覚した時に、死ぬほど後悔しました」

カリー又様から、少しだけ笑いが漏れた。

「あなたは、本当に不思議な人ですね。土メイジのはずなのに、風メイジ独特のにおいもする。まるで、両方の系統が使えるみたい」

私はこの言葉に、冷や汗が吹き出しました。表情や動作に動揺を出さなかった事を、褒めてほしい位です。

「まさか、そんなメイジが居ればお目にかかりたいです」

「そうね。……所でメイジとしてのクラスは、どれ位なの？」

「ラインクラスです」

「確かギルバートは、もうすぐ8歳だったかしら」

「はい。^{ケンの月}今月のヘイムダルの週ユルの日で8歳です」

「来週じゃないの」

今日がエオーの日なので、後7日で8歳の誕生日です。

「出来れば、前日までに帰してくれるとありがたいです」

「分かったわ、それまでに送り届けましょう」

「……これで話題を逸らせたか？」

「その年でラインクラスと言つのも凄いけど、ギルバートの剣術もなかなか見事だと思うわ。以前練兵場で、ディーネと手合わせしているのが見えましたから」

「見られていましたか。亜人から領民を守る為には、魔法だけでなく剣術も必要ですから。必要に迫られて訓練はしていますが、未だにディーネに勝てません。ちなみに、剣も魔法も師匠はマギなんですよ」

「凄い人なんでしょうね、マギと言う人は」

「いえ、カーリー又様が怖くて逃げだした人ですよ。それは褒めすぎです」

カーリー又様が、呆気に取られた様な顔をします。

「マギはいつも言っていました。怖い物を怖いと認めない者が、真の臆病者だと」

「如何いう事？」

「怖い物を怖いと認め、それに打ち克つ。それが真の勇気だと言っていました。そこに、誤魔化しは有ってはならないと……。蛮勇と勇気は別物だと言っていました」

「何となく分かるわ」

「カリー又様に対峙するのは、蛮勇になると判断したんでしょう」

「それは蛮勇では無く、勇気だと分かってもらわないと困るわ」

カリー又様と二人で、苦笑してしまいました。

「本当にギルバート。あなたは不思議ね。まるで、同年代の男と話しているみたい」

私はその言葉に苦笑で返します。

「カトレアへのプレゼントは、未完成なのでしょう。そろそろ出るわ」

「はい」

カリー又様を見送り、私は着色作業に入りました。

暫くして帽子とリボンの着色作業が、ようやく終わりました。帽子はリクエスト通り白。リボンの色は、ピンク・水色・黄緑・紫・

黒の5色と各色のチェック模様を2本ずつ計20本を用意しました。

休んでいるところに、ルイズが帰って来ました。完成品のリボンを見て、口をへの字にしていました。

本当に、分かりやすいな。欲しいなら欲しいって言えばあげるのに……。

その時ルイズが、小声で呟いているのに気付きました。

「これは、ちいねえさまの分。これは、ちいねえさまの分。これは……」

私はそんなルイズの様子に、思わず吹き出してしまいそうになりました。

「同じの二本ずつ有るだろ。カトレア様と、一本ずつ分けるんだぞ」

「え！？いいの？」

「だから同じの二本ずつ作ったの」

「ありがとうございます」

そうやってルイズは、ご機嫌になってくれました。

さて、いよいよカトレア様と対峙します。私にはカトレア様の部屋が、ラ・ヴァリエール家のボス部屋にしか見えません。ハッキリ

言って、入るのが怖いです。具体的には、どっかの巨大浮遊城75層ボス部屋くらい怖いです。この時天井に、鎌付きのデツカイ髑髏ムカデを幻視したのは、私だけの秘密です。

「ちいねえさま」

私が心の準備をする前に、おこちゃまが突入してくれました。

「失礼します」

私は観念して、部屋に足を踏み入れます。そこには、ベットから上体だけ起こしたカトレア様が居ました。思ったより顔色は悪くないようです。

「お見舞いに来ました」

私はそう言って、白い帽子を渡します。カトレア様は、嬉しそうに受け取ってくれました。そして、被ってみると……。

「少し大きいわ」

「帽子をちょうど良い位置に被って、後ろを向いていただけますか？」

カトレア様は、私の言う通りにしてくれました。適当にピンクのリボンを帽子に巻きつけ、サイズ調節をして綺麗に結びました。

「リボンでサイズの調節をしてるのね」

「はい。そしてこれが、サイズ調節用のリボンです。その時の気分

で、使い分けてください」

「あら。無理して外出したくなってしまうすわ」

「それだけは勘弁してください」

私が困った様に言うと、カトレア様はコロコロと笑いました。

「ルイズ。悪いんだけど、お水を持ってきてくれないかしら？」

「はい。ちいねえさま。すぐに持って来ます」

（おお。元気に駆けてった。なんか、転びそうだな・・・）

「ええ。本当に心配ね」

「あれ？口に出ていましたか？」

「安心して。出てないから」

私は、完全にフラットな表情になりました。僅かな所作からも、感情を読む事が出来ない様に動きも止めました。

（・・・心読まれてる？）

「流石に私も心は読めないわ」

（カトレア様が居る所で、嘔吐く事は不可能だな）

「大丈夫よ。人を傷つける嘘じゃ無ければ、私は邪魔しないから」

(いやいや。絶対に心読まれてるって……覚じゃないんだから)

「覚って何？」

(怖っ!!)

「怖いって失礼よ」

カトレア様はそこで、私怒ってますと言う表情をしました。

(うっ……。ちょっと、ときめいてしまった)

「あら。嬉しい」

私はこの間、誓って表情一つ動かしていません。傍から見ると、カトレア様が一方的に喋っているだけです。

(内心を読ませない事には自信が有ったのに……)

「あら。だってあなた。分かりやすいじゃない」

私はカトレア様に、思い切り凹まされました。

「所でマギさんの事だけど……」

(ホント勘弁してください)

「事情が有るのは分かっているから秘密にしてあげる」

「よろしく願います」

そこでルイズが水差しを持って戻って来ました。

「ありがとうルイズ」

カトレア様にお礼を言われて、ルイズはご満悦の表情になりました。

「それから、ギルバートを連れて来てくれてありがとう。お陰で友達になれたわ。ルイズに頼んで正解だったわね」

ルイズはさらに嬉しそうな顔になりました。

（そうか……。私はルイズに売られたのか……）

「あら、私が頼んだのよ」

ルイズが、訳が分からないと言った表情をしていました。居た堪れなくなつて、私はここを脱出する事にしました。

「では、あまり長居をしてもいけないので、今日はこの辺で……」

私は水差しを置いたルイズをつれて、部屋を出ようと思いました。

（今後なるべくカトレア様には、会わないようにしよう）

「偶には、遊びに来てね。じゃないと、口が軽くなっちゃうかも」

私はそのセリフに、両手両膝をついてしまいました。そんな私を、ルイズは不思議そうな眼で見ました。

(本当に勘弁してください)

私の最大の武器は、“情報”と“情報を利用した嘘”です。実際にこれで、あの《烈風》のカリンでさえ抑え込んでいます。それなのに、情報と嘘で絶対に勝てない相手が居るなんて……。しかも、既に首根っこ抑えられてる。ああ、絶望のあまり涙が……。

次の日、午前中の内にルイズの魔法を見る事になりました。

結果は言うまでも無く、全て爆発。

そこでルイズはムキになり、爆発を連発します。

現場となった練兵場は、瓦礫の山になっていました。カーリーヌ様が止めなければ、館も瓦礫になっていたでしょう。上空に舞い上がったルイズは、いつも母上に飛ばされる私より高く飛んでいました。ただ、カーリーヌ様はレビテーション使ってくれます。母上は自力での着地が不可能な場合、墜落寸前に横に吹き飛ばすのです。(戦いの場で、杖を手放さない教育)正直、ルイズが羨ましいです。

私は《錬金》で、練兵場の修理を手伝いました。

修理が一通り終わり戻って来ると、ルイズはまだカーリーヌ様に怒られてました。

「カーリー又様。その辺でよろしいのではないですか？」

私の取りなしに、カーリー又様は沈黙してくれました。

「しかし、ルイズの爆発魔法は凄く怖いですね」

「怖い？」

カーリー又様が、不思議そうな顔をします。

「例えば……、敵の頭にちよつと《念力》かけるとか」

カーリー又様が、目を丸くしました。

「後は傷を負った時に、ルイズが来て《癒し》をかけてくれたらどうなるか」

カーリー又様の顔が引き攣りました。

「ルイズ。今後《癒し》の使用を禁じます」

そう言つてカーリー又様は、館に引つ込んでしまいました。

「ちよつと。ギルバートのせいで、魔法が一個禁止になっちゃったじゃない」

「じゃあ練習する？かなりスプラッタな事になるけど。練習用に蛙をいっぱい取つて来るよ」

「……止めとく」

「賢明です」

「ギルバートって、性格悪かったのね」

「昨日ルイズに、とてつもなく大きな恨みが出来ましたから」

私はそう言っつて、私も館に移動する為歩き出しました。後ろでは「なによそれ」と、ルイズが叫んでいましたが無視です無視。

私はこの日の内に、ドリユアス領へ出発する事になりました。カリィ又様が自ら、ドリユアス領まで送ってくれるそうです。

そして今は昼食の最中です。

「ルイズ。好き嫌いせずに食べなさい」

「……だつて」

泣きそうなルイズの前に有るのは、ハシバミ草のサラダです。私とカリィ又様は、既に食べ終わっています。

「ルイズは、ハシバミ草嫌いなのかい？」

「人間の食べ物じゃないわ!!」

私の質問にこの子は、確りと答えてくれました。その答えにカリィ又様は、大きな溜息を吐きました。

どうやらカリー又様も、ルイズのハシバミ草嫌いは手を焼いているようです。あれ？初めて会った時、平気で食べていた様な気がするの、気のせいでしょうか？

「ルイズ。初めて会った時食べたサンドイッチモドキは、美味しかったかい？」

「うん。あれは美味しかった」

その言葉にカリー又様が反応しましたが、ここは取りあえず流ししてくれるようです。

「実はあれ、ハシバミ草が入ってたんだ」

私の言葉にカリー又様が、思わず私を見ます。一方でルイズは震えていました。

「なな　なんて物を、たたた　食べさせてくれたのかしら」

そして腰から何か引き抜いて、・・・杖？なんで食事中に杖なんか持っているんだ、このおこちゃまは。

あまりの状況に、私もカリー又様も反応できませんでした。

ボム！！という爆音が、私中心に巻き起こりました。

「ケホッ」

私は上半身裸の状態に、なっていました。おそらく身体は黒くす

すけ、頭はチリチリになっているでしょう。この時私は何故か、このセリフを言う使命感に囚われました。

「だめだこりゃ」

私はその場に倒れ、意識を失いました。

結局、爆発で気絶し目を覚ましたのは……。

第二十五話 ボマー？ボムボム（後書き）

つい調子に乗ってまた書いてしまいました。

反省はしています。

でも後悔はしていません。

外伝つまらなかつたかな？

感想お待ちしております。

第二十六話 神殺しは強過ぎです!!

ギルバートです。三度目ともなると慣れる物です。冥き途にやって来ました。

早々に死者の列を抜け階段を下り、リタとナベリウス（+ケルベロス）が居る場所へ移動します。歩きながら、魂と身体のリンクが生きている事を確認しておきます。リンクが生きている事を確認すると、次は肉体の状態をラインから確認します。

（肉体は……、かろうじて生きていますね。しかし、出血多量に身体の組織はズタズタになっています。今戻ったら、激痛でのたうちまわる事になるでしょう。……これで良くあのセリフが言えましたね。ギャグ補正でしょうか？）

「これじゃ戻れないですね。無駄に痛いのは嫌ですし……。状況から見て、公爵夫人カリーヌ様が治してくれるのを待った方が良いでしょう」

私は独り言を呟きながら、階段を下りました。

（むこうでハルケキニテ少なくとも3日は間を置かないと、痛い思いするか倦怠感で動けないかのどちらかですね。前回ディルリファイナこちらで3カ月過ごして、ハルケキニテむこうで3日だったから……。今回は3〜4カ月位過ごした方が良いでしょう）

階段を下り切ると、そこには予想通り二人と一匹の姿が確認出来ました。

「お久しぶりです。リタ、ナベリウス、ケルちゃん」

私が挨拶すると、二人と一匹の視線が私に集まります。

「お久しぶり」

「……り」

二人から返事が帰って来ます。ケルベロスは、尻尾を左右に振っていました。

（しかし、二人の反応が薄い様な？ああ、そう言うことか）

「今回も生霊ですよ」

そこで二人は、ようやく笑顔を見せてくれました。

（相変わらず二人は可愛いな……）

等と不謹慎な事を、考えてしまいました。そこで、何となく聞いてみたい事が出来ました。

「自分では幸運だと思うのですが、私は冥き途に来やすい様な気がするのです。何か心当たりは有りませんか？」

流石に三回目ともなると、偶然とは考えにくい。そう思っただけの質問でした。リタとナベリウスは、一度目を合わせると考え込んでしまいました。

暫く考えた後、リタが口を開きました。

「何らかの加護が働いている可能性が有ると思う。貴方の魂は、出来方からして特殊だから……」

リタが自分の意見を披露してくれましたが、私の質問から少しずれていました。

「いえ……、そうでは無く。ちょっと派手に気絶するだけで、ここに来てしまう様な気がするのです」

私の言葉に、リタは首をひねってしまいました。

「……リタ。……ズレ」

ここで、ナベリウスが発言しました。が、私は何を言っているのかわかりませんでした。しかしリタは、その言葉に思うところがあった様です。納得したように頷いていました。

「あ……出来れば、分かりやすく説明して欲しいのですが……」

リタはこちらを向くと、頷いて説明を始めました。

「ギルの魂は、二つの魂が合成された物なのは良い？」

私は頷きます。

「元々の魂を材料としているとはいえ、元の魂と別物になるとは思わない？」

私は再び頷きます。

「そうすると、魂と肉体にズレが生じる。その所為で魂が肉体から出やすくなったんだと思う」

「つまり私は、幽体離脱しやすい体質と言う事ですか？」

私の切り返しに、リタは頷いてくれました。

「それでギルは、これからどうするの？」

「身体の治療は、むこうでハルケキニアやってくれると思うので、有る程度回復するまでこちらに居ようと思います。すぐに戻っても痛いだけですし……具体的には、こちらの時間で3〜4カ月位ですね」

私の言葉に、リタが頷きました。

「私達これから出かける予定なの」

私はその言葉に、落胆の色を隠せませんでした。

「そうですか……、仕方が無いですね」

私はそのまま今後の予定について、思案し始めます。すると、袖を引っ張られました。引っ張っていたのは、先程までケルベロスの上に居たナベリウスでした。（何時の間に）

「……一緒に……くる？」

ナベリウスの誘いに、私は如何するか正直悩みました。一緒に行く事で何らかの問題が発生しないか、心配になったからです。

「私も、ギルを連れて行く心算なのだけど」

リタも賛成の様です。私は念のため、リスクについて二人に聞きました。どうやらリスクは、身体にすぐに戻れない事位の様です。訪問先は神殺しの屋敷なので、1人増えた位問題無いそうです。そこで私の腹も決まりました。

「では、私も一緒にします」

私の返事に、二人は笑顔で頷いてくれました。ただ留守番のケルベロスは、一匹だけ悲しそうにしていました。（ごめんな）

目的地は、レウイニア神権国の王都プレイアに有る神殺しの屋敷です。移動にかかる時間に、私は不安が有りましたが杞憂でした。冥き途から魔術城砦カラータに転移し、北北東に進めばすぐに到着しました。

道中私はキヨロキヨロ・フラフラとする、おのぼりさん状態でした。

王都プレイアに到着し、早速中に入ろうとして止められました。

「私達が正面から行って、入れてくれる訳が無いでしょう」

そこで私達の面子に気付きました。ナベリウスは、魔神でソロモン72柱の一柱。リタは強力な呪いの魔槍にとり憑く、亡霊少女。私は一応生者に分類されるが、ただの幽霊。

(うん。町に入れてくれる訳が無い)

私は(如何するの?)と、リタに視線を送ります。リタは黙って、ある場所を指さしました。そこは……。

……地下水路? ……いや、下水道か?

「ここを通ったら、臭くなりそうですね」

私は思わず、そう呟いてしまいました。

「この地下水路を通っても、私達は大丈夫」

リタにそう言われて、自分が霊体である事を思い出しました。そう、私達は”大丈夫”です。そこで大丈夫では無い方を、見てみました。

ナベリウスは、いつもと変わらない表情をしていました。しかし明らかに不機嫌オーラを、放出しています。

(……これ以上、触れない方が良いでしょう)

私はそう判断し、地下水路に入ろうとしました。しかし、また止められました。

「ギルには、これを貸しておくわ」

そう言って渡されたのは、一本の剣でした。リタの説明によると、この剣はアーナトスと言うそうです。秘印術と神聖魔術を複合鍛錬

した鍛剣で、アンデット等に有効との事。しかし私は何故この剣を預けられたか、分かりませんでした。

見るとリタはいつもの槍（魔槍ドラブナ）では無く、柄に人が彫られた美しい槍（光槍ルナグレイブ）を素振りしていました。

ナベリウスは白猫の手形をしたグローブ（しろねこぐるーぶ）を着けながら何か呟いていました。かろうじて聞き取れたのが、作法・教えてもらった・真似と言った単語でした。（何なんだ？）

私はアーナトスを振ってみました。振る度に身体を泳いでしまい、とても使えません。それを見たリタは、アーナトスの代わりに炎の鍛剣と言う剣を渡して来ました。この剣は、火炎の呪術処理をした長剣で、同じくアンデットに有効だそうです。こっちの剣は、まともに振れました。

結局私は理由を聞けないまま、地下水路に入る事になりました。しかし理由は、すぐに思い知る事になったのです。そこに居たのは、死者・死者・死者。ゾンビや浮遊霊と言った、多くのアンデット達でした。しかもこいつら、襲いかかって来るのです。

「なんで王都の地下水路に、こんなのが大量に居るんですかぁー
ー！？」

「知らないわ！！文句は水の巫女に言って！！」

私の叫びに、リタは律義に答えてくれました。しかしそれで、戦闘が終わる訳ではありません。

リタは槍を巧みに操り、アンデット達を次々に屠って行きます。

正直かつこいいです。

ナベリウスは「・・・にゃん」と、気合のかけらも感じられない声を上げながら戦っていました。正直に言わせてもらえば、お持ち帰りしたくなるほど可愛かったです。しかし攻撃を食らった相手を見て、思いなおしました。食らった相手は、凄いい勢いで吹き飛ばされ、壁に叩きつけられ、砕け散っていました。（・・・見なかつた事にしておこう）

二人は私が一体相手に苦戦している間に、十体単位で敵を減らしていきます。

私が三体目の敵を倒した頃には、敵の気配はすっかり無くなっていました。

（地下水路に居た敵が、みんな集まって来ていたみたいだな。最終的には、100体超えていたかも）

私がそんな事を考えていると、二人は歩きだしました。私は置いて行かれないように、慌てて追いかけます。（一人でアンデットを、複数相手したら死亡確定だから）

やがて二人は、印が付いた一画で立ち止まります。

「ちょっと行ってくるわ」

リタがそう言って、天井に消えて行きました。暫く待つと天井の一角が開き、梯子が下りて来ました。私はナベリウスに「お先にどうぞ」と言いましたが、ナベリウスは首を横に振りしました。私が（なんで？）と言う顔を見ると、ナベリウスは「・・・見たいの？」

と聞いて来ました。それで何故私が先か、良く分かりました。(ナベリウスの服装じゃ下から丸見えだからな……)

私は浮遊できないのを不便に感じながら、梯子を登ります。(同じ霊体なのに、リタみたいに浮遊出来ないのは何でだろう?)登った先には、メイドさんが居ました。腰まで届くロングストレートの髪が特徴的なメイドさんは、おそらくエクリア殿だろう。

私は手早く挨拶を交わし、入口からどきました。ナベリウスが上がつて来ると、エクリア殿は挨拶を交わし入浴と着替えの準備が出来ている事を告げました。ナベリウスは勝手知ったる他人の家、すぐに歩いて行ってしまいました。

エクリア殿は梯子を回収し、入り口をふさぎます。私はその工程を見ていました。

「どうかなさいましたか？」

「いえ。始めて来た人の家で、勝手に歩き回るのは如何かと思いついて。ナベリウスについて行くと、殴られかねませんし」

私が冗談ぽく答えると、エクリア殿は笑顔で頷いてくれました。

「では、ご案内します」

「お願いします」

エクリア殿に案内され、地下室から広間に移動します。広間に差し掛かったところで、掃除中のメイド二人と会いました。軽く挨拶を交わし、簡単に自己紹介をしておきます。予想はしていましたが、

二人はシユリとサリアでした。

エクリア殿に館の造りと、各部屋の位置や裏庭などの事を説明してもらいます。そして最後に私が逗留する部屋に、案内してもらいました。（館の大きさは、ドリユアス家の物と大差ないですね）

部屋の説明を一通り受けると、私は剣を振り回せる場所が無いか聞きました。

「それでしたら、裏庭をご使用ください」

「ありがとうございます」

私は早速裏庭に出て、炎の鍛剣を振ります。正直に言うと、地下水路でリタとナベリウスに圧倒的な差を見せつけられて、悔しくなったのです。暫く剣を振っていると、エクリア殿が話しかけて来ました。

「その武器に、不慣れなのではないですか？」

「分かりますか？」

「動きの型と武器が有っていませんから。武器に合わせて動くようにして、無理な動きになっていると感じました」

あまりに的確な感想に、私は苦笑いしか出ませんでした。

「こちらを試ってみてはいかがですか？」

差し出されたのは、双剣でした。持ってみましたが、軽くて私に

ちょうど良い重さです。片刃で反りは有りませんが、直刀と思えば問題ありません。

（私が剣を振り始めてすぐに、私の動きの違和感に気付きこれを持ってきてくれたのか）

「ありがとうございます。お借りします」

私は双剣をお借りして、訓練に打ち込みました。

暫く素振りをしていると、また誰かが近づいて来ました。視線を向けると、赤い髪の美しい女性いや男性がいました。彼が神殺しで間違いないでしょう。私は訓練を中止し、挨拶と自己紹介をする事にしました。

「はじめまして。ギルバートです。この度は、図々しくも……」

『長い前口上はいらないだの』

その時女性の声が聞こえました。その声の発信源は、目の前の男の腰に有る短剣です。私が驚いているのに気付き、短剣が驚きの声を上げます。

『おぬし、我の声が聞こえるだの』

「はい。あなたがハイシエラ様ですね」

『そつだの』

「よろしく願います。．．．それと、あなたがセリカ様ですね。よろしく願います」

「セリカ・シルフィルだ」

セリカ様は名前だけ答えてくれました。手に剣を持っているので、訓練の為に裏庭に出て来たのでしょうか。

「あつ．．．すみません。場所を借りていました。お邪魔でしたらすぐにどきますので」

私は訓練の邪魔にならない様に、後ろに下がりました。

「お邪魔でなければ、訓練を見学しても良いですか？」

「かまわない」

返事はすぐに帰って来ました。私は邪魔にならず良く見える位置を確保し、飛燕剣を見極めようとします。剣戟の速さ・鋭さは、驚嘆に値するものでした。そしてそれを支える、足運び・腰の溜・腕の振りの連動は芸術的とさえ感じました。

私はセリカ様が訓練を終えるまで、ずっとその動きを目に焼き付けておきました。

夕食の時間になりました。料理が運ばれて来ましたが、美味しそうなのに食べられません。霊体である事を、これ程悲しく思った事は有りません。(うう．．．涙でそう)

この時にまだ会っていないかった、マリーニヤさんとレシエンテを紹介してもらいました。レシエンテを紹介してもらった時、激しい違和感を感じました。

イメージより明らかに大きいのです。・・・レシエンテが。背はシュリを超えマリーニヤさんに届く勢いです。（しかも胸は使徒の中で一番大きい）確か封印により、子供化しているだけと聞いています。力を幾分取り戻したと言うことなのでしょう？

私が思っている事を、レシエンテが敏感に感じ取った様です。

「わらわが聞いた話より大人じゃから、驚いておるのじゃろう」

レシエンテが勝ち誇ったように言って来ました。周りの人間は、平然としている者・困ったような顔をする者・目を逸らす者・あからさまに顔に手を当てる者いろいろな反応が有りました。

「私は・・・私は・・・」とシュリ。

「うー・・・うー・・・サリアは・・・」とサリア。

シュリとサリアから、哀愁のオーラが漂って来ます。私はこの流れをまずいと感じ、話題を変更できないか思案します。そこで格好のネタが、私自身に有る事に気付きました。

（かなり自爆になります、この気まずい空気よりマシです。それにこの名前をからかう様な奴は、ここには居ないでしょう）

都合のよい事に、次は私の自己紹介の番です。

「ギルバート・アストレア・ド・ドリユアスです。皆さんよろしく
お願いします。それから、アストレアとは呼ばないでください。女
名である事がトラウマになっていきますので……」

この段階で何人が反応しました。

「アストレアはアストライアとも読みます。正義の大女神であり、
星乙女と呼ばれたアストライアーが由来ですね」

（これでインパクトは十分か？皆思考停止しているな。後は畳みか
ける）

そこから名前の由来に、話題を強引に持ち込みます。父上が星の
輝きに正義を約束し、この名前になった事を話しました。そしてそ
の原因が、二つの欠けてしまった魂が融合した事であると話しまし
た。

魂の融合の話になって、信じられないという声が上がりました。
しかしそこは、リタとナベリウスが証人になってくれました。

これで先程までの気まずい雰囲気は、奇麗サツパリが無くなって
いました。

私はここでようやく、一息つく事が……出来ませんでした。
ハイシエラ様が別の意味での爆弾を、落としてくれたからです。ハ
イシエラ様の声が聞こえる事をばらされ、魔力も結構ある事もばら
されました。

『ギル坊が女なら、迷わず使徒にするよう勧めるのだがの』

エクリア殿の通訳が終わると、全員の視線が私に集まりました。

『いっそ……女に改造するかの』

なんかトンデモナイ事を口走りました。何考えてんだこの魔神様。エクリア殿も流石にこの発言に、顔が引きつりました。エクリア殿の反応に、周りの者達が引きました。エクリア殿はこの話題を、無かった事にしようとしましたが、空気が読めない人が居ました。・・・セリカ様です。

「ハイシエラは、ギルバートを女に改造すると言っている」

セリカ様以外の全員の顔が引きつりました。

『……冗談だの』

流石にこの空気に耐えられなくなったのか、ハイシエラ様が弱々しく答えました。

「冗談だったのか？」

（セリカ。、空気読め無さ過ぎですー！！）

この場に居る全員の思いが、この一瞬だけ完全に一つになりました。

次の日。私はセリカ様の飛燕剣を、二刀流で再現する練習をして

いました。

マギが師匠から学べなかつた物を、飛燕剣が埋めてくれる様な気がしたからです。そして何よりも、飛燕剣の芸術的な動きに、惚れてしまったからです。

ひたすら昨日のセリカ様の動きを再現し、二刀流に組み換え再現する練習をしました。思ったよりも労せず、二刀流での再現は出来ました。セリカ様に飛燕剣を教えた師匠が、二刀流だったからかもしれません。

基本となる型（剣舞）を、ひたすら繰り返します。有る程度形になつてきた頃、裏庭にセリカ様が来ました。

「その動き、飛燕剣の身妖舞しんようぶだな」

「昨日のセリカ様の動きを、模倣させていただきました。この型いえ技は身妖舞しんようぶと言つのですね」

セリカ様は頷いてくれました。この型から繰り出される剣戟は、もはや型ではなく技の領域です。まあ、私の動きは型にさえ届いていませんが……。そこでハイシエラ様が、口を開きました。

『のうセリカ。ギル坊に飛燕剣を教えて見ては如何かの。御主にも良い刺激になると思うだの』

ハイシエラ様の言葉は、私にとって願っても無い事でした。

（セリカ様は了承するのでしょうか？）

と思つていたら、セリカ様は返事もせずには教え始めました。

・・・そこから先は地獄でした。今の私は霊体のはずなのに、痛い・疲れる・ぶつ倒れるのは何故でしょうか？・・・理解出来ませんでした。

それから暫くして、模擬戦が始まると訓練は更なる地獄へと変貌しました。生の肉体なら、何度死んでいたでしょうか？基本スペックが違いすぎるのです。いくら頑張っても、スピードについていけないのです。本来二刀流に有利に働く手数で、圧倒的に負けているのは如何いうことでしょうか？

そして唯一の楽しみであるはずの食事が、霊体である為出来ないのです。

悔しかったので、マリーニャさんにレシピと調理法を教えてもらいました。お返しに、ハルケギニアと地球のレシピを教えてあげました。その所為でしょうか？いつの間にかマリーニャさんと仲良くなり、気付いたら鍵開け罠回避等の盗賊スキルを習っていました。（魔法が有れば必要無いのに・・・でも、イメージには大きくプラスになるか）後は狙撃戦術と錬撃術を習いました。こちらは理解は出来ましたが、私では体得は難しそうです。（後でディーネにも教えてみようかな）

そんなある日、神殺しの屋敷に客人が来ました。レウイニアの騎士の様です。ビヤールの洞窟に凶暴な魔物が住み着いたので、退治して欲しいと言う物でした。既に民衆に被害が出ている事と、討伐に送った騎士達が全滅したので恥を忍び依頼に来たそうです。

セリカ様はこの依頼を受ける様です。

依頼遂行中は、地獄から解放されると思っていました。しかし、甘かった。いつの間にか私も、同行する事になっていたのです。落ち込む私に、ハイシエラ様が言っただけで来ました。

『諦めが肝心だの』

ビヤールの洞窟入り口近くまでは、全員で行く事になりました。移動中の雰囲気は、どこをどう見てもピクニックです。当然のごとく地獄の訓練は、移動中も続きました。しかし、これ以上に勘弁してほしい事が有りました。

(セリカ様!!!私が寝ている横で、性魔術による魔力補給を始めないでください!!!)

そうこうしている内に、目的地に到着しました。ビヤールの洞窟に入るメンバーは、セリカ様・リタ・私の3名です。大人数では、動きづらいと言うのが理由でした。

洞窟の中でも散々でした。セリカ様は雑魚を全て、私に丸投げしたのです。訓練の成果を見ると言っていました。面倒くさかっただけとか言わないですよ。しかし文句は言えません。地下水道で戦ったアンデットよりも動きが良い魔物複数相手に、互角以上に戦えたからです。危ない時は、リタが助けてくれました。ただ、噴出するガスが煩わしかったです。

そんなこんなで、ビヤールの洞窟最深部に到着しました。

そこに待っていたのは、少なくとも10メートル以上ある巨大な赤いドラゴンでした。私はあんまりな状況に、セリカ様を見ます。

「戦ってみるか？」

「無理です!!」

セリカ様は残念そうにしていました。私はこの時、いったん引いて対策を練ると思っていました。しかし、セリカ様はそのままドラゴンに突っ込んで行ったのです。

セリカ様とドラゴンの戦闘が始まりました。私はその余波で、まともに立っていることすら出来ませんでした。私はセリカ様の姿を必死に目で追いました。

そして私は見ました。セリカ様の飛燕剣・枢孔^{すうくしん}身妖舞^{しんようぶ}が、ドラゴンを細切れにするのを……。(マジですか)

私が呆然としている間に、飛翔の耳飾りでビヤールの洞窟を脱出していました。

屋敷に帰還後も、私の地獄は続きました。そしてようやく、セリカ様の身妖舞(物凄く手加減した)を防ぐ事が出来たのです。

その時私はとても嬉しかったです。(例え物凄く手加減されていても)

私はこの時、セリカ様の反応が気になりました。褒めてくれるか？調子に乗るなど叱咤されるか？いつも通り無表情か？しかしセリカ様の反応は、そのどれでもありませんでした。

無表情の顔に、一筋の涙が有りました。口が僅かに動き「ダルノス」と、呟きました。二刀を使用した飛燕剣が、セリカ様の師匠であり親友だったダルノスさんをオーバーラップさせたのでしょうか。

私は（辛い記憶を思い出させてしまった）と、申し訳なく思いました。

しかし、周りの反応は違いました。みんな口々に、私にお礼を言ったのです。セリカ様が、またひとつ感情を取り戻したと……。

それからも地獄は続きました。むしろリタが参加するようになり、グレードアップしました。勘弁してください。……本気で泣きますよ。

今回私がディル＝リフィーナに来てから、そろそろ3カ月半経ちます。ハルケギニアでは、3日半と言ったところでしょう。リタとナベリウスもそろそろ戻らないと、上司に怒られるのではないでしょうタルタロスか？

それとなく、リタとナベリウスに聞くと「長居しすぎたかも」「タルちゃんに怒られる」と返って来ました。次からはもっと早く気付きましょう。

その日の昼食後に、私が代表して明日にお暇すると挨拶しました。

皆さん別れを惜しんでくれました。特にマリーニャさんは……

「次来る時はー、レシピいっぱい持ってきてねー」

……そうでも無かったようです。

話しかけて来るみんなの影で、セリカ様とエクリア殿が言葉を交わすとエクリア殿が退出しました。

リタとナベリウスは、詰め寄って来るレシエンテの対応に苦慮しているようです。流石レシエンテです。外見は大人になっていても、中身は変わっていませんでした。

何時の間にか、すぐるレシエンテと対応に困るリタとナベリウスを、周りの皆が眺める構図が出来上がっていました。リタから目線で助けを要請されましたが、私は頑張れっと手を振ってあげました。

リタは本当に困っているのか、尚も助けを求めて来ます。今度はナベリウスと二人ががりて視線を送って来ます。「こう言う時何時も助けに入る、エクリア様は何処行っちゃたのかしらー」と、マリーニャさんが言いました。仕方が無いので、私が助けに入る事になりました。

「はい。レシエンテ。そこまです」

「わらわが説得しとるのに、邪魔するでない」

私はレシエンテの目を真直ぐ見て、言葉を話します。

「リタとナベリウスが居ないと、困ってしまう人達がいっぱい居る

んだ」

レシエンテが、私の目をじっと見返してきます。

「早めに帰らないと、仕事溜まって次来るまでに時間がかかってしまっんだ」

（涙いっぱい溜めた目で睨まないで、こっちが悪いことした気になるから）

「レシエンテなら分かってくれるよね。もう立派な、大人のレディ—なんだから」

そう言っつて、優しく微笑んでみました。

「分かった。わらわは、大人のレディーじゃからな」

「ありがとうございます」

このやり取りで、レシエンテは機嫌を直してくれたようです。

「ところでエクリア殿は、何処へ行ったのでしょうか？」

「では、わらわが探して来てやろう」

そう言っつてレシエンテは、飛び出して行きました。

レシエンテを見送った後、私は「よし、なんとかなった」と呟きました。改めて周りを見ると、全員の視線が私に集まっています。

「レシエンテの扱い上手いのね」

リタがそう言ってきたので、私は心外だと言わんばかりに反論しました。

「レシエンテは暗愚ではありません。ちゃんと言えば分つてくれるのです」

この反論にリタとナベリウスは、ちょっと落ち込んでいました。

暫く待つと、エクリア殿がレシエンテを連れて戻って来ました。

「私達よりギルバート様にお礼の品が有ります」

エクリア殿の言葉に、セリカ様が頷きました。

「わらわが付けてやるのじゃ」

どうやら贈り物は、装飾品の類の様です。

「目をつぶって首を出すのじゃ」

私はネックレスの類かと思い、目をつぶって首を差し出します。

しかし、首に付けられた感覚は・・・首輪？

私は目を開けて、首元を手で確認します。・・・間違いなく首輪だ。何故？

私が不思議に思っていると、首輪の正体をエクリア殿が教えてくれました。

「マルウエンの首輪です」

マルウエンの首輪・・・成長促進の加護が込められた首輪。マルウエンシリーズの中で最も強力な加護が有る。言うまでも無く超貴重品。

「よろしいのですか？このような貴重品を・・・」

セリカ様は黙って頷いてくれました。その中に私への期待を感じ、感動で・・・

「うむ。こうしてみると、わらわがギルバートの主になった様じゃ」

・・・おこちゃまがぶち壊してくれました。（レシエンテ・・・お前は・・・）

急速に冷え込むこの場の空気に、レシエンテも自分が不味い事を言った事に気付いた様です。とたんにオロオロし始めました。

私はこの光景に、不意に嬉しさが込み上げて来ました。セリカ様にとつて、この平和な時間は何物にも代えがたい宝石きおくとなると思っただからです。そう思うと、レシエンテの失敗が急に可愛く思えてきます。そしてオロオロする姿が、急に可笑しく思えて来ました。私は耐えられなくなり、つい・・・。

「フツ・・・クククッハッハッハッ・・・」

「笑うなんて酷いのじゃ」

急に笑い出した私に、レシエンテが抗議の声を上げます。しかしすぐに、笑いは全員に飛び火しました。あのセリカ様でさえ、笑顔になっていました。

「酷いのじゃー」

そう叫んでいるレシエンテでさえ、口元は笑っていました。

いよいよ出発の時間になりました。別れ際に、また遊びに来るように言われました。私も笑顔で了承しました。・・・まあ、別れの場所が地下室の地下水路入口で無ければ、もう少し格好良かったのですが・・・。

それから帰りは水場が有る場所まで、ナベリウスが不機嫌でした。この時襲ってきた魔物に、内心同情してしまった事は私だけの秘密です。

魔術城砦カラータに行き、転移でいつきに冥き途へと戻ります。

リタとナベリウスは、上司タルタロスに帰還の報告をしました。この時は、軽い注意程度で済んだそうです。もう少し遅かったら、雷が落ちていたとの事。二人にお礼を言われました。

「では、また来ます」

私はそう言って、二人と一匹に挨拶をしました。

肉体に戻り、目を覚ますとまた夜でした。周りを確認すると、私が寝泊まりしているヴァリエール公爵邸の離れようです。四日間寝ていたとなれば、当然お腹がすきます。結局私は、また厨房に忍び込むのでした。

食べている時に気付きましたが、マルウエンの首輪はハルケギニアに持ち込めた様です。現実の体に、確り付けられていました。割と細くマルウエンの石宝石が付いていたので、チョーカーで通用しそうです。よって、お気に入りのチョーカーで押し通す事にしました。

……マルウエンの首輪の効果。楽しみです。

第二十六話 神殺しは強過ぎです!! (後書き)

今回は、ディル＝リフィーナの話オンリーです。

プロット上一度カットしましたが、結局書いてしまいました。書きたいもの書くのが一番だよ。と、言う訳で書きました。作者はレシエンテ大好きです。

このレシエンテは、力を調節すれば大きくなったり小さくなったりできるのでしょうか？謎です。

感想お待ちしております。

第二十七話 ヴァリエール姉妹（長女抜き）（前書き）

今回、原作のカトレアがキャラ崩壊します。

（自分的には壊していない気がするのは何故だろうか？）

読む場合は注意お願いします。

第二十七話 ヴァリエール姉妹（長女抜き）

おはようございます。ギルバートです。お腹を満たし、少しだけ眠ったらもう朝です。幸い身体の治療は完璧です。（余程高価な水の秘薬使ったな）治療後の気だるさ等ありません。

公爵夫人に目覚めの報告をして、さつさと領地に送ってもらいましょう。早速本館へ移動します。途中で老執事ジェロームに出会いました。

「おはようございます。カーリー又様にわた・・・」

伝言を頼もうとした瞬間に、捕獲されベットに強制送還されました。（なんでやねん）

瞬く間に屋敷内が騒がしくなりました。使用人達水マイシの声を拾ってみました。どうやらヴァリエール公爵家お抱えの医師セリフが昨日はいた言葉が原因の様です。

「手は施しました。が、おそらくもう目覚める事は無いでしょう」

この言葉に、公爵家は上へ下への大騒ぎ。本来なら事態の收拾に当たる筈のカーリー又様でさえ、頭を抱えてしまったそうです。この日の午前中は、診察に來たの医師と様子を見に來たカーリー又様とルイズの対応で潰れてしまいました。

医師達は、口々に良かったと言っていました。カーリー又様は、本当に安心した表情をしていました。ルイズは泣いていました。（ルイズに思い切り鼻水付けられました）

しかし医師は何故この様な、迂闊なセリフを吐いたのでしょうか？私は気になったので、医師一人一人を観察してみました。その中に一人、気になる医師が居ました。私を診察する時の目に、明らかに侮蔑の色を浮かべる医師が居たのです。不審に思い、その医師に目と耳を集中しました。

医師は部屋の隅に移動すると、独り言を言い始めました。その声は非常に小さく、私が風メイジで無ければ聞き取れなかったでしょう。

「子爵家のガキが、俺の貴重な時間を奪いやがって。殺しときや良かった。面倒くせえ。あのカトレアとか言うガキも、俺の診察拒否しやがるし。大人しく俺の実験材料になつてろつての」

耳に入ってきた内容は、医師にあるまじき発言でした。この場に風メイジが居ないと思って、油断していたのだとしても、この場でその言葉を口にするとは信じられませんでした。

医師達が居なくなつた後、使用人達に先程の医師の話の聞きまし。出て来た話は、ある意味予想通りの内容でした。

医師の名前は、ギョームと言つらしいです。私がもう目覚めないと言つたのも、この男でした。

当直（カトレア様の容体急変に対応する当番）をサボる。使用人の診察を拒否する。等は当たり前で、手抜きで怪我や病状が悪化した使用人も居たそうです。あまりに酷過ぎる為、ジェロームがカリイ又様に首にしてもらうよう陳情しているそうです。使用人達は、今回の一件でようやくいなくなると喜んでいました。

私は何故この様な低俗な医師が、ヴァリエール公爵家に入り込めたのか不思議に思いました。分からなければ聞けば良い。と言う訳で、早速雇った経緯をカリーヌ様に聞く事にしました。他にも聞きたい事が有りますし。

使用人に居る場所を聞き出し、早速向かいます。カリーヌ様が居たのは、執務室でした。早速ノックします。

「入りなさい」

「失礼します」

カリーヌ様は入って来たのが私と気付くと、驚きの表情を浮かべました。

「少しお聞きたい事が有るのですが……。今よろしいでしょうか？」

カリーヌ様は頷き、椅子をすすめてくれました。

「かまわないわ。それとルイズの事なら、厳しく罰したわ。今後このような事が無い様に、私も甘さを捨て厳しくするつもりです。カトレアも相当叱っていた様ですし」

あれで甘さが有ったのか？カトレア様も叱った？私はルイズの今後が、心配になりました。ですがここは、自分の用件を優先する事にしました。

「先ず一つ目は、何時頃ドリュアス領へ帰れるかです」

「急ぐなら、すぐにでも竜籠を出すわ。出来ればお詫びもしたいから、私と一緒に戻ってほしいのだけど。私と一緒に戻る場合は、この騒ぎで溜まった仕事を片づけたいから、出来れば1日待ってほしいわ」

カリー又様は即答してくれました。

「そこまで急ぐ必要は有りません」

「良いのですか？誕生日に間に合いませんよ？」

「かまいません」

実際問題として、誕生日など関係無いのです。早く返してもらいたくて言った、言い訳にすぎませんから。

(それに今はこれが手に入ったので、そんな些細な事は如何でも良いのです)

私はマルウエンの首輪を、つい嬉しそうに撫でてしまいました。それが蟻地獄にはまる、サインとも知らずに……。

「ところで、その首輪は如何したのですか？」

(!?!?・・・不味い)

「秘密です」

私はそう言って、にっこり笑いました。もちろん、裏では冷や汗ダラダラです。

「あら、まだ隠し事が有るみたいね」

カリー又様の目が、スツと細まりました。

(凄く不味い。これ以上ない位不味い)

錬金で作ったと言い張るには、マルウエンの首輪は使い込まれた年月を感じさせます。言い張れたとしても、私の現在の實力ではマルウエンの首輪(偽)を一から作成不可能です。材料が有れば可能ですが、家を出る時持っていないませんでした。(鞆はカリー又様の物をお借りし、中身も見られています。ポケットの中身は落とすからと、目の前で確認させられました)

買ったと言う言い訳が通用しないのは、前回の帽子の件から実証済みです。口裏を合わせてくれそうな人は……。

「カトレア様から頂きました。それにこれは、首輪では無くチョーカーです」

(絶対に借りを作ってはいけない人に、借りを作ってしまった!!)

私は顔では平然としながらも、心の中では部屋に閉じこもって泣きたい気分でした。

「どっちだって一緒よ!!それにそんな物、あの子持っていたかしら?それよりも、男の子に首輪をプレゼントするなんて……」

流石にカリー又様でも、娘の私物全てを把握していないでしょう。しかしこの借りは、予想以上に大きなものになりそうです。主に品

位的な意味で……。(本当に、部屋に閉じこもって泣きたいです)

「それよりも、もう一つ聞いて良いですか？」

私は強引に話題を変えようとしています。カリー又様も現実(偽)から、目を逸らしたいのか乗ってくれました。

「ギョームと言う水メイジについてです」

この名前を出した途端、カリー又様の表情が引き締まりました。

「その男が如何したのですか？」

「本人は私に聞こえて無いつもりだったようですが、私を殺しておけば良かったと言っていました。そして、カトレア様を実験材料と……。正直に言わせてもらえば、ヴァリエール公爵家に入りにできるタイプの人間とは思えません」

カリー又様は私の言葉に、沈痛な面持ちになりました。

「カトレアが完治する可能性に、目が眩んでいました。あの男を雇い入れたのは、当家の恥です」

そう言って、経緯を話してくれました。

ギョームと言う男は、王都で王宮に卸す秘薬を精製していた経歴が有る水メイジでした。多少素行に問題が有りますが、非常に優秀で一部では天才と噂が立っていました。これにヴァリエール公爵は、飛びつきました。しかしギョームはその時既に、ある貴族の専属と

なっていたのです。ヴァリエール公爵は諦めきれずに、ある商人に仲介を頼み貴族と交渉し高いお金を払ってギョームを雇い入れました。

……と言う訳です。私はある貴族と商人と言うのが気になりました。

「ある貴族と商人と言うのは？」

「貴族は高等法院長のリツシュモン殿……」

その名前を聞いただけで、私の中に怒りが込み上げて来ました。

（またコイツか。お金大好きのコギブリが……。また餌見つけたか）

「……商人は元王宮出入り商人のペドロよ」

この瞬間、私は思考が停止しました。

「ペドロは、半年前までリツシュモン殿に保護されていたみたい。近々王宮出入り商人に、復帰するそうよ。下級貴族達に人望が有ったから、復帰を喜ばれているわ」

（リツシュモン・ペドロ・ギョーム。繋がった様な気がする。リツシュモンは、情報と秘薬を買う。ペドロが下級貴族に恩を売り、情報を引き出す。ギョームは研究資金の確保の為、暗殺用の秘薬を調合する。母上が妊娠中に飲んだ秘薬を考えると、間違い無く人体実験もしているな……）

全く証拠が無いですが、私の中で確信めいた何かがありました。リッシュモンが密告者になれたのも、ペドロの情報のおかげと考えるのが自然です。また、ギョームの様な人間（人体実験を平気出来るうな人間）が、何人もいるとは思えません。それに秘密を守るには、少人数の方が都合が良いでしょう。

（こいつ等が姉と僕の敵か・・・）

この時私は、怒りを隠しきれませんでした。カリリーヌ様が、怪訝な顔をしました。

「・・・ギルバート。あなたまだ何か隠しているわね」

私は不味いと思いましたが、これは全然回避可能な範囲です。と言うか、リッシュモンについては誤魔化す必要がありません。

「マジ情報です。リッシュモンは、極悪人ですよ。かつてダンゲルテールで、疫病が発生したとされています。しかし事實は、新教徒狩りです。この時ロマリアから、どれ位の賄賂を貰ったんでしょうね？」

カリリーヌ様の表情が、険しくなりました。私は怒りの所為で、饒舌になり過ぎない様に自分に言い聞かせます。

「ここから先は、父上の受け売りと言うか愚痴になります・・・」

私はそう区切って、自分の愚痴を恰も父上の愚痴の様に語ります。

「リッシュモンは、去年の逮捕劇の際に密告者になる事により追及

をかわし、高等法院長の座を手に入れていきます」

私は感情的な部分を、なるべく見せない様にして続けます。

「ドリュアス家は、クールーズ領を押し付けられ動きを封じられていますし。父上も名誉な任務と引き換えに、王都から追い出されています。加えて、ヴァリエール公爵引退の噂が混乱を呼び、良い隠れ蓑になっていますので、思い切った地盤固めが出来ます。高等法院では、ライバルが居なくなり一人勝ち状態です。賄賂など、黙っていてもどんどん集まりますね」

後半抑えきれずに、畳みかける様に言っしまいました。秘薬の事も言っしまいました。たかっただけですが、そこまで言っくと警戒されそうでしたので、自重する事にしました。

「カリー又様は啞然としています。(・・・少し言いすぎたか?)
少し間をおいて、落ち着いたカリー又様は口を開きました。

「リッシュモンとギョームについては、私達でも調べて見るわ」

この時のカリー又様は、にっこりと良い笑顔で笑っていました。
(怖い)

この後私は、他にマギや父上から聞いている事は無いが、カリー又様から追求を受けました。

そこに救いの天使が現れました。執務室をノックする音がしたのです。カリー又様は、追求を止め入室を許可しました。入って来たのは、ルイズでした。

「ギルバートに、その・・・話が有って・・・」

「分かりました。カリィ又様との話も終わっていますので、すぐにもお聞きします。ではカリィ又様、失礼しました」

私はこれ幸いと、ルイズを連れてその場から逃げ出しました。

私はルイズと話をする為、私の部屋へ向かいます。しかし私には、寄らなければならぬ場所がありました。そう、カトレア様の部屋です。マルウエンの首輪について、口裏を合わせてもらう必要があるからです。

「ルイズ。悪いけど、カトレア様に用が有るんだ。少し部屋によって良いかな？」

何故かルイズは、ガタガタと震え始めました。私は何度もルイズに話しかけましたが、まともな返事が返って来ませんでした。仕方が無いので、ルイズの手を引きカトレア様の部屋へ向かいました。

私はボス部屋の扉をノックをしようと、手を上げドアを叩こうとした瞬間・・・。

「ギル。すぐに入ってちょうだい」

ノックより先に返答が来ました。カトレア様の能力は、扉の向こうまで有効か・・・。

「失礼します」

相変わらずガタガタ震えているルイズの手を引き、入室しました。カトレア様は私の顔を確認すると、いつもの様にコロコロと笑いしました。次いでルイズを見ると、一瞬だけフラットな表情になりました。……カトレア様が怒ってる？

(ルイズは何やらかしたんだ？カトレア様を怒らせるなんて、尋常じゃないぞ)

ここは用件だけ済ませて、早々に撤退するのが吉と判断しました。私はルイズから手を離すと、姿勢を正し口を開きます。

「カトレア様。実はお願いしたい事が有るのですが……」

「分かっているわ。(公式には)私があげたチョーカーの事ね」

(ありがとうございます。このお礼は必ず)

私が軽く頭を下げます。すると、カトレア様が手を動かし(こっちゃこいと言わんばかりに)手招きしていました。逆らうと後が怖そうなので、指示されたとおり近づきます。

私が近づくと、同様の動作を私の顔の横に向けてしました。どうやら、耳を貸せという仕草の様です。特に逆らう理由も無かったので、指示通りベットに乗り出し耳を差し出します。カトレア様は声が漏れない様に、手で口元に輪を作り私の耳元へ……。

「大切な話があるから、夜にもう一度この部屋に来て」

何故かとてもフラットな声が聞こえました。しかも本能が、逃げ

ると警告して来るような……。その時もつと直接的な危険を感じ、ベットから素早く身を引きました。（何故か頭に浮かんだイメージはトラバサミでした）

ベットの上には凄く良い笑顔で、自分の体を抱きしめる様な姿勢で停止しているカトレア様が……。その表情のまま、スウーとこちらを向くカトレア様。表情がゆっくりと変化していきます。笑顔が消え口はへ字になり涙目になった所で、鼻をグスンとならすとベットに横になりタオルケットを頭まで被ってしまいました。

（何故でしょうか？何故私がこんなに、罪悪感を感じなければいけないのでしょうか？反射的に避けなければ、抱きつかれてたのか勿体ない。まあ、今更後悔しても遅いか）

その時タオルケットが、プルプル震えている事に気付いた。まさか……。本格的に泣いてる？

混乱……。IN

このまま立ち去って良いのでしょうか？何か一言かけるべきなのでしょう？いや、一声かけるべきなのでしょう。しかし、何と声をかければ良いのか分かりません！！無知ゆえに、このまま立ち去ります！！故郷の両親よ、血のつながらない姉よ、まだ幼い妹よ。この私の魂の選択を、笑わば笑えええ！！……。そうだ、見なかつたことにしよう。

混乱……。OUT

私が思考の混乱から抜け出すと、タオルケットは変わらずプルプル震えていました。しかし僅かですが、笑い声が漏れていました。（うん。大丈夫だ）

「さあ、ルイズ行きますよ」

「でも、ちいねえさまが……」

「後で私がフォローはしておきますから」

私はルイズを連れて、カトレア様の部屋を辞しました。

さて、場所は移って私の部屋です。

問題のルイズですが、テーブルに着いた途端黙ってしまいました。私はルイズが喋ってくれるまで、ゆっくり待たせてもらうつもりです。時間は有りますし。

程なくして、ルイズがぼつぼつと喋り始めました。

魔法が危険であることを、分かっているつもりで分かっていた。自分の魔法が、失敗魔法だから危険でないと思いついていた。自分の思慮が足りないばかりに、私に怪我をさせた。等々、要するに自分が悪かったと言いたいらしいです。

「ごめんなさい。私の魔法で誰かが傷つかない様にするわ」

ルイズは最後にそう言いました。はい。それは違うと思います。

「ルイズ。魔法そのものに、良いも悪いも無いと思うよ。確かにルイズの失敗魔法は、爆発魔法なのだから人を傷つけるのに特化している。それは逆に、人を守れると言うことでもあると思う。それな

ら、それ相応の使い方を考えれば良いじゃないか？それを考えるのも、メイジとして大切な事だと思うよ」

ルイズは俯いてしまいました。私はルイズの前に行くと、ルイズの頭に右手を伸ばしながら続けます。

「大き過ぎる力は、魔法・権力に関わらず周りを不幸にしてしまうよ。だからその力に釣り合うように、人間として成長しなければいけないと思う。ルイズは今、自分の未熟さを知っているだろう。なら、成長出来るさ」

私はルイズの頭を撫でながら、淀みなくそう答えました。

「うん」

そんな私にルイズは、迷いながらも頷いてくれました。

これ以降ルイズは、私を兄様と呼ぶようになりました。（良いのかな？）

夜になったのでまた来ました、ラ・ヴァリエール家のボス部屋です。さて……。

「ギル。早く入って」

今度は深呼吸する間もくれませんでした。いよいよどんな話が出て来るか、不安になって来ました。しかしここで逃げれば、破滅が約束されている様な気がします。

「失礼します」

部屋に入ると光源は月の光だけです。カトレア様はベッドで、上半身だけ起こしているが分かりました。表情は暗くて見て取る事が出来ません。

「こつちに来て」

そこで違和感がある事に気付きました。カトレア様の声に、緊張の様なものが見て取れるのです。何か余程重要な事なのでしょうか？

私は言われるままにベッドに近づき、ベッドの脇にある椅子に座りました。

「手を出して」

私は利き腕である右手を差し出しました。カトレア様は私の右手を、両手で包みこむように握りました。暗い部屋でカトレア様と、目が合いました。とても真剣な目をしていました。

「ギルはご両親に受け入れてもらう為に、何処までも真摯に向かい合ったのよね？そこに嘘も飾りも無く、ただ残酷に真実と言う毒を飲ませた。そしてギルのご両親は、その毒を飲み干したんだわ」

私は頷きました。そこには嘘を吐かなかったと言う、私の家族としての誇りが有ったから……。

「だからこそギルの家では、とても強い繋がりが有るんだわ。本当に羨ましくなるほど……」

「カトレア様だって持っているではありませんか」

「今は様は付けないで!!」

真剣な言葉に、私はただ頷く事しか出来ませんでした。

「私の家族は、与えられたものよ。父様と母様が手に入れたものであつて、私が手に入れたものじゃないわ」

私はこの言葉に、頷く事が出来ませんでした。確かに正しいのですが、同時に酷く悲しい言葉でした。

「私はギルにならつて、私と^{真美}言う毒をギルに飲ませるの」

私はその言葉が、正直信じられませんでした。しかしカトレアの目は、一片の曇りなく何処までも真剣でした。

そしてカトレアは、カトレアと^{真美}言う名の毒を吐き始めました。

私は産まれてからずっと、身体が弱かった。ずっと満足にベットから起き上がれず、私の世界は与えられた部屋だけだった。窓から外は見えるけど、触れた事の無い私にとって本の中の世界と変わらない物だった。

生きる為に必要な物は、みんな外から勝手に運ばれてきた。そして不要な物は、いつの間になくなっていった。

父と言う人と、母と言う人と、姉と言う人が時々会いに来てくれ

た。みんな私に、とても優しくしてくれた。それが家族だと知った。

やがて私の世界が、少しだけ広がった。部屋の中だけだったのが、屋敷の中に広がったのだ。だけど身体が弱いのを理由に、なかなか部屋から出してもらえなかった。我慢できずに、勝手に外に出ても苦しいだけだった。結局部屋の外に出るのも、与えられるものだった。

急に家族が会いに来てくれなくなった。どうやら私に妹と言う存在が出来る様だ。私も家族にされた様に、優しくしようと思った。暫くしたら妹が生まれた。

妹は私と同じように与えられ、どんどん大きくなっていった。だけど妹は、私と違っていた。妹は楽しそうに、外を歩き回っていたのだ。この時初めて、自分が変な事に気付いた。

いつの間にか、妹と自分を比べる様になっていた。しかしすぐに止めた。比較するのも馬鹿馬鹿しい位、私と妹は違っていたのだ。

妹が母に怒られていた。悪い事をすれば、怒られるのだ。私もその位は知っている。私も怒らなければいけない時は、全力で怒ろう。

妹が私に泣きついてきた。いつも通りに優しくした。出来ると言うことは大変だなと思った。そして妹は、何かある度に私の所に来るようになった。

妹が何時もの様に泣きついてきた。如何しても上手く出来ない事が有ると、妹は言っていた。私はその時初めて、人間には得手不得手が有ると学んだ。私は出来ない事が、人より多く時間命が少ないだけだと気付いた。

それから私は、人を見る様になった。今まで有象無象でしかなかった使用人でさえ、観察の対象としては面白かった。私は人を見るのが楽しみになった。

やがて私は、人の数だけ心と人生が有るのだと知った。私は人の僅かな所作から、その人が何を考えているか分かるようになっていった。

人を理解出来ると、人に優しく出来るのかもしれない。私はその時その人に、言って欲しい事や言うべき事を言えるようになっていった。自分でダメならば、大丈夫な人に頼むことも覚えた。

気付くと自分の手の中には、大切な物ばかり残っていた。与えられたものや、いつの間にか持っていたものばかりだったが、私はそれに満足していた。

……ある男の子に出会うまでは。

カトレアはそこで言葉を切り、私の右手を弄び始めた。時々上目づかいで、私の顔を覗き込んできます。私はカトレアの真意を読み取りましたが、流石にまずいと判断し首を横に振りました。

私の反応にカトレアは不満の色を浮かべると、私の右手を引つ張って来ました。病弱な14歳の女の子と鍛えている8歳の男の子の綱引きは、女の子の勝利に終わりました。私が抵抗するのを、止めたからです。

ベットの縁に並んで座らされ、私は溜息をつきました。カトレア

の狙いは、自分の心音を私に感じさせながら話をする事の様です。副次的に膨らみ掛けの胸があたり、私はドギマギしてしまいます。先程の綱引きに勝利していた場合、場がベットから椅子に変わっただけでしよう。その場合、カトレアは私の膝の上に乗って抱きつきながら話をしたでしょう。そうなると必然的に、私の顔はカトレアの胸の中に……。私の内心は勝ちを譲って良かったと言う想いと惜しいと言う想いで複雑でした。するとカトレアは、私の耳に口を近づけて……。

「エツチ」

……と呟きました。私は居た堪れなくなり逃げようとしたが、既にカトレアに腕をホルドされていました。力づくで逃げようと思えば逃げられますが、後が怖いので止めておきます。

カトレアは一度深呼吸をすると、話の続きを始めました。

私の男の子に第一印象は、良く分からない子だった。そう私が今まで見て来た事が、根底からで通じない子。

私はその男の子に、当然の様に興味を持った。だから待っていた。その男の子が自分に会いに来るのを……。

でも男の子は、私に会いに来てくれなかった。他の皆は会いに来てくれたのに、その男の子だけは別だったのだ。何故か分からずに、それとなく皆に聞いてみた。皆の答えは、遠慮しているだけと返ってきた。

女の子の部屋に入るのを遠慮しているなら、外で会えば良い。私

はその時体調も良かったので、思いきって皆と外で遊ぶ事にした。

皆と遊んでいると、件の男の子を見かけた。いよいよ話が出来ると、私は嬉しくなった。しかし男の子は、こちらに来る事無く立ち去ってしまったのだ。

・・・私は避けられている？

その時、漠然とそう思った。・・・何故？私はその理由が全く分からなかった。それから後は、体調の関係で外に出られなかった。皆が私の部屋へ来るように誘っていたらしいが、その後も男の子は全てを断っていた。私は訳が分からなかった。

気が付くと私は、その男の子の事ばかり考えていた。でも時間は有限で、男の子が帰る日が来てしまったのだ。

せめて最後まで話ししたい。そう思い話しかけようとした時、その男の子が何を考えているか分かった。今までにない位、はつきりと読み取る・・・いや、私の頭に流れ込んできた。何故か人を見る力が、その男の子だけ例外的に強く働いていた。

その男の子は、私が見る力がある事を知っていた。そして、男の子は自分が歪んでいる事を知っていた。私が改めてそれを指摘するかもしれないと、怖がっていた。

ショックだった。

私の人を見る力は、人の為になる良い物だと思っていたからだ。しかし、実際にこの力を恐れている人がいる。私はその事で悩んでしまった。そして、何故この力があの男の子にだけ強く働いたか考

えてしまった。

答えは結局出る事は無かった。

でも考える事を止める事は出来なかった。時間だけは無駄に有ったので、その時間を全て考える事に費やしていた。そしてふと気付くと、私はその男の子の顔ばかり思い出すようになっていた。

そして自覚した。自分の命にさえ執着しなかった私が、その男の子に執着していたのだ。

この日、私がずっと待っていた男の子が家に来た。待っていても来てくれないのは分かっていたので、妹に連れて来るようお願いした。

妹は男の子を連れて来てくれた。おまけに男の子はプレゼントまでくれた。思えば過去に、これほど嬉しいと思った事が何度あったろうか？その時、男の子と私の手が触れた。男の子は気付かなかったようだが、私は気付けた。

触れた部分より何かが、私の中に流れ込んできた。

それは記憶であり知識だった。流れ込んで来たのは、ほんの僅かな量だったがそれが如何に貴重で危険で凄い事か私にも分かった。そして、マギと言う人の事も……。

それが男の子を縛る鎖になると分かった。私は嬉しさのあまり、それを使うのに戸惑いは無かった。

だけとすぐ後悔する事になった。男の子の私に対する感情が、負の色に染まって行ったのだ。私はこの時、時間をかければこの失敗を取り戻せると思っていた。

次に日に、男の子はこの世から居なくなつた。男の子の身体は、暖かく胸には鼓動が有つた。なのに男の子は、この世に居ないのだ。私は絶望のあまり、妹にきつくあたってしまった。

医者「もう目覚めない」と言う言葉に、私は目の前が真っ暗になった。私はこの時、初めて涙で枕を濡らした。この時初めて、私の男の子への気持ちが分かつた。

男の子がこの世に帰つて来た。すぐに私の所に来てくれると思つてた。でも、待つても待つても男の子は来なかつた。やっと来たと思つたら、妹と仲良く手を繋いでいた。私は面白く無かつた。

なら、この気持ちを告白しようと思つた。しかし、流石に妹の前では恥ずかしい。この場合は、アピールだけにしよう。夜もう一度ここに来るように伝え、私は思いつきり抱きつこうとした。

しかし結果は、・・・避けられた。

私に抱きつかれるのは、そんなに嫌だつたんだろうか？しかも、瞬間的なイメージがトラバサミは無いと思う。私は悲しくなつて、タオルケットを被り隠れてしまった。

しかし避けたのは、反射的な事だつた。しかも避けた事を、惜しいと悔いていた。そして隠れてしまった私が、泣いていると勘違いし一人で混乱していた。気付いてすぐに出て行ってしまったが。

そして男の子は、ようやく私の所に来てくれた。

ここまでの話で、男の子が誰か分からないはずが無い。

ここまで来れば、私が毒を飲み干すか拒絶するかだ。

私にとってカトレアとは、如何いう人なのだろう？

カトレアは私を助けてくれる。カトレアは私を理解してくれる。

カトレアは私と罪を共有してくれる。カトレアは私を愛してくれる。

共に人生を歩むに足る人だ。

なら肝心の私の気持ちはどうなのだろう？

そう。一番肝心なところが、私には分からない。分からない以上、分からないとしか返答できない。気軽に肯定すれば、後で後悔するかもしれない。逆に否定すれば、一生を共にすべき人を永遠に失うことになるかもしれない。

「カトレア……私は……」

「いいわ。まだ答えなくて。その代わりに、私にも時間が欲しい」

私はカトレアが何を言っているのか、分かりませんでした。

「私の病気を治療して。と、言っているのよ」

反射的に「無理だ」と、答えそうになりました。しかしカトレア

の目は、私なら出来ると言っていました。どの道調べるだけなら、何の障害も代償もありません。

「分かりました」

私は医療行為であると割り切つて、杖を抜き寝間着の上を脱がせます。膨らみ掛けの胸が見えましたが、医療行為と割り切ると気にならない物です。お腹に左手を当て、《探知》ディテクトマジックを発動します。

《探知》の魔法は大変便利な反面、酷く不便でもあります。それは限定的な事しか、教えてくれない事です。

体温を知りかければ、温度を《探知》する必要がありません。秘薬を解析したいなら、成分を《探知》する必要がありません。しかし成分が分かつて、効果は専門家でなければ分かりません。

ではカトレアの病は、何を《探知》すれば原因が分かるのでしょうか？漠然とした原因を知ろうと《探知》を使つても、成功する事は有り得ません。原因が分からない為、何に対して《探知》を使えば良いか分からない。カトレアの病は、兎に角そこが問題なのです。

今回私は、体内に炎症や癌等が無いか調べるのに一回、体内の水流れを見るのに一回。少なくとも、二回使用する事にしました。しかしこれだけなら、他の医師が何百回もやっているでしょう。別のアプローチを考えなければ、カトレアの病の原因を掴むなど不可能です。

先ずは一回目、炎症や癌等物理的に悪い部分を探します。しかし驚いた事にカトレアは、多少貧弱なきらいは有りますが概ね健康体

でした。後は内臓の活動が、一部不活発なところが有る位です。

続いて二回目、体内の水の流れを見てみます。これも大きな問題が、有るとは思えないほどでした。一部に流れが悪いところが有るだけです。私は首をひねってしまいました。

後は別のアプローチ方法を考え、実行する事です。最初に思っていたのは、血液検査でした。しかし専門家ではないので、どうにもなりません。そこで思い付いたのが、自分の血液と比較する事です。カトレアから裁縫用の針を二本借りて、《発火》で適当に炙って消毒します。その針でお互い、適当な所を刺し血を出します。私は服が汚れるのが嫌だったので、指先にしました。それも一番使わなそうな、左手薬指にしました。見るとカトレアも、同じ所を刺していました。

二人の血を比べ、赤血球・白血球・血小板を《探知》調べて行きます。結果は、二人とも殆ど同じでした。比率にも問題無い様です。

私は頭を抱えてしまいました。

見るとカトレアは深く傷つけ過ぎたのか、血がなかなか止まらないうです。私は《癒し》をかける為、カトレアに近づきました。するとカトレアは私の左手を捕まえ、傷口を重ねたのです。私とカトレアの血が、混じり合います。そして自分の薬指を、口に運びました。

「マギさんの知識からヒントを得て考えたお呪いよ」

私は問答無用で《癒し》をかけ、お互いの血を止めました。

(たしか互いの血を混ぜるのは、肉親になると言う呪いのはずです。同性の場合は兄弟・姉妹だったはず、男女の場合は……)

そんな事を考えていると、カトレアは私の左手をまた捕まえてまだ血で汚れている薬指を口に銜えました。舌の感触が、凄く艶めかしいと言つか生々しいと言つか……。

「はい。綺麗になつたわ。……興奮した？」

私は無言でカトレアの脳天に、チョップを落としていました。「ゴン!!」と結構派手な音がしたので、かなり痛いはずです。カトレアは涙目になりながら、口を尖らせていました。

「どっからそんな事覚えて来るんですか!？」

「ギルから」

私はこの切り返しに、大いに脱力してしまいました。

「さっきの答え、保留じゃ無く拒否にしようかな……」

「私を自分色に染めておいて今更捨てるの?」

言っている事は間違っていないけど、その言い方では私が極悪人です。それと微妙に脅されている様な気がするの、気のせいでしょうか?この間カトレアは、ただニコニコして居るだけでした。

(この調子では私は一生、カトレアから逃げられないんだろうな)

「うん。逃がさない。その為にも早く治療してね」

カトレアは私の孤独を知っています。だからこそ、これ程までに自信が有るのでしょう。これは冗談抜きで、一生の付き合いになりますね。それを嬉しいと感じている、自分が恨めしい。

私が思いつく検査は、全部行いました。しかし原因らしき原因が全く分からずじまいでした。そこで、カトレアに分かる限りの症状と検査で分かった事を、まとめてみました。

- 1 ・どこか一カ所が悪くなり治すと別の一カ所が悪くなる。
- 2 ・魔法を使うと急激に体調が悪化する。
- 3 ・水の秘薬はそれなりに効く。
- 4 ・肉体的な原因は見当たらなかった。（但し中途半端なマジ知識での話）
- 5 ・魔法的な原因と推察される。

カトレアから出たのは、1〜3の3つだけでした。

借りに4を確定とするならば、原因は魔法的な物。魔法を使うと体内の魔力が減って、体調が悪くなる。水の秘薬を飲むと水の魔力が補充されて、元気になる。魔力とは、精神力であり生命力であるから……。そこでふと思いつきました。精神力と言う位だから、魔力を精製するのは頭とみて良いでしょう。しかし作られた魔力は、普段何処に格納されているのでしょうか？

私は魔力の分布をみる為、何気なくカトレアに《探知》を使いました。

全身に薄らと分布する魔力を、感じ取りました。そして先程患部と思われた位置に、魔力のダマ（小麦粉を液体に混ぜる時溶けずに残った奴）みたいなものが、出来ていました。

私はカトレアに、水の秘薬を飲むように頼みました。秘薬を飲んだ結果、ダマがどのように変化するか見たかったです。

結果は予想通り、小さくなりました。ダマの縮小に伴い、周りの水の流れが良くなりました。原因はこれで確定ですね。

人間の体を密封された瓶と考えて、魔力はその中の空気と考えます。魔法を使うと、空気が減り瓶の中の気圧がさがります。

カトレアの場合は、瓶の中に空気の入った風船が有ると考えると分かりやすいと思います。魔法を使うと、瓶の中の空気が減り気圧がさがる。すると風船が膨らむ。

風船が膨らむと、体内の水の流れが阻害され器官にダメージを与える。重要器官でそれが起こると、最悪死が待っています。

水の秘薬を飲んで回復するのは、瓶内に水を注入することと同義だと思います。

これまでの治療では、ダマを洗い流し位置を変えただけだったと考えると1とも辻褄が合います。

つまり体内のダマを、すべて取り除ければカトレアは完治すると言つ事です。そこで私の思考を読み取ったのか、カトレアが話しかけて来ました。

「それで治療法は……」

私は少し考え、説明を始めました。

「一つ目は、ダマを物理的に体外へ引きずり出す方法がです」（要するに外科手術です）

カトレアは、嫌そうに首を横に振りました。

「二つ目は、虚無魔法ディスプレイ・マジックによるダマの消去です」

今度は、複雑な表情で首を縦に振りました。

「三つ目は、先住魔法による治療に可能性が有ると思います」

カトレアは、首を傾げてしまいました。

「治療法は、この三つです」

私の言葉に、カトレアが首を傾げました。

「もう一つあるでしょう」「いや、このみ……」

「もう一つあるわね」「はい」

私はカトレアの迫力に押され、頷いてしまいました。と云うか、心読めるなら聞かないで欲しかった。新手の苛めでしょうか？

「早く説明して」「はい」

「デイル＝リフィーナにある魔術による治療です。その……。性魔術による治療です。男女で交わる事により、相手の体内にある魔力を操作します。これにより、ダマを体外に排出します」

ここでカトレアが、にっこりと笑いました。

「拒否します」「認めません」

「無理です。第一私は精通もまだなんですよ」

「ならそれが済めば、可能ね」

カトレアから、拒否は認めませんオーラが漂って来ます。そこで私は、反撃手段を思いつきました。

「分かりました。リタカナベリウスに、実践付きで手ほどきを受けて来ます」

「……実践無しで教えてもらってください」

私は聞こえない振りをして、部屋から出て行くこうとします。

「母様にマギの事言いつけるわ」

「機会があれば、聞いて来ます。手は決して出しません」

私は手のひらを返したように、了承しました。

今後尻に敷かれるの決定ですね・・・。

第二十七話 ヴァリエール姉妹（長女抜き）（後書き）

もう投げだしました。カトレア壊しました。

長女を差別しているわけではありません。タイミングが悪かっただけです。

今後超展開ありかも。

ヒロインは、原作一人オリー人の予定だったりします。

感想お待ちしております。

第二十八話 やっぱ鍛冶でしょう

こんにちは。ギルバートです。カトレアに首根っこどころか、人生まで抑えられました。このままカトレアに捕まるのは、癩だと感じる私は子供なんでしょうか？

一晩明けて私は、練兵場で剣を振っていました。それ以外の時間は、ルイズの相手が公爵家の蔵書を読み漁るのに使いました。

そうです。せめてもの抵抗として、滞在期間中カトレアに一度も会いに行かない事にしましたのです。

そして更に翌日、私達は朝食を取っていました。朝食後に、ドリユアス領へ出発する予定でした。そこにカトレアが突入して来たのです。

そ知らぬ顔でその場に加わるカトレアに、私は最大限警戒して居ました。

実際問題カトレアは、マジや原作知識の話は出来ないはずですが、それは秘密の共有と言う絆の否定と、私との破局を意味するからです。カトレアが私に本気なら、絶対に切ってこないカードです。

となると、昨日会いに行かなかったのを怒っているなら、私とカトレアがつき合っていると臭わせる発言で、ドギマジする私を見て溜飲を下げるつもりですね。

そこで私は、カトレアが言いそうな発言をシュミレートし、何時でも反論できるように準備します。やがてカトレアが話題変換をし、

私が「来る！」と身構えた時……。

「母様。私ギルバートと結婚するわ」

爆弾に対応する準備はしていませんでした。しかし爆弾が規格外でした。頭に核の文字が付く爆弾だった様です。しかし、私がこの状況で一番驚いたのは、自分の冷静さでした。現にカリーヌ様とルイズは、朝食を吹き出しているのですから。

カリーヌ様とルイズを見ながら、カトレアはコロコロと笑っていました。

「カトレア？それは如何いう事ですか？」

カリーヌ様が、ほうほうの体と言った様子で、カトレアに聞き返しました。カトレアは、その発言こそ何言ってるの？と言わんばかりに、首を傾げました。

「言葉どおりの意味以外、何が有るのですか？」

カリーヌ様はカトレアでは埒が明かれないと思ったのか、矛先を私に変更しました。

「ギルバート。これは如何いう事ですか？」

「いえ、……私にもサツパリです」

私は心底分らない。と言う表情を作りました。こうなると、再びカトレアに視線が集まります。

「あら。その為に私の病気を、治療する約束をしたのではないの？」
視線がカトレアから私に移ります。

「可能性の話です。私ではカトレア様の病を、完治できるか分かりません」(ルイズの可能性有り)

カトレアは迷子の様な顔で、私を見ながら言いました。

「私と結婚するのは、嫌なの？」

(ぐっ……)。最終兵器を出してきたな。しかしここを切り抜ければ、私の勝ちです)

私は困った様に小さく溜息を吐き、返答をしました。

「そうですね。問題(主に私の気持ち)が解決すれば、こちらに異存は有りません。カリー又様はどう思われますか？」

カリー又様がいきなり話を振られ、驚いた表情を見せてくれました。
た。

「確かに、問題(カトレアの病と夫の了解)を解決しなければいけません」

「私の問題(病)が解決すれば、良いのですか？」

「そうね。問題(カトレアの病と夫の了解)が解決すれば、許可します」

(カトレア。今日はこの辺で満足しませんか?)

カトレアは頷くと、ご機嫌で部屋へ戻って行きました。

「カリー又様。よろしかったのですか?公爵様に相談無く、病が治り次第結婚を許可するなど・・・」

「えっ・・・?」

カリー又様は前言を撤回する為、慌ててその場を飛び出して行きました。しかし、カトレアは全く聞く耳持たなかったそうです。ちなみにルイズは、カリー又様が飛び出すまで完全にフリーズしていました。

その後カリー又様に、家まで送ってもらいました。カリー又様は終始凹んでいました。

ドリユアス家に到着し、カリー又様が父上と母上に配慮が足りなかったと謝罪しました。カリー又様の凹みっぷりに、父上と母上は恐縮していました。(・・・凹んでる理由違うのに)

私の帰還を一番喜んでくれたのは、父上でした。そんなにワンドは、お嫌いなのでしょうか?

家族全員でカリー又様を見送り、早速杖剣の作成に・・・と言ふ訳には行きません。私はドリユアス家緊急家族会議を、提案しました。

全員が執務室に集合すると、私はサイレントで聞き耳を封じました。使用人達は信用していますが、巻き込みたく無いですから。

「緊急家族会議など、一体どう言う事なのだ？」

父上が当然の質問をして来ました。

「ペドロが王宮出入商人に復帰するそうです」

私は即答しました。私の言葉に激しく反応したのは、当然母上です。激昂した母上を、私と父上の二人がかりで抑えます。母上の反応に、事情を知らないディーネとアナスタシアは、ただ呆気にとられていました。

（そう言えばディーネとアナスタシアには、私の魂が二つの魂が融合した物だとは話しましたが、魂が欠けた原因と思われる秘薬の話はしていませんね）

「アズロック。．．．如何いうこと？」

あ．．．．母上の怒りの矛先が、父上に向きました。（母上からすれば、敵を撃つてくれたんじゃないやなかったの？と、言ったところ）父上はそれに気付き「ギルバートの話を最後まで聞こう」と、母上を説得しました。その言葉に母上は、とりあえず納得したようです。

私は先ずリッシュモンが、ペドロを保護していた事を話をしました。そして、ヴァリエール公爵家に居たギョームについて話し、コイツをリッシュモンがお抱えにしていた事も話しました。この段階で、この三人が繋がっている可能性は、ディーネやアナスタシア

も察する事が出来たようです。

この三人が繋がっていた場合の、役割分担を説明しました。

リッシュモン

他の二人の雇い主。ペドロから情報を買ひ、ギョームから暗殺用の秘薬を買ひ。情報をもとに、証拠隠滅やライバルの動向を知る。ライバルを蹴落としたり暗殺する等して、立場を確立する。立場を利用して、賄賂などを集め金を儲ける。

ペドロ

リッシュモンより金銭を受け取り、商品を下級貴族に格安で品物売る。これにより、下級貴族と懇意になり情報を引き出す。引き出した情報を、リッシュモンに売る。

ギョーム

暗殺用秘薬の調査研究と人体実験。

私はここまでの話を、一気に説明しました。説明が終わっても、暫くの間はみんな無言でした。

「証拠は有りませんが、リッシュモンがペドロを保護しギョームをお抱えにしていたのは、ヴァリエール公爵が確認しています。また、例の秘薬を売ったのはペドロです。そして、ダングルテールの大虐殺は疫病拡大阻止に見せかけた、新教徒狩りです。これで疑うなど言う方が無理です」

ちなみにダングルテールの虐殺に関しては、父上にお願ひし調べてもらい首謀者がリッシュモンである事と、新教徒狩りである事が確定しています。（魔の森調査官の肩書が役に立った）

本来ならば原作知識が有れば必要無いのですが、原作知識を過信して失敗しては笑うに笑えません。ちなみに原作知識の存在は、家族内に全く話していません。ダンゲルテールの調査も、私が無理にお願いしただけです。父上と母上も私がまだ何か隠していると知っていて、何も聞かずにいてくれます。

私はこの事に、後ろめたさを感じていました。そう言った意味では、今私に一番近い存在はカトレアになるのでしょうか。（これでカトレアに側にいてほしいと思うのは、最低だな・・・）

父上と母上は私が黙ってしまおうと、過去の経緯（主にペドロの秘薬と、長女ユリアの話）をディーネとアナスタシアに話し始めました。話が終わった時の反応は対照的でした。ディーネは完全にフラットな表情になり、ボソツと一言「だからブリミル教徒は」と呟いていました。アナスタシアは、顔を真っ赤にして怒っていました。

これからについてですが、話し合った結果現状維持になりました。年内にドリュアス領の事が落ち着くので、来年から報復のための調査を始める事にしました。今回はギョームの件が有るので、ヴァリエール公爵も協力してくれるでしょう。

この決定を持って、緊急家族会議は終了しました。

会議終了後、父上が話しかけて来ました。どうやら母上の追及を、上手く逃れて来たようです。

「ギルバート。杖剣の件なのだが・・・」

「はい。やはり剣自体に、一週間は待つていただかないと・・・」
その時父上の腰に下がっているのが、ワンドとサーベルである事に気がきました。

「父上。何故レイピアでは無くサーベルなのですか？」

「元々武器は、サーベルもレイピアも行ける口でな。王宮で働く際、レイピア型の杖剣を支給されたので、そのままレイピアを使っていた。だがそれも無くなり、レイピアより対亜人戦に向くサーベルを使うことにした」

「では、杖剣もサーベルが良いですか？」

父上が頷くのを確認すると、私は言葉を続けました。

「レイピアとサーベルでは、必要な金属量が多くなるので、更に手間がかかると思いますがよろしいですか？」

私の言葉に、父上が凹みました。事実だから仕方が無いのですが、なんだか私が苛めているみたいですよ。

「それにサーベルではレイピアと違って、軽すぎるのも不味いのではありませんか？」

父上が更に凹みました。私が苛めている見たいなので、あんまり凹まないで欲しいですよ。

「対亜人用に使うなら、厚み・幅・長さもそれなりに大きく無いと役に立たないですね。そうなると更に、必要な金属量は増えます」

父上の凹みっぷりは凄まじく、今にも座り込んでのの字を書き始めそうな勢いです。この時私は、急いでも一週間では無理と判断していました。そこで父上が口を開きました。

「実は《錬金》で作れないか、シルフィアの剣を参考に頑張ってみただが・・・金属の純度が足らなくて、全然ダメだった」

(・・・何ですと?)

「父上。その剣を見せてくれませんか？」

「鍛冶場に置いてある」

鍛冶場に移動すると、レイピア型のチタン剣2本とサーベル型のチタン剣4本が有りました。《探知》ディテクト・マジックで調べてみましたが、どの剣も不純物が多すぎます。

私は一本のチタン剣から、《錬金》で不純物を分離精製します。この方法を父上に教えると、父上は不思議そうに聞いて来ました。

「何故直接チタンを、分離精製せんのだ？」

私はこの切り返しに、全く反論できず固まってしまいました。ドツトの頃から「純度はコツコツ上げる物だ」と、思い込んでいたのです。ハッキリ言って、その発想は有りませんでした。・・・正直凹みました。

「父上の言うとおりです。私にはその発想は有りませんでした。素晴らしいです」

私は父上を褒め称えました。先程まで凹んでいた父上が、見る見る自信を取り戻していきます。逆に私が凹みましたが……。

これにより何十回も《錬金》を繰り返していたのが、たった二回で済むようになりました。これまでは一本に一週間以上かけていましたが、これからは一日に2〜3本ペースで作れます。（チタン剣は絶対量産しないけど）

早速父上が《錬金》したチタン剣から、純チタンを分離精製します。とれた純チタンは意外に少なく、父上が理想とする大型サーベル一本分には少し足りませんでした。

そこで私は、自分の刀用に作って置いた純鉄を引っ張り出し、炭素を合成し刃金にする事にしました。父上と協力し刀身はチタン製で、刃の部分だけ高炭素鋼のサーベルが出来ました。表面のチタン被膜処理は、父上が遠慮したので施しませんでした。

父上はその出来に満足そうに頷き、鞘を作ると《硬化》と《固定化》を重ねがけしました。まだ外は明るかったので、早速試し切りをする事にしました。私が《錬金》で試し切り用の土人形を、数体作り上げます。

父上は気合一閃、土人形を両断しました。その切れ味に、父上の顔がゆるみました。

「ギルバート。素晴らしい出来だ」

父上はそのまま、二体目三体目と切り裂いていきます。と、その時母上が文字通り飛んで来ました。流石に風のスクウェアだけあつ

て、無茶苦茶早いです。母上は《飛行》フライを解除し着地すると、父上に詰め寄って来ました。

「そのサーベルは何？ギルバートちゃんと一緒に作ったの？やっぱり対亜人用を想定して？……」

母上が間をおかず、次々に父上に質問をします。（あれでは答える隙がありません。答えさせる気があるのでしょうか？）

現在母上にプレゼントしたレイピアは、杖剣に加工する為手元がありません。その所為で余計に、父上のサーベルに興味を引かれるのでしょうか。

母上が飛んできた方を見ると、母上を追いかけて来たのでしょう。ディーネとアナスタシアが《飛行》で、こちらへ向かって飛んできました。その表情には、困惑の色が見えました。母上は何の説明も無く、突然こちらに飛んできたのでしょう。

二人は父上が持つサーベルと、切り裂かれ地面に転がっている土人形を見て納得したようです。こうなると次のパターンは決まっています。

「私の分は何時出来るの？」

（……やっぱり。と言うか見事にハモったな）

「まだ作りません」

二人の顔に、明らかかな不満の色が浮かびました。

「良い武器は使用者を育てますが、身の丈に合わない武器は使用者の成長を阻害します。だから絶対ダメです。父上と母上が一人前と認めた時に、固有武器を作ってあげます。もちろん私も例外ではありません」

要するに三人そろって我慢しよう。と、言う訳です。

その時、父上の情けない声が響きました。

「シルフィア。それは私の……」

「ちょっとくらい良いじゃない」

見ると父上からサーベルを取り上げた母上が、残りの土人形を切り割いていました。

「父上……」

私は父上に近づき声をかけました。

「大丈夫だ。気が済めば返してくれるはずだ。……タブン」

この時父上から哀愁のオーラが漂って来ました。結局父上の許にサーベルが帰って来たのは、2日後の事でした。

折角鍛冶場を作ったのに、私や父上だけで殆ど使わないのは勿体無いと思い、人を雇う事にしました。父上と母上に最低でも、土メイジ・火メイジ・鍛冶職人を各一人で三人。最大で各二人で六人の人間を雇ってもらう様、お願いしました。

本格的に鍛剣を作るとなると、コークスの値段も馬鹿にならないので、新たに炭焼き小屋を作る事にしました。ついでに炭や鉄などの保管庫も併設します。父上が途中からのりのりになって、母上にお説教を貰っていました。が私は知りません。

土メイジと火メイジは、各一人領内の守備隊に所属している者を連れて来る事になりました。二人とも息子がいて、父親と同じ属性のメイジだそうです。息子の方も見習いとして、ドリュアス家で雇うことになりました。嬉しい事に、私と年が変わらないそうです。残念ながら着任するのは、引き継ぎの関係でハガルの月からになるそうですが、今から会つのが楽しみです。

鍛冶職人は、マギ商会に探してもらっています。こちらは残念ながら、何時になるか分からないそうです。

物凄く多忙を極めました。が、実りある年末にする事が出来ました。

年も明け始祖の降臨祭も終わり、いよいよ報復の為の情報収集開始です。しかし分かったのは、悲しい現実でした。既にリツシユモンは足元を固め、付け入る隙が無かったです。頼みの綱のヴァリエール公爵も、後継者争いの煽りで動きが殆ど取れないです。モンモランシ伯にも協力を取り付けましたが、領地の干拓に忙しく動きが鈍いです。(この干拓失敗するハズだよな)

この状況で味方が減るのは勘弁してほしいので、モンモランシ伯に接触しNGワード『歩くな。床が濡れる』を言わないように、それと無く忠告するつもりでした。しかし、残念ながら間に合いません。

んでした。お陰さまで干拓は見事に失敗。王家に不評を買い、精霊との交渉役も降ろされてしまいました。当然ラグドリアン湖周辺の領地も、没収されてしまいました。干拓に投資していた莫大な資金も、露と消えてしまいました。お陰さまで、モンモランシ伯爵は借金王です。（貴族なのに王様とは是如何に）

こうなってしまうと、こちらも下手に手を出せない状況になってしまいました。ドリユア家が独力で戦い、勝てる相手ではないからです。

ドリユア家にとって唯一幸運だったのは、リツシュモンが保身に走った事です。黙っていても大量の賄賂が転がり込んでくる立場なので、態々危険を冒してドリユア家を排除する必要が無かったです。

この状況を鑑みて、ドリユア家家族会議が開かれました。結果は向こうがボロを出すか、情勢が動くまで力を蓄える事になりました。ハッキリ言って悔しいです。

力を蓄えると言っても、現在のドリユアス領では何とか赤字を出さないだけで精いっぱい状況です。多少時間が経てば、旧クールズ領の収入が安定し多少の黒字が見込めます。しかしこれも、焼け石に水でしょう。これを脱出するには、魔の森をどうにかする必要があります。

そこで私は父上と相談して、魔の森調査に乗り出す事にしましたのです。

父上は当然の様に、危険だと反対しました。父上だけでなく、母

上やディーネにアナスタシアまで反対して来ました。

結局私は、魔の森に立ち入る許可は下りませんでした。ですが、私も食らい下がった甲斐がありました。資料の管理と調査に口出しする権利を、与えられたのです。

それから私は魔の森に関する膨大な資料と、睨めっこをする生活が始まりました。

ハガルの月に入り、鍛冶場の人材が入って来ました。どうやら家族で、こちらに住み着く様です。家についてですが、流民の対処をする時に建てた家を流用しました。職場まで徒歩10分です。

さて、いよいよ初顔見せです。鍛冶場の従業員になるので、実質私の直属の部下のなります。

「始めまして。私がギルバート・ド・ドリユアスです。私が形式上の上司になります。よろしくお願いします」

皆さん唾然としていました。流石にこんな子供が上司では、不安になるなど言う方が無理でしょう。だからと言って、はいさようならと言う訳には行きません。取りあえず自己紹介をしてもらいました。

まず最初に、金髪碧眼の男が名乗りました。（無骨な感じがするな）

「俺はガストン。土のラインだ。こっちが妻のセレナだ」

金髪緑目の女性を指しました。女性は「セレナです」と言って、頭を軽く下げました。続いてガストンは、隣に居た金髪碧眼の男の子の頭にボンと手を載せました。

「それでこいつが、ジャック。今年で9歳になる。メイジとしては、土のドットだ」

ジャックは、軽く頭を下げながら「よろしく」と言いました。

続いて、赤髪で褐色の肌の男が喋り始めました。（細く見えて以外にがっしりした体格だな）

「僕はポール。火のラインなんだ。妻のレジーヌと長男のピーターに長女のポーラだよ」

いつきに紹介され、緑髪碧眼の女性・緑髪茶目の男の子・赤髪茶目の女の子の順番で軽く頭を下げました。肌が褐色なのは、ポールさんだけです。

「ピーターは8歳で火のドット。で、ポーラは5歳でまだ魔法を教えていないんだよ」

ポールさんは、にこやかに微笑んでいました。早速職場を案内したいのですが、大荷物を持っているのでそれも行きません。

「では、いったん住居によって荷物を置きましょう。」

住居に案内すると、全員感嘆の声を上げました。流民の対処の為に建てた家は、元々一軒で10余人収容する大きさが有ります。そ

れを全面改装したのですから、それも仕方が無いでしょう。メイジには形式的な意味しかありませんが、ガストンさんとポールさんに家の鍵を渡しました。

「では、荷物を置いて来てください。次は職場に案内します」

少し待つと、家の鍵を閉めて全員が出て来ました。どうやら新しい職場に、全員興味があるようです。私は全員を連れて、鍛冶場に案内します。

「まずはガストンさんの職場です。ガストンさんには砂鉄とこの黒い粉を材料にして、《錬金》で鋼を作ってもらいます」

ガストンさんから「不可能だ!!」と言う目で、見られました。私は全員の目の前で、砂鉄100に対して黒い粉(炭素の粉)を1混ぜて《錬金》で鋼を作って見せました。鋼のインゴットをガストンさんに渡すと、《探知》デイクト・マジックを使っていました。その後何か凹んでいました。

「詳しい話は後日します。次はポールさんの職場です」

全員を炭焼き小屋に連れて行きます。目の前にある大きな釜に、全員が「何これ?」と言う目を目を向けています。

「こちらも詳しい話は、後日と言うことになります。簡単に言うとこの窯に木を詰め込んで燃やしてもらいます。そして中の火力を調整してもらい、こう言う物を作ってもらいます」

私は父上と一緒に作った、試作品の炭を一欠片出しました。全員の目が「何これ?」と、言っています。私は炭ばさみ(《錬金》で

の自作品）で炭を掴むと、《着火》で火を付けました。薄らと光りながら熱を放出する炭に、みんな驚いているようです。

火事になっては拙いので、《凝縮》で出来た水球に火の点いた炭を突っ込みます。ジュツと音が鳴り完全に火が消えたのを確認すると、炭ごと水球を外に放り投げました。

最後に保管庫を見せ、職場の案内は終了です。

「ガストンさんが作った鋼を、ポールさんが作った炭を使い剣を鍛造・量産するのが最終目標です。最前線で戦う守備隊員の命を守る武器です。気合入れてお願いします」

私がそう言っただけで頭を下げると、ガストンさんとポールさんの目の色が変わりました。

「若旦那。悪いが今すぐ教えてくれねえか」と、ガストンさん。

「僕もお願いするよ」と、ポールさん。

奥さん達は少し困った顔を見ると、子供達を連れて出て行ってしまいました。こうなると、誰も止める人がいません。時間がかかる炭焼きから作業開始です。三人がかりで窯の中に木を敷き詰め、入口を《錬金》でふさぎ、ポールさんが火を入れます。《探知》で中の状態を確認しながら、通気口をふさぐタイミングを計ります。煙が半透明になった所で通気口を全てふさぐと、後は冷えるまでひたすら待つだけです。この間、約4時間です。外は既に夕日が見えています。

テンションがかなり高かった私達は、後少しだけと《錬金》によ

る鋼の作成に入りました。ガストンさんにイメージを伝え、実際に《錬金》してもらいます。

「砂鉄と黒い粉を、溶かして混ぜ合わせるイメージです。実際高温で溶かし、砂鉄と黒い粉を混ぜれば鋼になります」

数回目の《錬金》でやっと上手く行ったガストンさんは、凄く喜んでいました。

ここで父上が、家に戻ってこない私を探しに来ました。最初は私を連れ帰ろうとした父上ですが、ガストンさんとポールさんの熱意にほだされ、何時の間にか仲間入りしていました。（この時既に夜）

黒い粉（炭素の粉）の量で、硬度と粘りにどれほど差が出るか調べ始めました。この時はまだポールさんも、時々炭焼き小屋の様子を見に行く冷静さがありました。

やがて父上が口走りました。

「このまま我々で、この鍛冶場最初の鍛剣を作らないか？」

この言葉で、テンションが振り切ったのか？それとも既に振り切れていたのか？私も含めその言葉に大賛成。鍛冶場の炉に火が入り、男四人で鍛剣を打ち始めました。キツチリ折り返し工程も行い、焼き入れも行いました。男四人で、あーでも無いこーでも無いと刃を研ぎだしました。そして父上が《錬金》で、柄と鞘をでっち上げるとうまく完成しました。（鍛剣・ワンハンド・ロングソード・銘無）

刀身が少し歪んでいて鞘に入らなかったので、《錬金》で微修正

したのは私達の秘密です。

さあ早速試し切りです。意気揚々と皆で外に出ました。何故か外は明るかったです。そして空には夕日が……。【NO 朝日です】

ナチュラルハイになった私達は、そんなこと気にする事も無く土人形で試し切りを始めました。素人が打った割には、切れ味も悪く無く男四人で騒ぎ始めました。

その時突然館の窓が開きました。

「五月蠅い!!」

その声は母上の声でした。しまった!と思った時には既に遅く、男四人仲良く竜巻洗濯機の中へ……。

私はなんとか《飛行》で、墜落を免れました。(母上の特訓が役に立ったな……)

父上達はそのまま、地面へ真つ逆さまに落ちて行きます。まずいと思いましたが、母上もそこまで鬼では無かったようです。地面1メートル手前で落下が一瞬停止しました。(良かった。真横に吹き飛ばさなかった)

その時、私達が打ったロングソードが無い事に気付きました。探すまでも無く、すぐに見つかりました。私の目の前を刃を下にして通過して行ったのです。そして、ロングソードの落下先には……。

「父上!!」

父上は落下の衝撃で、硬直していました。(まずい!!1メートルとはいえ打ち所が悪かったか?)

私はこの時、思わず目を閉じてしまいました。ザクツと言う剣が突き刺さる音が、やけに大きく感じました。

目を開けるとそこには、左耳数サントの地面にロングソードが突き刺さり硬直する父上の姿が……。

私は父上の生還に、思わず涙してしまいました。

炭の出来は上々でした。鍛造を始めても炭は余る予定なので、そのまま売りに出すのも良いかもしれませぬ。《錬金》した鋼も余るので、《錬金》で剣にして出来が良ければ守備隊に支給ですね。

……鍛冶場の増設も考えるべきかな?それ以前に人員そろえないと……。

第二十八話 やっぱ鍛冶でしょう(後書き)

また書きたい事書いた。

ダメダメやな。

次回、魔の森の謎に迫る。・・・かも。

感想お待ちしております。

第二十九話 そうだ、王都へ行こう

こんにちは。ギルバートです。調子に乗り過ぎました。あの後何故か、私だけが怒られました。現場責任者って辛いです。

その後、鍛冶場が活動を開始しました。やはり鍛冶職人の不在は大きく、鍛剣の製造（実戦で使えるレベル）は不可能でした。しかし、驚いた事に大きな黒字が出たのです。

先ずは支出ですが、炭用の安価な木材と二束三文で買叩ける砂鉄のみだったので、元々大きな赤字がでるリスクは無かったのです。（炭素の粉は私の《錬金》による自作なので只）

剣に関しては、《錬金》で作った物を順次守備隊に支給しています。作り自体は鑄造品の安物と変わりませんが、使っている鋼が最上品と言っても良い出来なので、流通品から見ると上の中から上の品質を誇っています。守備隊の評判も非常に好評です。ガストンさん個人としては、目標達成と言っていいでしょう。まあ、作れば作るほど赤字なのですが……。（ドリュアス家からはお金が取れない）

大きな利益を出したのは、炭の方でした。父上と作った試作品は、薪より少し上の値段で買叩かれたらしいのですが、その後やたらと炭を要求してくる商人がいたので調査したそうです。すると貴族相手に、信じられないほど高い値段で売っていたのです。

貴族達は暖かな光と持続力の有る熱に加え、煙が出ない事が受けましたよ。料理もおいしく焼けますし。ある意味で炭は、薪とコークスの良い所を併せ持った燃料と言えなくも無いですから。

ためしに王家に献上した所、定期的に納める様にお達しが有りました。お陰さまで物凄い高い値段で、飛ぶように売れるようになりました。マジ商会は炭を独占する形になったので、ドリユアス家の後ろ盾もあり一気に一流商会の仲間入りを果たしました。

ヴァリエール公爵とモンモランシ伯爵にも送りました。公爵からは、お礼の手紙と購入依頼が来ました。伯爵からは、お礼の手紙だけでした。（借金きついのかな？）

こうなると真似される前に、どれだけ儲けられるかが勝負になります。大型の炭焼き釜を三つ作り、大量の木材を購入。人材は一時的に、ドリユアス家の使用人から出しました。大量の炭を作り、マジ商会から市場に全部流しました。（ついなので、七輪や木炭コンロも《錬金》で作り同時に売りました）

やがて炭人気も落ち着き、真似する者も増え価格がガクンと落ちると、無茶な儲けは出せなくなりました。（最終的には薪の十倍程度の価格に落ち着きました）それでもマジ商会の炭は、効率良い生産力と王家御用達のブランド力を武器に、殆どのシェアを獲得する事が出来ました。

ブランドとしての力を確固たる物にする為、ポールさんには白炭（備長炭）の開発を依頼しました。作り方の概要だけ説明しましたが、ポールさんは絶対安定生産すると燃えていました。

お陰さまでドリユアス家はかなり潤いました。今後も定期的な収入を、見込む事が出来ます。ありがたい話です。白炭（備長炭）が安定生産出来れば、更に儲かります。（マジ知識に感謝です）

収入も増え確実に黒字が出せる様になったと言っても、高等法院と渡り合うには全然足りません。炭を作るのに大量の木材も必要になり、ますます魔の森を如何にかしたくなりました。

しかしドリユア家にある新しい資料には、解決に結びつく様な情報は見つけれませんでした。現場に入れない以上、更なる資料が欲しいです。特に私が欲したのは、魔の森の最古の地図です。これを見れば、発生源が有る程度絞れると考えたからです。（発生源がホイホイ移動できるとは思えない）そして発生源が分かれば、原因が特定できる可能性が高いと思っただからです。早速父上を探して古い資料が収められた場所を聞く事にしました。

父上は執務室に居ました。早速突入して陳情します。

「父上。お願いが有ります。魔の森の古い資料を観覧したいのです」

私の突然の願いに、父上は訳が分からないと言う顔をしました。私はかまわず続けます。

「知りたいのは二点です。第一に魔の森最古の地図です」

この一言で父上も、私の言いたい事を理解したようです。父上は大きく頷きました。

「第二に魔の森拡大前後に、ハルケギニアで何かしらの事件が無かったか知りたいです」

父上は、ここで「何故？」と言う顔になりました。

「例えば、何らかのマジックアイテムが盗まれた。精霊を怒らせた。珍しい幻獣の目撃報告。等です」

私の言葉に合点が行ったのか、父上は大きく頷くと口を開きました。

「有るとすれば、王軍資料庫か王宮資料庫だな……。だが望みは薄いかもしれん。千年以上も前の資料になる筈だからな」

「いえ、魔の森は現在進行形の案件です。資料を処分する可能性は低いのではないのでしょうか？」

父上は頷くと、私を連れて王都へ行く事を約束してくれました。

王都に出発する前日に、マジ商会から鍛冶職人発見の連絡と、職人の資料が届きました。私は、小躍りしたくなるほど嬉しかったです。実はハルケギニアで鍛冶職人は、非常に希少な存在だったので。ハルケギニアの剣製は殆どが鑄造で、鍛造は一部の超高級品以外に無かったです。

ここで、ふと疑問が浮かびました。普通に考えて、腕の良い鍛冶職人は金の卵です。領主や組合が、簡単に手放すはずがありません。（訳有りか？）そう思って資料をめくると、それはすぐに分かりました。

鍛冶職人サムソンは、娘のアーニと弟子であり甥のパスカルと貴族から逃げていたのです。理由は娘のアーニでした。まだ13歳の

アニーを、貴族が差し出せと脅して来たのです。それが如何いう意味か、分からないサムソンでは有りませんでした。妻を早くに亡くしたサムソンには、とても承服できない事でした。パスカルは早くに両親を亡くし、サムソンを父の様にアニーを妹の様に思っ、大切にしていたそうです。当然の様に、パスカルは逃げる事を強く主張。サムソンが同意し、アニーが押し切られる形で夜逃げを敢行。しかし逃亡中に手配がかかり、追いつめられた所でマジ商会の人間が助けたそうです。

資料の最後には「ドリユア家が拒否した場合、この家族は逃がします」と、書かれていました。しかし資料の日程では、既にこちらに向かつて護送中の様です。（絶対に断らないって確信してるな・・・。そうだけど）

私は父上と母上に資料を見せ、一応の了承を得ると、速く連れて来るように指示しました。

鍛冶職人を出迎えられないのは残念ですが、いよいよ王都に向けて出発です。私は初めての王都です。原作知識では、狭くてあまり良い所では無いと言う印象が有ります。

王都と言えば、『魅惑の妖精』亭ですね。タルブ村関係者の店でもありますし、原作キャラのジェシカも見て見たいです。後怖いもの見たさで、スカロン店長も……。王都の情報を集める為にも木炭コンロと炭でもプレゼントするのも良いかもしれせん。（何か利用するみたいで気がひけますね）

取りあえず父上に、王都の印象を聞いてみました。

「父上。王都は何の所なのですか？」

「そんなに良い所では無い。ごみごみしているし、表通りにはいいが浮浪者も多い。ハッキリ言つて、ドリユアス領の方が何倍も豊かだ」

父上は誇らさと憂いが混在した、微妙な表情をしていました。

（今がフェオの月末だから……調べる物を調べて、来月中か再来月頭には帰還したいですね）
来月の月 ワルの月 二ユ

私はそんな事を考えながら、父上のグリフォンに跨り父上の背中にしがみつきました。帰りに資料を詰め込む大型ボックスには、結局木炭コンロと炭がぎゅうぎゅうに詰まっていました。

朝に出発して、到着したのは夕刻でかなり暗くなっていました。

（グリフォンに乗り一日か、馬だと二日と行った所でしょうか？）
そんな事を考えていると、父上の足が突然止まりました。

「ギルバート。今夜からどこに泊まるう？良く考えたら、公爵の別邸は現状いろいろ不味い。金もあまり持ってきていないし……まあ今夜だけ宿を取つて、後は資料室に泊まりこめば良いか」

（父上……無計画すぎです）

私は思わず心の中で、突っ込みを入れてしまいました。しかしこれならこれで、私に都合が良いです。私は住所を書きとめたメモ書きを、父上に渡しました。

「魅惑の妖精亭と言う酒場です。宿屋もやっていますので、利用できるでしょう。タルブ村の関係者がやっている所なので、信用もできると思えます」

私の言に父上が頷きました。

「では、そこにしよう」

父上は場所が分かるのか、サクサク歩いて行きます。私はレビティションで浮かせた荷物を、引つ張りながらついて行きました。ほどなくして魅惑の妖精亭に到着しました。

(あれ？中から人に気配がしないな……。混雑している時間帯だと思っただけ)

私は不審に思い、足を止めてしまいました。しかし父上は気にした風でも無く、魅惑の妖精亭の入口をくぐるうとして……。何かウターンして戻って来ました。

「父上？……。速く宿を取りましょう」

「イヤダ。もう領に帰る。領に帰ってシルフィア抱くー！フッフッフ……。シルフィア今夜は寝かせないぞ」

(あれ？父上が壊れた？うわあ、何か目が虚ろです。いったい何が……)

その時父上の口から、何か言葉が漏れ始めました。聞きとろうとした所で、女の子の叫び声中断させられました。女の子の叫び声

は、どうやら魅惑の妖精亭の中からの様です。

「お父さん！もうその格好止めて！！また御客さん逃げちゃったじゃない」

「ダメよ。ジェシカ。仕事中は、ミ・マドモワゼル。それ以外は、パパでしよう」

「いいから脱ぐ！！数少ないお客さんも逃げちゃうじゃない！！」

「あつダメ！！そんなに引つ張つたら魅惑の妖精のビスチエが！！」

「良いから脱げー！！」

「そんな！娘に脱がされちゃうなんて！！」

・・・状況は良く分かりました。先程から父上の口から「私はノーマルだ。シルフィアを愛している。私はノーマルだ。シルフィアを・・・」と、繰り返される呟きの原因も良く分かりました。

「父上。大丈夫です。父上が見たのは、魅惑の妖精のビスチエです。魅了の魔法効果が有る、ビスチエだけです。安心してください。父上」

「それは本当か？」

私が大きく頷くと、父上はマジ泣きし始めました。父上の口は「良かった！良かった！」と、繰り返し唱え始めました。（相当嫌だったんだな）

暫くして父上が落ち着いた頃、中から「これなら良し!! さあ、稼ぐわよ!!」と聞こえました。どうやら中はもう安全の様です。

「父上。中の精神汚染空間は消滅したようです。もう中に入っても安全です」

私の言葉に頷きはするものの、父上は全く動こうとしませんでした。埒が明かないので、無理やり引っ張って、魅惑の妖精亭に入ります。

「いらつしゃいませ」

黒髪の6歳位の女の子が、明らかな愛想笑いを浮かべ頭を下げていました。その光景は、私の目にとてもシニールに映りました。

（お客が来なくなった原因は、スカロン店長だけでなく君にもあると思うよ。ジェシカ）

私が一泊すると告げると、ジェシカは嬉しそうに料金を説明し始めました。（うん。やっぱりシニールだ）

「父上」

結局財布の紐は父上が握っているのです、決めてもらおうと視線を向けます。

「うむ。取りあえず一番良い部屋に一晚だな」

ジェシカが嬉しそうに頷くと「ミ・マドモワゼル!! 一番の部屋に二人入ります!!」と、元気に叫びました。意気揚揚と私達を、

部屋へ案内してくれました。部屋はそこそこ広く、調度品も決して悪い物ではありませんでした。値段に比べて丁度良いか、むしろ少し安い位でしょうか？

父上は案内してくれたジェシカに、銀貨を一枚渡しました。（これだけでチップスウとは、太っ腹ですね）

ジェシカは笑顔でお礼を言うと、部屋から出て行きました。私達は荷物を置くと、夕食を取る為下に降りました。

「あゝら、お客様如何なさいました〜」

話しかけて来たのは、普通の格好？をした店長のスカロンでした。父上はその姿を見て、一瞬だけ身体が強張りましたが、すぐに平静を取り戻しました。その時、心の底からほっとしたような、表情をしていました。

「夕食を取りたくてね」

平静になった父上は、何事も無かったように答えました。

「でしたら、こちらがメニューです」

出されたメニューを確認すると、料理名が三つほど表記されていました。

「少ないな」

「少ないですね」

スカロン店長はその言葉に、申し訳なさそうな表情をしました。私と父上は、取りあえず全て頼んでみました。出て来た料理は、見た目よしボリユーム良しで値段の割に高クオリティでした。

「うん。美味そうだな」

「はい。美味しそうです」

私と父上は、喜んで料理を口に運びました。期待通りの味が口の中に広がります。私達は料理を口に運ぶ事に、夢中になっていました。そしてすぐに料理は無くなってしまいます。追加注文をしようと、メニューに再び目を向けたました。

「少なすぎです」

「少なすぎるな」

通常なら先の三品で、お腹いっぱいになっているはずですが、ドリュアス家の人間は全員健啖家だったりします。（やっぱり精神力が高いメイジは、燃費が悪いのでしょうか？タバサやルイズの例もあるし）仕方が無いので、同じメニューをもう一度頼んで食事を終了します。スカロン店長は、私達の食べっぷりに驚いていました。

食後に父上は食後酒を、私は果汁を飲んでいました。お酒も果汁も、クオリティは高いです。だからでしょう、父上の口からこんな声が漏れました。

「これで何故、私たち以外の客がいなのだ？」

父上の言葉に、スカロン店長が凹みました。それを見た父上はエ

キユー金貨数枚を取り出すと、適当に酒を持ってくるように言いました。ボトル数本とグラスを持ってきたスカロン店長に、父上は席に着くように言いました。その言葉にスカロン店長は、大人しく従いました。

「良かったら話してみないか？話すだけで楽になるかもしれんし」

スカロン店長は小さく頷くと、ぽつぽつと喋り始めました。

二年前に妻が逝った事から始まり、それまで妻と分担してお店を経営していた事を話してくれました。スカロンさんは経理・酒類の仕入れ・組合を担当し、奥さんが人事・食材の仕入れ・厨房を担当していたそうです。しかし奥さんが急死し、厨房の事を分かる物が居なくなっていました。レシピ等も残っていなかった為、店の味が一気に落ちてしまいました。コックを雇っても、奥さんと比べると明らかに腕が劣っていました。この状況に料理目的のお客が、パタリと来なくなりました。これにより魅惑の妖精亭はもう駄目だという噂がたち、料理以外の客もどんどん減って行ったそうです。この状況に従業員も、次々に辞めて行きました。(スカロンさんのオカマ化も一因だと思うが、これは言わぬが花か?)

この状況を何とかしようと考えた所、料理でダメになったのなら料理で取り返すという結論でした。生前の奥さんの料理を再現し、レシピを書き出して行き料理で客を取り返す作戦でした。しかし未だに再現できた料理は、メニューに載っていた三品だけだそうです。ただデミグラスソースが完成間近で、これが完成すればメニューは一気に増えるそうです。

原作ではこれから数年かけて、失った信用を少しずつ回復し、繁盛店に再び咲くでしょう。そしてそれが自信と経験になり、原作

のスカロンさんやジェシカにつながるのですね。私は他人事のように、そう考えていました。そして今私の様な人間が、取引等持ち込むべきではないと思いました。しかし、話はそんな私の思いを無視して進んで行きます。そして……。

「ギルバート。助けになつてやれないか？」

父上が突然、私に話を振りました。正直私は、どうするか悩んでしまいました。

「そ　そうですね……」

正直に言えば、簡単な案があります。炭と木炭コンロを、提供してしまえば良いのです。そして店の売りとして、炭火焼を前面に押し出せば客が簡単に集まるはず。場合によっては王家に卸すついでに、この店に炭を卸しても良いでしょう。後はこの店のクオリティなら、客がいなくなる事は無いです。しかしそんな案を、手軽に与えてしまつて良いのでしょうか？と言う想いが、私の中に出て来ました。

「考えてみます」

結局私はお茶を濁す事で、その場を逃げる事にしました。それから暫くして、父上と一緒に部屋へ戻りました。

思い返せば私は、何人の人間の人生を変えたのでしょうか？私と言う存在は、この世界に影響を与える一因子として存在しています。しかし私が与える影響は、良い物だけとは限らない事に今更気付きました。

(人間って見たくないものは、見ないでいようとするか……。真理ですね。当然私も例外ではない、と言う事ですか……)

私はこの晩、なかなか寝付く事が出来ませんでした。この時私の頭から、カトレアの顔がなかなか離れてくれませんでした。

一晩悩んだ結果、私が出した答えは開き直るでした。私の存在を考えれば、本当に今更です。与える影響が、良い方に向くよう最低限がける。それが私と言う存在に許された、最低限のマナーと考える事にしました。

今回の魅惑の妖精亭では、自力で這い上がっている二人の安易な助けにならず、試験の形を取ろうと思います。そこで父上に相談し、炭と木炭コンロの譲渡は条件付きとしました。条件は私達がドリユアス領に帰るまでに、私達を満足させる料理を作る事としました。

スカロンさんとジェシカには、炭と木炭コンロの話と私達の正体について話す事にしました。早速二人と話す為に、一階に降ります。

一階で厨房をのぞくと、スカロンさんとジェシカが仕込みをされていました。私は二人に声をかけ、テーブルについてももらいます。

「先ずは名乗りましょう。……父上」

私が促すと、父上が頷き名乗りました。

「私の名は、アズロック・ユース・ド・ドリユアス子爵だ。王都の人間には、《岩雨》のアズロックの方が通りが良いかな？」

「ドリュアスって、タルブ領主の……。それに《岩雨》って……」

スカロンさんの表情が、驚愕に染まりました。一方ジェシカは、キョトンとしていました。

「そして私が息子の、ギルバート・A・ド・ドリュアスです」

私が続けて名乗りましたが、反応は殆どなしでした。（ちょっと悲しい）しかしここで、めげる訳には行きません。

「実はドリュアス家では、マジ商会と言う商会を運営しています。ドリュアス家はマジ商会を通じて、王家に炭を卸しています。本来ならば王都に支店を持つのが筋なのですが、ドリュアス家と高等法院の仲が悪く支店を持つとなると、法外な賄賂を要求される可能性が高いのです。よってマジ商会は、王都に支店は出しません」

私はここでいったん区切ります。しかし私が次の言葉を発する前に、スカロンさんが口を開きました。

「王都での拠点となる宿が欲しいのね？」

私は大きく頷きます。そして、更に言葉を続けました。

「加えて王都の平民層に、炭を認知させたいと思っています。炭を使って物を焼いた場合、炎が出ない事・余計な水分だ出ない事・食材に火が通りやすい事。この三点の理由により、薪よりも簡単においしく焼き上げる事が出来ます」

スカロンさんが驚いた顔をしています。

「炭焼きは簡単であるが故に奥が深く、東方では煮炊き三年、焼き一生という言葉も有る位です」

私の言葉に、スカロンさんが笑みを浮かべます。

「この炭焼きを、前面に押し出した料理を出してくれる店を探していたのです。当然下手な店に任せて失敗し、炭のイメージダウンにつながる事は避けたいです」

「炭の宣伝塔は、この魅惑の妖精亭に任せて欲しいわ」

スカロンさんが、間髪いれずに答えました。私はその言葉に、首を横に振りました。ジェシカが「なんで!!」と、声を上げました。

「メニュー三点しかない、”今の”魅惑の妖精亭ではお任せできません」

私の言葉に、ジェシカが黙ってしまいます。しかしスカロンさんは、自信がうかがえる表情をしました。

「つまり、昨日のメニューと同等のクオリティの料理を作れば良いのね？何品作ればよいの？」

「メニューの数は関係ありません」

私の答えに、スカロンさんの顔が驚きに歪みました。

「ど どういうことかしら？」

「味・ボリューム・見た目・値段。昨日の料理は、それら全て合格点です。メニューの数も、昨日の話ではすぐに増えるでしょう。問題は炭を上手く扱えるかと、炭を生かすメニューが出来るかです。ウルの月来月中に私達を満足させる、炭火焼きを売りにしたメニューを一品作ってください」

スカロンさんは私の言葉に、力強く頷きました。私は持ってきた炭と木炭コンロを、スカロンさんに渡しました。

いよいよ資料探しです。私は気合を入れて、父上の後について行きます。しかし父上は王宮に向かわず、貴族の別邸が有る一画に足を向けました。

「父上？」

「ヴァリエール公爵に、挨拶をしておこうと思ってな」

確かに両家の関係を考えれば、ここで挨拶無しと言うのは良く無いのでしよう。私は大人しく父上の後に行きました。

ヴァリエール公爵の別邸は、本邸と比べれば小さいですが周りの館と比べると群を抜いて大きいです。使用人に部屋に案内され、暫く経つとヴァリエール公爵が入室しました。

父上に習い挨拶をすると、父上と公爵は雑談を始めました。私は長くなるのは勘弁と、内心考えていました。すると父上が、今までより少し大きな声で言いました。

「公爵申し訳ありません。年金の受け取りを忘れておりました。すぐに行つて来ますので、その間ギルバートをお願いできますか？」

（父上！！公爵に向かつて何と言う失礼を！！）

私が内心で戦々恐々としてみると、公爵は何故か笑顔になりました。

「それは不味いな、ギルバートは私が責任を持つてあずかるう」

（?・・・如何いう事ですか？）

私が混乱している間に父上は逃げ出し、公爵は私の肩をガシツと掴みました。

「さて・・・、ギルバート。君にはいろいろと聞きたい事が有るのだ。・・・主に、カトレアの事とか。・・・そう、兎に角カトレアの事だ！！」

私はこうなつてから、ようやく状況が理解できました。

・・・父上に売られた。

「カトレアは病弱で無垢な娘だったのだ。なのに、お前と仲良くなつてからはまるで別人だ！！言え！！カトレアに何を吹き込んだ！！・・・とにかく・・・だから・・・カトレアは・・・」

（カトレアは何をやらかしたんだ?・・・泣きたい）

「聞いているのか!？」

「はい!！」

私はこの後、2時間ほど問い詰められました。それで気が済まなかったのか、そのまま練兵場へ引きずられて行きました。……射的の的の気持ちがよく分かりました。部下の人が公爵を迎えに来なかつたら、生きて無かつたかもしれない。

(父上。公爵。……オボエテロヨ)

今度こそ資料探しです。もう何処にも寄りません。

私は父上に思いつ切り、敵を見る様な視線を向けていました。父上は私の視線が突き刺さる事に、居心地の悪さを感じているようです。

「ギルバート。その……、すまなかつた」

私は返事をしません。流石に居た堪れなくなったのか、父上は資料探しの事に話題を切り替えます。それでも私は必要最低限の事しか、返答をしませんでした。

「ギルバート。私は王軍資料庫を担当するから、お前は王宮資料庫を担当してくれ。私の方は早く終わるから、残りの王宮資料庫は合流して二人でやろうな。……王軍資料庫は、公爵にばったりと言つ可能性が高いし」

父上の気遣いを無碍にする事も無いでしょう。私はその案に乗る事にしました。

私は父上に、王宮資料庫まで案内してもらいました。資料庫は王宮図書館と併設されていて、管理を任されている司書が居ました。分からない事は司書のジジさんに聞くとして、最低限食堂やトイレの位置を聞き作業開始です。そして、資料の量を見て思ったのは・・・。

「終わらない」

・・・でした。一つ一つ見て見ると年代もバラバラで、欲しい資料を探すだけで何カ月かかるか分かった物ではありません。

そこで私は『秘義 探し物はかたずけながら』を発動する事になりました。と言っても、人手が圧倒的に足りません。周りを見て見ると、私に毛布を持ってきてくれてたジジさんが居ました。

ジジさんは私と目が合うと「私は関係ありません」と言わんばかりに、逃げようと思いました。しかし、私が逃がすと思ったら大間違いです。素早く移動し肩をガシツと掴み、振り向いてもらいます。とっても良い笑顔で、言っただけでした。

「資料の整理手伝ってくださいますよね？」

8歳の子供に言われているのに、ジジさんは涙目になっていました。実際にジジさんは、父上に私の手伝いをするように言われています。魔の森の調査を父上が王命で動いている以上、魔の森関連で父上に逆らうのは王命に逆らうのと一緒です。ですがそれ以前に、この資料の整理はジジさんの仕事です。

（先代以前から溜めに溜めて来た負の遺産を、自分が片付けるの嫌だったんだろな……。ジジさんも可哀想に……。でも逃がさん）

ジジさんは物凄く凹みながらも、作業計画を立てて行きます。ジジさんの口から「明後日の虚無の曜日には、彼とデート。これを取り切れば彼とデート」と、呟いていました。……。何かごめん。でも言わないといけない。

「虚無の曜日も手伝ってもらいます。と言うか暫く休み無しです」

私は笑顔で、死刑宣告をやすみなしせんげんしました。ジジさんは、たっぷり十数秒ほど石化していました。そして復活すると、私に詰め寄って来ます。

「あんまりです！横暴です！酷過ぎます！と言うか、お願いだから彼とのデートだけは許して〜」

ここまで言われては、私も鬼ではありません。

「では、代わりミカワリの人材を用意して頂ければ良いですよ。それと応援イクエニエを用意しないと、睡眠不足は肌荒れ荒れで彼に嫌われますよ」

私はとっても良い笑顔で、ジジさんに言ってあげました。……。前言撤回します。鬼でした。まあ、ジジさんやジジさんの前任の方たちがサボっていなければ、私がここまで苦勞する事も無かったのも事実です。（少し罪悪感も有るけど）

ジジさんは、この後泣いていました。

しかしその後ジジさんは、見事に代わりミカワリの人材と応援イケニエを用意しました。女の執念とは凄まじいの一言です。

資料の整理だけで、3週間もの時間をかけてしまいました。父上との合流は、まだ後数日かかりそうです。

そして私の目の前に、魔の森に関する一番古い世代の資料が有ります。資料の年号が正しければ、1200年前の資料と言うことになります。そして気になるのは、資料にあるドリアード侯爵の名前です。資料の中には、ドリアード侯爵が魔の森に深い関係が有る様なのです。しかし肝心の情報が書かれていると思われる所は、全て破られ紛失していました。

私は破られた数々の資料に、きな臭さを感じ大きく溜息を吐いたのです。

ドリアードとドリユアス……同じ木の精霊の名は偶然なのでしょうか？

第二十九話 そうだ、王都へ行こう（後書き）

もうすぐ魔の森の謎のが解けます。

でも解決できるかは、話が別だったりします。

これからどうなるでしょうか？

そして、文字数増やし過ぎでしょうか？

感想お待ちしております。

第三十話 王都であれこれ

こんにちは。ギルバートです。魔の森に関してですが、資料を調べたら途端にきな臭くなりました。いったいドリアード侯爵とは、何者なのでしょう？

私は整理した資料を、後回しにする事にしました。魔の森の調査に、ドリアード侯爵が何者か知るのが重要と考えたからです。そこで私は父上と合流するまでの数日を使って、過去の貴族名鑑を調べる事にしました。

貴族名鑑は魔の森の資料と違いちゃんと整理してあった為、すぐにドリアード侯爵の資料を見つけ事が出しました。ドリアード侯爵家はトリステイン王国建国時に、祖王の補佐を務めた由緒正しい家である事が分かりました。領地はドリユアス領の南西に有ったようです。（魔の森のど真ん中ですね）

そしてドリアード家には、二つの分家が存在しました。一つはドリアード家。そしてもう一つが・・・ドリユアス家。そう、ドリユアス領は元々この分家が治めていた土地だったのです。そしてドリアード領とドリユアス領は、ドリアード家がおよそ1500年前に森の開拓により切り開いた新しい領地だったようです。

しかしこの三家は魔の森発生に前後して、貴族名鑑から名前が消えていました。私は当然のごとく、お家断絶の理由を調べました。しかし肝心な所に行くと、資料が破られてたり紛失していて、調べる事が出来ませんでした。

（調べれば調べるほど、きな臭さが増しますね）

実はここまで調べるい間に、事件がありました。

この日はジジさんが不在で、図書館と資料庫には私一人でした。時刻は昼過ぎでしたが切が悪く、昼食を取らずに作業していました。そんな時女の子が、資料庫に忍び込んで来たのです。ダークブラウンの髪に、白いドレスを着た女の子でした。歳は私と同じか、少し下位の様です。

女の子は首を左右に動かし、資料庫に誰も居ない事を確認しているようです。私はその時、高い位置に有る資料を探していたので、《飛行》フライを使っていました。私は見つけた資料を持って、自分の机の側（位置的には、女の子の真後ろ）に着地します。この時女の子は、誰も居ないと思ったのか鼻歌を歌い始めていました。

「ご機嫌ですね」

私が話しかけると、女の子の肩が跳ねました。そして振り向きざまに、女の子の右拳が飛んで来たのです。私は（驚かせてしまったかな？）と、思いながら余裕で避けます。女の子はそこで止まる事なく、左拳を私に向かって放ちました。机や椅子等の障害物で避ける事が出来ないと判断した私は、杖を持った右手で女の子の拳を左にはじきます。その勢いで半回転した女の子は、バランスを崩し背中から私に向かって倒れて来ました。怪我をさせる訳には行かないので、私は杖を捨て女の子を抱き止める事にしました。

女の子を抱き止めることには成功しましたが、後ろから抱き締められる形になりました。暴れられるのも嫌だったので、とりあえず女の

子を拘束する事にしました。(資料崩れたら後が大変だし) 女の子は焦って逃げようとしたが、力で私に勝てるはずも無く大人しくなりました。

(・・・やっと大人しくなったか)

しかし女の子は、私が油断したすきについて脱出する心算だったようです。突然万歳をしたと思ったら、しゃがんで私の拘束から抜け出そうとしました。所が私の拘束は、女の子が思っているほど甘くはありません。女の子の体は、少しずれただけで脱出は出来ませんでした。

しかし、その結果私の右手が掴んでいたのは、女の子の脇腹では無く左胸でした。

(あつ、不可抗力だからしょうがない・・・よね?)

「!~~~~!!?」

私は動揺して、右手の力を抜いてしまいました。その時女の子は、声にならない悲鳴を上げると、私の手を振りほどき距離を取る為に跳びました。しかし跳んだ先には、私が先ほど捨てた杖が・・・。

女の子は杖を踏んで見事に転びます。私が助ける間もなく、女の子は頭から本棚の角に突っ込みました。

ゴンッ!!

すごい派手な音がしました。恐る恐る確認すると、女の子は気絶しているだけの様です。私は安堵のため息を漏らすと、取りあえ

ず女の子に《癒し》ヒーリングをかけ、私が寢床にしているソファに寝かせると、毛布をかけました。

(しかしこの女の子、誰かに似ている様な気がする。・・・あっ！アンリエッタ姫に似てるんだ！！不味い。本当に姫だったらどうしよう?)

私は暫く混乱していましたが、それで状況が好転する訳ではありません。取りあえず連絡をと思い外に出ましたが、おかしな事に衛兵が一人も居ないので。私は嫌な予感がして、資料庫に戻りました。

未だ気絶している女の子を起こすと、凄く警戒されました。しかし私が状況を説明すると、途端にニコニコし始めました。

「外に逃げた振りして正解だったわ」

あまりの言葉に、私は絶句してしまいました。そして衛兵が居なかったのは、この女の子(アンリエッタ姫?)を探して外に行っているからと言うことになります。私の中で女の子「アンリエッタ姫」の公式が、正解であると言う思いが強くなりました。

「取りあえず、大人の人連れて来るよ」

「ダメよ」

私はかまわず人を呼びに行こうとしました。しかし次の一言で、強制的に引きとめられました。

「胸触られた。転ばされて頭打った」

私はその言葉に固まります。ここまでは完全に嘘ではない為、言われても仕方が無い事です。しかし続きは、泣きたくなるほど酷い物でした。

「叩かれた。ソファーに押し倒された。唇を奪われた。それから・・・」

「分かりました」

私はそう返事するしか有りませんでした。放っておくと何言われるか、分かった物ではありません。下手しなくとも、物理的に首が飛びます。

それから暫くは、女の子の話に付き合わされました。女の子が一方的に喋っていました。私はそれに大人しく付き合いました。

今は凄く高い壺を割って逃げている事。幼馴染にルイズと言う娘がいる事。そのルイズに最近兄の様な人が出来た事。（この時点で、アンリエッタ姫確定ですね）自分も兄の様な人が欲しいが、周りにそれらしい人がいない事。等を次々に話して来ました。そして何かに気付いた様に、私の顔を見ました。

「ルイズのお兄様は、黒髪のギルバートと言う人なだけで・・・。あなたも黒髪ね。名前なんて言うの？」

私はこの質問に、嘘を答える事にしました。アンリエッタ姫と言えば、ルイズの物を略奪する悪癖が有る困った人。と言う認識があったからです。それに加え兄代わりが居る居ないで、始祖の降臨祭の時にルイズとアンリエッタ姫が大喧嘩をしたと聞いています。（

ヴァリエール公爵情報)

「残念ながら、私の名前はジルベールです」

英語読みからフランス語読みにもじったがけですが、アンリエッタ姫には分からないはずです。ジルベールなら、トリスティン貴族に同名の人間が多数いるので、アンリエッタ姫では特定出来ないでしょう。

「ならばジルベールに命じます。これより私に兄として接しなさい」

「はっ」

アンリエッタは名乗っても居ないのに、こんな事言っただけで良いのでしょうか？……まあ、適当に合わせて有耶無耶にすれば問題ないでしょう。……と言いついで早速行動に出ます。

「お腹すいていませんか？」

私の質問に、アンリエッタは口をへの字にします。しかし体は正直なようです。ぐうーと言う音が、アンリエッタのお腹から聞こえました。途端にアンリエッタの顔が真っ赤に染まり、俯いてしまいました。

「すぐに食べる物を持って来るよ」

私はそう言って立ち上がると、アンリエッタの頭を撫でてから扉へ向かいました。

「大人しく待ってるんだよ」

私の言葉にアンリエッタは、顔を真っ赤にしたまま頷きました。

廊下に出て食堂に到着すると、外の状況は思ったより逼迫している事が分かりました。不味いと思いつながらも、老コックにバーガーを10個とピッチャーとコップを頼みました。

実はベーコンハシバミバーガーの作り方を教えて、何時でも作ってもらえるようお願いしたのですが、相手をしてくれたのが引退寸前の老コックだけでした。忙しいのは分かりますが悲しいです。

料理が出来るのを待っていると、突然私に話しかけて来る人がいました。

「ギルバート」

話しかけて来たのは父上でした。隣に苛立った様子のヴァリエール公爵がいます。しかし妙な事に、ヴァリエール公爵に取り巻きが居ないのです。恐らく、アンリエッタの搜索に駆り出されているのでしょう。

「父上。魔の森について、内密なお話が有るのですが……」

父上は頷くと、食堂脇に有る小部屋を指さしました。

「公爵も一緒にお聞きになっていたいただけると助かります」

「今は魔の森どころではない!!」

「お願いします」

「だから……」

「お願いします」

公爵は苛立ち見せながらも、父上に続いて小部屋へ入ってくれました。私も二人を追って小部屋へ入ります。扉を閉め、聞き耳防止用のマジックアイテム作動を確認すると、私は口を開きました。

「アンリエッタ姫は、王宮資料庫に居ます」

私の言葉に、父上と公爵が固まりました。二人が固まっている内に、アンリエッタが外に逃げる振りをして王宮内に潜伏している事と、脅されて報告出来なかった事を話しました。そしてジルベールと名乗った事と、食糧確保の為に外に出れた事を話しました。

「何故ジルベールなどと言う偽名を使ったのだ？」

公爵が当然の質問をして来ました。

「ルイズの話ではアンリエッタ姫は、ルイズの物を奪い取る悪癖が有るようなので……。話がややこしくなると思い、ジルベールと名乗りました」

公爵は心当たりが有るのか、黙ってしまいました。どうやら公爵には、私の言いたい事は伝わったようです。ルイズが私の事をお兄様と呼ぶ事は、公爵が大喧嘩の情報源なので当然知っているからです。

「これから如何するかは、公爵にお任せします。ジルベールなる架

空の少年に、架空の罰を与えようと云う手も有りますね。姫の将来の為に……。その場合はあくまでドッキリなので、あまりキツイ事はしないでください。トラウマになっても良くないですから」

公爵は一瞬キョトンとしましたが、すぐに私の意図を察したのでしよう。笑みを浮かべ頷きました。

「分かった。国王に相談してみよう」

「その事をお願いが有るのですが、よろしいでしょうか？」

「何だ？」

「私の名前は一切出さないで頂けますか？出来れば今後も」

公爵は不思議そうな顔をしました。

「何故だ？」

「目立つと妬みや僻みで碌な事が有りません。それにカトレア様の治療法を探すのに、時間が如何しても必要です。下手に国王に目をかけてもらうと、治療法を探す時間が無くなってしまいかもしれません」

カトレアの事をダシに使ったのは、かなり気が引けますが嘘と言う訳ではありません。（性魔術以外で解決したいだけ）公爵は一瞬だけ難しい顔をしましたが、一応納得したのか頷いてくれました。

小部屋を出てカウンターに行き、お金を払ってバーガーとピッチ

ヤーに交換すると、すぐに資料庫に戻ります。資料庫に戻ってから
のアンリエッタの第一声は、「遅くい」でした。

「ヴァリエール公爵に捕まってね」

私はそう言いながら、バーガーとピッチャーが乗ったトレイを机
の上に置きました。そしてバーガーを、皿ごとアンリエッタの前に
差し出します。アンリエッタは公爵の名前が出た事に、少し不安そ
うな顔を浮かべましたが、食欲優先だったようです。すぐに目の前
のバーガーを凝視しました。しかし、なかなか手を出そうとはしま
せん。私はピッチャーからコップに水を注ぎながら、アンリエッタ
の様子をうかがっていました。

「どーやって食べるの？」

反応がルイズと全く一緒でした。私はその事に笑いが込み上げて
来ましたが、なんとか押し殺す事に成功しました。

「特に作法はありません。サンドイッチと同じ様に、手で持ってそ
のまま食べます。その際、具が落ちないように注意してください」

私はルイズの時と同じ説明を口にしました。流石に食べ始めると、
ルイズとは反応が違いました。どこか上品にバーガーを食べるアン
リエッタを見て、ルイズが普段どれだけ食べさせてもらってないか、
不憫に思ったのは私だけの秘密です。

（やっぱりルイズの発育不良は、無理な小食化が原因なのでしょう
か？）

私はそんな事を考えながら、バーガーに齧り付きました。最終的

に、私が7個アンリエッタが3個バーガーを片づけました。

「初めて食べたけど、美味しかったわ」

アンリエッタが、笑顔で言ってくれました。私は嬉しくなり笑顔で頷きました。良い雰囲気になったかなと思いましたがしかし、次に待っていたのは延々と続くアンリエッタの愚痴話でした。（勘弁してください）

暫くすると、急に外が騒がしくなりました。私は不審に思い立ちあがった所で、突然扉が開き魔法衛士隊が突入して来ました。呆気にとられている内に、私は捕まり縄を打たれてしまいました。

（ここまで大ごとにするのか？）

私は内心毒づいていると、ヴァリエール公爵が資料庫に入って来ました。私は思いつきり公爵を、睨みつけました。しかし、公爵は涼しい顔で言い放ちました。

「この少年はアンリエッタ姫をかどわかし、トリステイン王国を混乱に陥れた大罪人である」

やり過ぎだと思った私は、止めようと公爵に詰め寄りました。しかし次の瞬間、私は床に転がっていました。頬に鈍い痛みが走り、目がちかちかしています。殴られたと気付くのに数秒かかりました。

（ここまでやるか？）

私は公爵を再び睨みつけました。

「この少年は厳罰に処す。牢に連れて行け!!」

私は引き摺られて、資料庫から退場しました。私の耳には、アンリエッタが泣き叫ぶ声が聞こえました。

連れて来られたのは、牢では無く先程の食堂脇の小部屋でした。私は杖を返してもい、殴られた頬の治療を始めました。

治療を終え暫く待つと、父上と公爵が部屋に入って来ました。私は公爵を睨みつけながら言いました。

「明らかにやり過ぎです!あれじゃトラウマになります!!」

私の言葉に、その場に居る全員が目を逸らしました。どうやら自覚は有ったようです。ここで父上が、こうなった理由を話し始めました。

「実はアンリエッタ姫が、国王が大切にしている壺を割って証拠隠滅の為捨ててしまつてな。国王に今回の事を話した所、徹底的にやるように命令されてしまつたのだ。・・・公爵は後ほど「やり過ぎだ!!」と、お叱りを受ける事になると思うが」

父上の言葉に、公爵が溜息を吐きました。確かに私も、公爵は災難だつたと思います。しかし、私にも言いたい事が有ります。

「私を殴つたのは、明らかかな私怨ですね?」

私の言葉に、公爵は目を逸らしました。その所作から当たりで有ると判断した私は、公爵を睨みつけました。

「カトレア様とルイズが、この事を知ったらどう思うか……」
「脅すつもりか？」

私は公爵の言葉に、「さあ？如何でしょう？」と答えておきました。どの道カトレアには、会った瞬間に全てはばれるのです。後々カトレアが、十分な仕返ししてくれるでしょう。

この後アンリエッタは謹慎処分（座敷牢の刑）を食らい、一月ほど王宮の一角から出られなくなりました。アンリエッタに私の事がどう話されたか知りませんが、謹慎が明ける前に領地に逃げられるので問題ないでしょう。

また、私の事を知っているのは、ヴァリエール公爵とジジさんだけです。（老コックとジジさんの仲間には、自己紹介していない）公爵には秘密にしてもらうよう約束しましたし、ジジさんには……
・完全に沈黙してもらいました。（何故か泣いていたのは気のせいだと思います。ちょっと、どこぞの魔王式O H A……ゲフンゲフン。なんでも有りません）

その後私は、父上と合流する事が出来ました。父上が探し出せた情報は、私が調べた情報と重複していて目新しい情報は有りませんでした。（王軍資料庫も、肝心な情報は破り捨てられていたようです）しかし当時の地図に関しては、より精度の高い物を獲得していました。

それから一週間と少しかけて、王宮資料庫に更なる手がかりが無いか二人がかりで調べました。しかし、成果は出せませんでした。

並行して可能性があった、マジックアイテム・精霊・強力な幻獣や魔獣についても調べました。

可能性が有りそうなマジックアイテムを調べ、その現在位置を探してみました。その全てが強力なマジックアイテムで、嚴重に管理されていました。資料を見る限り、マジックアイテムが原因の可能性は低そうです。

1000年前の資料に、木の精霊の存在を臭わせる一文を2・3発見しました。しかし、見つかったのはそれだけで全く当てになりません。

強力で珍しい幻獣や魔獣の情報は、全く発見できませんでした。

総括すると、何も分からなかったと言う事です。・・・泣きたい。

領地に帰る前に、魅惑の妖精亭によって試験結果を判定しなければいけません。

早速魅惑の妖精亭に向かいましたがしかし、魅惑の妖精亭は閉まっていたのです。中から人の気配がしましたので、少なくとも留守と言うことは無さそうです。

父上が扉をたたき、開けるように声をかけました。すぐに鍵が外され、中からジェシカが出て来ました。その様子は、かなり草臥くたひれていました。（これで6歳か・・・やっぱりシニールだ）

ジェシカに案内されて店の中に入ると、そこには少しやつれたスカロンさんが居ました。スカロンさんは「お願いします」と言うと、厨房へ引っ込んでしまいました。（あれ？オカマ言葉じゃなかった）

私が困惑していると、ジェシカが私の疑問に答えてくれました。

「お父さんは料理の時だけ、昔の口調に戻っちゃう様になったの」

その言葉に私と父上は、何となく納得してしまいました。それだけスカロンさんは、今回の試験に真剣だと言う事なのでしょう。

暫く待って、出て来た料理は厚めのビーフステーキでした。網焼きにしてある様で、網目状の焦げ目が有り、味付けは軽く塩を振ってあるだけの様です。早速フォークとナイフで、ビーフステーキを一口大に切り分けようとして驚きました。

「「柔らかい!!」」

思わず口に出てしまいました。焼き加減は、ミディアムレアと言ったところでしょうか？フォークで肉を口に放り込みました。

「美味しい!!……だが、これでは……」

父上が言いたい事は私も良く分かります。良い肉と使えば、それだけ原価が高くなり当然値段も高くなります。平民相手の店では、値段の高さは致命的です。しかしスカロンさんがそんな基本的な事で、失敗するとは思えません。それに、この肉と付け合わせの玉葱は……。そこで、父上の言いたい事を感じ取ったのか、スカロンさんが口を開きました。

「そこらで出している普通の肉と、同じ物を使用しています」

スカロンさんの答えに、父上は驚きを隠せないようです。

「摩り下ろした玉葱に、良く叩いた肉を漬け込んだんですか……」

私の言葉にスカロンさんが、驚きの声を上げました。

「……まさかこんなに早く看破されるとは」

スカロンさんが私の言葉に、呆然としていましたが結果は目に見えています。これ程美味しいステーキを出して来たのなら、合格で問題ないでしょう。ついでに炭の感想も、聞いておく事にしました。

「スカロンさんは、炭を使ってみてどう思いましたか？」

この質問が試験の一環と見たのか、スカロンさんは真剣に答え始めました。

「先ずは、本当に簡単に美味しく焼ける事に驚きました。そして、その奥の深さに更に驚きました。少し煽ぐだけで火力が簡単に強くなるし、炭自体の品質の差も見た目からは想像もできないほど大きいと思いました。同じ炭でも、料理に嫌な臭いが付いてしまうものも有りましたから。最初に聞かされた、焼き一生の意味が良く分かりました」

ここまででは感想の様です。しかし次の言葉に、私も驚かされました。

「それに炭は、厨房だけで使うのは勿体無いと思います。火が出ませんし、炭が燃えている姿はとても綺麗ですから。小型のコンロを作成して、客の前で焼くともっと客を呼び込めると思います。その場合は、肉は最初から一口サイズに切り分けておくと良いと思います。更に言わせてもらえば、焼くのをお客にやらせてみるのも良いかもしれません」

なんとスカロンさんは、焼肉を提案して来たのです。私は父上の目を見ると、大きく頷きました。

「合格だ」

父上の言葉に、ジエシカが喜びの声を上げました。スカロンさんは少し涙ぐんで、頷いていました。そこに私が声をかけました。

「先程スカロンさんが言ったのは、焼肉と言う物です。東方では、これ専門の店も在るほどです」

私の言葉に、スカロンさんは苦笑しました。口では「やはり考える事は、皆同じと言う事か」と、呟いていました。

私と父上はスカロンさんと、新生魅惑の妖精亭について会議をする事にしました。お店自体は新装開店として、当初の予定通り炭火焼を前面に押し出す方向になりました。焼き肉は使わない手は有りませんが、常に焼けた炭を用意しておくとなると経費がかさむので予約制にしました。必要な道具や専用のテーブルは、ドリユア家の方で用意する事としました。その代わりデミグラスソースを、早急に完成させるように条件を出しました。（会議の途中でスカロンさんの口調が、何時の間にかオカマに戻っていました）

この日は会議で遅くなったので、魅惑の妖精亭に一泊し領地へ帰る事になりました。領地に帰ったら、やる事が山積みです。マジ商会に魅惑の妖精亭の話を通して、必要な道具類や専用テーブルの作成。加えて鍛冶職人との顔合わせや、日本刀の説明と作成依頼もしなければいけません。更には魔の森の調査も有ります。

(領地に帰っても忙しそうですね)

そう言えば、折角同年代の男が居るのに殆ど喋って無いのはいかな物だろうか？

・・・友達欲しい。

第三十話 王都であれこれ（後書き）

王都編は一先ずこれで終了です。

主人公は社交の場に出るつもりはありません。
アンリエッタとの再会は、当分ないかな？

睡眠時間削って書くの辛いので、更新ペースを落とす予定です。
申し訳ありませんが、ご理解お願いします。

感想お待ちしております。

第三十一話 魔の森に居る物

こんにちは。ギルバートです。何故か王都に居る時間は、やたら長く感じました。今更ながら、いろいろ有ったなと思います。

潰れかけた魅惑の妖精亭が私達が与えた試験をパスして、炭焼きを前面に押し出したお店として新たな一步を踏み出す事になりました。この事は私の存在が、改善の方向だけでなく改悪の方向にも働く事を自覚させてくれました。今後原作介入は、より慎重に行う必要が有ると自覚しました。

それは良いとして、アンリエッタの今後が危ぶまれます。私の油断で、大きな影響を与えてしまいました。魅惑の妖精亭での反省点が、全く生かされていない事は今更ながら反省です。しかし、王族としての自覚が出るのは悪い事では無いので、良しとしておこうと思います。

領地に帰って来て一番最初にする事は、資料を探す事です。ドリユアス領を治めていたのが、ドリアード侯爵家の分家だったのなら、何らかの資料が残っているかもしれません。領民から古い資料の情報を、公募する事にしました。領民達にやる気を出してもらうために、情報には懸賞金を付ける事にします。(領民の識字率が高いと、こう言う時に凄く便利です。大々的に懸賞金をかけても、守備隊や屯田兵が全ての村落にまで常駐しているので問題無いでしょう)

帰路の休憩中にこの話をすると、父上の方から任せると言ってきました。反対する理由はないので、お任せする事にしました。

魔の森に関しては取りあえず手が空いたので、この間に出来る事をしようと思えます。と言う訳で、鍛剣製造の方の話を手早く進めようと思えます。屋敷に到着すると、母上達に帰還の挨拶をし鍛冶職人がいる家へ向かいました。

家に到着し、ノックすると13歳位の女の子に出迎えられました。まだ幼さが有る物の整った顔立ちで、十人いたら十人が美人だと声を揃るだろう程の美人です。細い身体と、銀髪碧眼が目を引きます。透き通るような白い肌に、銀髪の髪は凄く綺麗で腰にはギリギリ届かない位の長さです。(この子がアニーか？馬鹿貴族が奪い取るうとしたのも分からなくはない)

女の子に案内されて、家の中に入ると中年の男性と若い青年がいました。二人とも銀髪碧眼で、アニーと比べると若干肌が焼て黒くなっていきます。流石にアニーと違って、男性なので線の細さは微塵も有りません。どちらかと言うと、がっしりしていて無骨な印象を受けます。

「父さん。兄さん。お客さんです」

「……おう。客人か？いらっしやい」

女の子に言われて、サムソンさんらしき人が覇気のない返事をしました。これだけ見ると、とても腕の良い鍛冶職人には見えません。隣でパスカルさんらしき青年が、中年の男性を見ながら苦笑していました。(私が帰って来るまで、鍛冶場に入れないように指示したのは不味かったかな？)

「私は、ドリユアス家嫡子ギルバートです」

私が名乗ると中年の男性は驚き、次いで一瞬だけ笑顔を浮かべました。そして、立ち上がり姿勢を正すと口を開きました。

「サムソンだ。よろしく頼む」

そこには、先程の不拔けた印象は有りませんでした。続いて青年が口を開きました。

「サムソンの甥のパスカルです。これからよろしくお願いします」

「娘のアニーです。よろしくお願いします」

パスカルさんに続き、アニーも名乗りました。私は頷くと、これからの事を説明する為、口を開きました。

「先ず最初に言っておきたいのは、ここで見聞きした事は外に漏らして欲しく無いのです。東方の極秘技術が有りますから。その為あなた方に、途中で出て行かれると非常に困ります。職場環境は、良い状態を維持します。当然ながら「娘を差し出せ」と言う、馬鹿貴族の様な事が無い事は約束します。私たちドリユア家が、この約束を守る限り出ていかないと誓っていただけですか？」

私の言葉にサムソンさんとパスカルさんは、真剣な表情で頷きその場で誓ってくれました。

「基本的にやってもらうのは、従来の技術で出来る刀剣の鍛造です。そして、ここからが本題になりますが、東方の鍛冶技術を取り込み日本刀という刀を作ってほしいのです。更に、日本刀製造で手に入れた鍛冶技術を応用して、従来より高性能の刀剣を鍛造して欲しいのです」

サムソンさんが、挑戦的な笑みを浮かべ頷きました。

「では、職場に案内します。アニーは職場の見学をしますか？」

アニーは私の言葉に黙って頷くと、近くに有った棚から紐を取り出して髪を後ろで纏め縛りました。そして縛った髪を、前に回すと服の胸元を開いて纏めた髪を中に突っ込みます。次に棚から三角巾を取り出すと、頭にかぶりました。

（髪が燃えない様にする配慮か？手慣れていると言う事は、昔から父親の職場に出入りしていたのですね）

私がそんな事を考えながら周りを見て見ると、サムソンさんとパスカルさんは特に準備する事が無い様で、立ったままアニーの準備が終わるのを待っていました。しかし、サムソンさんは待ちきれないという様子で、アニーの準備が終わる前に口を開きました。

「さあ、若旦那。職場に案内してくれ」

サムソンさんの様子に、パスカルさんは笑いを押し殺しているのが分かりました。アニーも準備は殆ど終わっている様で、厚手のエプロンを着けながらこちらに歩いて来ました。口には、厚手の手袋が銜えられています。

「では、行きましようか」

私の言葉に、その場の全員が頷きました。

最初に連れて来たのは、ガストンさんの所です。私はガストンさ

んと手伝いをしているジャックに、帰還の挨拶を交わしました。家が隣なので、お互いの顔は既に知っていたのでしよう。ガストンさんとサムソンさんは、軽く頭を下げただけでした。

ガストンさんが《錬金》で鋼を作っている所を、サムソンさんに見てもらいました。当然のことながら、サムソンさんは渋い顔になりましたが完成品の鋼を見て、大いに驚き考えを改めたようです。何時の間にか、ニコニコ顔になっていました。

次に炭焼き小屋に連れて行きました。こちらも私は作業中のポールさんとピーターに、帰還の挨拶をしました。鍛冶一家は先程と同じように、軽く頭を下げただけでした。

完成品の炭をサムソンさんに見せ、コークスの代わりにすると伝えると難しい顔をされました。実際燃やして見せましたが、サムソンさんの表情を変える事は出来ませんでした。これは実際に、作業する所を見せるしかありませんね。・・・と、その前に。

「ポールさん。炭についてですが、完成品の品質に差が出る様です。主に臭いについてですが、木の種類や焼き上げ時間それと事前の木の乾燥等、いろいろと試してもらえませんか？」

ポールさんは「やってみるよ」と、答えてくれました。

さて、問題は納得していなサムソンさんとパスカルさんに、どうやって納得してもらおうかです。と言っても、実際目の前で鍛造するしかないのですが……。

最初に「知識はあっても、経験と技術が無いから鍛冶職人を呼んだ」と言うてから、鍛冶場に向かいました。

実際に炉に炭を入れ火を点けます。ほどよく火が付いたら、鞆で炉に風を送り込みます。それだけで、炭が真っ赤に燃えました。この状態で鋼を短刀一本分だけ、ガストンさんに分けてもらい炉の中に突っ込みます。

そして私は、最初に大まかな説明をしました。

水減し 小割 てこ棒、てこ台の作成 積み重ね 積み沸かし
鍛錬 作り込み 素延べ 切先の打ち出し 火作り 焼刃土を塗る
焼き入れ 鍛冶研ぎ 茎仕立て 銘切り

この作業を数日かけて、詳しく説明しながら目の前で実践する予定でした。

最初は乗り気でなかった二人も、私の最初の説明で目の色が変わりました。（この時点で、アニーが逃走しました。別に怖い事ないのでに何故？）

早速実演を始めましたが、二人は知識だけの素人作業をする私をもどかしく思ったのか、私から道具を取り上げ二人で作業を始めてしまいました。（なんか仲間はずれの気分です）

行程は順調に進み暗くなってきたので、私は今日の作業を終わりにしようと言いました。しかし二人から帰ってきた返事は……。

「今更止められるか！」 「中途半端は良く無いよ」

明確な拒否でした。

（まあ・・・いいか。しかし、何か似た様な人間ばかりここに集まっている様な気がする。類は友を呼ぶと言う奴か？）

結局短刀が完成するまで、ぶっ続けて作業する事になりました。

私も見て口出しするだけとは言え、かなり疲れました。途中で父上が様子を見に来ましたが、私は事情を話すだけにとどめました。今回父上は、母上に厳重注意されたばかりなので大人しく帰りました。余程後ろ髪引かれるのか、帰り際にチラチラとこちらを見ていました。それと、アニーが夕食を持ってきてくれたのが嬉しかったです。

最後に私はガストンさんの協力が有れば、水減しく積み沸かし工程を短縮できると説明しました。私の言葉にサムソンさんとパスカルさんは、面白くなさそうな顔をしていました。（恐らくメイジの力を借りるのに、抵抗が有るんだろうな。今回の鍛造で一番嬉しかったのは、メイジの力なしに極上の短刀を鍛造出来ると証明した事だろうし）

そんな事を思っていると、サムソンさんが口を開きました。

「まあ、ここに居るメイジは変にでかい顔しないしな・・・。俺達だけ肩肘張るのは、どう考えても馬鹿馬鹿しい」

サムソンさんの言葉に、パスカルさんも頷きました。私はそれを確認すると、一度大きく頷いてから言葉をかけました。

「ガストンさんに協力してもらって、心金は粘り強く柔軟な鋼を使い、刃金・側金・棟金は硬い鋼を使うようにしてください。それから、この技術を応用した刀剣を楽しみにしています」

私の言葉に、サムソンさんとパスカルさんは大きく頷きました。

「それからその短刀は、ある意味でこの鍛冶場の処女作品です。《固定化》をかけておきますので、記念に二人で持っていてください」

「ある意味？」

私の言葉に、パスカルさんが反応しました。どうやら若干廢テンシヨン入っていた為、口が軽くなっていた様です。流石にこれ以上言う訳にはいかないので、あの日の事は黙っておきます。代わりに、あの時のロングソードを差し出しました。

「鍛造が可能か、素人が実験した物です」

二人はロングソードを、細部まで見て行きます。そして出てきた感想は、ある意味当然の言葉でした。

「ひでえ作品だな。素人じゃしょうがねえのか？」

「実験品とは言え、この出来は酷いね。鞘に収まっているのが奇跡だ」

私はこの評価に、苦笑いしか出ませんでした。（《鍊金》で形を整え鞘に収まるようにしたとは、とても言えませんね）

「まあ、そう言う訳です。慣れて来た所で、私用の日本刀を打ってもらおうと思います。刃渡り100サントの大太刀一振り、刃渡り50サントの小太刀二振り、刃渡り30サントのヒ首一振りです。ちなみに、大太刀・小太刀・ヒ首と言うのは日本刀の種類です」

日本刀の種類に、二人が食いついて来ました。仕方が無いので、

長さの違いによる呼び方の違いから始まり、直刀と曲り刀の違いや小烏丸造り（鋒両刃造）等の代表的な物から話して行きました。口だけでは分かりづらいので、《錬金》でレプリカを作って説明をしました。何故か仕込み刀（特に仕込杖）の所が、一番食いつきが良かったです。（なんでさ？）

全て語り終った時外を見ると、オレンジ色の光が見えました。

（また徹夜してしまいました。母上に怒られますね。あれ？でも、さっきまで外が明るかったような気が・・・）

私がそんな事を考えていると、父上が館から歩いて来ました。

「ギルバート！夢中になるのは分かるが、少しぐらい帰って来い。シルフィアに殺されても知らんぞ！」

開口一番父上の言葉で、私のぼけた頭に活が入りました。そして周りを見て、現状を冷静に分析しました。帰宅準備をしている、ガストンさん・ジャック・ポールさん・ピーターの四人を確認すると太陽の方角を確認しました。（間違いなく夕方だ）

鍛冶場の机を見ると、朝食と昼食らしき食べ物が置いてありました。と言う事は、24時間近く飲まず食わずで鍛冶場に籠りつ放しだったと言う事です。私の後ろで、困ったように声が上がりました。

「あー、やっちまったな」

「またやっちゃたね」

（またって事は、常習犯かい！！って言うか、人の事言えない。・・・

・それより母上に、なんて言い訳しよう

「ギルバート。諦める。骨は拾ってやる」

「父上！！見捨てるんですか！？」

「当然だ！！とばっちりはごめんだ！！何のために昨日我慢したと思っっている！！」

「うがぁ~~~~！！母上に殺される~~~~！！」

私は思いつきり頭を掻き毟ってしまいました。身体は恐怖のあまり、ガタガタを震えています。しかし次の瞬間、私の思考と動きが振えごと凍りつきました。

「やあね。ギルバート。私が愛しい息子を殺す訳ないじゃない」

（母上！！何時の間に！？）

私の背後に、母上が居ました。とてもいい笑顔をしているのに、目が全く笑っていません。

「朝帰りはダメって言うておいたのに……。朝じゃなければ良いと思ったのかしら？全く困った子ね。注意しようと思って待ってた私が馬鹿みたい」

この時私は、母上の機嫌を少しでも改善する材料を探すのに必死でした。父上は目が合った瞬間に、目を逸らされました。次いでサムソンさんとパスカルさんと目が合いましたが、この二人では母上の暴虐を目の当たりにした事が無いので、物の役に立たないでしょ

う。しかし二人が持っている短刀は、役に立つかもしれない。

「母上。一日かけて短刀を打ったんですよ」

「そうなの？」

パスカルさんが空気を読んで、短刀を母上に渡しました。母上は短刀で、軽く素振りすると何処からかリングを取り出しました。そして何故か、私の頭の上にリングをのせました。次の瞬間、母上は短刀を振っていました。

・・・縦に。

リングは左右にわれ、地面に落下しました。その間私は固まって、ピクリとも動く事が出来ませんでした。

「あら・・・、本当に切れ味良いのね」

(ああ 頭・・・ま まな板代わりにされた)

あまりの事態に、その場に居る全員が動く事が出来ませんでした。私も自分が無傷なのが、とても信じられませんでした。思わず、リングが乗っていた所に手を当ててみましたが、髪の毛も無事です。切れ味が鋭すぎたためか、果汁のべとつきも有りませんでした。

「はい。返すわ」

パスカルさんは、条件反射で短刀を受け取っていました。母上はそのまま私の襟首をつかむと、館に向かって歩き始めました。母上に引きずられる私は、この状況に現実感を感じられず(頭が理解す

るのを拒否した）他人事のように感じていました。その時思ったのは、ドナドナの子牛ってこんな気持ちなのかな？でした。

その後何が有ったかは………忘れました。………忘れる。………忘れさせてください。………お願いだから。

母上の折檻から何とか回復しました。未だに父上からの情報が無い為、待機状態です。今月中ニユイの月に発見が無ければ、別の手段を探そうと思います。

今日は仕事で父上と母上が留守なので、ディーネとアナスタシアの三人で訓練をしています。最初は剣の訓練で、私は飛燕剣中心に行います。特に重要なのは後半で、状況に応じて太刀筋を自由に変える訓練です。実戦になれば、障害物が有る所での戦闘も当然あるでしょう。乱戦時に味方を傷つけないのは当然ですが、剣が障害物に当たると剣のダメージになったり振り遅れにつながります。実戦では当然それが、死に直結します。（セリカ様の受け売りなのが悲しい所です）

個人練習が終わると、三人で一度手合わせをします。少し前までは、ディーネが一番強く次いで私でアナスタシアが最後と言う順番でした。この順番が変動しつつあるのです。私が飛燕剣を使い始めた事と、マルウエンの首輪の成長促進の加護が原因です。流石にまだ一度も勝っていませんが、ディーネの動きに余裕が無くなって来ました。

ディーネに飛燕剣を教えろと言われましたが、バスタードソード

では重過ぎて飛燕剣を使うのは無理でした。代わりに狙撃戦術と錬撃術を教えようとしたら、ディーネには飛燕剣以上に相性が悪かったようです。全く物になる兆候がありませんでした。狙撃戦術と錬撃術は、役に立たなかったかと思っただけならアナスタシアが予想外に相性が良かったです。アナスタシアは剣術の成長に、不満が有ったようにとても喜んでいました。（レイピアが向いてないのかな？）

これで分かった事は、ディーネは直感で戦うタイプで逆にアナスタシアは理詰めで戦うタイプだと言う事です。これはそのまま、成長の仕方にも現れます。ディーネは訓練で積み重ねた経験が、実戦や模擬戦で一気には開花するタイプです。アナスタシアは訓練で手に入れた経験を、一つ一つ積み重ね堅実に強くなるタイプです。私は二人の中間と言ったところです。

剣と戦い方はこの様になっていますが、面白いのはここから魔法の勉強に関してはある意味反対になるのです。ディーネはコツコツ勉強し、アナスタシアは要点だけを的確に把握し覚えます。どうしてこうなったか、不思議で仕方ありません。

剣の次は魔法の訓練ですが、母上の教えが「習うより慣れよ」なので、ひたすら魔法を使い続ける事になります。魔法を使いすぎて倒れると、母上のキツイお仕置きが待っています。なので精神力の残量は、常に意識するようにしています。

訓練が終わると、大概そのまま休むか魔法の座学をしています。最近では、鍛冶場に行って鍛冶を習うかジャック・ピーター・ポールの三人に魔法の座学を教えていたりします。

ジャックは黙々と黙ってやるタイプで、ピーターは真面目な努力家タイプでした。ポールは魔法の勉強自体嫌がって、逃げ出そうと

する始末です。今の所どうやって、ポータに座学を覚えさせるかがネックになっています。まあ、様子からして魔法に興味が無い訳ではないようなので、根気強くやればなんとかなると思います。

ふと気付くと、何気に充実した毎日を送っていたりします。しかしこの状況に、不安を覚えてしまう私は貧乏性なのでしょうか？

いつも通り訓練を終え休んでいると、父上がやって来ました。話を聞くと古い資料を、まとめて保管している倉庫が見つかったそうです。灯台下暗しとは良く言ったもので、倉庫はドリュアス家の館に一番近い町に有りました。

実際父上のグリフォンに乗って、現場を見に行きました。

待っていたのは、初老の男性でした。彼は倉庫の主で、彼の先代が代官の命令で保管していたそうです。命令書には代官印が押してあった為、勝手に処分できず放置してあったそうです。

早速、倉庫の中を見せてもらいました。

そこに広がっていたのは、とても既視感がある光景でした。そう何一つ法則が無く、ただ積んであるだけの資料が有りました。王宮資料庫で見た光景を、嫌でも思い出させます。しかも総量で言えば、王宮資料庫の魔の森に関する資料より倍くらい多いです。その殆どが、私達の目的と関係無い物ばかりです。ためしに一束手を取ってみると、タイトルには「5987年度 ドリュアス領収支報告書」と書かれていました。

「……父上」

「ギルバート。……どうしよう?」

「どうしよう?って、やるしかないじゃないですか」

そこで初老の男性が、私達の話に割り込んで来ました。

「領主さまには感謝してもしきれません。ここに有る資料を全部引き取ってくれる上に、お金まで頂けるなんて……。本当にありがとうございます」

「ち 父上!？」

「大丈夫。払うのは、懸賞金のみだ。問題はこの資料の山を、どこに引き取るかだ」

父上からは、焦燥感が伝わって来ました。この資料をドリユアス家の館に収納するには、部屋を2〜3潰さなければとても入りきりません。母上がそれを了承するはずが無いのです。父上もこれ程の量の資料が見つかるとは、考えていなかったのでしょうか。頭を抱えてしまいました。こうなると取れる道は、限られてしまいます。

「父上。開き直りましょう」

「開き直る?」

「私と父上で、ドリユアス家専用の図書館兼資料館を作ってしまうでしょう。我々は土メイジです。その気になれば、城だって建てられます」

「うむ。それしかないな。主よ^{あつこ}」

「はい」

「資料の引き取りは、1〜2週間後に始めるが問題無いか？」

「はい。問題ありません」

私と父上はすぐに館に戻ると、母上の了承を得て建築を開始しました。鍛冶場を建設した時の経験が役に立ち、守備隊とマギ商会への打診と図面作成をその日の内に済ませました。次は材料集めですが、守備隊の余剰戦力とマギ商会を投入しました。

材料が届き始めた3日目に、私と父上で基礎工事を開始しました。《浮遊》と《鍊金》を使って、ドンドン骨組みを作っていきます。5日目には骨組みが完成し、床と天井の建造に移ります。7日目には床と天井の建設が終わり、壁・窓・扉の作成に移ります。この時既に材料は揃って来ていたので、守備隊のメイジを投入しました。そして8日目にして、図書館兼資料館の完成です。（本当に魔法って反則です）

一部のメイジを書棚作りに回し、マギ商会の面々には資料を運び込ませました。残り全員で、資料の分別をおこないます。何度かそれっぽい資料を見かけましたが、今はかたづけ優先です。

全ての資料を片付け終わるのに、建造含めて二週間という短時間で終わらせました。人海戦術って素晴らしいです。

このまま終了では味気ないので、バーベキューパーティーを開く

事にしました。本音はバーベキユーがハルケギニアに、どれだけ受け入れられるかの実験ですが……。結果は大変好評でした。今度貴族にも試してみようと思います。今回関わった全員に、父上が特別手当と特別休暇を与え解散しました。

資料についてですが、目的の物を発見する事が出来ました。それは、紙束に書かれた手記でした。手記の内容に、私達は驚きを隠せませんでした。

手記を残したのは、ドリアド家のもう一つの分家であるドライアド家の人間でした。

ドリアド侯爵は、”木の精霊”との交渉役を担っていた家系でした。精霊の祝福により、作物も驚くほど良質な物が収穫出来ていた様です。約1500年前にドリアド侯爵は、木の精霊と交渉し、森の一部を開拓したようです。これによりドリアド侯爵領は、トリステイン王国に大きな富をもたらしました。

しかし、それを面白くないと考える者たちがいました。それは他のトリステイン貴族と、ロマリアの神官でした。当時精霊との交渉役は、ブリミル教に反する公にできない役職とされていた様です。これを利用してドリアド侯爵縁者を、異端審問で皆殺しにしたのです。馬鹿貴族達は残った領地の争奪戦を開始し、ドリアド領は荒れに荒れたそうです。

領地の争奪戦が一区切りした時、次に手を出したのが精霊の住む森でした。木の精霊はそんな人間達に対抗する為に、幻獣・魔獣を呼び集めます。これに対して馬鹿貴族がとった行動は、木の精霊の

討伐でした。終に木の精霊は怒りをあらわにし、討伐隊を壊滅させ森が広がり始めました。当然精霊の森が住み良いと判断した亜人達は、続々と精霊の森に集まって来ました。

……これが魔の森誕生の秘密でした。

精霊の怒りにふれたロマリアの神官達は、これ以降精霊に手を出さないように指導するようになりました。国も精霊との交渉役を、名誉職として大切にする様になったのです。

手記を書いた人間は、ドライアド家の私生児で異端審問の難から逃れる事が出来たようです。各地を転々として、最終的にドリュアス家の元使用人に匿われその生涯をとじたようです。

手記を読み終えた私達は、溜息しか出ませんでした。おそらく当時の国のトップが、関わっていたのでしょう。でなければ王宮資料庫に出入りし、資料を処分することなどできないでしょう。また、噂も残っていなかったことから、余程強力で巧みな緘口令が敷かれていたと思われます。

いつの時代も、権力におぼれた馬鹿は本当に救いようが無いです。

そして今更、精霊と交渉など出来るのでしょうか？

第三十一話 魔の森に居る物（後書き）

次回、魔の森の解決編を予定しています。

しかし、活動報告でも書きましたが今後の展開について迷っていたりします。

今月中に答えを出して、次話を書き始めようと思います。

感想お待ちしております。

第三十二話 木の精霊

こんにちは。ギルバートです。現在ドリユアス家家族会議中です。会議の焦点は、先日発覚した魔の森の精霊対策についてです。ただ今家族内での意見が、割れに割れています。

木の精霊に対する意見は、以下の二つに分かれています。

多少リスクが有っても、精霊と接触して交渉するすべきと言う交渉派。こちらは、私と父上の派閥です。

危険すぎるので、精霊との接触は避けるべきと言う不干渉派。こちらは、ディーネとアナスタシアの派閥です。

母上だけが、自分の意見を明言していません。普段の母上なら真っ先に意見を言うのですが、事が家族の安全に関わる事になると途端に慎重になります。まあ、冷静じゃない時は話が別ですが。

家長の父上は当然ですが、私も家族内での発言力は強いです。発言力順は基本的に、父上>母上>私>ディーネ>アナスタシアの順番です。現状では交渉派が優勢ですが、母上がどう出るかによって簡単に逆転されます。当然それを理解しているディーネとアナスタシアは、母上を説得し不干渉派に引き入れようとしています。

私は会議の最初に、交渉すべきと発言し後はずっと黙っていました。議題には出ていませんが、一つ懸念事項があるからです。それは、高等法院や馬鹿貴族達です。もしこいつらに精霊の事が知られば、交渉役になるうと魔の森に押し掛けて来るでしょう。そうなれば、精霊を更に怒らせる事になりかねませんが、それだけでは有

りません。

精霊が答えない 虚偽の報告

精霊との交渉の失敗 精霊が居なかつた事にされて虚偽の報告

何らかの原因で魔の森が広がる ドリユアス家の責任問題

自称交渉役に怪我人死人がでる ドリユアス家の責任問題

自称交渉役の立ち入りを断る 叛意有り

如何転んでも、高等法院に致命的な隙を見せる事になります。また黙っていても、どこから情報が漏れるか分かつた物ではありません。その時は、重要情報隠匿による叛意有りです。

ドリユアス家にとっての理想は、単独で精霊と交渉し話をまとめてしまう事です。成功させてしまえば、余計な口出しをされる心配がありません。言い訳などどうとでも出来ます。その場合のリスクは、交渉中に情報が漏れると叛意有りとされる事です。

父上と母上も、高等法院や馬鹿貴族の事は当然気付いています。だからこそ母上は、ここまで迷っているのでしょうか。

私が交渉すべきと判断したのは、ドリユアス家単独での交渉が一番リスクが少ない上に、リターンが大きいと判断したからです。それは精霊との交渉は、私が行けばスムーズに進むと考えたからです。

話を切りだすタイミングを計っていましたが、このままでは埒が明きません。仕方が無いので私は、テーブルを掌で叩き注目を集めると口を開きました。

「精霊との交渉には私が行きます」

一瞬だけ場が静寂に支配されました。そして次の瞬間には、予想通り全員から猛反対されました。かなりのプレッシャーを感じますが、ここで発言を撤回する訳には行きません。

「私の魂の話はしましたね？」

ここで全員が口を閉じました。

「私の魂を融合させたのは、大いなる意思であると話しましたね？」

私の確認に、全員が沈黙を持って答えました。

「大いなる意思とは、先住……いえ精霊魔法を使う者達にとって、神に等しい存在です。当然精霊にとっても、無関係ではないでしょう。大いなる意思の加護が有る私が行く方が、交渉の成功率は圧倒的に高いです。交渉が失敗した時の、安全に帰ってこれる確率も同様です」

加護云々は、正直に言えばハツタリです。ですが私は頭の中身を全て、精霊にさらす覚悟が有ります。私の予想が正しければ、精霊は大いなる意思の「この滅びゆく世界に、運命を変える一つの因子たれ」と言う言葉に、態度を軟化してくれるはずです。上手くすれば、全面的に協力してくれるかもしれません。

「分かった。今回に限りギルバートの同行を許可する」

私の言葉に、父上が最初に折れました。ディーネとアナスタシアが、父上に非難の視線を向けます。しかしそれも、長くは続きませんでした。原因は母上です。

「ならば私とギルバートで行きましょう」

「ならん！！行くのは私とギルバートだ！！」

母上の言葉に、父上が即座に反論します。父上と母上は、睨み合いを始めてしまいました。ディーネとアナスタシアは母上が交渉派になり、誰が行くかに論議が移ってしまったので蚊帳の外です。二人仲良く、私を睨んで来ました。（私は悪く無いと思うのですが）

結局この日の家族会議では、父上と母上のどちらが行くか決着がつきませんでした。

次の日の朝食時に、父上から「交渉は、私とギルバートが行く事になった」と話が有りました。父上の顔はゲツソリしていて、更に青あざと引掻き傷そして・・・大量のキスマークがついていました。母上を見ると、肌が妙につやつやしています。

（・・・父上寝技に持ち込んだな）

ディーネとアナスタシアは、あの母上が大人しく引き下がったと言っ不可解な状況に、しきりに首をひねっていました。

（そのままのあなた達でいてください）

私と父上は、精霊との交渉の為の準備を整えました。月は何時の間にか変り、アンスールの月に突入していました。精霊の居場所については、手記に記されていた内容と王都で手に入れた地図を照ら

し合わせ調べると、なんとか判明しました。

その場所は森の中で唯一開けた場所で、小さな沼が有り沼の中心に小島が有るそうです。その小島に大きな大樹が、ドンと鎮座しているそうです。(そんな怪しい場所、今まで調べなかったのでしょうか?) 私はそう思い父上に聞こうとしたら、父上が先に口を開きました。

「当然そのような場所は、過去の調査隊が真つ先に調べている。その場所にこだわった者も、決して少なくは無い。前任であるクルーズ家の、アラン・レイ・ド・クルーズもその一人だ。しかしその場所は、亜人は居ないが幻獣や魔獣が多く下手な事が出来ないのだ。だから過去の調査隊は隠れて近づき、《探知》ディテイクト・マジックで入念に調べたそうだ。だが、結局何も出なかった。相手が精霊ともなれば、当然の結果と言えるがな。・・・しかしあの場所に精霊が居るとは、とても信じられん」

父上の最後の言葉が多少気になりますが、精霊の力は《探知》では解らないです。これは精霊の力を、人間が知覚できないからと私は考えています。そうなるとう過去に調査した人達は、全て無駄骨だったと言う事になります。私は頭が痛くなりました。

いったい魔の森は、どれだけの物を飲み込んで来たのでしょうか? 土地・国の富・民や優秀な人材。数え始めれば、キリが有りません。それら全てが、一部の権力者達のくだらない欲から始まったと思うと、やるせない悲しみと怒りを覚えます。

そして、いよいよ出発の日の朝を迎えました。交渉に向かうのは、私と父上そして守備隊から護衛としてヒボグリフ騎兵の男女2名で

す。男の方の名前は、エディで風のメイジです。女の方の名前は、イネスで水メイジです。実力は、二人ともラインクラスの様です。本当はもつと護衛を増やしたかったのですが、あまり大人数になると精霊に警戒されると判断しました。

父上は母上と、長めの抱擁を交わしています。護衛役の二人も、30人近い仲間に囲まれていました。私も出発の挨拶をしようと、ディーネとアナスタシアに目を向けますが、そっぽを向かれてしまいました。(うつ・・・)。ちょっと悲しい(そうこうしている内に、父上が母上との挨拶を終え、全体へのお出発の挨拶と号令をかける様です。

ドリアード侯爵の顛末は、既にここに居る全員が知っています。みんな一様に、真剣な表情をしていました。士気も高い様です。

「我々をこれより、木の精霊と交渉をする為に森へと入る。かつて一部の強欲な者達の所為で精霊を怒らせ、精霊の森が魔の森と化してしまった。我々は人間の過去の過ちを清算し、精霊と共存しなければならぬ。皆私に・・・ドリユアス家に力を貸してほしい」

守備隊員達は、父上の宣言に敬礼で返します。

「護衛の二名は、騎獣に乗り込み」

エディとイネスが、それぞれのヒポグリフに乗り込みます。私も父上と一緒にグリフォンに乗り込みます。

「では、出発する」

父上の掛け声と共に、一頭のグリフォンと二頭のヒポグリフが浮

かび上がりしました。目指すは、ドリュアス領南西に有る精霊の大樹です。

高い高度を取りながらの移動は、問題無く進みました。グリフォンに乗っている時間は、大体2時間位でしょうか？ようやく目的地が見えてきました。徐々に騎獣の高度を落として行きます。しかし、このまま下りても良いのでしょうか？

「父上。我々は隠密行動は良いのですか？」

「あくまで話し合いに来たのだ。必要無かるう」

父上は私の疑問に即答します。そして直接目的地に降り立ちました。

そこは、とても澄んだ空気に包まれていて、沼の水は透明度が高く底に生えている水草がハッキリと見てとれる清浄な場所……では在りませんでした。

先ず気になったのが臭いです。マギの時に嗅いだ事が有る、どぶ川のような臭いです。臭いの元は沼でした。沼の水は濁り悪臭を放ち、とても生物が住んでいるようには見えませんでした。

（これが精霊が居る場所なのか？……そうか、父上が言っていた「精霊が居るとはとても信じられん」とは、この事だったのでね）

そして何より、先程から感じる視線です。森の中から感じる視線

は、殺気や敵意の様なものが含まれています。恐らく大樹を守る、幻獣や魔獣の物でしょう。杖を抜いただけで、一斉に襲って来そうな感じがします。

「話を聞く限りこの場所は昔から、このような状態だったらしい」

父上の口から、そんな言葉が漏れました。私達は気お取り直して岩を伝い小島に移動しました。早速父上が、大樹に向かって声をかけました。

「木の精霊よ。私はアズロック・ユース・ド・ドリユアスと申します。この度は、貴方と話し合いの場を持ちたく、参上させていただきました。どうか、お姿をお見せください」

……しゅん。

「どうか……どうか、お姿をお見せください」

……しゅん。

傍から見ると、父上がとても可哀想な人みたいです。父上は反応が無い事に、肩をガツクリと落としてしまいす。エディとイネスは、私と同じ事を考えたのか苦笑いをしていました。

私はその間少しでも情報を集めようと、あちこちに目を走らせていました。そして気付きました。一見立派に見える大樹は、枯れかけていたのです。原因は恐らく……。

「父上。……この大樹は枯れかけています」

私は手近な根に触れ、構造を読み取ります。予想通り何らかの力（おそらく精霊の力）で、沼の水を吸収しない様にブロックしているようですが絶対では無い様です。長い時間をかけて、沼の水が少しずつ大樹を侵しているのでしょうか。

「精霊が姿を見せないのは、顕現するだけの余力が無いか、少しでも力を温存したいからではないでしょうか？」

私は後者だと予想しています。理由は、魔の森が拡大を続けているからです。前者ならば、魔の森の拡大は止まっているでしょう。父上も確認すると同じ考えに至ったのか、私の方を見て大きく頷きました。

（父上。ここは任せていただけませんか）

私がアイコンタクトをおくと、父上は頷いてくれました。私は大樹に手を触れ、見上げるような姿勢で口を開きました。

「木の精霊よ・・・沼の水を浄化するのに、魔法を使うのを許してほしい」

「なっ!?!」「え?」

私の言葉に、エディとイネスが驚きの声を上げました。父上は予想通りと言う感じで、目を閉じて笑いを押し殺していました。

二人の考えは良く分かります。このまま放っておけば、大樹は枯れ精霊は居なくなるのです。それに、枯れかけていると言う事は、かつての強大な力を振う事は出来ない為討伐も可能でしょう。それなのに、態々助ける理由はない。と、考えたのでしょうか。

この考えは、戦略的に見れば正しいです。しかし、ドリユアス家の関係者としては、あまり正しいとは言えません。相手が強大な力を持つ精霊ともなれば、そう考えてしまつのも無理ありませんが……。

暫く待つと、風も無いのに大樹の枝葉が葉鳴りの音をたてました。それと共に、森からの視線に含まれる殺気と敵意が和らぎます。精霊からの許可が出たとみて、間違い無いでしょう。また、エディとイネスも落ち着き冷静になったのか、恥ずかしそうにうつむいていました。

「許可が出たと見て間違い無いでしょう。ならば役割分担を決めて早々に浄化を終わらせてしましましょう。父上よろしいですか？」

「かまわん。こう言った事はお前の方が詳しい。この場を見事指揮して見せよ」

(これは期待に応えなければなりませんね)

私は大きく頷くと、ハルケギニア向きの説明を始めました。

「水はそれ自体に、自らを浄化する能力が有ります。しかしそれは、風の力(酸素)を取り込む必要が有るのです。本来なら、水は流れる事により風の力(酸素)を取り込みます。しかしこの沼は、流れ込む水も流れ出る水も有りません。これは水源に問題が有ると見て間違いないでしょう」

私の言葉に、全員が頷きました。エディとイネスは、私の知識に驚きを隠せないようですが……。

「水の流れを復活させても、沼の水は澱み過ぎています。そして澱みが沈殿して、沼の底に毒となり溜まっています。これをどうにかしなければ、下流に毒を撒く事になります。沼の底を《念力》でさらい無毒に《鍊金》した後、森に埋めてしましましょう」

再び全員が頷きました。

「では、水源調査班と水底清掃班に分かれましょう。水源調査班は、私とイネスで担当します。父上とエディは、水底の清掃をお願いします。調査が終了次第、私とイネスはそちらに合流します」

私とイネスは、沼への水の流入ポイントと流出ポイントを見極める為に、現場と地図を見比べ始めました。それらしき場所は、沼の西と南東にありました。問題は水が流入するポイントが、どちらなのかです。見た目では、全く見分けがつきませんでした。するとイネスが口を開きました。

「西に少し行くと、国境のプレス火山から続く崖があります。手前が崖の上側になるので、水源の可能性が高いのは南東の方だと思います」

「詳しいですね」

イネスは私の言葉に、苦笑を浮かべました。

「以前この森に入った事が有りますので・・・」

普通は条例の所為で、魔の森に入った事が有る人間などそうそういません。

「と言う事は……」

「はい。私とエディは、元々クールズ家に仕えていました。私達は当時新人でしたが、アラン様の捜索にも参加していました。その後は、ヴァレール様直属の部下として働いていました。それからクールズ家が無くなり、ドリュアス子爵に拾っていただきました」

「そう……ですか。精霊を恨んではないのですか？」

イネスは、私の言葉に少し困ったような顔をしました。

「わだかまりが無いと言えば、嘘になります。ですが、本当に悪いのはギルバート様曰く、馬鹿貴族なのは分かっていますから」

そう言ってイネスは笑ってくれました。私が一部の貴族を、馬鹿貴族と言って蔑んでいるのは守備隊の中では、どうやらかなり有名になっている様です。

「では、南東の小川の跡を追ってみましょう。ヒポグリフを出してください」

私の命令に、イネスは真剣な表情で応じてくれました。

私とイネスは、曲がりくねった小川の跡を追っていきます。小川の跡は、私の予想より遙かに長かったです。最終的に、プレス火山の麓まで続いていました。そして水源と思われる場所は、全て大岩でふさがれていました。

「これはもしかして……」

私の呟きに、イネスが答えました。

「精霊の力を弱めるために、誰かが水源を絶つたのでしょうか。そして現状はかなり不味いと思います」

そう言っただけで、大岩を《浮遊》レベティションで、どけ始めます。私は止めようとしたのですが、イネスに制されました。大岩を全てどけても、水がわき出す事は有りませんでした。イネスは穴を覗き込みながら、口を開きます。

「この場を無理やり塞いだ事により、行き場を無くした水が別の出口を造り出したようです。水は全てそちらに流れてしまい、もうここから水が湧き出す事はないでしょう」

イネスの言葉に、私は頭を抱えてしまいました。

「少し遅いですが、昼食にしませんか？子爵との合流は、その後でも良いと思います」

イネスの提案に、私は力なく頷きました。

父上と合流すると、こちらでも嬉しく無い発見がありました。沼の底から、人骨と騎獣らしき骨が出て来たのです。死体の所持品に、固定化が切れていない物品がいくつかありました。

古いトリステイン軍の紋章が入った鎧、ロマリアの神官着らしき物。他にも剣や杖が有りました。恐らく精霊討伐隊の物でしょう。

水の流れが完全に止まって、落ち葉だけでなくこれだけの数の死体が沈んでいたなら水質の悪化は当然です。むしろもつと酷い状態になっていても、不思議では有りません。

取りあえず人骨の処理は置いておいて、さらった泥を《錬金》で乾燥させ肥料に変えます。肥料は後で森の中に埋めれば、問題ないでしょう。エディは精神力が限界に近い様なので、先にキャンプの用意をしてもらいました。

作業の続きは、エディの代わりに私とイネスが行いました。底を《念力》でさらう度に、何らかの骨が出て来るので、イネスは凄く嫌そうな顔をしていました。その上臭いもきつく、とても作業環境が良いとは言えません。

キャンプの準備が整うと、エディには現状を家に伝える為伝令に走ってもらいました。ついでに風と水メイジを、数人応援によこす様に指示しておきました。

夕方には、底の泥を全てさらう事が出来ました。幸か不幸かこの時、鼻がマヒして臭いを感じなくなっていました。

夕食は三人とも食欲がなく、持ってきたパンと水で簡単に済ませました。その時父上に、水源の事を報告します。流石の父上も、人間の手により水源が壊された事に頭を抱えていました。

翌朝、作業の再開です。泥さらいは終わっているのですが、次は濁った水をどうするかです。と言っても、ちゃんと考えてあります。

「父上。《錬金》を利用して、水中の不純物を圧縮して固めてください。方法は、以前行った分離精製のイメージと同じです。イネスは、朝食の準備をお願いします。次の工程で活躍して貰うので、今は精神力を温存しておいてください」

私はイネスが頷くのを確認すると、作業を開始しました。しかし最初の《錬金》で、私は恐怖におののく事になりました。目の前にとてつもない悪臭を放つ、黒いボツボツ付き半透明白茶色でプリン状の物体Xが在りました。プルプル振るえる様は、生き物みたいで気持ち悪いです。と言うか、怖気が走ります。

見ると父上も、私と同じような顔をしていました。私は蓋つきのバケツを《錬金》すると、バケツの中に《念力》で物体Xを放り込みます。見ると父上は、私の真似をしたようです。（臭い物には蓋をしる。ですね）

一時間ほどで、この工程は終了しました。水は透明度を取り戻していました。悪臭もすっかり薄くなり、居心地はそれほど悪くありません。……二つのバケツが置かれている近辺以外は。

私は遅めの朝食をとりながら、父上に相談する事にしました。

「父上。あのバケツの中身どうしましたよ？」

「わ 私に聞くな。ギルバートが生み出したのだから、ギルバートがどうするか考えよ」

「《錬金》でどうにかするのが一番なんですけど、物体Xを目の前にすると強烈なインパクトの所為で、イメージが物体Xに影響されて上手く《錬金》を発動出来ないんですよ」

私は情けない声を出してしまいました。

「ふん。軟弱だな」

「では、父上がなんとかしてください」

「すまんかった」

結局、物体Xは焼却処分する事になりました。火を使うので、木の精霊に一言かけてから作業開始です。穴を掘りバケツを入れ、バケツを油に《錬金》し直します。その時見えたものは、一つ一つの物体Xが目玉の様にぬめぬめと、バケツの形から崩れていく様でした。キモさ三倍です。赤くなって、角が生えそうな勢いです。

私は泣きそうになりながら、《発火》を使い火をつけます。しかしそこで大人しく終わらないのが、物体Xクオリティです。凄い煙と悪臭を放ち始めました。煙と悪臭に精神を乱され、魔法や消火どころでは有りません。私と父上は転がる様に、その場から逃げ出します。

ようやく臭いと煙の圏外に逃げると、私と父上は涙を流しながら咳き込みました。

辛い煙と悪臭は、最初がピークだったようで収まりつつあります。私と父上は、ホツと胸をなでおろしました。その時後ろから気配を感じました。この場には私たち以外は、イネスしかいません。

「すみません。イネス。まさかこんな事になるとは思わな・・・
!?!」

私は最後まで言い切る事が、出来ませんでした。振り向いた先に居たのは、イネスでは在りませんでした。肌は木の幹の様な部分があり、髪は何本もの蔓と葉で出来た人の形に似た何かでした。

「単なる者よ……。今のは我に対する攻撃か？」

（（！？……木の精霊！！））

私と父上はちぎれんばかりに、首を左右に動かしました。

「本当だろうか？」

（すっごい怒ってる）

「本当です。沼より取り出した毒素を、火で燃やしたのです。しかし、予想外の煙と悪臭が……。」

私が事実を言いますが、木の精霊がどう思つかは話が別です。私と父上は、ガタガタ震えてしまいました。

「本当です。何なら頭の中を覗いてください」

私がそう言うと、私の体に蔓が巻き付きました。そして、……プスップスップス。　（棘が棘が刺さる！！イタッイタッイタッイタッイタ）

「嘘はない様だな。今回の事は不問とする」

木の精霊は、事実を確認すると私を開放しました。そしてすぐに、

大樹の中に戻ってしまいました。傷だらけになった私は、《癒し》で傷の治療をする事になりました。

ふと見ると、イネスはテントの側で気絶していました。あれだけ感じた森からの視線も、今は一切感じません。何で私達は気絶しなかったんだろう？心の準備が出来ていたからかな？

私の治療が終わりイネスが目を覚ました頃、ようやく応援が到着しました。その頃には、バイオハザード（物体Xの煙と悪臭）もすっかり消えて無くなっていました。

「あの沼がここまで変わるのか？」

過去にこの沼を見た事が有る人間は、エディも含み驚きを隠せないうです。私は手をたたきながら、声を上げました。

「皆さん静粛に。最終工程を始めます」

私の一言で、全員が真剣な表情になります。私はもう一度、昨日した水の自浄する力について説明しました。

「最終工程は、水に自浄の力を持たせる事です。風メイジは風で水を巻きあげ、再び沼へ落としてください。イメージは風と水を、均等に混ぜ合わせる感じですよ。それと絶対に、周りの木を傷つけないようにしてください。精霊を怒らせる事になりますので。水メイジは《凝縮》で、散ってしまった水を集めてください。それでは作業開始してください」

(残念ながら、水源が無ければ一時しのぎにしかありません。が、やらないより何倍もマシです)

風メイジと水メイジが作業開始した所で、私は父上に人骨の処理を相談する事にしました。

「父上。人骨の処理は如何しましょう？」

「一族の元へ返してやりたいが、千年以上昔の事でもはや不可能だ。それに全てバラバラになっていて、正確に1人分復元するのも至難だ。集団で埋葬して、碑をたてるしかないな」

「……それしかないか。」

「はい。では、応援部隊に持って帰ってもらいましょう」

「そうだな」

後は《錬金》した肥料を、どこに埋めるかですね……。つて、あれ？

「父上。《錬金》した肥料は如何したのですか？」

「知らぬぞ。ギルバートが片付けたのではないのか？」

私と父上は無くなった肥料を探して、目を走らせました。沼に落ちていれば、作業のやり直しにつながるからです。しかし、肥料は意外な場所にありました。……大樹の根元です。

(木の精霊って、意外にがめついのかな)

私と父上は見なかった事に、する事にしました。

……取りあえず沼の方も、そろそろ十分でしょう。

「そこまで結構です。終了してください」

私の言葉に、全員が私達の前に集合しました。私は父上に、目で終了の合図を送ります。

「応援部隊は人骨を、ドリユアス領まで届けてくれ。後に、碑を建て叩く。エディとイネスは残り、引き続き護衛任務に当たってくれ」

全員が敬礼すると、それぞれの任に当たって行く。人骨を運ぶ応援部隊が、この場を立つのを確認すると、こちらも本番です。

「木の精霊との交渉を始めるぞ」

父上の言葉に、再び木の精霊に呼び掛ける為に小島に移動します。

「木の精霊よ。我々は、貴方との交渉の場を望んでいます。どうか姿をお見せください」

今度はあっけなく、木の精霊は顕現しました。改めて見る木の精霊は、決まった形を持っている様で、その姿が揺らぐ事はありませんでした。

「単なる者よ。お前達は、同胞が追い詰めた我を助けた。よってその言葉が、真実であることを認めよう」

・・・良し。思わず心の中で、ガッツポーズをとってしまいました。しかしセリフからすると、私が思っていたより困窮していたのかな？

「しかしまだ足りぬ。水源を確保し、我に以前の環境を返せ・・・と、本来ならば言うところだが、重なりし者の知識では難しい事が分かっている。それに、重なりし者をこの世界に送り込んだのは、我にとっても無二の存在だ。邪険に扱う訳にも行かない」

(重なりし者って、ひよっとして私の事か？と言う事は、無二の存在とは大いなる意思の事か？)

「よって試練を課そうと思う」

(・・・雲行きが怪しくなってきたな)

「水の精霊と接触し、水源を確保する為の交渉を成功させよ」

・・・なんですと？

「待つてください木の精霊よ。居場所や接触方法は？」

「それも含めた試練だ」

父上が食らい下がりましたが、木の精霊は大樹の中に引っ込んでしまいました。

「・・・父上」

「分かっている。モンモランシ家に依頼するしかあるまい。新しい交渉役は王都にばかり詰めていて、領民の事は全く考えていないぞうだ。私の権限を使うとなると、事情を話さない訳にはいかない。そうなれば、欲の皮がつっぱた者達が交渉役に収まるうと、圧力をかけて来るのは必至だ。下手をすれば、木の精霊を怒らせて全て無駄になる」

しかし私は、父上の言葉に反対します。

「いえ……、モンモランシ伯も同様でしょう。今回の件は、高等法院や馬鹿貴族に気付かれる前に、片付けなければなりません。モンモランシ伯自身は大丈夫でも、周りが黙っていないはずです。特にモンモランシ家は、今混乱しています。身内の中に密告者や、成り変わるうとする物が出るかもしれませぬ」

私はここで、いったん言葉を切りました。正直躊躇いが有ったからです。

「……ここは、ディーネに協力してもらいましょう。ラグドリアン湖に行くとなると、父上の行動はすぐに外に知れ渡ります。もう引き返せない以上、時間との勝負と言ってしまっても良いでしょう」

私の意見に父上も、一瞬躊躇いましたが頷きました。

「……分かった。それで行こう」

私と父上はドリユアス家に、一度戻る事にしました。

ドリユアス家に戻ると、皆に帰還を喜ばれました。しかし私達は、それどころでは有りません。私はディーネを探して、目を巡らせません。そして……発見しました。

ディーネはアナスタシアと一緒に、帰還を喜ぶ人達の輪の外に居ました。私はディーネの側に走り寄ります。

「ギル……その……私は……」

私は何か言い淀むディーネの手を掴みます。ディーネが呆気にとられている内に、手を引き父上の元に戻ります。

「父上！！被疑者確保しました！！」

……すみません。ついノリで言ってしまった。

「うむ。良くやった。ディーネはイネスのヒポグリフに乗せる。エディは残って説明」

「えっ？ええ……！！」

今までの話を傍で聞いていたとはいえ、ここで行き成りお鉢が回って来るとは思っていなかったのでしょう。エディは面白い位慌てていました。

それに家族以外は、ディーネがモンモランシ家所縁の者である事は知りません。ディーネの事に関しては、全く話しについてこれていないはずです。

「話の流れだけシルフィアに説明しろ。それだけで十分だ。後はシ

ルファイアの指示に従え」

「!?!?・・・はい!?!」

父上の命令に落ち着きを取り戻したのか、エディは元気良く返事をしました。

「出発だ」

グリフォンとヒポグリフが、空に舞い上がりました。出発直後に後ろを確認しましたが、母上に引きずられるエディが見えました。

(ご愁傷様・・・でも、明日の我が身なんだよな)

途中でお昼休憩をはさみ、この時初めてディーネに事情を説明しました。ディーネは少しだけ怒りましたが、私達の説明ですぐに落ち着き納得してくれました。この時父上が《錬金》した瓶に、ディーネの血を少し分けてもらいました。

昼食後二時間位で、ラグドリアン湖に到着しました。ディーネとイネスには、畔で待機してもらいます。私と父上は《飛行》フライで、湖の違和感が有る場所を探します。ほどなくして、精霊が居ると思われる場所を発見しました。私は父上に支えてもらい、《飛行》を解除します。そして、ディーネの血を気泡で包み湖の上から落としました。精霊の居る場所に到達すると、気泡を解除しました。

すぐに水が輝き、水面が膨らんで水の精霊が出て来ました。不定形なその姿は、木の精霊とは対照的と言って良いでしょう。と言うより、決まった姿が在る木の精霊の方が精霊の中では、変わり者なのかもしれません。

「単なる者よ。私の知る体液を持つ貴様らは何者だ？」

「体液の持主はラグドリアン湖の畔に居ます。そちらで私達の話聞いていただきたい」

「良いだろう」

「こちらです」

私と父上は、水の精霊をディーネの元に案内しました。水の精霊はディーネの姿を確認すると、その姿を粘土の様に変え始めます。何度も変化を繰り返し、最終的には裸のディーネの姿になりました。そして今度は、表情を試し始めました。その姿を見ているディーネは、凄く複雑な表情をしていました。

ひとしきり試し終ると、水の精霊から声が響きました。

「話とはなんだ？単なる者よ」

「実は我々は、貴方をお願いが有ってこの場に来たのです」

水の精霊の言葉に、父上が返答をしました。続きを言おうとする父上を、私が待ったをかけました。

「父上。続きは私に任せてください」

父上は少しだけ考えて、すぐに場を私に譲ってくれました。

「水の精霊よ。言葉とは不便な物です。本当に伝えたい事の半分も、

伝えられない事がままあります。そこで、私の頭の中を覗いていた
だきたい」

「む」「えっ」「!!！」

父上・ディーネ・イネスの順に、それぞれの反応を見せました。
恐らくこの場に水の精霊がいなければ、三人とも猛反対をしたでし
よう。父上は私が木の精霊に、頭の中身を覗かせたのを知っていま
す。しかしそれは無実を証明する為で、仕方がない事だったと思っ
ていたはずです。

「良いのか？単なる者よ。単なる者は、我に頭の中を覗かれるのを、
恐れると思っていたが」

私が大きく頷くと、水の精霊は私を包み込むように水を展開しま
した。木の精霊を違って、痛みも苦しさも有りませんでした。少し
すると、水が私の周りから引いて行きました。服も濡れていません。

「重なりし者よ。木の精霊の救済に、協力する事を約束する」

水の精霊が開口一番了承した事に、私を含む全員の表情が明るく
なりました。しかし次の言葉に、全員の表情が凍りつきます。

「しかし、我の力だけでは救済は不可能だ」

「我々の力が必要なら、いくらでも協力します」

水の精霊の言葉に、父上が反射的に答えました。

「単なる者よ。助力を頼むのは土の精霊だ」

私達は、黙ってしまいました。木の精霊に水の精霊の話をされた時は、まだ当てが有りました。しかし、土の精霊は存在自体初めて聞きました。これを木の精霊の様に、居場所や接触方法まで自分たちで何とかしろと言われれば、手も足も出ません。戦々恐々としていましたが、水の精霊はその辺りの気遣いは有ったようです。

「土の精霊は単なる者達の言葉で、テール山脈と呼ばれる場所に居る。案内役として、我が分霊を預ける。接触も我が分霊が居れば可能だ」

父上が水の精霊の指示で新しく大瓶を《鍊金》すると、水精霊の一部が切り離され瓶の中に収まりました。瓶の中には、ミニチュア水精霊が居ます。水の精霊は分霊を渡した事により、自分はもう必要無いと思ったのか湖に帰ってしまいました。

「この時間なら、夕方までにテール山脈に入れる。上手くすれば、今日中に土の精霊と接触できるはずだ。イネスはディーネを連れて、伝令に走ってくれ。明日早朝に、護衛をよこしてくれ」

「しかし子爵。その間護衛が……」

「すまんが、今は一刻を争う」

「分かりました」

イネスは父上の命令に、しびしびと言った感じで頷きました。

「ディーネはシルフィアとアナスタシアに、事情を説明しておいてくれ」

ディーネは頷きましたが、こちらもしぶしぶと言った感じですよ。

「ギルバート急ぐぞ!!」

「はい!!父上!!」

私はミニチュア水精霊を受け取り、グリフォンに乗り込みました。大きすぎて所持している鞆に入らないので、《鍊金》で紐を作り身体にしつかりくり付けます。念の為、大瓶に《浮遊》をかけてから出発しました。

思ったよりいい風が吹いていた為、夕方にテール山脈に辿り着きました。ミニチュア水精霊の指示に従って、土の精霊が居る洞窟の前にグリフォンをおろしました。

「ここが土の精霊が居る洞窟か……」

父上の口から、声が漏れました。危険な魔物は居ないとの事なので、《灯り》ライトを使い洞窟の中に突入しました。意外に奥行きは無く、すぐに底に到着しました。

「ほう……。なつかしき客が来たものだ」

突然洞窟の中に声が響きました。

「土の精霊よ。最後に会ってから、数えるのも愚かしいほど月が交差したな。それより、この者の頭の中を覗くがよい。面白い物が見れるぞ」

「……へ？」

水の精霊（分霊）の言葉に、私はとっさに反応できませんでした。足元から岩の柱が、せりあがって来て私の体を挟んで固定します。そして動けない私の肩に、直径3 سانتほどのクリスタルが突き刺さりました。

「痛い！！イタツイタタツ！！痛いって！！」

父上に助けを求めようとしたが、愕然として固まっています。

「ほう。重なりし者よ。なかなか面白い頭の中身をしているな」

土の精霊が呟くと、クリスタルが引き抜かれ、身体を固定した岩の柱も無くなりました。私は急いで《癒し》を自分にかけました。

「頭の中身を覗くのに、何で突き刺されなければいけないんですか？」

私の涙声の質問に、土の精霊は答えてくれました。

「頭の中身を覗くには、その者の体内にある体液に触れなければならぬからだ」

私は土の精霊の答えに、ガックリと肩を落としてしまいました。父上が私の背中を、ポンポンと叩いてくれたのが余計悲しみを誘いました。

「木の精霊の救済は、我も協力する」

土の精霊が協力を約束してくれましたが、素直に喜べないのは何故なのでしょう？

「実行する」

土の精霊の呟きと共に、地面が激しく揺れ始めました。私と父上は立っている事が出来ずに、手をついてしまいました。洞窟崩落するかもと、本気で心配しましたが少しすると揺れが収まりました。

「水の精霊から木の精霊まで、地下水路を通した。後は水の精霊の仕事だ」

「では、こちらでも実行する」

水の精霊（分霊）が呟きます。地下水路に水を通すだけなら、終了まで私たちが知覚出来る事はないでしょう。・・・そう思っていました。

「ドカアアアアーーーーン!!!!!!」

突然外から爆音が響きました。私と父上は、急いで外に出ました。そこには、巨大な水柱が立っていたのです。位置的には、精霊の木が有る辺りでしょう。水柱は夕日のオレンジ色の光を受けて、見た目は結構綺麗でした。

「・・・力加減を誤った」

水の精霊（分霊）から、不吉な呟きが漏れました。父上はまたフリーズしています。

「木の精霊は、……大樹は無事なんですか？」

私は水の精霊（分霊）を問い詰めましたが、答えは返って来ませんでした。

「帰る。分霊を解くところの身体は、単なる者が”水の精霊の涙”と呼んでいる秘薬の材料になる。好きに使うがよい」

そう言うと、水の精霊は分霊を解除してしまいました。

（……逃げた）

「父上。今すぐ木の精霊の所に行きましょう」

「ダメだ。グリフォンでは、夜間の飛行は危険だ。それ以前に私のグリフォンは、今日はもう限界だろう。今日はここで一泊決定だ。最後に土の精霊に挨拶するぞ」

「……はい」（父上。冷静だ）

土の精霊に挨拶すると、何故か笑っていました。（こちらは笑い事じゃないんですけど）

木の精霊は無事ですよね？

第三十二話 木の精霊（後書き）

書きたい事書いていたらこうなった。なんでだろう？
解決まで一話分のばしました。ごめんなさい。

ちなみに水の精霊は、隠れドジっ子だと思っています。

原因

アンドバリの指輪盗られた時。

眠っていたのに状況把握は確りし過ぎている。

実は起きていた。（寝ぼけてた？）

人が来たのをほっといたら、いつの間にか大切な指輪が無くなって
いた。

おのれ単なる者め！！

うんどジっ子だ。（作者見解）

ちなみに、すごくエッチな展開は皆様の有りでしょうか？

感想お待ちしております。

第三十三話 精霊開合

おはようございます。ギルバートです。土の精霊の好意で、洞窟の中で眠らせていただきました。洞窟の中は精霊の加護でもついているのか、目が覚めると疲れも完全に抜け頭がスッキリしていました。

私達は土の精霊に挨拶とお礼を言って、その場を辞しました。その際に土の精霊が顕現したのは、驚きました。

しかし、驚いてばかりもいられません。急いで木の精霊の安否を確認しなければならぬからです。

私と父上はグリフォンに乗り、精霊の大樹が有る場所に向かいます。グリフォンの調子も良く、昨日よりも早いスピードで飛んでくれました。(グリフォンも洞窟で寝てたからな。やっぱり、土の精霊の加護が有ったのかな?)

水の精霊の態度に大きな不安が有りましたが、大樹は無事でした。それよりも大樹が有る場所は、昨日とは印象がガラリと変わっていました。一番の違いは、沼の水嵩でしょうか? いや、もう沼という表現は正しく無いでしょう。この場所は湖と言った方が相応しいです。一月か二月もすれば、湖岸よりの浅い所は沈水植物で一杯になっているでしょう。大樹も昨日一昨日とは印象が変わり、生命力に満ち溢れていました。昨日まで枯れかけていたのが、嘘の様です。

しかし困った事に、湖の水嵩が増した事により、グリフォンを降ろす場所が無くなっていました。如何するか思索していると、ヒポグリフが二頭飛んでくるのが見えました。乗っているのは、エデ

イとイネスでした。

「良かった。テール山脈に行く前にこちらによって。行き違いになる所でした」

「〴〵無事で何よりです」

エディが判断の正しかった事に安堵し、イネスは私達の無事だった事に安堵したようです。しかしこうなると、いよいよ騎獣を降ろす場所に困ってしまいます。すると大樹が、突然ざわざわと葉鳴りの音を立てました。私達は当然のように周囲を警戒します。すると突然エディが声を上げました。

「アズロツク様！！あれを」

エディが湖の西側を指さしました。先程まで水際ぎりぎりまであった木々の一画が、奇麗に無くなっていました。騎獣三体を降ろすには、十分すぎるほどの広さです。恐らく木の精霊は「騎獣を降ろして早く来い」と、言っているのでしょうか。

「あの場所に騎獣を降ろすぞ」

父上の号令で三頭の騎獣が、指示された場所に降り立ちます。騎獣を降ろしてから一番最初に確認されたのが、昨日の地震と巨大な水柱についてでした。父上はエディとイネスに、事の詳細を手短かに話しています。エディとイネスが頷くのを確認すると、《飛行》フライで小島まで飛びました。

（あれ？昨日あれだけあった肥料が無いですね。どっという事でしょう？いくなんでも、吸収するには早すぎるような……。まあ、

精霊は我々人間の常識が通用しませんから。気にするだけ損ねすね)

小島に渡ると、父上が大樹に向かってに声をかけます。

「木の精霊よ。我々は試練を果たしました。約束通り我々の話し合いに応じてほしい」

今回も木の精霊は、すぐに姿を現してくれました。

「単なる者よ。よくぞ我が試練を果たした。約束通り、話し合いに応じよう。……その前に水の精霊には、どのように協力を頼んだのだ？」

木の精霊の質問に、父上が私を見ます。私は父上の代わりに答えました。

「水の精霊に、頭の中を覗いてもらいました」

「へっ?」

後ろからエディの声が聞こえましたが、兎に角今は無視です。

「……暫し待て」

木の精霊に言われたので待つと、すぐ横の湖の水面が光り、ラグドリアン湖で見た水の精霊が現れました。木の精霊と水の精霊に、これと言ったやり取りが有る様には見えませんでした。しかし二柱の精霊に、何となくですが険悪な雰囲気がある様な気がします。

(ひょっとして肥料は、吸収したのではなく水に流されたのでしょ

うか？)

私がそんな事を考えていると、再び木の精霊から質問が飛んで来ました。

「重なりし者よ。水柱が上がった時、水の精霊が何か言つてなかったか？」

何故か突然矛先が私に向きました。ここであの時の水の精霊の言葉と言つたら、取り返しのつかない事になりそうな気がします。

「……いえ、それは」

私は思わず言い淀んでしまいました。そんな私に埒が明かないと感じたのか、木の精霊は昨日と同じように、蔓を私の体に巻きつけました。そして棘が刺さり、私は悲鳴を上げます。

「ほう……。「力加減を誤つた」か」

また頭の中を覗かれたようです。木の精霊と水の精霊の雰囲気、更に険悪な物になりました。無力な人間である私達四人は、この状況にガタガタと震えている事しか出来ませんでした。て言うか、覗き終わったのなら放してほしい。痛いから。

そこに追い打ちをかける様に、突然地震が起きました。私達は地面を這う様な姿勢で、揺れがおさまるまで耐える事しか出来ませんでした。(巻き付いた蔓の棘が、物凄く痛いです)そして卵が腐った様な臭いが、その場に立ち込めます。私達が状況を把握できずにオロオロしていると、湖の南側の畔にある木が数本燃え上がりました。炎は木を一瞬で燃やしつくし、空中で一つの塊になるところ

らへ飛んで来ました。

「何の用だ？火の精霊よ」

「貴様など呼んだ覚えは無いぞ」

水の精霊は冷静に問いかけましたが、木の精霊は目の前で木を燃やされた所為か、敵対的な声を上げました。

「土の精霊に呼ばれた」

火の精霊は、水の精霊の質問に淡々と答えました。木の精霊の反応は、奇麗さっぱり流したようです。・・・火の精霊なのに。

無視された木の精霊は、険悪度がまた上がりました。今にも精霊大戦争が勃発しそうな勢いです。

この状況に、待ったをかける存在が現れました。私達のすぐそばの地面が突然盛り上がり、人に近い形になりました。洞窟の時とは微妙に姿が違いますが、間違いなく土の精霊です。

「火の精霊は、争わせる為に呼んだ訳ではないぞ」

土の精霊の仲裁に、木の精霊は険悪な雰囲気を散らしました。私は心の中で、胸をなでおろしました。

しかし現状は凄い事になっています。木・水・土・火の4柱もの精霊が、この場に集っているのです。ひよつとしたら、一生自慢できるとは思いませんでしょうか？余裕が出て来た私は、現状がどれだけ凄惨なことになっているか考えていました。

(これで風の精霊も居れば、地水火風の四大属性が全部そろうな)

ファンタジーに多少の造詣が有ったマジ知識の所為か、私がそう思ってしまったのは悪く無いと思いたいです。

「重なりし者よ。風の精霊が望みなら、呼び出してやろう」

水の精霊が、突然そんな事を口走りました。私の口から「へ？」と言葉が漏れると同時に、空気が一点に集まる様に流れます。そこのは水蒸気か何らかの煙で、薄らと白く色がついた透明な人型が居ました。……身長20センチ位の。

(他の精霊と比べて、ちんまいな……)

他の精霊は2〜3メートル程の身長になるので、風の精霊だけ極端に小さいのです。

「ちんまいとは無礼だな。重なりし者よ」

この瞬間私は、自分の血の気が引くのがハッキリと自覚できました。

(私と繋がっているのは木の精霊だけじゃないのか？そう言えば、水の精霊も……)

「重なりし者よ。貴様は我を通し、この場の全ての精霊と繋がっている」

木の精霊の答えに、私は固まってしまいました。しかし固まっていて

は、事態を收拾できません。

「ちんまいのは事実だろう」

しかも、水の精霊が追い打ちをかけてくれました。そんな水の精霊に、風の精霊が言い返します。

「黙れうっかり精霊」

「……ほう。誰がうっかりだと？」

今度は水の精霊と風の精霊が、険悪な雰囲気を作り出します。しかし今度も、土の精霊が二柱の精霊の仲裁に入りました。そんな他の精霊など眼中にないと言わんばかりに、木の精霊は私に説明を続けます。

「今我らは、単なる者の言葉で話しているのではない。我と繋がる事により、我らのやり取りを一時的に、単なる者の言葉で認識しているのだ」

私は血がにじむ自分の体と、身体に撒きつく棘付きの蔓を見ました。

（木の精霊を中継した、有線テレパスみたいな物か？）

私がパツと思いついた事を、木の精霊は肯定しました。父上達を見ると、未だガタガタ震えています。（本当に聞こえていない見たいです）

「父上。精霊達は、私達に害意を持っていません。安心してくださ

い。それから・・・」

「（重なりし者よ。”ゼロの使い魔”と”大いなる意思”について話したい）」

私は木の精霊から伝わって来た意思に、父上に向けていた視線を木の精霊に戻しました。見ると精霊たちの意識は、私に集中しているようです。

「少しの間だけ、私に任せてください」

父上は先程まで一緒に震えていた私の変化に、何か感じ取ったようです。一瞬で威厳を取り戻すと、大きく頷いてくれました。そして未だに震えているエディとイネスを、落ち着かせようと動き出しました。

「（重なりし者の記憶と知識は見た。だが、我々は重なりし者の意志を聞きたい）」

5柱の精霊の意思が、統一された思いが声となって、私の中に流れ込んで来ました。

（私の目的は、大いなる意思の言葉である「この滅びゆく世界に、運命を変える一つの因子たれ」を、実行する事です。私は世界にとって、良い因子になりたいと思っています。しかし私は、英雄である必要は有りません。そんな物は、サイトやルイズ任せておけば良いんです。私は二人の足を引っ張る者を排除する事で、私は良き因子となれると考えています）

私は嘘偽りない本心を、精霊の晒しました。私の中のありっただけ

の意志を込めて……。

「（ならば我らは、精霊としての矜持が許す限り、重なりし者に協力しよう）」

予想以上に精霊達が協力的な事に、私は疑問を感じました。しかしその答えは、すぐに帰ってきました。

「（大隆起は我々にとっても、歓迎できる事ではない。またあの戦いの再現は、絶対に有ってはならない）」

（あの戦い？）

「（風の精霊を消滅させてた戦いだ。今の風の精霊は、その後で再生した存在だ）」

（精霊を消滅させた？）

「（そうだ。重なりし者よ。あの戦いは風の精霊を消滅させただけでなく、東の地を不毛な砂漠へと変えた）」

（不毛な砂漠？……サハラ的事か？……精霊よ。その話をもっと詳しく、教えてくれませんか？）

「（残念だが、我々にも詳しい事は分からない。分かっているのは、その地で戦いが起こり風の精霊を含む、その地に存在した全ての精霊が消滅した。そして精霊の消滅と共に、肥沃な土地が砂漠と化した事しか我々にも分からない）」

この情報は、原作にもまだ載っていない新情報です。大いなる意

思が言った”滅び”の、手がかりになるかもしれません。しかしそれよりも重要な情報は、風の精霊が一度消滅した事です。もしかして地下に風石が溜まっている原因って……。

(精霊達よ。私の質問に答えてほしい)

「(なんだ?)」

(地下に風石が溜まる原因は、風の精霊の消滅に関係ありますか?)

「(然り。風の精霊に集まるべき力が、地下に溜まり風石となっている)」

……確定。しかしそれならば、土の精霊の力を借りれば、どうにかなるのではないだろうか?

(風石が元は風の精霊の力なら、風の精霊は風石を分解吸収できますか?)

「(可能だ)」

(土の精霊が風石の鉱脈まで穴を開け、風の精霊が全て分解吸収する事は出来ますか?)

「(不可能だ。風石の鉱脈付近は、土の精霊の力が届かん。鉱脈寸前で穴が止まり、そこからでは風の精霊は風石を吸収できん)」

(ならばその部分だけでも、ジャイアントモール等の地中生物に力を借りられませんか?運が良ければ、力を借りなくても亀裂等から鉱脈に侵入できるかもしれませんし)

「（・・・可能だ。本来ならば自然の摂理に反する事だが、放っておけば更なる危機を招く事になる。実行する事を約束する）」

（ありがとうございます）

注 これより2年ほど、各地で地震が相次ぎます。ロマリアが地震の原因究明に、とんでも無い額の賞金を懸けていましたが、私は知りません。

まさかここで、大隆起の問題が解決するとは思いませんでした。これでロマリア組の最大の大義名分を、無効化出来た事になります。棚から牡丹餅とはいえ、エルフとの最大の戦争理由を潰す事が出来たのは大きいです。しかし油断は出来ませんね。ジュリオはともかく、ヴィットーリオはいまいち信用できないイメージがあります。

そうこうしている内に、父上達がそろそろ交渉を始めたいと言って来ました。

先ず最初に出た交渉内容は、森の拡大を止めてほしいと言う事でした。これに木の精霊は、条件付きで了承しました。一つ目は、今後一切精霊に攻撃しない事。二つ目は、ドリュアス家が交渉役になる事。どちらもドリュアス家にとって、願っても無い話なので即座に了承しました。

次の交渉内容は、森の開拓についてです。これが荒れました。木の精霊が他の人間が信用できないと言い、ドリュアス家以外の開拓を拒否したのです。これには父上も頭を抱えてしまいました。バカ貴族の嫉妬や妬みを、もろに受ける立ち位置だからです。しかし結

果的に、それは杞憂・・・もとい、それ以前の問題でした。森の中の幻獣・魔獣・亜人に対して、何ら対策が無いからです。

要するに森が広がらなくなっただけで、以前と何も変わらないのです。楽になつたと言え、これまで程背中を気にしなくて良くなつた事くらいです。この状況はドリユアス家にとつて、非常に不味いです。森の無茶な開発を押しつけられれば、財政破綻でドリユアス家が潰れます。

(何か対策を考えなければいけません。父上も頭抱えて、唸り始めてしまいました)

私が思案を始めると、精霊達が有線テレパスで私に話しかけて来ました。

「(重なりし者は、我らにどのような加護を望むのだ?)」

これは先程までの統一された声ではなく、土の精霊単独の声でした。

(加護?)

「(我がドリアド家に与えたのは、豊作の加護だった)」

私の疑問に木の精霊が答えてくれました。

(そうですね・・・。木の精霊には、引き続き豊作の加護がほしいです。土の精霊にも、同じく豊作の加護が欲しいです。やっぱり食は大切です。水の精霊には、治水面の加護が欲しいです。風の精霊には・・・、良い風を提供して欲しいです。風車とか)

「（風車？）」

風の精霊は、私の頭の中から風車の知識を漁ると、その後何故か機嫌が良かったです。しかしここで問題です。火の精霊には、どのような加護を頼めば良いのでしょうか？

「（我には、どのような加護を望むのだ？）」

何故だろう？火の精霊が加護の内容を、凄く楽しみにしているのが分かる。とてもいらぬとは言えない。思いつくのが、鍛冶や剣等の兵器関連ばかりだしな。エゴかも知れませんが、精霊にはそんな事させたくありません。

（……温泉とか？）

私が絞り出した案は、温泉でした。怒られるかな？

「（温泉？それはどのような兵器なのだ？）」

いや兵器じゃありませんから。と言うか、また人の頭の中漁るのね。

「（素晴らしい。私の力を、癒しの為に使うとは……）」

（喜んでいただき光栄です）

「（その温泉とやら。我が全力を持って、答える事にしよう。水の精霊と土の精霊も、是非協力を頼む）」

なんか燃えています。火の精霊だけに。

そうこうしている内に、頭を抱えていた父上が復活し領に帰る事になりました。木の精霊が蔓を外す際に、私の懐に道具袋をねじ込んで来ました。中身については、最後の瞬間に頭の中に叩き込まれました。中身は貴重なマジックアイテムです。

それよりも、この財政破綻のピンチをどう切り抜けるかですね。

第三十三話 精霊開合（後書き）

マジックアイテムの内容は、次話以降をお楽しみに。

次話はバカ貴族との対決を予定しています。

今回から今後の原作は基本的に無視します。

（回収可能な物は回収するかも？）

感想をお待ちしております。

第三十四話 問題ばかり！！ホントどうしよう？

こんにちは。ギルバートです。精霊との交渉を終え、領地に帰ってきました。帰って来て早々に母上に殺されかけましたが、父上と二人がかりでなんとか抑えました。そして父上が、ドリユアス家緊急家族会議の開催を宣言しました。

精霊との交渉は上手く行きました。……いえ、上手く行きすぎたと言って良いでしょう。その所為で別の問題……、それも致命的な問題が出てきました。

……ドリユアス家以外の開拓を拒否する。

これはドリユアス家が、森全てを領地とする事を意味します。これを国王に報告すれば、間違いなく開拓を命令されるでしょう。しかし問題は、幻獣・魔獣・亜人達です。自分達の住処が奪われる事になるので、全力で抵抗して来るでしょう。そんな状況で、のんびり開拓など出来ません。それでも無理に開拓を推し進めれば、住処を追われた者達は、周辺の領地を荒らし始めるでしょう。そうなること、ドリユアス家の責任問題になります。

ハッキリ言つて、誰もこんな森を開拓したいとは思いません。現状で唯一の救いと言え、バカ貴族や高等法院の奴らに嫉妬や妬みを軽減できる事くらいです。

ドリユアス家緊急家族会議の会場に向かう足で、足りない物を頭の中で思い付く限りあげて見ました。

・資金

圧倒的に足りない。兎に角足りない。対策として十分な切り札がありませんが、目立つ事は出来るだけ避けたい。

・人材

先ず開拓する為に木を伐採する人材。幻獣・魔獣・亜人に対する警戒に必要な人材。開拓した土地を有効利用してもらう人材。・・・
・外部から人間を招き入れるとなると、それらを教育する人材。それに治安の問題も出るので、警備の為の人材。マジ商会の手も足りなくなる。

・騎獣

初めの内は問題ないが、開拓が進むと警備する面積が増えるので必然的に足りなくなる。バカ貴族が起こしたバンザイアタック（以前魔の森に仕掛けた自棄攻撃）の所為で、国内の騎獣が不足し補充もままならないでしょう。逆に下手をすれば、国に騎獣を取り上げられかねない。

・物資

確保した人材が、安心して生活する為の家用建材と食糧等の生活物資。

パツと思いついただけでも、これだけの物が足りません。焼き畑が可能なら一気に楽になるのですが、確実に木の精霊から^{ひんがし}響^{ひび}響^びを買います。それはドリユアス家にとって、絶対に避けねばなりません。私は思わず立ち止り、額に手を当ててしまいました。

「ギル。如何したのですか？」

私に話しかけて来たのはディーネでした。私の様子に本気で心配になったのか、振り向いた私の額に手を当てて来ました。

「熱は無い様ですね」

「家の事で困った事になっているからで、体調が悪い訳では有りません」

心配してくれるのは嬉しいですが、今心配しなければならぬのはドリユアス家の今後です。この話を聞いたら、ディーネも似たような状態になるのでしょうか？

「取りあえず部屋に入りましょう。詳しい話は中めますので」

ディーネに入室を促し応じてもらうと、私も後に続きます。部屋の中には、既に全員そろっていました。母上の機嫌がレッドゾーンに突入しているので、今すぐ逃げ出したい気分ですが……。

私とディーネが席に着くと、父上がドリユアス家緊急家族会議の開催を宣言します。そして新ためて今回の事の顛末を、父上が全員に説明し始めました。私はその時間を使い、以前寺子屋用に作った黒板に、ドリユアス家が単独で開拓を行う場合の問題点を記入していきます。

（せっかく作った黒板とチョークなのに、全然売れなかったのは何だろうか？ドリユアス領内では、物凄い好評なのに……。と言っても、数は出なかつたけど）

私は今の状況に、現実逃避をしながらチョークを走らせます。私書き込み終わった頃には、父上の説明も終盤でした。私は席に戻って、父上の説明が終わるのを待ちます。

父上は最後に、居残りをした三人に頭を下げ謝ります。私も当然父上に続き謝りました。母上は私達が謝った事で、不機嫌オーラを引っ込めてくれました。（助かった）

「ドリュアス家の今後についてだが、精霊との約束で交渉役を降りる訳にはいかない。また、精霊を説得するのも不可能だろう。当然国に精霊の事を秘密にする訳にもいかない。よって、如何考えてもドリュアス家単独で、森を開拓しなければならぬ。本来なら少しずつ開拓するのだが、一部貴族（馬鹿貴族と高等法院）が王国の財政状況を理由に、無理な開拓を強要してくるだろう。だからと言って、下手な所から融資を受ければ後々食い物にされる。よってどう対策をとるか、この場で話し合いたいと思う」

父上の宣言で、全員黙ってしまいました。いきなり言われても、良い案等出るはずがないのです。それでも全員で妙案を出そうと必死に考えました。

ぼつぼつと出て来た案から利点と欠点を抜き出し、問題点を検討していきます。

人材に関しては、結局良い案は出ませんでした。現ドリュアス領で優秀な者に教師役をやらせ、少しでも早く優秀な人材を確保するしかないとされました。騎獣に関しても同様に良い案が出ず、少しずつ増やすしかありません。物資に関しても、お金を払って買い集めるしかないとされました。まともにお金を借りられそうな所も、ヴァリエール公爵家だけの様です。

ハッキリ言って、有効な案は一切出なかったと言って良いでしょう。どんよりとした空気が、その場を支配する事になります。

「せめて安全に資金を借りられる相手が、もう一人居れば……」
資金面の不安から、父上がそう呟きました。

「優秀な人材がどっかに余っていないのかな？」

私が続けて有り得ない事を呟きました。

「どこかに、騎獣にできる幻獣や魔獣が居ないのかな？」

「そうですね。森に居る幻獣や魔獣を、騎獣に出来れば良いのですが……」

「野生の幻獣や魔獣は、人を恐れ攻撃的になるからまず無理でしょう」

アナスタシアの呟きにディーネが答え、それを母上が沈んだ声で否定しました。しかし私は、アナスタシアとディーネが話した内容に、ピンと感じる物が有りました。

「父上。木の精霊に仲介を頼んで、森の幻獣や魔獣に騎獣ならいか聞いてみては？」

「そうだな。ダメもとで頼んでみるか。皆はその間に、対策案をもう一度考えて見てくれ。遅くとも明日朝一に、王都に報告に向かわなければならぬ」

私はこの時、5〜6頭も騎獣になってくれれば御の字ぐらいに思っていました。準備中に父上とも話しましたが、父上は「せめて10頭は欲しい」と言っていました。現在ドリユアス領で確保してい

る騎獣は、合計で38頭です。この数は一領主としては、規格外に多いです。（普通は居ても4〜5頭くらい）魔の森調査官の名は伊達では無いのです。

早めの昼食を食べ、もう一度木の精霊の元へ向かいます。先刻と同じ場所にグリフォンを降ろし、《飛行》フライで大樹の前に行きます。

「木の精霊よ。頼みが有って来た。姿を見せてくれ」

父上の声に木の精霊は、すぐに応えてくれました。

「何の用だ。単なる者よ」

「現在森に住んでいる、幻獣や魔獣達についてお願いがあります」

精霊からの返事は有りませんでした。父上はそのまま言葉を続けました。

「現在我々は、森の開拓を許可していただいています。しかしそれは、我々が住める地を増やすと同時に、幻獣や魔獣達が住める地を減らす事になります。そこで、我々人間と共に生きても良いと考える者達に、人間の世界へ来てほしいのです。住む場所と食事は、ドリュアス家の名において保証します。我々の意思を、幻獣や魔獣達に伝えてもらえませんか？」

父上が喋り終ると、木の精霊は少し間をおいて返事をしました。

「よかろう。森に居る者達に、単なる者の意思を伝えよう」

「「ありがとうございます」

私と父上は、同時に感謝の言葉を口にしました。精霊が黙ってしまっただので、暫く待っていると葉鳴りの音が鳴り始めました。そして更に暫く待つと、木の精霊が口を開きました。

「共に行きたいと言う者達が現れたぞ」

私と父上は同時に「「おおっ」「」と、声を上げてしまいました。父上が興奮した様に口を開きます。

「それで、その者達は……」

「単なる者がユニコーンと呼ぶ者達だ。単なる者に追われて、我が森に逃げ込んできた。番で仔がいる」

(番で仔が居ると言う事は、少なくとも三頭のユニコーン!?)

「父上!!!ユニコーンならば……」

「ああ。ドリュアス家より王家の方が、聖獣として大切にしてもらえるだろう」

ユニコーンは聖獣にして希少である為、王家の覚えもこの上なく良いです。角を狙う者達も、相手が王家なら手が出せないでしょう。そう言った意味では、ドリュアス家では不安が有ります。警備に人を割く訳には行きませんし。

色めき立つ私達をよそに、木の精霊は続けます。

「ペガサスも了承したな。以前一頭だけ傷つき森に迷い込んで来た者だ」

（ペガサス！？希少度で言えばユニコーンより上ですね。お金になるかと言われれば、ユニコーンより圧倒的に劣ります（ユニコーンの角が原因）が、それでもかなりの額になります。ユニコーン（殺して角だけ奪える）と違って傷つければ値が落ちるので、わざわざ警備を厚くしなくても現状の警備だけで十分ですね）

「単なる者が乗って来た者達も、了承している」

私が考え事をしている間に、木の精霊は話を先に進めていました。

「騎獣だった者達ですか？種類と数は？」

父上が精霊に聞き返しました。

「グリフォンが8、ヒポグリフが11、風竜が12だ」

予想より遥かに多いです。この数では、新しく獣舎を建てなければいけません。私と父上は、嬉しい悲鳴が上がるのを必死でこらえます。しかし、ここで終わりでは有りませんでした。

「そして、我を古くから守護してきたマンティコア達」

ここで私と父上の動きが止まりました。恐る恐る父上とアイコンタクトをとりました。

（マンティコアって、森に対応しているから凄い数が居るんじゃない）
BYギルバート

(10や20位なら何とかなる。大丈夫だ・・・たぶん) By父
しかしそんな淡い期待は、跡形も無く吹き飛びました。

「人の所へ行くのは178か、7ほど我が守護に残ってくれるのか」
(ひゃくななじゅうはち!?)

「ワイバーンは93か。全て人の所に渡るのだな」

(ワイバーンが93頭?合計で300頭超えるじゃないですか!!
父上!!不味いです) Byギルバート

「それにガルムが89で全部だな」

(ガルムまで居るのか!?!含めると400近いぞ!!如何する?ギルバート。ガルム等の一部断るか?) By父

(ここで断れば、断った者達は全て敵になります。下手に断れませ
ん) Byギルバート

ここで木の精霊の止めの一言が飛んで来ました。

「単なる者よ。我が森に住む者達への気遣い感謝する」

(父上!!完璧に断れない状況が出来上がっています!!ここは受けるしかありません。時間差をつけて、順次受け入れる形にしまし
よう) Byギルバート

(分かった) B y 父

「木の精霊よ。ありがとうございます。しかしそれほどの数となると、我々にも準備が必要です。準備ができ次第、順次受け入れる形でよろしいでしょうか？」

「かまわぬ。だが、単なる者が乗って来た者も含めマンティコア達やワイバーン達も、以前単なる者に仕えていた者も居て、早期の受け入れを望んでいる。その者達から話が広がっていて、他の者達も速い受け入れを望んでいる」

なんか、嫌な汗が出て来ましたよ？

「よつて、その者達の意も考え期限を設ける。月があと12回交差するまでに、この者達を受け入れよ」

「一年!?!」

私達が期限の引き延ばしを求めようとした所で、木の精霊は大樹に引っ込んでしまいました。

(反論は受け付けません。と言う事か?)

「父上。どうしましょう?」

私が声をかけると、父上は頭を抱えてしまいました。

対策を練る為に、私達は急いで領に帰りました。

急いで母上にこの事を報告すると……。

ユニコーンで驚き、ペガサスで喜び、グリフォン・ヒポグリフ・風竜で父上に抱きつこうとし、マンティコアで固まり、ワイバーンで崩れ、ガルムで父上を殴っていました。直後に私も殴られました。その時のセリフが、「上手く行きすぎよ！！加減しなさい」でした。そんな事言われても……。期限の事を言ったら、父上共々もう一発殴られました。

そしていよいよ本日2回目の、ドリユアス家緊急家族会議です。母上・ディーネ・アナスタシアの視線が、やたら冷たく突き刺さります。

「まったく。あなた達は、問題を大きくしてどうするの？」

母上のお叱りに、私と父上は縮こまることしかできませんでした。

騎獣不足は解決しましたが、資金・人材面で問題を大きくし新たに土地の問題も追加されました。そう、騎獣舎を設置する土地が足りないのです。

そこから家族会議が始まりましたが、やはり良い案は出ませんでした。

「人材も致命的だけど、資金・物資・土地は問題よね。今回の褒美で、国王から領地を貰えないかしら？」と言っても、近くに在るのはお金がかかる王領ばかり。ドリユアス領の北は、まず無理だろうし」

母上が呟きますが、答える気力が有る者が居ません。私は地図を

眺めながら溜息を吐きます。

(森がドリユアス領にくみこまれば、海に隣接するのか。以前望んでいた塩作りができるな……)

私は既に、現実逃避を始めていました。

(森切り開くのは大変だから、森に寸断されて孤立した王領を貰ってここで塩作りだな……。そうなると最初ガリア経由か。海沿いに街道作らなきゃいけない……。って、貰える訳ない土地の事なんかどうで……。!?いや、上手く立ち回れば貰える。それなら……)

「父上！！部屋から物を取ってきます」

「待て、ギルバート。今は……」

私は父上達の制止を振り切り、自分の部屋へ戻ります。嚴重にしまっておいた大きな箱を取り出し、抱えると父上達の元へ戻ります。私に注意しようとする父上と母上を無視して、私は箱の中身を全員に見せました。

「これを売り払えば、当面の資金はなんとかなると思います」

「何を言っているの？こんなガラス玉で、お金になる訳ないじゃ……」

母上が怒り口を開きましたが、言い切る前に私が口を開きます。

「ダイヤモンドです。私が《鍊金》で作りました」

「へっ?」「嘘?」「馬鹿な!」「冗談?」

母上・ディーネ・父上・アナスタシアの順で、面白い声と顔を披露してくれました。

「父上。母上。《探知》ディテクト・マジック使ってください」

父上と母上が《探知》を使うと、父上が頭を抱え母上はグツタリと椅子に座り込んでしまいました。父上の口から、絞り出すような一言が出ます。

「本物だ……。なんと非常識な」

箱の中には、大人の握り拳大のダイヤが二つ在りました。カットが分からないので、形こそ球状ですが。売れば天文学的な値段になるでしょう。

「本来なら、絶対に表に出したくないのですが緊急時です。仕方ありません。お金を借りられれば、一番良いのですが……。てっ、待てよ。これを質にする事により、低い利子でしかも内密にお金借りられませんか?」

「可能だろう。しかし、これだけの品となるとトリステイン王国関係では、ヴァリエール公爵かクルデンホルフ大公くらいだぞ」

私の質問に、父上がかろうじて答えてくれました。

「では、その二家からこれを質にして資金を絞り出してください。当面の資金はこれで解決ですが、問題はこれからの収入です。そし

と同時に、土地の問題も解決します」

私は王国から森に寸断された王領を指さし、言葉を続けます。

「どうにかしてこの領を国王より賜り、マジ知識による新しい海水塩の製塩を行います。マジの世界から換算すると、4アルパンで一日に2万リーブルの塩を生産できます。最もハルケギニアでは、多少効率が落ちると思いますが……」

父上達がポカンとしていますが続けます。

「この領を手に入れる方法ですが……」

私は自分が考えた方法を、父上と母上に説明しました。しかし父上と母上は、難しい顔をしました。

「いや、ここはちょっと無理がある。ここをもっとこう……。シルフィアはどう思う？」

「もっと徹底的にやった方が良いと思うわ。だからここは……ヴァリエール公爵に、ちょっと協力してもらえないかしら」

私・父上・母上の3人で、領地奪取作戦を練り始めました。ディーンとアナスタシアは、議題について行けず口をへの字にしています。

．．．．問題はバカ貴族や高等法院が、私達の作戦にはまってく
れるかどうかですね。

第三十四話 問題ばかり!!! ホントどうしよう?。(後書き)

今回むちゃくちゃ難産でした。

申し訳ないと思いますが、なんか話数だけ進んでいます。

ストーリーがあまりすまないのは、文字数甘くしたせいでしょうか?
その分更新頻度でがんばればよいか?

変な所があれば、どんどん突っ込みお願いします。

感想お待ちしております。

第三十五話 タヌキとキツネを化かせ

こんにちは。ギルバートです。ただ今王都の魅惑の妖精亭に居ます。今頃父上はバカ貴族や高等法院の連中相手に、舌戦を繰り広げているでしょう。父上の活躍を目に出来ないのは、ちょっと惜しい気がします。……まあ、焼肉でも食べてゆっくり待っています。

実は私もサボっていた訳では有りません。昨日の内にドリユアス領を出発して、王都に入り昨晩の内にヴァリエール公爵へ根回していたのです。お陰さまで、起きてから二時間も経っていません。

それよりも根回しの際に、公爵から無視できない話を聞きました。その時の事を思い出し、思わず大きなため息をついてしまいます。

「どーしたの？ため息なんかついて」

話しかけて来たのは、追加の肉を持って来たジェシカでした。私は「ちよつとね……」と、曖昧な返事をしながらチップとしてドニエ銅貨を数枚渡します。私が口に出せない事を悟ったのか、ジェシカは礼を言々と店の奥に引っ込んでしまいました。

現在魅惑の妖精亭は、改装中で店を開けていない状態です。と言っても、私が食事をしている事から分かると思いますが、内装工事は既に終了し残りは一部の外装工事のみです。スカロン店長はデミグラスソースの完成と、人がそろつまで店を開けない心算の様なので、開店はもう少し先になるようです。店に出入りしているのは、私を含むマジ商会関係者と工事を請け負う大工達です。

大工達はスカロン店長からの差し入れを渡されているので、魅惑の妖精亭の味を知り開店が楽しみだと話していました。この調子なら、開店してすぐに繁盛店に返り咲けるでしょう。

私はそんな事を考えてから、追加で来た肉を焼き始めました。若い大工が羨ましそうな視線を向けて来ましたが、気にせず肉を焼き口に運びます。

（家に帰ったら、また家族会議ですね……。あつ、このたれ美味しい）

---王宮---SIDE アズロック

思えば良くこの様な所まで来たものだと思う。大貴族とは言え私生児の子供である私は、本来爵位など賜れる人間ではないのだ。謁見の間を目の前にして、柄にもなく緊張が走る。だがこれから挑むのは、伸るか反るかの大勝負だ。気負って失敗しましたでは、洒落にならない。

指示に従い謁見の間に入ると、正面に玉座に腰掛ける国王陛下、右側にヴァリエール公爵が立っていて、左側に怨敵リッシュモンが居る。他にも左右に分かれ二十人近い有力貴族と近衛兵が居た。

私は陛下に臣下の礼をとると、一呼吸置いて報告を始める。

「この度、魔の森の調査が完了いたしました」

私の一言に、謁見の間にざわめきが起こった。

「ドリュアス子爵よ！！それは誠か！？」

国王陛下が思わず立ち上がり、私に聞いて来る。私は「はい」と、力強く頷いた。

「して、魔の森が広がる原因は何だったのだ？」

「陛下。まずはこちらを……」

私はドライアド家の人間が書いた手記を提出した。内政官を通して受け取った国王が、手記に一通り目を通すと同じ内政官に読み上げるように指示した。

内政官が手記を読み終わると、謁見の間は大きなざわめきに包まれた。私に敵意を多分に含んだ視線が、多く向けられる。手記の内容は、トリステインの上級貴族を批判する様な文脈も含まれていた。これは仕方がないだろう。

「その手記を発見した時に、先ず偽物であると疑いました。しかし残念ながら、偽物である根拠も無いのです。むしろ状況は、本物である可能性が高いと判断せざるえませんでした。」

ドライアド家・ドライアド家・ドリュアス家は、1200前に実在した家の名前です。そして、王宮資料庫と王軍資料庫の魔の森に関する資料は、肝心な所が全て紛失もしくは破り捨ててありました。そこで私は、精霊の存在を確認する為に魔の森に入ったのです」

そこでいったん言葉を切り、周りの上級貴族達を見回す。視線に含まれる敵意は、だいぶ薄くなっていた。

「そして私は、木の精霊との接触到に成功したのです。誠に残念ながら、その手記に記されている事は全て事実でした」

私は信じられないと言う視線を受け、遺憾の意を表す様に首を振った。

「当然ながら、木の精霊は我々人間に対して強い不信感を持っています。接触時に対話か死かの選択を迫られました」

私の言葉に、再びざわめきが起こった。

「ドリュアス子爵なら、討伐する事が出来たのではないですか？」

来た！！リッシュモン本人ではなく、傘下の人間が口を開いた。その言葉には、臆病者と言う罵りが言外に含まれている。

「残念ながら私では、討伐どころか逃げる事もままなりません。木の精霊は正面から戦えば、スクウェアクラス50人そろえても討伐は不可能です。私程度では逃げる事もままなりません。あの場合は、対話以外の道は有りえませんでした。しかし、対話も正解とは言えなかったようです。木の精霊の怒りは凄まじく、木の精霊と人間との戦争になりかけました」

大きなざわめきが起こったが、ヴァリエール公爵が一喝して黙らせた。

「私はそこで賭けに出ました。精霊に頭の中身を覗かせたのです」

私の言葉に謁見の間は騒然となった。ヴァリエール公爵でさえ、

驚きのあまり固まっている。私はこの場をどう收拾するか一瞬だけ悩んだが、国王が一度手を叩き「静まれ」の一言で黙らせた。流石国王である。

「無抵抗に命を預ける事で、こちらに害意が無い事を伝え、そして私の頭を覗いた事により、こちらに邪心が無い事も伝える事が出来ました。この行動をもって誠意を示し、木の精霊の怒りを鎮める事に成功しました」

場が色めき立ったが、私は更に言葉を続けた。

「・・・しかし残念ながら、木の精霊の人間に対する不信感を、完全にぬぐう事は出来ませんでした」

私の言葉に謁見の間が静かになる。

「木の精霊の信頼は、今のところ私個人の物です。当然だと言わんばかりに、交渉役として私を指名して来ました。また、交渉役以外の開拓を禁止すると言って来ました」

謁見の間のざわめきに、罵る様な言葉が混ざり始めた。

「そして木の精霊は、森に住まう者達の解放を宣言しました」

再び場が静まり返る。

「幻獣・魔獣は解放されて、自由に動き回る様になるでしょう。と言っても、その殆どが森にそのまま住みつくと思われず。亜人はただ森に住んでいただけです。居なくなる訳ではありません。住む場所を守るために、全力で抵抗して来るでしょう」

私は国王が頷くのを確認してから更に続けた。

「魔の森……いえ、精霊の森の開拓は時間をかけて、ゆっくり行うべきだと思います。また、私の言葉が真実である証明は、木の精霊に分霊をお願いして王宮までご案内しようと思います」

「何故今木の精霊を連れて来なかったのですかな？」

先程のリッシュモン傘下の馬鹿が、余計ないちゃもんをつけて来た。私に対して、言外にその位の効率も考えられないのか？と言っている。……阿呆だ。

「木の精霊と会談するのに、人間側人間側の意思を統一する必要が無かった。と言いたいのですか？如何考えても、木の精霊を怒らせるだけだと思いますが」

謁見の間に居る人間の視線が、蔑みの視線となつて馬鹿に集中する。リッシュモンでさえ、怒りの表情を浮かべている。……あの馬鹿終わったな。そこでようやくリッシュモンが口を開いた。

「陛下。ドリユアス子爵はこう言っていますが、残念ながらトリステイン王国の財政では森の開拓は急務です」

……ここは反論すべきだな。そしてこの反論が、今後の成否を分ける。

「リッシュモン卿。ドリユアス家では、用意できる資金に限界があります。また、資金を借り受ける事が出来たとしても、現在のドリユアス家が森と面している範囲は狭いです。効率的に投入できる資

金にも限界があります。またそうなれば、騎獣の数も足りなくなり
ます。如何考えても、現実的でないと思いますが……」

そこで一瞬だけリツシュモンの顔に、喜色の色が浮かんだ。

「何を仰るのかな？ドリユアス子爵よ。王国への忠誠を示すのに、
頭を下げられないと仰るのかな？そして、森に面する土地が足りな
ければ私に提案が有ますぞ」

リツシュモンはしたり顔で続ける。

「陛下。森に隣接する王領を、ドリユアス子爵に賜ってみてはどう
ですか？現在森に隣接する王領は、森の南西に在る森に王国から
分断された土地。森の北西に在る海沿いの土地。そして、森の東に
在るドリユアス領からガリア国境までの土地が在ります」

（森の北西に在る海沿いの土地？聞いてないぞ。……いや、ギ
ルバートの計画ではその土地を賜れば有利だな）

私の思案を他所に、謁見の間は騒然としていた。森に隣接する王
領は、全て大きな赤字が出る領地なのだ。森の拡大が止まり、警備
をある程度緩く出来ると言っても焼け石に水だ。以後も大きな赤字
が出る事に違いはない。

リツシュモンの発言は、財政的にドリユアス家に潰れると言っ
ている様なものだ。しかし、それを黙らせるべく声が上がった。

「ドリユアス家には、当家が全面的に支援しましょう」

発言したのは、ヴァリエール公爵だ。しかし、リツシュモンは慌

てなかった。

「公爵の支援が有るなら、先程出た土地を全て賜っても問題ないのではないですか？」

如何に公爵家が全面的に支援すると言っても、赤字の額が大きすぎる。リッシュモンの発言は、公爵の言葉を逆手に取った発言である。これに国王は暫く黙考し、結論が出せないと考えたようだ。

「今日の話は、ここまでとする。ドリユアス子爵の褒賞も含めて、これより精霊対策会議を始める。ドリユアス子爵。精霊は何時なら連れて来れる？」

「お命じただければ、三日以内にご案内いたします」

国王は私の言葉に頷くと、私に退出を命じた。

(結果は上々か。……いや、まだ油断は出来ないな。とりあえずギルバートと合流して、公爵に挨拶して……ギルバートだけ先に領地に帰すか)

そんな事を考えながら、魅惑の妖精亭に足を向けた。

……王宮……SIDE アズロツク END

私が腹ごなしの訓練を終わらせ、魅惑の妖精亭に帰って来て部屋に入ると、既に父上が帰って来ていました。

「父上。ただ今戻りました」

「うむ。おかえり」

私はサイレントをかけ、父上の向かいの席に着きます。

「父上。首尾の方はいかかでしたか？」

「怖いくらい想定通りだな。上手く行きすぎていて、どこか落とし穴が無いかな不安になって来る」

父上の感想に、私は苦笑いしか出ませんでした。最近の傾向から言って、上手く行きすぎて不安とは逆の問題が出るパターンが多かったからです。

「……否定できませんね」

「まあ、それよりも今後の事だが……。ギルバートは公爵に挨拶して、明日には領に戻ってくれ。精霊（分霊）を王都に迎える準備を進めてほしい」

私は頷くと、公爵から聞いた話をする事にしました。

「父上。公爵から聞いた話ですが……」

「ギョームが死んだ件か？謁見の待ち時間に私も聞いた」

どうやら父上は知っていた様です。

「はい。この件どう見ても……」

「ああ。リッシュモンの口封じだろう」

「いえ。それだけではないのです。公爵の話ではギョームは、新しい暗殺用の秘薬を研究精製していた様です。ギョームが公爵にマークされた事により、リッシュモンはギョームを切り捨てたと見て良いでしょう」

父上の目が細まり、顔つきが鋭くなりました。

「しかし、いくら公爵にマークされていたとは言え、反応が過敏すぎると思いませんか？」

父上が僅かに頷きました。

「恐らくですが……。トリスティン王国内で相当身分の高い者を、暗殺しようとしていたのではないのでしょうか？」

「しかし、リッシュモンが今更そんな手を使う必要がある者と言え
ば、クルデンホルフ大公かヴァリエール公爵あるいは国王陛下下から
いか？」

父上がお思いつく人物名を上げましたが、更にもう一人居ます。

「クルデンホルフはトリスティンの属国です。危険を冒してまで、
暗殺する理由は無いと思います。引退寸前のヴァリエール公爵も同
様です。恐らくターゲットは……」

「国王陛下……か」

「はい。そしてこれからは、父上もターゲットになり得ます」

父上は眉間に皺をよせ「そうだな」と、呟きました。

夜になり、ヴァリエール公爵の別邸にきました。

「良く来たなアズロック。それと……」

公爵に思い切り睨まれました。思わず苦笑いが漏れてしまいました。

(歓迎されていないな。カトレアの事に加え、昨日の不法侵入だからな……。仕方無いと言えば、仕方が無いのか?)

「……まあ、ギルバートも良く来たな」

(うつ……。目が全く歓迎してないです)

私と父上は、公爵に聞き耳の心配が無い部屋に連れて行かれて、今日行われた精霊対策会議の内容を教えてもらいました。会議の内容は精霊の存在の真偽ばかりで、全く実りの無い不毛な物だったそうです。そして決定ではありませんが、ドリユア家に与えられる褒賞もほぼ決定したそうです。謁見の間で話が有った通り、森と森に隣接する王領を全て賜れるそうです。昇爵も検討され、伯爵位を飛び越え侯爵位をいただける事になったようです。更に極め付けが、向こう5年間の免税です。

私と父上は固まってしまいました。正直な話、森と森に隣接する王領と伯爵位を賜れば良しと思っていましたからです。

「も……貰いすぎではありませんか？」

父上の口からそんな声が漏れました。

「逆だ。魔の森解決だけで、爵位の一つや二つ上がって当たり前だ。それに加え、困難な森の開拓も請け負ったのだ。更に森に隣接する王領は、赤字が酷過ぎるので褒賞にらん。リツシュモンの傘下で無い者からは、これでは罰だと言う意見も出ていたのだ。その流れで免税・減税という意見が出た。ドリュアス領からの税金と王領の合計赤字額を比べると、赤字額の方が大きいから簡単に免税で通った。10年の免税と言う意見も有るのだが、流石に長すぎると言うてリツシュモンが猛反対している」

私と父上からは、乾いた笑いしか出てきませんでした。

公爵と父上が雑談を楽しみ、時々公爵から嫌味を言われると言う時間を過ごしました。

「所でギルバート。お前はどうかやって、この別邸に忍び込んだのだ？」

突然公爵から、私に話を振られました。公爵相手なら、隠す必要も無いでしょう。と言っても、口止めはしておかないといけませんね。

「秘密にしていただけなら、お話しますが……」

「よかろう。秘密にすると誓おう」

公爵は即答で、秘密にすると誓いました。ちょっと不安を感じましたが、公爵は信頼できる人なので問題ありません。私は腰に付けた道具袋から、一枚のマントを取り出しました。

「秘密はこのマントです」

私はそう言って、マントを被ると公爵が驚きの声を上げました。

「そのマントはまさか……」

「はい。不可視のマントです。私は『インビジブルマント』と、呼んでいます。精霊から預かった、貴重なマジックアイテムの一つです」

私はそう言ってマントを外すと、道具袋にしまいました。しかしそれを見た公爵は、道具袋を凝視します。……まあ、当然と言えば当然でしょう。しまったマントに対して、道具袋は小さすぎるのですから。

「そして精霊から預かった、もう一つのマジックアイテムがこの道具袋です。下手な倉庫より収納量が多い上に、中身の重さを一切感じません。この二つが、精霊より預かったマジックアイテムです」

私がそう言うと、公爵から感嘆の声が漏れました。なんか、羨ましそうな目で見られました。ちなみに絶対貸しません。私にはカトレアと言う、絶対監視者が居るから持っている事が許されるのです。と言うか、覗きに使ったら本気で死ぬそうです。（カトレア・カリ―又様・母上・ディーネ・アナスタシア・ルイズ・エレオノール。この7人が一度に敵になると思うと、背筋が寒くまります。特に最

初の三人が恐ろしい)

私の顔が青くなったのを見て、公爵もこれ以上話す事は止めてくれませんでした。

それから暫くして、公爵と父上の話はお互いの妻の愚痴話に発展してしまいました。本人が聞いたら、大変な事になりそうな内容ばかりです。(二人とも相当我慢しているんだな)そして最後には、なぜかお互いの妻の自慢話になっていました。(・・・砂糖吐きそう)そして二人の気が会う理由が、分かった様な気がする)

次の日、朝一でドリユアス領に帰りました。帰ってからギョームの死を報告すると、案の定母上が荒れました。そしてディーネとアナスタシアに、私が怒られました。(私だつてとばつちりなのに)

父上は私から遅れる事二日で、領に帰ってきました。早速家族会議を開き、現状のレベル合わせをします。

ドリユアス家に与えられる褒賞は、結局公爵が言っていた物になったそうです。母上・ディーネ・アナスタシアは、褒賞の内容に目を白黒させていました。(気持ちは良く分かる)それ以外はこれと言った認識のずれも無く、不安点や問題点の検討に入りました。

新たに気付いた不安点や問題点は無く、やはり今後の妨害工作をどう切り抜けるかが最大の問題であると結論しました。特に精霊の森への攻撃を、どう切り抜けるかです。

「防衛範囲が広くなりすぎるのが、問題なのよね」

母上が思わずばやきました。

「何か攻撃を躊躇させる様な要素が、有れば良いのですが……」

「精霊の力を借りられないかな？」

ディーネが続き、アナスタシアが私に振って来ました。

「流石に無理でしょう。それに精霊には、人の瑣末事や血生臭い事には関わってほしくありません。それに下手をしたら、折角得た信頼を失いかねません」

私の拒否の意に、母上が溜息を吐きながらも頷いてくれました。

「ギルバート。せめて精霊には、ハツタリくらいには協力してもらえないか？」

父上の言葉に、私は「どうにかして説得してみましよう」としか言えませんでした。

結局この日の家族会議は、他の問題も無く終了しました。

次の日、父上と共に木の精霊の所に来ました。大樹に呼び掛ける
と、木の精霊はすぐに顕現してくれました。

木の精霊に事情を話し、分霊を出してもらおう様お願いすると返事はすぐに帰ってきました。

「単なる者の町見て見るのも良いか」

木の精霊は意外にも、町と言うか王都に行く事自体乗り気でした。後は、高等法院や馬鹿貴族に対するハツタリをどうするかです。

私がどう切り出すか迷っていると、木の精霊はまた棘の蔓を巻きつけて来ました。(痛いです)木の精霊は私の頭の中を覗き、私が頼みたい事を読み取ったようです。

「精霊が我だけではない事を示せばよからう。単なる者にとって、特に水の精霊は怒らせたくないのだろう？五柱もの精霊が、敵になると脅せばよからう」

正直に言つて驚きました。如何にもならないと思つていましたが、意外な事に木の精霊から案が出て来たのです。

木の精霊は、もう一度他の精霊に招集をかけてくれました。精霊同士の話は早く、あっという間に了承し分霊の入れ物を要求してきました。

水の精霊は、以前と同じくらしい瓶。

火の精霊は、大きなランプ。

木の精霊は、大きな植木鉢。

土の精霊は、水の精霊と同じ大きな瓶。

風の精霊だけは、このまま本体を飛ばすと言っていました。

父上と一緒に《錬金》で分霊の入れ物を作成し、それぞれの入れ物に分霊を入れてもらいました。精霊達の態度が、ピクニック行く様な気やすさなのが気になります。・・・特に水の精霊。

（果てしなく不安だ）

・・・王都大丈夫かな。

第三十五話 タヌキとキツネを化かせ（後書き）

全然話が進みません。

ごめんなさい。

変な所が有れば、どんどん指摘してやってください。

感想お待ちしております。

第三十六話 初めての泥棒？水精霊はまたやった

こんにちは。ギルバートです。入れ物を作り、精霊達に分霊を入れてもらったまでは良かったのですが、入れ物ごと分霊を運ぶのに凄く苦労しました。

分霊達を運ぶには、騎獣の操り手と入れ物の持ち手が必要です。一度に運ぶには、最低でも騎獣4騎と8人の人間が必要になります。しかし私達には父上のグリフォンと、エディ・イネスのヒポグリフで騎獣3頭と人間4人しか居なかったのです。二回に分けて運べば簡単なのですが、往復4時間分のロスとなると今後の予定に影響が出てしまいます。また、大丈夫とは思いますが、待たされる精霊が不機嫌にならないとも限りません。

仕方が無いので、木の精霊に許可を貰い木を切り倒し、ブレイドで斬り《錬金》で接着して、簡易竜籠（獣籠？）を作り上げました。4人がかりで僅か30分の早業です。私のブレイドの色は、エディとイネスには見せられないので、私は《錬金》による接着班に回りました。

私は簡易竜籠（獣籠？）に同乗し、飛行中は《浮遊》レビテーションで騎獣達の負担を減らす作業をさせられました。非常に重く集中力を要しましたが、それだけなら全く問題ありませんでした。問題は飛行中に精霊（分霊）達が、容赦なく話しかけて来た事です。一度《浮遊》の魔法を途切れさせてしまい、墜落しかけました。（高度が高く無かったら、本当に墜落していた）流石に精霊達も悪いと思ったのか、飛行中は話しかけて来なくなりました。もちろん領地に到着後、父上に盛大に怒られました。

・・・物凄く疲れました。

領地から王都までは、ちゃんとした竜籠を用意していたので、非常に楽な道のりでした。ディーネが「分霊を抱えて、丸一日飛ぶのは大変だと思う」と、言ってくれなければ、王都まで簡易竜籠（獣籠？）で行くはめになっていたかもしれない。ディーネに感謝です。

王都に到着した時には、日も傾き暗くなっていたので、ヴァリエール公爵の別邸に泊まらせていただく事になりました。しかし私だけは別口でやりたい事が有ったので、魅惑の妖精亭に泊まりました。

私のやりたい事とは、リッシュモンをどうにかする事です。

王都のリッシュモン邸に忍び込み、不正や暗殺の証拠を見つけて来る心算だったのです。実は私は、以前からリッシュモン相手にまともに渡り合っても、勝てないと考えていました。そこで対抗策として、リッシュモン邸への突入や忍び込む事を考えていたのです。この案の切っ掛けは、マリーニャさんに師事したからですが・・・。

リッシュモン邸に忍び込むのに、現状の戦力分析をしてみました。

現状で私の最大の武器は、インビジブルマントです。しかしこのマントにも、弱点は有ります。一番問題なのは、臭いを消す事が出来ない事です。ですので、犬等の臭いで異常を感知できる動物には、残念ながら効き目が薄いのです。そしてこちらは大丈夫とは思いますが、メンヌヴィルの様に温度感知が可能なメイジにも、当然効果

が無いでしょう。後注意が必要なのが、風メイジです。私が居る事によって、空気の流れに僅かな違いが生じます。これを感じ取れるメイジが居れば、見つかるのは決定です。そして私を見つけられる火か風のメイジが居れば、実力的にも勝つ事はまず不可能でしょう。

後注意が必要なのが、魔法によるトラップですね。トラップの発見までは何とかなっても、師匠であるマリーニヤさんが魔法の造詣に乏しかったので、解除の方に不安が有ります。

屋敷の中に関してですが、マギ商会に頼んで作った簡易見取り図が有ります。少し前に、首になった使用人の証言を元に作った物です。大体の造りしか分かりませんが、隠し部屋や隠し金庫の位置にだいたいあたりは付けておきました。

さて、いよいよミッションスタートです。

私は朝早く魅惑の妖精亭を出て、リッシュモンの屋敷に向かいます。屋敷の近くに身を潜めて、リッシュモンが出かけるのを待つ事にしました。暫く待つと、馬車がリッシュモン邸から出て来ました。精霊達と王が会合する時間を考えると、この馬車に乗っているとみて間違いないでしょう。

私が進入路と脱出路の最終確認していると、リッシュモン邸から十人近い男が出て来ました。その中の一人に、私は背筋が凍りつくような感覚を味わいました。そいつは、目元に大きな火傷の痕が有る傭兵風の大男でした。

(まさか……いや、そんなはずは無い。アイツは魔法研究所実
アカデミー
験小隊を脱走して、傭兵をしているはずです。こんな所に居るはず
が無いのです)

私は必死にその可能性を否定しましたが、私の耳が嫌な事実を拾いました。

「メンヌヴィル隊長。今夜も夜通し警備しなきゃいねえんだ。よく眠れるようにコレ行きませうぜ」

確定。私が視界にとらえる男は、《白炎》のメンヌヴィルで間違いない。軍を脱走した男が、何故堂々とこんな所に居るのでしょうか？

私は忍び込むのを中止しようと思いましたが、声を出した男が杯を傾ける仕草をしています。メンヌヴィルは、笑いながら頷いていました。話の内容から推察するに、夜勤明けに飲んでさっさと寝ようと言う事らしいです。

私はメンヌヴィル達が十分離れたのを確認してから、インビジブルマントを被りました。庭には警備用に訓練された犬が居るので、マントを被ったまま正門を《飛行》フライで飛び越え、そのまま二階のバルコニーに着地します。

（よし。まずは上手く行つた。気分は？の蛇の人です。でも、インビジブルマント（ステルス迷彩）は壊れませんか。と言うか、壊れたら困ります。・・・私もハルちゃんのサポート欲しいです）

そのままバルコニーから廊下へ入り、記憶しているリッシュモンの執務室に向かいます。途中で使用人を1人やり過ごし、執務室の前に到着すると《探知》ディテイクト・マジックで扉に罠が無い事を確認します。鍵がかかっていたので、アンロックで鍵を開け音が出ない様に細心の注意を払って、扉を開きました。

執務室の中は、綺麗に整頓してありました。目に着く所には、不正の証拠は無いと思うので、隠し金庫等が無いか室内の構造を読み取ります。(土メイジで良かった)

私は大きな隠し棚を発見すると、中を早速調べました。しかしそこに入っていたのは、たった三枚の報告書だけでした。私は速読し、内容のみ頭に叩き込みます。

一枚目を見ると、リッシュモンの財産を本日明け方に持ちだし隠し終った。と書いて有りました。報告書の日付は今日になってるので、作業は終了したばかりなのでしょう。ただ活動費用として残してある(自称僅かな)現金に、目玉が飛び出そうになりました。(・・・20万エキュール!? どんだけ溜めこんでるんだよ!!)

二枚目はギョームが死亡が、リッシュモンの暗殺ではないかと疑われている。と、書かれていました。疑っている者の中には、ヴァリエール公爵も居るので、念の為に不味い物は処分しておいた方が良いでしょう。

三枚目はメンヌヴィルについてでした。元魔法研究所実験アカデミー小隊の副長である事から、傭兵としての経歴と性格等が事細かに書かれていました。そして「例の仕事をやらせるなら、早い方が良い」と、結ばれていました。・・・例の仕事? まあ、現状ではいくら考えても分からないか。

報告者の名前は、全てペドロになっていました。報告書の内容に、特に二枚目に私は頭が痛くなりました。目的の証拠は、全て隠滅済みと言う事になるからです。何気に三枚目の内容も気になります。

リツシユモンが優秀な目を持っている以上、残念ながら簡単には退場してもらえない様です。何とかしてこの二人に不信感を植え付け、仲違させる事が出来ないでしょうか？

そこで私の目に、一枚目の報告書が映りました。残してある20万エキューが消えれば、リツシユモンはペドロを疑うはずです。上手くすれば、仲間同士で潰し合ってくれるかもしれませぬ。

あまりこう言う手は使いたくありませんが、背に腹は代えられませぬ。

私は執務室から金庫の鍵を見つけ出し、地下に在る金庫に向かいました。見張りも居なかつたので、金庫の扉を開けて中に入りました。

(・・・広い)

金庫の広さは、尋常では有りませんでした。高さは2メートル半位で低いです、幅が10メートル奥行きが25メートル位あります。如何考えても、個人が所有する大きさの金庫ではありません。しかし中はスカスカで、殆ど何もありませんでした。

唯一残っていたのは、奥の方に積まれた大きな箱でした。《探知》で罫等が無い事を確認して、箱を開いて見ました。中にはエキュー金貨が、ぎっしり詰まっています。《探知》で確認すると、一箱に5千エキューほど入っている様です。数を数えると、40箱ありました。

(これが20万エキューか)

った侵入者だ。ようやく、生き物が焼ける臭いを嗅げる」

私は本能に従って、廊下を真直ぐ逃げました。

「隊長。何にも居ませんぜ」

「何！？貴様らには見えんのか！？面白い！！見えない人間の子供が、焼ける臭いを嗅ぎたい！！嗅ぎたいぞ！！オレは！！うわは！！うは！！はははははははははははははははははは！！」

（こわ！！怖い！！怖い！！何この変態！！）

インビジブルマントのおかげでメンヌヴィル以外の者には、まだ私の事を知覚出来ていない様です。（この隙に……）と思った瞬間、背筋に悪寒が走りました。私はその感覚に従い、窓を突き破り外に逃げました。直後、先程まで居た廊下が爆炎で満たされます。

（正気かよ！！使用人だって居るのに。それに普通、依頼人の家を燃やすか？）

「隊長！！正気に戻ってください！！依頼人の家を燃やすのは不味いって！！」

「五月蠅い！！待ちに待った獲物なんだ！！」

部下がメンヌヴィルに殴られて、強制的に黙らされました。私はこの間少しでも距離を取ろうと、足を懸命に動かします。

メンヌヴィルも窓を突き破り、外に出て来ました。私はそれを音で確認すると、本能的に館の影に飛び込みました。次の瞬間には、

行』で飛び上がり、その六人の頭上を越えてぶつかるのを回避しました。

その時に発生した《炎球》の爆風で、私は床を転がりましたが幸運にも、六人に私の存在はばれなかった様です。

「メヌヴィル殿！！これはどういう事ですかな！！」

結果的に六人は、私を庇う形でメヌヴィルの前に立ち塞がりました。メヌヴィルは「邪魔だ！！」と叫びながら、再び《炎球》を発動します。しかし《炎球》は、六人の中の誰かが発動したウォーターシールドで防がれました。これを皮切りに、メヌヴィルと六人が戦闘を開始しました。

私はこの隙に、屋敷の外へ逃げ出す事に成功しました。

どこをどう逃げたのか、私は気付くと魅惑の妖精亭の前に居ました。手に持ったインビジブルマントを、物陰で道具袋にしまい魅惑の妖精亭に入ります。

魅惑の妖精亭に入ると、ジェシカが声をかけて来ました。

「ちょっと。如何したの？酷い顔してるよ。それになんか、焦げ臭い臭いがする」

ジェシカの言葉に、私は脱力しました。

「うん。ちょっと変態に追いかけて・・・」

ジェシカの顔が、私の言葉で引きつりました。

「嘘よ。パパは、ずっとお店に居たわよ」

ジェシカの言葉に、私は頭の中が真っ白になりました。私の反応に、自分がどれだけ見当違いなことを言ったか自覚したのか、ジェシカは目を逸らしました。

「私を追いかけて来たのは、スカロンさんみたいに無害な変態さんじゃなくて、肉（生き物）が焼ける臭いが大好きな変態さんだよ」

（何気に、物凄く酷い事を言っている気がする。……スカロンさん。ごめんなさい）

私の言葉に、ジェシカは首を傾げると聞き返してきました。

「えっ……。でも、私もお肉が焼ける臭い好きだよ」

ジェシカの目は「私変態じゃないもん」と、言っています。この切り返しに、私は再び脱力しました。と言うかこの場合、変にオブラートに言おうとした私が悪いですね。

「そうじゃなくて……。人間を生きたまま焼いて、その臭いを嗅いで気持ち良くなっちゃっ変態さん」

（あつ……。今度はストレートすぎた）

ジェシカの顔が引きつり、ガタガタ震えだしました。

「そ そんな人居るの？」

私が頷くと、ジェシカの震えが目に見えて酷くなりました。

「まあ、顔を見られませんでしたから、ジェシカが喋らなければ問題無いでしょう」

メヌヌヴィルは今後、トリステイン王国には居られないでしょうから、問題無いと言えば問題ないのです。ただし、リッシュモン邸に私が居た事がばれるのは不味いです。まあ、こう言っておけばジェシカも喋らないでしょう。

その時時間を確認すると、もうお昼の時間です。ジェシカはこんな所で、ゆっくりして居て良いのでしょうか？

「もうお昼じゃないのかい？仕事良いのかい」

私がそう聞くと、先程まで怯えていたジェシカは、笑顔になり言ってきました。

「新しくお店の人が来たの。デミグラスソースも完成したから、その人達の教育とお店の宣伝をすれば、もうお店を開けられる。ってパパが言った」

「おおっ！！いよいよ開店か！！おめでとうジェシカ」

「うん」

(今は忙しいはずなので、後でスカロンさんにもお祝を言っておきますか)

私はそう考え、とりあえず自分の昼食をどうするか考えました。しかし気軽に外に出て、メニューヴィルとバツタリと言うのは避けたいです。それ以前に、ここより美味しい店なんて知りませんが。

「ジェシカ。部屋で食事をとりたいたいんだけど……。適当に持ってきてくれるかな？それから汗もかいたから、食事の前に汗を拭く物も持ってきてくれると助かるよ」

「うん。分かった」

ジェシカは元気に返事をする、店の奥へ行きました。その姿を見て、私はチップをはずんであげようと密に思いました。

後は父上ですね。上手く行っていると良いのですが……。

---王宮---SIDE アズロック

私が入室してから、王は固まっている。ヴァリエール公爵は昨日の内に、この事を知っていたので苦笑いを浮かべただけだった。リッシュモンの周りは、騒然としている。特にモンモランシ家の代わりに、水の精霊の交渉役になった貴族がやたらと騒いでいる。

まあ、原因が私と一緒に入室した精霊達だから、仕方ないと言えば仕方が無い。しかしこのままでは話が進まない、私はこの場を治める為に声を出した。

「お静かにお願いします」

私の言葉に数人の貴族が黙ってくれたが、殆どに貴族には私の言葉が届かなかった様だ。自分の威厳の足りなさに、力不足を感じる。まあ、国王が正気を取り戻したので良しとしておこう。

「静まれ!!」

国王の一喝で、貴族達は静かになった。あの十分の一でも良いから、私にも威厳が欲しい物だ。

「ご紹介いたします。精霊の森に住む木の精霊です。そして、その盟友のラグドリアン湖の水の精霊。同じく盟友の土の精霊。火の精霊。そして、風の精霊です」

精霊達を紹介すると、またざわめきが起こった。無理も無いか。

「ドリユアス子爵よ。連れて来るのは、木の精霊だけでは無かったのかな？何故他の精霊が居るのですかな？」

言っただけなのは、新しい水の精霊の交渉役だ。自分の領分を侵されたと思ったのだろう。

「木の精霊以外は、盟友としてこの場に居ます。これ以降、木の精霊に攻撃する敵が現れば、この場に居る五柱の精霊が協力し、敵を葬ると言っています。この場に分霊を出していただいたのは、その意思表示とお受け取りください」

私の言葉に、再び場が騒然となる。しかし何処まで行っても、空

気が読めない馬鹿は居るものだ。

「ドリュアス子爵。水の精霊の交渉役でも無い貴方が、何故水の精霊を連れてこれたのですかな？他の精霊も同様ですな。・・・まさか、偽物など言う事は無いでしょうな？」

発言した馬鹿は、したり顔をしている。一部のみ「そうだ」と、同意の声を上げている。他の周りの者は、その貴族に侮蔑か呆れの視線を向けていた。この状況で苦い顔をしているは、馬鹿共の直接の上司であるリツシュモンだけだ。リツシュモンは自分に権力を集中させる為に、周りの部下から優秀な者を排除し、愚鈍でも自分に忠実な物で固めていた。それがこういう場では、足を引っ張ると分かって居ないのだろうか？いや、前回私が謁見した時に、痛感しているはずだ。おそらく期間が短すぎて、対応できなかったのだろう。

私がそんな事を考え黙っていると、沈黙は凶星を指されたからととったのか、馬鹿は調子に乗って精霊に言葉をぶつけた。

「本物だと言うなら、証拠を見せてほしいですな」

馬鹿貴族に向けられる視線が、侮蔑と呆れから敵意に変わった。それすら気付かずに、馬鹿は得意げな顔をしている。

「我を偽物と言うか。単なる者よ。ならばこの警告を持って、我が本物である証拠とする」

発言したのは、ギルバートが温和だと言っていた土の精霊だ。他の精霊から先んじて力を見せつけ、被害を最小限に抑えようとしてくれているのか？

「実行する」

土の精霊が呟くと、突然王宮が……いや、王都が揺れ始めた。土の精霊が地震を起こしたのだ。少し物がカタカタ揺れる程度の強さの地震だが、我々メイジにとっては十分過ぎるほどの証拠だ。これには馬鹿も黙るしかない。

「もう十分です！！揺れを治めてください！！」

私の言葉に、土の精霊は地震を止めてくれた。私が一息ついて居ると、次に発言したのは水の精霊だった。

「次は我の番だな」

「えっ？」「まっ」「なに」「ちょ」

「実行する」

土の精霊だけでこの場は十分なのに、水の精霊は何をしたのだろうか？見た所何も変化が無い様だが……。

「水の精霊よ。いったい何をしたのですか？」

「うむ。この近くの水の流れを止めた」

水の精霊の言葉に、この場が騒然となる。

「水の精霊よ。もう十分です。水の流れを元に戻してください」

私が願い出ると、水の精霊は聞き返してきた。

「確認はせぬのか？」

「大丈夫です。この場の人間は、既にあなた方が本物である事を信じています」

私が言葉に合わせて、周りの者たちが頷いている。

「安心せよ。一時的に止めたただけだ。日が落ちるまでには元に戻る。無理に戻すと逆に弊害が出る」

一部貴族はこの言葉に、安堵した様だがそうもいかない。今日一日は、王都が断水するのだ。それにより、どれだけの被害が出るか・・・。考えただけでも、頭が痛くなってくる。

暫くして場が落ち着くと、国王と精霊が話し始めた。話の内容は、開拓を交渉役以外の者にも許可して欲しいと言う物だ。だが木の精霊は、この頼みをはつきりと断った。その上でドリユア家以外の者を、交渉役として認めないと断言までした。そして更に「ドリアド家の様な事が二度と無い様に」と、付け加えた。

国王と精霊の会談は、結局事実を精霊に確認しただけで終わった。だがこれで、私の話が真実であると証明された。

これにより私は侯爵の位を賜り、広大な領地を管理する事になったのだ。アンスールの月エオローの週に、王都にて陞爵式が行われる事になった。

(上手く行きすぎていて、落ち着かないな)

私はそう思いながら、ギルバートが居る魅惑の妖精亭へ向かった。

――王宮――SIDE アズロック END

私が部屋で夕飯を頬張っていると、父上が帰って来ました。

「ギルバート。今帰ったぞ」

「父上。おかえりなさい」

私と父上は挨拶を交わし、王と精霊の会合の話を見ました。

父上の話は、私からすると想定内の範囲内でした。昼に感じた地震とその後続いた断水は、既に知っていたからです。

「失礼します」

父上の分の料理が、運ばれて来ました。料理を運んできた新人従業員に、礼を言ってチップを渡します。従業員が退出すると、私はサイレントを発動し聞き耳を封じました。

「分霊が入っていた瓶等は如何したんですか？」

「回収してヴァリエール公爵の別邸に保管してある。近い内に、竜籠で領に送り返す心算だ。ギルバートはこれから如何するのだ？」

「いえ。竜籠を出す必要は有りません。私が回収し、領まで持ち帰

ります。それとエディカイネスを貸してくれませんか？」

「かまわんが、どうやって運ぶのだ？」

「私にはあの道具袋が有りますから」

私はそう言つて、精霊から貰つた道具袋を見ました。父上は私の視線の先を見て、納得したように頷きました。

「分かつた。好きな方を連れて行け。」

「ありがとうございます。それから、”水の精霊の涙”の処分についてですが、モンモランシ伯に協力してもらつては如何でしょうか？」

「何故だ？」

「下手にそのまま売り払うと、禁制の秘薬を量産する事になります。ならばモンモランシ家に委託して、なんらかの秘薬に調査してもらつた方が安全です。これだけの量の水精霊の涙です。かなりの額になるでしょう。相応の儲けを分ければ、モンモランシ伯も借金地獄から立ち直れる上に、両家の関係を更に深める事が出来ます。・・・ディーネの事も、これを機会に話してみるの如何でしょうか？」

「・・・分かつた。私は許可する。シルフィアとディーネが了承すれば話して良い。伯爵への面会の手配は私がしておく」

何故今さらと思うかもしれませんが、実はモンモランシ伯はディーネの母親を、最近まで秘密裏に探していたのです。秘密裏に探した理由は、ロマリアの神官でした。神官の不祥事を隠すために、悪

役としてロマリアモディーネの母親を探していたのです。

ドリュアス家がこの事を知ったのは、モンモランシ家が干拓に失敗し借金まみれになったせいです。モンモランシ家に仕えていた人間が、人員削減により職を辞し、紹介されてドリュアス家に多く就職したのです。その中にミレーヌの捜索を担当していた、ファビオと言う男が居ました。彼は秘密裏に調査を続けていましたが、周りが見つかり喋らされ、その話が父上の元まで届いたのです。

「話はこれぐらいか？所でギルバート。お前は今日一日何をしていたのだ？」

出来れば黙っておきたいですが、それが許される状況では無いです。私は正直に、リツシュモン邸に忍び込んだ事を話しました。

「大馬鹿者！！」 ゴン！！

当然のごとく怒られました。拳骨のおまけ付きです。

「王と精霊の会合の後、リツシュモンが大急ぎで出て行ったのはその所為か。まさかとは思いますが、リツシュモン邸に火を放ったのは・・・」

私は首を左右に振りしました。

「実は、温度感知が出来る火のメイジ見つかってしまいました。火のメイジの攻撃を避けている内に、何時の間にか館が大変な事に・・・」

「警備の人間の自爆か？」

「はい。・・・それから、その火のメイジの名前は『白炎』のメンヌヴィルです。元魔法研究所実験小隊の副長でダングルテールの虐殺に参加したメイジの一人です。快樂殺人者で、ダングルテールにて隊長を殺害しようとし、失敗して軍を脱走しています。リツシユモンはその経歴を知っていて、メンヌヴィルを雇っていました。内容は分かりませんが、何か特別な任務をやらせようとしていた様です。・・・それからおそらく私は、メンヌヴィルに体温を覚えられました。幸いそれ以外の人間には見られていませんので、メンヌヴィルが無差別に暴れていたようにしか見えなかったでしょう」

父上は私の話を聞いて、深いため息を吐きました。

「メンヌヴィルについては、私の方でも調べておく。もう二度とこのような無茶はしてくれるなよ」

「はい。それからリツシユモン邸から、20万エキユーほど貰って来たのですが・・・」

ゴンー！

また拳骨を貰いました。せめて最後まで話を聞いてほしいです。

この夜は延々とお説教を聞かされました。

後日父上から、私の行動でどのような影響があったか聞かされました。

メンヌヴィルは、独力で逃走したそうです。追跡の状況では行先

はゲルマニアの様です。リッシュモンの隠蔽工作の所為で、手配が遅れに遅れ確保は難しいそうです。

リッシュモンの金銭的被害は、総資産に比べれば微々たるものですが、かなり痛い額だったようです。そして今回の一件で、ペドロとの関係に亀裂を作る事が出来ました。また、軍を脱走していたメソウヴィルを雇っていた事が発覚し、部下の数々の失言、金銭の滞納（財産を運び出したのが裏目に出た）等、多くの信用を失った様です。これが原因で高等法院内では、数々の派閥が出来てしまい、リッシュモンはその対応に追われる事になったのです。

決して油断は出来ませんが、この様子なら領内の仕事に集中できそうですね。

第三十六話 初めての泥棒？水精霊はまたやった（後書き）

予定通りの更新です。

リッシュモンは倒すことができませんでした。

ハルちゃんが誰なのかは、ファンなら簡単に分かるはずです。

PS3買おうかな・・・金無いから無理！！

感想お待ちしております。

第三十七話 母上が交渉？本当に大丈夫？

こんにちは。ギルバートです。やっと領地に帰って来ました。帰る途中にイネスからも、お説教を貰いました。心配してくれているのは分かるのですが、リツシュモンのような外道を相手にするには、如何してもリスクは避けられないと思うのです。気が付いたら大切な人を失っているという結果だけは、絶対に容認できません。

要するに私は、心配かけた事は反省していましたが、自分が間違った事をしたと言う認識は有りませんでした。私はこの考えを、変える心算は全くありませんでした。

母上達を執務室に集め、私は王都で有った事を全て話す事にしました。母上達のリアクションは、十分過ぎるほど予想できるので、私は立ったまま報告を始めます。正面奥側に母上が居て、左手にデイーネとアナスタシアが居る位置取りです。

「精霊による脅しですが、予想より上手く行きました」

私の言葉に、頷いたり「やった」と口にしたりと、それぞれリアクションを見せられました。しかしここで終わりでは有りません。と言うか、ここで終わりなら良かったのに……。

「それから私は、リツシュモン邸に忍び込みました」

「なんですって？」「え？」「如何いう事？」

私が、リツシュモン邸に忍び込んだ時の詳しい話を始めると、途

端に三人が怖い顔をしました。この反応は想定内の範囲なので、私は淡々と報告を続けます。

話が終わった時、母上のリアクションは予想通りでした。落ちて着いて右にステップを踏みます。

「お馬鹿!!」

母上の怒鳴り声と共に、私が居た位置を風の塊が通り過ぎます。そのまま風の塊は、執務室の扉に命中し破壊しました。

(メンヌヴィルの炎から逃げ切れたのも、コレのおかげですね)

私はそんな事を考えながら、母上の次弾に備えようとした時、本能的にそのままバックステップをしていました。私の鼻先を、空気の塊が二つ通り過ぎます。それを放ったのは、当然ディーネとアナスタシアです。

「アレ？君らも怒ってる？」

「当然です」「ふうふうー」

母上のこの反応は予想どおりでしたが、ディーネとアナスタシアまで参戦ですか？流石に対応できません。ディーネは無表情で、アナスタシアは涙目で睨んで来ます。

(・・・母上の悪い所は似なくても良いのに)

「ギルバートちゃん。今後絶対に、こんな事しないって約束して」

「……分かりました。もう無茶はしません」（無理はするけど）

「……そう。良かったわ。ギルバートちゃんが聞き分けが良かった。……でも、お仕置きは必要よね」

母上の言葉は、怖いくらいに予想どおりでした。

「はい。必要です」

「ディーネ。そこは同意して欲しく何だけど……」

「却下です」

次弾以降も上手くかわしながら、壊れた扉から逃げ出します。……と言っても、母上相手に逃げ切れる訳なんですけどね。ましてや、今回はディーネ・アナスタシア付きです。

結局、一時間持たずにボコボコにされました。何気に一番容赦が無かったのは、アナスタシアでした。子供って、こつこつ時加減出来ないよね。……涙出そう。

次の日の朝に、私はもう一度三人を集めました。

「……何かしら？」

母上が不機嫌な表情で私に聞いて来ました。

「コレについてです」

私は道具袋から”水の精霊の涙”を取り出して、執務室のテーブルの上に置きます。巨大な二つの瓶に入ったそれは、すべて売り払えば、どんなに安くても100万エキューを下らないでしょう。

「この”水の精霊の涙”は、売却すれば大金が手に入ります。しかし、信用のおける者にしか売り渡す事は出来ません。人の心を縛る秘薬が、裏市場に大量に流れる事になるからです」

母上が頷くのを確認してから、私は続きを言います。

「そこで、モンモランシ伯に”水の精霊の涙”を使った秘薬の製造販売を、お願いしようと思います。モンモランシ伯なら信用できそうですし、秘薬の調査も可能で販売ルートも既に持っています。ドリユアス家にとって、これ以上の相手は居ないでしょう」

「そうね。その意見には私も賛成だわ」

母上からは同意をとれました。ディーネとアナスタシアも、口こそはさみませんが頷いています。

「秘薬の儲けは”水の精霊の涙”の分を含め、半分ほどモンモランシ伯に渡そうと思います」

「えっ？そんなに？」

「流石に渡し過ぎでは有りませんか？」

ここでアナスタシアとディーネが、思わずと言った風に声を出しました。しかし母上は、私の狙いを正確に見抜いていた様です。

「モンモランシ家の早期復興と関係強化が狙いね」

「はい。モンモランシ家の復興と協力は、開拓に大きな助けとなります。それに、元々危険過ぎて廃棄も考えていた物です。信用できるなら、只同然で渡してしまっても良いと考えていました」

「流石にそれは極論だけど、間違いじゃないわ」

母上はそう言いながら、ディーネの方に視線を移し続けます。

「でも、金銭だけの繋がりではいまいち不安ね」

母上の所作からすると、ディーネが拒否しなければ賛成の様です。

「はい。そこでモンモランシ伯に、ディーネの出自を話そうと思います」

「えっ!?!」

ディーネが明らかに動揺しています。

「もちろん。ディーネが了承すればの話ですが……」

私の言葉に、ディーネは俯いてしまいました。ディーネなりに、複雑な思いが有るのでしょう。その気持ちを察する事は出来ましたが、何と声を駆れば良いか分かりませんでした。

「ディーネちゃん」

この状況で、デイーネに声をかけたのは母上でした。

「モンモランシ伯が何と言っても、デイーネちゃんは家の子よ。それはこれからも絶対に変わらないわ」

母上の言葉に、デイーネは顔を上げると母上・私・アナスタシアの順に視線を移します。私と母上は、視線が交わった時に大きく頷き、アナスタシアはニツコリと笑いました。

私達の態度を見て、デイーネも覚悟を決めたようです。デイーネはただ一言。

「分かりました」

と、口にしました。その顔には、不安の色は残っていませんでした。

（母上はデイーネの不安を正確に把握していたのですね。人生経験の違いかな？・・・私もあれくらい頼れる人間になりたいものです）

この後の話でモンモランシ伯の所には、母上とデイーネで行く事になりました。母上が家を開けるのは危険と言う意見もありましたが、私では交渉を上手くまとめられない可能性が有るとの事です。

・・・私は交渉事における信用って無いのかな？

・・・考えないようによろ。

良くも悪くも、信用と言う物は厄介だ。築き上げるのは、時間と手間がかかるのに、崩れる時はほんの一瞬だ。特に金で繋がっていた者達は、その傾向が顕著だ。俗に言う、金の切れ目が縁の切れ目と言う奴だ。

今私は、それを酷く痛感させられている。

ドン！！

「やることなす事すべて裏目だ！！」

思わずテーブルを叩き、口から愚痴が漏れてしまう。しかし今リッシュモンが居る部屋には、その言葉を聞いてくれる相手は居なかった。まして当たり前散らせる相手など、居るはずもない。それが苛立ちを増長させる。

いったい何がケチの付け初めだったか……。

体制強化の為、無能で忠実な部下を集めたからか？ドリュアス家排除計画からか？いや、国王陛下の暗殺計画からだ。その所為で、ラ・ヴァリエールに目を付けられたのが原因だ。

ギョームを処分してからは、ラ・ヴァリエールの人間に張り付かれ動き辛くなった。ドリュアス家を排除する為に、メンヌヴィルなど雇ったのも失敗だった。そもそも、病死に見せかけて国王陛下を毒殺しようとしなければ、こんな事にならなかったのかもしれない。

しかし、結果は結果だ。ギョームの処分により、無能な部下達は私に大きな不信を持った。大枚をはたいて雇った脱走兵のメンヌヴィルは、屋敷内で意味不明な暴走をし屋敷を燃やした。しかも無能な部下の失言で、水の精霊が怒り水が使用できなくし被害を増大させた。

これらすべての責任が、私にあると公になり王宮内での発言力を失った。

更に焼跡の金庫の中には、20万エキユー有る筈の金が綺麗サツパリ消えていた。この所為で早急な根回しが出来なくなり、事態をより悪化させた。しかも盗む事が出来たのは、状況から見て最も信頼していたペドロだけだ。もはやペドロは信用できない。ペドロもその事を自覚しているのか、雲隠れしてしまった。一部の隠し財産の無事は確認した。が、回収を任せられる信頼できる者が居ないのが現状だ。よって手元に金が無い。

この状況で一番不味いのが、護衛として雇っている傭兵達である。ドンドン辞めて、出て行ってしまう。在りもしない噂話付きでだ。金が出せない状況と噂の所為で、傘下の者達もドンドン減っていくのは当然だ。お陰で私に成り変わろうとする愚か者が出てきて、私の地位も危ない状況だ。

「……だが」

目の前にある書類に、口元が歪むのが自覚できる。

「ドリュアス家の開拓を確実に失敗させ、私の元に大金を運んでくれる魔法の紙だ！！これさえ有れば、私はまだまだやり直せる！！」

リツシュモンが借りている部屋からは、不気味な笑い声が夜な夜な響いていたと言う。

――王都――SIDE リツシュモン END

――ドリユアス領・モンモランシ領――SIDE シルフィア

竜籠が目の前に到着した。これで今から、モンモランシ領へ向かう事になる。竜籠に乗り込むのは、私とディーネそして・・・フアビオだ。他にも護衛の騎獣乗りが二人いるが、ギルバートとアナスタシアは今回はお留守番である。

「母上。大丈夫ですか？」

「何を心配しているの？私に任せておけば大丈夫よ。それとも、ギルバートちゃんから借りた道具袋の心配でもしているの？」

話しかけて来たギルバートに、即答で返事を返す。しかしギルバートは、首を左右に振ってから口を開いた。

「母上。くれぐれも感情的にならない様お願いします」

「うん。カッとなったらダメだよ」

ギルバートだけでなく、アナスタシアまでそんな事を言ってきた。私は実の子供に、信頼されてないのだろうか？正直に言っつて、かなり凹む事実だ。

「大丈夫よ。絶対にへましないわ。私の事信用できないの？」

「はい」「うん」

ギルバートとアナスタシアが即頷いた。ディーネだけは、関係無い振りをしている。

（教育の仕方間違えたかしら？帰ったら、思いっきり鍛え直そう）

私がおかかえているか分かったのか、ギルバートとアナスタシアが抱き合い、青い顔をしながら震え上がっている。

（……うん。兄妹で仲が良いのは良い事かな。ついでに、後ろで苦笑いしているディーネちゃんも同罪かな？うふ……楽しみ）

私に向けた視線に気付いたのか、ディーネの顔色が変わった。その後三人で、何か言い争っていたけど私には関係なし。

私が護衛と行程について最終確認を終えると、1人の男が私を待っていた。金髪碧眼の優男で、その顔には柔和な笑みを湛えている。最近までディーネの母親を探していた、ファビオと言う男だ。歳はまだ16歳になっていないと言うから驚きである。

「奥様。今回は長年の胸の痞えを払っていただき、誠にありがとうございます」

「気にする事はないわ。家族の事ですもの」

「いえ、やはりお礼を言わせていただきます。ミレーヌ様の事は残念ですが、ディーネ様が生きている事は伯爵様にとって、どれだけ

の救いになるか……」

ファビオの顔から柔和な笑みが消え、真剣な表情になった。

「ミレーヌ様のご実家には、今は亡き両親の店も世話になっていました。調査の名目で金目の物を奪って行った神官達には、今でも怒りを感じています。このご恩は、一生かけてもお返しする所存です」

この少年の言葉に嘘は無い。その調べは付いている。しかし、全てでは無い。

「……良く言うわ。ミレーヌの行方を調べる為に、故意にモンモランシ伯の秘密をバラしたくせに」

「……気付かれましたか」

「もう少し慎重になる事ね。でも、あなたが搜索に携わったのは、年齢から見て長くとも1〜2年位の話でしょう。そんな短時間で、ドリュアス家に辿り着いた事は評価しているわ。思い切りの良さも含めてね」

「ありがとうございます。そして改めて、御恩をお返しする為忠誠を誓います」

私はファビオの顔を真直ぐ見て、大きく頷いた。

「期待しているわ。貴方も早く、竜籠に乗り込みなさい」

「はい」

ファビオの返事を確認すると、竜籠の側に居るギルバートとアナスタシアの所に移動した。

「ギルバートちゃん。アナスタシアちゃん。行ってくるわ」

「行つてらっしゃいませ」

「行つてらっしゃい」

「行つて来ます」

私とディーネが軽く手を振ると、竜籠が浮かび上がった。

竜籠が浮かんでいた時間は、一時間と少しくらいだったろうか？
モンモランシ邸に到着した。竜籠から降りると、いきなり声をかけられた。

「シルフィア！！」

声が出た方を向くと、そこにはモンモランシ伯夫妻とモンモランシーが居た。モンモランシ夫人が、手を振っている。

「久しぶりねコレット」

「シルフィアも久しぶり」

モンモランシ夫人のコレットも、再会を喜んでくれているようだ。私に続いて降りて来たディーネを確認すると、モンモランシーも喜びの声を上げた。

「お姉さま」

「久しぶりですねモンモランシー」

私とコレット、ディーネとモンモランシーが、それぞれ再会を喜び合う形になったので、モンモランシ伯はあぶれた形になっている。これは対外的に良く無いだろう。

「ゴホン。あー、その、何だ」

「あなたは黙ってて!..!」

「.....はい」

コレットは一喝で、自分の夫を黙らせてしまった。そこには、当主や夫としての威厳など一欠片も無かった。いつも清々しいほどである。恐らく水の精霊に言った、NGワードの所為だろう。以前のコレットなら、夫を立てて妻として一歩引く性格だったのに.....。よほど腹にすえかねているのか？

「さあ、行きましょう。シルフィア」

「ええ。ディーネ。行きますよ」「ほら、モンモランシーも」

「はい」「はい」

コレットに引つ張られる私達の後を、肩をガックリと落としたモンモランシ伯がトボトボとついてきた。

私とディーネはコレットに誘われるまま、お茶とお菓子を楽しんでいた。モンモランシ伯はファビオと少し話した様だが、それ以外は肩身が狭そうにしていた。しかし、何時までもこのままと言う訳には行かないだろう。こちらにも要件と言う物が有る。

「コレット。私も今日ここへ来た要件が有るの。聞き耳の無い部屋で話せないかしら？それからこの話は、モンモランシーにも聞いてほしいのだけど・・・」

「分かったわ。あなた。モンモランシー。行くわよ」

「はい」「はい」

私はディーネとファビオに目で合図すると、立ち上がりコレットとモンモランシ伯の後を追った。余談だが、モンモランシ伯の背中には哀愁が漂っていた。

館の奥の部屋に案内されて、テーブルの奥側正面にモンモランシ伯が座り、右側にコレット、左側にモンモランシーが腰かけた。私は手前側正面に座り、ディーネに左手に座ってもらいファビオに右後ろに立つてもらった。

ここからは友人とその家族としてでなく、交渉相手として接しなければいけない。思考を切り替え、口を開いた。

「場を設けていただき、ありがとうございます」

「うむ。それで要件とは何だ？」

私が定型通りの挨拶をすると、モンモランシー伯が頷いた。ここまで来れば、後は用件を言うだけである。ディーネに向けて、視線を送ると頷いてくれた。

「まずはこちらの品をご覧ください」

私の言葉を合図にして、ディーネがオルゴールと指輪をテーブルの上に置いた。それを見たモンモランシー伯は、目を見開き思わず言った感じて立ち上がった。

「そ そのオルゴールと指輪は、何処で……」

「私の実の母の……形見です」

「……カタ……ミ？」

モンモランシー伯は、あまりの事態に固まっているようだ。コレットは一瞬だけ目を見開き、俯いてしまった。モンモランシー伯だけは、訳が分からないと言った様子だ。ディーネもこれ以上は、言葉にしておく無いのだろう。黙ってしまった。この状況で、説明を引き継いだのはファビオだった。

「説明を引き継がせていただきます。ミレーヌ様は……」

ファビオが話し始めると、モンモランシー伯は黙って椅子に座った。

ファビオの大まかな説明に、モンモランシー伯は黙って大人しく聞いている。その表情は沈痛そのものだった。この場には、ファビオの淡々とした報告の声のみが響いている。

ミレーヌが逃げた先の村の話。

その村が森に吞まれた話。

次にドリユアス領に行く話。

途中で亜人に襲撃された話。

そして、ミレーヌの最後。

その後、ディーネがドリユアス家に迎え入れられた話。

そしてモンモランシ伯が、ミレーヌを探しているのを知ったのが
つい最近である事。

そこまで話すと「以上です」と、締め括った。

次はドリユアス家としての見解を伝えなければならぬ。今回ギ
ルバートではなく私が来たのも、この見解はディーネの親となつた
者……つまり、私かアズロツクが言わなければならぬと思つ
たからだ。

「ドリユアス家は、ディーネの出自を知っていて受け入れました。
伯爵も知つての通り、私達夫婦は大貴族の私生児を親に持ちます。
ディーネの立場に、感じるものが有りました。だからディーネを娘
として、ドリユアス家に受け入れました」

「では……」

モンモランシ伯が口を開いたが、私はその先を言わせるつもりは
なかった。

「ディーネは私の娘です。今更誰かに渡す心算は有りません」

「だが……しかし……」

モンモランシ伯は、ディーネを養子として引き取りたいと考えていたのだろう。伯爵の胸中が、複雑な思いで一杯になっているのが良く分かる。探し人は既に死んでいて、その娘は今幸せに暮らしているなら、今更出しやばる事も出来ない。出来ないが・・・何かしてやりたい。と、そう思っているに違いない。

「そう・・・だな。私が何と言っても、今更だな。だが、時々で良いからディーネを連れて遊びに来るなり、私達がそちらにお邪魔するなりしても良いだろうか？」

「ええ。もちろんです」

「・・・ありがとう」

伯爵に礼を述べられた事により、ようやく次の話に移る事が出来る。先の話の伯爵の反応により、次の話は完全に無かった事にする心算だったのだ。少しだけ間を開け、私は口を開いた。

「次の話に入りましょう」

「次？」

伯爵の疑問の声を黙殺して、ギルバートから預かった魔法の道具袋から巨大な瓶を二つ取り出した。それをテーブルの上にドンと置く。腰の道具袋から座ったまま出したので、テーブルが邪魔で何処から出したか分からないだろう。

（本当にこの道具袋は便利ね。ギルバートちゃんから没収しようかしら？）

「！！何処から！？」「あれ？」「え？」

そんな思考を、驚きの声がさえぎった。既にこの道具袋の事を知っている、ディーネとファビオは苦笑いを浮かべているようだ。

「詮索は無用をお願いします」

「ム……分かった。しかし随分巨大な瓶だな。中身はただの水の……！？まさか！！」

「お察しの通りと思います」

「いや……有り得ないだろう」

「この瓶の中身は、全て”水の精霊の涙”です」

モンモランシ家の三人が、仲良くフリーズしている。少しだけ間をおいて、私は口を開いた。

「ドリユアス家ではラグドリアン湖の水の精霊に、分霊を二回頼んだ事が有ります。それに了承していただき、分霊を納めていた瓶がこれです。分霊を解除後、分霊は”水の精霊の涙”になります」

私の説明に、伯爵がなんとか頷いた。コレットとモンモランシーは、あまりに規模が大きい話に全くついて来れない様だ。

「この”水の精霊の涙”を材料に、秘薬の調合と販売をお願いします。この際、その際の条件が有ります。」

一つ、人の心を操作する御禁制の秘薬を絶対に作らない事。
二つ、”水の精霊の涙”をそのまま売りに出さない事。
三つ、この事は極秘とし絶対に口外しない事。
四つ、ドリュアス家の開拓に出来る限り協力する事。

以上の四つが条件です」

「その条件自体は問題ないが……」

恐らくモンモランシ伯は、取り分の話を聞きたいのだろう。

「こちらの取り分は、そちらが出した利益の半分です」

「それでは、こちらの利益が低すぎる!!」

モンモランシ伯が、間髪入れずに言ってきた。一瞬何故?と思っ
たが、モンモランシ伯は”水の精霊の涙”の代金を、別に請求され
ると考えているのだろう。

「残念ながらこれ以上議る事は出来ません。本来ならば、利益の9
割をこちらの取り分としても、そちらの利益は十分出るはずです」

「そんな訳な……」

「利益の中に”水の精霊の涙”の金額が入っていてもですか?」

「なっ!!そんな……まさか」

モンモランシ伯が絶句するのも分かる。

「ドリュアス家の狙いは、モンモランシ家の早期復興と関係強化です。後は言わずとも、お分かり頂けると思いますが」

「しかしそれでも、あまりにこちらが貰いすぎだろう」

「人の心を操作する秘薬を作られ、ドリュアス家やそれに近い人間に使われるなら、このまま廃棄しようと考えていました。それを考えれば、こちらは金銭が入って来るだけマシです」

「そうかもしれないが・・・」

「中央に居る貴族達の中には、ドリュアス家を潰したいと考えている者達が多く居ます。金銭的問題も大きいですが、何より発言力が問題です。ドリュアス家とヴァリエール家だけでは、対抗しきれない可能性が高いのです。よって、モンモランシ家に早期復興していただき、味方をして欲しいのです」

「・・・分かった。この借りは必ず返すと誓おう」

「ありがとうございます」

私とモンモランシ伯は歩み寄り、固く握手をした。

（中央の発言力不足で、不利な取り決めを押し付けられ辛くなくなるわ。これで大いぶ楽になる筈ね）

私はこの時、難関を一つクリアした事にホッとしていた。

・・・ドリュアス領・モンモランシ領・・・SIDE シルフィア

END

竜籠がドリユアス領に帰って来ました。私とアナスタシアは、母上を出迎える為に外に出ます。

竜籠が着陸し、母上とファビオが出て来ました。

「お帰りなさい」

しかしディーネが出て来ません。

「ディーネは如何したのですか？」

「モンモランシ家の要望で、2〜3日ほど預ける事にしたわ」

「大丈夫なのですか？」

「大丈夫よ。モンモランシ伯は、今更ディーネをどうしようとは思わないわ。交渉も上手く行ったし、何も問題なしよ」

私は母上の言葉に、胸をなでおろしました。アナスタシアは、面白くなさそうにいましたが……。

「ほら。膨れない膨れない。折角上手く行ってるんだから……。な」

私は頬を膨らませるアナスタシアを、頭を撫でながら慰めました。

予想以上に上手く行っている事に、私は気を良くしていました。
目の前に、大きな落とし穴が隠れているとも知らずに・・・。

第三十七話 母上が交渉？本当に大丈夫？（後書き）

難産でした。むっっちゃ難産でした。

何度も書き直したので、変なとことが有るかもしれません。気になる所がありましたら、やさしく突っ込んでください。

モンモランシ夫人の名前は、コレットにしました。

いい加減名前を出さないと、話的に不自然と感じたので付けました。

ご意見感想お待ちしております。

第三十八話 借金？借金？また借金！？

こんにちは。ギルバートです。母上が、モンモランシ伯の所へ交渉に行く事になった時、ハッキリ言って物凄く不安でした。しかし母上は、見事に交渉をまとめて見せたのです。その時心の中で、ごめんなさいと謝っておきました。

あれから3日経ち、ディーネが帰って来ると、母上の地獄の特訓が待っていました。出発時の失言の所為とは思いますが、普段の母上を見る限り交渉事が出来る人間に見えないのは、母上の日ごろの行いの所為で有り、私達は絶対に悪く無いと思います。・・・思いたいです。

疲れましたが、時間は待ってくれません。日付は、アンスールの月のヘイムダルの週末に達しました。もう来週は王都にて、父上の陞爵式が開かれます。そんな中、私達兄弟三人が母上に呼び出されました。

その時私達は、訓練後のお茶を楽しんでいたので三人一緒に居ました。三人仲良く母上の居る執務室に向かいます。

三人一緒という事は、書類仕事じゃないみたいだな。となると・・・。

そんな事を考えながら、私が代表でノックします。すると、すぐに入るように返事が有りました。

「失礼します」

私達の姿を確認すると、母上が口を開きました。

「あら？三人一緒だったの？丁度良かったわ」

恐らく話の内容は、来週の陞爵式についてでしょう。

「来週に控えた陞爵式についてなんだけど……。流石に子供が、全員欠席と言う訳にはいかないの」

……。やっぱり。要するに子供の中で、最低一人は陞爵式に出席しろと言う事です。正直に言わせてもらえば、アンリエッタに会いそうな所はパスです。会った瞬間に騒ぎになりかねません。対策はとっていたので、こちらからアクションを起こす手間が省けました。

「ギルが行くべきと思います」

突然ディーネが、そう口にしました。ディーネもそう言う席が嫌いの様です。

「いえ、年長者であるディーネが行くべきでしょう」

「ここは実子が行くべきでしょう。特に跡取りのギルが行くべきです」

「ディーネ。実子なんて、そんな悲しい事言わないでください。・・・そうですね。母上」

「ギルバートちゃんの言うとおりよ。私悲しいわ」

「ぐっ……。ならば姉命令です。ギル行きなさい」

ここで強権発動か。そうは行くか。

「では、兄命令です。アナスタシア。行きなさい」

「ふえ……。あたしい」

自分は関係ないと思って、油断していたのでしよう。話を振られたアナスタシアは、面白い位慌てています。……。あ。なんか和む。

……。ちなみに私はSでは有りません。母上に少し影響を受けただけです。

「うう……。お姉ちゃん」

アナスタシアが涙目で、ディーネに訴えかけます。

「ぐう……。ぐ、ギル」

「アナスタシア」

「うう、お姉ちゃん」

あつという間に、もう一周しました。これでは永遠に決まらないか、母上が切れて全員出席ですね。ですが私は、面倒事はごめんです。と言う訳で、用意していた対策を使う事にしました。

「母上。塩田の設置場所の調査は、もう行っても大丈夫ですか？」

「なっ!!」「え?」

突然の話題変換に、ディーネとアナスタシアは驚きの声を上げました。しかし母上は、私の反応を予想していた様です。別段驚いた風も無く口を開きました。

「王家の許可は、アズロックが内々にとってあるから問題無いわ。守備隊の展開は、本日中に終了する予定よ。明日以降なら大丈夫よ」

ディーネとアナスタシアの視線が突き刺さるのは、無視です無視。と言うか、母上の地獄の特訓（ストレス解消）に加え、書類仕事に忙殺されていたのはこの為です。ダメと言われたら泣きます。

「でしたら準備が出来次第、調査を開始したいのですが」

「……そうね。塩田の設置は急務だもの。ギルバートちゃんは、そちらを優先してくれて良いわ」

はい解決。私は陸爵式に出なくてOKです。

「で、陸爵式にはどっちが行くんですか?」

私が余裕の笑みを浮かべて聞くと、ディーネに怖い顔で睨まれました。しかし、そんなディーネに止めを刺す存在が居ました。

……アナスタシアです。

「お姉ちゃんが行くなら私も行く」

この一言で、ディーネとアナスタシアの出席が決定しました。この後ディーネがいじけていた様な気がしますが、気のせいですね。

さて、いよいよ出発の日になりました。母上達を見送った後、私もすぐに調査に出発します。

ディーネが時々、恨みがましい目で私を睨んで来ますが全てスルーしています。実はあの後アナスタシアが、自分が調査を手伝えないか聞いて来ましたが、無いと断言しておきました。今更一人で行けと言ったら、ディーネが間違いなくキレます。そして怒りの矛先は、間違いなく私に向きます。それだけは本気で勘弁です。

母上・ディーネ・アナスタシアの三人が、竜籠に乗り込みます。私が「行ってらっしゃい」と言うと、母上だけは笑顔で答えてくれましたが、ディーネには怖い顔で、アナスタシアには涙目で睨まれました。

(どうしてだろう？物凄く良心が痛む。まあ、こんな気持ちは津軽海峡にポイっですね。ポイっ。・・・何故？津軽海峡？まあ、気にしない気にしない)

いけませんね。最近疲れているのか、思考が変な事になっていきます。このままでは、大変な事(キチガイ的な意味で)になるかもしれません。

「まあ、大丈夫でしょう。今回の調査は、半分旅行みたいな物ですから。書類仕事も無ければ、堅苦しいパーティーにも出なくて良い。母上が居ない環境(ここ重要)で、ユックリさせてもらいましょう」

私は嬉しさのあまり、口から本音がダダ漏れていました

「若。奥様が聞いたら、大変な事になりますぞ」

声をかけられ振り向くと、そこには二人の男が居ました。

話しかけて来たのは、クリストフと言う男です。愛称はクリフにしました。落ち着いた物腰と老け顔の所為で、かなり年上に見えますが実際は24歳です。白に近い銀髪が、白髪に見えるので40代と言われても違和感が有りません。しかも本人が、それを気にしていたりします。土のラインメイジで、グリフォンを騎獣にしています。

もう一人が、ドナルドと言う男です。愛称はドナにしました。こっちは色白で、真っ赤な天然パーマが特徴の17歳です。これで好物がバーガーと聞いた時には、どんなネタキャラだよと内心突っ込みました。ですが物腰は年の割に落ち着いて、真面目な性格をしています。火のドットメイジで、マンティコアを騎獣にしています。

これから私の護衛として、仕えてくれる者達です。

調査中は、この二人の騎獣に乗せてもらう予定です。私も専用の騎獣が欲しいのですが、騎乗訓練は10歳になってからと言われてしまいました。速く一人で、騎獣を乗りこなしたいです。

「まあ、良いじゃないですか。・・・それよりも、調査について説明します」

私は前半は明るく、後半は真面目な声で言いました。私の真面目

な声を聞くと、二人は姿勢を正し私の話を聞く姿勢をとります。

「ドリユア家は森の正体を突き止め、魔の森の問題を解決に導きました。その功績を認められ、多くの領地を王より賜う事になりました。賜った領地を有効利用する為、塩田を設置しトリステイン王国経済に貢献する事になりました。今回はその為の調査です。森の北西、海沿いの土地、フラークェニッセ。森の南西、海沿いの土地、オースヘム。この二カ所より、塩田の設置に相応しい場所を調べます」

王から賜った土地は、ドリユア家の南のフェンロウ。その南のルーモンド。さらに南のガリア国境沿いのマースリヒト。森の北西、海沿いのフラークェニッセ。そのすぐ東のローゼンハウト。森の南西、海沿いのオースヘム。その東のブルーヘント。計七つの領地を賜う事になりました。

「第一条件は、近くに河口が無い事です。これは、真水が混じる場所では製塩効率が大きく落ちるからです。第二条件は、水の綺麗な場所である事です。これは出来あがった塩の味に関係します。第三条件が、一年を通してほど良い風が吹いている事です。これも製塩効率に影響します。この三つの条件がそろっている場所を探します。第三条件はある程度妥協できますが、第一第二条件は妥協できません。．．．ここまでで何か質問は有りますか？」

私はそこでいったん言葉を切って、二人の反応を見ます。．．．
どうやら質問は無い様です。

「では、北側のフラークェニッセから調査を開始します。私はクリフのグリフォンに同乗します。各自騎獣に乗り込んでください」

私の掛け声で、それぞれの騎獣に乗り込みます。準備完了を確認すると、私は叫びました。

「出発！！」

私の掛け声と共に、騎獣が浮かび上がりました。

・・・王都・・・SIDE　ディーネ

ようやく王都に竜籠が到着しました。精神的には、竜籠より騎獣の方が楽ですね。

そんな事を思いながら竜籠を下りると、お父様とヴァリエール公爵にモンモランシ伯爵が出迎えてくれました。初めに出迎えてくれたのが、知っている顔だったのでホッとしました。

「ようこそ王都へ」

公爵が代表で、歓迎の言葉を口にしました。そんな公爵へ、母上が対応します。しかし私とアナスタシアは、それどころでは有りません。竜籠の発着場には、知らない貴族達が何人も居ました。その貴族達の視線が、気になってしょうがないのです。強い敵意こそ感じませんが、何と言うか・・・値踏みされている様な気がして気持ち悪いです。この状況にアナスタシアは、私の影に隠れてしまいました。

「長旅で疲れただろう。立ち話もなんなので、私の別邸へ向かおう」

公爵は私達の状況に気付いたのか、そう声をかけてくれました。

「ありがとうございます」

私はホツとして、公爵にお礼を言いました。

「あちらに馬車が用意してある」

そこには四人乗りの馬車が、二台用意してありました。お父様とお母様それに公爵が、何やら話しながら馬車に向かいます。

となると……。

私がアナスタシアに視線を向けると、すぐる様な眼をしながら私の服をギョツとつかんで来ました。

「その様子では、もう一台の馬車に乗るしか無い様だな」

モンモランシ伯が、そう言って話しかけて来ました。

「はい。そのようです。私達は、もう一台の馬車に乗りましょう」

「うむ」

私はアナスタシアの手を引き、もう一台の馬車に乗り込みました。それにモンモランシ伯が続きます。私達が着席し、すぐに出発すると思いましたが、ヴァリエール公爵が馬車に飛び込んで来ました。

「わざわざ狭い方に来るとは、如何したんだね？」

モンモランシ伯の質問に、公爵は心底嫌そうに答えます。

「あの万年新婚夫婦と、密閉されて空間で一緒に居ると？」

「あー」

モンモランシ伯が、納得の声を上げました。私もその気持ちは良く分かります。公爵が腰を下ろすと、馬車のドアが閉められ動き出しました。

「ギルバートが居ないようだが、如何したのだ？」

「逃げました」

公爵が私に聞いて来たので、私は間髪いれず答えました。

「何！？理由は？」

「問い詰めましたが、口ごもるばかりで答えてくれませんでした。公式の場が嫌だったのでしょうか」

「侯爵家の嫡子になるのに、それはいかんな」

伯爵の評に、公爵が頷きました。私もそれには同感です。

「あの」

意外な事に、ここでアナスタシアが口を開きました。

「何だね？」

公爵が優しく問いかけます。

「……アンリエッタ姫に、会いたく……ないって、言っていました」

アナスタシアの言葉に、伯爵は渋い顔をしました。それは私の顔も同様だったでしょう。よりもよって、自国の姫に会いたくないなどと言う、馬鹿が居るとは思いませんでした。

しかし公爵の反応だけは、違ったのです。

「あっ……、あー。そう言う事か」

どうやら公爵だけは何か知っている様です。

「何か知っているのですか？」

私の質問に、公爵は答えにくそうにしています。

「何か知っているなら、答えてあげても良いんじゃないか？」

「教えて」

伯爵とアナスタシアの加勢を得て、公爵が渋々と言った表情で口を開きました。

「アンリエッタ姫が陞爵式に出席するから、ギルバートは出られん」

「何故？」「え？」「ほう」

私達の反応を無視して、公爵は説明を続けました。

「今年のウルの月に、アンリエッタ姫が国王の壺を割って逃亡した事があるって、王宮外に逃げたと大騒ぎになった」

伯爵はその話を聞いた事が有るのか、頷いていました。

「……しかし逃げだ先は、外では無くギルバートが居た王宮資料庫だったのだ。姫はギルバートを脅して、王宮資料庫に隠れていた。それをギルバートが、我々に報告したのだ。その際姫に王族としての自覚を持たせる為に、ギルバートが姫をかどわかした犯人として、姫の前で逮捕して見せたのだ。姫にギルバートは、チエルノボーグ監獄に居ると言っている」

「……」

あまりの内容に、私達三人は絶句してしまいました。しかし、話は更に続きます。

「その事件の後は、姫も王族としての自覚を持ったのか、お転婆ぶりが鳴りを潜め姫に近い家臣たちは大変喜んでいる。……かく言う私もその一人だ。だが、事件の後、姫が笑わなくなっただけ。私と王が、ギルバートの事を話そうとしたのだが、他の家臣に絶対に話さない様に泣きつかれている。切っ掛けの事件が事件だけに、私も王もその願いを無碍に出来ない状況だ」

家臣が泣きつくって、普段のアンリエッタ姫って……。私は普段の姫を想像して、そんな姫など居る訳ないと頭を振りましました。と言うか、居ないと信じたいです。

「その後の姫の事は、私もアズロックも話していないはずだが、ギルバートは知っていたのかもしれんな。それで効率を重視して、領に残る事を選択したのだろう。娘達はギルバートに会うのを楽しみ・・・に・・・」

しかし公爵は言葉の途中で、何かに気付いた様な仕草を見せると、何故か青い顔になり震え始めます。その様子に私達が声を掛けられずにいると、馬車が止まりました。どうやら公爵の別邸に到着した様です。

私達は馬車を下りましたが、公爵だけはなかなか下りて来ません。別邸の前に向かってくれているのは、カリィ又様、エレオノール様、ルイズ、コレット様、モンモランシー、使用人数人・・・それに病弱で領を出られないはずのカトレア様が居ます。カトレア様は上機嫌の様で、コロコロと笑っていました。

少し待つと、観念した様な表情で公爵が下りて来ました。その時にはもう、お父様とお母様がカリィ又様達に挨拶をしていました。

公爵の降車を確認すると、御者が忘れ物がないか簡単に確認し馬車のドアを閉めます。一仕事終えた馬車は、再び進み始めました。馬車は車庫に、馬は馬小屋に帰すのでしょうか。

遅れて来た私達四人を確認すると、何故かルイズが焦った様な声を上げました。

「あつ　あの　あのあの　兄様、ギルバート兄様は？」

「領地経営の準備の為、ドリユアス領に残りました」

様子が変な事に訝しく思いながらも、私は正直に答えました。

「……そんな」

(ギルバート兄様？ギルはルイズにそこまで好かれていたでしょうか？そう言えば、ギルがカリィヌ様と公爵家に行った時の話は、ギョームの件以外はやらぬ歯切れが悪く、何も話してくれませんでしたね)

明らかに落胆しているルイズに、公爵が諭すように声をかけました。

「我儘を言つてはいけないよ。私の小さなルイズ。今後を考えれば、仕方が無い事なんだ」

公爵の言葉に、納得してルイズが頷こうとします。しかしそれを止める様に、声が上がりました。

「本当の所は、如何なんですの」

その声の所為で、先程まで暖かかった場の空気が、一瞬にして凍りつきました。声を上げたのは、カトレア様でした。先程までニコニコ笑っていた人の声とは思えません。何か物凄く冷たくて……背筋がゾツとする様な……。

「いや……その、なんだ……」

公爵の態度が、明らかに挙動不審になりました。後ろめたい事があると、言っている様なものです。先程の件だけなら、そこまで挙

動不審になる事は無いと思うのですが……。

「まあ、ギルバートの事は仕方が無いでしょう。それよりも、玄関先で何時までも立ち話では……。」

何故かお父様が、公爵のフォロワーに入りました。公爵ほどではないですが、お父様も若干目が泳いでいて挙動不審です。

「お話。聞かせてもらえますね？」

カトレア様が笑顔で確認していましたが、まとう雰囲気明らかに脅迫です。側に居るだけの私でさえ、怖気が走ります。カトレア様はこんな人だったでしょうか？と言うか、何故こんなに怒っているのでしょうか？

公爵とお父様が、カトレア様に連行されて行きます。カリィ様とお母様も不味いと思ったか、三人について行きました。心配ですが、私達もここで立ちっぱなしと言う訳には行きません。

「エレオノール様。ルイズ。取りあえず……。」

私は声をかけようとしたが、エレオノール様もルイズもガタガタ震えるばかりで、私の声は全く耳に入っていませんでした。私達が途方に暮れていると、別邸から老執事が慌てて出て来ました。恐らく広間に控えていたのでしょう。たしか、ジェロームと言う人だったはずですよ。

「申し訳ありません。すぐにお部屋にご案内します。」

ジェロームさんは、申し訳なさそうに頭を下げ私達を案内してく

れました。

荷物を置いて一息つこうとしたら、アナスタシアが部屋に突入して来ました。一緒にモンモランシーも入って来ます。私はこの状況に違和感を覚えました。本来ならモンモランシーも、アナスタシアと一緒に突撃して来るはずなのです。しかしその原因は、モンモランシーの言葉ですぐに分かりました。

「もう。アナスタシアったら、子供なんだから。そんなんじゃ、レディーとしてダメよ」

今のモンモランシーは、昔ギルに対していた時の自分そっくりです。アナスタシアに対して、お姉さんぶりなのでしょう。この事実には、苦笑いしか出ませんでした。

そんな感慨にふける間の無く、扉がノックも無しに突然開きました。部屋に入って来たのは、ルイズでした。そのまま私の後ろに隠れ、背中にへばりつきます。

「待ちなさい！！ちびルイズー！！！！」

どうやら、エレオノール様から逃げて来たようです。エレオノール様は、私の後ろに隠れるルイズを確認すると、怖い顔でズンズンと歩いて来ます。

「ディーネさん。お説教をしなければならぬから、ちびルイズを引き渡してくれませんか？」

ルイズは震えながらも、必死に私にしがみつきます。正直言って、

ここで見捨てるのは私の精神衛生上よろしくありません。

「まあ、エレオノール様。落ち着いてください。いったい何が有ったのですか？」

「生意気なちびルイズが、姉である私を馬鹿にするから！」

「何と言ったのですか？」

「そ　それは……」

途端にエレオノール様の怒りが霧散し、挙動不審になりました。まあ、どの道ルイズの不用意な一言が原因でしょう。

「何が有ったか知りませんが、お茶にでもしませんか？」

私の提案にしぶしぶと言った様子でしたが、エレオノール様は了承してくれました。

お茶の準備が整い、とりとめのない話で談笑しながらお茶会は進行していきます。エレオノール様とこうしてお茶お飲むのは、初めてヴァリエール公爵家にお邪魔した時以来ですから、実に二年ぶりと言う事になります。相変わらずエレオノール様は聡明で、楽しい時間となりました。しかしこのお茶会は、楽しいままでは終わりませんでした。切っ掛けは、アナスタシアの一言です。

「さっきカトリア様が、凄く怖くなったけどあれって如何して？」

この言葉に、エレオノール様とルイズが固まります。聞くに聞け

なかった事なので、アナスタシアが代わりに聞いてくれて助かりました。

「私もカトレア様の地雷は、把握しておきたいです」

「ジライ？」

アナスタシア以外の方が、不思議そうな顔をしました。そう言えば、ギルから教わった言葉でした。

「踏むと爆発する危険な物らしいです。歩くのを会話、踏む場所を話題や言葉に例えると分かりやすいと思います。この場合は禁句の事です」

「へー。面白い表現ね」

エレオノール様が、感心したように呟きました。

「ギルに教えてもらいました。何かをして、損をした時にも使うらしいです。分かっている物は、”見えてる地雷”と表現していました」

エレオノール様は、感心した様に頷いています。ルイズとモンモランシーも、私の説明で何となく分かった様です。しきりに頷いていました。

「つまり、”見えない地雷”より”見えている地雷”の方が、助かるってことね」

「さすがエレオノール様です。その通りです」

「そうね。他の人が踏んだ地雷に巻き込まれるのは、嫌だから教えるわ」

ルイズもエレオノール様の言に納得したのか、しきりに頷いていました。

「……その前に、カトレアとギルバートって付き合ったらうまく行くと思う？」

エレオノール様の言に、ルイズ以外の全員が迷わず首を横に振りました。

「それは絶対にあり得ないと思います。ギルの好みは知りませんが、明らかにカトレア様を避けています」

私の言葉に、エレオノール様を含めた全員が頷きました。

「……それよ。それが問題なの。あの子、最初にギルバートが家に来た時から、ギルバートが気になってるみたいなの。話をすると必ず話題に出て来ていたから。家の皆もあの子が恋を出来たつて、複雑な思いはあっても喜んでいたわ。でも去年母さまが、ギルバートを連れて来た時に、何か有ったみたいなの。あの子、ギルバートと結婚するって言い出したのよ」

エレオノール様は、いったん言葉を切ると大きなため息を吐きました。そして、視線をルイズに向けます。それに気付いたルイズは、涙目になり首を横にブンブン振りました。

「原因はちびルイズが、カトレアとギルバートを引き合わせた事み

たいなんだけど……」

「わ 私悪く無いもん。ちい姉様に頼まれて……」

ルイズが反論しましたが、エレオノール様が一睨みで黙らせました。

「いい!!ちびルイズ!!良く考えなさい!!」

「はい!!」

「気になる男の子が出来ました。でもその男の子は、何故か自分を避けるのよ。嫌だと思わない?悲しいと思わない?」

「はい!!嫌です!!悲しいです!!」

「経緯はどうあれ、その男の子がお見舞いに来てくれました。しかも、素敵な帽子をプレゼントしてくれました。嫌われてなかったと思わない?嬉しいと思わない?」

「はい!!とっても嬉しいです!!」

「そうでしょう!!今まで嫌われていると思っていた分、ころつと行くでしょう!!しかもこれで、あの帽子を貰ってないのは私だけよ。仲間外れにして楽しいの?自慢したいの?」

何時の間にか論点が擦り替わっているのは、気のせいでしょうか?そう思っていると、エレオノール様が立ちあがりルイズの頬に手を伸ばします。頬を抓るつもの様ですが、手の動きが遅いのでルイズなら簡単に避けられるでしょう。そう思い考えをまとめようと、

思考の海に身を投げ出そうと……。

「ちび!!ちびルイズ!!」

「いだい~~~~」

何故避けないのですか?と言う疑問に駆られましたが、すぐにエレオノール様の教育の賜と気付きました。恐らくルイズの様子から避けたら罰を倍にする等の教育を施したのでしょう。ギルに同様の教育を施すか一瞬悩んだのは、私だけの秘密です。それよりも、このまま見ているのは、私の精神衛生上よろしくありません。

「エレオノール様。話の続きをしましょう」

「ムツ……。分かったわよ」

多少不満そうな表情が見えましたが、エレオノール様は席に戻ってくれました。

「実際問題、カトレア様とギルの結婚は難しいのです」

「うう……。そうなのよね」

「えっ?どうして?」

私とエレオノール様の会話に、モンモランシーが初めて割り込んで来ました。アナスタシアも不思議そうな顔をしていたので、分からない様です。ルイズは暗い顔をしていたので、既に誰かから話を聞いているのでしょう。そんなモンモランシーに、エレオノール様が説明を始めます。

「とにかくカトレアの健康状態ね。あれでは子供が産めないわ。跡継ぎが産めない女は、貴族の嫁として問題が有るわ。特にギルバートは嫡子だから、これは譲れないわね。まあこの問題は、ギルバートのおかげであの子も頑張っているから、王都に出て来れるまで回復しているのだけど」

そうか。そういう問題も有るのか。しかし私が懸念しているは、その問題じゃありません。

「一番の問題は、ギルの気持ちでしょう。ドリユアス家の人間は、例外なくギルの気持ち最優先で動きますよ。．．．そう。例外なく」

最後の「例外なく」を強調したので、エレオノール様もルイズも私の言いたい事を理解してくれた様です。エレオノール様は怒りで顔を真っ赤にし、ルイズは顔を真っ青にして震え始めました。

「ディーネ！！貴女ヴァリエール公爵家の娘を．．．」

「本気で嫌がっている男の下に嫁いで、カトレア様が幸せになれると思っっているのですか？」

「うっ．．．。そうね。貴方の言うとおりだわ」

こうしてお茶会は、気まずい雰囲気のまま終わりを迎えました。この後何故か、ルイズがディーネ姉様と呼んで来るようになりました。．．．エレオノール様を言い負かしたからでしょうか？

この日の夕食の席に、公爵とお父様は居ませんでした。カトレア

様の機嫌は、元に戻っていたから良かったのですが、カリー又様とお母様の機嫌が物凄く悪くなりました。帰った時の事を考えると、頭が痛いです。

明日から発着場に居た様な貴族の相手を、しなければならぬのに……。

- - -王都 - - - S I D E デイーネ E N D

アンスールの月ティワズの週も半ばに達し、調査を終えて帰って来ました。家の様子から察するに、既に父上達は帰って来ているようです。

「クリフ。ドナ。調査中の護衛お疲れ様でした。今回の護衛任務はこれで終了です。私は今回の調査内容を、父上と母上に報告に行きます。解散してください」

私の号令に比べると、クリフとドナが騎獣舎へ向かって騎獣を飛ばしました。それを確認すると、老執事のオーギュストと一緒にデイーネとアナスタシアが出迎えの為館から出て来ました。

「ただいま戻りました」

「お帰りなさいませ。坊ちゃん」

「お帰りなさい。ギル」

「お帰りなさい。兄様」

オーギュストには、いい加減坊ちゃん言うの止めてほしいです。見た目的に違和感はないのでしょうか、中身的には違和感あり過ぎです。オーギュストは私の中身を知っているのです、呼び方を変えてほしいと再三言っているのですが、本人全く直す気が無い様です。私も半ば諦めています……。

「調査が終了したので、父上と母上に報告したいのですが」

「ただいま旦那様と奥様は、接客中でございます」

「客？」

「どうも王都から来た商人の様です」

私達は館の中に移動しながら話していました。

「ふざけるな！！」

丁度客間の前を通った時に、突然父上の怒鳴り声が響きました。いけないとは思いましたが、私達は聞き耳を立てます。

「しかし、返していただかなければ私たちが困ります」

「ドリュアス家がした借金では無い！！」

借金？

「書類は正式な物ですし、王印も有ります。これは間違はなく、現領主のドリュアス家が返済しなければいけない借金です」

「くっ」

「とにかく払えないのでしたら、利息分でも払っていただきます」

「どうやら、父上も母上も言い返せない様です。」

「今日の所は、これで失礼します」

「どうやら商人は帰る様です。私達は隣の部屋に隠れて、商人をやり過ぎしました。そしてすぐに、父上達の居る客室に突入します。」

「父上！！母上！！借金とはどういう事ですか！？」

「ギルバート。帰っていたのか？」

「はい。先程戻ったばかりです。それより、借金とはどういう事ですか？」

「私の質問に、父上は額を抑え大きなため息をつきました。母上は……、見なかった事にしよう。大気がチリチリ言っています。」

「……父上」

「やられたよ。フラークニッセ領とローゼンハウト領の名義で、借金が有ったのだ。いや、有った事になっているか？通常は領名義での借金は御法度なのだが、王印が押して有る以上有効だ。合計で30万エキュール近い借金だ。利子も法外で、月一割だそうだ。来週には33万エキュールに膨れるな」

父上の言葉に、私の頭を抱えてしまいました。ダイヤモンドと”水の精霊の涙”と言う切り札が無ければ、ドリュアス家が用意できる金額は、40〜50万エキュ位です。確実に開拓が失敗する金額ですね。しかし切り札が有るとはいえ、ここで止まれば事態は悪化します。下手をすれば、切り札さえ飲みこまれかねません。

「父上。先程王印が押しであると聞きました。王家に確認しましょう。同時にヴァリエール公爵に、手形の用意をお願いしてみたいかがでしょうか」

私の言葉に、父上が渋い顔をしました。

「状況から見て、返済を回避する事は恐らく不可能でしょう。利子を出した分だけ、敵を儲けさせるだけです。ならば敵が嫌がるのは、いきなり全額返される事です。借金が有るといふ事実は、お金を借りるのに大きな弊害となります。利子と借金の妨害が、敵の目的で間違いありません」

「その通りだな。それと同じ手が使えぬように、手も打たねばならいな。私はその足で、ヴァリエール公爵とクルデンホルフ大公に金を借りて来る。ダイヤモンドと道具袋を貸してくれないか？」

私は大きく頷くと、部屋にダイヤモンドを取りに歩き始めました。

今回の妨害は、リッシュモンの野郎が犯人で間違いないでしょう。

必ずこの借りは返す。覚えてやがれ。

第三十八話 借金？借金？また借金！？（後書き）

書くのが辛いです。（プライベート的な意味で）

と言っか、五時回っている・・・。

でも書き始めた以上、絶対完結させます。

最近モチベーションがダダ下がりですが意地です。意地。

地名は、それっぽい国のそれっぽい地名をもじりました。

ご指摘が有れば、変更します。

ご意見、感想お待ちしております。

第三十九話 エグイ？それはお互い様です

こんにちは。ギルバートです。領名義の借金が発覚しました。正直あり得ない事ですし、こんな手を打って来るとは思いませんでした。

私は自分の部屋の扉を開け中に入ると、隠してあった箱を二つ取り出し中身を確認します。二つの箱には、それぞれ真球の形をしたダイヤモンドが入っていました。

ちなみに箱は、中身に相応しい物を父上と二人で作成しました。一つあたりの作成費は、百エキュールかかっていなかったりします。と言っても、この箱を売れば4〜5千エキュールはするでしょう。《錬金》万歳としか言えません。

脱線しかけた思考を、強引に元に戻すと箱を道具袋にしまいます。これで道具袋の中身は、インビジブルマント・ダイヤモンドと箱×2・20万エキュールです。これだけの物が入っていて、全体の収納量の一割もつかっていないのは凄いです。魔法の道具袋バンザ……また思考がずれました。現実逃避している場合では無いです。

自室から出て、父上達の所に戻ります。

先ず冷静に考えて、借金を無効化するのは難しいと考えておくべきです。簡単に無効化出来るなら、こんなにスクの高い手を打って来るはずがありません。王印の件も有りますし。となると、何処に返済義務が生じるかですね。

先ず第一候補が、王家になります。王印も有り一度王領になって

いる訳ですから、王家が返済するのが筋です。しかし王国の財政状況を考えると、財務を担当している内政官達に間違いなく拒否されます。ただでさえ、水の精霊の断水の件で大打撃を受けたばかりです。無理に払おうとすれば、何処から予算を削るかで内部分裂や抗争が起こりかねません。そう考えると、王家が自由になる資金は割と少ないですね。

次の候補が、この借金の原因になった者です。不確定要素なので今の所なんとも言えませんが、ハッキリ言って期待出来ません。

そして最後の候補が、現領主であるドリユアス家になります。開発資金を切り崩せば、払えない金額でないのが悲しい所です。リッシュモンから奪った20万エキユーも有りますし。・・・認めたくありませんが、金の出所さえ隠せれば問題無しですね。ヴァリエール公爵も協力してくれますし。

王家が払えないのに、弱小？のドリユアス家が払える現実に凹みます。トリステイン王国の内部腐敗が、それだけ進んでいると言う証拠です。・・・鬱になりそう。

次に借金を返すかですね。これは残念ながら、返さなければなりません。その理由は、これからの資金調達です。ドリユアス家は開拓の為に、これから借金をして資金を集めなければなりません。そんな家が「借金を踏み倒す家」と言う醜聞が立てば、如何なるでしょうか？ヴァリエール公爵も資金を貸しにくくなりますし、クルデンホルフ大公は一銭も貸してくれなくなるでしょう。相手が唯の商人なら、犯罪者として一網打尽に出来ませんが、バツクにリッシュモンが付いて居る以上、不可能と考えるのが妥当です。

払わなければ、醜聞をたてて資金調達妨害。更に信用問題で煽ら

れば、マジ商会にも大きな打撃を受ける。．．．．．確実に開拓失敗コースですね。

王家が払うなら、内部抗争が勃発（起きなければ煽る）する。その際に力を取り戻す。更に抗争を治める為に、ヴァリエール公爵家とクルデンホルフ大公家は、手間・資金・人材を取られる。．．．．．これが一番不味い開拓失敗コースですね。

対応にもたつけば、利子により状況は更に困窮する。．．．．．時間もおちらの味方ですね。

．．．．．こうなると、大人しく払うしかないですね。しかし、せめて一矢報いたいです。

そんな事を考えていると、私の頭の中に一つの案が浮かびました。使えるかどうか分かりませんが、一応父上に報告しておきましょう。

．．．王都．．．SIDE アズロック

あれからすぐに出発して、ようやく王都に到着する事が出来た。時間的に途中で暗くなるので、騎獣はグリフォンでは無くマンティコアに騎乗した。お陰でいつもより疲れた。護衛もいつもの二人ではないので、王宮等での対応に若干不安が有る。

しかし不満ばかり言っていられない。ギルバートから借りた道具袋から、インビジブルマントを取り出し夜の王都に侵入する事にした。

「私はヴァリエール公爵に接触する。お前達は朝になったら、騎獣舎に騎獣を預け公爵の別邸に来てくれ」

「はい」

夜遅いこの時間なら、公爵は別邸に居るはずだ。途中でマントを被ると、王都の外壁を《飛行》フライで飛び越え、難なく公爵の別邸前まで来れた。インビジブルマントの効果に、思わず感嘆の声が漏れそうになる。しかしここからは、マントの力は必要ないだろう。物陰でマントを脱ぎ、道具袋にしまつと門番の前に移動する。

「アズロック・ユース・ド・ドリユアスである。夜分に申し訳ないが、公爵に火急の用が有る。取り次いでくれ」

「ド　ドリユアス侯爵？侯爵は、領地に居る筈では？それに護衛も・・・」

門番が、私に対して戸惑いの声を上げる。

「《探知》ディテクトマジックを使ってくれてかまわない。火急の用件なのだ。速く取り次いでくれ」

「はい！！侯爵。失礼します」

門番の一人が《探知》を使用した。

「ご本人に間違いない。ご案内します」

門番の一人に館内に通され、使用人に引き継がれ客間に通された。暫く待つと、公爵が慌てて入って来た。

「アズロック。速かったな。来るなら明日の早朝と思っていたが・・・」

「?・・・如何いう事です?」

お互いの様子に、嫌な予感を覚える。

「王の召喚命令で王都に来たのではないのか?」

「召喚命令!?!」

私の反応に、公爵の顔が歪む。

「まさか・・・。そちらも厄介事か?」

「・・・はい。出来れば、聞き耳が無い所で話したいのですが・・・」

「分かった」

歩き始めた公爵の後を追い、別の部屋へ移動した。ここに来た際に、何度か使用した事が有る部屋だ。

「では話を始めよう。最初はそちらの用件から聞こう」

公爵に促され、私は今回の事を話した。フラーケニツセ領・ローゼンハウト領名義で借金が有り、その支払いを求められた事。そして、その金額が30万エキユである事と、月に一割と言う高額な利子を突き付けられている事を話した。止めに、王印が有った事と

商会と商人の名前も話した。

「……そうか」

公爵が渋い顔をしながら呟いた。

「次はこちらの番だな……。本日王都にて、公金横領で逮捕者が出た。情報提供者はリッシュモンだ。罪状は、フラーケニツセ領とローゼンハウト領の防衛費横領だ」

「まさか……」

「そのまさかだ。消えた防衛費は30万エキユー近い金額だ。そしてその全額が、未払いになっている。商会の名前が一致し、請求額が同額で王印も有りなら間違いなく同一のものだな。……アズロック。一応聞いておくが、返済を求めて来た商人を……」

「大丈夫です。手を出していません」

公爵はホツとした様に、胸をなでおろしていた。

「そうなる、請求は正当な物となるのですか？」

「そうなる。本来なら、横領した犯人の財産を没収し補填するのだが……」

公爵が途中で口ごもった。

「回収できる金銭が、横領額より少ないのですか？」

「ああ。見込みでは8万エキュール程だ。22万エキュール足りない」

「そんなすぐばれる様な事をしたのは、誰なのですか？」

「アズロックは覚えているか？最初の謁見の時に、余計な口出しをして来たリッシュモン派の奴だ」

正直に言わせれば、印象が薄過ぎて覚えていない。私が反応に困っていると、公爵は私の内心を察したのだろう。苦笑いをしていた。

「まあ、そいつの単独犯と言う事になっている」

「なっていると云う事は……」

「ああ。明らかに部下に犠牲を強要して、この状況を作り出している。その者に減刑を餌に供述を取っているが、切り捨てられただけあって良いネタは一切出て来ないのだ。恐らく、リッシュモンの関与を証明するのは無理だろう」

公爵が苦々しい表情をしている。私も公爵の言には、溜息しか出なかった。そうなれば、未払い分の金銭をどうするかだ。

「それで王家からは、不足分を出す事が出来るのですか？」

「無理だ。水の精霊の断水事件で、少額ながら各部署の予算削減を行っている。払えない額ではないが、無理に払えば反発は必至だ」

「内部抗争が起これば、国自体がつぶれかねないと言う事ですね。

ゲルマニアがこの隙を、黙って見ている訳が無い。と言う訳ですか・

「・・・」

「その通りだ。そしてそれを理解している貴族が、この国には少なすぎる。かと言って借金をなかつた事にすれば、醜聞被害で開拓が失敗する。結果として、支払いはドリユアス家が追う事になるだろう。しかし利子を考えれば、どこから借り直した方が賢明だ」

「そうになると、開拓資金から切り崩すしかないですね。公爵は我々に、どれ位の資金投資を考えていただいているのですか？」

失礼かと思つたが、状況が状況だけにズバリ聞いた。

「40万エキューだ。これ以上は出せん。利子は年一割で考えている」

予想金額より多い。利子も大分譲歩してくれている。しかしここから更に良い条件を、公爵から引き出さなければならぬ。

「では、これを質に出せば如何でしょう？」

私は道具袋から、ダイヤモンドが入つた箱を取り出し公爵に渡した。

「これは見事な宝石箱だな。・・・中身は、・・・ガラス玉？いや・・・まさか！！」

「お察しの通りダイヤモンドです。《探知》で確認してください」

「馬鹿な！！本物なら6000カラット近く有るんじゃないか！？・・・！！本物だ・・・」

公爵は驚きながらも《探知》を発動し、ダイヤモンドが本物である事を確認した様だ。公爵の反応に、以前の自分が重なり苦笑いしか出来ない。

「ダイヤモンド自体はマギからの預かりものですが、本人から何かあった時は売る様に言われている物です。金額の上乗せと、利子の見直しをして頂けますか？」

「……またマギか。相変わらず非常識だな」

私の質問に、公爵は頭を抱えてしまった。暫く唸った後に、公爵は口を開いた。

「倍の80万エキュー出そう。利子は年4分……いや3分程度でうだ」

やはり公爵は、信じられないほど破格の条件を出してくれた。ダイヤモンド自体は、マギ商会に確認した所80万エキュー前後の価値が有ると評価されている。

「十分です。ありがとうございます。それからこのダイヤモンドの存在は、秘匿していただけると助かります」

「……よろう」

これで大筋の話は終わりだ。後は明日にでも、王にドリュアス家が返済を持つと報告すれば良い。上手くすれば、免税期間の延長を勝ち取れるかもしれない。しかし十分に対策出来たとは言え、このままリッシュモンに大人しく金を払うのは面白く無い。幸いギルバ

「トの案が使える様だし、その辺の話をするのも良いだろう。」

「リツシュモンは今回の件で、どれほど関わっているのですか？」

「黒幕なのは間違いないだろう。しかし表向きは、情報提供者以上の関わりを見せていない。流石に露骨に関わるのは不味いと判断したのだろう。例の商会を支援している貴族の中にも、奴の名前は無い」

「最終的に30万エキューは、誰の懐に入ると思いますか？」

「当然リツシュモンだろう。だが、手形を追うのは不可能だぞ」

公爵の言葉に、私は笑みを抑えきれなかった。手形を追うのが不可能な理由は、他の手形や現金と混じると追跡が不可能であるからだ。

「もし可能ならどうですか？」

「可能なのか？」

「条件がいくつもあります。先ず一つ目は、30万エキューの手形を一枚だけ発行する事です」

手形の額の大きさは、良識と言う物が有る。30万エキューもの手形なら、当然分割して発行するのが普通だ。今回の場合なら、一万エキュー30枚や五千エキュー60枚と言った風にだ。それをあえて、今回は無視する。

「!!!!.....30万エキューの手形を一枚だけ発行すると言うの

か？しかし現金に換えられたら？王家と当家が協力しても、即金では30万エキユーを用意出来ないかもしれないぞ」

「当家で、20万エキユーの現金を既に用意してあります」

「なっ！！何処から！？」

「マギ商会を使って、なんとかと言った所です。現物はこの道具袋の中です」

ダイヤモンドを出した道具袋を軽くたたく。公爵は呆れた様な顔をしていた。嘘を言うのは心苦しいが、今回ばかりが仕方が無い。

現金が用意できているなら、受け取りと言う手はこちらに有利に働く。それは大量の現金を、どこかに運び込まなければならなくなるからだ。運び込んだ先を調べれば、リッシュモンに辿り着く証拠が出て来るだろう。しかし、関係ない所に分散して少しずつ回収されれば、対応は難しい。

「次の条件が、手形を曰く付きの物にする事です。手形を持つ者や変えた現金を受け取った者が、王家に睨まれると噂を流すのです」

「……随分エグイ手を使うな」

「それはお互い様です」

「……それもそうか」

私もギルバートから話を聞いた時は、公爵と同じ反応をした。その時ギルバートに、全く同じ言葉を言われたのだ。その為、公爵の

気持ちは良く分かる。

後は明日国王に謁見して、表向き当たり障りない事を話して、今の内容は公爵経由で知らせれば問題ない。後は現金を引き渡して護衛と合流し、クルデンホルフ大公から資金を引き出しに行くだけだな。

上手くすれば今回の件で、リッシュモンを完全に潰す事が出来るかもしれないな。

---王都---SIDE アズロツク END

父上は上手くやっているのでしょうか？心配ではありませんが、ここは自分の仕事に集中しなければなりませんね。

そう。特に塩田の設置準備です。

設置場所は、森の南西のオースヘムに決定しました。オースヘムには川が無く、テール山脈からの乾いた吹き下ろしが、一年を通じて吹いています。海水も綺麗で文句無しです。（フラーケニッセには、川が有ったので除外しました）

その中には、手押しポンプの生産や風車の設計も含まれます。手押しポンプは以前作った事が有りますし、型が残っているので問題ないのですが、風車の設計に意外とてこずっています。手押しポンプと風車を組み合わせて、効率良く海水を汲み上げるのが目標です。同様の効果が有るマジックアイテムは、目が飛び出るほど高いし、維持費もシャレになりません。

風車は未完成ですが、王家の正式な許可が下りれば、オースヘムにて施工開始できる状態です。

そう言えば最近、訓練をサボりっ放しですね。ディーネ達に大差を付けられなければ良いのですが。

第三十九話 エグイ？それはお互い様です（後書き）

一応借金の正体発覚です。

作者的には納得しているのですが、どうでしょう？

感想お待ちしております。

お外が明るいです。作者は寝ます。おやすみなさい。

第四十話 もっとエグイ？塩爆弾の恐怖！？

――王都――SIDE アズロック

一晩明けて、早朝から王宮へ行く事になった。対応するのは、早い方が良いと判断したからだ。公爵もこの意見には賛成の様で、共に馬車で王宮へ向かう事になった。

「アズロック。今王宮は何処から予算を削るかで、殺気立っている。今日も朝からその会議が開かれる予定なのは話したな？」

「はい」

「ドリュアス家の領地の事とは言え、今回の件にアズロックは無関係だ。領主として会議に出なければならぬが、本来なら会議室の飾りと言って良いだろう」

私は公爵の弁に頷き、その続きを言う。

「分かっています。しかし、今回はそうならない」

「その通りだ。そこで昨晚の話につながる。昨晚伝えた注意事項は、しっかり頭に入っているか？」

公爵の言葉に、私は再び頷いた。

「うむ。それならば問題無い。落ち着いて行けば大丈夫だ」

恐らく公爵は、私が緊張しているのを感じ取ったのだろう。その

事実に、自分がまだまだであると実感させられる。しかしそれも仕方が無いだろう。今回対峙する相手には、王も含まれるのだから・・・。

そんな事を考えていると、馬車が王宮に到着した。公爵と共に馬車を降りると、衛兵が驚いた様な表情を見せた。

「ヴァリエール公爵・・・それに！！ドリュアス侯爵!？」

驚くのも無理ないだろう。ドリュアス領に召喚の使者が出立したのが、昨日の昼前と聞いている。使者が領に到着するのは、どんなに急いでも夕刻になる。私の騎獣は、夜目が利かないから到着は今日の夕刻以降となる筈だからだ。

驚く衛兵を横目に、公爵と共に王宮内に入る。

「アズロツク。会議前に、国王に昨晚の事を話しておく。アズロツクも国王に挨拶だけして、会議室で待っていてくれ」

公爵と共に国王の執務室に行き、簡単に挨拶をすませ会議が行われる部屋へ向かう。国王も含め、私の姿を確認した者は皆驚きの表情を見せていた。しかし例外は居るものだ。リッシュモン派の一部の者達は、私の姿を確認するとニヤニヤと笑って見せたのだ。

（イケニエの到着を喜んでと言う事か。だが、イケニエはどちらかな）

私は心の中で気合を入れ直すと、会議室に入り自分の席で会議の開始を待った。会議室に人が集まり、次々に空席が埋まり最後に公爵と国王が席に着くと、先程まで会議室にあったざわめきが消え失

せた。

「これより、フラーケニツセ領・ローゼンハウト領防衛費横領事件対策会議を始める」

国王の宣言に続いて、国王の補佐らしき人物が口を開いた。

「今回の事件は……」

今回の事件の概要を、補佐らしき人物が説明し始めた。神官着を着たその人物は、マザリーニ枢機卿だ。細身ではあるが、なかなか鍛えられていて精悍な印象を受ける。国王の手前あまり表には出ないが、トリステイン王国で事実上の宰相を務めている人物だ。

「……以上です」

枢機卿の説明が終わった様だ。しかし何故この席に、マザリーニ枢機卿が出て来たのだろうか？私は疑問に思ったが、その疑問は会議が進むと解けた。

「問題は不足分の22万エキューを、如何するかです。国の予算から出すとなると、何処かの予算を削減しなければなりません」

マザリーニ枢機卿の言葉に、会議室内が殺気立つ。

「魔の森の件が解決したので、軍部の予算にかなりの余裕が有るでしょう？軍事費を削減すれば良いのではないですか？」

「今回の問題は、財務担当の起こした事件だろう。自分達が起こした不始末は、自分達でどうにかするのが筋だろう」

「我々の部署は何時もギリギリです。無い袖は振れません。出せる所が出すのが、当然ではありませんか？」

「軍部も再編成で予算に余裕など無い！！むしろ追加予算が欲しいくらいだ！！」

既に文官と武官で、対立する公式が出来あがっていた。一度削減された予算は、取り戻すのが非常に困難である為、双方必死になつて舌戦を繰り返している。

（なるほど。マザリーニ枢機卿が出て来たのは、この為か……。この場で国王の補佐官が、文官である事は武官たちは快く思わないだろう）

舌戦は激しさを増し会議は白熱しているが、リッシュモンは未だに沈黙を守り続けている。ハッキリ言つて不気味だ。

暫くこの状態が続いたが、国王は埒が明かないと判断したのか大きく息を吸い込んだ。

「……静まれ！！静まれ！！」

国王の大声に、文官も武官も押し黙った。流石国王陛下である。威厳の塊の様な人だ。

「先程から出せぬ出せぬと騒ぐばかりで、建設的な意見が何一つ出ていないではないか！！この場合は、その予算をどうするかを話し合う場である。会議の趣旨を理解しているのか！？」

国王陛下のお叱りの言葉に、会議室がシンと静まり返る。その静寂を破ったのは、リッシュモンだった。

「恐れながら陛下」

「高等法院長か？申してみよ」

国王に発言を許可されたリッシュモンは、嬉々とした表情を一瞬だけ浮かべる。それを咳払いで誤魔化してから喋り始めた。

「何処も予算が無いのは事実でございます。先程も誰かが言っていました。無袖を振れないのは当然です。ここは一時的に、資金を持っている者が立て替えるのが一番と思います」

リッシュモンの言葉に、会議室内がざわついた。

「ドリュアス侯爵は、開拓のための資金を大量に確保していますな？ならばここは、ドリュアス侯爵にお支払いいただくのが、一番と思います」

リッシュモンの言葉に、会議室内が静まり返った。ここで反論すれば、反論した者の部署が予算削減される雰囲気、既に出来あがっていた。敵ながら流石としか言いようが無い。だがここで私は、大人しくハイと言う訳にはいかないのだ。

「リッシュモン殿。申し訳ないが、私が確保している資金は開拓の為の物だ。残念ながら「はいそうですか」と、出せるものではない。それにその行為は、トリステイン王国が一貴族に借金を押し付けた事になる。対外的に「国の威信を傷つける大問題」になると思うが、その辺りはどうお考えなのかな？」

「押し付ける訳ではありませんよ。あくまで一時的な措置にすぎません。来年以降の予算から、お返しすれば良いではありませんか？」

そう言う事か。誤魔化して払わないか、物納にしてガラクタを押し付ける。これで殆どの資金を、懐に入れる気だな。二つの返済を使い、資金の二重取りを考えてるのか。強欲な奴だ。

今回のリッシュモンの手口を見る限り、イケニエを用意され誤魔化されるのが関の山だ。周りの者達も、リッシュモンの言に反論できないな。ならば……。

「陛下。よろしいですか？」

「なんだ？ドリュアス侯爵。申してみよ」

「ここからが勝負だ。」

「不足分は全て当家で負担します」

「なっ！！」「馬鹿な！！」

会議室内が喧騒が広がる。喧騒の中身は、「困惑」の一言に尽きる。

「静まれ！！……その様子からすると、交換条件が有るのだからっ？」

「はい。陛下のご推察の通りです」

再び喧騒が巻き起こる。その中には、私への罵声も含まれていた。

「静まれ！！・・・ドリュアス侯爵。続きを」

「はい。現状で開拓資金には、目処はついて来ました。しかし、どうしても足りない物が有ります」

「・・・なんだ？」

「時間です。免税期間と言う事で、5年間の猶予をいただいております。しかし5年間では、領地の体裁を整える事も出来ないと見ています」

この場合は免税期間を使って、税金を納めながらも借金を返せる状態まで、領地環境を持っていかなければならないと言う事だ。5年では正直言ってキツイのだ。

「具体的な期間は？」

「最低でも5年加算して、10年間の猶予をいただきたいです。出来れば7年加算していただき、12年ほど見ていただきたいです」

無茶苦茶な要求に聞こえるが、褒美を考える席で実際に免税10年と言う意見は出ていた。決して無茶な要求では無い。

「陛下！！私は反対です！！王国内の財政状況を考えれば、それほど長期間の免税は認められません！！」

案の定リッシュモンが、反対意見を述べて来た。しかしその顔には、困惑の表情がありありと浮かんでいる。恐らく反射的に、私の

意見を通さない様に反論したのだろう。まあ、ダイヤモンドと盗んだ20万エキュールが有るからこそできる荒技なので、それも仕方ないだろう。

「リツシュモンの意見も尤もだ。他に何かないのか？」

「資金も辛いですが、一番辛いのは時間です。陛下。どうかご検討をお願いします」

私が頭を下げると、国王が考え込み周りからざわめきが起こる。暫く考え込んだ国王が、意を決した様に口を開いた。

「そう言えばドリユアス侯爵は、塩田の設置許可を申請していたな」

「……あつ。はい」

私が返事をする、場が静まり返った。

「ドリユアス領内で生産した塩は、国内外問わず自由に取引する事を許そう」

「そつ……そんな」

現在のハルケギニアの技術では、大規模な塩田を作っても生産量に限界がある。かなりの資金源にはなるが、22万エキュールとは釣り合わない。それが、この場に居る貴族の共通認識だ。更に言えば、王家が独占していた塩取引の場にドリユアス家が割り込むと言う事になる。それは今後塩取引に関して、ドリユアス家が責任の一端を持つと言う事になるのだ。

「もちろん免税期間も見直す。だが、3年の上乘せが限界だ。どう思うリッシュモン」

「はい。よろしいと思います」

リッシュモンが了承した事により、反対者がいなくなり今回の会議は終了となった。

・・・王都・・・SIDE アズロツク END

・・・王都・・・SIDE リッシュモン

ニヤニヤと歪む顔を、必死に抑えて自分の執務室に戻って来た。ここまで抑えて来た感情が、抑えられなくなる。

「くっくくくっ！！はははははははははは！！資金より時間を取った様だが、完全に裏目に出たな！！馬鹿が頭を使おうとするからだ！！」

私の口から意図せず言葉が漏れたが、今回の会議は本当に笑いが止まらない結果になった。ヴァリエール公爵とドリユアス侯爵は、無い頭を絞った様だが「馬鹿な策士策に溺れる」と言う奴だ。

今回の会議では、3年間の免税期間延長を許してしまった。しかしドリユアス侯爵は、それ以上の爆弾を抱える事になったのだ。一部とは言え塩取引の責任を担うと言う事は、塩に関する外交もしなければならぬと言う事だ。当然何らかの事情で、塩が高騰すれば責任を取らなければならなくなる。

「ゲルマニアの担当官に裏金を積みめば、ドリユアス侯爵のミスで岩

塩取引中止を演出できる。その時責任を取り切れますかな？」

思わずもれてしまった言葉に、慌てて周りを確認する。周りには己の部下以外は、誰も居なかった。そしてまた大笑いを始めた。

だめだ。愉快過ぎて抑えきれない。

- - - 王都 - - - SIDE リッシュモン END

- - - 王都 - - - SIDE アズロツク

会議終了後、私と公爵は国王から食事に誘われた。国王からの誘いを断る訳にはいかないので、当然のごとく了承する。しかし昼食まで時間が有ったので、王の執務室に集まる事になった。

「ヴァリエール公爵。ドリュアス侯爵。本当にあれで良かったのか？」

「ここは、私が返事をする事にした。

「はい。公爵からお聞きになっていると思いますが、ドリュアス家は東方の製塩技術を獲得しました。これにより、これまでにない高効率で大規模な海水塩の製塩が可能です。もうゲルマニアの岩塩に、高い金を払う必要がありません」

「・・・そうか。しかし、なかなかエグイ手を考えるものだな」

「エグイのはお互い様です」

「それもそうだな」

私と公爵の声が完全に重なった事に、国王は苦笑いを浮かべた。私は聞き耳防止出来ているか確認し、もう一度確認の為国王に段取りを話す。

「塩田が完成して軌道に乗っても、暫くは塩の販売は規制し在庫を溜めます。そして折を見て、私はゲルマニアに使者として出向きます。間違いなくリツシユモンは、そこで裏金を積み岩塩の取引を止めるでしょう。そこで在庫の塩を、一気に市場に流します。塩の値段を有る程度下げ、シェアは岩塩から海水塩に取って代わる事になるでしょう」

「エグイな」(公)

「ああ。エグイ」(王)

あまりエグイエグイ言わないで欲しいものだ。ギルバートは4アルパン程度の塩田を考えている様だが、今回の作戦を上手く行かせるためには、20アルパンほどの塩田を設置する予定だ。計算上はこの塩田だけで、塩を輸入しなくとも自給自足できる。その気になれば、トリステイン王国は塩の輸出国になれるだろう。ギルバートがこの話を聞けば「オーバーワークです」と言って、泣くかもしれないが。

「塩の件もそうだが、手形の件も考えるとドリユアス侯爵は、敵には容赦しない性格だな」

あれ？陛下、何故そのような評価が？

「ドリユアス家の人間は、全員似たような者です」

えっ？公爵もそう言う評価？少なくとも、ギルバートより腹黒く無いと思うのだが。

「ちょ ちよつと待ってください。今回の手法は、敵に合わせて仕方なくとつたままで・・・」

「はははははっ！！解っているよ。侯爵の人となりは知っているつもりだ」

「そうだぞ。アズロック。塩の件は殆ど私の案だし、手形の件も案を出したのはアズロックでは無かるう」

「なに・・・。ドリュアス侯爵には、そのような知恵者が部下に居るのかね。機会が有れば、是非紹介してもらいたいな」

国王が笑いながら聞いてきたが、私は笑ってごまかしておいた。塩田設置で負担をかけているのに、これ以上の負担をかける訳にはいかないだろう。

帰ったらギルバートとシルフィアに、なんて言い訳しよう。

・・・王都・・・SIDE アズロック END

こんにちは。ギルバートです。月も変わって、ようやく父上が帰って来ました。私は我慢できずに、早速王都の話聞きに行きました。

「父上。借金の件は如何になりましたか？」

「早速だな。だが、同じ話を何度もするのは面倒だ。全員を執務室に集めてくれ」

「はい」

私は元気良く返事をする、早速家族全員に集合をかけた。

一番最初に執務室に来たのは私でした。遅れて母上・アナスタシア・ディーネの順に、執務室に来ました。父上が一番最後です。

「待たせたな。今回の収穫について今から話す」

父上が口にした話は、概ね上手く行った事を示していました。公爵から引き出した資金80万エキュール・利子年3分・大公から引き出した資金60万エキュール・利子年5分・免税期間の3年延長・塩の取引権取得。聞く限り大成功の内容です。手形の件の様に、まだ結果が出てない物も有りますが、ディーネとアナスタシアは凄く喜んでいました。しかし、私と母上は素直に喜べませんでした。

「アズロツク。塩の取引権の取得についてだけど……」

母上が思わずと言った感じで、父上の声をかけました。

「解っている。取引権を取得したと言う事は、塩の取引に責任を持たなければならぬと言う事だ」

「父上。それは……」

場の深刻な雰囲気を感じたのか、ディーネとアナスタシアが黙りました。

「対策はちゃんとある」

父上がそう言いながら、何故か私を見ました。何か……物凄
い嫌な予感が……。

「ギルバート。出発前に、塩田の話覚えてるか？」

実は出発前に、父上から限界まで塩田を設置したらどうなるか冗
談交じりに聞かれました。その時は、オースヘムに20アルパン
超の土地が使えると答えています。しかしその時の話の結論として、
王家が黙認できる生産量を逸脱しているとりました。出発前にし
た、ただの軽口だったのに……。

「……まさか」

「察した様だな」

「塩田に当てるのは、4アルパンのみで……」

私は認めたくなくて、首を横に動かしていました。完璧にオーバ
ーワーク決定です。と言うか、死にます。過労死です。本気で勘弁
してください。

「出発前に言っていた20アルパンに、全て塩田を設置する事を命
じる。半年以内にドリュアス家の塩田のみで、トリステイン王国に
必要な塩の生産を行うのだ」

私は思わず頭を抱えて固まってしまいました。内心では「あ
.....!」と、叫び声をあげています。

「.....アズロック」

その時、母上の冷たい声が響きました。

「シルフィア」「母上?」「お母様?」「母さま?」

うわぁ.....。母上の顔がものすごく怖いです。その怒りは、
全て父上に向けられています。

「ギルバートは、私の書類仕事を手伝うはずなのに」

.....そう言う事か!!と言うか、私をそっちの人員に数えな
いでください。私も書類仕事は嫌です。

「ギルバート。何か言った?」

「な なんでも有りません!!」

母上の怒気が、いきなりこちらに向きました。私は必死に首を横
に振り否定します。

(危なかった。油断していました。表情に出るとは、私もまだまだ
です)

「まあ、良いわ。それよりもアズロック。この前ギルバートを、書
類仕事に回してくれる約束していたはずよね。その事でちょっと、

O H A N A S H I しましょうか。・・・肉体言語で（ボソッ）

母上。思いつきり聞こえています。肉体言語って何ですか？と言
うか、この辺は私の影響でしょうね。マジ知識内のオタク用語が、
何気に家族内に蔓延しています。

母上は父上を引きずって行きました。父上から私達三人に、S O
S が発信されましたが、ごめんなさいです。私達も自分の命は惜し
いのです。

私達は仲良く、引きずられる父上を見送りました

手形の件は、後日マジ商会から報告書を出してくれるらしいです。
これでリッシュモンに、止めをさせるほど甘くは無いです。恐
怖の塩爆弾も有ります。塩爆弾が爆発すれば、リッシュモンを確
実に退場に追い込めるでしょう。

まあ、爆発させる為に私がこれから地獄を見る訳ですが・・・。

第四十話 もっとエグイ？塩爆弾の恐怖！？（後書き）

ご指摘を受けて、書き直していたら間が空いてしまいました。しかし、おかげさまで大分マシになったような気がします。

（マシになっているよね？）

トリステインの人口を、個人的に計算したところ300万人弱と出ました。

必要な年間の塩の量は、1万5千トン前後のはずです。

4アルパンの塩田で、3000〜3600トンなので20アルパン有れば。

素人がどんぶりを出した計算なので、結構自信がなかったりします。と言うか、勘違いや計算間違いしてないかヒヤヒヤしています。

ご意見ご感想お待ちしております。

第四十一話 さあ領地改革だ！！でも人手が足りない！！

こんにちは。ギルバートです。最近母上のストレスの溜まり具合が、凄い事になっていきます。来る日も来る日も、書類の山・山・山です。あの後父上はエア・ハンマーでお仕置きされ、即座に治療されました。そこからすぐに執務室に移動し、一晩閉じこもって二人で書類仕事をしていました。

朝確認に行った時に、書類の山が一山消えていた事に驚かされました。朝食後に復活していましたが……。

本来なら私も手伝うべきなのですが、塩田の設置面積が突然5倍以上に膨れた為、その対応でそれどころではありません。私が設置しようとしている塩田は、流下式塩田です。

流下式塩田は、上に海水を流し太陽熱で水分を蒸発させる流下盤と、上から海水を滴下させ風力によって蒸発させる枝条架しじょうかが特徴です。これらの装置で、かん水（濃い塩水）を作り釜で煮詰め塩を製塩します。

規模の変更によるレイアウト見直しは、どうしても必要です。そうなるらと風車や手押しポンプも、大出力な物に再設計が必要になります。それよりも問題なのが枝条架です。流下盤は《錬金》で再現できましたが、枝条架の再現はできませんでした。当然私は、淡い期待から竹を探しました。まあ、結果は当然駄目だったのです。代わりに見つけたのが、ホンダワラ系の海藻でした。使用済み海藻で、藻塩も作れますし。但し竹と比べると、交換が必要な上に効率落ちるので、枝条架の数を増やさなければなりません。海藻の必要量の確保（不可能なら更なる代替品の搜索）と人件費で、ただでさえ

高いコストが規模拡大で更に増加します。

非常に頭が痛い問題ばかりです。竹は絶対に何処かから見つけて来て、領内で栽培しようと画策しています。・・・他にも、いろいろと使えそうですし。

話が逸れました。とにかく母上の事は、放って置く訳にも行きません。実状を言わせてもらえば、領地経営は母上一人に依存しています。ストレスによる被害程度なら許容範囲ですが、万が一倒れられたら開拓と領地運営に深刻な影響が出ます。

暫くの間は父上が居るので問題ないでしょうが、父上もずっと領地に居ると言う訳には行きません。

母上を補佐する人員を増員したいのですが、十分な能力を持ちつつ信用のおける人物が居ないのです。そこで私は、一計を案じる事にしました。

と言う訳で、居間にやって来ました。居間に居るのは、ディーネとアナスタシアの二人です。

「ディーネ。アナスタシア。二人にお願いが有るのですが」

「如何しました？ギル」

「なーに」

ディーネとアナスタシアには、私にはない余裕の様な物が有りました。母上が忙しく、訓練が自習なのが原因ですね。ちよつとムカツとしたのは、私だけの秘密です。

「実はちよつと深刻な事になっていまして……」

「深刻？」「どーいう事」

「はい。実は二人に、仕事を手伝えるようになってもらいたいのです」

私の言葉に、何故か二人は嬉しそうな表情を見せました。

「何故嬉しそうなのですか？貴方達は」

「ギルが手伝っているのに、私が手伝えないのは心苦しいと思っていました。ですが私たちでは、かえって邪魔になると思っていました」

「私も手伝いたいと思ってた」

ディーネとアナスタシアも、現状を憂いていたのですね。先程の自分の一方的な感情が、ちよつと恥ずかしくなりました。

「で、仕事の内容は何ですか？私達に出来る事は何でもやりますよ」

ディーネの言葉に、アナスタシアもうんうんと頷いています。

（……言ったな。ディーネ。その一言にありがとう。そしてアナスタシア。頷くなんて、なんて良い子なんだろう）

私は思わず（邪悪に）微笑んでしまいました。私の顔を見たディーネとアナスタシアの表情が、引き攣ります。私はそんな2人にか

まわす、口を開きました。

「二人に覚えてもらう仕事は……」

デイーネとアナスタシアが、涙目になり引きました。

「書類仕事です」

デイーネとアナスタシアの二人は、必死に首を横に振りました。口からは無理と言う言葉が、漏れ続けています。

「無理じゃない。オボエ口」

「いやいやいやいや……。私達の歳を考えてください。如何考えても……」

「そうよ兄様!!」

二人の必死に反論を、私は黙殺しました。

「オーギュストに頼んで、書類仕事ができそうな使用人を選出してもらっていますので、選出された者達と一緒に教育を受けてもらいます。講師はオーギュストが無理してやってくれるそうなので、絶対に無駄にしないでください」

私は笑顔で言ってあげました。私はこのまま居間を出ようとしたが、二人がこの上なく消沈しています。ここは気合が入る言葉を、かけてあげるべきでしょうか？

私は居間の出口に向かって、数歩進んだ位置で立ち止まりました。

「万が一オーギュストの教育を無駄にしたら……」

私はそこで振り向き、飛びきりの笑顔で続きを言いました。

「……罰を与えます」

何故かディーネとアナスタシアは、抱き合ってガタガタ震えていました。普段の私達の関係からして、怯える要素など無いと思うのですが……。しかし、失敗した時の罰ばかりで、ご褒美が無いのは不公平ですね。

「ああ、そうそう。そろそろ鍛冶場で、バスタードソードとレイピアを打とうと思っっているのですが……」

二人震えがピタリと止まり、そのままの姿勢で目を細めました。

「頑張った子には、ご褒美をあげるべきだとは思いませんか？」

どうやら二人には、この上なく気合が入った様です。現在サムソンさんが打った武器は、（市場に流せば）ハルケギニアで他の追隨を許さない高品質を誇っています。剣を志す者なら、のどから手が出るほど欲しい一品なのです。ある意味この反応は、当然と言って良いでしょう。

私はそのまま廊下に出て、自室に向かいました。風車の製図の続きをする為です。

ディーネとアナスタシアには悪いですが、実は書類仕事で二人には期待していません。二人には頑張っている所を母上に見ていただ

き、母上の心的負担を軽減してもらおうのが狙いです。メンタル面は、身体に大きく影響を与えますから。

実際の作業負担の軽減は、選出された使用人達に期待しています。まあ、戦力になってくれるに越した事は無いのですが、二人の年齢を考えれば無理でしょうね。実は罰も与える気も、初めからありません。その為に罰の条件を、”教育を無駄にしたら”にしたのですから。

父上が帰って来てから、五日の時間が経ちました。

私の作業工程は、風車の設計図の引き直しが終わり、手押しポンプの弁の型作りに入った所です。弁の型が出来次第、オーステムに向かいます。

その日の夕食の席で、突然父上が口を開きました。

「ドリユアス家で問題になっているのは人材不足だ。この弊害を少しでも軽減する為に、各部署の連携を強化しておきたい。そこで守備隊長とマギ商会代表を呼んで、一度徹底的に話し合いたいと思う。また、ドリユアス領の青焼図を、信用おける者とは共有しておきたい」

なるほど。父上の言いたい事は良く分かります。現状で人材不足は、死に至る病と言って良いでしょう。青焼図の共有は、人材が育つまで持たせる抗生物質と言った所ですか。

「信用おける者とは、どの程度の立場の者を指すの？」

母上が父上に質問をしました。確かにその通りです。抗生物質の投与は、適量行わないといけません。この場合過剰投与は、敵に手の内をさらす事になります。

「取りあえず、守備隊長とマギ商会代表までだ。後は話し合いの場で、決定しようと思っている。私個人の意見としては、旧ドリュアス領（ドリュアス・タルブ・クールズ）出身の幹部達までと考えている」

・・・妥当な所ですね。

「私は良いと思います。それ以上広まらないように、嚴重に注意しておく必要がありますが」

見ると母上も頷いています。ディーネとアナスタシアも頷いていますが、本当に分かっているのですか？あなた達は……。まあ、いずれ分かってくれることを期待します。

「では、三日後のヘイムダルの週ダエグの曜日に、会議を開催する」

父上のが高らかにそう宣言しました。会議までに弁の型を完成させて、人員を集めなければなりませんね。

そしていよいよ会議当日です。会議の準備や家族内での今後のスケジュール合わせで、塩田の準備が殆ど進みませんでした。頭痛いです。父上は私に、過労死しろと言いたいのでしょうか？

そうこうしている内に、ドリユアス家の館に人が集まって来ました。まだ時間が有りましたが、私はディーネとアナスタシアを連れて、今回の会議の会場となる部屋に向かいました。ドリユアス家の人間は、この会議に全員出席するからです。

会場となる部屋の中には、まだ誰も居ませんでした。

「ギル。どうしますか？」

「すぐに来るだろうから、自分の席で待っていきましょう。アナスタシアもそれでいいですか？」

「うん」

アナスタシアが頷いたので、私達は自分の席に着きました。

席に着くとほぼ同時に、一人の少年が部屋に入って来ました。私はその少年が、何故ここに居るのかわかりませんでした。それは、ディーネとアナスタシアも同様だったのでしょう。共に怪訝そうな顔をしていました。

「ファビオ。何故貴方がここに居るのですか？」

ディーネが代表で質問しました。

「ディーネお嬢様。実は私の発案で、諜報部を立ち上げる事になりました……」

「諜報部？」

「はい。現在ドリユアス家では、領内の情報取得にマジ商会と守備隊を当てています。しかし領外の事となると、マジ商会だけしか有りません。商売を主としているマジ商会だけでは、重要情報を漏らす可能性が有ります。よつて、諜報を専門に行う部署を設立する事になりました。私がここに居るのは、設立が決定したばかりで、配属予定の人員がまだ私しか居ないのですよ」

困った様に話すファビオに、私は大いに不安を感じました。必要なのは私も良く分かりますが、他の人員が更に不足するのではないかと、という不安が、先に立ちます。

「目標は三年以内に人員を揃えて、更に一年で諜報網を完成させる事です。諜報網さえ完成させれば、より速く正確な情報の取得ができます。マジ商会と連携すれば、大きな利益を出す事もできるでしょう」

私はファビオの言に、驚きを隠せませんでした。神童……いえ、この年なら才子ですが、その範疇を超え天才と言えるでしょう。これが本当に、16歳に満たない少年の言葉なのでしょうか？まあ、見た目だけなら私も人の事を言えませんが……。彼を天然と例えるなら、私の場合にはメツキですね。良く見ると、ディーネとアナスタシアがポカンとしています。

(……良い機会だから聞いておいた方が良いですね。ファビオほどの男に背中(情報)を預けるなら、信用したいですから)

私は《念力》でマジックアイテムを作動させ、聞き耳を封じます。これはあくまで、ファビオに対する配慮です。まあ、当のファビオには私の突然の行動に警戒させてしまいました。……次の人

がすぐ来るでしょうし、ここは短期決戦ですね。

「目的は復讐ですか？」

私はズバリと、聞く事にしました。ディーネの母ミレー又は、近場の子供の面倒をよく見ていた様です。ファビオもその一人でした。私の質問にファビオは驚きの表情を見ましたが、それもほんの一瞬だけで、すぐに平静を取り戻しました。ここまでなら、ドリュアス家の人間は知っていても不思議ではないからです。しかし続く私の言葉に、その平静が吹き飛びました。

「……ご両親の」

「!!何故!？」

これは父上と母上から聞いた情報です。この二人が知っているのは、ファビオも自覚していたでしょう。その上で何も聞かれなかったので、すっかり油断していた様ですね。かなり動揺しています。まあ、私の見た目（8歳児）も有るので、それも仕方が無いでしょう。

「あなたのご実家の店は、ディーネの親の商会が潰されたあおりを食らったと聞いています。そして、ご両親の事も……」

ロマリアの神官がディーネの親の商会を調べた際、金目の物を奪って行っただけでなく、取引が有った商店も捜査したそうです。……捜査に加わった神官の中には、証拠と偽って堂々と金品を持ち出す者が居ました。モンモランシ伯が慌てて対策をとったそうですが、始祖の名の下に動く神官を完全に止める事は出来なかったそうです。略奪に励む神官に抗議したファビオの両親は、大怪我を負わ

されその怪我が元で逝ってしまいました。経営者が居なくなった店は、当然潰れてしまいます。その後ファビオは、モンモランシ伯に引き取られました。如何考えても、強い恨みを抱くでしょう。

「……はい」

「当家もロマリアには恨みが有ります。しかし、復讐に手を貸せるとは限りませんよ」

これはドリユアス家の本音です。恨みが元で暴走して、ドリユアス家を巻き込む様なら、とても信用など出来ないからです。まあ、大隆起の原因である風石の件で、個人的に少しだけ溜飲は下がっていますか……。

「かまいません」

……即答か。どうやら、落ち着きを取り戻したようですね。少しくらいなら本音を引っ張り出せると思いましたが、考えが甘かったですね。

「元々復讐出来るとは思っていません。相手にするには、あまりに敵が巨大すぎます。しかし木の精霊は、ロマリアの神官に一泡吹かせた事が有ると聞きますし。私は一矢報いらればそれでよいのです。それに表向きはどうあれ、ロマリアと迎合する気など無いのでしよう?」

……この言葉に嘘は無さそうですね。それにこの様子なら、余程の事が無い限り暴走はしないでしょう。

「当然です」

「なら、私にはそれで十分です」

軽く微笑んで見せるファビオに、私も微笑み返しました。

「しかし、ギルバート様と一緒になら「達成できてしまうのでは?」
と、考えてしまいます」

「あまり淡い期待は、持たないでくれると助かります」

ファビオは私の言に笑みを浮かべながら、自分の席に移動しました。

続いて入室して来たのは、金髪青目の男でした。彼がマジ商会の代表です。まだ30前の男ですが、若手の集まりのマジ商会では平均より上です。彼はなんと、ミア（以前のギルバートの世話係）を娶ったカロンです。結婚を機に頭角を現し、今ではマジ商会の仮の代表に収まっています。

ちなみにミアは、出産を機に落ち着きを得て、今では良妻賢母と言われているそうです。現場を見た事が無いので、私は信じていません。と言うか、信じられません。

カロンに続いて入室して来たのは、白髪の混じった金髪と青目が特徴の戦士風の男です。彼はアルベルという名前で、守備隊長を長年務めて来た男です。今は侯爵軍の軍団長として、ドリユアス家に仕えています。未だに周りから（父上含め）守備隊長と呼ばれています。……。

私は座ったまま軽く手を振って、二人に挨拶をしておきます。最

後に父上と母上が入室して席に着くと、いよいよ会議の始まりです。母上が聞き耳防止用のマジックアイテムが作動しているのを確認すると、父上の向かって頷きました。

「これより、ドリュアス領開発会議を始めます」

父上の宣言により、今回の会議が始まります。先ず今回の会議の趣旨を、父上が長々と（長いと言っても5分ほど）語ります。そして次に諜報部が新設された事と、ファビオの事が紹介されました。カロンとアルベールは、諜報部との連携と協力を約束させられました。

これで新顔のファビオについては、話が終了です。

「先ずは、新しく所領に加わった地の領地運営についてだが、基本的にこれまでのドリュアス領の発展に倣う事にした。当然問題もいくつかある。資金については、ヴァリエール公爵の協力によってどうにかなった。人口不足は移民に頼る事にする」

父上の言葉に、カロンとアルベールの顔が僅かに引き攣りました。それも仕方が無いでしょう。父上の言葉は、貴重な人材を教育に投入すると言う意味です。領内の人材不足は、深刻な問題です。言葉にこそ出ませんが、移民してきた人間の教育に人材を割くのか？と言う顔をしています。

「教育を任せられる人材については、ドリュアス領内で新たに募る事とする。一応は教員である為、当然雇用条件は他より良くする。試験内容は、テストと三か月の実地試験を考えている。試験官は、今現在寺子屋で教えている者達だ。読み書き計算とドリュアス領の常識なら、それで問題ないと判断した。・・・それと、ドリュア

ス領が移民を募っている事は、マジ商会の方で噂を流してほしい」

父上の言葉に、カロンとアルベルがホツとした様な表情を浮かべました。この採用条件と試験方法なら、マジ商会と侯爵軍に影響は最小限で済みます。これはマジ商会と守備軍が、現地採用を主としているのが理由です。（土地勘とモチベーションの都合）

「次は現状の把握と検討だな。商会と軍の現状を報告してくれ。・・・そうだな、まずは守備隊長の報告から聞こうか」

アルベルが父上の声に返事をし、立ちあがって説明を始める。

「軍の編成は、既に大半が終了しています。王国軍が撤退した跡に、侯爵軍の人間を詰めさせました。森の脅威が大きく下がった今は、配置人員は少数で十分ですから。手持ちの騎獣は、各領地にほぼ均等に配置予定です」

「ほぼ？内訳は如何になっている？」

父上が聞き返します。

「詳しい内訳は、後ほど報告書で提出します。38頭の騎獣とその乗り手は、旧ドリュアス領とオースヘムにそれぞれ7配置し、残りの領地はそれぞれ4配置予定です」

「旧ドリュアス領は今後発展の中心になるからとして、オースヘムは塩田の守護の為に多く騎獣を配備するのは分かる。しかし、残りの領に配備する騎獣が4頭ずつでは少なく無いかね？」

父上はアルベルに、疑問をぶつけました。

「確かに少ないです。しかし、補充目処が既にありますから。少しの間なら、4頭だけでも問題無いでしょう。用途はパトロールと、亜人を森の奥に追いやるだけです」

「だが、好ましいとは言えないだろう。明日にでも、木の精霊から第一陣の騎獣を受け取って来る」

「受け取りの内訳は、どうなさるおつもりですか？」

その質問に、父上が少し考えました。

「その目的で行くと、グリフォン・ヒポグリフ・風竜は当然だな。この際だから、ユニコーンとペガサスも受け取っておくか。他はまだ、時期尚早か？」

まるで独り言を言うように答える父上に、アルベールが言い返します。

「いえ、ワイバーンも一緒に引き取って来てください」

「何故だ？」

「野生のワイバーンは、人に慣れるのに時間が掛ります。それを利用して、新人達の教育も同時に行おうと思ひまして」

「いきなりワイバーンは、流石にハードルが高すぎないか？」

「その位でなければダメです」

何が駄目なのか良く分かりません。アルベールの物言いに、父上は渋い顔をしています。ひよっとしてアルベールは、母上を超えるドSなのか？と言う考えが頭をかすめ、背筋がうすら寒くなりました。

「……まあ、守備隊長がそうまで言うなら、私は反対しない」

父上が、いたいけな新人達を見捨てた！！

「そうね」

うわ！！母上が物凄く良い笑顔で肯定した！！

この状況に、母上とアルベール以外の全員が、まだ見ぬ新人達のために黙祷をささげました。（まだ死んで無いのに）

その後議題は、騎獣の餌の確保や新人採用などの細かい話に移りました。その内容には、なるほどと頷かされる物が有りなかなかなか強になります。隣でアナスタシアが、あくびを噛み殺していたのは、気付かない振りをしておきました。母上が気付かなかったのは、ある意味幸運でしょう。その時母上は、ユニコーンを王家に献上する役目を父上に頼まれて、めっちゃくちゃ喜んでいましたから。最低でも4日以上は、書類仕事から解放されますね。おめでとございませぬ。

一通り侯爵軍の現状把握と検討が終わりました。

「次はマギ商会の方だな。カロン。報告を聞かせてくれ」

「はい」

カロンの返事をして、喋り始めました。

「まずは議題にもならない、ただの報告から入ります」

ん？なんでしょう？カロンの眉間に皺が寄っています。どうやらあまり良い話では無い様です。

「王都の横領事件のその後についてです」

カロンの言葉に、この場に居る全員の表情が渋い物に変わりました。

「次の利子が発生する前日に、件の商会の代表を返済の名目で呼び付けました。呼び出した時間は早朝です。その間に手続きなどを理由にして、外との連絡手段を剥奪し夕方まで拘束しました。代表が王宮に到着と同時に、30万エキュの手形が存在と噂を流します。

内容は「架空の横領をでっち上げ、王国より資金をかすめ取るうとしている賊が居る」と、言う物です。これに対して王は激しく怒っていて、手形の行く先を徹底的に調べようとしている。と、件の商会名も合わせ噂を流しました。

夕方まで拘束したのは、その噂が十分行きわたる時間を稼ぐ為です。件の商会には、噂と同時にあからさまな見張りを付けました。更に追い打ちとして、商会に出入りした商人達に衛兵の職務質問のおまけを付けたそうです」

……て 徹底的にやりましたね。いくら商会の人間が、リッ

シユモンに与した賊だとしても……、何もそこまでしなくとも良いと思うのですが。と言うか、これで上手く行かなかったのでしようか？

「この所為で商会は、取引先に次々に逃げられる事になります。リツシユモンもこの状況では、手形の回収を諦めざる終えなかつたでしょう。数日後に、商会から小火が出ました。見張りの者たちが商会に踏み込むと、代表の死体と手形が発見されました。商会の代表が裏切る前に、処分したのでしょうか。手形は回収できましたが、暗殺者は発見できずリツシユモンに繋がる物は何一つ発見されませんでした」

痛いです。物凄く痛いです。そこまで徹底的にやって、リツシユモンを上げられなかつたのですか？そこまでお膳立てが出来ていて、何でしくじるかな……。

「恐らく見張りの中に、リツシユモンの息がかかった者がいたのでしよう。しかし、商会の帳簿の中から料金の二重取りの証拠が見つかりましたので、投獄されていた横領犯は放免されました。放免後に彼らはリツシユモンが犯人と騒ぎたてましたが、残念ながら証拠が無い為決定打になっていない状況です。それでもリツシユモンの立場は、以前の事（メンヌヴィルの件）も有り追い詰めるに十分で、高等法院長の座を退く事になりました」

「……引き際があっさりしすぎているな」

「そうですね」

父上が思わず漏らした感想に、私は頷きました。

「いったん所領に身を隠し、ほとぼりが冷めるのを待つ心算だろう。今まで稼いだ財産も無事だろうから、遠く無い未来にまた顔を合わせるはめになるだろう」

「そう……ですね」

父上の言葉は、鬱になるほど説得力があります。いい加減リッシユモンには、（この世から）退場して欲しいです。

「王都では、リッシユモンの後釜争いが発生しています。油断は出来ませんが、時は稼げたとみて良いと思います」

カロンの言葉に父上が頷くと、取りあえずこの話題は終了ですね。

「次にマギ商会の拡大についてです」

カロンはいったん言葉を切ると、眉間のしわが無くなり普通の表情に戻りました。どうやら、こちらの報告は期待できそうです。

「来るべき塩の流通ルートの確保の為、マギ商会の拡大は必須事項と考えます。しかし、人材確保が難しい状況です。よって代案として、他の商会を傘下に組み込む事にしました」

その話は、既にこの場に居る全員が知っています。何気にその案を出したのは、私だったりしますし。

「既にいくつかの商会と話をし、話をまとめています。有名な所では……」

カロンの口から出て来る商会名は、中小に属する商会では有名な

所です。その中には、モンモランシ伯を相手に、秘薬を取り扱っている商会もありました。まあ、これは私が推薦した商会ですが。と言うか、これからモンモランシ伯は”水の精霊の涙”を原料とした秘薬を大量に出荷するのです。それに乗らない手は有りません。

「以上です。詳細は、後ほど報告書と一緒に提出します。それと、リッシュモンに協力していた商会のシェアを、一部ですが奪取に成功しました。こちらも詳細は、後ほど報告書と一緒に提出します」

「うむ。良くやった」

「ありがとうございます」

父上のお褒めの言葉に、カロンは恭しく頭を下げました。そして、また口を開きました。

「侯爵。お願いがあります」

「なんだ？」

「今後王都での取引が大規模化しますので、王都に支店が欲しいのですが……」

「許可する。詳細は報告書と一緒に出してくれ」

父上は即答しました。リッシュモンが高等法院長の座から退いたので、問題無いと判断したのでしょうか。

「はい。ありがとうございます。それから塩の流通ルートですが……」

「解っている。オーステム・フラーケニツセ間の街道は、最優先で着工する。それと、この街道と塩田が完成後に、私はゲルマニアへと赴く事になる。それまでは、販売は自粛しておいてくれ」

「解りました。岩塩取引停止に対するカウンターですね」

「その通りだ。齒がゆいと思うが、暫く我慢してくれ」

「はい」

カロンの頷くのを確認すると、父上は私を見ました。

「ギルバート」

「はい」

私は返事をして、カロンの代わって立ち上がりました。

「オーステムで生産する塩は、大まかに分けて二種類存在します。一つは通常の海水塩ですが、もう一つは釜で塩を製塩する際に海藻と一緒に煮詰める藻塩と言う物です。これは、通常の海水塩より旨味が増し美味しい高級塩です。と言っても、向き不向きがあるので料理のよって使い分ける必要があります。」

最初に生産した塩は、両方とも王家に献上します。王家と言っても、トリステイン王家だけではありません。ガリアとアルビオンの王家にも献上します」

「ゲルマニアには良いのですか？」

「必要ありません」

カロンが聞いて来ましたが、私はバツサリ切り捨てました。

「ゲルマニアに岩塩の輸出を、止められる可能性がある為です。準備が整うまでは、触れない方が良いでしょう。トリステイン王家は自国なので当然ですが、ガリア王家は街道が完成するまで商売上関わって来るので、無碍にすると後が怖いです。アルビオン王家は、現状の塩の価値がトリステインと似たり寄ったりです。今後良いマーケットになるでしょう。それに、トリステインとガリアの王家だけ挨拶に行つて、アルビオンだけ行かないと言うのも後に禍根になる可能性があります」

私の言葉に、カロンは大きく頷きました。

「それから通常の海水塩は、最優先でタルブに回してください」

「醤油と味噌の生産ですね」

カロンの切り返しに、私は頷きました。

「醤油と味噌は、今後特産品として期待していますから」

「そうですね。工場の方も、建設も既に着工しています。つまりく事は許されませんか」

「あまりプレッシャーをかけないでください」

この時私は、苦笑いするしか有りませんでした。

リッシュモンは一時退場しましたし、人材不足もなんとかかなりそ
うです。このまま領地開発は、上手く進んで欲しいですね。

その前に、塩田設置をどうにかしなければ……。

ダメだ。父上に対する恨み言しか出て来ません。

第四十一話 さあ領地改革だ！！でも人手が足りない！！（後書き）

だいぶ間が空いてしまいました。

書いては消しの繰り返しです。

私はダメダメですね。ごめんなさい。

時計見たら、もうすぐ朝の七時です。

仮眠取る時間もありません。貫徹しちゃった。

体調だけは崩さないように気をつけます。

ご意見感想お待ちしております。

第四十二話 塩田設置作業？二十四時間働けますか？（前書き）

今回はグダグダ感満載です。

第四十二話 塩田設置作業？二十四時間働けますか？

こんにちは。ギルバートです。塩田設置について、あの後細かい話をしました。その中で一番の問題は、塩田の安全を如何に確保するかでした。

そこで話し合った結果は、塩田の性能を偽る事でした。どのように偽るかと言うと、生産コストをそのままにして生産量を実際の5分の1程度に偽装します。国王や公爵にだけは、口頭で実際のスペックを伝えますが、その他の資料には全て偽装スペックを公開します。

これにより、ドリユア家を敵視する者達に「塩田の所為で、ドリユア家を打倒出来ない」ではなく「ドリユア家を打倒すれば、塩田が手に入るかも・・・」と、思考を誘導するのが狙いです。現在のドリユア家のウィークポイントは「塩が高騰すれば責任を取らなければならない」と言う物です。父上やマジ商会関係者が、ゲルマニアに訪問したタイミングで岩塩取引を停止するよう働きかければ、簡単に塩の値段高騰の責任を追及できます。まあ、実際はとんでもないカウンターが待っている訳ですが・・・。

他にも塩が高騰すると分かっている訳ですから、大量の塩を確保してこの機に一気に儲けようと考えてるはずですよ。そんな奴らは、大損するのです。なんか、リッシュモン辺りが引っ掻かてくれそうですね。（楽しみ 塩爆弾 ソルトボム）

しかし、明るい未来ばかり見ている訳には行きません。その前にやる事やらなければなりません。と言う訳で、やって来ましたオースム。私と一緒に居るのは、護衛のクリフとドナです。

「先ずやらなければならぬ事は、オースヘムの守備を任されている者への挨拶ですね。その次に、宿の確保です。そして、ホンダワラ系の海藻がどれくらい確保できるかも問題ですし、必要な人手の数も膨れ上がっています。海藻が足りない場合の代用品は考えましたが、その確保には更なる人手が必要になりますね」

「はい。解っております」

あれ？なんでクリフが、そんなに煤けてるの？

「あの、ギルバート様」

「なんですか？」

ドナが言いにくそうに、話しかけて来ます。

「移動中にこれからの予定を、延々と念仏のように呟いていましたよ」

「……ホントですか？そう言えば召喚した土メイジ（クリフ含む）を、どれだけこき使うか必死に模索していた様な気が……」

「……クリフ」

「……はい」

「すみません。以後気をつけます」

私は頭を下げましたが、クリフは「気にしないで下さい」と、返

事をただけでした。後でこの埋め合わせは、しなければなりませんね。でも、仕事はしてもらいます。と言うか、そっちは加減してあげる事が出来ません。

「それはそれとして、オースヘム守備軍の責任者の所に行きましよう」

私が誤魔化すように言うと、クリフは力なく頷きました。

責任者への挨拶は、アツサリと終了しました。ある意味、当然と言えば当然でしょう。各領地の守備軍責任者は、元々ドリユアス領守備隊の準隊長クラスなのです。そのクラスの隊員とは、隊舎で良く顔を合わせたので顔見知りなのです。彼の名前は、ガエタンと言います。軽く言葉を交わし、今後の確認だけで話は終わりました。

それよりも問題なのが、ガエタンが妙に煤けていた事です。いきなり責任ある役職に着いたからかもしれないませんが、この場合は違います。……明らかにオーバーワークです。

いきなり大役を押し付けられた重圧と、少数の部下のみ（しかも大半が新人）連れて見知らぬ土地の防衛を押し付けられたのです。更に現地調査に人員確保（プラス新人教育）に加え、ワイバーンの調教のおまけも付くのです。想像しただけで、逃げ出したい気分になります。

この日は厚意により、隊舎に一泊する事になりました。部屋数の関係で、私達三人は同じ部屋で眠る事になりました。夜中にクリフが抜け出し、隣のガエタンの部屋へ行ったのに気付きました。私が風メイジの所為か、僅かに漏れ聞こえる声をはっきりと聞きとる事

が出来ます。二人は互いの労をねぎらい合い、少しだけお酒を飲んでいるようでした。

「見知らぬ土地の防衛は、大変だろう。まして、付けられた部下の殆どが、まだ新人と来ている」

「なに、クリフほどではないよ。あのシルフィア様の子だ。クリフの方がよっぽど大変だろう。主にDS的な意味で……」

その声に、クリフが乾いた笑いを上げていました。先程の念仏の件で、否定できないのが悲しい所です。

「アズロック様の子でもあるからな。個人的にはDMである事（苛められないと言う意味で）を期待していたのだが、残念ながらシルフィア様似の様だ。塩田の設置作業は、覚悟しておいた方が良くぞ」

「そんな分かり切った事、今更言うなよ。鬱になりそうだ」

二人は本当に、良い度胸をしています。それに自分の主に対して、DMやらDSやら言わない方が良いと思いますよ。と言うか、その認識は必ずしも正しくありません。私も最近気付いた話ですが、普段は母上の方が強く見えます。しかし、いざという時に母上は父上に逆らえない様なのです。父上の有り余る包容力の勝利と言えるでしょう。特にベットのうな……ゲフンゲフン。なんでも有りません。

私の思考を他所に、隣では母上と私の悪口で盛り上がっています。お酒が適度に回り、声のボリュームも上がっています。もう風メイジでなくとも、聞きとることは可能でしょう。

「……しかし、本当に良い度胸です。負担を強いるのは可哀想
と思っていた私が、まるで馬鹿みたいです。元からする心算は有り
ませんでした。もう遠慮しません」

私の口から、怨念がこもった言葉が漏れ出ました。ドナが被って
いる毛布が、ガタガタと震えたのは気のせいでは無いでしょう。ま
あ、如何でも良いか。

次の日に隊舎を出発し、塩田予定地に一番近い村を目指します。
クリフは昨日の愚痴合戦の所為か、かなり回復していましたが、代
わりにドナが憔悴していました。

村に到着すると、熱烈に歓迎されました。どうやら塩田の話が村
全体に伝わっている様で、村長の愛想がやたらと良いです。私はこ
の状況にげんなりしながらも、マジ商会の協力者を探しました。

「村長。マジ商会の人間が、先に到着している筈です。何処に居ま
すか？」

「はい。こちらの方達がそうです」

目的の人物は、村人達の輪の直ぐ外に居ました。見た目は商人風
の男で、25位の金髪青目の男です。その顔を見た覚えがありまし
た。資料庫を建てた時に一緒に作業した男で、名前は確か……
アンリだったです。そしてその隣に、20歳位の銀髪青目の青年が
居ました。同じく商人風の格好をしていましたが、こちらには見覚
えがありません。……現地採用の新人でしょうか？

「お久しぶりです。ギルバート様。以前資料庫の建設をお手伝いし

たアンリです」

「どうやら記憶は正しかったようです。」

「良く覚えています。建材の調達では、無理をさせてしまいましたね」

私の返事に、アンリは嬉しそうな顔をしました。

「所で、もう一人の方は誰なのですか？」

「あっ……はい。こいつは、ジュールと言います。ほら！挨拶」

アンリに促されて、ジュールが自己紹介を始めました。

「初めまして。ジュールと言います。採用されたばかりで、至らぬ点も有ると思いますが、よろしくお願いします」

「どうやら本当に新人の様です。おどおどした感じはありませんが、商人特有のずぶとさが感じられません。しかし私の歳を予め聞いていたのか、戸惑いなく頭を下げて来ました。変なプライドが無さそうなので、成長が早いかもしれません。将来期待できそうです。」

「よろしく。先ずは今後について話しましょう」

「では、酒場の方へ行きましょう。宿屋も兼業しているので、塩田建設の拠点となります」

私達はアンリに導かれて、酒場に来ました。

「早速ですが、海藻はどれくらい確保できそうですか？」

私は開口一番に、アンリに聞きました。

「以前のプランでも、無理をすれば何とかと言った量でした。増加分を補うのは不可能です」

「やはりですか」

「代替え品の案は有るのですか？」

「ええ。麦藁を編み込んで、《固定化》をかける案で行こうと思っています。効率的には、海藻と大差ないとみています。しかし麦藁を編み込む人員と、《固定化》をかける人員が必要になります。その代わり、海藻を交換する人員を削減できるメリットも有ります。将来的には竹を何処かから発見して、取り替えてしまいたいですね」

私はそこまで話すと、アンリは頷きました。

「人手を揃えるには……」

「解っています。父上から一次資金として、5千エキュー程預かって来ています」

私の言葉に、アンリは頷きました。村人達を動員すれば、なんとかなるでしょう。雇用形態は、1個作ったらいくらの内職に近い形が理想です。近くの村や町も巻き込まなければ、間に合いそうにありませんが……。

「物流の方は、どうなっていますか？」

次の質問をすると、途端にアンリの顔が曇りました。

「正直に言つて、芳しくありません。魔の森解決の報は、ガリアにも届いています。今までは森をこれ以上広げない為に、物資の流れを止めない様にガリアも協力していました。ですが、脅威が去つた事によりガリアでは、物流の税金を上げようと言う流れが有ります」

あいたたた。それは不味いですね。ですが想定の方……。

「……それと。塩田の事ですが、ガリア側は既に把握しています。近々、塩に高い税金（通行税）をかけられる筈です」

……範囲外でした。恐らく父上の対外工作が裏目に出ましたね。上級貴族が点数稼ぎの為に、ガリア高官にこの事を密告したとみて良いでしょう。その他の物資に関しては、税金が上がるのは想定内ですが、塩の税金（通行税）が高いのは不味いです。最悪物納にされて、輸送中の塩を大量に取り上げられてしまいます。現時点で向こうに漏れていると言う事は、もう間に合いませんね。輸送ルート上の領主達は、ガリア国王が父上に便宜を約束する前に対策をとるでしょう。

「それは……不味いですね」

「はい。ガリア側の塩輸送ルートは、もう使えないと見ておいた方が良いでしょう。絞れるだけ絞りとられるのがオチです」

「そうですね。輸出入なら交渉のしようも有りますが、輸送では向こうを引かせる理由がありません」

私は頭を抱えてしまいたい気分になりました。フラーケニッセ・オースヘム間の街道が出来るまで、コスト面から空路による輸送以外出来ない事になります。多少高くついても、船を借りてしまった方がお金になる可能性が高いですね。・・・いや、アルビオン交易を考えれば、いつそ船を購入してしまう手も有ります。扱う積み荷が塩なら、十分に黒字を期待できますし。次に帰った時に、父上に進言してみますか・・・。コストが怖いけど、損を出さない唯一の道の筈です。最悪の場合は、魔法の道具袋で何とかするしかないですね。

「解りました。塩の流通に関しては、こちらで手を打ちます。生活必需品などの税金の方は、どうなのですか？」

「そちらは問題ありません。塩と違って流通管理がしっかりしていないので、下手をすれば自領の物価にも悪影響が出てしまいます。無用な混乱はあちらも望んでいないでしょう」

「・・・正論ですね。余程の馬鹿が居ない限り、問題無いでしょう。私はアンリに大きく頷きました。

「私はこれから、流下式塩田のプロトタイプを設置に向かいます」

「プロトタイプ？」

アンリとジュールが、怪訝そうな顔をしました。今更試作する意味があるのかと言う事でしょうか？

「全体を通して、何処かに問題が無いか確認は必要です。ノウハウも手に入りますし。特に今回竹の代わりに枝条架に使う、麦藁の効果的設置方法や編み方は先に確認しておきたいですから」

私の言葉に納得したのか、全員が頷きました。

「プロトタイプの設定に二週間。更に、確認と問題点解決に二週間で、一月以内に設置作業を、開始したいと考えています」

再び全員が頷きます。

「主な担当は私が水車と釜屋で、クリフが流下盤、ドナが枝条架、アンリ達は調達や労働力の確保です。ここまでで何か質問は有りますか？」

全員が沈黙を持って答えてくれました。

「本格始動は先程も話したように、一月後を予定しています。不明な点がありましたら、随時私の所に質問に来てください。絶対に解らないまままで、作業を進めないください」

全員がの返事を確認すると、私は更に続けました。

「アンリ達は麦藁（試作分）・水車と釜屋の建材・管理棟と従業員寮の建材の順番で、優先して調達してください。これが詳細です」

そうやって私は、道具袋から大きめの羊毛紙を取り出して渡します。それをアンリが受け取り、内容を確認しました。

「はい。問題ありません」

「では、いったん解散です。アンリとジュールは、調達の方よろしく願います」

「はい」

「クリフとドナは、出発前に打ち合わせした通りをお願いします。しつこい様ですが、少しでも不安が有ったら、必ず私に報告してください」

「はい」

そして、いよいよプロトタイプの設置作業を開始しました。

クリフの担当する作業は、以下の通りです。

第一段階として、《探知》ディテイクトマジックで設置場所の水平度を測定し、《錬金》で傾きの無い平坦な土地を作りだします。

第二段階として、《錬金》で一メートル角の流下盤パネルを作成します。

第三段階として、流下盤パネルを設置場所に並べ《錬金》で結合します。

最後に海水を流して問題無ければ、《固定化》をかけて終了です。

クリフは《錬金》で、なかなか流下盤の黒色（太陽光の熱吸収の都合で黒が良い）が出せずに、大変苦労していました。今後応援として呼ぶ土メイジも、同様の懸念が予想されます。それよりも心配なのが、私とクリフが土のラインメイジである事です。クリフが苦労したと言う事は、土のドットメイジでは流下盤を《錬金》出来ない可能性が有るのです。ドリュアス家で抱えている、ラインクラス以上の土メイジの数は、私と父上含め片手でお釣りが来てしまうのです。私・父上・ガストン・クリフ・・・以上の四人です。となると、必然的に私とクリフが地獄を見る事に・・・考えたくあり

ません。

次はドナが作業する内容です。

ドナには私と一緒に考えた枝条架の形を、麦藁を編んで形にする作業をしてもらいます。枝条架の台や樋は、私が風車とセットで担当し形にします。ドナに向く作業とは言えませんので、近くの村から手先が器用な者を雇ってドナが監督する形です。後は私のサポートですね。

最後に私がする作業です。

私がする作業自体は、既に殆ど終わっていたりします。それと言うのも、大体の部品は家で作成済みだからです。簡易風車と手押しポンプは組み立てだけで、釜屋の方も手間なのは建物のみです。終わりしだいクリフと合流ですね。

作業はつつがなく進みました。私の作業は予想より早く、翌日の中に終える事が出来たのです。組み立てるだけとは言え、もつとてこずると思っていました。建材を翌日朝に用意してくれたアンリに感謝です。そして《探知》は、本当に素晴らしい魔法であると言う事です。《探知》で位置情報も割り出せるので、わざわざ測量する手間が無いのがありがたいです。

その次の日からは、地獄が待っていました。只管……ただ只管に、《鍊金》で流下盤を作る日々です。三日で鬱になるかと思いましたが。予定通り終わって、本当に良かったです。終わった後に、クリフの目が虚ろだったのが怖かったです。刺されるかと思いません。流下盤の設置作業の方は、外での作業である事と少し見回せば

成果が見て取れるので、精神的に追い詰められるような事はありませんでした。……ただ、まだ本番じゃないんですよ。作業量が何倍か、怖くて計算できません。定期的に休みを入れれば大丈夫かな？

それと、問題が発生しました。それは近くを飛び回る海鳥達です。流下盤の上に糞が……。思わずエア・カッターぶっ放しました。隣でドナが固まっていたましたが……。私は悪く無いと思います。迎撃用のガーゴイル（鳥型）を、大量に用意してやる。オボエテロヨ。それまでは、デッキカ目玉の案山子で誤魔化すしかないですね。その後何故か、皆が私から距離をとるのです。……。ワタシワルクナイヨ。

枝条架の実験の方は、問題無く終了しました。海水の濃度も《探知》で一発なので、実験自体も楽に出来ました。採用した編み方を雇った者達を講師にして労働者に教えさせます。労働者が作った物は明確な査定基準を設け、良品・可品・不可品で判断し、不可品は買い取り不可にしました。反対に良品は、買い取り価格に僅かながら色を付ける事にしました。アンリから提出された、枝条架の品質向上策です。

いよいよ本作業の開始です。応援部隊の寝泊まりする場所として、管理棟と従業員寮を早々に完成させ、村への往復時間を削減します。

クリフには引き続き流下盤を担当してもらい、応援に来た土メイジ（ドットクラス）三人の指導をしてもらいました。しかし最悪な事に、流下盤はラインクラスでないと《鍊金》不可だったのです。仕方が無いので、形だけ作らせて仕上げは私とクリフで行う事になりました。これだけでも、私とクリフの負担はかなり減ります。

ドナには塩田の警備と私のサポートを命じました。それと、家との連絡役ですね。これまでの事や現状を、手紙に綴って家に届けてもらう事にしました。それと、塩が一リール入る壺を用意し、海塩10壺・藻塩を6壺を魔法の道具袋に入れ、父の下に届けさせました。トリステイン・ガリア・アルビオン王家とドリユア家・ヴァリエール家・モンモランシ家に一壺ずつです。残りは全て、タルプ行きですね。

後心配なのは、情報の漏洩ですね。村や作業員には、この塩田を低効率かつ超低コストの塩田と説明しています。低効率による量を補うために、大規模化していると説明しました。テストの時も、あえて作業員たちに同席させて、魔法を使う事により堂々と誤魔化しました。ばれる可能性が有るのが、第一風車の海水の汲み上げ量ですが、こちらは信頼できる守備隊のメイジしか知らない情報なので、軽い口止めだけで問題無いと判断しました。実際の製塩量は魔法の道具袋と、倉庫で誤魔化すしか有りませんね。

724

作業開始一週目

管理棟と従業員寮が完成しました。派遣されたメイジ達の中に「牢獄が完成してしまっただ」とか言っていた人がいましたが、ソナコトナイヨ。アンリ達が家具・事務用品の運び込みに、四苦八苦していました。

作業開始三週目

海から海水を汲み上げる、第一風車が全基完成しました。流下盤の《鍊金》の気分転換でしょうか？時々クリフ達が、流下盤設置場所の水平出しの作業をしていました。思ったより手間取り、当初のスケジュールから遅れ始めました。この遅れを、早く取り戻さない

と．．．．疲れた。

作業開始四週目

第一枝条架に海水を汲み上げる、第二風車も全基完成しました。手伝いの人達も作業に慣れて来たのか、作業スピードがだんだん速くなってきました。しかし残念ながら、遅れを取り戻せるまでには至っていません。．．．平均睡眠時間四時間切りそう。

作業開始六週目

第二枝条架に海水を汲み上げる、第三風車が全基と枝条架の樋が完成しました。これで風車は全基完成です。次はいよいよ釜屋の方に移ります。かなり疲れました。家から「たまには帰って来い」と手紙が来ていました。九歳の誕生日？何それ美味しいの？それよりも、クリフが精神的にかなりやられています。また休みを取らせないと．．．．。

作業開始九週目

思ったより時間がかかりました。かん水（濃い塩水）を釜屋に送る地下パイプの設置に、大きく手間取ったのが原因ですね。．．．反省です。また「帰って来い」と、手紙が来ていました。今はそれ処ではないので、無視ですね無視。それよりも、いよいよ地獄の流下盤《錬金》に入り．．．．？何故か気付いたらベットのの上でした。何故でしょう？．．．．倒れた？誰が？とにかく続きです。．．．．休め？五月蠅いです！！

作業開始十週目

ケケケツ。流下盤の《錬金》作業は、精神的にキマすね。それよりも、最近一日がやたら長い気がします。一日にお外が、四回もオレンジ色に染まるんですよ。何の冗談でしょう？それよりも最近周りが、本当に五月蠅いです。．．．ヤスメ？何それ麻雀ですか？

・・・ネロ？何処の力オスな吸血鬼ですか？でも、ガクガク動物ラ
ンドは行きたいな〜。裸コート万歳！精神力が上がった様な気
がしますが、気のせいですね

作業開始十一週目

なんか捕獲されて、ベットに縛りつけられました。どんな虐めで
すか？それよりも、早く作業しないと間に合いません。早くしない
と・・・・・・・・。あれ・・・・・・・・意識が・・・・・・・・。

目を覚ますと何故か私は、ベットに括り付けられていました。何
故？もしかして、誘拐されたのでしょうか？しかし縛り方が甘いで
す。これなら、なんとか抜けられそうです。

取りあえずベットから抜け出すと、部屋を観察します。・・・
見おぼえがあるな。どう見ても、塩田の管理棟にある私の部屋です
ね。私の杖は・・・・・・・・机の上に有ります。窓から外を確認すると、
クリフが普通に設置作業をしていました。・・・・・・・・誘拐の線は消え
ましたね。

「如何いう事ですか？」

私は必死に思い出しながら、現状を分析しました。しかし、こう
なる以前の記憶があやふやです。何か健康的に、問題が出たのでし
ょうか？・・・・・・・・病気？いや・・・・・・・・過労ですね。おぼろげながら、
かなり無茶をした記憶があります。

・・・・・・・・無理する私を見かねて、部下達が拘束隔離した？

「そう言う事ですか」

間違いないですね。皆には心配かけました。それよりも身体の状態から、かなり長い時間寝ていた様ですね。・・・お腹がすきました。取りあえず食事です。

取りあえず食堂に行き、あまり物のスープとパンでお腹を満たす事にしました。

食べ終わったら着替えて、仕事の続きかな。

そんな事を考えていると、あつと言う間に食べ終わりました。食器を片づけ、いったん部屋に戻ろうと歩きだした所で、それは起こりました。

「大変だ！！ギルバート様が脱走したぞ！！」

・・・おい。私は犯罪者じゃないぞ。

突然響いた大声に、思わず心の中で突っ込みを入れてしまいました。

「取り逃がしたら、シルフィア様の特訓フルコースと思え！！」

「応！！」

いや、それはちょっと・・・罰としては酷過ぎる。・・・かな？

出て行くに出て行けない雰囲気、既に出来あがっています。自

業自得とは言えこの状況は、私が悪いのでしょうか？そんな事を考えていると、後ろに有る気配に気付きました。

「!？」

私の背後に居た人間は、体当たりする様にぶつかって来ました。なんとか反応して避けようと思いますが、身体の動きが鈍すぎて間に合いません。なすすべなく体当たりを食らい、そのまま取り押さえられました。

「放してください」

「ダメです」

私を取り押さえているのは、守備軍から応援に来た土メイジの一人です。

「確保しました!!」

耳元で怒鳴らないで欲しいです。その声を聞きつけ、そろそろと皆が集まって来ました。

「良くやった!!」

まるで賊を捕まえたような勢いです。止めて欲しい。

「ギルバート様は、絶対安静です。よろしいですね」

……クリフ。なんか怖いよ。

「いえ……しかし」

日程的に、ここで素直に頷く訳には行きません。

「シルフィア様に、有る事無い事報告しますよ」

……脅されました。クリフは、かなり本気の様です。ここは逆らわない方が吉ですね。

「はい。解りました」

私は泣く泣く了承しました。

あれから二日ほど安静にし、ようやく復帰の許可がおりました。

作業を再開しましたが、相変わらず流下盤の《鍊金》作業は、終わりが全く見えません。全体的に見ると残りは、枝条架の作業が5割強と流下盤の作業が5割弱です。枝条架の方は収穫の季節が終わり、領民達に余裕ができるので一気にスピードアップします。こちらは何とか間に合う計算です。しかし、流下盤の方が終わりません。このままでは、ヤラの月（1月）中に終わらないです。

……なのに。

「一日の作業時間は、10時間までです」

……なんでやねん。終わらないちゅーに。クリフは何を考えているのでしょうか？まあ、普通に考えれば、私の健康なんですよが……。復帰してから、やたらと調子が良いのに。仕方が無

いので隠れて作業しようとしたら、一発ではれて監視を付けられました。お陰さまで対人関係が、ギスギスしていますよ。私が悪いのでしょうか？まあ、悪いんでしょうね。

しかし何処に行くにも、監視の目……目……目です。肉体的負担は半分以下に減りましたが、精神的負担は4倍以上です。その所為か、なんか孤立している気がします。……寂しい。

ヤラの月に入り、始祖の降臨祭が始まりました。半ば意地になっていた私は、家にも帰らずに塩田の管理棟で降臨祭を過ごしました。皆には警備の人員を残し、交代で休みを取らせましたが、警備「私の監視の図式が出来上がっています。監視の目は全く緩みませんでした。

後に思えば、この時私の寂しさは臨界を突破していたのでしょう。私はある計画を、実行に移す事にしました。普段の私なら、絶対に実行しない様な事……つまり。

……使い魔の召喚です。

実行する場所は、ある程度の広さと人目のない場所である必要があったので、管理棟の裏にしました。実行日時は、なるべく良いコンディションで臨みたかったので、休日（クリフに無理やり取らされてる）にしました。

監視の目を無くすために、ドナの前で父上に手紙を書きました。内容は謝罪の言葉と「塩田の設置作業に手間取り、設置完了がハガルの月（2月）中旬から下旬までかかる」と、言う物です。既にド

ナの方から報告が行っているので今更ですが、私がもう焦っていないというアピールです。更に作業員全員の前で、無理をした事を謝罪しました。

それから三日もすると、クリフ達は安心したのか監視の目が無くなりました。次の休みに実行です。

ヤラの月・エオローの週・虚無の曜日です。今日が実行の日です。昼過ぎに管理棟裏に移動し、そのまま日向ぼっこをするように休みます。そして人目が完全に無くなったのを確認すると、私は呪文を唱えました。

「我が名はギルバート・アストレア・ド・ドリユアス。五つの力を司るペンタゴン。『私と傷を・・・孤独を癒し合い、共に支え、共に背負い、共に歩んで行ける者よ』我の運命さだめに従いし、”使い魔”を召還せよ」（どうか・・・私の声に応えてくれ）

呪文が完成すると同時に、銀色の扉・・・門が現れました。召喚されるのは、私の属性から考えて四足の獣でしょうか？それとも、翼有る獣でしょうか？私は期待に胸膨らませました。

出て来たのは・・・。

ハンターを連想させるシャープなシルエツト。

体毛は全て漆黒に染まり。

瞳は美しい紅。

獲物をしとめる牙。

獲物を切り裂く鋭い爪。

その身軽さを支える細長い脚。

優雅に揺れる美しい細長い尻尾。

そこには完全無欠の黒猫様が居ました

第四十二話 塩田設置作業？二十四時間働けますか？（後書き）

書こうと思っていた事の、半分もかけていません。
全部書いたら、とても読めたものではありません。
自分の力不足に、頭が痛くなる一方です。

使い魔の又コ様は、只の又コ様ではないのでご安心を。
正体は、次話以降をお楽しみに。

ご意見ご感想をお待ちしております。

第四十三話 肩の力を抜こう。ぬこぬこ？（前書き）

サモン・サーヴァントの独自設定が微妙に含まれます。
読まれる際はご注意ください。

第四十三話 肩の力を抜こう。ぬこぬこ？

こんにちは。ギルバートです。とうとう使い魔を召喚してしまいました。マジ見解では使い魔のルーンには、主に対する敵意を消し去る効果があると考えています。よって自分が使い魔に嫌われる事をして、最悪の場合使い魔はそれを主に表現出来ないと考えます。

原作でその最悪の例が、神の頭脳・ミョズニトニルンのシェフィールドです。彼女の場合は主に、女として好意を持ってしまったのが悲劇の始まりと考えます。人間は往々にして、好きな相手だからこそ許せない事があります。それを敵意として消されてしまったら、心の中にぽっかりと大きな穴が空いてしまいます。その穴を埋めるのが、元々持っていた好意です。結果、主に持つ好意が大きくなり、また許せない事が……。この繰り返しで、彼女の心は壊れてしまったのでしよう。やがて、ルーンで打ち消せる限界を超え……。

恐らく、そこに例外はありません。それはルイズ達も、一歩間違えば悲劇が起これと言つ事です。私は今ほど、自分が虚無でない事に安心した事はありません。

たった今召喚したばかりの黒猫を見ながら、そんな事を考えていました。更に深い思考に落ちそうになった時、それは起こりました。

「黙ってないで、何か言ったらどうじゃ」

あれ？女の人の声？何処から？発生源は黒ねk……。ないつて。私は思わず、周囲を確認してしまいました。しかし、それらしい人影はありません。

「たわけ。目の前に居るじゃろう」

気のせいじゃなかった。契約もしていないのに、この黒猫喋ってます。

「返事くらいしたらどうじゃ？」

今の所、周囲に人の気配は有りません。しかし、何時人が来ても不思議ではない場所です。契約もしていないのに喋る猫。知られば、アカデミーに攫われて……。

「汝なれ!!! いい加減吾われの……ムグウ」

暫く呆気にとられていましたが、思考がアカデミーに至ってからの行動は早かったです。速攻で黒猫を捕獲し、口を押さえこれ以上喋れない様にします。

「日光浴も終わったし、そろそろ”暖かい”部屋に戻りましょう」

黒猫は私の突然の行動に驚いたのか、少し暴れましたが私の”暖かい”と言う言葉に、大人しくなりました。日光が当たって風が無いと言っても冬の屋外です。”暖かい”と言う言葉は、この黒猫にとってかなり魅力的だったのでしょうか。

私は黒猫を抱き上げる際、小さく「今は喋らないでください」と耳打ちしました。その際黒猫は、僅かにですが頷いてくれました。

黒猫を抱き上げ歩き出すと、私はすぐに幸せのあまり顔が綻びました。

だってこの子。細くシャープな体つきなのに、毛並みが物凄く綺麗で柔らかいのです。

……もふもふです。

……もふもふの、もっふもふなのです。

ああ……堪りません。この美人又コさん完璧です 最高です

ふわふわのもこもこです~~~~~

幸せのあまり顔が、ニコニコと笑ってしまいます。そんな私は傍から見ると、物凄い不気味に見えるのかもしれない。部屋に戻る途中で何人かとすれ違いましたが、驚いた様な表情で私の顔を凝視するのです。その様子に「見せ物じゃないぞ！」と言ってやりたくなりましたが、今の私は機嫌が良いので見なかつた事にしてあげます。

注

年相応に笑うギルバートを見て、物凄く驚いているだけです。しかも、黒猫と言う小動物付き。周りから見ると、同一人物に見えませんが。これも普通の行いと言えるでしょう。

引き続き幸せに浸りながら歩き、肉球に思いを馳せていた所で部屋に到着しました。黒猫をベットの上に降ろし、扉にロックと部屋にサイレントの魔法を掛け、盗み聞き出来ない様にします。

「これで準備完了です」

私はそう言いながら机から椅子を運んで、ベットの前に座りました。

「聞き耳は封じたので、もう喋っても大丈夫ですよ」

「何故？と、聞いての良いのかの」

まあ、当然の質問ですね。

「この国には、珍しい生き物を調べるのが好きな人達がいるのです」
「よ」

「……ほう。それで？」

「知られると、捕まる可能性があります。そうで無くとも、引き渡せと五月蠅いです」

猫の表情は良く分かりませんが、瞳孔の動きと尾の様子で何となく解ります。……少し、怒ってますね。

「ほう……。。で、引き渡されたら如何なるのじゃ」

「体中調べられます」

「それから？」

不機嫌度少しアップですね。

「サンプルを取られます。毛とか血とかですね」

「それから？」

不機嫌度更にアップ。

「得体の知れない薬を飲まされると思います」

「なるほど」

「……尻尾が膨らんでいますね。逆に喧嘩売りに行きそうな勢いです。」

「最後に解剖されて、ホルマリン漬けにされます」

「……かいぼー？ほる……ま……」

何だかキョトンとしています。(めがっさ可愛いです)しかしこの様子では、言葉の意味は知っていても、頭で理解できていない様です。

「腹を裂かれて、内臓を取り出されて……頭の中身も」

「や 止めぬかー!」

どうやら本気で怯えているようです。耳を畳み、プルプル震えています。

「……やっぱり可愛いです。」

「バレ無ければ大丈夫ですよ。但しバレたら、庇い切れる保証はありませんよ。昔の話ですが、韻竜が居ると言う噂だけで竜が乱獲されましたし」

「竜が乱獲!？」

ちなみに、この話はただの噂です。最も本当に聞こえるのが、アカデミックオリティです。幻獣の最上位と言われる竜を引き合いに出せば、早々無謀な事はしないでしよう。黒猫は頭を低くし、ガタガタと震えだしました。

あれ?そう言えば、まだ黒猫の名前を聞いていません。黒猫は「吾らが……」「やら」「い……竜が……」「とブツブツと言っていました、この話題は終了です。

「バレなければ大丈夫です」

「そうじゃな」

黒猫は私の言葉で、少し落ち着いた様です。

「話は変わりますが、私の名前はギルバート・アストレア・ド・ドリユアスです。黒猫さんの名前は何ですか?」

「……」

黒猫さんが、急に黙ってしまいました。何やら重苦しい沈黙が……。名前聞くのが地雷と言うのは、あんまりだと思つのは私だけでしょうか?

暫く何も言えずにいると、ようやく黒猫が口を開きました。

「……………名など無い」

「……………え？」

「名など無いと言ったのじゃー！吾^{われ}が生きた悠久の時の中で、吾の名を呼ぶ物など存在せぬ！！」

「……………そう……か」

黒猫が下を向いて黙ってしまったので、再び重苦しい沈黙がこの場を支配します。……………まあ、こう言う時に言う言葉は、昔から決まっていますね。

「なら、今決めてしましましょう」

その言葉に黒猫は、顔を上げ私の目を真直ぐ見つめて来ました。私も黒猫の目を、真直ぐ見つめ返しその名前を模索します。通常猫は、見る≡警戒する≡敵意が有ると繋がります。（注 マギ見解）しかしこの黒猫は、只管に真直ぐに私と視線を交わしました。そこから出てきた答えは、当然のごとく「猫らしくない」でした。その所為で真っ先に浮かんで来た猫っぽい名前が、私の中で全て却下されました。おかげ様で、良い名前が全く浮かびません。

私がうんうん唸り始めると、黒猫は目を細めました。無言のプレッシャーが……………。

「そうですね……………。クロと言うのは如何でしょう？」

「黒猫じゃからクロか？・・・安直じゃの」

様子から察するに、お気に召さなかった様です。

「そもそも、まだ契約してなかるう。吾の事を把握もしておらぬのに、名前など決められるはずもなかるう」

「それは「さつさとコントラクト・サーヴァントしろ」と、言う事でしょうか？」

「それが目的で、吾^{われ}を呼び出したのじゃろう」

・・・黒猫の言葉に、私は言い返す事が出来ませんでした。

言い訳にしかありませんが、これ程高度な知能を持ち言葉を解する存在が召喚されるとは、微塵も思っていなかったのです。そして何より不味かったのが、言葉を交わし会話をしてしまった事です。私の中に黒猫に対する友情の様な物が、今までの会話で出来てしまいました。

使い魔とはメイジにとって、友人と奴隷の中間の様な物と私は考えています。友人寄りか奴隷寄りかは、主であるメイジの胸先三寸です。しかし私にとって使い魔は、完全な奴隷にはなっても、完全な友人にはならないと考えます。それはメイジが使い魔に、一方的に命令を強いる事が”出来る”からです。私にその心算が無くとも、”出来る”事が問題なのです。しかもルーンによる好意と言う形で・・・。

私はこの短い会話で、黒猫と純粋な友人関係を望んでしまいました。

「……そう。サモン・サーヴァントで呼び出した事を、後悔する位に。」

「汝^{なれ}……急に頭を抱えてどうしたのじゃ？」

黒猫が心配そうに、話しかけて来ました。その気遣いが、私の心を更に追い詰めます。

ここは何かしらの理由を付けて、コントラクト・サーヴァントをしない方向に話を持って行くしかありませんね。……たとえばそれが、私の愚かしい自己満足だとしてもです。

私はそう考え、口を開きました。

「すみません。少し思う所がありまして……」

「ほう……。悩みか？相談に乗っても良いぞ」

「いえ、大した事ではありません。それよりも、コントラクト・サーヴァントについてですが、今直ぐで無くとも良いでしょうか？」

黒猫が首を傾げます。……うう、可愛い。

「何故じゃ？」

「私は常々、使い魔の召喚と契約が不公平と考えて来ました。メイジ側はくじを引く様な物なので、ある意味自業自得です。どのような存在が召喚されても、文句は言えません。しかし使い魔側は、突然目の前にゲートが現れて、使い魔になるかどうか選ばされるので

す。そこに主を選ぶ余地は、ありません」

「?・・・何故じゃ?互いに選ぶ事が出来ぬのじゃ。ならば召喚に応じるか応じないかを、選べるだけで十分と思うが?」

「そこですよ。召喚者はリスクが殆ど無いのに対し、召喚される側は全てを捨てるか選択させられます。リスクに対して、与えられる情報が少な過ぎると思うのです」

黒猫が考える様な仕草を見せます。・・・考える又ゴ。萌死にしようです。

「吾が思うに、ゲートに召喚者の雰囲気・・・イメージの様な物が映されておると感じる。吾ら獣にとっては、それで十分と思うが」

・・・それは新事実です。原作では、そんな表記有りませんでした。しかし、ここで引き下がる訳には行きません。・・・たとえばそれが私の独り善がりであつてもです。

「そうですね。しかしこの短時間で、それが絶対的事実と言いきれますか?」

「ぬぬ・・・。確かに言い切れんの」

良し。ここで畳みかけます。

「そこで先程の提案に戻ります。コントラクト・サーヴァントせず、私と一緒に居てくれませんか?もちろんその間の衣食住は保証します。そちらから見れば、私が主として相応しいか判別する機会

が出来るだけです」

「……そう言う事なら良からう。吾にとって不都合など無いから」

「……何故か詐欺師になった気分です。まあ……良いか。こちらにリスクは有っても、黒猫側にリスクは有りませんから。このままずると、トリステイン魔法学院の使い魔召喚の儀まで引っぱりますか。本当に縁が有れば、その時にもう一度この子が召喚されるでしょう。」

この時私は、気軽にそう考えていました。

……それが後に、とんでもない事になるとも知らずに。

黒猫との出会いから、一晩明けました。あの後黒猫と一晩中話をし、結局一睡も出来ませんでした。黒猫の正体を聞いた時には、正直引きました。いえ……ドン引きしました。ラインメイジの私に、如何してそんな高位の存在を呼び出せるか不思議でたまりません。そこで自分の力を確認したところ、なんとトライアングルメイジになっていました。何時の間にかと思い、良く思い出してみると……。

……裸コート。……何故？

もう一度落ち着いて、思い出してみました。

しかし、唯一出て来たのが……裸コート万歳！！

私の頭の中に残ってる記憶は、ただそれだけでした。私はこの事実に頭を抱え、悶絶する羽目になりました。そんな私を慰めてくれたのは、黒猫……いえ、ティアでした。

黒猫の話聞き、思いついたのがこのティアと言う名前でした。由来を話した時の黒猫の反応は、正直面白いの一言でした。まあ、結局この名前を気に言ってくれたようなので、私的には問題無しです。

それよりも、もう朝食の時間ですね。

「ティア。そろそろ朝食の時間ですよ」

「うむ。では朝食の後に、吾は一眠りするとしようかの」

羨ましいです。朝食の後に私には、流下盤《鍊金》地獄が待っているのに。

「主よ。如何したのじゃ？不満そうな顔をしておって」

「私は朝食を食べたら仕事です」

「ぬ……それはすまんの。吾の身は猫じゃ。自由にさせてもらおう」

くう……。本当に羨ましいです。

「なら餌も残飯で良いですね」

「……主よ。吾は待遇改善を要求する」

私は余裕の笑みを浮かべました。しかしティアの方が、一枚上手だったようです。

「主は吾の事が嫌いなのか？」

ぐう……。まるで私が苛めている様な雰囲気……。。

「……解りました。撤回します」

私の返事に、ティアは嬉しそうに尻尾を立てます。やはりティアの方が、一枚も二枚も上手ですね。伊達に歳くっついていません。

「主よ。何か失礼な事を考えたか？」

私は曖昧に首を横に振ると、ティアを抱き上げ朝食へと向かいました。

ティアを召喚してから、明日で一週間になります。最初は周囲から浮いていたティアですが、三日もすれば皆慣れて可愛がられるようになりました。周りの認識でティアは、私の飼い猫と言う事になっています。当初私の飼い猫と言う立場は、あまり良く無いと思ったのですがティアの話ではそうでもない様です。

曰く、ティアが来てから私が無理しなくなった。

曰く、ティアが来てから私の物腰が柔らかくなった。

曰く、ティアが来てから私が年相応に笑うようになった。

全てティア情報ですが、自分が思っているほど周りからのイメージは良く無かった様です。私の心に余裕が無かった証拠ですね。反省です。しかし、それがティアを受け入れる下地になったと言うなら、世の中何が幸いするか解らない物です。

取りあえず年相応云々は良いとして、物腰についてはこれから注意です。無理の方は今更ですが、もう少し意識しようと思いました。まあ、人間すぐに変われば苦労しませんが……。

と言う訳で人生に余裕を持つ為に、休みの日くらい満喫しようと考えました。それにはやはり、お出かけが一番です。この話を相談した所、ドナが異常に喜びました。なんでも「ようやく護衛らしい事が出来る」との事です。クリフの事ばかり気にして、ドナの事を全く見ていなかった事に今更ながら反省です。

「取りあえず明日の虚無の曜日は、ドゥネンとオースヘムの町に行きます。日帰りで行ける所では、そこ位しかありません。ガリア国境が近いので、護衛のドナは一応注意しておいてください」

ドゥネンは、オースヘム領のガリア国境沿いにある漁村です。オースヘムの町は、その名の通りオースヘム領の中心地で、ガリアとオースヘム・ブルーヘントの物流を繋ぐ貿易町です。（さびれていて都市と言えないばかりか、下手をすれば村です）魔の森解決前は、軍事物資の輸送中継地としてそこそ賑わっていました。これから塩の輸送中継地として活躍が期待されます。オースヘムは辺境で、土地だけは広いので他にも村はありますが、どれも寒村ばかりで見れる所はありません。これからの発展に期待ですね。

「はい!!」

ドナが嬉しそくに返事をしました。よっぽど雑用と監視に、嫌気がさしていたのですね。ごめんなさい。

最初は領民に混乱を与えないように、こっそり行く心算でした。しかしそれには「他の部署の人間の手を煩わせる」と言われて、却下されてしまいました。特にアンリから、泣きが入りました。（変装用具一式と、各部署への連絡的な意味で）まあ、前日に言われても無理な物は無理ですね。

しかしこれで、お出かけでは無く視察に化けましたね。まあ、良いか。

と言う訳で、ドナのマンティコアでドゥネン村にやって来ました。マンティコアを村の外に待機させ、村に入ると当然のごとく奇異の目で見られました。

「注目されていますね」

私の呟きにドナが頷き、ティアが目で肯定しました。

「ギルバート様。やはりその格好が問題と……」

ドナが言いにくそうに、指摘して来ました。そんなに変でしょうか？一部例外を除いて、貴族としては普通の格好をしています。その例外が、お腹に付けた自作の特大ウエストポーチです。中には、

カンガルーよろしくティアを入れています。時々顔を出す姿が・・・もう、有袋類万歳です。

・・・トリップしている場合じゃないですね。

「取りあえず村長に挨拶してから、村の様子を見させてもらって、お土産に新鮮な魚でも買って行きましょうか・・・」

「・・・そうですね」

ドナの返事を確認して、適当な村人に村長宅を教えてもらおうとした所で、ティアが袋越しに私のお腹をフニフニ押している事に気が付きました。視線を落とすと袋から首だけ出して、めっさ期待のまなざしを向けるティアの姿が・・・。なんか、涎が垂れている様な気がするのは気のせいでしょうか？

「解りました。ティアの分も買ってあげます」

約束すると、ティアは満足そうに私のお腹に顔をこすり付けます。

「あの・・・貴族様」

不意に話しかけられ、声のした方を確認すると一人の老人が居ました。

「私は、ドゥネン村を預かっている村長の口口と言います」

「ドリュアス家嫡子、ギルバート・ド・ドリュアスだ」

あっ・・・村長固まっています。

「私は塩田設置の責任者をしている。塩田の設置作業が一段落したので、後学の為付近の領民達の生活を見ておこうと思ひ、こうして見て回っている所だ」

「は はあ」

村長。早く再起動してください。

「と言う訳で、この村の生活を見せてもらいたい。案内を頼めるか？」

「は はい！！ご案内します！！」

村長はガチガチになっていますね。まともな話が聞けるか、心配になってしまいます。そんな村長に案内されて、村の主要施設を紹介してもらいます。畑・井戸と手押しポンプ・屯田兵詰所兼寺子屋・漁港と魚の加工場の順でした。私の心配とは裏腹に、二つ目の井戸と手押しポンプを紹介してもらった時に、村長は落ち着いていました。しかし、気になる事があります。

「村長」

「はい」

「村民達なのだが、女子供ばかりなのは何故だ？」

「出嫁ぎに出ているのです」

出嫁ぎと言う言葉に一瞬考えてしまいましたが、すぐに思い当た

る事がありました。

「ああ。オースヘムとフラワーケニッセを繋ぐ街道を造る為の人員が、村の男手が不足していないか？」

「大丈夫です。屯田兵として来てくれた方達が、色々と良くしてくれていますので」

村長は迷い無く答えてくれました。屯田兵は上手く機能している様ですね。と言うか、本末転倒の様な気もしますが……。いや、恐らく逆ですね。街道の方の人員に好条件を付けた所為で、男手がそちらに取られてしまうから、村の男手不足を解消する為に屯田兵を使ったと言う訳ですか。

私は一度大きく頷くと、村長に聞きました。

「村の方で、何か懸念事項や不安な事は無いか？」

村長は思い出すようなそぶりを見せます。そして、何か思い至った様に口を開きました。

「そうですね。最近物価の方が、上がって来ているのが心配ですなるほど。確かにそれは心配ですね。

「魔の森解決にともない、ガリアが物資の通行税を上げたからだ。街道が完成すれば、物価は落ち着いて元に戻る。心配はいらない」

「そうですね。それは良かった」

村長が嬉しそうに頷きました。

「他には？」

「いえ……。これと言って有りません。傭兵崩れが来ても屯田兵の方が追い払ってくれましたし、マギ商会のおかげで悪い商人の被害にあう事も有りません」

「寺子屋の方はどうだ？」

「あつ……。はい。子供達に読み書き計算を教えると言うので、最初は驚きました。しかし良く考えてみれば、藁編みの仕事や街道工事で現金収入を得られましたし、村で作った物を高く買ってくれるマギ商会の方達も居ます。本当に、良い時代になった物です」

村長は嬉しそうに話していますが、実際はそうでもありません。

読み書き計算ができると言う事は、奴隷としての品質が高いと言う事です。必然的に奴隷商達は、新ドリユアス領内の子供を買おうとするでしょう。下手をすれば、ドリユアス領産の奴隷がブランドになるかもしれません。そうなれば、強引な手を使う奴隷商も出て来ます。……。取りあえず奴隷の売買は、プリミル教の教義で（一応）禁止されているので、それを利用して警備を固める方向で対応するしかありません。

せつかく育ってきた人材を、奴隷商に奪われては堪りません。断固阻止です。

話も一通り済みましたし、視察の内容もこれまでですな。

「そうか。参考になった。……。ところで、部下達の土産として

「鮮魚を買って行きたいのだが可能か？」

「はい。可能です。こちらへ……」

村長に案内された場所は、魚の加工場の裏でした。そこには木箱と樽が、いくつか積んであります。一番上の木箱から、魚の尾がはみ出していました。木箱の中身を確認すると……。

おお、^{カツオ}鰹だ。たたきやカルパッチョにすると美味しそうだ。でも今は旬じゃないかな。こっちは……少なくともマジ知識に無い魚だ。これは怖くて買えないな。おっ……あつちには4サント位の小海老も有るな。油でカラツと揚げて、塩を振つたら美味しそうだ。こっちは、^{タラ}鱈か……久しぶりにムニエルを食べたいな。^{ブリ}鰹も有るな。刺身に塩焼き……照り焼きは材料的に無理かな。

木箱の方は、ちゃんと締めて血抜きした魚が収められている様です。樽の方は……生きた魚ですね。このまま樽ごと輸送するの……末端価格が、馬鹿みたいに高そうですね。

魚の加工場を見ると、作業員が魚を開いていました。干物でも作るのかな？……樽の方は良いとして、木箱の方は全部干物にするのでしょうか？鰹等の大型の魚は、干物に向かないと思うのですが。

「木箱の魚は如何するのだ？」

私は隣に居る村長に聞きました。

「一応このまま出荷されます。生のままだと腐るので、出回るのはこの村とオースヘムの町位ですね」

締めて血抜き済みの魚なら、《固定化》で保存がききます。まあ、そんな事位でメイジを雇うと、魚の値段が数百倍に跳ね上がります。しかし、私が買うとなると話が別です。……と言いか、ティアさん落ち着いてください。ちゃんと買ってあげるから。

「ならば、木箱の方の魚を買おう」

「えっ！！樽の方の魚では無いのですか？」

……ん？ああ、なるほど。貴族が喜ぶのは、生きた新鮮な魚と言っ訳ですね。そう思うのも無理ありません。

「《固定化》を使えば、木箱の方の魚で十分だ。樽の方だと荷物になるからな」

「そうですか」

取りあえず買うのは、小海老と鱈それに鰯ですね。鰹は旬じゃないしな……。待てよ。鰹で、鰹節作れないかな。必要なのは確か、鍋・スモーク缶・燻製用チップ・砂糖・青カビは流石に無理か……。でも出来ない事は無いな。やってみるか。そうなると昆布も欲しいな。存在は以前確認しているから、後でアンリに持ってこさせるか。

「では、すぐに準備させます。領主さまのご息が、こちらの木箱の魚全てお買い上げだ」

あれ？いつの間にか、木箱の魚を全部買う事になってる？まあ、良いか。鰹が7尾・小海老40尾余・鱈が3尾・鰯が4尾・謎の魚

5尾・・・食いきれない分は、家に送り付ければ良いか。どうせ《固定化》かけるし悪くなる事は無いでしょう。

魚の料金は、いきなり来たお詫びも含め色を付けて払っておきました。村長は遠慮しましたが、そこは貴族の顔を立てると言う事で納得してもらいました。

買った魚と小海老に《固定化》を掛けると、木箱を重ねて《鍊金》の木溶接でひと塊りにします。そして《浮遊》レビテーションで、浮かせて引つ張りました。村長に別れの挨拶をし、村人から見えない所まで移動したら、バラして魔法の道具袋にしまえます。・・・機密（魔法の道具袋）の為とは言え、面倒くさいです。

次のオースヘムの町ですが、思ったほど寂れていませんでした。しかし、基本的にドゥネン村と変わりません。規模は小さい町位ですが、防壁は無いです。男が出稼ぎで殆ど留守にしている、それを補う様に屯田兵が働いていました。数人マギ商会以外の商人を見かけましたが、どの商人も商売にならないと言っています。まあ、それも仕方が無いですね。マギ商会は領地活性化の為に、儲け無しで商売やっていますから。

目新しい物も無く、食指が動く様な商品も特になかったので、案内してくれた衛兵にお礼を言ってそのまま塩田に帰りました。

謎の魚の正体が気になりますが、私は怖くて料理できません。塩

田の厨房は当番制で、まだ正式なコックを雇っていないので仕方が無いです。なので最悪家まで持って帰って、家のコックに料理してもらいましょう。

取りあえず今夜は、ブリの刺身と塩焼きです。あと、エビのカリカリ揚げ。・・・明日は鱈のムニエルかな。鰹節は、明日以降にゆっくりやれば良いでしょう。

食生活が豊かな事は良い事です。

・・・こら!!ティア!!厨房に入るとオシオキ(食事抜き)ですよ!!

第四十三話 肩の力を抜こう。ぬこぬこ？（後書き）

黒猫の正体が、少しずつ輪郭を帯びていきます。

正体がベタ過ぎても、怒らないで下さいね。

次話で家に帰る予定です。

塩爆弾の前に、家族達が爆発しそうです。

家帰らなかったから。

ご意見ご感想お待ちしております。

第四十四話 ティアの受難？大変ですね

こんにちは。ギルバートです。ようやく塩田に帰って来ました。初日は、ブリと小海老を使った料理をするつもりです。

現在塩田の厨房にコックは存在せず、料理を出来る者が当番を決め交代で厨房に立っています。料理は出来ませんが、作業負担が大きい私とクリフ他土メイジは当番から外されています。まあ、時々する分には料理も気分転換になって良いです。

と言う訳で、ブリをさばきます。その前に、出刃包丁と刺身包丁を《錬金》で作成しておきます。出刃包丁で鱗を綺麗に落として、内臓を取り出し水で丁寧に洗います。次に頭を落とすのですが、体格の所為でてこずりました。次がいちばんの難所である三枚におろす作業です。しかしこちらはマジ時代の経験のおかげか、ゆっくり丁寧にやったらすんなり出来ました。仕上げに、小骨を取り除いて終了です。皮は、塩焼きにする分は付いたままで良いので、刺身にする分だけ取り除けばOKです。骨や頭はあら汁に、刺身で取った皮は湯引きにしましょう。

ルンルン気分でここまで作業していましたが、いい加減ティアの視線が突き刺さります。微動だにしないで、こちらを凝視するのは止めて欲しいです。

仕方が無いので、刺身分から一切れ分切り分け、ティアの前に持って行きました。おお・・・瞳孔がまん丸に開いています。ティアの目の前で切り身を上下左右に動かすと、ティアの視線が顔ごと切り身を追います。

・・・ああ、なんか楽しい

「ギルバート様」

突然ドナが話しかけて来ました。何か用事でしょうか？と、私の注意が逸れた瞬間。

・・・ガブッ！！

ティアに、手ごと刺身を齧られました。イタイです。ドナは、涙目になる私に向かって「あ 明日報告に戻りますので、何かあれば声を掛けてください」と言うと、そそくさと逃げて行きました。自業自得の傷を《癒し》ヒーリングで治すと、私は料理に戻りました。

さて今晚のメニューです

？ブリの刺身

寒ブリは、脂が乗っていて美味しいです。刺身包丁を全体的に使い、丁寧に切っているのでベチャツとしていません。タルブ産の醤油も有るので、涙が出るほど嬉しいです。惜しむらくはワサビが無い事でしょうか・・・。後で必ず見つけます。

？ブリ皮の湯引き

刺身から余った皮を、湯がいて小さく切っただけの簡単料理です。揃えられる調味料の関係で、生姜醤油で頂く事になりました。

？ブリのあら汁

余った骨や頭を使い、あら汁を作りました。生臭くなるので、湯通しをしてから苔と血を入念に処理をしました。どうせなら、味噌

も持ってくれば良かったです。

?ブリの塩焼き

余分な水分をきっちり拭き取ってから、塩を振って木炭を使い網で焼き上げました。油が滴り落ちる身は、食べなくとも美味しいと断言できます。

?小海老のカリカリ揚げ

油でカリツカリに揚げて、塩を振りました。皮ごとバリバリ食べられます。

結果はかなり好評でした。特に酒飲み達は大喜びです。塩田の食堂だけあって、塩をふんだんに使えるのが良いですね。・・・それからティア。私の膝の上に鎮座して、刺身をかっさらうのは止めて欲しいです。・・・ここは心を鬼にして、怒らなければなりませんね。

・・・結果。丸一日抱かせてくれませんでした。もふもふ出来ないのは辛いです。そのうち、禁断症状とか出たりするのでしょうか?本気で心配です。

次の日鱈のムニエルを丸々一切れ上げたら、機嫌を直してくれたので良かったです。

ヤラの月(一月)も終わり、ハガルの月(二月)最初の虚無の曜日になりました。いよいよ鯉節作りに挑戦です。一昨日アンリから燻製用チップと砂糖が届きました。昆布は輸送の関係で、今回は見

送りです。鍋とスモーク缶（燻製器）は《錬金》で用意出来るので、朝起きてすぐに用意しました。

鰹をすべて解体し、7尾の鰹を左右の腹身と背身に切分け鰹節28本分の身を用意します。いきなりやって成功するとは思えないので、二本分だけ使い後は《固定化》を掛け直して壺に嚴重に封印し魔法の道具袋へしまっておきます。・・・ほつとくと、ティアに食い荒らされそうですし。

先ず一時間ほど、煮崩れしない様に煮ます。そこから魔法で出した冷水で、一気に急冷しました。水に入れたまま、残った骨を探しすべて除去します。（残すと割れの原因）それが終われば、ようやく燻製器の出番です。燻製用チップに砂糖を適量混ぜ、焙乾^{ばいかん}作業に入ります。ひっくり返して、表と裏をしつかりやったら本日の作業はこれまでです。後は毎日5時間位燻して、水分を飛ばせば完成です。水分が飛ぶまで、一週間から三週間繰り返すはず。大丈夫なら、叩くとコンコンと乾いた木の様な音が鳴ります。・・・後は、必要なら周りのタールを削って形を整えます。

青カビがあれば、削った後に植え付けて更に旨味を増す行程ができません。が、ハルケギニアではそこまで出来ませんね。

・・・初挑戦の二本は、焙乾の時の火力が強過ぎて火ぶくれを起こしダメにしまいました。ちなみに処分は、ティアが喜んで協力してくれました。

それから一週間後、ようやく鰹節が完成しました。流下盤《錬金》作業の合間を縫って、様子を見に行くのは大変でした。ティアは

二日で飽きて、燻製器に近寄りなくなりますが。

早速《錬金》でカンナを作り出し、自室で削ってみます。．．．．
下手糞な所為か、カンナの歯に手が当たり何度か血が出ました。負
けるもんか！こつちには《癒し》が有るんだ！！と言つ訳で、気
合で正しい削り方を模索しました。

暫くして、ようやく満足に削れるようになりました。早速削った
鰹節を、一掴み口に放り込んでみます。．．．うん。旨い。成功
です。

「．．．．主」

「あれ？ティア居たんですか？」

どうやら私が夢中になっている間に、ティアが部屋に帰って来て
いた様です。

「気が触れたのか？ 木が食すなど．．．．」

その言葉に、私は肩をガツクリと落としました。

「いや、これは鰹節と言つ物で．．．．」

私が説明しようとする、警戒する様に後ろに引かれました。ま
あ、嫌がる人に無理やり食べさせる物じゃないですが．．．．。

「美味しいですよ」

「主よ。吾の口に、その木屑を入れようとしたら敵とみなすぞ」

・・・敵と来ましたか。

「解りました。これはティアには絶対に食べさせません」

どうせ向こうから「無かった事にしてくれ」と、泣きついて来るでしょう。

鰹節を見られるとティアと同じ反応をされそうなので、人目の無い内に出し汁を作り鰹節自体は隠しておきます。出しを取る際の匂いで、ティアは早くも後悔している様でしたが、私は知りません。

取りあえず海藻を具にして、藻塩で味付けしたお吸い物を作りました。夕食時に出した所、評判は良くも悪くも無くで微妙な反応でした。どうやら味が上品すぎたのが原因の様です。魔法が有るとは言え、肉体労働も多い職場なのでもっと濃い味が好まれる様です。・・・完全に具の選択と味付けをミスしました。

夕食後に鰹節を削った物を出しました、最初は警戒していましたが私が目の前で食べてみせると、私に続いて皆食べました。こちらの方が、圧倒的に評判が良かったです。・・・喜んでいいのかな？

・・・ティアは意地になって、最後まで食べませんでした。しかもその後、拗ねられました。私にどうしろと言うのでしょうか？

ハガルの月（二月）も中旬に差し掛かり、ようやく流下盤《錬金》地獄から解放されました。クリフがめちゃくちゃ喜んで、スキップしていた上に転んでました。その後何事も無かった様に起き上が

り、突然喜びの雄叫びを上げられた時は、本気でどうしようかと思
いました。一瞬黄色い救急車を呼ぶか、真剣に考えてしまった私は
悪くないと思います。・・・ここハルケギニアなのに。

ちなみにクリフは、二日位で以前の調子（正気）に戻りました。
自分の醜態を必死に口止めして回る姿に、哀愁を感じずにはいら
れませんでした。・・・合掌。

枝条架の設置は完了しているので、実際に海水を流して問題無
ければ《固定化》を掛けて設置作業は終了です。マギ商会の方で
厳選した、信頼できる人員に塩田を引き渡します。まだ塩田用の
倉庫の設置が終わっていませんが、それは引き渡し後にオース
テムの守備隊が受け持ってくれます。

・・・後は警備の問題と、海鳥達の対処ですね。特に海鳥。

受け渡し後三日ほど様子を見ましたが、目標量以上の生産も
問題無く出来ていました。もちろんその間は、倉庫建造の手伝い
もしました。と言うか、三日で倉庫建造は終わりました。

コラ！！そこ！！「刑期が終了した」とか言わない。

さて、あとは・・・。

「ギルバート様。いい加減帰った方が良く無いですか？」

・・・ドナ。その突っ込みは入れて欲しく無かったです。今
まで散々帰還要請を無視して来たのです。帰ったら母上が絶対
にキレます。

「クリフ。ドナ。もちろん護衛として、母上からも私の事を守ってくれますよね」

「ご冥福をお祈りしておきます」と、クリフ、

「家に到着すれば、護衛任務は終了です」と、こっちはドナ。

……裏切り者。如何にかする方法を考えなければ、下手すると帰還日＝命日になりかねません。そして母上だけでは無く、ディーンとアナスタシア対策も考えておかなければなりません。

……本当にどうしよう。頭痛い。

と言う訳で、帰って来ました。ドリユアス家の館です。結局良い対策は、思い浮かびませんでした。クリフとドナは、速攻で兵舎に逃げ出します。しかし、出迎えが全く無いのが不気味です。使用人達の休憩時間帯なのか、外から人影が一切見えないのが不気味さに拍車をかけています。

軽く周りを確認しましたが、出迎えが無い事以外はいつもと変わりません。そしてティアが異常に静かな事に気付き、お腹の特大ウエストポーチを開いて見ると……。寝てますね。こっちは大変なのに。

……。鼻摘まんでやろうかな。

一瞬浮かんだ意地悪な考えを、首を振りながら消し去ります。

このまま待っていても仕方が無いので、館に入ろうと玄關に近づくと扉がギョウウウウと、音を立てながら開きます。そして、中からは精気が無い顔のオーギュストが出て来ました。

……オーギュスト。その顔。素で怖いよ。

「お帰りなさいませ。坊ちゃん。出迎えが遅れてしまい申し訳ありません」

顔色の割に、声や所作は確りしていますね。見た目ほど、消耗していないのでしょうか？

「ただいま戻りました。父上と母上は？」

「ようやく……ようやく書類が一段落して、現在お休み中です」

オーギュストの顔からは、達成感の様なものが感じられます。以前の状態を思い出す限り、とても信じられません。が本当の様です。

「良くそこまで持って行きましたね。未だに書類の山に埋もれていると思っていました」

私は正直な感想を、口にしました。

「ヴァリエール公爵のおかげです」

「公爵？」

「はい。公爵が優秀な補佐官を派遣してくれたのです。その人の話では、書類の山が出来た最大の原因は『領地規模に合った運営体制

が出来ていない事』らしいです。今までのドリユア家の体制は、小・中規模な領地の運営に向くフットワークの軽い体制だったそうです。その分運営者に負担が来るので、大規模な領地運営には向かないと仰っていました。そこで、現在の領地規模に合った体制作りを、指導してもらったのです」

「結果、上手く行ったと言う事ですね。しかし、良くこの短時間で適用できましたね」

「はい。その方も驚いていました。大規模な『組織の再編成』と『領地運営方法の変更』に、上手く乗せて同時に処理出来たからだそうです」

「それは良かった。そして、書類仕事が一段落したと言う事は母上の機嫌も……」

「はい。あれほど機嫌が良いシルフィア様は、なかなかお目にかかれません」

私は心の中で、ガッツポーズをします。ようやく我が人生に、ツキが回って来ました。これが喜ばずにいられようか？いや、いられん！！（反語）

……おっと、テンションが上がり過ぎて思考が変な事になっていました。明るい未来が見えて来たので、私も多少余裕が出て来ました。取りあえず状況を、整理……。と、その前に。

「オーギュスト。顔色があまり良くない様ですが、休養はちゃんと取っていますか？」

「いえ、書類の山が片付いたばかりですから。それに、本来の職務（執事）を蔑にする訳には行きません。と言っても、旦那様より明後日から特別休暇を頂ける事になっています」

そしてオーギュストは、笑顔で「なので問題ありません」と続けました。

「解りました。しかし、今オーギュストに倒れられては困ります。決して無理はせず、体調管理には気を配っておいてください」

「はい」

オーギュストは素直に返事をしましたが、何故か口元が笑っています。怪訝に思いオーギュストを注視すると、聞く前に答えが返ってきました。

「旦那様にも、全く同じお言葉を頂きましたので……」

「……そうですね」

「お言葉の通り、今日は早めに休ませて頂く事にします」

「そうしてください。……父上達は居間ですか？」

オーギュストが頷くのを確認すると、軽く礼を言い居間の方へ足を向けました。

居間に到着すると、覚悟を決めそのまま入室します。

「ただいま戻りました」

居間に居た父上と母上に向かって、帰宅の挨拶をします。

「良く帰ったギルバート」

父上は笑顔で答えてくれました。

「お帰りなさい。ギルバートちゃん」

母上も上機嫌です。良かった。オシオキと言う名のリンチは、かなり軽減されそうです。上手く立ち回れば、回避できるかもしれない。しかしその分、ディーネとアナスタシアの視線に敵意が含まれています。・・・取りあえず、こっちは後回しです。

手早くサイレントをかけ、聞き耳を防止すると報告を開始しました。

「塩田の設置は終了、予定製塩量を確保する事に成功しました。工期が伸びてしまった事は、大変申し訳なく思っております」

「良い。設置作業が如何に過酷だったか、 دونالدより聞き及んでいる。むしろ過酷な状況下で、良くやったと褒めても良いくらいだ」

「そうね。ギルバートちゃんが、倒れたと言う話も聞いたわ。無理をさせてしまって、ごめんなさい」

・・・父上の言葉に続き、なんと母上が私に謝って来ました。天変地異の前触れでしょうか？などと考えてしまった私は、悪くない・・・よね。

「それは、私の不徳の致すところです。今回の件は、大変勉強になりました」

「うむ。・・・それで、報告にあつた件なのだが」

あれ？父上、いきなり本題ですか？ディーネとアナスタシアの視線が、敵意を通り越して殺気に近くなっているのですが。

「塩輸送に船を購入する話だが、フラーケニツセ・オースヘム街道が、2カ月後に完成予定の為必要ないと言う意見も出たが、後にアルビオン交易に使えると言う事で船を二隻購入する事になった。海鳥対策のガーゴイルに関しては、まだ結論が出ていない。技師が居ないので、修理やメンテナンスにかかる費用は無視できないからな」

「・・・そうですか。なら私の要望もこの場で言ってしまうまいやう。」

「塩輸送船は、私が魔法の道具袋込みで乗り込み、旧ドリユアス領の倉庫に塩を保管する事を提案します。これで生産量を誤魔化せるでしょう。ガーゴイルについてはですが、ガリアからマジックアイテム技師を引っ張って来れないですか？」

「船については問題無いだろうが、技師は流石に無理だろう」

父上が渋い顔をしました。しかし、ここで詳しい話をする訳には行きません。ガリアで政変が起こるなんて言っても、情報元を説明できませんから。

「駄目で元々ですよ。サムソンの件も有ります。意外と見つかるかもしれません。情報収集のついでで良いのです」

「解った。それで良いなら探させよう」

「ありがとうございます。そろそろ部屋に戻って、休ませて頂きます」

用が済んだなら、この場は即時撤退ですね。

「待った」

父上から突然待ったがかかりました。他に用件は無い筈ですが……。

「最初から気になっていたのだが、腹に着いたその袋は何だ？」

私は無言で、特大ウエストポーチからティアを引っ張り出します。それでも起きないティアに、私は内心溜息をつきました。最初の内は一緒に寝ても、少しの物音で飛び起きていたのに……。野生は何処へ行ったのでしょうか？

「ドナルドの報告に有った黒猫か」

「はい。名前はティアです。可愛いでしょう」

私はティアを抱きしめ、そのもふもふ具合について悦に浸っていました。

「」「」「……」「」「」

居間に居る全員が、目を見開き固まっています。まあ、理由は塩田で思い知っています。

「如何かしましたか？」

私は年相応つぼく、首を傾げながら聞いておきました。すると突然。

「シルフィア！！」「アズロツク！！」

父上と母上が、抱き合って泣き始めました。

「ようやく・・・ようやく、ギルバートちゃんが（年相応に）笑ってくれた~~~~！！」

「良かった！！良かったなシルフィア！！」

あれ？これって如何いう状況なのでしょうか？・・・ひよつとして私は、とんでもない親不孝者だったのでしょうか？

あまりの状況に、助けを求める様にディーネとアナスタシアの方を見ます。しかしディーネはチラチラと、アナスタシアは新しいおもちゃを見る子供の目でティアを見ていました。しかも二人は、泣く父上と母上の事等意識の片隅にもない様子です。

・・・ここは逃げるべきでしょうか？いや、收拾がつかないの
で逃げるべきですね。

そう判断した私は、居間からゆっくりと静かに逃げました。下手

したら、母上が本能的に追って来そうですね。当然のごとく、ディーンは普通にアナスタシアはフラフラと私について来ます。いくらなんでも、部屋までは・・・と考えた私は甘かったです。二人は私の部屋の中に堂々として来ました。

「あの・・・着替えたいのですが」

声をかけたのですが、二人の耳には全く届いていません。

・・・ここは、ティアを生贄にするしかありませんね

私は未だ寝ているティアを、アナスタシアの前に差し出しました。

「抱いて見ますか？」

「いいの!？」

都合のいい時だけは、私の言葉を認識するのですね。兄として悲しいです。まあ、それは置いてティアを引き渡します。アナスタシアは、ティアを受け取ると抱き締め・・・。

「ギニャー~~~~!!」

締めました。そう言えばアナスタシアは、人形に抱きつく時に全力で抱きつく癖がありましたね。人に対しては一度注意したら治りましたが、人形に対しては未だに治りません。おかげ様で、裁縫と人形修理は大分上手くなりました。

ディーンはその様子に、ただオロオロするばかりです。と言うか、助けないとティアの中身が出ます。

「はい。アナスタシア。ティアを放してあげてくださいね」

私はそう言いながら、アナスタシアの脇腹をくすぐりました。

「ひゃう」

アナスタシアは面白い声を上げ、ティアを取り落とします。床に着地したティアは、そのまま私のベットの下に隠れてしまいました。

「あう〜」

アナスタシアはフラフラとベットに歩み寄ると、床に膝をついて下を覗きこみます。中にティアの姿を確認すると、床に伏せベットの下に突入しようとなりました。

「アナスタシア。それまでです」

流石にはしたないので、アナスタシアの脇腹を掴みそのまま持ちあげます。

「兄様。放して・・・放して」

私はアナスタシアの抗議を黙殺して、担ぎ直すとティーネの手を取り、そのまま二人を部屋の外に放り出します。ディーネが「私まだ抱いてません」と、目で抗議して来ましたが無視して扉を閉めました。

「ティア。大丈夫ですか」

「ひ 酷い目に合ったのじゃ」

ベットの下から煤けた様子のティアが出て来ました。そのままベットのの上に飛び乗ると、横になります。

「《癒し》は必要ですか？」

「不要じゃ」

ティアは返事をする、その場で大きく欠伸をしました。……どうやら本当に大丈夫そうですね。私は室内用の少し楽な格好に着替え始めます。

「ここが主の部屋か」

「はい。生れて初めてもらった部屋ですね」

「……あんまり見まわさないで欲しいです。」

「ベットは塩田の物よりふかふかじゃの」

「かなり良い物で、値段も張ったみたいですよ。昔母上が無理する私に、少しでも良く眠れるように買ってくれたんですよ。当時はまだ貧乏貴族でしたから、けして安い買い物じゃなかったはずなのに」

「そうか、良い母上なのじゃな」

私はその言葉に、無言の返答を返しました。それは普通の母上からは、想像も出来ない気づかいだからです。初めは母上が用意して

くれた事も、値段の事も全く知りませんでした。本当に私は、親不孝者ですね。

着替え終わりました。と……それよりも。

「ディーネ。アナスタシア。男の着替えを覗き見るのは、淑女のやる事ではありませんよ」

私の言葉で扉が開き、引き攣った顔のディーネと半べそ状態のアナスタシアが部屋に入って来ました。ティアの事を見ていたのでしようが、事実としてここは私の部屋です。覗かれて良い気分はしません。

「そんな事していたら、淑女じゃなくて痴女ですよ」

一瞬だけディーネが怖い顔をしましたが、今はそれより気になる事が有る様です。ディーネはサイレントをかけると、私に詰め寄って来ました。

「その黒猫……ティアですが、喋っていますよね」

「はい。私が召喚した使い魔ですから」

私の答えに一瞬ホツとしかけますが、またすぐに詰め寄って来ました。

「ルーンは何処ですか？私が見る限り、見当たらないのですが……」

「サモン・サーヴァントで呼び出しただけで、まだコントラクト・

サーヴァントしていません。ティアは素で喋れるだけです」

おっ、二人とも固まりました。無理ないけど。ティアも心配そうに私を見ているので、目で「大丈夫」と返答しておきました。

「と言う事は、獣人か何かですか？猫の姿をしていますし。アカデミーにバレたら、大変な事になりますよ」

「いえ、獣人ではありませんよ。ティアの正体は……」

私の説明に、二人は仲良くフリーズしました。そして……。

「何でライnkクラスのギルに、そんな高位の存在が呼び出せるんですかー！ー！！」（ガスッ）

ディーネから突っ込みが入りました。右ストレートのおまけ付きです。当然痛いので、確りガードさせて頂きました。

「いえ……私は今トライアングルクラスですよ」

ディーネがワナワナとふるえています。

「ぎ……」

「ぎっ」

「ギルの馬鹿ー！ー！！」

元気に走って行きました。あのスピードでは、とても追いつけません。流石ディーネです。さて、アナスタシアの方は、何かブツブ

ツと言ってますね。何を……。

「……の力を司るペンタゴン。『可愛い猫ちゃん。可愛い猫ちゃん。可愛い猫ちゃん。可愛い猫ちゃん。可愛い猫ちゃん』我の運命さだめに従いし（ゴンッ）」

取りあえず拳骨で黙らせました。

「うう~~~~。兄様酷い」

アナスタシアが、叩かれた場所を手でさすりながら涙目で抗議して来ました。

「場所を考えなさい！！場所を！！……ここは私の部屋です。巨大な生き物が来たら、私の部屋が倒壊するかもしれません」

「呼び出すのは、可愛い猫ちゃんだから大丈夫だもん」

「その保証は……何・処・に・あ・る・の・で・す・か？」

私はアナスタシアの頭に手を置き、手に体重を少しずつ掛けながら威圧します。

「兄様！？縮む！！縮んじやう！！ごめんなさい！！ゆるして！！」

「解れば良しです」

私はそこでため息をつくとき、落ち込んでるアナスタシアに言ってあげました。

「着替えて裏庭に行きましょうか。私が見てあげます」

「はい!!」

私とアナスタシアは、訓練着に着替えて裏庭に集合しました。召喚された者が、暴れた時の為に完全武装をしておきます。

「アナスタシアは、準備出来てますか？」

「はい。兄様」

「では、始めてください」

「我が名はアナスタシア・キティ・ド・ドリユアス。五つの力を司るペンタゴン。『可愛い猫ちゃん。可愛い猫ちゃん。可愛い猫ちゃん。可愛い猫ちゃん。可愛い猫ちゃん』さため 我の運命に従いし、”使い魔”を召喚せよ」

……何も起こりませんね。本来なら、ここで召喚のゲートが現れるはずなのですが。

「兄様。失敗しちゃった」

そこで涙目にならないで欲しいです。

「絞り込みに失敗しているのではないのでしょうか？何と念じながら呪文を唱えていますか？」

「可愛い猫ちゃん!!」

私はアナスタシアの言葉に、思わず苦笑いをしてしまいました。

「アナスタシアの属性は風です。そうになると、相性が良いのは翼有る獣です。しかし、猫は四足の獣で逆に土属性に相性が良い獣です。逆属性の獣が召喚されず例も聞きますが、召喚の門が開かないと言う事は、残念ですがアナスタシアでは猫を呼び出す事は……」

私の説明に、アナスタシアの表情が崩れて行きます。

「……グスッ」

わーーーーー!!!泣くな!!!泣くな!!!泣くな!!!泣くな!!!泣くな!!!

「大丈夫!!大丈夫!!ちっちゃくて可愛いのは、猫だけじゃないって」

暫くアナスタシアを撫でて、落ち着かせてあげます。

「……うん。もう一回やってみる」

「我が名はアナスタシア・キティ・ド・ドリユアス。五つの力を司るペンタゴン。『小さくて可愛い子。小さくて可愛い子。小さくて可愛い子。小さくて可愛い子。小さくて可愛い子。』私の運命たぐひに従いし、”使い魔”を召喚せよ」

今度は50サント位の小さなゲートが現れました。

「やったー!!」

「まだです。問題は何か出て来るかです」

暫く待つと、ゲートから青い30センチ位の生物が出て来ました。地面に着地したそれを、良く確認すると鳥の様です。

青・・・いや、僅かに紫がかつた体色をしています。鳥の様に地球で言う鷹に良く似ています。大きさは、翼を広げて30センチ余りで非常に小さいです。・・・こんな動物居たでしょうか？

私が考えていると、その鳥が翼を広げました。その動きに合わせて、羽から静電気のような物がパチパチと音と光を出します。

・・・！？サンダーバードか！！いや、それにしてもあまりにも小さい。子供にしても、小さすぎる。

「兄様。契約しても大丈夫？」

「はい。誠意を持ってあたるのですよ」

アナスタシアは頷くと、鳥の目の前に移動しました。

「鳥さん。あたしの使い魔になってください」

返事として、鳥が僅かに頷いた様に見えました。アナスタシアは鳥の目の前で、両膝を地につけて座ります。

「我が名はアナスタシア・キティ・ド・ドリユアス。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、私の使い魔となせ」

呪文を唱えると、鳥を優しく持ち上げ口づけを交わしました。すぐに鳥は苦しみ始め、ルーンが刻まれていきます。鳥が苦しみが治

まると、アナスタシアは鳥を優しく抱きしめました。どうやらティアの一件で反省した様です。

「びりびりする。……兄様。この子サンダーバードの子供だつて」

「やっぱりサンダーバードでしたか。いまいち確信が持てませんでしたが、正解だったようですね。ルーンの方はなんと刻まれているのですか？」

「えーと……は……う？」

「私に見せてください」

アナスタシアが、私にルーンを見せてくれました。ルーンが刻まれているのは、お腹の部分です。

「《反響》ですね。サイレントと同じく、音を操る効果があります。ハッキリ言えば、音を跳ね返す空気の壁を造ると言う物です」

「音を跳ね返す？あんまり役に立たなそうじゃな」

私の説明に、ティアが割り込んで来ました。

「使い方によっては、結構使えると思いますよ。音楽や歌を聞くのに、このルーンの手で困ればめっちゃくちや大迫力で聞けますし」(後は昔の艦内通信管の代わりとか、音響系の拷問もできますし。パラポラアンテナみたいにすれば、小さな音も拾えます)

「だいはくりよく？」

アナスタシアは、不思議そうに首をひねりました。

「まあ、それよりその子の名前は決めたのですか？」

「えつと……まだ」

「その子は男の子ですか？それとも女の子ですか？」

「男の子」

「サンダーバードですから、雷や嵐ですね。なら、ライ・ボルグ・ゴロー・サイク・レイ・即興で思い付くのは、それくらいかな」

アナスタシアは、不思議そうな顔で聞いて来ました。

「ライはライトニングのライ……サイクはサイクロン・レイはレインかな？ボルグとゴローは？」

「ボルグは、(ケルト) 神話で雷を意味します。ゴローは、雷がゴロゴロ鳴るから」

「ゴローだけは絶対無いよ」

「まあ、そうでしょうね。名前は一晩ゆっくり考えてあげると良いでしょう。それよりも、アナスタシアの部屋に、止まり木の代わりになる物と巢の代わりになる物を作ってしまうでしょう。《錬金》で直ぐに出来ますから」

「はい!!」

「それが終わったら、アナスタシア用のグローブを作ってください」

「グローブ?」

訳が分からないと言った表情をするアナスタシアに、私は指摘しました。

「アナスタシアはこれから、その子の世話をする事になります。そうすると手に、その子を止まらせる事になりますよ……その子の足で」

私の指摘でアナスタシアは、サンダーバードの足の爪を見ます。するとアナスタシアは、見る見る顔色が悪くなりました。

「血……出ちゃう」

「そう言う事です」

そう言うって私は、適当な木を探す為に裏庭を歩き出しました。

「兄様が言ってたボルグって名前良いかも」(小声)

アナスタシア。私も風メイジです。思い切り聞こえていますよ。

「何してるんですか?早くしないと、夕飯に間に合いませんよ」

「今行きまーす」

夕食前に居間でサイレントを使い、私とアナスタシアが使い魔を召喚した話と、私が未契約である事を皆に話しました。ディーネが、凄く怖い顔で睨んで来ます。母上は「何でそんな楽しそうな事で、私を仲間外れにするのよ」と言っつて、睨んで来ました。しかも母上とディーネの目が、私が元凶だと語っていました。明日の訓練で、私が（物理的に）地獄に落ちる事が決定した様です。・・・泣きたい状況ですが、とりあえず話題を逸らしましょう。

「しかし、可愛い使い魔で良かったですね」

アナスタシアの使い魔に、話題を逸らす事にしました。まあ、可愛いとはアナスタシア主観の話で、私から見ればカツコイイの部類ですが。

「でもこの子サンダーバードだから、びりびりしてあんまり抱っこ出来ないの」

あれ？当初の目的が達成できてないのですか？しかしここでアナスタシアに落ち込まれるのは、私の犠牲が全て無駄と言う事です。それだけは認めたくありません。それに、私も妹は可愛いのです。・・・そこ、シスコン言わない！！

「ちゃんと加減するなら、ティアを抱っこすれば良いじゃないですか。アナスタシアは落ち込む事など無いのですよ」

私が優しく言つと、アナスタシアは笑顔で頷きました。しかし、承服できない猫が居ました。

「主！！^{なれ}汝は吾を売るのか！？」

父上と母上が、面白い顔をしています。

「アナスタシアも気をつけますから、もう締められる事はありませんよ？」

最後にちよつと首をひねってあげました。

「吾の心の問題じゃ！！それ以前に不安にさせる返答をするでない！！」

なんか、ティアの突っ込みが素晴らしいです。

「主は……妹君の機嫌の為に、吾の体を売り抱かせると言うのか！？」

「そこだけ聞くと、私が物凄い鬼畜に聞こえるのですが……」

なおも言い募るティアに苦慮していると、父上が話しかけて来ました。

「ギルバート。先程、未契約と聞いた様な気がするのだが……」

「ああ、はい。ティアの正体ですが……」

「主の鬼畜~~~~！！」

現状をサラッと流す私に、今日一番の突っ込みが入ります。しかし私は、それさえも流して淡々と父上達に説明を続けました。その

後のティアのいじけっぷりは凄かったです。

「ティア。まだいじけて居るのですか？」

「主は、吾の事を愛していないのじゃ」

「そんな事有りませんって」

「如何かの」

私はティアを抱き上げ、ベットに移動します。

「ティアは、私の（メイジとしての）パートナーです。これからは私達の家族として、皆に接してくれると嬉しいです」

私はティアを優しく撫でながら、そう言って聞かせました。

「う　うむ。努力するのでしょうかの」

ティアはそっぽを向きながらも、そう答えてくれました。

「ところでアナスタシアの使い魔ですが、如何いう印象を受けましたか？」

「美味そうじゃった（ボソッ）」

なんか、ティアの本音らしきものがダダ漏れて来ました。

「た 食べちゃダメですよ」

「・・・解っておる」

今の間は何ですか？・・・物凄く不安です。

第四十四話 ティアの受難？大変ですね（後書き）

いよいよ次話で、ティアの正体を明かします。

なんか、今から非難の予感がしてなりません。

果てし無く不安です。

ちなみに次話で、ピンクの髪のある人が登場予定です。

ご意見ご感想をお待ちしております。

第四十五話 温泉へ行こう

こんにちは。ギルバートです。帰還翌日からの特訓は、”物理的な意味で地獄でした。塩田設置の為に半年以上碌に訓練して居なかつたので、剣も体力も洒落にならない位に鈍っていました。まさかその所為で、こんな事になるなんて思いもしませんでした。

以前購入した謎の魚ですが、結構な高級魚だったので。コックに塩と謎の魚を渡した時に、コックが何故か「本当によろしいのですか？」と聞いて来たので、私は気軽に「良いですよ」と答えおきました。その時やたらとコックに気合が入っていた理由に、私は気付きませんでした。

結果。帰還日初日の夕食に出て来た料理は、少し焦げ目が入った白い塊でした。それを目の前で、槌を使い叩き割られたのです。中から出て来たのは、私が渡した謎の魚と香草類でした。……ここまて言えば、この料理の名前は解っていただけだと思います。

……謎の魚の塩包み焼き。私が以前に、コック達との話のタネにした料理です。

最初は貴重な塩を無駄に使った料理と思われたのか、家族全員に（何故か）私が非難の目で見られました。しかし食べてみると、その態度は吹き飛びました。味は金目鯛そっくりで、物凄く美味だったのです。御馳走様です。

ちなみに私の分は、ティアに半分取られました。最近餌のやり過ぎか、ティアが重くなって来ているのが気になります。デブ猫にならないうちに、何らかの手を打っておくべきでしょうか？

しかしどんな美味しい料理でも、貴重な塩の消費量に釣り合いません。父上と母上の機嫌を回復させるには、もうひと押しが必要です。

そこで最後に、^{トクメ}塩の再利用方法を伝えると皆を満足させる事が出来ました。

次の日の訓練時に、母上達は怒っていませんでした。私は地獄の軽減か回避の成功に、口には出しませんでした。が心底喜んでいました。

しかし、現実残酷でした。訓練時に私の鈍りっぷりを確認した母上達は、純粋な善意から私を特訓すると宣言したのです。

母上曰く。塩田設置で遅れた分は、私が取り戻させてあげるからね。だそうです。

(思いつきり余計なお世話です!!そんな善意要りません!!)

そんな意見が通りはずも無く、(と言うか、口にしよものならスパルタン度三倍です)私は”物理的”に地獄に落ちました。

二週間もすれば身体も慣れ、体力と剣のキレを取り戻す事が出来たのです。おかげ様で、特訓を終了し地獄から這い出る事が出来ました。

魔法の道具袋を使った「塩田の製塩量誤魔化し計画」は、何時の間にか母上が行く事になっていました。母上は外に出れる事を、子

供の様に喜んでいました。この状況に私は「魔法の道具袋を返せ」とは言えず、大人しく母上が出かけるのを見送るしかありませんでした。

母上の見送りの際に、父上から「すまん」と、さりげなく言われました。私は無言で、父上の腰をポンポンと叩いて返事をしておきました。その時私と父上の中に、「哀愁」の二文字は無かったと自負しています。

運営体制の見直しの成功で、書類仕事の量が激減しました。そのお陰で、母上も出かける余裕が出来たのですが、それは私も同様でフリーの時間が一気に増えました。その分は主に、鍛冶やジャック・ピーター・ポーラとの時間に振りまきました。しかし最も影響が出たのは、アナスタシアとの時間です。これはディーネが忙しくなった事により、アナスタシアの面倒をみる割合がディーネから私に一気に傾いたのが原因です。

今までアナスタシアは、ディーネの手伝いでペガサスの世話をしていました。しかし、自身の使い魔であるサンダーバードの世話があるので、手伝いの時間を取れなくなってしまうのです。その所為かディーネも余裕が無くなって、サンダーバードの世話をするアナスタシアをサポートが出来なくなっていました。

余談ですが、ディーネはペガサスの世話と騎獣訓練が有るので使い魔の召喚をあきらめました。母上が残念がりましたが、ドリュアス家では杖の携帯許可が出た後の魔法行使は自己責任です。正直に言えばディーネが冷静に自己分析して、召喚を断念するとは思いませんでした。

この状況でアナスタシアのサポートを誰がするかと言えば、私以

外に居ないのです。なにより召喚の手伝いをしたのは私なので、当然と言えば当然です。

この状況はアナスタシアから見れば、なかなか甘える機会が無かった兄と一緒に居られる転機と感じた様です。今まで遠慮がちだった、かまってアプローチが急に積極的になりました。と言うか、ちよつと行きすぎな様な気がします。

まあ、そのアプローチに惜しみなく答える私も……私が一番悪いのですが……。

例 その昔

「兄様。皆に聞きながら、あの子（サンダーバード）の名前考えたの。どれが良いと思う？」

「うん。どんな名前が有るんだい？」

「えーと、先ず兄様に考えてもらったボルグとサイクでしょ……ギヤー、ピーピ、ピティ、パイ、ティピ、ぎよぴちゃん、ジョニー、ライデン、フライド、チキン、オレオ、マエマル、カジリ」

「アナスタシア」

私はアナスタシアの肩に手を置き、優しく聞きました。取りあえず追及しておいた方が良いでしょう。

「その名前、誰と相談したんだい」

「えつと……最初は母様で、次が姉様で父様にオーギュスト……で最後がティアちゃん」

……ティア。”物理的”に食う気満々ですね。あれほど注意しておいたのに。他にも、突っ込みどころ満載の名前が有った気がしますが、聞かなかつた事にしておきます。疲れそうですし。それからティアには、一度O H A N A S H I I しておいた方が良いでしょう。場合によっては、肉体言語込みで……。

「私の一押しは、ボルグとピイかな」

(蹴られたり伝説の指四の字固めされそうな名前や、空飛ぶピンク金魚や赤い稲妻よりマシでしょう。何故こんな名前が出てきたかは、私の凡庸な頭では理解できません)

「ん〜と、じゃあボルグにする」

「それはまたどうして？」

アナスタシアは嬉しそうに笑いながら、上目使いで私を見て来ました。

「だって……兄様が考えてくれた名前なんだもん」

そう言う私に抱きついて来て、顔をすりすりして来ました。

私は妹に甘すぎるのでしょうか？

……妹が小悪魔に見えます。

例 その貳

その日私はベットに入っても、眠気が襲って来ませんでした。そこで、どうせ眠れないならと思い、今後のプラン（原作介入方法・領地運営方針）について考えていました。以前に書いた日本語のメモを、机の上に引っ張り出し、そこに新しい資料を加え、不安点やその打開方法を考えて行きます。

そのまま暫く唸っていると、部屋に小さなノック音が響きました。風メイジでなければ、聞き逃していたかもしれません。

「はい。誰ですか？」

「あたし」

返って来た声は、アナスタシアの物でした。

「入って良いですよ」

「ひつれいしま〜す」

（ひつれいします。でしょ。相変わらずアナスタシアの活舌は、良くないですね……可愛いけど）と、内心で密に考えていると、寝間着姿のアナスタシアが枕を抱えた格好で入って来ました。

「こんな夜中に如何したのですか？」

「え……と」

アナスタシアは、先程からチラチラとベットの方を確認しています。正確には、そこで寝ているティアをですが。……全く、仕方が無いですね。

「眠れないのですか？」

「……うん」

「私はまだやる事が有るので、先にベットで横になっていてください。眠くなったら、そのまま寝てしまっても良いですよ」

「良いの？」

私の言葉に、アナスタシアは目を輝かせます。私が肯定の為に大きく頷くと、私のベットに突入して行きました。

「お休みなさい！！」

「又ウ！！主これは！？」

どうやらティアは起きていた様です。

「ティア。大人しくアナスタシアの抱き枕になってください」

「主。この埋め合わせはするのじゃぞ」

ティアの言葉を、適当に肯定しておきました。

作業が一段落して眠気が訪れると、私はティアを挟んだベットの反対側に横になりました。かなり時間が経っていたので、二人は先

に眠ってしまった様です。アナスタシアが気持ちよさそうに寝ていたので、寝顔を指で突いてやろうと思いましたが可哀想なので止めておきました。

朝起きると、何故か私がアナスタシアの抱き枕になっていました。原因は夜中にティアが起き出して、避難したからのようです。

取りあえず起きる時間なので、アナスタシアを引き剥がし揺すりました。

「ヤア〜。あとちょっと〜」

「駄目です」

アナスタシアが私の体に抱き付こうとしたので、手をかわし私はそのまま毛布を剥ぎ取りました。

「ぶう〜〜〜」

私は膨れるアナスタシアの上半身を、無理やり起こしてベッドの上に座らせました。

「ほら。膨れない。自分の部屋に戻って、着替えてください」

私はそこまですると、役目を果たしたと言わんばかりに着替え始めます。しかし私が着替え終わっても、アナスタシアはベッドの上から動こうとはしませんでした。

「早く部屋に戻って着替えないと、朝食に遅れてしまいますよ」

「……兄様。抱っこ」

流石に甘え過ぎです。

「却下」

「うう〜。抱っこ」

暫くアナスタシアと睨み合いましたが、結局部屋まで運んでしまいました。

アナスタシアよ……兄は将来君が、とんでもない悪女にならないか心配です。……かなり切実に。

例 その参

その時私は行儀悪く、自室のベッドに寝そべったまま本を読んでいました。ティアも散歩で不在だったので、のんびりと一人を満喫中です。そんな時、部屋のドアがノックされ「兄様」と、声を掛けられました。

「アナスタシアですか？ 如何かしましたか？」

アナスタシアは私の声を確認すると、部屋に突入して来ました。一度サツと室内を見回し確認すると、ドアにロックをかけ部屋にサイレントをかけます。

「アナスタシア？」

様子が変な事に気付いた私は、本に頬を挟んでうつ伏せに寝て居た身体を起き上がらせませす。ベットの縁に座り直し、スリッパを探し目線を落としたところでアナスタシアに正面から抱きつかれました。

「兄様にお願いが有るの」

「如何したのですか？」

私は反射的に聞き返しました。ここで無条件に首を縦に振らなかったのは、何となく身の危険を感じたからです。そんな私に、アナスタシアは言い募って来ます。

「兄様はあたしの事を、助けてくれるよね？見捨てないよね？」

本能が不味いと告げました。なので、少しだけ譲歩した返答をします。

「出来る限りの事はする。と、約束します」

「出来る限り？」

そんな目で見ないでください。私は、その視線に耐えようとして……耐えられませんでした。

「解りました。アナスタシアを助けると約束します」

「兄様。ありがとう」

ベットの縁に座る私の膝に跨り、腰と身体を密着させ身体全体で

ずりすりして来ました。一方で私は、どんな内容がアナスタシアの口から飛び出すか、内心で戦々恐々としていました。

そして……。

「兄様。あたしレイピア駄目みたい。何か良い武器ない？」

(そう来たか!!)

アナスタシアがレイピアを使うのは、母上の我儘による物です。確かにレイピアが向いていないとは、だいぶ前から感じていました。母上を落ち込ませたくなくて、言い出せなかったのは私も悪いです。そしてそれは、母上も理解している様です。しかし、努力するアナスタシアに「向いていない」とは、母上も言い出せない様でした。

「母上には相談したのかい？」

「怖くて相談できない」

ここは母上の自業自得ですね。しかし母上は、あれで繊細ですからね。第三者(私)が、正面からその事を指摘すると泣いてしまいです。ここは、私が悪者になるしかないですね。

「解りました。思いつく限りの武器を試してみましよう。但し、暫くの間は母上には内緒ですよ」

「うん 兄様。だ〜い好き」

アナスタシア。お願いだから、傾国なんて呼ばれる女にならないでくださいね。……いや、流石にそれは無いですね。……タブン。

「はあ~~~~」

特に印象に残っていた三例を思い出し、私は盛大に溜息をついてしまいました。

アナスタシアの厄介な所は、私が聞く気が無い時や不快に感じた時はアツサリ引くの、少しでも聞く気が有ると要求を強引にねじ込んで来る所です。

アナスタシアって…… まだ、8歳になっていないはずなのですが。未恐ろしいです。それと「妹に甘過ぎる!!」と言う突っ込みは、自覚しているので無しの方向でお願いします。

シスコン? …… 言い返せない。

それから、ボルグの訓練の一環として狩りの練習にも行きました。鷹狩りみたいで、何気に面白かったです。…… ボルグは見た目ミニマムなのに、パワフルでした。

ボルグが仕留めた獲物の代わりに、アナスタシアから餌を貰っている時でした。それを見ていたティアがボソツと「太らせた方が……」と、呟いていたので「ティアみたいにデブになると、空が飛べなくなるので困ります」と言ってあげました。

……その後どうなったかは、推して知るべしです。ただ、私が傷だらけになり、ティアが食べ物をがっつかなくなりました。必然的にティアの体重は元に戻り、ボルグに食欲の目を(あまり)向けな

くなりました。私の犠牲は報われたと信じたいです。

さて、領地運営と私生活が順調なので、私にできる事をしようと思えます。

トライアングルメイジになって《錬金》可能になった物質の確認したところ、？75・レニウムまで《錬金》可能になっていました。

そしてこれでやっと、タングステンの《錬金》が可能になったのです。これを使えば、リアル斬鉄剣を造れるのです。テンションが上がり過ぎた私は、混じりっ気無しの100%タングステンの小太刀を、《錬金》で造ってしまいました。

結果……重くてまともに振れませんでした。鉄の倍以上重いので、当然と言えば当然です。鉄製と同じ感覚で振ったら、腕が壊れるかと思いました。これからの剣術の課題は、この小太刀を含めタングステン製大太刀を自由に扱えるようになる事です。意地悪でディーネにも、訓練用と称し刃を落とした純タングステン製バスタードソードを、プレゼントしておきました。ディーネに渡す時に「固有武器には、（一部）この金属使いますのでよろしく」と、言っておきました。その時のディーネの顔は、思い切り引き攣っていました。

一方鍛冶の方ですが、タングステンを使った鍛剣が作れないか研究を始めました。この研究が成功すれば、どんな材質の剣も鍛造出来ます。私の最終目標は、タングステン・ベリリウム合金製の剣を鍛造する事です。最強金属の鍛剣は、私の憧れです。

余談ですが、タングステンのインゴットをそのままサムソンさん

に渡したら、「こんなカテエ金属加工出来るか!!」と怒られてしまいました。

まずは《硬化》の応用で、何とか成らないか模索しようと思いません。硬度強化ではなく、加工性強化という切り口で魔法を応用出来ないかと言う事です。当然、加工終了後に魔法は解除します。まあ、上手く行く可能性は低そうですが、時間はたっぷりあります。

更に、オリジナル新魔法の開発にも着手しました。と言っても、マジ知識に有った、他の物語の魔法を再現できないか挑戦するだけです。……すみません。ハッキリ言って時間つぶしのお遊びです。これも、実りが有るとは思えません。

そんな状況で、フェオの月（四月）に入りました。父上が最後の魔獣ガルクムの引き取りに行くと言うので、私も付いて行く事にしました。それと言うのも実は、木の精霊に確認したい事が有ったからです。内容は精霊の加護である”豊作の加護”と”温泉”についてです。”豊作の加護”は範囲が不明瞭で、何処までが有効範囲か聞く為です。当然加護範囲を優先して、開墾した方が効率が良いのです。温泉は純粹に、入ってみたいですからです。精霊達の地下水路の手際を見る限り、もう完成しているはずなので、ちよつと温泉に寄れば入れます。

加護の事は以前に話しておいたのですが、誰も行きたがりませんでした。私があれば温泉の魅力を、熱く語ったのに……。私が不思議に思っていると、その原因は出発直前に判明しました。

朝早くから騎獣を玄関前に回してもらい、今回の護衛であるエデ

イとイネスも既に配置についています。グリフォンに乗り込む前に、父上が不思議そうに聞いて来ました。

「ギルバート。ウエストポーチ（使い魔）は分かるが、そのリュックは何だ？」

「バスタオル二枚と自作の桶おけが入っています」

私が答えると、その場に居る全員が不思議そうな顔をしました。

「何故そのような物を持って行くのだ？ 騎獣騎獣による外出は、荷物を可能な限り減らすのが鉄則だぞ」

いや、もつともな意見ですが。

「いえ、ちょっと温泉に入りたいな。と、思いまして……」

この場では不謹慎でしたか？ そうなら失敗ですね。反省です。

「オーギュスト。私の分のバスタオルも用意しろ」

「はい。直ただちに御用意します」

あつ……父上も入りたいたいんですね。解ってくれるのは嬉しいです。

「アズロック！！」

父上を呼んだ母上が、思い切り「私も行きたい！」と、目で訴えています。そのすぐ横で、ディーネとアナスタシアも同様に目で訴えています。

(皆が興味を示さなかったのは忘れていたのか、まだ入れる状況じゃないと思っていたか……ですね)

「私とシルフィアが前準備なしに、同時に領地を開けるのは不味いだろう。ここはすまんが、留守番していて欲しい」

父上が母上の説得にかかりました。母上も父上の言いたい事は理解しているので、悔しそうにしながらも文句は言いませんでした。

しかし、その制約に縛られない人が二人います。

「お父様。すぐに私の騎獣ペガサスを、ここに回します。私の分のタオルも用意してください」

ディーネ。もう行く気満々ですね。メイドが館に走ろうとしましたが、中から出て来たオーギュストに手で制されました。その手には、バスタオルが6枚有りました。リュックに余裕が有ったので、バスタオルは私が全て受け取ります。

「父様。姉様。私も行きたい」

まあ、そうなりますよね。で、ここで父上とディーネが了承すると……。母上が物凄く凹みました。母上の怒りが、事前通告しなかった私に向かない事を切に願います。

ペガサスの準備が終わると、いよいよ出発です。アナスタシアは、ディーネのペガサスに同乗しました。恨めしそうな表情を浮かべる母上に、元気良く出発の挨拶をしました。

ディーネの騎乗技術は、年の割に見事で危なげなくついて来ます。後ろに乗っているアナスタシアも、ディーネの騎獣操作に不安を感じていない様で、ニコニコと笑っていました。

「ディーネ。その調子でついて来るんだ」

「はい」

父上がディーネに声をかけます。

「しかし、騎獣操作は思っているよりも体力の消費が激しい。疲れを感じたら、すぐに報告する様に」

「はい」

ディーネの返事に、父上が満足そうに頷きました。そしてエディとイネスに、ディーネに注意するよう目で指示していました。

そのまま湖まで、何事も無く到着する事が出来ました。ペガサスからアナスタシアを降ろしたディーネは、立ったまま軽い柔軟をしていました。それが終わると、一度満足そうに頷いてこちらへ歩いて来ます。アナスタシアは湖の畔に移動して、熱心に湖の中を覗き込んでいました。

「お疲れ様です。ディーネ、疲れは大丈夫ですか？」

「思ったよりも疲れましたが、これ位の距離なら問題ありません。それよりここが精霊が居る場所なのでね。……想像通り綺麗な場

所です」

陶醉した様子を周りを見回すディーネに、以前のこの場所を知る私は、つい苦笑いを浮かべてしまいました。ふと父上の方を見ると、同じような苦笑いを浮かべています。どうやら同じ事を考えた様です。そこから更に周りを見渡すと……。

「アナスタシア。あんまり乗り出すと、湖の中に落ちますよ」

湖の中を覗き込むのに夢中なアナスタシアに、一応釘を刺しておきました。しかし「は〜い」と返事は来ましたが、何処まで聞いているか激しく不安です。

取りあえず、早々に小島の精霊の大樹の前に移動して、父上と私の用事をしませてしましましょう。

「あっ！！魚だー！！……あっ」

アナスタシアの声に次いで、ドッポーンと言う水音が響きました。

私は内心でため息をつきながら、杖を抜くと……すぐに父上が《念力》を発動して、アナスタシアを湖から引つ張り出しました。私はそれに便乗して、《凝縮》の魔法を使いました。イメージはアナスタシアの服や身体の周りから、水分を奪い集めるイメージです。

私が集めた水を捨てていると、父上の《念力》から解放されたアナスタシアが突っ込んで来ました。そのまま私にしがみ付き、大泣きし始めます。（勘弁してください）

「ほら。アナスタシアが、私の言う事聞かないからですよ」

「にいざば。ごべんなざい」

鳴き声の合間に「あ 主。く くるしい」と、ウエストポーチから聞こえたのですが、今更アナスタシアをはねのける訳にもいかず見捨ててしまいました。

アナスタシアが泣き止むまで待つと、私の服の胸元は鼻水だらけになっていました。そして泣かれている間、私とアナスタシアに挟まれていたティアは、その後すこぶる機嫌が悪かったです。

アナスタシアが泣き止んだ所で、木の精霊が居る小島に渡りました。

「木の精霊よ。アズロック・ユース・ド・ドリユアスです。姿をお見せください」

父上が代表で声を上げると、大樹より木の精霊が出て来ました。

「え！？ なんで？」

思わず声を出してしまった私は、悪くないと思いたいです。

出て来た木の精霊は、以前の大きな姿では無く20 سانت位の背丈しか無かったです。何となくですが、姿も人のそれに近くなっている様な気がします。……ちょっとデフォルメが入っていて可愛いです。

「重なりし者よ。時代はエゴだ」

(え……エコ？ 何故？)

私が混乱していると、父上が聞いて来ました。

「ギルバート。聞こうと思って忘れていたのだが、木の精霊は少し前からこの状態なのだ。エコとはどういう意味だ？」

「エコロジーやエコノミーの略称とされています。エコロジーは自然環境に配慮しようと言う考え方で、エコノミーは経済的な配慮をしようと言う考えです。この場合は顕現する姿を小さくする事で、力の消費を抑えようとしているのだと思います」

私は反射的に、そう答えていました。それを木の精霊が「その通りだ」と言っ、肯定しました。父上達は私の答えに、頷きこそしましたがいまいちピンと来ていない様です。

「要するに、資源や資金を大切にしたり儉約をしようと言う事です」

ようやくピンと来る物が有った様で、父上達は笑顔で頷いてくれました。この辺の話は、後で確りしておいた方が良くかも知れませんね。しかし木の精霊は、何故エコなどと言い出したのでしょうか？

私が疑問に思っていると、手をチクツと虫に刺された様な感覚を受けました。

その正体を確かめると、木の精霊から糸の様な細い蔓が私の手に伸びていました。あまりの細さに、他の人達は気付いていない様です。

「（重なりし者よ。久しいな）」

（はい。お久しぶりです）

木の精霊と有線テレパスで話し始めます。父上達は、ディーネを木の精霊に紹介していました。

「（聞きたい事は分かっている。件のエゴは、貴様の頭から取り出した知識を観覧していた時に見つけた言葉だ。気に入ったので、我也使い実践しているにすぎない。それから今の私の姿は、貴様の影響を多大に受けている）」

ちっこいデフォルメ人形みたいなのが、私の影響ですか？ いや、見なかった事にしておきましょう。そして忘れましょう。

（ディーネやアナスタシアだけでなく、もう一人紹介したい者が居るのですが）

「（ウエストポーチの中身であろう）」

（はい。ティアと言います）

私がウエストポーチを開くと、ティアがウエストポーチから顔を出しました。

「（それ程高位の者を使い魔にするとは、重なりし者も侮れぬな）」

（褒め言葉として受け取っておきます）

「（まだ未契約なのか？ 重なりし者の考えは良く分からんな）」

私はその言葉に、苦笑いしか出ませんでした。父上達は、ディーネの丁寧な自己紹介が終わり、アナスタシアの紹介に移っていました。アナスタシアはちよつと上がっていますね。失敗しないと良いのですが。

（自己満足です。それについては、あまり苛めないでください）

「（そうか。しかし、重なりし者もここに来ない間に色々とやっていたようだね。……塩田か。少し前に風車が出来たと風の精霊が喜んでいたぞ）」

（そうなんですか？）

「（その様だ。少なくとも我には、風の精霊がはしゃいでいるように見えたぞ）」

（それは良かったです）

「（ちなみに火の精霊が、誰も温泉に入りに来ないと愚痴をこぼしていたぞ）」

（場所さえ教えてもらえれば、後で行くつもりです）

「（そうしろ）」

ここでアナスタシアのカミカミの自己紹介も終わり、父上が今回の本題に入りました。

（そう言えば温泉ですが、カトレアの病に効くのかな？）

「(カトレア?)」

(あつ……すみません。思考がそちらに届いてましたか?)

「(良い)」

(カトレアは、私の婚約者候補ですよ。病に侵されていて、その治療中です。症状と原因については、私の頭の中を覗いてもらえると速いと思います)

木の精霊は、遠慮なく私の頭の中を覗きました。

「(この症状と原因なら、火の精霊の温泉は大きな効果が見込めるだろう。だが、重なりし者の家から通うとなると、消耗して逆効果になるな。温泉の近くに、家でも建てれば話は別だが)」

(解りました。ありがとうございます)

ガルムの引き取りは、マンティコアの時の経験が役に立ったようで、父上の話は物の数分で終わりました。8つの領地に均等に移動させ、ガルムの長を旧ドリユアス領に来させるようです。

「続いて、ギルバートより質問があります」

父上が私に話を振って来ました。

「(まだ要件が有るのか?)」

(はい。それに、精霊に心を読ませていると知られると、皆に心配

をかけてしまいますので)

「(面倒だな)」

(ええ。面倒ですが、仕方が有りません)

私はそのまま父上達の前に出て、木の精霊の正面に移動します。

「先ずは、豊作の加護を頂いている範囲について教えていただきたいのです」

「その加護の範囲は、我が森が広がった事が有る場所までだ」

木の精霊は私の頭から情報を読み取り、即答してくれました。

(そうですね。では、豊作の加護を本格的に受けられるのは、開拓が有る程度進んでからになりますね。加護の恩恵を受けられるのは、早くても数年後か……)

「ありがとうございます。次は……」

「待て。領地の境に、この種を植えよ」

木の精霊は、そう言いながら大きな葉で造った袋を渡して来ました。中にはかなりの数の種が入っている様です。

「これは？」

「我と土の精霊の加護が、その種を植えた所まで届くようにする」

「よろしいのですか？」

この場合は、精霊の矜持が許す限りに入るのか？　と言う事です。

「よい」

「（その範囲は私の土地となる。再び単なる者が我に牙をむけば、その場所まで一気に森に吞まれる事になるからな。それより植える場所の感覚を、重なりし者の頭の中に送った。理解できているか？）」

話の前半部分に思わず顔が引きつりましたが、送られてきた感覚を頭の中で吟味し、不明な点が無い事を確認します。

（問題ありません）

「ありがとうございます。続いて、火の精霊の加護である”温泉”についてお聞きします」

「なんだ？」

私に合わせ、木の精霊が聞いて来ました。

「温泉の場所について、御存知なら教えてください」

「場所はここから西方に有る崖にそって、南に暫く向かえば見つかるだろう」

「ありがとうございます」

木の精霊の返答に、私は頭を下げました。

「可能な限り早く入りに行け」

「それは何故ですか？」

火の精霊が愚痴をこぼしていたのは聞いていますが、それだけに
しては急いでいる様な雰囲気があります。

「せっかく作った温泉に、誰も入りに来ないと火の精霊が嘆いてい
た。このままでは、火の精霊がドーンとなるぞ」

「???ドーン??」

ドーンと言う表現に、私を含め人間側は誰も付いて行けていない
様です。

「だから、ドオーンだ」

今度は声に合わせて、万歳する様なポーズをとりました。相変わら
ず意味が分かりませんが、ミニマム化した木の精霊がめっさ可愛い
です。

「（真面目に聞け!!）」

テレパスで怒られてしまいました。しかし、相変わらず意味が分
かりません。

「火の精霊が居るのは、ブレス火山なのは知っているな？」

「あっ……はい」

ん？待てよ……。

火の精霊 ブレス火山 ドーン

なんか嫌な汗が、いっぱい出て来ましたよ。まさかとは思いますが……。

「（正解だ）」

（不正解であって欲しかったです）

「火の精霊が怒って、ブレス火山が……噴火ですか？」

私の後ろで、息をのむ気配がしました。

「そう。それだ。火の岩が降ると森が燃える。灰が降り注ぐのも我は容認できない、貴様らはすぐにでも行くべきだ」

「解りました。すぐに温泉に向かいます。……父上！！」

「解っている。木の精霊よ、我々はこれで失礼します。エディイネス、何時までも呆けていないで行くぞー！！」

「「はい！！」」

父上達が素早く動き出し、ディーネとアナスタシアが続きます。

（木の精霊よ。私達はこれにて失礼します）

「(うむ。また来るが良い)」

私は一度木の精霊に頭を下げてから、《飛行》フライを使い父上達を追いました。

木の精霊に言われた通り西に有る崖から南に向かうと、プレス火山付近の崖上側に湯けむりが立っているのを発見しました。近くに行っても、硫黄泉の臭いがしないのは個人的にありがたいです。

取りあえず一番湯けむりが多く立っている場所の近くに、騎獣を降ろしました。

「あたりに危険な獣や亜人が居ないか見て来る。すぐ戻って来るから、ここで待っている様に」

「解りました」「はい」「はい」

父上の指示に素直に返事をします。この近辺に、圧迫感の様なものを感じるからです。これはひょっとしたら、火の精霊が不機嫌な所為かも知れません。

(ティア) byギルバート

(火の精霊で間違いなからう) byティア

そうならば、湯につかれれば圧迫感が消えるはずです。

私達は数歩離れた場所から、湯を覗きこみました。そして、アナスタシアから不安の声が漏れました。

「……兄様。コレに入るの？」

もつともな意見です。湯は沸騰した様に泡を吹いていて、湯に体をつけようものなら肌が焼けただれてしまう気がします。

「ちよつと待っていてください」

私は杖を取り出して、《探知》ディティクト・マジックを発動します。目的は、湯の温度と泉質を確認する為です。出てきた答えは……。

……約41。

泡を吹いているのは、沸騰しているからでは無く炭酸泉だからですね。カルシウムやマグネシウム等のミネラルもたっぷりで、十分に飲めますね。って、炭酸泉でこの湯温は有り得ない数字です。高すぎでしょう。まあ、入るには適温ですが。……と、それより。

「……ふぎゆ」

湯を覗きこむアナスタシアに不安を感じたので、杖を持っていない手でアナスタシアの襟首を掴んでみました。

「また落ちますよ」

笑顔でそう言ってあげたら、私の手から逃れディーネの影に隠れてしまいました。

「ギル。私達は温泉に入りに来たのではないのですか？」

アナスタシアを庇いながら、ディーネが聞いて来ます。

「このまま入れますよ」

「こんなに煮立っているのですか？」

「そんな……兄様。無理だよ」

私はそこで、首を横に振りました。

「湯の温度はこれ以上ない位の適温ですよ。煮立って見えるのは、ここが炭酸泉だからです。信用できないなら、私が一番最初に入りますよ。……いや、こうした方が早いですね」

そこで私は、リュックから桶を取り出し湯を汲みました。

「こうすれば分かるでしょう」

私は手袋をはずし、そのまま手を桶に突っ込みました。すると私の手は、あっという間に泡まみれになります。軽く手を動かして泡を払うと……。

「シュワシュワだ」 「シュワシュワしていますね」

「そう言う事です。と言う訳で、脱衣所の準備をします」

二人の理解が得られた所で、私は簡易脱衣所を《錬金》で建て始

めました。

(しかし意外ですね。火の精霊なら、硫黄臭バリバリの硫黄泉の温泉と思っただのですが……)

注 マギは硫黄泉の卵が腐った臭いが、少し苦手だったりします。温泉大好きな友人からは、温泉のなんたるかが解ってない!! とよく怒られていました。これが原因で火・水・土の三柱の精霊が、マギが一番好きな泉質の炭酸泉を選んだのでした。こんな所にも「少しでも良い物を……」と言う、火の精霊のやる気がうかがえます。

(……湯上りに、湯をキンキンに冷やして作った炭酸水を用意しておきます。魔法って本当に便利です。……砂糖で味付けした方が良いですかね? まあ、パンを《錬金》すればすぐに作れるので、一応用意しておきますか)

簡易脱衣所が完成した頃には、父上達も見回りから帰って来ました。父上とも似たようなやり取りをしましたが、最後には4人で仲良く露天風呂につかりました。湯船につかっている内に、圧迫感の様な物はすっかり無くなっていました。

エディとイネスは、護衛任務中である事を理由に拒否。ティアは長年猫として暮らしてきた所為か、湯につかるのが大嫌いなようです。……ここは後で矯正しなければなりませんね。

……この温泉は、アナスタシアがシュワシュワ温泉と連呼している所為で、ディーネだけでなく父上までシュワシュワ温泉と言い出しました。このままでは、これが正式名になってしまいそうです。

温泉から上がると、早速炭酸水の試飲です。

……私以外の全員が、一口目を吹き出しました。

なんてもつたいたない事をするんでしょうか。

「この温泉水は、疲労回復・整腸作用・血行増進等に高い効果が期待できる天然の薬なのですよ」

私がそう言うと、皆浩浩と飲み始めました。

「ちなみに砂糖を少し入れても美味しいですよ」

私がそう言うと、全員砂糖を入れて飲み始めました。最初は面喰っていた物の、慣れると美味しい事に気付き最後はおおむね好評でした。当然、母上へのお土産分もちゃんと確保しました。

昼食の準備をしていると、チラチラと向けられるイネスの視線に気付きました。大体予想が付きませんが、一応聞いておいた方が良いでしょう。

「イネス。先程からこちらを気にしているようですが、如何したのですか？」

「いえ……、その」

言いにくそうにするイネスに、私は先回りする事にしました。

「私達の肌が、潤い艶々ツルツルなのは、温泉の美肌効果です。……他に質問は？」

「ありません。……美肌（ボソツ）」

私の話が終わると、イネスはガツクリと項垂うなだれていました。イネスを見ていて思ったのですが、母上も同じ反応をする可能性大です。しかもイネスと違って、攻撃魔法が飛んでくる可能性も大です。

まあ、今回は道連れが多いので、恐らく大丈夫でしょう。

「父上。ディーネ。アナスタシア。母上対策ですが、先程イネスが……」

私はこの事を、皆に相談しました。被害は分散・軽減するに限ります。

相談むなしく、母上のお怒りは何故か私に集中しました。理由は、温泉の話を出発直前にした事です。母上の頭の中で、二日前に私が温泉の事を口にしていれば、一緒に行けたと言う結論に達したのが原因です。

帰宅直後の訓練で、ボロボロになるまで扱われました。……泣きたいです。

次の日には、母上＋女性陣（ディーネ・アナスタシア・イネス含む）が、温泉に出かけて行きました。男性陣は、全員お留守番です。

この事が切っ掛けで温泉地の別荘建設話が、一気に加速する事になりました。しかも、責任者は私と言う形で……。 (折角余裕が出来たのに)

カトレアの件も有るので、別荘建設自体は望む所だったりするのですが……。

何故こうなるのでしょうか？ 複雑です。

第四十五話 温泉へ行こう（後書き）

プロットに無理があったので、少し修正しました。

甘えん坊のアナスタシアを、少し前面に出しました。

おかげさまで、予定の1/3も進んでいません。

おかげで、ティアの正体もピンクの人も次話にずれ込みました。

これは、私の実力不足によるものです。ごめんなさい。

実は、一話辺りのボリュームを落とそうか悩んでいます。

ご意見ご感想をお待ちしております。

第四十六話 騎獣とティアとカトレア 女って怖い(前書き)

諸事情により、カトレアは規格外です。

カトレアのイメージが崩れる恐れがあります。

読む方はその点、ご注意ください。

第四十六話 騎獣とティアとカトレア 女って怖い

こんにちは。ギルバートです。別荘の建設責任者になってしまいました。鍛冶や魔法の研究が、その所為で大きく遅れる事になります。まあ、別荘が出来ればカトレアを（治療の名目で）招待できるので、その辺で手を打っておきましょう。

良く考えたら、もう一年以上会っていないのです。しかも手紙のやり取りも、殆ど無しの状態です。今から会うのが、楽しみで仕方が有りません。

でも、カトレアは……怒ってるかな？ いや、考えないようにしよう。

別荘の建築自体は、さほど時間がかかりません。しかし、建材を運ぶ為の道が無いのは、解決しようが無い問題です。街道の設置から始めたら、それだけで一年以上の時間と莫大な資金がかかってしまうのです。オーステム・フラークニツセ間の街道と違い、保養地目的ではまだ大きな予算を割く訳には行きません。

かと言って魔法の道具袋を使うのも、機密の問題からとりたくない手段です。

私はこの問題に、頭を抱えてしまいました。そこで父上に相談すると……。

「シルフィア達の説得は任せた」

それは無いです。父上！！

私はさすがのような思いで、他の人にも相談しました。

「奥様達の……」「母様の……」「お母様の……」「シルフィア様の……」等々。

全員が同じ反応をしてくれやがりました。一部の人はその後、「それに、何とか出来るでしょう」と、続けて言うので始末に負えません。本当に買いかぶらないで欲しいです。

一度母上を説得しようと思いましたが、まるで私が「出来る」と断言したかの様に信じ切っているのです。この状況で私は、母上に何も言う事が出来ませんでした。

……やったるうじゃねーか！！ この野郎！！（半ばヤケクソです）

私は開き直る事にしました。建築に必要なのは、主に木材・石材・ガラスです。木材は森からいくらでも伐採できますし、石材もブレス火山に行けば豊富に有るでしょう。問題のガラスは…… ブレス火山に花崗岩が大量に在るのを見たので、《鍊金》が有れば楽勝です。……全部現地調達可能と判断します。

後問題なのは、人材確保と食糧供給に亜人対策の騎獣ですね。

人材に関しては、守備軍内に募集をかけました。志願者と言う形でしたが、条件に”自由時間に温泉入り放題”と”特別手当”を付けたら、女性陣からの志願が殺到しました。更に、女性陣目当ての男の志願も多かったので、余裕が無ければ志願を却下する様に上司に通達しました。しかし、取り下げられたのは数件のみで、その殆

どが残ったのです。傭兵メイジや平民メイジの流入が多い所為で、領内の人材に余裕が出て来たという事でしょうか？（どのみち覗き対策は、万全にしないといけませんね）

……おかげ様で、選考するのが非常に大変です。

意外だったのが、ディーネとアナスタシアが「参加する」と宣言した事です。どうやら二人も、温泉が相当気に入った様です。この二人の参加で、覗き対策に更に気合が入ったのは私だけの秘密です。

ちなみにイネスも志願していましたが、問答無用で選考落ちにしました。あなたは父上の護衛と言う立場を、本当に分かっているのでしょうか？ 気持ちは、分からんでもありませんが……。

食料は演習訓練も兼ねる為に、狩りや野草採取で現地調達する事にしました。船を使えば空輸は可能ですが、コストがかかり過ぎる為却下です。残念ながら空輸は、騎獣による少量運搬で我慢するしかありません。

騎獣は、騎獣訓練が終わったワイバーン2頭とマンティコア6頭を、乗り手込みで回してもらおう事になりました。そして更に、私の（未来の）騎獣を連れて行く事を許可されたのです。（あくまで騎獣に慣れるための処置で、騎乗訓練は10歳になってからです）と言う訳で、ドリユアス領に在る騎獣舎に行き、私の騎獣を選ぶことになりました。現在乗り手が居ない騎獣は、マンティコアとワイバーンのみです。

注 ドリユアス家では、ある程度訓練すれば誰にでも乗れるフリーの騎獣と、専属で組ませる騎獣に分けています。前者は、人見知りしない騎獣でなければ務まりませんが、使い勝手は非常に良く重宝

します。後者は、人と騎獣の間に強い信頼関係を築き、極限状態（戦闘など）に強い個体にします。

まずは、ワイバーンの居る騎獣舎に行きます。しかし、流石は元野生のワイバーンです。威嚇するばかりで、触れさせてくれる子は居ませんでした。ようやく触っても平気な子が居たかと思えば、既にパートナーが居たと言う落ちも付きました。世話係に聞くと「まだ人に馴染めない、気難しい子ばかりが残っている」との事です。

次は、マンティコアが居る騎獣舎です。ここもワイバーンの騎獣舎と同じで、残って居るのは、人に馴れない子ばかりで時間がかかるとの事です。ただ威嚇はされない子も居たので、このまま順調にいけばマンティコアを騎獣にする事になりそうです。

部屋に帰ると、ティアがじゃれついて来ました。残念ながら、騎獣達が怯えてしまうので、ティアは連れて行けないのです。

「寂しかったのですか？」

ティアは返事をせずに、私の足に顔をこすり付けるだけでした。私は黙ってティアを抱き上げると、背中を撫でてあげました。

（普段こんな反応しないのに、如何したんだろう？）

私は不思議に思いましたが、ティアが喋ってくれそうも無いので、放っておく事にしました。しかし、私が騎獣舎に行った後は、必ず同じような態度を取るのです。

それから、一週間と少しの時間が経ちました。毎日騎獣舎に通った所為か、ワイバーン達にも威嚇されなくなりました。マンティコアの中には、顔を舐めて来る子も出て来たのです。理由は分かりませんが、ティアの挙動不審振りも酷くなって行きました。

そして今日は、ガルム舎に行く事になったのです。ガルムの受け入れが終わり、舎の中が落ち着いたと報告が有ったからです。遠目に見る事はありませんが、ガルムを間近で見た事が無かったので、軽い気持ちで見物に行きました。

ガルムの世話係は、何故か草臥くたびれた様子をしていました。

「ずいぶん疲れている様ですね。大丈夫ですか？」

「大丈夫です。僕はガルムの世話係のロイクと言います。まずは注意事項から……」

ロイクから「子供が居たら絶対に近づかない」「歯を見せない」等、最低限の注意事項を教えてくださいました。

「では、ガルム舎にご案内します」

「お願いします」

ロイクに案内されたガルム舎は、大きな入口（ガルム・人両用）が四方に在るだけで殺風景な佇ただすまいをしていました。私はロイクを追って、そのまま中に入ります。中も殺風景で、丈夫そうな柱と藁の寝床がいくつもあるだけでした。

ガルムの大きさは、大体2・5〜3メートル程度の様です。舎の中

中央に鎮座している銀色のガルムが一番大きく、4メートルと少しあります。子供も数匹いる様です。

(中央に居る銀色のガルムが、この群れのボスの様ですね)

取りあえず基本は、群れのボスに挨拶する事です。私はロイクに目で合図すると、舎の中央部に歩き始めました。ロイクも私に着いて来ます。しかしその歩みは、半ばほどで中断させられました。

「子供には近づくなと言っていました。子供から近づいて来た場合は如何するのですか？」

私が聞くと、ロイクは「諦めてください」と言って、目を逸らしました。

子供達は無邪気に『遊んで 遊んで』と、擦り寄って来ます。一方大人達からは、何かプレッシャー込みの視線を向けられました。

(私にどうしろと言うのでしょうか?)

中型犬と大型犬の間位の大きさの子供達に囲まれ、完全に身動きが取れなくなってしまうました。子供達にあおられていると、不意に何かを踏みました。確認すると、壊れた寝床の様です。恐らく、子供たちが悪戯で壊したのでしょうか。

これ以上は堪らないと思っていた私は、寝床の残骸の藁を一掴み拾うと杖を抜き『錬金』で、フリスビーをでっち上げます。そして、思い切り投げてあげました。

……外へ。

子供達は我先にと、フリスビーを追いかけて行きます。それを見ていた母親らしきガルムが、慌てて子供達を追いかけて行きました。一瞬不味いかと思いい周りを見ましたが、ガルム達は私達から視線を外し、くつろいでいるようです。

「助かった」

私がホツとしていると、ロイクが突然私の手を握って来ました。

「ギルバート様！！さっきの円盤を、私に譲ってください！！」

何か物凄く必死です。訳はなんとなく分かりますが……。

「解りました。即興では無く、ちゃんとした物をいくつか贈ります」

物凄くお礼を言われました。あの子供達の相手をすれば、仕方が無いでしょう。内心でロイクに、深く同情しておきました。

さて、いよいよ群れのボスに挨拶です。と言っても、言葉が分からないな「……」。

「人の子よ。先程の遊具は面白い趣向であったぞ」

「（……また、ですか）ありがとうございます」

「ほう……。驚かぬとは、なかなか肝が据わっているな」

「いえ、十分に驚いていますよ」

私はそう言いながら、斜め後ろに居たロイクをチラツと確認しました。……驚き過ぎて、魂抜けてますね。御愁傷様です。

「なかなかふてぶてしいな。面白いぞ」

（私は面白くありません）と、内心で突っ込みを入れながら、話を続けました。

「そうでしょうか？老成した魔獣や幻獣は、知能が発達し人語だけでなく魔法さえも操ります。個体数は少ないかもしれませんが、決して存在しない訳ではありません」

私がそう返すと、何となくこのガルムが笑った様な気がします。そこで初めて、自分が名乗って居ない事に気付きました。

「おっと……、申し遅れました。私の名は、ギルバート・アストレア・ド・ドリユアスです」

私が慌てて名乗ると、ガルムが僅かに頷きました。

「我は仲間内からは、王もしくはフェンリルと呼ばれておる」

「フェンリル？」

私は反射的に、問い返してしまいました。幻獣・魔獣図鑑に、その名は載って居なかったのです。そしてマギの記憶では、フェンリルとは時にガルムと同一視される狼の怪物で、悪戯好きの神であるロキの長子と言われている者だったはずです。

「我が一族の中で、我の様に人語を口にする者の事だ」

私はその言葉を理解し頷きましたが、すぐに首を横にひねってしまいました。

「それは称号であり、個体名では無いのですか？」

私の問いに、ガルムのボスは一瞬動きを止め、すぐに答えを返して来ました。

「言われてみればその通りだな。我には名が無かったのか。ならばその事に気付いた貴様に、名を付けさせるのも一興か？ 良い名を考えて見せよ」

口調こそ変わりませんが、ガルムからはかなりのプレッシャーを感じます。下手な名前を言って機嫌を損ねると、噛み殺される未来を幻視するほどでした。私は冷や汗を流しながら、このガルムに相応しい名を必死に考えます。しかし、なかなかこれだと言う名前が出て来ません。意見を貰えないか、ロイクの方を見ましたが、今度はプレッシャーに当てられて固まっていました。(これでは意見を貰うどころではありませんね)

……ここは、少し時間を稼いだ方が良いでしょう。ついでに命名のヒントも欲しいです。

「イメージは、どのような形が良いですか？」

「イメージだと？」

私は一度頷き、言葉が続けました。

「私の私見ですが、名前とは名付ける者がその者に『こう在って欲しい』と言う願いを込めて付けるものと考えます。ならば、今後貴方が『どう在りたいか』が、名前には重要だと思います。過去を背負い、未来を歩みたいのなら、貴方の過去を聞かせて欲しいです。今後豊かに生きて行きたいのなら、豊かさを象徴する名前が良いでしょう。人間に舐められるのが我慢ならないのなら、あえて不吉な名前を付けるのも良いかもしれません。もちろんフィーリングも否定はしません……」

ちなみにティアは、過去を背負い未来を歩みたいと答えました。

「ほう。面白い意見だな。過去に興味は無いし、一族を豊かにしたいとは思うが、人間に舐められると言うのは面白くない。その中では、不吉な名前が良いな」

「……不吉な名前ですか。まさか、そう来るとは思いませんでした。私は口元に手を当て、再び考え始めます。」

「……………体毛は美しい銀色。そして何より、死を臭わせる雰囲気……………死の銀か。」

「オイルーンと言うのは如何でしょう？」

私は、思い当たった名を口にしました。

「ほう。それで、その名には如何いった意味があるのだ？」

予想通り聞き返してきました。

「別名”死を呼ぶ銀”と呼ばれる伝説の金属です。魔力を殺す事に

特化していて、この金属で作った武器は、精霊・幻獣・魔獣・人を等しく殺しつくします。そしてその力は、持主にさえ牙をむきます。持主の魔力や生命力さえも殺して行き、その寿命を削り取ってしまうのです」

ガルムの目が細まりました。気に入らなかったのでしょうか？

「オイルーンか……。気に入った。今この時より、我が名はオイルーンだ」

良かった。気に入ってくれたようです。そして、重苦しいプレッシャーからようやく解放されました。

「人の子……いや、ギルバートよ。恐れを抱きながらも、その堂々とした立ち振る舞いは見事だ。我は、貴様の事が気に入った」

やっぱり、取り繕っているのはバレバレでしたか。しかし、これは予想外の展開です。

「それは将来的に、オイルーンが背を許してくれる可能性がある。と言う事ですか？」

私がそう言うと、オイルーンは一瞬キョトンとしました。

「ギルバートよ。貴様は私の背を、そうとう高くかっているようだな。しかし、我が背は安くは無いが、そこまで厳格な物では無い。……気に入らぬ者は振り落とすがな」

オイルーンの機嫌の良さそうな声に、私はホッとしました。それからオイルーンと少し話をして、ガルム舎を後にしました。

この日の家族の雑談は、オイルーンの事で盛り上がりました。父上と母上も人語を口にする幻獣や魔獣は、数例しか聞いた事が無いそうです。アナスタシアが「あたしも会ってみたい」と言い出し、ディーネは終始ブスツとしていました。ペガサスもレア度で言えば、かなり高いので膨れないで欲しいです。

翌日にアナスタシアの願いを聞いて、オイルーンに会いに行く事になりました。しかし驚いた事に、ティアも付いて行くと言い出したのです。オイルーンが私の騎獣になつてくれるなら、ティアとは早めに顔合わせしておいた方が良いでしょう、私は気軽に了承しました。

一夜明けて、私はいつもより遅い時間に起きました。原因は夜なべして、frisbeeを作っていたからです。兵舎から廃棄予定の皮の鎧をいくつか貰って来て、《錬金》で形を加工し綺麗に色付けしました。黒色・灰色・茶色・緑色・青色と、5色各四つで20枚用意しました。ガラム用に少し大きめにして、《固定化》と《硬化》を確りかけて簡単に噛み砕けない様にしました。

ガラムの玩具作りをする私に不満を感じたのか、ティアの機嫌が朝からすこぶる悪かったです。仕方が無いので、鰹節を削った物をあげて機嫌をとっておきました。

先ずは朝食を取り、アナスタシアを連れてロイクの所に行きます。ティアはいつも通り、ウエストポーチの中です。frisbeeをロイクに渡すと、オイルーンと話している間の子供達の相手を頼みました。frisbeeの投げ方や遊び方を、説明しながらガラム舎へと移動します。frisbeedockの話をしたら、ロイクが異様に食いついて来ました。

いきなりやると失敗しそうなので、到着前に三人で少し練習をしました。アナスタシアが、なかなか上手かったです。こうなると、アナスタシアもやりたいと言い出し、オイルーンとの挨拶が終わったら一緒にやろうと約束しました。

「では、子供達の相手はよろしくお願いします」

「任せてください。世話係の意地を見せてやります」

気合十分なロイクが、嬉しそうに応えてくれました。

ロイクが舎内に声をかけfrisbeeを振ると、子供たちが勢いよく出て来てロイクの周りに群がりました。子供達は「遊んで遊んで」『昨日の？ 投げて 投げて』『早く 早く』と、ロイクに催促します。

「取ってきたら、もう一回投げてやるぞー。……そらっ!!」

ロイクは掛け声と共に、frisbeeを思い切り投げます。子供たちが追いかけて行き、一匹が見事に空中キャッチしました。しかし良かったのもそこまでで、着地と同時にfrisbeeの取り合いが始まってしまいます。《固定化》と《硬化》が掛けてありましたが、数匹で取り合うと流石に耐えられず壊れてしまいました。壊れたfrisbeeを見た子供達は、耳と尻尾が垂れションボーンとしています。

「喧嘩するからだぞー。次投げるけど、もう壊すなよー。……そらっ!!」

ロイクが予備で持って来たfrisbeeを投げると、子供達は嬉し

そうに追いかけて行きました。そして今度は取り合いをせず、ロイクの所にフリスビーを持って来ました。

「よし！！よくやった！！よしよし」

ロイクが、取って来た子を大きさに撫で褒めます。

(この分なら大丈夫そうですね)

「アナスタシア。行きますよ」

子供達にくぎ付けになっていたアナスタシアを正気に戻し、ガラム舎の中へ移動します。オイルンは昨日と同じ位置に居ました。私は近づき声をかけます。

「オイルン。今日は……って、ティア？」

突然ティアが、ウエストポーチから飛び出しました。そして目の前のオイルンと、睨み合いを開始します。野生の勘が働いたのか、猫相手にオイルンも警戒心バリバリです。

「ティア」「ティアちゃん」

ティアは声をかける私とアナスタシアを無視して、オイルンに話しかけました。

「犬っころが、ずいぶんと偉そうじゃの」「なっ……ティア!!」

私が止めようとする前に、オイルンはティアに殺気を叩きつけます。私はその殺気に気おされて、止めに入るどころではありません

んでした。

「……ほう。人語を口にするとは言え、猫ごときが無礼だな」

しかしティアは、その殺気を気にも留めずに続けます。

「吾の正体も察せれぬとは、しょせん犬っころじゃのう」

ティアの言葉に、周りのガルド達が殺気立ちます。しかし次の瞬間、ティアの雰囲気ガラリと変わりました。ティアから発せられているのは、オイルンが可愛く見える位の殺気です。オイルンは反射的に立ち上がりティアに最大限の警戒をし、周りのガルド達は静まり返りました。（いつものティアじゃない）

「猫……貴様何者だ？」

ティアはオイルンの誰何に、誇らしげな声で謡う様に答えました。

「吾の名は……ティア。」

全ての魔物の祖であり母とされる龍母ティアマトーより、その名の一部を継ぐ者。

漆黒の韻竜　ティアじゃ……！」

私は本能的に名乗りの途中から、アナスタシアを抱えてティアから離れました。そして、それは正解だったようです。ティアが《変化》の術を解き、真の姿を晒したのですから……。

尻尾を入れても50 سانت無いはずのティアが、7メートル近い巨体になっていました。その身体は漆黒の名を冠す通り、美しい黒で統一されています。顎の付け根には鰓えらの様な物があり、強靱な足には大きなかぎ爪が……。そして、何より目を引くのが折り畳まれてもなお巨大さに圧倒される翼です。この翼を広げるだけで、このガラム舎は脆くも壊れてしまうでしょう。

（私も初めて見ましたが、ただ圧巻の一言ですね）

そこで、ふと気付きました。ティアが正体を晒しても、その巨体で柱や建物に被害が及んでいないのです。良く見ると私達が居た位置も、大丈夫なように配慮されていました。そこで冷静に周りを見回すと、オイルーンはまだ立ち向かう気概を見せていますが、他のガラム達は震え上がり縮こまっていました。

「主達は耳を塞いでおれ」

そしてティアが、大きく息を吸い込みます。

「！！……アナスタシア！！耳を塞ぎなさい！！」

「え……？」

「早く！！」

「は はい！！」

私達が耳を塞いだ次の瞬間、爆音が轟きました。

……龍の咆哮。

その凄まじいまでの音の波は、耳を塞いでなお体の芯まで響き、肌はビリビリと電気を流された様な感覚を受けます。尻餅をつかずに済んだのは、私達がティアの後方にいたからでしょう。もし正面に居れば、耳を塞いでなお気絶していたかもしれませぬ。

そして、あのオイルーンの上体が後ろに泳ぎ、終には倒れてしまつたのです。

後に残つたのは、必死に降参・服従のポーズをするオイルーンと、気絶してピクリとも動かないガラム達でした。いや、オイルーンはあの咆哮を真正面から受けて、気絶してはいないだけで十分に凄いです。

ティアはそれを確認すると……。

「我をまといし風よ、我の姿を変えよ」

いつもの黒猫の姿になりました。

「格の違いが理解できたか？ 犬っころ」

「くう……。何が望みだ漆黒の韻竜」

オイルーンが悔しそうに、言葉を吐き捨てます。

「多くは望まぬ。ただ……」

ティアはそこでわずかに逡巡した後、声を張り上げました。

「吾の主に気安く近づくな!!」

「なに?」「は?」「へ?」

その言葉を聞いて、私達はまともなりアクションがとれません。した。やがてその意図を飲み込めたのか、オイルーンが余裕を取り戻し失笑を漏らしました。

「何が可笑しい!!」

格下のその態度に、ティアは怒りをあらわにします。

「我の事より、後ろにいる貴様の主の心配をしたらどうだ?」

ティアが振り返り、私と目が合いました。

「……あ 主?」

正直に言うと、私はこの時かなり怒っていたと思います。

「如何いう事ですか?」

龍の咆哮まで放つたとなれば、今頃は大騒ぎになっているでしょう。これだけの事をしておいて、理由が嫉妬ですか? ふざけないうで欲しいです。

「そ それは……その」「兄様……」

ティアの口調がしどろもどろになり、アナスタシアは私から距離をとります。

「くだらない嫉妬で、こんな騒ぎを起こしたのですか？」

「くくだらないじゃと。そもそも主が浮気などせねば……騎獣なら吾を使えば済むであらう！」

(浮気……浮気ですか。何を言っているのでしょうか？ このバカ猫は)

私の堪忍袋の緒が、ミシミシ音を立てているのが分かります。

「何が浮気ですか!! 《変化》する時は、人に見られる訳にはいかないのですから、ティアはリスクが高すぎて騎獣に使えません。それとも、出先で騎獣舎に預けましようか？」

「使えない!?!……獣舎など嫌に決まっておろう!!」

「落ち着け。ギルバート」「兄様」

オイルンとアナスタシアが口を挟みましたが、完全にヒートアップした私とティアには届きません。私とティアの口汚い言い争いは、止まるどころか更に激しさを増して行きます。そこでオイルンは、大きく息を吸い……。

「落ち着け!! ギルバート・アストレア・ド・ドリユアス!!」

龍の咆哮と比べれば、あまりに小さな声ですが、それは確実に人間が出せる音量を超えていました。私とティアの言い争いが、瞬間的に止まります。ティアは「邪魔だ!!」と言わんばかりに、オイルンを睨みつけました。そしてこの時に私は、相当キていたんだ

と思います。

「アストレア？」

私がそう呟いたのが聞こえたのでしよう、アナスタシアはガラム舎から逃げ出します。

「そう言えば女名だったの。だから主は女々しいのじゃ」

この言葉で私の最後の良心は吹き飛びました。後はトリガーを引くだけで、文字通り大爆発を起こします。

外から「アナスタシア！！中で何があった！！」と、父上の声が聞こえました。龍の咆哮を聞きつけ、駆けつけてくれたのでしよう。

それに対しアナスタシアは「兄様がキレた！！」と、短く返答します。

それを受けた父上は「！！総員退避！！」と、叫んでいました。部下達から困惑の声が上がっていましたが、父上はそれをねじ伏せ、建物の陰に隠れるよう指示していました。

「如何した？ 言い返せぬのか？ だから女々しいのじゃ。……アストレア！！」

はい。トリガーが引かれました。私は杖を抜き……。

ガラム舎が消し飛びました。トライアングルメイジが、全精神力を込めると洒落になりません。

キレると水素爆発ばかり使うのは、私はルイズと同類と言う事なのででしょうか？ ……爆弾魔^{ボム}か、不名誉な渾名です。

その後青空の下で、私・ティア・オイルンは座らされ（当然私は正座）5時間ほど説教されました。同じ内容がループする説教（しかも、説教する側は交代制）に、私は涙を禁じ得ませんでした。更にオイルンからも、一族^{ガラム}を代表して怒られました。この状況でティアやオイルン達とすんなり和解出来たのは、僥倖と言えます。

突然ですが、今回の被害を発表します。

父上の機転のおかげで、奇跡的に人的被害はありませんでした。ロイクやガラムの子供達は、龍の咆哮で逃げ出していたので怪我は無かった様です。舎内にいた私達やガラム達も爆発をまともに受けましたが、奇跡的に死者や身体の部位が欠損した者は居ませんでした。一番の重症者も水の秘薬を使い、全治二日程度の怪我で済みました。運が良かったと言って良い……のかな？

その代わりに、建物の被害が深刻でした。ガラム舎は完全に消失。近くに有った建物は、ガラム舎の破片で甚大な被害を受けました。《錬金》で補強して《固定化》や《硬化》をかければ、倒壊の心配は無く十分に使用できますが、見栄えは非常に悪くとても客を呼べる状態ではありません。被害が大きい建物は、見た目の手直しも含めると、新築と修理費はどちらが安いかわかりません。

頭痛いです。何故こんな事に……。

こうなると出て来るのが、本拠の移転案です。元々侯爵家の邸宅としては、現状の家は小さすぎて将来移転する予定だったのです。それが今回の一件の所為で、前倒しする事になってしまいました。そして、その責任者を誰がやるかと言うと……。

はい。責任をとって、私がやる事になりました。

取りあえず現ドリュアス本拠地は、移転後に必要な建物だけキツチリ修理して、後は騙し騙し使ってもらいます。後に取り壊しですね。

建設予定地は、精霊の大樹がある湖から西側に伸びる川と、ブレ火山から延びる崖が交差する地点です。滝を館内にとりこむ様に建設する予定です。コンセプトは「最小限の資金でヴァリエール公爵邸を超える」です。強化ガラスは風と火のメイジが居れば風冷強化法で、簡単に作れるのでガラスを贅沢に使って現代建築と魔法の融合を目指します。場所によっては、ステンドグラスを入れても良いかもしれません。

家の設計をするにあたって、ガラスや窓などの規格を決めなくてはなりません。大人数で作業するなら、規格は如何しても必要です。特に見た目が重要視されると、不揃いなのは不味いです。しかし、規格化はいきなり実行しようとしても、職人ならともかくメイジに精度を求めるのは酷です。それならば、型を作ってしまうのが一番ですね。

先ずは石材と花崗岩（ガラスの素）を確保する為の拠点を作る事ですね。取りあえず別荘を建てて、それを拠点代わりにすれば良いでしょう。後回しになります。貴族の保養地を目指すので、スパとしての大規模入浴施設やオペラ用の巨大劇場等を建設する予定です。

す。幸いな事に湯量に関しては、精霊にお願いすれば増やしてくれるそうなので、平民用の温泉宿も建設します。……あつ、家族風呂も忘れていませんよ。

こうなると、街道の設置も急がなければいけませんね。死なば諸共で、家無き子になったガルムやロイクも巻き込んでやります。ガストンさん・ポールさん・サムソンさんも一家まとめて巻き込みます。（砂鉄がとれるか要確認）ついでに、別荘建設の選考も大幅にやり直しと言うか全員合格です。当然、ディーネとアナスタシアも巻き込みます。

必然的に必要な物資も増えるので、当然のごとく船も投入です。ドリュアス 別荘 塩田 ドリュアスの順番で、回ってもらいます。オースヘム・フラーケニツセ間の街道が出来ても、運航停止は暫くは延期してもらいます。

さあ、皆仲良く地獄へ行こうツアーです。過重労働と言う名のパラダイスが皆を待っています

……ちなみに、イネスにだけは逃げられました。残念です。

作業開始一週目

第一陣（私+護衛^{クリフ・ドナ}・ディーネ・アナスタシア・ロイク&ガルム達・他騎獣と守備隊員二十名）を現地に投入です。仮住まいのテントを立てて、物資搬入用の空港を建設しました。

作業開始四週目

砂鉄が取れる場所を無事発見したので、炭焼き小屋や鍛冶小屋を

建設（前回の経験を踏まえ、設備を高性能化）しました。石材・花崗岩（ガラスの素）・砂鉄等の原料を、切り出し・採掘・収集できるようにしました。定員80名の仮屋建設。人海戦術は素晴らしいです。

作業開始五週目

第二陣（ガストンさん・ポールさん・サムソンさん一家・他守備隊員二十余名）を投入しました。炭焼き小屋と鍛冶小屋が動き出しました。メイジ40人がかりで、木を次々に引っこ抜いて行く様は実に圧巻でした。ディーネとアナスタシアから弱音が出始めましたが「二人とも私の倍以上寝てるでしょう」と笑顔で言ったら、逆に睡眠をとる様に勧められました。前回の失敗もあるので、素直に聞いておきました。

作業開始六週目

いよいよ別荘の建設に入りました。守備隊員は建設班・石材班・ガラス班・木材街道班に十名ずつ分かれてもらい作業してもらいました。私とクリフは、ガラス班です。規格について理解してもらおうのに、やはり苦労しました。「そんなの《錬金》で調整すれば良い」の一言は、やはりきつかったです。規格は大切ですよ。

作業開始十週目

別荘の窓やガラス部分以外が完成しました。貴族の賓客を招く為に、かなりの大きさになっているので大変でした。流石に四階建ては、やり過ぎだったかもしれません。窓ガラスが取り付け終わっていない上に、中がガラガラな所為で夜は廃墟みたいでかなり怖いです。引き続き建設班は、浴場の建設に入ります。

作業開始十三週目

ようやく窓ガラスも全て取り付け終わりました。長い道のりです。

た。後は家具や照明がそろえば、本格的に別荘として使用可能です。しかし、問題が発生しました。照明は大丈夫なのですが、家具輸送費の見積もりが大変な事になってしまったのです。木はたくさんあるので、家具職人を拉致し……ゲフンゲフン。雇うか派遣してもらえらるようをお願いしておきました。それと同時に、家具職人たちの作業場を作る為に人員を一部割きました。それから《鍊金》や《凝縮》による生木の乾燥作業が、私とクリフしか出来ないので辛いです。

作業開始十五週目

家具職人たちが到着しました。母上の話では、私のベットを作った腕の良い職人達だそうです。作業場の方は、何とか間に合ったと言った感じです。職人たちを別荘と作業場に案内し、部屋に合う家具を作ってもらおうようお願いしました。……見学し終わった職人達は、ガラスを贅沢に使った建築様式に目を爛々と輝かせていました。ちょっと怖いと思ったのは、私だけの秘密です。次の日職人達が「内装も全て任せて欲しい」と、直談判して来ました。特に断る理由が無かったので、了承しておきました。

作業開始十九週目

浴場が完成し、別荘の廊下と一部の部屋の内装が完成しました。驚いた事に職人達は、レイアウトが同じでも各部屋ごとに家具や装飾・壁紙のデザインの変え、全く別の部屋に仕上げて来ました。職人達のこだわりには脱帽です。それから、一部屋ごとに名前を付けるのは良いですが、命名権をかけた喧嘩はしないでほしいです。

何はともあれ、これでカトレアを療養目的で呼ぶ下準備が出来ました。浴場が完成したと聞いて入りに来ていた父上と母上に、温泉がカトレアの病の症状を抑えるのに、有効であると伝えます。そして療養の為に、カトレアを招待したいとお願いしました。

こうなると、ヴァリエール公爵家全員で突撃して来る可能性が大了。公爵家だけ呼んで（実際は呼んでないけど）、モンモランシ伯爵家を呼ばないのは角が立ちます。ならばいっそ「両家とも招待してしましましょう」と言ったら、父上と母上は思い切り苦笑いをしてくれました。

少し時が流れて、ギューフの月（11月）に入りました。別荘の内装関連もほぼ終わり、必要な使用人も雇い入れました。まだまだ少ないですが、招待する人数が少ないので問題無いでしょう。

そして公爵家と伯爵家が、今日の午前中に別荘に到着する予定なのです。私は本邸の建設を午前中で斬り上げ、騎獣に跨り別荘に戻って来ました。

「お疲れ様です。イル」

私が声をかけたのが、正式に私の騎獣になったオイルーンです。正式に騎獣になってもらうに当たって、お互いをイル・ギルと愛称で呼ぶようにしています。ティアは内心で「面白くない」と思っている様ですが、仕方が無いと諦めた様です。

「我は戻る」

イルはそう言うと、ガルド舎の方に走って行きました。相変わらず早いです。

私はウエストポーチからティアを引っ張り出すと、抱きしめても

ふもふしながら語りかけます。

「言い忘れていましたが、今日のお客様の中にエレオノール様と言アカデミう王立魔法研究所の人間が居ます」

エレオノール様は魔法学院卒業後、原作の通りにトリスティン王立魔法研究所に入りました。彼女にティアの事がばれるのは、避けたい事態です。

「エレオノール様の目的は、温泉水の採取と思われるので、大人しくしていれば問題無い筈ですよ」

私がそう言うと、ティアは少し考える様な動作をしました。

「いや、夜になってから主の部屋に戻る方が安全じゃろう。それまで適当に時間を潰しておる」

ティアはそう言って、私から跳び降りました。まあ、ルイズやモンモランシーにもみくちやにされるより良いでしょう。

「分かりました。くれぐれもばれない様に注意してくださいね」

「解っておる」

私はティアと別れると、新人使用人の案内で父上達の所に向かいます。

（カトリアは今十六歳か……。原作開示時のルイズと同年ですね。しかし同じ姉妹で、何故あれほど圧倒的な差が……。いや待て、今思い浮かべたカトリアは……。止めよう。ひたすらルイズが不憫に思え

て来ます)

しかし私の中で、ハッキリした公式が完成していました。

カトレア(14歳) > ルイズ(16歳)

何を指してこの公式が成り立つかは、ルイズの名誉のために明言を控えたいと思います。

そしていよいよ到着です。部屋に入り帰宅の挨拶をします。

「ただいま戻りまムグッ……」

誰かに正面から抱きつかれました。

「お帰りなさい。ギル」

(この声はカトレアですね。家族の目の前だからと油断しました。しかし、顔に当たる感触が柔らかくて良いにお……って、違う!! このまま外堀を埋められるのは、不味いです)

私はカトレアの腰を両手でつかみ、強引に押し剥がします。そして、完全にフラットな表情を作り(私は鉄面皮。私は鉄面皮。私は鉄面皮)と、自己暗示をかけました。

カトレアの横を素通りし、もう一度頭を下げ「ただいま戻りました」と、挨拶しました。この場にいる全員が、カトレアの奇行と私の対応について行けずポカンとしています。

「当家自慢の別荘へ、ようこそお越し下さいました。ヴァリエール公爵 モンモランシ伯爵。歓迎させて頂きます」

カトレアの存在は完全スルーです。と云うか、意識したら何かが終わります。生返事しか出来ない公爵と伯爵もスルーして、説明を開始します。カトレアに後ろから抱きつかれている様な気がしますが、絶対に気のせいです。

「この別荘の自慢は、プレス火山から取れた花崗岩から精製したガラスを贅沢に使っている所です。東方から伝わって来た特殊な処理と、『固定化』と『硬化』を重ねがけして強化してあります。もうご覧になりましたか？」

「あ ああ」

公爵が生返事をします。私はその返事に大きく頷いて説明を続けます。

「また、プレス火山より湧き出している温泉を使った浴場も自慢です。温泉の泉質は炭酸泉と言って、浸かると体内の水の流れを良くする効能があります。これは血行促進と言って、カトレア様の病の症状を抑える事が出来るのです。他にも、疲労回復・肩こり・冷え性・美肌など多くの効能があります。また適量なら、飲んでも効能があります。主に、疲労回復・整腸作用・血行促進等です」

家以外の女性陣が、美肌という言葉に反応しました。女性のサガですね。

「浴場は男女に分かれた大浴場もありますが、夫婦や親子で湯浴みを楽しめる家族風呂もございます。是非お楽しみください。……東

方には湯治（日本語）と言う言葉が在ります。湯で治すと言う意味です。当家の別荘で、心と体を癒していただければ幸いです」

挨拶が終わったので、逃げようとして……逃げられませんでした。カトレアに後ろからガツチリと拘束されていて、脱出不可能な状態です。力尽くと言う手が使えないので、本当に手詰まりです。完全スルー戦法が裏目に出ました。

「ギル。一緒に家族風呂に入りましょう」

「家族風呂ですから結婚しないと入れませんね」

……今度は言葉攻めですか。皆それぞれの反応をしています。

「それなら、結婚しましょう」

「病の完治と双方の両親の了解が必要です」

特に公爵の怒りっぷりが凄いです。

「それなら、早く治療して」

「準備が整うまで不可能です」

（何でカトレアは、外堀を埋めようとするのでしょうか？ 準備が整えば、こっちから求婚する^{プロポーズ}と解っているんだから必要無いのに）

……あれ？ 何故か場の空気が一変しました。この場にいる全員が、私を物凄く怖い目で睨みつけて来ます。するとカトレアの拘束は不意に外れました。私が不思議に思い振り向くと……。

(泣いてるううー！！！ えっ？ 何で？ 如何して？)

私は訳が分からず混乱してしまいます。そして……。

「ギルバート！！貴様ー！！！」

公爵の声に振り向くと、視界が黒く塗りつぶされました。

気がつくと私は倒れていて、正面にカトレアが居ました。公爵が「アズロツク放せ！！私は 私は」と、騒いでいます。バラバラになった意識を掻き集め、現状を把握しようとした所で、鼻先を貫くような痛みと後頭部を鈍い痛みが襲いました。口の中は血の味で満たされ、鼻で呼吸が出来ません。

……公爵に殴り飛ばされて、後頭部を強打したのか。

「ごめんなさい。ギル。私が感極まって泣いちゃったりしたから……」

カトレアが小さな声で、私に伝えて来ました。

(……そう言う事ですか。良かった)

それに風系統メイジには、今のカトレアの声が聞こえていた様です。私に向けられるプレッシャーが、一気に減りました。視線を向けると、風系統メイジが全員オロオロしています。特にカリー又様の拳動不審振りが酷いです。

（しかし、これで公爵に殴られたのは二度目ですね。私怨の次は、勘違いですか……。勘弁して欲しいです）

視線を戻しカトレアと目が合うと、……物凄く怖いです。

「私怨？ 二度目？」

カトレアはそう呟くと、私の手をとりました。記憶を吸い出されましたね。

「……ギル」

（本気で怖いから、その目を止めてください。それと、公爵に仕返しするつもりですか？）

コクン。カトレアが僅かに頷きました。

（たしかに少しぐらい痛い目に合わせたいですね）

フルフル。カトレアは何故か首を横に振ります。そしてカトレアの目は、手加減無く思い切りヤレと言っていました。……怖いです。物凄く怖いです。生半可な事したら、怒りがこちらを向きそうです。

まあ、公爵にはカトレア方面の恨みがありますから……丁度良い機会か？

意識が戻らない振りをして暫く考えると、良さそうな子芝居を思いつきました。

(……カトレア。悲劇のヒロインに興味はありますか?)

カトレアは皆から見えないのを良い事に、とても良い笑顔で頷きました。

「うう………いつたい何が………」

今意識を取り戻した振りをして、立ち上がるうとします。しかし、公爵の一撃が足にきていて、上手く立ち上がれません。見かねたカトレアに手伝ってもらい、何とか立ち上がりました。

(ありがとうございます。少しの間支えて居てくれませんか?)

コクン。

「確か、カトレアと結婚の話をしていて………」

”朦朧とした意識の中で思い出す”を意識し、言葉を口にします。そして、その言葉を「許せない」と感じ、感情をあらわにする人は公爵のみです。

「誰が貴様などに!! 家の可愛い娘をやれるか!! ふざけるな!!」

激昂した公爵は、口汚い言葉を次々に発します。父上に羽交い絞めにされているならば、もう一発殴られていますね。

「公爵は結婚や婚約に反対なのですか?」

私は念を押す様に公爵に語りかけました。

「当たり前だ！！ 絶対に認めん！！」

はい。公爵の出番はここで終了です。後はカトレアと私の二人芝居です。カトレアに支えてもらうのを止め、一歩引いて向かい合います。

「カトレア。公爵にここまで反対されては、私達はもう……」

「そんな…… ギル」

カトレアが目には涙をためながら、僅かに首を左右に動かしました。迫真の演技です。（やりますね。カトレア）

「もう……無理です。領地を富ませ、精霊を説得し、広大な領地を得て、馬鹿共の謀略を覆し、カトレアと釣り合う身分を得て、塩田の設置まで成し遂げました。それでも公爵は、認めてくれませんでした」

私が言った物の中には、トリステイン王国の歴史に名を残す偉業が含まれています。

「公爵は初めから認める気など無かったのですよ」

私の言葉にカトレアは、再び首を横に振りました。

「……違うわ。お父さまは、二年ぶりにギルと会えた私の涙を勘違いして……」

私はカトレア言葉を、ただ首を横に振って否定しました。重苦し

い沈黙が、この場を支配します。公爵も自分の勘違いに気付いて、固まってしまいました。

「ギル。あの時の約束……」

「……しかし、それは」

「……お願い」

最後の爆弾を投入です。

「私 ギルバート・アストレア・ド・ドリユアスは、カトレアの病の原因と治療法を、生涯誰にも語らないと誓います」

私が誓い終わると、間を置かずカトレアが誓いの声を上げます。

「私 カトレア・イヴェット・ラ・ボーム・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールは、真に自らの夫と認められる人が現れたら、私の病の原因と治療法を伝え、その人の治療を受けると誓います」

場がざわめきに包まれます。

「今日は、顔の治療をして休みます。失礼します」

私は呼び止める声を無視して、退出の挨拶をしました。歩き始める際、カトレアが手を未練がましく泳がせましたが、すぐに引っ込めてしまいました。（演技上手過ぎです）

「ギル。私はギル以外に人を、夫と絶対に認めない」

ドアノブに手をかけた時、カトレアの口からシナリオに無いセリフが出て来ました。私は動きを一瞬止めてしまいましたが、何も答えずそのまま退室しました。

部屋の前で待つと、カトレアがすぐに出て来ました。風系統メイジには聞こえてしまうかもしれないので、ここでは言葉を発する事が出来ません。

(お疲れ様。迫真の演技でしたよ)

カトレアは私と目が合うと、ニッコリと笑って頷きました。

(では、それぞれの部屋に戻りましょう)

フルフル。

(……私の部屋で少し話をしますか?)

コクン。

私が歩き始めると、カトレアは私の腕に抱きついて来ました。

「ギル。ごめんなさい」

私の部屋に着くと、カトレアに真っ先に謝られました。カトレアが杖を抜いたので、私は手で制しながら口を開きます。

「気にしないでください。カトレアの前で、迂闊な事を考えた私も

悪いです」

私はそう返し、杖を抜き《癒し》の魔法で顔を治療します。

「せめて私が、《癒し》で治療できれば……」

「カトレアの病の原因が原因ですから、魔法は絶対に厳禁です。そう言えば、カトレアの系統を知らないのですが、如何なっているのですか？」

明らかに話題を逸らそうとする私に、カトレアは一瞬不満そうな顔を浮かべましたが、すぐに答えてくれました。

「属性基準で言うと、水>土＝風>火になるわ。一応、水のスクウエアメイジよ。土と風もトライアングルスペルまで行けるわ。でも、火はドットスペルが限界ね」

……は？ 何ですか？ その反則的なスペックは？

「いや、魔法を使えないのに何で……」

「感覚で、なんとなく分かるの。それに力が急に伸びたのは、ギルに出会ってからよ」

（つまり私の責任ですか？ バグキャラの娘は、バグキャラと言う事ですか）

「あんまり失礼なこと考えない方が良いわよ」

「ごめんなさい」

カトレアの笑顔が怖いです。

その後、王都で公爵に的にされた原因を教えてくださいました。

その日の食卓に、珍しくヴァリエール公爵家の全員が顔を出したそうです。そこで話題に上ったのは、ルイズが私を兄様と呼ぶようになった事でした。

そこで公爵は、私をルイズの婚約者にしようと言いだしたので。この危険な話題にルイズは「ちいねえさまの好きな人だから兄様なの」と言って、危険を回避します。

当然話はそこで終わらず、私とカトレアの関係に及びました。

公爵は私がドリユアス家嫡子である事から、カトレアの健康の問題を理由に諭しに入ります。事情を知らないエレオノール様が、公爵の意見に賛成しカリーヌ様とルイズが諦めモードで静観しました。

カトレアは私なら自分を治療できると、必死に訴えました。

注 病の原因と治療法は、異端扱いされるので秘密にすると約束していました。

エレオノール様はカトレアの熱意に、「生きる為の意欲になるな

ら」とおれました。しかし、ドリユアス家との関係を重視したい公爵は、おれずに諭し続けたのです。

そして終には、カトレアがキレてしまったそうです。

その後の詳細は、教えてもらえませんでした。後日、他の人にも聞きましたが、全く教えてもらえませんでした。ルイズ曰く、家で怒ると一番怖いのはちいねえさまです。と言っていました。分かったのは、カトレアが父親を公爵様と呼び、敬語を使い続けたと言う事だけです。

聞かなかった事にしておこう。いろんな意味で……。

第四十六話 騎獣とティアとカトレア 女って怖い（後書き）

そろそろ、ディル＝リフィーナの人を出したいなと思ってます。

フェンリルは、私の自己解釈が多分に入ってます。

そして、ティアの正体です。

感想でズバリ言い当てられた時は、変更した方が良いか本気で悩みました。

まあ、結局そのまま行きましたが……。

カトレアは、母親と同じバグキャラです。

ご意見ご感想をお待ちしております。

第四十七話 嘔吐きは最低？つまり私は最低です

こんにちは。ギルバートです。カトレアの件は、泣かれたらコロツと行ってしまいました。自分の意志の弱さに、少し自己嫌悪しています。しかし、自分の中に有る禁忌とも言える”ゼロの使い魔原作知識”を、一緒に背負ってくれるのは、この人しか居ないので。その事はこの二年間で、嫌と言うほど思い知らされました。

ちなみに、泣かれる前にコロツと行ってたと言う突っ込みは受け付けません。

次の日ヴァリエール公爵に呼び出されて「カトレアとの婚約を正式に許可する」と、お言葉を頂きました。そして結婚には、一つの条件が課せられました。それは、カトレアが完治する事です。まあ、当然と言えば当然の条件です。

ちなみに見た目だけは取り繕ってありましたが、公爵の袖からは青痣が見え隠れし、足も引きずっていました。そんな公爵に、父上とモンモランシ伯だけは同情の視線を送っていました。（この二人も娘を持つ父親でしたね）

話が終わった後に、テンションが上がり過ぎたカトレアを落ち着かせるのに、多大な労力を消費する羽目になった事を、ここに付けくわえさせていただきます。

公爵と伯爵の滞在期間は、一週間の予定です。しかし、いきなり問題が発生しました。

今の別荘は、温泉以外何も無い状態です。子供達にとっては、面白い環境とは残念ながら言えません。公爵は「何も無いが有るじゃないか」とか、意味不明な事を言っていました。それを子供達が理解できるはずもなく「何とかして！」と、子供達の面倒見役の工レオノール様に厳命（泣き付かれたとも言つ）されてしまいました。ところ構わず逃げ回る子供達に、相当参っていた様です。責任感からなのでしょうが、子供達は（若干一名除き）鬼ごっこ気分逃げ回ります。完全に鬼役になっているのは、反射的に追いかける工レオノール様の自業自得と思うのですが……。

いずれにせよ、放っておくと森に入っ行きそうな勢だったの。でも子供達の暇つぶしに協力する事にしました。そこで提供したのがフリスビーです。家の家族や守備隊員達は、女の子でも出来るキャッチボール感覚で楽しんでます。これなら、ルイズやモンモランシーに勧めても問題無いでしょう。

皆を庭に連れ出して、二人一組になって投げ合う事にしました。最初は私が簡単な説明をし、アナスタシアと投げ合って見本を見せてから経験者と未経験者のペアに分かれます。私がエレオノール様、ディーネがモンモランシー、アナスタシアがルイズです。カトレアと大人達は、紅茶を飲みながら見学です。

私は僅かに手前に傾け、キャッチする時に減速するよう調節して投げました。そのおかげか、エレオノール様は難なくフリスビーをキャッチしてくれます。しかし、エレオノール様が投げると、私の手前で急激に曲つたり曲らなかつたりするので、取り辛い事この上ないのです。取り易くする為に、曲らないよう水平に投げているはずなのに不思議で仕方ありません。何故なのでしょう？

モンモランシーは下手ながら、もうディーネとラリーが出来る様になっていきます。ルイズは時々よけいな力が入って、大暴投する以外は概ね大丈夫なようです。フリスビーは好評の様ですが、この様子では一週間は持ちそうにありませんね。と言う訳で、一つ策を考えました。

次の日、皆が庭でお茶を飲んでる所に、ガルムを連れて行きました。その場には都合がよい事に、全員がそろっているようです。

「はい。全員注目です」

私はガルム舎から連れて来た子供を撫でながら、全員の注目を集めます。大人達の中には、ガルムを見て訝しげに表情を歪める者も居ました。

「この子はガルムの子供で、まだ数匹ガルム舎に居ます。この子たちと一緒に、帰宅日前日にゲームをする事にしました」

家の家族以外の全員が、不思議そうな顔をしました。予想通りの反応だったので、フリスビードックのルールを説明します。(詳しいルールは知らなかったなので、細部ロイクと適当に決めた物です)説明だけではピンと来ていない人も居たので、目の前で一度実演して上げました。この競技が可能になったのも、ロイクが頑張っただけしてくれたからです。全員の理解が得られた所で、私は更に続けます。

「ガルムと喧嘩したり逃げられたら失格で、怪我をさせるのも厳禁です。そして優勝者には、この豪華賞品をプレゼントです」

私はポケットから、アルミニウムで作った小さなブローチを出しました。アルミを薔薇バラの花形に成形し、色抜きしていない青みがかったガラスで全面を分厚くコーティングしてあります。複雑な形なので、空気が一切入ら無い様にするのは大変でしたが、おかげでかなり良い出来に仕上がりました。《固定化》と《硬化》も掛けてあるので、破損や錆等の心配はありません。

子供達は全員目を輝かせていましたが、エレオノール様だけは訝しげにしていました。

「ギルバート。この青みがかったのはガラスよね？」

「はい（あれ？ ひょっとして、安物だから気に入らなかったのでしょうか？）」

「で、この金属の方だけど……ひょっとして」

何が言いたいのでしょうか？ 私は訳が分からず、首をひねってしまいました。

「軽銀……なんて事は、無いわよね？」

「えっ、軽銀……です」が

私の返事を聞くと、エレオノール様が固まりました。いや、エレオノール様だけでは無く、カトレア含む当家の人間以外は、全員が固まっています。

「如何したのですか？」

私がそう聞くと、エレオノール様がワナワナと震え始めました。

「軽銀と言えば、何年も前に僅か5リールだけ市場に流れた幻の超希少金属じゃないの！！《鍊金》しても純度が全く足りないから、純度が高い物は未だにその値段は天井知らずなのよ！！なのにこれの純度は……」

「ほぼ100%で純軽銀と言えますね」

「そんな訳無いじゃない！！」

エレオノール様は私からブローチをひったくると、《探知》を使い純度を確かめました。

「本当……ね。小さくて使ってる金属量も大したことないけど……このブローチだけで数十、下手をすれば数百エキューにもなるわよ」

それは不味いですね。この場にいる人間は大丈夫とは思いますが、欲で自分を見失った人間は醜い事この上ないですから、ガルム達を怒らせないか本気で心配です。それに子供達だけでなく、大人達も反応している現状は宜しくありません。特にのコレット夫人（モンモランシ夫人）の目が怖いです。

「そうですね。これを賞品にするのは、価値が高過ぎて宜しく無さそうです。賞品はカトレアと相談して、妥当な物を考えておきます。（安物のブローチのつもりが、とんでもない高級品に化けてました）」

私が賞品を取り下げると、エレオノール様が明らかにガツカリした表情が見せました。ルイズとモンモランシーもぶーぶー言っ

ますが、こちらは無視です。カトレアには昨日の内に、同じ物をプレゼントしてありますし……。エレオノール様には、これから王立^{アカデミー}魔法研究所関連で世話になるかもしれないので、今の内に点数稼ぎをしておいた方が良いでしょう。

「エレオノール様は、確か王立魔法研究所で土魔法の研究に携わる予定と聞きました。希少金属の軽銀に、ご興味があるのではないですか？」

「……ええ。興味があるわ」

エレオノール様は、何故か悔しそうにしながらも頷きました。

「では、サンプルでインゴットを一つ差し上げましょう。ついでにカトレアと一緒に適正な賞品について意見を貰えると助かります」

「え？ いいの？ 希少金属だから、売ればかなりの額になるのよ」

私は大きく頷いてから、カトレアの方を見ます。

「カトレア（私はインゴットを作って来ます。すぐに戻るので、相談は私の部屋でしましょう）」

「はい。……さあ、姉様。私達は先に行きましょう」

エレオノール様は、カトレアに引っ張られて行きました。私も人目のつかない所に行き、《錬金》でインゴットを作成すると部屋に戻ります。インゴットを渡し、話し合いを始めると……。

「なんか、貴方達……長年連れ添った夫婦みたいね」

なんかエレオノール様から、とんでもない感想が漏れました。まあ、カトレアの能力で「つーと言えば、かー」以上のやり取りをしているので、ある意味当然ですが悪い気はしませんでした。ちなみにカトレアの機嫌が、怖いくらいに良くなりました。

その所為か話し合いは迷走し、結局私が賞品を考える事になってしまいました。有力候補は、先のブローチを銀製に変えた物です。それではつまらないので、もっと良いものを考えなければなりませんね。

今回別荘には、公爵家と伯爵家の使用人だけで無くカトレアの医師団も同行していました。カトレアの病の原因と治療法を、しつこく追及して来たのは公爵では無く彼らです。ただ彼らも、追及だけしていた訳ではありません。

彼らにより、温泉がカトレアの病に効くと実証されたのです。これにより、カトレアが別荘で療養する事が正式に決定しました。

私は喜びましたが、それで追及が無くなる訳ではありません。私は「病の原因と治療法は誓いの所為で言えない」で通していました。が、あまりにもしつこかったので、カトレアに「病の原因だけでも公開しよう」と提案したのですが、何故か拒否されてしまったのです。

「何故ですか？ カトレアと同じ症状の人が居た場合、その人を見捨てる事になりますよ」

私の言葉に、カトレアが辛そうに顔をゆがめました。その顔を見て、私は理由に思い至ったのです。結果として、物凄い自己嫌悪におちいりました。それと同時に、気付けて本当に良かったと思いました。こんな物を、カトレアー一人に背負わせる訳には行きません。

(理由は分かりました。無理に口にする事はありません)

しかしカトレアは、僅かに首を横に振ると口を開きました。

「病の原…因を公開し…て完治す…れば、同…じ症例の…人が現れ…た時、治療…法を公開…しない訳…には…。そう…なれば…」

カトレアの涙交じりの告白は、そこで完全に途切れてしまいました。

治療法は、”摘出手術”・”ルイズの虚無魔法”・”精霊魔法”そして”性魔術”の4つです。このどれもが、ハルケギニアでは公開できない内容なのです。一方で異端認定を受ける方法ですし、もう一方はルイズの系統を公開する事になります。それは、私達にとって絶対に容認できない事です。

この決断は同時に、カトレアと同じ症状の人間を見捨てるという言葉決断でもあります。

しかし、話はそれだけに止まりませんでした。暫くして落ち着くと、カトレアは再び口を開いたのです。

「それに、ギルは……。お父様達に、マギは『2〜3年戻らない』と説明したわ。でも、もう2年以上経ってしまったわ。今更『マギが帰らない』なんて説明は、誰も納得しないと思う。下手をすれば、

それが両家の軋轢になるわ」

カトレアの意見は、反論のしようが無いほど正論でした。私が誤魔化し切るつもりだった事実を、誤魔化せないと断じたのです。

「全てとは言わないけれど……。私の病の事だけでなく、ルイズの事もお父様と母様に伝えるべきだと思っわ」

私はその言葉に、ただ頷く事しか出来ませんでした。

ルイズ達の事を、エレオノール様とディーネにお願いして、私とカトレアは公爵とカリーヌ様に時間を作ってもらいました。別荘の一室に移動し、私がサイレントの魔法をかけると、公爵とカリーヌ様の表情に緊張の色が混じりました。

「こんな所で、一体何の話があると言うのだ？」

公爵は警戒心を隠しもせず、私に質問をして来ました。

「これから話す事は、大変重要な事です。また、今のハルケギニアでは、到底信じられない荒唐無稽な話でもありません。今から話す事を口外するのは厳禁とし、信じるに値しないと判断された場合は、この部屋を出ると同時に忘れろと誓っていただけますか？」

私の言葉に公爵とカリーヌ様は、答えを口にしようとしませんでした。

「約束していただけないようなら、お呼び立てして申し訳ありませんが……」

「内容は何だ？」

公爵の棘のある声が、私の言葉を中断させました。公爵もですが、カリィ又様のプレッシャーが凄い事になっています。気の弱い人なら、気絶するのではないでしょうか？

「マギの事。カトレアの病の事。ルイズの魔法の事。……この三つです」

「分かった。誓おう」「誓うわ」

今度は間髪入れずに、二人とも即答しました。

「では、先ずマギの事からお話しします。長いお話になるので、御着席ください」

カトレアは私の隣に座り、対面方向に公爵とカリィ又様が座ります。

「マギは自分の事を、話したがない人でした。今からする話は、マギが酒に酔った時に漏らした話や、マギの手帳の内容からの憶測も含まれます。その所為で、不自然な点もありますがご了承ください」

そうやって私は、マギの事を話し始めました。嘘に塗り固められた話ですが、ほんの少しの真実を混ぜて話して行きます。

「マギは元々ロバ・アル・カリィエ（東の世界）出身で、大成を望み若くしてエルフとの取引を始めた商人です。そして、運良く成功

する事が出来たマジは更なる成功を求め、ガリア王国、ネフテス国（エルフの国）、ロバ・アル・カリイエを結ぶ貿易路を造り上げようとしたのです。

……しかし、若くして成功したマジを、快く思わない人達が居ました。マジは彼らの罠にはまり、エルフの信用を無くしてしまいました。そして運が悪い事に、その時マジはガリアに居たのです。サハラ横断には、如何してもエルフの協力が必要です。エルフの信用を失ったマジは、故郷に帰る事が出来なくなってしまうました。

途方に暮れるマジを助けたのは、ガリアとサハラの間に住む年長いた学者でした。そこでマジは、商品の殆どを処分し、その学者の所に助手として転がり込んだのです。やがてその学者も亡くなり、マジはハルケギニアを旅する様になりました。

盗賊に襲われた事も、一度や二度では無かったそうです。それでもマジは、旅を止める様な事はありませんでした。幸いマジは優秀なメイジだったので、遅れをとる様な事は無かったからです。

やがてトリステインで、ある女性に出会います。その女性は、^{アカデミー}立魔法研究所の首席研究員だったそうです。優秀な彼女に嫉妬する声も多く、なかなか良い研究環境が得られなかったそうです。彼女は歴史と地学を研究していて、その時の研究内容は、ハルケギニアの大地に眠る風石の調査と、効率の良い採鉱技術の確立でした。

しかし彼女は、研究の途中で”恐ろしい秘密”を知ってしまったのです

私はそこでいったん切ると、冷めかけた紅茶でのどを潤します。

「恐ろしい秘密」とはなんだ？」

私は「もう解決済みなので、安心してください」と、答えておきました。大隆起は、解決（風石を除去）してしまつた以上、立証する方法は無いのです。しかし、カトレアが黙っていませんでした。

「大隆起よ。地下深くに溜まつた風石の所為で、大地がアルビオンみたいに空に浮かび上がるの。そして、浮力が維持できない物は墜落するわ。これがハルケギニア全体で起こるの」

公爵とカリーヌ様が絶句しています。証明も出来ないのに、何で言つてしまうのでしょうか？

「証拠はあるのか？ それに、解決済みとは……」

公爵が、ようやくと言つた感じで声を絞り出しました。

「最近おこっている地震は、土の精霊が風石の鉱脈まで穴を開けているからです。その穴から風の精霊が鉱脈に侵入し、風石を分解吸収しているのです。ロマリアは『聖戦の理由が無くなるのは困る』と大騒ぎして、地震の原因に巨額の懸賞金をかけたそうですが……」

「聖戦か……。しかしそれが本当なら、ロマリアがそれを黙っている理由は無いだろう。公表しておけば、ハルケギニアは一つにまとまる事が出来る」

公爵がすかさず反論して来ました。

「表向きは、パニックを避ける為としています。しかし実状は、各国に対策をとる時間を与えず、問答無用で協力を強制する為です。」

正気を失った狂信者の考えは、私には分かりません。それから証拠を求めるなら、女性研究員の調査報告書を探すしかありません」

公爵とカーリー又様は私の言葉を吟味していますが、本当の事なので破綻する所はありません。困るのは、証拠がこの場に無い事です……。取りあえず続きです。そして大嘘を吐きます。

「その女性研究員は重圧から心が壊れかけましたが、息子の為に力を振り絞り持ち直しました。しかしその女性研究員は、エルフの薬を飲まされ心を壊されてしまいました。本来ならそこで終わる筈だったのですが、その薬に解毒薬があると分かると、息子の12歳の誕生日に事故を装い階段から落とされました。そして、その女性研……」

「その女性研究員の名前を言いなさい」

ここで突然カーリー又様が口を挟んで来ました。

「いえ……私も知りません。マギはその人の名前を、絶対に口にしてくださいませんでしたから」

「何か手掛かりは無いの？」

私は少し思いだす振りをして……。

「確か息子の名前が、ジャンだったか、ジャックだったか……そうだ。ジャン・ジャックです」

カーリー又様は辛そうに目を閉じると「もう良いわ」と言って、再び黙ってしまいました。恐らくワルド子爵の母親とは、隣の領地と

言う事もあつて面識があつたのでしよう。私は気持ちを切り替え、続きを話し始めました。

「その女性研究員が死に、敵を打つ為にマギは立ち上がりました。そして分かつたのが、敵がロマリヤである事と大隆起です。そして更なる手がかりを求めて、ロマリヤの暗部を覗こうとして……」

そこで公爵の顔色が変わりました。

「まさか……」

「はい。恐らくマギは、もう生きていません」

私の言葉に、公爵とカリーヌ様は頭を抱えてしまいました。

「続いてカトレアの病についてです。しかし私とカトレアは、誓いの所為でこれを語る事が出来ません。よって、私からカトレアにもう一度説明しますので、それを偶然聞いてください」

言葉遊びの誤魔化しですが、あの誓いをたやすく破る事は私には出来ません。

「精神力……ここでは便宜上魔力と表現しますが、これは人の心が生み出し溜めこまれる物です。しかし、具体的に何処に溜めこまれるか、当たり前過ぎて誰も意識していません。ディテイクト・マジック《探知》の魔法を使えば、魔力が体全体に薄らと広がっているのが分かります。それを踏まえて、カトレアに同様の魔法を使うと、病気の幹部と思われる部分に違和感があるのが分かります」

私はカトレアを真直ぐに見ながら説明していますが、意識は完全

に2人への説明モードです。

公爵とカリィ又様は、お互いに《探知》を使いその事を確認すると、カトレアに《探知》を使い事実を確認します。

「確かに球の様な物があるな」「ええ」

二人の確認するのを待つて、私は説明を続けました。

「これがカトレアの病の原因です。カトレアが魔法を使ったり体力的に消耗すると、この球が膨らみ水の流れを悪くします。身体の重要器官に水が流れなくなると、如何なるかは想像に難くありません。逆に水の秘薬を飲んだりすると、球は小さくなります。歩く等の軽い運動をして、体力を付ければ球が膨らみ辛くなります」

「……治療法は？」

公爵とカリィ又様が、理解する間を十分取ってからカトレアが問い掛けて来ました。

「治療法は三つです。一つ目は、この球を物理的に体外へ摘出する事です。カトレアの体を切り、周囲の体組織ごと切り取ってしまします。リスクは、死や重度の後遺症が残る可能性が、非常に高い事です。成功しても、治療法が公になれば異端扱いです」

ここでカトレアは、首を横に振りました。公爵とカリィ又様も、眉間に皺を寄せています。

「二つ目は、精霊による治療です。精霊をカトレアの体内に侵入させ、球を体外に運び出してもらいます。この治療法は、死や後遺症

のリスクはありません。しかし、この治療法が公になれば、一つ目以上に不味い事になります。……後は、精霊を説き伏せられるかが問題ですね。私はこの治療法が、一番良いと考えています。（実は性魔術で解決して、この治療法と偽るつもりです）」

カトレアは頷いて居ましたが、喜びを隠し切れずニコニコと笑顔がこぼれています。公爵とカリーヌ様は、一瞬だけ眉間に皺が寄りましたが、カトレアの顔を見て同時に溜息を吐きました。

「そして、三つ目です。これは……」

私はそこで言葉を止めてしまいました。（本当に言っても良いのか？）と言う迷いが、如何しても拭い去れないのです。

「ギル。……言つて」

カトレアに促されて、私は頷きました。

「デイスペル・マジックと言う魔法による治療です。この魔法で球を分解除去すれば、カトレアは完治します。これもカトレアの身体上のリスクはありません。ただ問題なのは、この魔法が伝説の系統である”虚無”だと言う事です」

私の言葉に、カトレアが真剣な表情で頷きました。公爵とカリーヌ様は、”虚無”と言う言葉に反応しましたが、現実味が無いと判断したのか私達の誓いを慮おもんばかったのか、口を挟んで来ませんでした。

「ギルバート。カトレア。私とカリーヌは、今の話を偶然聞いてしまった。知ってしまったからには、私達には隠す必要は無い。これ以上病の原因と治療法について、聞きも聞かせもせんと誓おう」

そして、公爵はカーリー又様に目で合図しました。カーリー又様は頷くと……。

「私も、聞きも聞かせもしないと誓うわ」

誓ってくれました。

「精霊による治療を、絶対に成功させてくれ」

公爵とカーリー又様は、虚無魔法による治療をスルーして、精霊による治療で解決すると認識した様です。その認識では正否以前に、最後の話に繋がりません。

「はい。全力を尽くします。しかし、事は精霊の矜持に反する事です。精霊が聞き入れてくれる可能性は、決して高いとは言えません」

公爵とカーリー又様の顔が歪みました。

「精霊による治療が駄目なら……」

「許さんぞ！！カトレアを切り刻むなど絶対に許さん！！」

公爵がヒートアップして、怒鳴り声を上げました。カーリー又様は一見冷静に見えますが、これは確実に嵐の前の……ですね。

「安心してください。精霊による治療が不可能な場合は、三つ目の虚無魔法ディスプレイ・マジックによる治療法を実行するつもりです」

「何を言うか！！使い手が存在しない系統など！！」

怒りをあらわにする公爵に対して、私は静かに首を横に振りました。

「担い手は存在します」

私の言葉に、公爵が固まりました。

「虚無の初歩の初歩の初歩。エクスプロージョン《爆発》 その威力は絶大で、込めた精神力によつては、地表に小型の太陽を創り出します。また、途中で詠唱を止めても発動可能で、小型の爆発程度ならワンスペルで発動可能です」

公爵とカーリーヌ様は、私の説明に数秒遅れて目を見開きました。しかし、絶句したまま固まっていて、言葉をまともに出せる状況ではない様です。

「虚無の担い手は通常のメイジとは規格が違い過ぎ、自分の系統を真に理解しなければコモンスペルもまともに使えません。この状態では、最も相性が良い虚無魔法が暴発します」

これについては、ある意味予想通りです。ガリアのジョゼフ第一皇子は、魔法を使っても全て不発に終わっているのです。発動するのが、プチ《加速》なのでそう見えるのでしょうか。

「ですので……」

「待て!!」

復活した公爵に、説明を中断させられました。

「確証……いや。証明できるのか!？」

「出来ます」

私が即答すると、再び公爵は固まりました。

「証明方法は二つあります。しかし、現状では証明するのはお勧め
しません」

「何故ですか？」

固まった公爵の代わりに、カーリー又様が口を開きました。

「ルイズが虚無と判明すれば、如何なると思えますか？」

私が質問に質問で返すと、カーリー又様の顔が引きつりました。

「先ず、ルイズは戦争の道具として、まともな人生を送れなくなる
でしょう。そして下手をすれば、トリステイン王国は内戦状態にな
ります。それは『虚無の系統は、王家の正当な後継者に現れる』と、
大義名分を振りかざす者達が出て来るからです。そう言った者達に、
わざわざ火種をくれてやる事はありません。政治的回避方法はいく
らでもありますが、それには入念な準備が必要です」

私はここでいったん切つて、公爵とカーリー又様の表情を確かめま
した。二人とも真剣な表情で、私の顔を見えています。

「ここで問題になって来るのは、ルイズが決して暗愚では無いと言
う事です。二つの確認方法は、そのどちらも自分の系統に辿り着く

可能性があります。今ルイズは、自分の事を『欠陥メイジ』と
思っています。自分は伝説の虚無である事を、今のルイズが
隠し通せると思いませんか？ 少なくとも私は無理と判断
します」

私の説明に、この場にいる全員が渋々と頷きました。

「確認方法の一つ目は、ルイズが水のルビーを付け始祖の
祈祷書を開く事です。これにより古代語が浮かび上がり、
白紙にしか見えない祈祷書を読む事が出来るでしょう」

「その方法は、ハッキリ言って無理だな。水のルビーと始祖の
祈祷書は、王家に伝わるトリステイン王国の国宝だ。特別
な事情でもない限り、借り出すのは不可能と言って良いだ
ろう」

公爵の冷静な突っ込みに、私は頷きました。

「もう一つは使い魔の召喚です。ルイズが虚無なら、
ガンダールヴ、ウィンダールヴ、ミヨズニトニルン、
記すことさえはばかれる使い魔のどれかが召喚される
はずです」

「しかし、記すこともはばかれる使い魔が召喚されたら、
確認のしようが無いのではないか？」

公爵の言葉に、私は首を横に振りました。

「マギの調べで、最後の使い魔はリーヴスラシルと判明
しています。それ以前に、ルーンを刻まなくとも分かる
のです」

「そうか。しかし、分かるとはどういう事だ？」

「はい。始祖の使い魔は、全て人の形をしているはずですから」

公爵とカリーヌ様の顔が、驚きに包まれます。

「ガンダールヴ『神の左手ガンダールヴ。勇猛果敢な神の盾。左に握った大剣と、右に掴んだ長槍で、導きし我を守りきる』の歌でも分かる様に、武器を使いこなします。」

ヴィンダールヴ『神の右手はヴィンダールヴ。心優しき神の笛。あらゆる獣を操りて、導きし我を運ぶは地海空』これはあらゆる騎獣を操ると言う事です。

ミヨズニトニルン『神の頭脳はミヨズニトニルン。知恵のかたまり神の本。あらゆる知識を溜め込みて、導きし我に助言を呈す』助言すると言う事は、言葉をしゃべると言う事です。そしてマギの説には、あらゆるマジックアイテムを使いこなすとありました。

これらすべてに共通するのは人です。そして、マギがロマリアの最深部で見つけた資料には、初代ガンダールヴはサーシャと言う女性で、種族は……」

そこで私は、また迷う様に間をとりました。

「種族は何だと言うのだ？」

痺れを切らした公爵が、先を促します。

「……エルフです」

「馬鹿な!!! 出まかせだ!!!」「ありえないわ!!!」

「では何故そんな資料が、ロマリアの最深部に大切に保管されていたのですか？ 焼いて然るべきでしょう？」

私の言葉に、公爵とカリーヌ様は反論のしようがありません。

「ここまで来るとマギをほら吹きの人と断じるか、ロマリアの闇がそれだけ深いかのどちらかです。そして今の段階では、私はマギをほら吹きの人と断じる事が出来ないのです。マギが言ったルイズの爆発魔法は、まぎれもない事実でした。マギが言った大隆起は、精霊達が事実と認め対処しました。私の周りで確認した事は、全てマギが正しかったのです」

私の血を吐く様なもの言い、公爵とカリーヌ様はそれ以上言葉を口にしませんでした。

「……ギル」

カトレアに声を掛けられ、演技に熱が入り過ぎていた事に気付きました。一回大きく深呼吸して、気分を落ち着かせます。そして、いよいよルイズのこれからについてです。原作を外れ過ぎない様に、二人の意識を誘導しなければなりません。

「ルイズは適当な年齢になってから、使い魔を召喚させるのが良いと思います。……私の個人的意見ですが、年齢は少なくとも15歳以上になってからが良いと思います。それを踏まえて推奨するのが、トリステイン魔法学院の使い魔召喚の儀式です。順当に行けば16歳になっていきますし、学院長のオールドオスマンは信用できる人物と報告があります。彼に協力してもらえれば、隠蔽工作と安全対策は問題無いでしょう。そして、私も時期をずらしてルイズと同時に

入学し、全面的にフォローします。（しかしロマリアには、魔法が使えない王族関係者と言う事で、既にはれてる可能性大ですね）」

私はカトレアに視線を向け……。

「これで結婚が遅れます。すみません」

と、短く謝りました。これは事前に話してあった事なので、カトレアは首を僅かに横に振り怒っていない事を伝えてくれました。

「人が召喚されても、公爵家と当家が協力すれば、使い魔としての生活や帰還も問題無いと判断します。（自分の言葉に吐き気がする）」

ふと気付くと、カトレアが私の手を握っていました。私は（大丈夫です）と、目と心で返事をしました。

「ここまでする理由は、爆発魔法が原因不明のままなら、ルイズの使い魔召喚はこの時行われるはずだからです。そして私達の、虚無かもしれないと言う危惧から出た行動が、ルイズの劣等感を刺激し苦しめると思ったからです。私達はルイズを見捨てないと言う姿勢を、常に見せておかなければなりません。（自分の都合の良い未来の為にベラベラと……）」

私はそこまで言うと「以上です」と言って、立ち上がりました。

「ギルバート。ルイズの事は、私とカリィヌで話し合って決める。だが、貴様の意見は参考になった。礼を言っておく」

私は黙礼で返答すると、カトレアと一緒に部屋を辞しました。

「カトレア。私を最低の人間と思えますか？」

「ギルは吐いて良い嘘しか吐いて無いでしょう」

「……そうかな」

「そうよ」

カトレアの慰めが、心に来る今日この頃でした。

さて、いよいよフリスビードックの日がやって来ました。楽しい別荘生活も今日で最後です。

この大会に参加するのは、ルイズ、モンモランシー、ディーネ、アナスタシアの四人だけです。

エレオノール様は練習初日に、不参加を言って来ました。原因はガルムの口が開くと同時に、急激に曲る絶妙なフリスビーコントロールです。このコントロールのおかげで、一度もガルムがフリスビーをキャッチ出来ませんでした。……ある意味凄いです。

そのお陰と言ってはなんですが、参加賞が四人分で済んだので、なんとか当日に合わせる事が出来ました。……参加賞は、カトレアと二人で手作りです。先のブローチより、圧倒的に苦労しました。

優勝候補はアナスタシアです。他の人に比べると、圧倒的に練習時間が違います。ルイズとモンモランシーから、ずるいと言う意見

が入ったので、ハンデとして私が一度だけ妨害すると宣言しました。

しかし、アナスタシアは「兄様の妨害ごとき平気だもん」と、のたまったのです。アナスタシアよ、それは兄に対する挑戦状と受け取りました。ディーネの非難の視線が気になりますが、無視です。無視。

トップバッターはルイズです。ガチガチに固まっていますが、大丈夫でしょうか？

開始の合図と共に、ルイズは思いっきりfrisbeeを投げました。しかしfrisbeeは、何故か上に飛んで行ったのです。紛うこと無き大暴投です。投げたfrisbeeを見失ったルイズは、ひたすら困惑していました。そしてfrisbeeは、ブーメランのごとく戻って来ます。

コッソ 「ぱうっ」

ルイズの額に命中しました。同時にルイズの口から、面白い悲鳴が漏れました

ルイズの額から跳ねかえったfrisbeeを、ガラムがZone1で見事にキャッチし1ポイントが入りました。痛くは無かった様ですが、相当恥ずかしかったらしく、涙目に真っ赤な顔でfrisbeeを投げ続けました。ちよつと可愛いと思ったのは、私だけの秘密です。この状態で、Zone3キャッチを連発していたのは凄いです。

次のモンモランシーは、コンスタントにZone2と3キャッチを出していました。ジャンピングキャッチも飛び出していたので、意外に高得点です。

その次のディーネは、これと言ったミスも無くZone3キャッチを連発しZone4キャッチも出していました。

さて、大トリを飾るのが優勝候補のアナスタシアです。

余裕の表情で投げた一投目を、ガルムが追いかけてZone5でキャッチしようとした瞬間。横から何者かに、フリスビーを搔っ攫われました。

「ああああー！ー！ー！ 何でボルグが居るの！？」

私達の目の前で、悠然とアナスタシアの下に行こうとするボルグに、ガルムが『フリスビー返せ！』と言わんばかりに跳び付きます。それを『フツ……あたらんよ』と、見事にかわすボルグですが、連続で跳び付くガルムの所為でアナスタシアに近づけません。

注 こんな事になったのも、以前アナスタシアがボルグの前で、フリスビードックを気軽にしたのが原因です。フリスビーを取って来たガルムを褒めるアナスタシアを見たボルグは、横からフリスビーを搔っ攫ったのです。悠然とフリスビーを持って来るボルグに、如何して良いか分からないアナスタシアは、取りあえず褒めてしまったのです。それ以降、ボルグとガルムはフリスビーを奪い合うライバルになってしまいました。

ト……結局そのままタイムアップです。アナスタシアはゼロポイントです

「兄様！！ ボルグ使うなんて酷い！！」

私は不思議そうに首を傾げると……。

「アナスタシアは私の妨害ごとき平気なんでしょう」

と言ってやりました。めっちゃ大人げないです。

「さあ、結果発表に移りますよ」

涙目のアナスタシアが、ディーネに慰められています。ディーネが「迂闊うかつにギルのドS地雷踏むからですよ」と言っていました、私は母上と違ってドSじゃないので知りません。

結果は……

一位 ディーネ

二位 モンモランシー

三位 ルイズ

ドベ アナスタシア

……です。ルイズの最後の一投が間に合っていれば、ルイズが二位でした。

さて、まずは参加賞を配ってしましましょう。参加賞は私とカトリアで作った、可愛くデフォルメされたガラム人形です。それぞれ、以前プレゼントした帽子と同色のリボンが、首に巻き付き縫い止めてあります。アナスタシアのは頑丈に作ってありますし、ルイズのはリボンが白一色では寂しいのでピンクのチェック模様にしてあります。

人形を渡した後は、お子様達が喜んで表彰式どころではありません

んでした。私はディーネに近づくと、優勝おめでとうと声をかけ、当初の賞品であるブローチを渡しました。

「ギル！！これは……」

私は人差し指を、口元に当て「静かに」のジェスチャーをします。まあ、この場合は内緒と言う意味合いですが……。

こうして、最初の別荘お泊まり会は無事終了したのでした。

次の来訪時にルイズから聞きましたが、帰宅後にエレオノール様が物凄く荒れたそうです。

「私は帽子どころか、人形も貰えなかったわよ。何。ルイズ。自慢したいの？ 私なんて、高価なものだけど無粋なインゴット一つよ！！ ちび！！ ちびルイズ！！ ……（この後延々と説教）」

泣きながら説明しに来たルイズが、物凄く不憫でした。……反省です。

それから公爵とカリィヌ様から、ルイズの系統確認については、私の意見をそのまま採用すると手紙が来ました。……そして文末には、ルイズを頼むとありました。

ルイズの為に吐いた嘘でもあるはずなのに、何故こんなにも罪悪感を感じるのでしょうか？

第四十七話 嘔吐きは最低？つまり私は最低です（後書き）

SAOは面白いです。一気に読んでしまいました。
こんな文章いつか書いてみたいなー。

……私には無理です。自分で言つて泣きそうだけど。

今回は公爵達に情報一部開示です。

カトレアが隣に居る事で、主人公の今後の行動が少しずつ変化して行きます。

ヒロインは二人の予定でしたが、一人追加するか悩んでいたりします。

カトレア＋？？？（登場済み）＋？？？新規

だって、会話内容を想定しても間が持たないんだもの。

水と油に、卵を入れましょう理論です。（なにそれ？）

入れるとしたらオリキャラですね。デイル＝リフィーナ側から。

小動物系で、無力な子を構想しております。

ご意見ご感想お待ちしております。

第四十八話 桃黒戦争勃発！！妹は耳年増

こんにちは。ギルバートです。カトレアに説かれて、公爵とカリ
ー又様に情報を一部開示しました。原作からズレすぎない様にす
る為に、嘘を重ねる罪悪感で押し潰されそうになってしまいました。

私はルイズとサイトに、心の中で謝罪しておきました。……それ
で許されるとは思いませんが。

公爵から「ルイズを頼む」と言う手紙が来てから、父上と母上を
呼び出してドリユアス大家族会議を開きました。カトレアにも出席
してもらい、ルイズの系統も含め「公爵との約束で、トリスティン
魔法学院に入学する時期を遅らせる」と、話しました。

最初は全員呆然としていましたが、父上と母上は納得した様に頷
きました。

「入学の件は問題ない。公爵にこれまで受けた恩を、少しでも返せ
る様に努力するのだぞ」

父上はそう言うと、母上の方を見て頷きました。

「それじゃあ、家族会議は終了ね。ディーネちゃん。アナスタシア
ちゃん。一緒に温泉に……」

私は驚きました。父上と母上は、これだけの情報を持つ私を追及
しないつもりなのです。思わずカトレアの方を見ると、目が合いま
した。その表情は驚きに包まれています。間違いなく、私も同じ表
情をしているでしょう。

「待つてください!!」

この状況に抗議の声を上げたのは、ディーネでした。マギの正体を知っている人間は、何故私が虚無に行きついたら分からないのです。そして私は、その説明をしていません。いざとなれば、原作知識の存在を話し、その内容は一切話さないつもりでした。

「ディーネちゃん。ギルバートちゃんが信用できない？」

「そ　それは……」

母上の言葉にディーネは言い淀み、アナスタシアは不安そうに私を見て来ました。

「ギルバートちゃんが話さないと言う事は、話せないと言う事よ。私とアズロツクは、ギルバートちゃんが話してくれるまで待つと決めたの」

母上の言葉に、私は呆けてしまいました。

「だから、ディーネちゃんも……ね」

ディーネは、渋々と言った表情で頷きました。

「しかし、アナスタシアちゃんは良かったわね　大好きなお兄ちゃんと一緒に、学院に行けるわよ」

(母上!!　その話題は止めて!!)

私は心の中で悲鳴を上げました。アナスタシアは物凄く喜びましたが、ディーネの反応は言わずもがなです。それより恐ろしかったのは、カトレアですが……。

この会議の後に、カトレアから「一緒に学院に行ける様にして」と、お願いされました。私は反射的に、無理と答えておきました。そう、世間的（年齢的）に無理なのです。二十歳超えてからの入学は、オールドオスマンと公爵も流石にダメと言っでしょう。

しかし次の日、ディーネが「一緒に入学する」と言い出し父上達が了承すると、今度は本格的に強請ねだられました。まあ、この場合は強請ゆするとも言いますが……。

結果。私が出した案は、来年の3月中にカトレアの治療を済ませ、入学と卒業をしてもらう事でした。そして私達の入学に合わせ、教師として学院に行ってもらおう事です。

当然。カトレアは渋りましたが……

「ルイズの事は、カトレアにも手伝ってもらいたいのです。辛いかもしれませんが、三年間だけの我慢です。ルイズの為に耐えるカトレアを、私は愛おしく思いますよ」

三年間一緒にいる為に、三年間我慢するという矛盾した答えですが、カトレアは頷き私に抱き付いて来ました。そして私の耳元で……

「今は騙されてあげる」

平坦な声で呟かれました。……怖い。めっさ怖いです。本心だったのに何故？ いや、本心だったからこそ、この程度で済んだのか

もしれません。

完全に硬直した私は、カトレアにされるがままにスリスリされました。

それから数日の間を開けて、公爵からもう一通手紙が来ました。内容は「アズロックが年明けに、国王から呼び出される」と言う物でした。理由は塩の値段が、じりじりと上がって来ている事です。最新の塩の値段は、去年の倍近い値段（バカの買い占めが原因）になっていました。呼び出された父上は、国王よりゲルマニアの塩輸出货量増加を嘆願する特使に任命される予定です。

そうなれば、父上は直ぐにでもゲルマニアに発たなければなりません。塩の在庫は十分（現状でトリスティン王国の約一年分）に有るので、父上が帰ってきたら塩爆弾起爆準備完了です。後に一番効果的な起爆タイミングを、父上とカロンを交えて入念に話し合っておく必要がありますね。

塩爆弾については、来年のお楽しみと言う事で今は忘れておきます。王立魔法研究所研究員様が帰還した事で、ようやくティアが大手を振って歩けるようになりました。何時までも放っておけないので、カトレアにティアを紹介しました。しかし予想に反して、カトレアとティアは意気投合し仲良くなったのです。

……意外です。物凄く意外です。仲が良いのは歓迎ですが、この展開は予想外でした。カトレアからすれば、使い魔の一匹位どうって事無いでしょうが、ティアは騎獣オイルンの件を鑑みるに絶対良い顔をしていないと思っていました。

カトレアが散歩の休憩時間に、ティアを膝の上に乗せ優しく撫でているのを偶然見かけました。貴族の令嬢と黒猫の取り合わせは、見た目的に合わないと思っただけでしたが、カトレアとティアを見る限りそれでも無かった様です。（まあ、カトレアとティアが例外なのかもしれませんが）

私も書類仕事の時間を確りと取り、その時間は別荘に戻る様になりました。時間帯は一定しませんが、カトレアも私の休憩時間に合わせ一緒に散歩をしてくれました。その間だけ、マルウエンの首輪（成長促進の祝福付きの首輪）をカトレアに装備させ協力しました。流石に不便に感じ、首輪を交代で持とうと提案しましたが、取り付く島もなく断られてしまったのです。

まあ、原因は散歩がプチデート化していたからですが……。首輪の効果が始めるのは、だいぶ先になると思いますが、この調子で行けば軍に入っても活躍できる位の体力はつくはずですよ。

同じ首輪を交代で着け合う私達に、一部の人がひそひそと噂をしていた様ですが、私は知りません。……と言うか、知りたくありません。お互い着けてあげる時に、カトレアが恍惚としていた様な気もしますが、これも気のせいです。

公私共に上手く行き、私は緩んでいたのかもしれませんが。私は気付かなかったのです。今の状況が、薄氷の上を歩いている様な物だと言う事を……。

最初にカトレアと散歩した時に、カトレアは戸惑う事無く腕を組

んで来ると思っていました。しかし予想に反して、私の袖をつまんで来たのです。私は不思議に思い、カトレアの方を向くと……真つ赤な顔でそっぽを向かれました。

(今更、恥ずかしいのでしょうか?)

「ム……ギルは、女の子の気持ちが分かってない」

そう言って頬を膨らませるカトレアは、個人的にかなり可愛いと思います。言っている事を理解できるかは別問題です。私は首をひねってしまいました。散歩しながら女の子の気持ちを説くカトレアでしたが、私は全く理解できませんでした。

「マギの時に彼女が居なかった理由が、よく分かった気がする」

グサツッ!! その言葉は、心に突き刺さります。イタイ。

「男にとって、女心は永遠の謎と言われていて……」

「その大半は、経験が足りない人や鈍い人の言い訳だと思う」

バツサリと切り捨てるカトレアに、私は絶句してしまいました。

「……だから、ギルはもっと私の事を知るべきだと思うの」

その物言いに感じたのは、違和感でした。それを探る為に、私は冷静になるよう努めました。そして、カトレアの言葉をよく吟味し真意を探します。

(……!?!?そう言う事か)

程なくして正解らしき物に辿り着くと、カトレアは顔を赤くしてそっぽを向いてしまいました。どうやら正解のようです。意図が理解出来ると、先のセリフがやたら可愛く感じてしまいます。

(もつと私を知ってほしい……か)

しかし、流石に言い方が良くありません。私はちよつとした仕返しのもりで、腕を動かし袖をつまむカトレアの手から逃れます。

カトレアが不満そうな顔を浮かべ、袖に手を伸ばして来ますが私はその手を避けました。二度目と三度目は手を掴もうとし、四度目はシャツの胸回り部分を摘まもうとしました。しかし私は、それらの手を全て避けます。

「……………ギル？」

カトレアの口から、肌寒さを感じる声が漏れました。私の予想を、遙かに上回る勢いで怒っているようです。私が笑って誤魔化そうとした瞬間に、跳びかかられました。一瞬喰われるかと思い、本気で焦ったのは私だけの秘密です。と言っても、カトレアにはバレバレだと思いますが。

……………まあ、この様な感じで、仕事とカトレアにはほぼ全ての時間を使っていました。この状況を面白くないと感じる人が、一人居ました。

そう。アナスタシアです。

アナスタシアの目には、兄を取り上げられたと映っても仕方が無いのでしよう。一週間も経つと、私とカトレアの間に割って入る様になりました。そればかりか、仕事中外は私にべったりとまとわりつく様になったのです。（風呂・睡眠時含む。流石にアナスタシアを男風呂に入れる訳には行かないので、私は家族風呂で入浴する羽目になりました。この上カトレアが突入して来たら、私は如何なっていたか……。考えるのも恐ろしいです）

当然この状況を、カトレアが快く思うはずがありません。

日に日に二人の仲は険悪になり、いつ嫁・小姑戦争が勃発するか、全く分からない状況まで来てしまいました。（胃が痛いです）

そして、恐れていた事がとうとう起きてしまいました。アナスタシアがいつも通り、私のベッドに突入して来ました。しかし、この時はそれで終わらなかつたのです。

コンコンと、ドアをノックする音が部屋に響きました。

返事をするとう部屋に入って来たのはカトレアでした。入室直後にアナスタシアを見たカトレアの**まなこ**が、一瞬跳ね上がったのを私は見逃しませんでした。

私は「如何にかしなければ」と動こうとしましたが、如何すれば良いか分からず、そのまま硬直してしまいます。固まる私を他所にカトレアはベッドに近づいて来ました。

「ギル。一緒に寝ましょう」

カトレアはニコニコ笑顔でしたが、僅かに笑顔が引き曇っています。原因はベッドの上に居るアナスタシアである事は間違いないでしょう。

「いや……婚前交渉やその誤解を受ける様な事は、絶対に不味いですから」

私はやんわりと断ろうと言いついていました。アナスタシアが隣で「ふう〜〜〜っ！」と、猫の様にカトレアを威嚇し始めます。ティアは関わる心算が無い様です。

そんな私達の様子を、全く意に介す事無くカトレアはベッドに入り込んで来ました。そんなカトレアにアナスタシアは怒り、手が出そうな雰囲気になりました。カトレアも迎撃態勢を取ります。私はあわてて、カトレアとアナスタシアの間に割って入りました。

「喧嘩するなら、自分の部屋で寝てください」

二人揃って不満そうな顔を浮かべましたが、この場は引いてくれたようです。しかし、とても樂觀できる状況ではありません。私は常に、二人の間に入るポジションを取る事にしました。

そしてどうにか横になった所で、問題が発生しました。左右をカトレアとアナスタシアに固められて、足の間にはティアが丸まっています。最初はカトレアの柔らかい物に、ドギマギしていましたがそれどころではなかったのです。

「……熱い。それに動けない」

季節が冬の寒い時期とはいえ、熱くて眠れないのです。それだけ

ならまだ良かったのですが、左右からがっちり固定されていて、身動き一つ取る事が出来ません。熱いのでどの渴きも辛いですが…。

(トイレ行きたくなったらどうしよう)

かなり切実な問題でした。……本当に如何しよう。

寝る前にトイレに行く等の対策を取って、一週間ほど乗り切りました。と言うか、物凄くキツイです。

この一週間は二人の説得に、多くの時間を費やしましたが、全く聞き入れてくれませんでした。

アナスタシアからは「兄様は、あたしのこと嫌いななの？」の一言で、物の見事に返り討ちです。カトリアは話を聞いてくれるのですが、無言で目を合わせられただけで返り討ちキブアツブに……。

この時私は、睡眠環境の改善にばかり心血を注いでいました。しかしそんな私に、カトリアが不満を感じているのに気付く事が出来なかったのです。

考えてみれば当然と言えるでしょう。勇気を出して同衾に踏み切ったのに、相手が自分を意識しないどころか、快適な睡眠をとる事ばかり考えているのですから。女性側から見れば、酷い侮辱と感じて当たり前です。カトリアは私の心を読めるので、私の辛さを分かってくれているようですが、それで不満が無くなる訳ではありません。目に見えて私への挑発行為が増えて来ました。

そして、とうとう地雷が爆発する事になったのです。誰が踏んだかは、私には分かりませんが……。

「ねえ ギル。しない？」

突然カトレアがそんな事を言って来ました。ティアは分かりませんが、隣ではアナスタシアが寝息を立てています。

「するって、何をするのですか？」

私は分かっているても、しらじらしく聞き返しました。

「セックス」

やっぱり。……と言うか、今回はストレートですね。

「駄目です。婚前交渉は厳禁です。第一、アナスタシアとティアが居るので出来ません！！絶対に無理です」

「二人とも寝ているから大丈夫よ。それに、来年の三月中にする約束じゃない」

カトレアの切り返しに、ぐうの音も出ませんでした。私はなんて約束をしてしまったのでしょうか。……凹みます。

この時カトレアは言葉による攻めだけで、実際に事に及ぼうとはしませんでした。当然と言えば当然と言えるかもしれませんが、カトレアも花も恥じらう乙女です。競う相手がいなければ、ゆっくり交際（恋愛）したいのでしょうか。（競う相手が、交際相手の実の妹

と言つのが問題ですが)

一通り私をからかうと、カトレアは寝息を立て始めました。私はそれに安心して眠りにつきました。しかし、私とカトレアは気付きませんでした。この時アナスタシアが起きていた事に……。

次の日の朝目を覚ますと、アナスタシアは既にいなくなっていました。珍しい事もある物だと不思議に思っていました。朝食の席でディーネに思い切り睨まれました。

ディーネにその理由を聞いても、言い淀むばかりで教えてくれませんでした。原因はその日の夜に思い知らされる事になったのです。

- - - ドリユア家別荘 - - - SIDE アナスタシア

この日あたしは兄様よりも早く目が覚めました。と言つより、殆ど眠れなかったと言つて良いと思います。原因は昨日聞いた、兄様とカトレア様の会話です。

兄様とカトレア様が、セックスと言つ物をするらしい。それ自体は、あたしには良く分からけど……。問題は、あたしとティアちゃん居たら出来ないと言つ事です。

つまり、兄様達がセックスをする時には、あたしとティアちゃんは追い出されてしまう。

それは兄様が、あたしから離れて行ってしまふと言つ事です。

……認めない。

とにかく、対策を取らなければなりません。それには、セックスがどういふ物か知る必要があります。最初は本で調べようと思いましたが、それらしき記述がある本は無かったと思います。そうなる
と、誰かに聞くしかないのです。

(取りあえず、ディーネ姉様に聞いてみよう)

あたしは兄様が起きる前に、自分の部屋に戻って着替えるとディーネ姉様の部屋に行きました。

「姉様。起きて」

ディーネ姉様はまだ寝ていたので、起きてもらいました。朝の挨拶を交わし、姉様は目をこすりながら聞いて来ました。

「こんな朝早くから、如何したのですか？」

「うん。聞きたい事があって……」

「分かりました。その前に着替えて良いですか？」

あたしは「着替えながらで良いよ」と答えておきました。すると姉様は、一回伸びをしてクローゼットの方に移動しながら聞いて来ます。

「それで聞きたい事とは何なのですか？」

「うん。……セックスってなに？」

ゴソッ！

なんか、すごい音がしました。見るとディーネ姉様が、クローゼットの扉部分に思い切り切り鼻を打ったみたいです。鼻を抑えながら、崩れる様にうずくまりました。

「姉様！！ 大丈夫！？」

慌てて駆け付けようとしたら、手で制されました。姉様はすぐにヒーリング《癒し》を使い、鼻をハンカチで拭きとりました。どうやら鼻血を出していたみたいです。

「アナスタシア。それを何処で聞いたのですか？」

あれ？ ディーネ姉様の目が怖い。 如何して？

「えーと。 兄様とカトレア様が話してるのを聞いて……」

「ちっ あの馬鹿ツプルが……」

何故か姉様から、とても怨念のこもった声が……。そして、「慎みを……」とか「自制を……」とか、ぶつぶつと言っています。……
… なんか、姉様が怖い。

「あの。 姉様？」

「アナスタシア！！」

「は はい!!」

突然大きな声で呼ばれて、驚いてしまいました。

「その事は人に聞いてはいけません」

「え……でも」

「アナスタシアもいざれ知る事です。焦る必要は有りません」

姉様のこんな反応は初めてです。今まで聞いた事は、丁寧に答えてくれたのに如何して？

「特に!!」

ビクッ

「男の人には絶対に聞いてはいけませんよ」

ディーネ姉様が、かつて無いほど怖いです。結局その場で、セックスの事を誰にも聞かないと約束させられました。

(情報源が無くなっちゃった)

ディーネ姉様の部屋から出たら、あたしは頭を抱えちゃいました。

「アナスタシア様 アナスタシア様」

とても小さな声で、あたしを呼ぶ声が聞こえました。その声の方を向くと、メイドがあたしに手招きをしていました。確かディーネ

姉様付きのメイドで、アリアとか言う使用人だったと思います。

(そう言えば、このアリア、アリス、アミラの三人で、ディーネ姉様が三馬鹿メイドとか言って怒っていた様な……)

警戒心が先に立ちましたが、途方に暮れていたあたしは付いて行ってしまいました。

――ドリュアス家別荘――SIDE アナスタシア END

今日は珍しくアナスタシアが絡んで来ませんでした。当然カトレアの機嫌も良く、久しぶりの平和な一日を満喫していました。この分なら夜も……等と淡い期待を持ってしまいました。

その期待が裏切られたのは、寝る前にアナスタシアが私の部屋に突入して来た時でした。

アナスタシアは、私特製の猫さんプリントの子供パジャマでは無かったのです。いわゆるネグリジェと言うスケスケのパジャマでした。……ハッキリ言って、いつもの子供パジャマの方が可愛いです。

「お兄様。寝屋を共にいたしますわ」

「「???.……???.」」

私とカトレアの頭の中に？が乱舞します。それと言うのも、物凄く似合っていないのです。本人は大人の女性を意識しているようですが、ハッキリ言ってダメダメです。それはもう、憐みを誘うほどに

……。或いはロリーな人なら喜ぶかもしれませんが。

「……アナスタシア」

「ん？ なぁに」

アナスタシアは、腰をクネツと動かしてウインクしました。その動き一つ一つが、妖艶から可愛いや微笑ましい等を通り越して残念感満載です。

「何か拾い食いでましたのですか？」

そんな声をかけてしまった私は悪くないと思いたいです。隣でカトレアが、顔を手で抑え「あちゃ〜」と言うポーズを取りました。

「ひ 拾い食い！！ 兄様！！ それ如何言う事！！」

アナスタシアの変な動きが無くなり、顔を真っ赤にして怒り始めました。「ふうう〜！！」猫の威嚇の様なポーズをとるアナスタシアは、先程の珍妙な動きより百万倍可愛いです。

「兄様！！ 酷い！！ 酷い！！」

文句を言いながら詰め寄って来たので、私は笑って誤魔化します。隣でカトレアが笑いをこらえて、プルプル震えていました。

アナスタシアが落ち着くのを待ってから、照明を落として横になります。寝位置はいつもと変わらなかったなので、相変わらず私は熱くて眠れません。

暫く眠れずにいると、アナスタシアが私から離れごそごそと何かやり始めました。カトレアが私の手をぎゅっと握って来たので、カトレアも眠っていないようです。

そうしている内に、アナスタシアが私に覆いかぶさって来ました。

「ア アナスタシア？」

「あれ？ 兄様起きていたの？」

それと同時に、カトレアが物凄い力で私の手を握って来ました。ハッキリ言っただけです。

「ねえ、兄様」

「なんですか？」

「セックス しよつ」

私はこの瞬間。思考が完全にフリーズしました。

(我が妹は、いったい何を言っているのでしょうか？)

それはカトレアも同様らしく、何のリアクションもありませんでした。その状況を良い事に、アナスタシアは私の顔に顔を近づけて来ます。

フリーズ状態から復帰した私は、寸前の所でアナスタシアの凶行を防ぎました。アナスタシアの顔を押し返し、強引にアナスタシアをベッドの上に座らせませす。そこでアナスタシアが全裸で有る事に

気付き、毛布を羽織らせました。私はアナスタシアの正面に座り、立会人の様な位置にカトレアが座ります。

……さて、何故この様な凶行に及んだか尋問&お説教タイムです。

「アナスタシア。今自分が何をしようとしたか、分かっているのですか？」

私は怒りを押し殺しながら、問いかけました。

「セックス」

とてもシンプルな答えが返って来ました。

「その行為の意味を知っているのですか？」

「えっと、男の子のお股についているのを固くして、あたしのお股の穴にいれる事って聞いたよ。とっても気持ち良くて、仲の良い男女なら誰でもやっているって。女の子の処女って言うのをあげると、男の子はすっごく喜ぶって教えてもらった」

……ピシィ。

(人の大事な妹に、要らん事教えたのは……ダレダ)

私は深呼吸をして、怒りを抑えつけます。

「それは誰から聞いたのですか？」

アナスタシアの視線が私からそれ、カトレアにとまりました。

「えっ！！ 私！？」

「カトリアアアア！！」

今の私は殺気や怒気等、あらゆるものを撒き散らしているのでしょう。アナスタシアはガタガタと震え、カトリアは必死に首を左右に動かします。

「違う！！ 私じゃない！！ 私はギルを怒らせる様な事や、ライバルを増やす様な事は絶対にしない！！」

（ん？ それもそうですね）

カトリアに向けた視線を、アナスタシアに戻します。と同時に、カトリアはこれ以上巻き込まれたくないのか、少し身を引きました。

「アナスタシア。……正直に答えないと」

私の平坦な声が響くと同時に、アナスタシアは千切れんばかりに首を縦に振りました。

「セックスと言う言葉自体は、昨日兄様とカトリア姉様が話しているのを聞いて……」

私がカトリアを睨みつけると、目を逸らされました。

「で、朝になってから、ディーネ姉様に聞いたの」

「ディーネが不機嫌だった原因はそれか！！」

私は思わず声を出していました。そこでふと冷静になると、ディ―ネがその手の事をアナスタシアに教えるとは思えません。と言うか、それ以前に”教えられるほどの知識があるか？”が疑問です。

「で、後は誰に聞いたのですか？」

「えっと、秘密にするって約束したから……」

どうやらアナスタシアは、教えた相手を喋らない心算の様です。ここで強引に聞きだす事も出来ませんが、と言うかアナスタシアが言わなくとも調べ上げて、説教した上にボコります。それよりも「兄妹でそう言う事をしてはいけない」と、教えなければいけません。

「それよりも、親兄妹でそう言った事はしてはいけないのです」

「うん。それは教えてもらった。でも理由は教えてくれなかった。どうしてなの？」

アナスタシアが首を傾げながら聞いて来ました。最低限の倫理的な、事は教えてあるのですね。

「セックスとは子供をつくる為の行為なのです」

「そうなの!？」

目を輝かせるアナスタシアに、私は溜息が出てしまいました。

「出産はそれ自体が危険なのです。そして、アナスタシアみたいに女性側の体が出来ていないと、危険度は一気に跳ね上がります。私

はアナスタシアに、そんな危険な事をして欲しくありません」

私は一瞬だけカトレアを見ました。今言った事は、そのままカトレアにも当てはまりません。適正年齢は16歳位からと聞いた事があるので、年齢的には問題ないかもしれませんが、カトレアには病と言ふ爆弾が付いています。

「何より血が近い者同士の子供は、何らかの障害が出やすいのです」

「えっ？ 障害？」

障害と言ふ言葉に、アナスタシアは呆然としていました。

「アナスタシアは、自分の子供に不自由させたいのですか？ また、そう言った理由から親兄妹でのセックスは、社会的にもタブーとされています」

マギが以前聞いた事がある、近親相姦をタブーとする理由の一つを披露します。と言っても、何処まで本当か分からないあやふやな物ですが、アナスタシアを納得させるには仕方がありません。まあ、後はお国柄によって、タブーとする理由や範囲が増えたりしますがこれが一般的な理由だと思えます。

アナスタシアは私が言った事を吟味し、ゆっくりと理解して行きます。

「好きな男が出来たら、遠慮なくアプローチしろって言ったのに……。障害が大きければ大きいほど燃え上がるって……。身分や立場なんて関係ないって」

……ビキッ ピシピシイ。倫理の説明は確りとしているのに何故？と、思っていました。それを全て台無しにする様な事も吹き込んでいた訳ですね。

（ハハハハハッ 犯人殺しちゃうかも……と言っか、犯人男なら殺す）

「これ程危険で重大な事を、中途半端に教えられたのです。もはや面白半分と言われても、仕方が無いでしょう。そんな人を庇う理由は有りませんよ」

何か……アナスタシアが青い顔をして、ガタガタと震えています。が寒いのでしょうか？

「アナスタシア。誰に教えられたのですか？」

「……でも」

約束した以上、アナスタシアも簡単には言えないのでしょうか。

「……言え（ボソッ）」

つい言葉と共に、殺気等の黒い物が漏れてしまいました

「アリア、アリス、アミラの三人です」

アナスタシアは口を滑らせてくれました。やはり我が身は……です。ね

「ほう。あの三馬鹿メイドか。……兄はちょっと出かける用事が出

来たので、アナスタシアはカトレアと仲良くここで寝ているのですよ」

そう言って私がベッドから降りると、アナスタシアはカトレアに抱き付きました。二人揃ってガタガタ震えているのは何故でしょう？ よく見ると、ティアもカトレアの後ろに隠れています。

(おっと、杖を忘れないようにしないと……)

私は杖を持って、部屋を出ました。

「どうしよう。兄様が、あの三人殺しちゃう」

部屋を出て三歩目で、アナスタシアの音が聞こえました。

(殺しはしないから安心だよ)

「はっ アナスタシア！！ ギルに聞こえているわ。これ以上怒りを煽ると本当に不味いわ」

それっきり、部屋の中から声が聞こえなくなりました。

(取りあえず三人を、O H A N A S H I 死に逝きますか……。確か三馬鹿メイドは、四人部屋で同室でしたね)

……ドリュアス家別荘……SIDE デイーン

昨日は朝からアナスタシアに、とんでもない事を聞かれた上に、

予想外の答えに、私の口から間抜けな声が漏れました。

「……何があつたのですか？」

「聞かない方が良いと思います」

「ここまで来ると、聞かない方が怖いです」

アルメルは溜息を吐くと「分かりました」と返答をしました。

そして、その口から飛び出した話の内容に、私は頭を抱えてしまいました。

(取りあえず、アルメルは部屋の移動をさせましょう。それから、私もギルだけは絶対に怒らせないようにしよう)

私はそう固く誓いました。

……ドリユア家別荘……SIDE　ディーネ　END

最近使用人達が、やたらと私を怖がるようになりました。流石に半年間の減俸は、やり過ぎだったでしょうか？　情状酌量の余地(一応、親兄妹ではタブーと教えていた)があつたので軽くした心算だったのですが……。実際に三馬鹿メイドは、泣いて喜んでいたので問題ないはずです。アルメルを含め、嚴重に口止めておきました。アナスタシアの相手が、私である事もアルメル含め三馬鹿には教えていません。(アナスタシアが相手を誘惑中に、私に見つかった事にした)

注 ハルケギニアの常識では、貴族を怒らせれば待つているのは死です。ドリユアス家では、そんな事が無いと分かっているのも、三馬鹿メイドは死を覚悟してしまいました。（それだけギルバートの怒りは凄まじかった）そして、最後の瞬間と思つた時に響いたのが、滅俸の一言（咆哮？）です。この状況では、拍子抜けするか助かつた事に喜ぶかのどちらかでしょう。三馬鹿は後者でした。ちなみに、この一件でギルバートはシスコンとして認知されました。……合掌。

それとも、三馬鹿の恐怖をあおる為だけに用意した拷問道具（石抱き）が原因か？ それを部屋に残して来た事でしょうか？ それとも去り際に「迂闊なあなた達なら、すぐにでも使う事になりそうなので、このまま部屋に置いておいてください」と言つたのが不味かつたのでしょうか？ まあ、考えても分からない事は、考えるべきではありませんね。

あれから、本格的にアナスタシアの意識改革に乗り出し、兄が取られるのではなく姉が増えると認識させました。アナスタシアは単純だったので、（時間をかければ）割と簡単だったと言わせて頂きます。手段については黙秘しますが……。

カトレアとアナスタシアに、互い世話させるようにして私の負担を減らすようにしました。アナスタシアも上手くカトレアに懐いてくれたので良かったです。（ベッドの中でアナスタシアを、対カトレア用の盾にできますね）

しかし残念な事にアナスタシアは、その日の気分で私、カトレア、ディーネの三人と一緒に寝る様になったのです。私の所に来れば、後にカトレアも来て三人（+ティア）で寝る事になります。カトレアの所に行ってくれれば、私の安眠が約束されます。しかし、ディ

「ネの所に行かれると、ベッドの上でカトレアと二人（+ティア）になってしまいます。」

「そう、好きな女とベッドの上で二人になるのです。正直に言わせてもらえば、何度理性が崩壊しかけた事が……。ティアが居なければ、絶対に手を出していると断言できます。」

「もう手を出しても……と、思わなくもありませんが、私は意地になっけていました。肉体年齢はカトレアの方が上ですが、精神年齢は私の方が圧倒的に上なのです。主導権にこだわる心算はありませんが、完璧に尻に敷かれるのだけは勘弁なのです。そして手を出した途端に、カトレアに一生頭が上がりなくなると言う確信が私にはありました。」

「と言う訳で、カトレアの誘惑をティアに意識を集中する事により回避します。しかしいくら有効だからと言って、多用したのが不味かったです。カトレアがティアを、ベッドの上から排除する行動に出たのです。」

「最初はティア用のベッドのプレゼント攻撃から始まりました。しかし効果が無く、カトレアは次々と新しい手を打ちましたが、その全てが尽く失敗に終わったのです。途中からティアも、カトレアの意図を理解したらしく、その関係はどんどん悪化して行きました。」

「そしてこうなる事は、必然だったと言えるでしょう。私の目の前で、カトレアとティアが睨み合っています。（身から出た錆とは言え、この状況は辛すぎます）」

今、気に入くない女と相對してゐる。出会つた当初は、主の未来の奥方と言ふ事で敬意を払つておつたが、あるう事か吾の寢所を奪おうとしてゐるのじゃ。これは我にとつて絶対に譲れぬ。

「二人とも喧嘩は……」

「ギルは黙つていて」「主は黙つておれ」

「はい」

主が仲裁に入ろうとしおつたが、吾もこの女に少し言つてやらねば気が済まぬ。それは、この女も同じ様じゃ。生意気にも吾を睨みつけて来おる。

「私はギルの妻になる女よ。夫婦の寢屋に邪魔者が入つて来ないで」

「誰が邪魔者じゃ。第一、まだ夫婦では無かるう」

目の前の女が眦を、一瞬だけ跳ね上げおつた。

「それよりも、主が望んでおらぬのに關係を迫るのは如何かと思つ
のじゃが」

フンツ。眉間に皺が寄りおつたわ。

「ギルも本心では、私との關係を望んでいるわ。世間体や遠慮が邪魔して、素直になれないだけよ」

自信たっぷりで言い返して来おったか。主も男じゃから、女が欲しいと思うのは当たり前前じゃ。それにこの女は、主の頭の中を覗けるし嘘がないのはよく分かる。主の方を一瞬だけ見たが、目を逸らしたのが事実である何よりの証拠じゃのう。

「あの、出来ればその辺で……」

主がまた口を挟んで来おったが、一睨みして黙らせる。

「男なら女が欲しいと思って当たり前じゃ。性欲で物を語るな 色ボケ」

「……い 色ボケ!!」

おお、顔を真っ赤にして怒っておるな。

「夫が大切ならば、夫の都合を考えるのも妻の役目じゃ」

言い返せぬようじゃ。

「夫が後先考えて我慢しておるのに、妻を名乗る者がその足を引っ張るとは何事じゃ」

女は悔しそうに、身を震わせておる。しかし何故吾が、物の道理を説かねばならんのか。

「男なら女を欲して当たり前じゃ。それが分かっているながら、手が出せない相手を生殺しにするのは、妻のやる事ではないのじゃ」

そこまで言って、目の前の女がブツブツ何か呟いているのに気づ

いた。

「……猫のくせに」

「なに」

「正体は韻竜のくせに！！ 女としてギルの相手が出来ないからって、やっかまないでよ！！」

激昂した女の言葉に、感じた事が無い怒りが込み上げてきたが、その言葉の真意を理解した途端に冷水を被った様に怒りが消え失せ、代わりに出て来たのは得体の知れない不安じゃ。

「どうせ貴女は、人間に変化出来ないでしょう」

吾は口を挟む事も、反論する事も出来なくなっておった。

「猫のままなら、今まで通り抱きしめてもらえるのだから」

吾の心が理解不能の軋みを……悲鳴を上げる。

「韻竜のくせに、ギルを男として見ているしね」

そんな事は……。 (止めてくれ……。それ以上は……)

「人間に変化した途端に、私に勝てなくなるから当然よね」

「カトレア！！」

主が女を怒鳴り付けた。じゃがもう遅い。吾の心の奥に隠れてい

た物は、既に抉り出された後じゃ。女は主に怒鳴られ、俯き動こうとせぬ。主は我を如何すれば良いか戸惑っている様じゃ。

「クツ……フフ、ハツハハハハハハハハ」

吾は笑っているのが己である事に、内心で驚きを隠せぬでいた。

(勝てぬじゃと？ 吾を舐めるな)

「我をまといし風よ、我の姿を変えよ」

吾は澱みなく変化の術を使っておった。

……ドリュアス家別荘……SIDE ティア END

先程までティアが居た場所には、一人の人間の女性が居ました。

漆黒の艶のある髪。

透き通るどこまでも白い肌。

全体的に細いのに、出る所は出ている肢体。

そして何より、吸い込まれそうなほど澄んだ深紅の瞳。

正直に言わせてもらえば、私は見とれていました。

一糸纏わぬ姿なのに、そこに淫靡さの欠片も無く、まるで完成された芸術品を見ている様な感覚でした。

「如何じゃ？ 人間時の我も美しかろう」

そこで初めて意識しました。この女性は、間違いなくティアの間に変化した姿だと。

「ギル！！ 見ちゃ ダメーーーー！！」

ガスッ

再起動したカトレアに、思い切り顔面を殴られました。自分だつて見とれていたくせに。

第四十八話 桃黒戦争勃発！！妹は耳年増（後書き）

初の携帯投稿です。

しかし、パソコンの方が圧倒的に楽です。

携帯は、操作が慣れません。

今後は、素直にパソコンを使います。

ゴメンナサイ。

次話で桃黒戦争は終結します。

そして、その次はいよいよ塩爆弾の爆発です。

ご意見ご感想お待ちしております。

三馬鹿メイドの扱いが不味いと、ご指摘が有ったので修正しました。
ご指摘ありがとうございます。

第四十九話 桃黒戦争決着！！どうしてこうなった？（前書き）

今回はでっち上げ設定が入っています。

カトレアが更に壊れます。

読む際はご注意ください。

原作のカトレアを否定する気はありません。

その点だけは、ご理解お願いします。

第四十九話 桃黒戦争決着！！どうしてこうなった？

こんばんは。ギルバートです。どうしてこうなったのでしょうか？ 私は鼻血を治療しながら、漠然と考えてしまいました。私の後ろではカトレアが、嫌がるティアに無理やり服（私が製作したカトレアのシャツ型予備寝間着）を着せています。

「こんな煩わしい物等、着ていられんわ！！」

「良いから着ていなさい！！ 慎みは大切よ」

どの口がほざくのでしょうか？

「ギル？」

「なんでもありません！！」

カトレアの殺気が凄い事になっています。とても逆らえません。

「この服胸がキツイのじゃ」

「！！」

あっ、カトレアが絶句しています。

「胸回りは余っておるし……胸ほどではないが、尻も少しキツイの
う」

ティア。それ以上は止めてあげてください。

「主。服を着たので、こちらを向いても良いぞ」

許可が下りたので、ティアとカトレアの方に向き直ります。ティアはベッドの上に胡坐をかき、腕を組み挑戦的な笑みを浮かべています。大きな釣り目は、自信に満ち溢れていました。（パジャマの胸部分が、はちきれそうになっているのは見なかった事にしておきます）

一方カトレアは、ティアの隣でうずくまり落ち込んでいる様です。

「あー カトレア。大丈夫ですか？」

取りあえず、落ち込んでいるカトレアに声をかけます。ついでに（原作を見る限り、ちゃんと成長するから大丈夫なのです）と、心の中でフォローも入れておきます。

ティアが少しムツとしている様ですが、カトレアを放って置く訳には行きません。

「ギル」

カトレアが顔を上げ、うるんだ瞳ですがる様な視線を向けて来ました。そんな目で見られたら、今すぐ抱きしめたくなくなってしまいます。

「カトレ……」

「主……！」

はい。ティアから待ったが入りました。まあ、私も木の股から生まれた訳ではないので、ティアが何故止めに入ったかは分かっています。と言うか、ティアが人間に変化した時の状況を考えれば、分からない方がどうかしています。過去（マギの時）に、これ程もてた事など無いのです。（相手が覚（妖怪）と韻竜では、何処まで喜んで良いか微妙ですが……）

「ギル？」

私の思考を読み取ったカトレアが、先程と打って変わって冷たい視線を向けて行きました。妖怪と言う思考が、お気に召さなかった様です。状況の変化について行けないティアは、ただ眉をひそめる事しか出来ません。

「この程度で怒っているのは、心を読めるという特性上、私との恋人生活。延いては、夫婦生活などとても出来ませんよ」

私はさらつと云つてのけます。カトレアは眉間に皺を寄せましたが、ティアも自分が全くついて行けない状況に、機嫌が急降下中の様です。

「カトレア。ティアは私の使い魔です。私の妻になるなら、ティアとの友好的な関係は必須事項と思えますが……」

カトレアが不機嫌な顔をして、そっぽを向きました。

「ティア。カトレアは私の妻になる女です。私の使い魔としてやって行くなら、カトレアとの友好的関係は絶対に必要です」

ティアの目が更につり上がり、眉間に深い皺が寄りました。

「私の言葉が理解できたなら、仲直りの握手をしてください」

私の言葉に二人は、不承不承と言った感じを隠そうともせず握手をしました。すると握手の途中で、二人の顔が引き攣った笑顔に固定され、手を放そうとしないのです。不思議に思っただけ見ると、お互いの手を握り潰そうとしていました。（ずいぶん体育会系な事をしますね）

私は溜息を吐くと「はい。それまでです」と言って、二人の手を放させます。手を放した後、カトレアが握手した手をさすっていたので、力はティアの方が強いみたいですね。しかし……。

「二人とも……」

埒が明かない事に怒りを覚えた私は、怒気を乗せた視線を二人に向けました。しかし二人は、視線を私と合わせようとしませんでした。

（本当に埒が明かないですね）

そう感じた私は、二人を抱き寄せます。

「ギル!?」「主?」

そのまま二人を担ぎあげると、ベッドから降り歩き始めました。

「ギル!! 降りして」「主」

ティアは大人しくしていますが、カトレアは嫌がって暴れます。

「暴れると（頭から）落としますよ」

私の一言で、カトレアが大人しくなりました。流石に女性二人を担ぐとなると、鍛えているとはいえ10歳の子供の肉体では辛いのです。と言うか、担げるだけでも凄いです。（マルウエンの首輪のおかげですね）

「ギル。何処へ行くの？」

カトレアの質問を黙殺して、廊下に出て向かった先はカトレアに割り当てられた部屋です。そのまま部屋に入り、ベッドの上に二人を降ろしました。カトレアは私の頭の中を読み取ったのか、涙を浮かべ首を横に振っています。一方ティアは、訳が分からず不安そうな顔をしていました。

「カトレアとティアが仲良く出来ないなら、仲良く出来るまで私の部屋への入室を禁じます。二人は仲良くなるまで、ここで一緒に寝てください」

私は笑顔で言ってあげました。そして……。

「もし私の言いつけを破ったら」

そこで何故か、カトレアがガタガタと震え始めました。そんなカトレアの様子に気付いたティアは、盛大に顔を引き攣らせます。

「罰を与えます」

とびきりの笑顔で……。しかも、平坦な声で言ってあげました。

何故か二人は首を必死に縦に振っています。分かってくれたなら良かったと思いい、私は自分の部屋に戻りました。今後、ゆっくり眠れる日が増えそうです。

と思いましたが、前言撤回します。ベッドに横になって気付きましたが、もふもふ分が全然足りないのです。物凄く寂しいのです。代替えの人形でも作るのかな……。

……ドリユアス家別荘……SIDE ティア

どうしてこうなったのじゃろう？ 言わずとも、隣で呆けておるバカ女との喧嘩が原因なのじゃが、とても納得出来ぬ。

「おい。色ボケ。主の前だけでも取り繕う事を提案するが」

吾の言葉に、女が眦を釣り上げながら反応する。しかし、すぐに首を左右に振り冷静さを取り戻しおった。

「ダメよ。表面だけ取り繕っても、ギルにはすぐに気付かれるわ」

色ボケが顔を青くしながら、首を左右に振りおった。確かに主の様子から、そのような事がばれたらどうなるか分かった物では無いのは事実じゃ。

「何か代案はあるのかの」

「代案以前に、私達の折り合いさえつけければ良いわ。それさえつけられれば、ギルが怒る理由は無いわ」

意外に冷静じゃ。状況も見えておる。どうやら吾はこの女を過小評価しておつたらしい。……色ボケは撤回するべきか？

「どの様に折り合いをつける心算じゃ？」

「徹底的に話し合うしかないでしょう。私は妻として、貴方は使い魔として、お互い引き返せない所まで来ているし、……引き返す気も無いのでしょうか？」

真顔で感情の無い答えを返して来おつた。冷静……いや、もはや冷徹と言つても良い。吾の隠れた心をえぐり出した時が、まるで嘘の様じゃ。いや、今の方が本性じゃな。となると、この女にとって主への思いは、それほどまでに深く重いと云う事になる。

何れにせよ、色ボケは完全に撤回じゃ。この女は間違いなく、主の前では猫を被つておる。何故あのような猫を被っているか、聞き出さねばならぬがそれは後じゃ。

「当然じゃ」

「私は譲る気は無いわよ」

感情の無い声が帰つて来る。やはり強敵じゃ。吾は油断せぬように、心を引き締めてかかる事とした。

二時間ほど話し込んだじやろうか？ 吾は先程感じた物が事実である事を知つた。女は要所要所で、感情を露わにしおつた。その度

に首を左右に振り、深呼吸をして感情を落ち着かせる。

所作や感情を露にする状況・言葉から、この女の性格や主をどの様に思っているか情報は集める事が出来たが、肝心の話は平行線じやった。

(この女が主に向ける思慕は、凄まじいの一言じゃな。いや、もはや妄執と言っても良いかもしれぬ)

吾は忌憚なくそう思った。と同時に、何がこの女をここまで駆り立てるかが理解出来ぬ。それを理解出来れば、この話し合いで優位に立てるやも知れぬな。この女は主の心が読める事に、大きな自信を持つておる。と同時に、その事に大きな不安を持つておる様じゃ。ならばその辺りをゆさぶり、本心を引き出すのが良いか……。

「ふんっ!! 汝^{なれ}では、主の事をどこまで理解できているか疑問じやな」

「それって負け惜しみかしら? 私ほどギルを理解出来る人はいないわ」

女の顔は自信に満ち溢れておる。

「それは主の心を読めるからじゃろう」

「そ そうよ」

一瞬揺らいだな。ここから、更に踏み込む。

「主の秘密を知っているだけで、本当に理解していると言えるのか

の？」

「理解しているわ」

揺らぎが消え、自信たっぷりな答えであった。どうやらこの部分は関係ない様じゃ。

「主の頭の中を覗いているくせに良く言うわ」

女の笑みは崩れぬな。主の頭の中を覗く事に、罪悪感はない様じゃ。この様子では、主も頭を覗かれる事に嫌悪感は無さそうじゃ。ここが一番怪しいと思っておったのに……困ったの。

「まあ、コントラクト・サーヴァントしてしまえば、吾も人の事は言えぬがな」

女の心臓が跳ねおった。表情や所作に一切出さずに。如何言う事じゃ？ 吾がコントラクト・サーヴァントをすると、この女に何か不都合でもあるのか？ 考えられるのは契約の際の接吻か？ 主の頭の中にこの女にとって不都合な物があるか？ いや、これまでの話の流れでそれは無い。となると、この女の力とコントラクト・サーヴァントで決定的に違う物がある？ そこに閃く物があった。

「じゃが汝と違って、コントラクト・サーヴァントでの契約後は、吾と主の間に秘密など存在せぬからの」

「それは……」

この女の心を読む力は、コントラクト・サーヴァントによる繋がりもはるかに強い。しかし、その力は何処まで行っても一方通行じ

や。

……やはり正解じゃな、女が動揺し始めおった。

「吾は汝の様に、主に秘密を……」

「ち 違う!! 違う!! 決めつけないで!!」

女の口から飛び出したのは、反論では無くただの感情であった。こうなれば勝負は決まったも同然じゃ。

「何が違うのじゃ? 一方的に、主の頭の中を覗いているだけのくせに」

女が「違う!!」と繰り返し、喚きながら頭を振る。

「明日にでも、主とコントラクト・サーヴァントするのでしょうか」

吾が勝ち誇った様に言うと、女の動きが止まった。

「……ない」

女の口から何か言葉が漏れたが、かすれていて聞き取れぬ。

「……させない。絶対にさせないんだから!!」

コントラクト・サーヴァントを妨害する気が。それが発覚すれば、主に嫌われるのは目に見えておるのに……。

「主に嫌われたく無くば、止めておくのじゃな」

吾は余裕を持って答えたが、女は必死に逆転の目を考えておる様じゃ。

「誰かが先に契約してくれれば……」

女があり得ない事を呟きおった。吾を呼び出せるメイジが、そうおるとは思えぬ。なにより吾は主以外の者と、契約する気は無いのじゃ。

「ダメ。呼び出せる人が……」

女は完全に正気を失っておりおるな。冷静にせねば話しにならぬが、この様子では吾が何を言っても逆効果じゃ。今日の所はここまでにすべきか？

「そつだ!! 私^{さだめ}が呼び出せば……」

また、女があり得ない事を呟きおった。視野狭窄におちいり、冷静な判断も出来なくなっておりおる。今日はもう話にならぬと判断し、ベッドより立ち上がった。主の言いつけではあるが、この女と共に眠る等我慢ならぬ。吾はベッドから降りて、歩こうとした。(人間の体は歩き辛い。猫の姿に戻るかの?)

「我が名はカトレア・イヴェット・ラ・ボーム・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール」

四苦八苦しながら数歩進んだ所で、女の声が響いたのじゃ。

「五つの力を司るペンタゴン。我の運命に従いし、”使い魔”を召

喚せよ」

それがサモン・サーヴァントの呪文と気付き、止めようと振り向いた時は既に銀色の扉が現れおった。主に「カトレアに絶対に魔法を使わせないください」と、言われておったのに不覚じゃ。

しかし、吾は固まっている場合では無いのじゃ。女が魔法を使ったらどうなるか、主に良く聞いておる。追い詰めたのが吾である事を考えると、こうなったのは吾の責任じゃ。早く水の秘薬を飲ませて、女の体調悪化を軽減せねばならぬ。吾は水の秘薬が入った薬箱を探して、部屋の中を見回すと……。

「なっ！！」

吾の真後ろ……いや、先程まで向いて居た方に銀色の扉があった。再び女の前を見ると同じ扉がある。

（あの女！！ 吾を引き当てたのか！？ 信じられぬ！！）

しかし、更に吾を驚愕させる事実が存在したのじゃ。そう、それは扉に感じる感覚じゃ。「ゲートに召喚者の雰囲気……イメージの様な物が映されておる」と、主に言った事がある。実際主の時に感じたのは、深い共感と暖かさじゃった。当然今回のゲートも例外ではない。

しかしこのゲートに感じるのは、あの女のイメージであるにもかかわらず、主の時を遥かに超える共感じゃった。このまま何も考えず、ゲートをくぐってしまいたいと思うほどに。

吾がゲートを前に呆けておると……。

トンッ。

突然背を押されたのじゃ。人の体に慣れぬ吾は、碌に抵抗する事も出来ずゲートに吸い込まれる。犯人が誰なのかなと言つまでも無かるう。

気付いたら吾は、先程のベッドの上に座りこんでおった。召喚のゲートを慣れぬ身体でくぐった所為か、目が回り身体に力が入らぬ己が身体の状態を確認しておると……。

ギシイ。

ベッドが軋む音がし、音の方を向くと、あの女が吾に手を伸ばしている所じゃった。当然、今の身体の状態では、抵抗出来ずにベッドに押し倒される。

あの女は吾の体に覆いかぶさり、吾の足の間に身体を滑り込ませる。押し返そうと試みたが、やはり抵抗らしい抵抗にならぬ。そこであの女の顔を見た我は、また驚かされた。顔色はまるで死人の様に真っ青で、脂汗が浮かび呼吸も荒くなっておった。

(不味い!!! この女に死なれては困る!!!)

しかし、如何する事も出来ず……。

「わ 我が名は カトレ ア・イ ヴェット・ラ・ポー ム・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァ リエール。五つの力を司るペン タゴン。この者に祝福を与え、我の使い魔となせ」

女が途切れそうな呪文を唱え、吾の唇を奪いおった。そしてその場で力尽き動きが止まった。グツタリとしてはおるが、生きておる様じゃ。荒いが息もしておる。

「……があ あああ」

そこで吾の体を、激痛が襲いおった。痛みあまり女をはねのけ、一番痛む右腕の付け根を左手で抑える。歯を食いしばり耐えていると、すぐに痛みはひいたのじゃ。袖をめくり確認すると、右肩から肘にかけてルーンが刻まれておった。

(これで吾は、この女の使い魔か)

そう思うと、望まぬ契約を強いられた事に怒りを覚えたのは必然と言えよう。それはもはや、殺意と言って良いかも知れぬ。この女をくびり殺してやりたいと言う衝動に駆られたが、ルーンが反応し吾の怒りは霧散し消え失せた。

(……ルーンによる強制力か。じゃが今は、冷静になる助けとなつたと考えておこう)

吾はカトレアをベッドに仰向けにし、状態を確認する。

(危険な状態じゃ)

すぐに周りを確認して、ベッドの脇に秘薬が入った薬箱を見つけ。薬箱から水の秘薬を取り出し、瓶のふたを開けるとカトレアの口突っ込んだ。しかし、秘薬の殆どがカトレアの口よりこぼれてしまう。

「チツ……世話の焼ける」

二本目の水の秘薬を取り出すと、カトレアの口から秘薬の瓶を引っっこ抜く。そこでためらった吾は、けして悪くないと断言するのじや。

「一度も二度も同じじゃ!!」

吾は水の秘薬を自らの口に含むと、カトレアの口に流し込み無理やり嚥下させる。と同時に、吾に流れ込んでくる物があった。それはカトレアの記憶じゃった。二本目の秘薬を全て嚥下させた所で、カトレアが主に告白した所まで流れ込んで来おった。そして、”原作知識”と言う名の爆弾には吾も度肝を抜かれたのじゃ。この時点で、先程感じた共感の理由は痛いほど良く分かったのじゃ。

それよりもカトレアの容体を確認して……。

「足りぬな」

吾は二本目の秘薬に手を伸ばした。そして先程と同じ様に秘薬を嚥下させる。と同時に、またカトレアの情報が吾に流れ込んで来た。

ギルに告白した。返事は聞かなかったけど、絶対に良い返事が聞ける確信が私には有った。もちろん理由は幾つかある。

ギルは心が読めると言う事実、困りはしても嫌悪感を抱かなかった。最初に抱いていた私への恐れも、消えていたのも嬉しい。…厄介だとは思っているみたいだけ。

そして、ギル自身はどう思っているのかは、私にとってこの上ない結果が出たと言っても良い。

ギル自身は、無意識の内に”原作知識”という重過ぎる重圧に苦しんでいた。それは当然だろう。世界と言う重圧を背負い、誰にも相談できないのだから。そして”登場人物”である私達に、大きな引け目を感じている。最初は絶望感に苛まれていた様だが、知つてなお側に居ようとする私を、無意識に求める様になっていたのだ。

だから、ギルには私しか居ない。

いずれギルは、私と言う存在を渴望する様になる。

……私はこの時そう確信していた。

ギルが領地に帰り、私はこれからどうすべきか考えた。ギルと幸せに暮らすには、現状でまだまだ問題が多過ぎる。特に現ドリュアス家に、敵が多過ぎるのが問題だ。ギルはドリュアス家の立場を確立し、屈服させるには高くつくと敵に認識させ争いを避ける心算の様だ。なら、私も未来の妻として、出来る限りの支援をするのは当たり前だろう。

最初に行ったのは、マギ商会への支援だった。直接的な支援は、周囲の反感を買う為出来なかったが、私に出来る限りの事はさせてもらった。

一番印象に残っているのは、やはり木炭の一件だろうか。

ドリュアス家が木炭の生産を始めたと知った私は、時代遅れ燃料

になった木炭のイメージを変える手伝いをする事にした。工業用燃料としての立場をコークスに奪われ、その価値を大きく落とした木炭だったが、ギルから得たマジ知識で家庭用燃料としての素晴らしさは知っていた。私はその素晴らしさを、一部の者達に吹き込んだのだ。ちよつとした手伝いのつもりだったが、予想外に大事になりちよつと怖くなったのは秘密だ。マジ商会の対応の早さには、正直驚かされた。あとは、食事の質が上がったのが個人的に嬉しかった。

後印象に残っているのは、マジ商会とは関係ないが、領地運営の手伝いに補佐官を派遣した事だ。

精霊と契約し新しい領地を得て、突然ドリユアス家の領地対応が鈍くなったのだ。報告を受けた私は、お父様をお願いして、信用出来る優秀な補佐官を派遣してもらった。

結果は最高だったと言える。補佐官は運営体制を上手く改善し、ドリユアス領主一家の負担を大幅に軽減して見せたのだ。当初の目論見を超え、ギルへの最高の支援になった。このおかげで、別荘に呼んでもらえるのが早まったのは、この上ない幸運だったと思う。

ギルへの支援は、私に出来る最高の事が出来たと自負している。

しかし私は、”原作知識”と言う名の禁断の果实を食べてしまっていた。それが猛毒であると気付いたのは、ギルが帰って暫くしてから的事だった。

この時私は、もつとギルに好かれる女になりたいと思い、原作の私について考えてしまった。”原作の好きなキャラ”のトップクラスに、自分の名前があったのでそれは当然の行為と言えたと思う。

しかし原作の私（ギルに出会わなかった未来の私）に、私は疑念を持ってしまった。その疑念は徐々に膨らんで行き、やがて私を戦慄させる事になったのだ。

……原作の私は、たくさんの動物達に好かれ連れていた。

この私は、人と向き合うのに疲れていたのだと思う。裏表のある人間の相手に疲れ、正しく好意を示せば純粋な好意が返って来る動物に逃げたのだ。

……原作の私は、ルイズとサイトの関係を助ける良き理解者だった。ある意味において、これは事実だろう。だが、この私は二人が結ばれる事により、ルイズと自分を重ね自分を慰めていたのだ。ハッキリ言えば……代償行為だ。

ルイズとサイトを逃がす為に、跳ね橋の鎖を《錬金》で柔らかい土に変えていた。そう、公爵家の門に使われる跳ね橋の鎖を……だ。当然あの鎖には、《固定化》の魔法が掛けられている。実際に確認をとって見たが、ラインクラスメイジの《固定化》が掛けられているそうだ。それを打ち破る程の《錬金》を使えば、私の体が如何なるかなど考えるまでも無い。死ななかつたのが不思議なくらいだ。

後に「お姉さんになってあげる」と言っただけサイトを抱きしめたのは、慰めると同時にサイトがルイズの好きな人であると言っただけがある。しかしその時に、サイトと抱き合ったルイズの気分を味わおうとしていたのだ。

考えれば考えるほど、本来たどる筈だった自分の未来が惨めな物に思えて来る。もちろん今の私の考えが、全くの見当外れの可能性も有る。……いや、むしろその可能性の方が高いのだろう。しかし私は、今の考えが正しいと確信してしまった。

ギルを好きにならなかった自分。ギルと出会えなかった自分。それは私にとって、絶望の象徴になってしまった。そしてその絶望は、ギルと上手く行かなかつたらと言う可能性にまで及んだ。

大丈夫だ。私にはギルしか居ない。だけど、ギルにも私しか居ないのだから。

……そう思っけていても、やはり不安は消えない。それに、物語では無いので、結ばれてハッピーエンドで終わりでは無いのだ。その後の事も考え、ある程度素の姿を見せておかなければ、結婚後に関係が破綻してしまう。

こうなつたら、ギルの人格や隠れた性癖を突き詰め、恋人や妻として相性の良いタイプを調べるべきだろう。幸いな事に人を見る力のおかげで、比較する情報はかなり多いのだ。やってやれない事は無い。幸せになる為なら、手段なんて選んではいられないのだ。

……結果は、私を打ちのめすに十分な物だった。

ギルが一番似て……と言うか、全く同じタイプだったのは、ギルのお父様のアズロック様だった。

一言で言えば、女に振り回されて喜ぶタイプ。Mに聞こえるがちょっと違い、普段は女の我儘や手が出てても笑って許し、心の広さを見せ付ける事で満たされるタイプだ。しかしそれだけでは無く、時々性格が反転し物凄く意地悪になる時があると言うおまけ付きだ。

ちなみにアズロック様の場合は、ベッドの上で豹変する。しかも

苛めた分だけ苛め返されるので、シルフィア様は普段からアズロツク様にきつくあたる様になったみたいだ。ハツキリ言っただけでシルフィア様は、アズロツク様に調教されたと言っただけで良いと思う。

流石親子と言えるかもしれないが、正直に言っただけで、そんな所は父親に似なくて良いと思う。しかもこれは、私にとって非常に不味い結果と言える。理由は簡単だ。私の身近に、ギルとこれ以上ないと言っただけで良い程に相性が良い人が居るのだ。……それも二人も。

その二人とは、エレオノール姉様とルイズだ。（母さまもだが、ここは除外する）特にエレオノール姉様は不味い。普段高飛車で実は臆病な所など、ギルとの相性が良すぎる。姉様もギルの聡明な所を気に入っているみたいだ。何かの拍子に、全て持って行かれるかもしれない。

……ここは外堀を埋めて、周りから割り込まれない様にしよう。

口を放しカトレアの様子を見る。どうやらもう危機は脱した様子だ。吾はそのまま寝間着の袖で互いの口元を拭い、カトレアに毛布をかける。様子から察するに、これでもう問題無かるう。

（何か覗いてはいけない物を、覗いてしまった気がするのう）

そして吾は無意識の内に、左手で使い魔のルーンを撫でておいた。これでもう、主の使い魔になれぬのかのう。そう思うと悲しくなってきた。

カトレアは”原作知識”と言う、他に絶対に覆せない切り札があ

ったのじゃ。それにも拘らず、主の争奪戦に負ける事を恐れておった。……そして現れたのが吾か。カトレアにとって、必勝だったはずの手札が全て上を行かれ、絶望を感じておったのじゃろうな。

吾はそこまで考えて溜息を吐いた。

「未練じゃな。……カトレアの様に足掻ければ良かったのじゃが」

そう呟いてから、もう一度溜息を吐こうとして吾の動きが止まった。

(本当に二重契約は、不可能なのかの)

カトレアを通じて知った主の使い魔考察の中に、二重契約の可能性があった。机上の空論にすぎぬが、主との契約は不可能ではないのかもしれない。まして吾は、主にサモン・サーヴァントで呼び出されておる。行けるやもしれぬ。

そして吾は、今の状況で主とコントラクト・サーヴァントした場合の可能性を考えたのじゃ。

一つ目の可能性は、コントラクト・サーヴァント自体が発動しない可能性じゃ。この場合は、主と唇をかわせただけで良しとしておこう。

二つ目の可能性は、コントラクト・サーヴァントが発動しルーンを刻む痛みに、吾が耐えられない可能性がある事じゃ。原作のサイトは、一度契約が断たれ再契約をしておる。しかし、一度に二つのルーンを刻んだわけではない。韻竜たる吾でも耐えられる保証など無い。

(つまり今の吾に求められるのは、主との繋がりを得るのに命を賭けられるかどうかじゃ)

そこまで考えてから、吾は立ち上がり主の部屋へ足を向けた。

「うそく虚毒……か」

吾の口から、知らず知らずの内にその言葉が漏れておった。

……ドリュアス家別荘……SIDE ティア END

……ドリュアス家別荘……SIDE カトレア

白い始まりの竜が居た。

竜はその強大な力から王として君臨していた。

好きに喰らい好きに滅するその姿は、まさに暴君と言って良かっただろう。

そんな暴君にも、転機と呼ぶべき事件が発生する。

それは、暴君に挑んで来た憐れな存在の最後の言葉だった。

「もう一度家族に……」

普段の暴君なら、気にも留めなかっただろう。しかしその憐れな存在は、暴君に手傷を負わせるといふ快拳を成し遂げていた。暴君にとっては、100年に一度有るか無いかの珍事だった。故に暴君

がそれに興味を持ったのは、必然だったのかもしれない。

暴君は”カゾク”について調べた。

しかし、調べれば調べるほど下らないと断じた。断じておきながら、調べる事を止めようとはしなかった。

そしてまた転機が訪れる。

暴君は空腹を感じ狩りに出た。その日の獲物は番のオスとメスだった。オスはメスを連れて逃げ回るが、暴君から逃げ延びる事は不可能だった。やがて体力が劣るメスが動けなくなり、暴君は食事に移る心算だった。しかし、まだ逃げる体力が残っているはずのオスが、逃げずに暴君に挑んで来たのだ。

その顔は恐怖に歪んでいた。だのに目だけは、強い覚悟を湛えていた。何時か見た憐れな存在と同じ目だった。この時暴君は、獲物を前に初めて動揺した。

そして、オスが滅茶苦茶に振りまわした棒が、偶然暴君の鼻面に当たった。暴君はそこで正気に戻ったが、もう食事をする気分ではなかった。

巢に帰った暴君は理解してしまった。……暴君は孤独だったのだ。

孤独は知ってしまった者にとって虚毒こくとなる。心を侵し蝕む猛毒だ。

その毒に耐えられなくなった暴君は、自らの力を分かち仔を生む事にした。分かたれた力は、火・水・土・風のそれぞれ言の葉を操

る竜へと転じた。

こうして暴君は母となったのだ。

母に見守られ、仔は育ち新たな仔を産み一族となった。

そして母は、力を分けた事により完全な存在ではなくなっていた。老いるはずの無い身体は古い、朽ちるはずの無い姿は朽ちて行った。そしてその先に待っているのは、……死だった。

多くの仔に見守られ、かつて暴君と呼ばれた竜は息を引き取った。最後に母が仔達に望んだのは、火・水・土・風の一族の短所を補い合い、未長く幸せに暮らしてほしいと言う物だった。

しかし仔達は、母の願いを裏切る事になってしまふ。母と言う統率者を無くし、性質の違いから一族毎に分かれ争いを始めてしまったのだ。

この争いを良しとしない者達は、争いを止める為の手段を考えた。そして行きついたのは、母の代わりになる者を作り出す事だった。四種族が母から分かれた力から生まれたなら、四種族全ての混血は母と同じ存在と考えたのだ。

しかし生まれた仔は、母の色である純白では無く漆黒だった。

竜達はこの仔を最後の希望としていただけに、その絶望は大きかった。争いは止められるものでなくなり、多くの竜達の血が流れた。そしてこの歴史は、竜達の間で忌避され忘れ去られた。

気が付いたら吾は一人だけじゃった。

頼るべき親も……身内と呼べるものも存在しなかった。

本来なら生きて行けずに、死をむかえるのが自然な事だったのじやろう。しかし吾は、自らの生まれの秘密と生きる為の最低限の知識を、既に知っておった。これは吾の親が、精霊を介し吾に授けた物の様じゃ。その親も吾を逃がす為に、もはや生きていないのじやろう。

吾の生まれの秘密を考えれば、同族に見つかればただで済むとは思えぬ。しかし吾の漆黒の鱗は目立ち過ぎる。何かに《変化》するのが良いじやろう。そこで吾は、最初に見かけた猫に化ける事にしたのじゃ。

最初の数年間は飢えとの戦いじゃった。この身は本来韻竜じゃ。当然、存在感は半端ではない。少しでも気を抜けば、獲物に存在を感づかれ狩りは失敗じゃ。当然吾は腹を空かせ、食べられる実やキノコ等で飢えをしのいでおった。この時ほど、親が残してくれた知識に感謝した事は無いじやろう。

そして吾は狩りにも慣れ、飢えを味あわずに済むようになった。しかし吾は幼いとは言え、韻竜と言う規格外の存在じゃ。野生の獣は吾を恐れ、友と呼べるものは出来た試しが無かった。

孤独は虚毒とは良く言った物じゃ。

野生の獣は吾を恐れ、韻竜と対峙できる魔獣や幻獣からは敵として警戒され、人間は吾を売り物として欲した。(毛並みの良さが原因らしく、実際売り飛ばされたが即日逃げ出してやった。喋って獣

人扱いされ、討伐対象になった事もあるが逃げ切つてやった)

吾は話し相手を求め、さまよう様になっておつた。

そんな生活が、何百年……何千年経つたじやろうか？

突然吾の前に、銀色の扉が現れたのじゃ。

その扉に感じたのは、深い共感と暖かさじゃつた。そしてそれは、この扉の向こうに居る者から感じる感情じゃと気付いた。その瞬間、吾は扉に飛び込んでおつた。

「今 見た夢 は……」

私は起き上がり、ボーっとする頭をはっきりさせるよう努めた。

「私……生きている」

そんな声が漏れてしまった。気を失う前に、自分がどれだけ無茶な事をしたか思い出すと、背筋が寒くなった。冷静では無かったとは言え、私はなんて事をしてしまったのだろう。

「ティア は……？」

自分が無理やり契約してしまった相手は、部屋の中に居なかった。

「探して謝らないと」

フラフラとベッドから起き出すが、身体がだるくてまともに動かせない。

「居るとすれば、ギルの所しかないわ」

私はベッドに横になりたい衝動を抑え、ギルの部屋に歩き始めた。

- - - ドリユア家別荘 - - - SIDE カトレア END

もふもふ感が足りない。

おかげ様で全然眠れません。ヌコモードのティアちゃんカムバツクです。(アナスタシア抱き枕でも代用可) と言うか、本当に禁断症状が出るかもしれません。……ヤバいです。

「代替え人形が冗談じゃ無く本気の話になりそうです」

誰かに見られたら、変態扱いされそうですが背に腹は代えられません。いつそ開き直って、もふもふーで低反発な抱き枕を、本気で作るのも良いかもしれません。素材は……。

真剣に抱き枕の製作を検討していると、部屋にキーンとドアが開く音が響きました。そして、入って来たのは……。

「ティア？ 如何したのですか？」

人の姿を取るならノック位して欲しいです。礼儀作法を叩きこむ必要がありますね。それよりも私の言いつけを破って、ティアが私

の部屋に入つて来た事が驚きです。

「如何しても今直ぐしなければならぬ事が出来ての」

私那不審に思つてゐると、ティアは危なっかしい足取りで私の所へ来てベッドへ腰かけます。

「しなければならぬ事とはなんですか？」

下らない内容なら、叩き出した上に明日お仕置きですね。

「コントラクト・サーヴァントをして欲しい」

ティアは簡潔に答えました。声にはふざけている印象は、一切ありませんでした。しかし、何故今なのかと言ふ疑問はあります。

「何故今すぐなのですか？」

「今直ぐじゃ」

私の疑問に答える心算は無いみたいですね。そしてティアの目からは、覚悟の様な物が伝わってきます。コントラクト・サーヴァントを後回しにしたのは、あくまで私の我儘からです。ティアが強く望んでいるなら、私には断る事が出来ません。

私ほそれでもあきらめきれず、ティアを説得しようと思つて声をかけました。しかしティアは、頑として譲らなかつたのです。（この様子では、いくら聞いても答えてくれませんね）

「分かりました」

私は了承し、枕元に置いてある杖を取ります。するとティアはベッドに上がり込み、私の前に座ると私の寝間着の裾を右手でつかんで来ました。

「ティア？」

ティアの態度が本当におかしいです。

「主。早くしてくれ」

しかしこのままでは、色々な意味でやりにくいのです。

「猫の姿にも……」

「早く……！」

どうやらティアは、猫に戻る心算は無い様です。今のティアからは、必死さが痛いほど伝わってきますので、ここは言うとおりにする事にしました。……ティアの迫力に負けたとも言いますが。

「我が名は、ギルバート・アストレア・ド・ドリユアス。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我の使い魔となせ」

私が呪文を唱え終ると、ティアが私に覆いかぶさるように唇を重ねて来ます。そして頭が両手で固定され、唇を重ねたまま押し倒されました。私はあわててティアの両肩を掴み押し放します。

私とティアの口が、唾液の糸を引きながら離れました。

流石に悪戯が過ぎると思った私は、文句を言ってやるかとティアの顔を見て……言葉が続きませんでした。

ティアは弱々しく微笑んでいたのです。儚げに……まるで死んでしまふかのように……。そして次の瞬間。

「があ ああ ああー ああー ああー ああー！」

ティアが左腕の付け根を右手で抑えながら、私のベッドの上でのたうちまわります。苦しみ方が尋常じゃありません。

「ティア!?!」

私が如何すれば良いか分からずにいると、ティアは苦しみのあまり上の寝間着を引きちぎりました。寝間着が布切れと化し、ティアの上半身があらわになります。

「ルーン!?!」

ティアの右肩から肘のあたりまで、既にルーンが刻まれていたのです。しかしティアが、痛みで抑えているのは、そのちょうど逆側の左腕の付け根だったのです。

「これは……」

そしてティアの爪が、その美しい肢体に食い込み赤い筋を作り始めました。私はティアを引き寄せ、正面から強く抱き締めます。しかしそれで痛みが紛れるほど甘い状況では無かったです。ティアは尚も暴れ、私はそれを懸命に抑えつけました。やがてティアは、私の寝間着を掴んで引きちぎり、終には私の背中に爪を突きたて始

めました。

「ぐう」

痛みの所為で、私の口からうめき声が漏れます。

……それからどれくらいの時間が経ったのでしょうか？ ティアは痛みが引いた様で、暴れるのを止め純粹に私に抱きついて居ました。

「もう大丈夫ですか？」

ティアは口を開かずに、僅かに頷く事で返事をしました。まだ喋るのは辛い様です。私はズキズキする背中を極力気にしないようにしながら、ティアの背中を優しく撫でました。するとティアは私に顔を弱々しく押し付けて来ます。猫の時と変わらぬ仕草ですが、今のティアは人間の姿……極上の美女なのです。互いに上半身裸で、胸が直に当たっているのです。しかも先端が固くなつて……。

（気のせいです！！ 意識してはいけません！！ 理性が崩壊します！！）

私が一人で己の本能と格闘していると、突然部屋のドアが開いたのです。

……ドアを開けたのはカトレアでした。

さて、今の状況を整理してみましょう。

私とティアはベッドの上で、（上半身）裸で抱き合っています。

そして私の背中には、無数の引つかき傷があります。これを見たカトレアは、どう思うでしょうか？

……終わった。

地獄の一晚が開けました。

「シー ムウー ムー」

私のベッドの上で呻いているのは、猿轡をされ芋虫のようにぐるぐる巻きに縛られたカトレアです。そろそろバーサクモードを脱してくれると嬉しいのですが。

カトレアの隣では、力尽きたティアが眠っています。上半身裸なので、毛布をかけてあげました。……目の毒なので。

「カトレア。いい加減に落ち着いてください」

カトレアは病の身で、如何してここまで元気なのでしょう。嫉妬による精神力の増大が、体力にまで影響したのでしょうか？ 謎は深まるばかりです。そして一つ分かった事があります。カトレアの心を読む力は、カトレアがある程度平静で無いと使えないのです。おかげ様で、頭の中身を見せて即誤解を解く作戦が使えません。

「ムー シーン ムーンー」

カトレアが何を言っているか、さっぱり分かりません。分かるのは未だに冷静でない事だけです。

私は如何した物かと、頭を抱えてしまいました。カトレアに冷静になってもらわないと、ディーネやアナスタシアに白い目で見られそうです。そろそろ朝食の時間ですし……と、その時。

ガチャ

「ギル。昨晩は騒がしか……」 「兄様」

噂をすれば影と言う奴でしょうか？ ディーネとアナスタシアが私の部屋に突入して来ました。恐らく、心配して様子を見に来てくれたのでしよう。と言っても、騒ぎに巻き込まれるのが嫌で、終わった頃を見計らって来るのは如何かと思えます。そんな二人は、部屋の状況（ぐるぐる巻きの猿轡カトレアと見知らぬ黒髪美女）を見て、仲良くフリーズしています。

（また……ですか）

ディーネとアナスタシアは、何事も無かった様にそのまま部屋を出て行きました。ここで逃がせば、誤解を解くのが更に面倒になります。私は二人を手早く捕獲すると、部屋に引きずり込みました。

「ギル！！ 姉にまで手を出すのは……」

「兄様！！ 兄妹じゃしちやダメって……」

もう、面倒くさいです。私は二人をベッドの上に放り投げました。

「グホッ な 何事じゃ!？」

アナスタシアが寝ているティアに命中しました。起きてくれたなら好都合です。ありったけの殺気と怒気を、四人にぶつけてあげました。 ついでに、ドアにロックを部屋にサイレントをかけます。

「まずは状況の把握が最優先ですね。カトレアの猿轡を外してください」

ディーネが頷き、カトレアの猿轡を外してくれました。

「まずはカトレアからです。カトレアの部屋で、ティアと何があったか話してください」

私がティア（黒髪美女）に視線を向けながら問いかけると、ディーネとアナスタシアは目を見開き固まりました。

「え！？ この人 ティアちゃん？」

「……精霊魔法の《変化》ですか」

ディーネとアナスタシアに、ティアが「応」と威勢良く頷きます。一方でカトレアは、何故か青い顔をしていました。

「カトレア。体調が悪いなら、水の秘薬を持って来ますか？ 夜中にあれだけ大暴れしたのです。無理はしない方が良くもしませんよ」

心配になった私は、カトレアに優しく声をかけました。芋虫状態だから、格好は付かないけど。

「ち 違うの……」

「カトレアは、吾と無理やり使い魔契約したから後ろめたいのじゃ」

ティアが口を挟んで来ました。

「え でもティアちゃんは兄様の……」

「そんな事が可能なのですか？」

ディーネとアナスタシアが疑問の声を上げました。その気持ちは良く分かります。

「実例として目の前に、使い魔のルーンを二つ持っているティアが居るのです。それは認めるしかないでしょう」

ディーネとアナスタシアは、ティアのルーンを確認し頷きました。更に別の所も見ている様な気がしますが、そっちは私には関係ないので放置させて頂きます。と言うか見捨てます。

「それで、どんなルーンを引き当てたのですか？」

ディーネが興味津々と言った風に聞いて来ました。

「私の方は《共鳴》ね」

カトレアは自分が刻んだルーンを見上げながら答えました。芋虫状態では話が締まらないので、取りあえず解いてあげます。

「感覚共有系の最上位ですね。五感だけでなく思考・知識まで共有できます」

ディーネがやたら饒舌です。

「それで私の方は……あれ？」

なんか不味い物を見た様な気がします。

「如何したのですか？」

昨日寝てないのが原因かと思い、目をこする私にディーネが話しかけて来ました。

「いえ……見間違いかと思ひまして」

言い訳する私を押しつけて、ディーネが私のルーンを調べ始めました。

「えーと……ぶん……分で、こつちが れ……い 霊ですね。《分霊》では使えませんね」

見間違いじゃありませんでした。精霊達が使っていた《分霊》と同じ効果があります。通常は使い魔の力が足りず、発動する事が出来ない役に立たないルーンです。しかも激レアな為、発動を補助する為の対策が確立されていません。しかし、ティア程の存在なら発動出来るでしょう。過去に発動可能な例は殆ど無いので、バレたらアカデミー王立魔法研究所が五月蠅いですね。

「ティア。感覚で構いません。分霊は作れそうですか？」

「一体のみなら可能じゃ」

ディーネの動きが止まりました。ここは放っておいた方が良いでしょうね。アナスタシアは良く分かっているのか、凄い!!!と繰り返し返すばかりです。

「アナスタシア。今の内容は重要機密なので内緒でお願いします」

「はい!!!」

元気に了承してくれました。ルーンに少し興味があるので、試しに使ってみますか。

「ティア。《共鳴》は発動出来ますか？」

「応」

ティアは頷くと、精神を集中し始めました。そこで私が感じたのは、違和感でした。まさかとは思いますが……。

私は自分の右頬を抓って見ました。

「「いだだだだ」」

カトレアとティアの口から、悲鳴が漏れました。確定です。

「《共鳴》の範囲は、私も含まれるようですね。発動出来るのはティアだけですか？」

私の言葉にカトレアが「私も発動出来るわ」と言っ、笑顔を浮かべました。有効範囲で発動出来ないのは、私だけですか。

(これからは一方通行じゃない!! それに……) byカトレア

カトレアの思考が次々に伝わって来ます。そしてその中に看過できない物がありました。

(する時も発動するつもりですか? 突っ込まれる感覚なんて絶対に知りたくありません) byギル

(良いじゃない。私男の子の感覚って知りたい) byカトレア

(吾もじゃ) byティア

カトレアとティアが、互いの顔を見て嬉しそうに微笑みました。が、私は絶対にウンとは言えません。首を横に振りながら……。

(私は絶対に嫌です!! 《共鳴》を発動するなら私は絶対しません) byギル

カトレアとティアが溜息を吐きました。私はそんなに自分勝手な事を言っているのでしょうか?

(仕方ないのう。主がそんなに嫌がるなら、こちらが妥協するしか無かるう) byティア

(そうね。仕方ないわ) byカトレア

本当に良かったです。結婚前にセックスレス決定なんて冗談じゃありません。私はホッと、安堵のため息を吐きました。と言うか、今のやり取り何か変じゃありませんでしたか?

(……寸前や最中に発動すれば良いし) byカトレア

(うむ。その通りじゃ) byティア

カトレアの意見に、ティアがうんうんと頷きました。

(お前らとは何があっても絶対にしない) byギル

カトレアとティアが「あつ」と、声を揃えました。この二人と事に及ぼうものなら、男の尊厳が木っ端みじんに吹っ飛びます。私は手で大きくxを作りながら、首を横に振りました。と言うか、状況から考えて、君達が仲良しな理由が分かりません!!

「兄様。さつきから何をやっているの?」

ここでアナスタシアが口を挟んで来ました。私は「何でもないよ」と言いながら、アナスタシアの頭を撫でました。カトレアとティアが不満そうな表情を浮かべていましたが、この件に関しては絶対に譲りたくありません。とにかくこの話題は終了です。(結婚前からか……凹みます)

「次は《分霊》ですね。ティア。使えますか?」

「問題無しじゃ」

ティアは髪の毛を一本ぬき、それを触媒にして分霊を顕現させる心算の様です。ティアが意識を集中し始めると、精神力がごっそり持って行かれるのを感じました。カトレアは平気な顔をしているので、精神力を持って行かれているのは私だけの様です。

そして分霊が成功しました。ティアの前に、見た目12歳位の銀髪の子が居たのです。髪の色と年齢以外はティアにそっくりです。(ティアは見た目20歳位)

見た目は良いとして、全裸なのはどうかして欲しいです。と思つたら、カトレアが毛布で即対処してくれました。手際が良くなつて来ましたね。

「ティア」

「「なんじゃ」「」

本体と分霊が、同時に返事しました。

「紛らわしいですね」

「なら、分霊用の名前を考えてみたらどうかしら」

カトレアに言われて考えてみました。

(ティアがティアマトーから取ったから、それにちなんでマトー…は無いな。真っ白な感じがするからシロ…も無いし。そう言えばマジの時に好きだった格ゲーのキャラに凄く似ているな。耳の形が普通だけど)

等と考えていると、突然カトレアが「レンで決定!!」と言い出しました。一瞬反対しようと思いましたが、この名前がしっくりくるのも事実です。私は少し抵抗があった物の、受け入れる事にしました。頭にシロと付かなかっただけマシと言う事にしておきましょう

う。

「そうですね。名前はレンで良いです」

私がそう言うと、ディーネとアナスタシアはレンを構い始めました。

「それよりカトレアは、身体は大丈夫なのですか？ ティアが分霊を作る際に、私は精神力をこっそり持って行かれたのですが」

「私はそんな事無かったけど？」

カトレアが不思議そうに首をひねりました。

「吾一人の力では、分霊を作るのは辛いのでな。主の力を使わせてもらった。カトレアは倒れられても困るので、力を使う事は出来ぬ」

そう言う事ですか。……反省ですね。

ルーンの力を使うのに、主側の精神力を消費すると言う発想はありませんでした。これはカトレアを危険にさらしたと同義です。猛省ですね。

少し気になったので、その日の内に、人目のつかない所でレンの竜の姿を確認しました。

……結果は純白の白竜でした。

私、カトレア、ティアの三人は、思い切り苦笑いする羽目になったのです。

ちなみに、レンの猫モード（チビ白猫）は物凄く可愛かったです。思わず純白のリボンをプレゼントしてしまいました。

今回の一件以降、カトレアとティアの仲が気持ち悪い位に良くなりました。二人が私を見ながら笑っていると、寒気が走るのは何故なのでしょう？

それと、二人にはお仕置きをしなければなりません。カトレアは、使い魔強奪未遂と不要な魔法を使った罪で、ティアは勝手に危険な事（二重契約）をした罰です。しかし《共鳴》がある以上、下手なお仕置きは出来ませんね。

……困りました。いつその事、精神的にガリガリ行きますか。（注　DSモード突入中）

第四十九話 桃黒戦争決着!! どうしてこうなった? (後書き)

お待たせしました。更新です。

前後半に分けただけなので、もっと早くできる予定だったのですが結局こんな遅くなってしまいました。

申し訳ありませんです。

今回は韻竜に関して、でつち上げ設定が有ります。

ティアが強すぎないか、ちよつと心配です。

更に言うと、カトレア壊し過ぎたでしょうか？

可愛くする心算が、余計怖くなっているような……。

虚毒という表現を思いついた時は、テンションあがりました。

しかし調べてみると、既に使われていました。有名どころに……。
とても悲しかったです。

ご意見ご感想お待ちしております。

突然ですが、一部キャラクターイメージを報告します。

ディーネ セイバー (f a t e)

ティア 月海 (セキレイ)

黒髪で赤眼に変更

レン 白レン (メルブラ)

耳の形が普通

アナスタシア アナスタシア (エウシュリー・アナスタシア)

羽・猫耳なし バケツ無し (重要) 黒髪・黒目

反論は認めますので、違うと思っただ方は突っ込みをお願いします。

第五十話 塩爆弾爆発！！でも私は不在です

こんにちは。ギルバートです。本来ならカトレアとティアのお説教をしなければならぬのですが、外せない仕事があった為に一睡もせずに仕事に行きました。(ドSモード全開なので、部下達はとばっちりを盛大に受けました)そして、帰ったら速攻でボタンキューです。(寝不足と過労が一気に出たらしい)

目覚めてから真っ先に行ったのは、カトレアとティアを探す事でした。私の部屋に居なかつたので、明け方だった事もありカトレアの部屋へ行きました。そこに居たのは、仲良く抱き合って眠っているカトレアとティア(人間ver)でした。

……ムカツ

ええ 叩き起こしましたとも。熟成された怒りが大爆発です。

覚醒していない二人を強制的に正座させて、思い切り殺気と怒気を叩きつけてあげました

「二人とも目が覚めましたか？」

私は殺気と怒気を緩めることなく、カトレアとティアに言ってあげました。一気に覚醒した二人は、青い顔をしながらコクコクと頷きました。

「さて。私になぜ怒っているか分かりますね？」

私が笑顔で聞くと、二人はお互いを抱きしめ合いカタカタと震え

始めました。その仲良しな反応に、私の怒りは加速します。

（昨晚あれだけの事をしておいて、その仲良しっぷりは如何言う事ですか？）

とにかくお説教です。そして喉が疲れたら、無言でプレッシャーをかける事にしました。それから秘密のお仕置きをさせていただきました。内容は秘密です。ちなみに（肉体的な）拷問の類ではないと言っておきます。一応相手は女の子ですし。

私の気がすんだのは、太陽が昇り昼を若干過ぎた頃でした。

「まあ、今回はこれくらいにしておいてあげます」

私の説教終了宣言に、二人は物凄く喜びました。

「ティア。私たち生き残ったわ」「ああ。吾と汝は、あの地獄を生き残ったぞ」

喜びを分かりあおうとした二人は、まだ地獄が終わってない事に気付いていませんでした。二人はお互いを抱きあおうとして、ぱったりと倒れたのです。

「あ 足が……足が痺れ」「足が……吾の足が……」

あれだけ長時間正座をさせられれば、こうなるのは当然でしょう。

「ギギル。た 助けて」「主……」

涙目で助けを求める二人を見ていて、つい苛めたくなくなってしまっ

たのは私のせいではないと思います。

「あれ？ ギル。何を……」

不安の声を上げるカトレアに極上の笑顔を見せると、足を突いてあげました

「ひゃあ~~~~ん やめ やめて」

必死に懇願するカトレアをよそに、私はカトレアの足をさわさわと触り続けました。

カトレアのやめてという懇願を無視し続けていると……。

「やめて やめないとー!!」

「やめないとどうすると言うのです?」

急に強気になったカトレアに、私は余裕たっぷり聞き返しました。

「ふんぎゃ~~~~!!」

「きゃあ~~~~!!」

「ふにゃ~~~~!!」

返答が来る前に、三者三様の悲鳴が響きました。カトレアが《共鳴》を発動したのが原因です。私は二人の痺れをまともに受け、悲鳴を上げ倒れました。カトレアとティアは、互いの分の痺れを上乗せされ悲鳴を上げる羽目に……。今後カトレアを苛める時は、こういった反撃を想定しなければならぬと学びました。

ちなみにこの時、居間にて白い少女が突然「ぎにゃー！ー！！」と、悲鳴を上げながら倒れ屋敷内が騒ぎになったのを後で知りました。

- - - SIDE ティア - - -

暫く床に転がるはめになったが、何とか体が回復したのじゃ。主とカトレアもじゃれるのは構わぬが、吾を巻き込むのはやめてほしいのじゃ。

そして待ちに待った昼食なのじゃ。朝食は説教でつぶれたので、空腹の吾には至福の一時に……ならんかった。

主とカトレアが、吾が人の姿で食事をするのを見て、笑顔で「ティアにマナー教えないとな」「そうね。とつても楽しみ」と言っておった。吾はその笑顔に、恐ろしいほどの寒気を感じたのじゃが、直ぐにこの寒気の正体を思い知らされる事になったのじゃ。吾から言わせてもらえば「辛かった」としか言えぬのじゃ。まあ、主と同じテーブルで食事が出るのは悪くないがの。

昼食が終わり、主は仕事に出かけたのじゃ。主を見送り吾は息をつけると思っておった。

「ティアちゃん。ちょっとお話があるの」

カトレアはそう言うと、返事も聞かずに吾を引きずり自室に連れ込んだのじゃ。

「で、話とはなんじゃ」

「ギルの事よ」

カトレアの目は真剣じゃった。この吾が気圧されるほどの決意も感じたのじゃ。すぐにでも話は始まると思っておったが、カトレアは軽く息を吐くと紅茶を入れ始めたのじゃ。吾はこの動作から、話し始めれば長くなると感じ、吾は黙ってテーブルに着き、カトレアが紅茶を入れ終わるのを待ったのじゃ。やがて吾の前に紅茶が出され、カトレアは吾の正面に腰かけた。

「私達の関係ってなんなのかな？」

唐突にカトレアが質問して来た。その視線は紅茶を見詰めたままじゃった。

「使い魔とその主じゃろ」

カトレアが吾を見て居なかつたので、客観的事実のみを口にした。

「主と呼ぶのはギルだけのくせに」

ようやくカトレアの視線が吾に向いた。その表情は複雑その物で、感情を読み取る事は出来なかった。

「事実じゃろ」

「それもそうね」

カトレアは小さくため息をつきながら応じた。

そしてゆっくりとした動作で、紅茶を一口飲みカップを戻す。

吾はそこにカトレアの迷いを感じた。じれったいとは思ったが、吾はただ待つことしかできなかった。やがてカトレアは眼を閉じ、決意を固めると口を開いた。

「私とギルとティアの関係ってなんなのかな？」

先ほどの質問に主が加わっただけで、吾は答えを返す事が出来なかった。

「じゃあ、ギルとティアは？」

”使い魔とその主”という答えは、自分の中の何かに抵抗されて呑みこんでしまった。

「ギルと私は？」

カトレアの言葉に原因不明の苛立ちが込み上げて来る。気が付くと、思い切りカトレアをにらんでいた。

「ギルが女を欲していて……」

目の前の色ぼけに、殺意がわいた。

「相手をしてってくれって言われたらどうする？」

「えっ!？」

それは吾の中に、まったく想定されていない質問じゃった。

「主がそんな事!」

「私なら喜んで応じるわ」

「!」

吾は答えられなかった。

「ティア。あなたは求められたら、流されて体を許してしまうわ」

「そんなわけ……」

「だって、ティアはギルの事を、男として見ているから……」

吾は反論の言葉が出てこず黙ってしまった。自らの行動や感情を振り返ると、とても否定できぬ状況なのじゃ。いや、むしろ胸にストンと落ちる物があった。しかしそれは、更なる苦悩を呼び込む事となる。主は人間……そして、吾は竜……。

「私ね。欲張りなの」

「何を……」

「ギルも欲しいけど……」

一瞬、主と同じ人間であるカトレアに殺意がわいたが、次の一言でそのすべてが吹き飛んだのじゃ。

「同じくらいティアも欲しい」

一瞬、思考が完全にストップした。えーと……この女は何と言ったのじゃろう？ 熟考し、言葉を噛み砕き、理解しようと努める。

「なな 何を考えておるのじゃ！！ 百合なのか！？ レズなのか！？ 両刀なのか！？ そんな性癖に吾を巻き込むな！！」

「ち ちが……」

「何が違うと言っのじゃ！！」

「……くも無いのか」

吾は思わず椅子を引き、いつでも逃げられる体勢をとる。ダメなら《変化》を解いてでも……。

「私はギルを抱くし抱かれるわ」

カトレアの言葉に、先ほどまで逃げ一辺倒だった思考が180度切り替わる。

「だからティアも、ギルを抱いて抱かれなさい」

「なっ！！（何を考えておるのじゃ……このエロピンクは！！）」

「私はティアなら受け入れられる。ティアも私なら受け入れられるんじゃない？ ……もちろん私に対する性的な意味は除外して良いわ」

釈然としない物があつたが、吾は頷いた。そして頷いてから気付いた。（これで吾もエロピンクの仲間入りか？）

「どの道私達の関係は、死以外で分かたれる事はないわ。なら、受け入れてしまった方が良いわ」

微笑みながら言うてくるカトレアに、吾はため息を吐きながらも頷くしかなかった。そして再びカトレアの顔を見た時、吾は緊張した。先ほどと同じくらい真剣な表情で、吾の顔を見ていたのだ。そしてカトレアの口から紡がれたのは、詩だった。

「虚毒……それは、永劫の虚毒。家族の温もりは無く、弱きものには恐れられ、強き物には敵対される。心を通わせる者は無く、永い永い時を独り……故に汝が背負いし虚毒は、永劫の虚毒と言う。我は誓う。たとえ一時でも、汝の虚毒を癒さん事を」

その詩は誓約じゃった。そして同時に心に来る物があつた。やはりこの女は、吾の主に対応しかつた。この詩に、吾も対応しい詩で返答せねばな……。

「虚毒……それは、死出の虚毒。迫り来る死の感覚は、その者の心を歪め変質させる。心が違い過ぎる者は、温もりを感じあえる距離に居ても、心を通わせる事はかなわず……故に汝が背負いし虚毒は、死出の虚毒と言う。吾は誓う。汝を理解し、その虚毒を払わん事を」

所詮即興じゃからな、良い詩にはならんかつたか。

「……うん。ありがとう」

カトレアは吾の誓約の詩に微笑んでくれた。

「汝の人を見る力は、『理解したい』『理解されたい』という思いの産物である」

突然の吾の言葉に、カトレアは理解が追いついていないようじゃいや、理解しておるのじゃろうが、呑みこめていないと言ったところか。

「じゃから、最も『理解したい』『理解されたい』と思う者に、その力は強く働くのじゃろう」

「!.....そう そうね。その通りだと思う」

カトレアは吾の言葉を呑みこめたのか、ゆっくりと大きく頷いたのじゃ。その顔は実に晴れ晴れとしておった。

「次にギルの事だけ.....」

「主の事？」

カトレアは一度頷き、話し始めた。

「ギルの虚毒は.....」

「「異界の虚毒」」

カトレアが言わんとしていたことが分かったので、つい合わせてしまった。話の腰を折ったにもかかわらず、カトレアは怒る事も無

く頷いていた。

「そう。ギルは元はと言えば、マギの世界の人よ。そして、ディル
「リフィーナで生まれ直してハルケギニアに移された。だからギル
にとって、ハルケギニアは異界なの。ハルケギニアで家族や友人が
出来ても、心の奥にこびりついた『ここは異界だ』と言う思いは、
完全になくなる事は無いと思う。それに拍車をかけて居るのは……」

カトレアが言葉を切ったので、吾はその続きを口にした。

「ゼロの使い魔の原作知識……か」

吾が答えを言うと、カトレアは深く頷いた。

「ギルは異界^{ハルケギニア}で独りになる事を恐れている。だから家族や親しい人
を凄く大切にする。その上自分が関わる事で、原作より不幸な人間
が出てくる事を恐れている。ギルはいつもその不安と闘っている」

吾はカトレアの言に頷く。

「ここまでならまだ問題ないわ。問題はディル「リフィーナの冥き
途よ。ギルは死んでも、そこへ行くだけと言う認識があるわ」

「常人より生への執着心が薄いと言う事か？」

しかし吾の質問に、カトレアは首を横に振って答えた。

「薄いなんてモノじゃないわ。異常よ。自分が死ねば悲しむ人間が
いるのは分かっているのよ。それでも、自分か他の誰かの二択にな
った時、ギルは迷うことなく自分の命を切り捨てるわ」

吾の背筋に冷たい物が走った。主に置いて逝かれる自身の姿が、やけにリアルに浮かんだのじゃ。

「今までは一人で成し遂げるつもりで、躍起になっていたけど、これからはティアにも協力してもらおうわ」

「分かった。吾も全力で協力しよう」

この時を持って、吾はカトレアと同盟を組むことになったのじゃ。竜たる吾は主が先に逝く事は知っておる。じゃが、下らない終わり方だけは認めぬ。

……そう。認めぬのじゃ。

- - - SIDE ティア END - - -

新ドリユアス家本邸が、ほぼ完成しました。後は内装関連なので、家具職人たちに丸投げしても大丈夫な状態です。別荘の方も劇場やスパ等、主要な施設はすべて完成しました。後は人員を確保して、運営するだけです。と言っても、劇場はその人員（優秀な俳優）を確保するのが難しいのですが。

まあ、本邸の事が片付いてかなり余裕が出来て来たので、ゆっくりやっていく事にしましょう。それよりもやっておきたいのが、ディール＝リフィーナに渡って色々と仕入をしたいのです。魔法の道具袋も母上から返還してもらいましたし、向こうで換金する為の貴金屬や宝石も用意しました。空になった体の管理も、木の精霊が協力

を約束してくれました。おかげで私が寝たきりになると言う騒ぎが避けられます。後はタイミングを見て、ディル＝リフィーナに渡るだけです。

竹やスパイス・フルーツ系は、是非仕入たいです。カトレアの治療の為に、性魔術も覚えてこなければなりませんし……。

オイルーンに乗って仕事場（本邸）から別荘へ帰宅中に、そんな事を考えていたら異変を感じました。私があわてて森に隠れると、頭上を大きな船が通りすぎました。百合をかたどったトリスティン王家の紋章が見えたので、恐らく王族が乗っている船でしょう。船の進路から考えると、どう考えても目的地はドリユア家の別荘です。

嫌な予感がした私は、ウエストポーチからティアを引っ張り出すと、《共鳴》を発動してもらいました。目的は別荘にいるカトレアとの念話です。

（カトレア。今大丈夫ですか？）byギル

（大丈夫だけど、どうしたの？）byカトレア

（今頭上を王家の紋章付きの船が通りすぎました。目的地は間違いない別荘です。王家の来客など私は聞いていません。何か分かりませんか？）byギル

（王家？ 私も聞いてないわ。今お父様達が来ていて、大事なお客が来るって言うってたけど……）byカトレア

（王家の来訪を主に隠すなど、何か後ろめたい事がある証拠と思う

が) b y ティア

(王家……後ろめたい……！？ アンリエッタ姫か！！ カトレア。確認できますか?) b y ギル

(やってみる) b y カトレア

カトレアが父上達の所に向かったようなので、目を閉じ意識を集中してカトレアの感覚を拾うように努めます。

「お父様。本日は来客があると先ほどお聞きしましたが、どういった方がいらっしやるのですか？」

「おおつ。カトレアか。聞いて驚け。マリアンヌ様とアンリエッタ姫だ」

(カトレア。私は逃げるので、後の事はよろしくお願いします) b y ギル

(ちよっ……ギル。言い訳くらい考えてよ) b y カトレア

(分かりました。とりあえず会話を引き延ばしてください) b y ギル

(分かったわ。その代わりに、確りした言い訳考えてよね) b y カトレア

(主なら問題なかつ) b y ティア

「どうしたのだカトレア。体調が悪いなら、部屋で休んでいた方が良いのではないか？」

数秒とは言え黙ってしまったカトレアに、公爵が心配そうに声をかけました。

「いえ、マリアンヌ様とアンリエッタ姫の来訪を聞いて驚いてしまっただけです」

「そうか？　なら良いのだが」

カトレアは王宮資料庫の事件を知っていたので、心配そうに公爵に話しかけました。

「しかし、ギルとアンリエッタ姫を引き合わせるのは、王宮の人達が良い顔をしないのではないですか？」

「なに。不幸な事故だ。仕方が無い。なあ、アズロック」

カトレアの質問に、公爵は笑いながら答えました。

「はい。仕方がありません」

公爵の言に父上が頷き、近くにいた母上達も頷いています。

(こいつら……グルだ) byギル

(みたいね) byカトレア

(じゃな) byティア

(しかし事故か……。ならやりようが有るな。カトレア……) by

ギル

私はカトレアに作戦を伝えました。

(分かったわ) byカトレア

カトレアはいまだに笑っている公爵に、笑顔で言ってあげました。

「本当に事故が起こらなくて良かったですわ」

はい。その場にいる大人達の顔が引きつりました

「そ それはどう言う事だ？」

公爵が焦りながら聞いてきました。

「どう言う事も何も、ギルは今日からドリユアス家の産業発展の為に、種や苗を入荷する旅に出ましたよ」

「き 聞いてないぞ。どれくらいで戻るのだ？」

父上も焦ってますね。

「さあ？ ギルが言うには、2〜3ヶ月くらいと聞いていますが」

カトレアの答えに、父上達はうなだれました。父上の口から「逃げられた」と聞こえたのは、気のせいと言う事にしておきましょう。

「あなた。アズロック。これはどういう事かしら？」

しかもカリー又様が、怒り心頭の様子です。……あっ。父上達が外へ引きずって行かれました。

(なるほど。多分だけど、今回の首謀者はマリアン又様で、協力を依頼されたのがお母さまね。お父様達はギルの予定を調べていたと……) byカトレア

状況を冷静に分析するカトレアの様子に、公爵が少し哀れに思えたのは秘密です。

(それは御愁傷様です。同情はしませんが) byギル

(まあ、仕方が無いの) byティア

(しかし、魔法の道具袋が手元に戻ってきていて助かりました) byギル

(で、どれくらいで帰ってくるの?) byカトレア

(事前に言っておいた通り2〜3ヶ月です。どんなに遅くとも、3^{ティール}月の上旬ないし中旬に帰っています) byギル

(………ふーん) byカトレア

(性魔術の習得の為でもあります。拗ねないでください) byギル

(拗ねてないわよ。まあ、仕方が無いわね。なるべく早く帰ってきてね) byカトレア

(分かってます。それじゃ行つて来ます) b yギル

私はそう言つと、《共鳴》が切れました。さて、とりあえず行き
ますか。

「イル。精霊の大樹へ向かいます」

私が声をかけると、オイルーンは「応」と答え精霊の大樹への進
路をとりました。

精霊の大樹の所まで行くと、鳥に《変化》したレンが合流しまし
た。

「レン。お疲れ様です。魔法の道具袋は重くなかったですか？」

「問題なしじゃ」

魔法の道具袋を受け取ると、レンは猫の姿に《変化》しました。
私はレンを抱きあげ、大樹の前に移動します。

「木の精霊よ。姿を見せてください」

私が声をかけると、木の精霊は直ぐに出てきてくれました。

「待っていたぞ。重なりし者よ。直ぐに他の精霊達も呼ぶ」

(???何故?? 私の体を預かってくれるだけじゃなかったのです
か? 別の話と勘違いしているのでしょうか?) そう思っているう
ちに、他の精霊達が集まってきました。精霊たちの様子は、以前王

都へ行った時より浮ついているようにも見えます。

「あの……私の体を預かってもらうだけなのに、何故他の精霊を呼ぶ必要が……」

「折角の機会なのだ。吾だけで楽しむの味気なかつた」

……楽しむ？ 何故？ 体を預けるだけなのに……。

「食事と言う概念は我々精霊には無いからな。楽しみだ」

なんか土の精霊が、聞き捨てならない言葉を口にしたような気がします。

「単なる者達の町を、自由に動き回れるとは楽しみだ」

はい。水の精霊の一言で確定です。精霊達は私の体を使って、人の町を冒険する気満々です。今からダメと言っても、通用しないでしょう。ならば条件付きで認めるしかありません。

「精霊達よ。私の知り合いと鉢合わせすると、面倒な事になると予想されます。せめて変装を……」

「《変化》を使うから問題ない」

木の精霊が答えてくれました。それなら問題はありません。後は精霊達が騒ぎを起こさない様にしてください。

「ティア。これを預けておきます。精霊達が騒ぎを起こさない様に見張っていてください」

「わ 吾がか!？」

ティアに財布を渡して、精霊達の事を頼みます。財布の中には、500エキューちよつと入っているので足りなくなる事は無いでしょう。面倒事を押し付けるようで申しわけありませんが、ティアにしか任せられないのです。(手が空いていて、秘密を守れて、人型になれて、人間の常識があるのはティアだけ)

「お願いします。後カトレアには、この事を連絡しておいてください」

「わ 分かったのじゃ」

「特に水の精霊の行動には、細心の注意を払ってくださいね」

本人(本霊?)に聞こえています。そんなこと気にしていません。十分に念を押しておきます。

「そろそろ良いか？」

振り向くと水の精霊がやたらと近くにいました。

「では、逝って来い」

水の精霊はそう言いながら、私の霊体を体からはじき出しました。

気が付くと、冥途に居ました。さて、リタとナベリウスの所へ……。

「あ あるじ〜。ぐす おいてかないで〜」

声がした方を見ると、死者に囲まれ半べそ状態のレン（猫ver）が居ました。私が抱いたままだったので巻き込まれたようです。私はため息をつくと、レンを抱きあげてリタとナベリウスの所へ向かいました。

- - - SIDE アズロック - - -

ギルバートに逃げられたせいで、本当に酷い目にあった。唯一の救いは事故を装う為に、ギルバートの事をアンリエッタ姫に伝えてなかった事か。全く、どうやって今回の事を察知したのか、後で問い詰めなければな……。

いつそ正面から「アンリエッタ姫に会え」と、命じてみるか？ いや、そうすると「父上は私を過労死させる気ですか？」とか、凄く良い笑顔で言われそうだ。そうになると、間違いなく家族全員敵だな。……やめておこう。

しかしマリアンヌ様とアンリエッタ姫が、当家の温泉を気に入っていただけなのは僥倖だった。この様子なら、年に数回は当家の別荘に保養に来ていただけのかもしれない。当家にも箔が付くと言う物だ。料理もガルガンディン（以前ギルが謎の魚と言っていた魚。高級魚）の塩包み焼きを、相当気に入っていただけだろうだ。

滞在期間は3日と短かったが、二人ともご満足いただけただろうだ。これから年末行事などで忙しくなるので、王家の二人には英気を養

つてもらえたと思う。今回は3日と滞在期間は短かったので良かったが、これからは劇場などの娯楽施設が使えるようにし、長期の滞在に耐えられるようにせねばな。

領の経済状態も上向き、あと少しで全体の収支を黒字にできる所まで来た。やはり一番の懸念は、塩の件が上手く行くかだな。もうトリスティン中に塩の在庫は配備してあるし、やれる事はやって結果を待つだけの状態だ。とは言え、事の大きさを考えるとやはり緊張するな。

年も明け始祖の生誕祭も無事に終わった。予定通り私は王宮へ呼び出された。

「失礼します」

議場に入室すると、早めに来ていたはずだが陛下は既に席にお付きになつていた。私の後に議場に入室した者達も、陛下が既に来場されていた事に少なからず驚いていたようだ。

「これより、塩高騰対策会議を始める」

司会進行役は、またマザリー二枢機卿の様だ。塩の高騰は領地をもつ貴族にとって、かなり神経質になる問題だからだろう。司会進行役を任せられる立場の者で、領地を持っていないのは彼だけだったと言ふ事か。

「先ずは、ドリュアス公爵。昨今の塩の値段高騰の原因をご説明願います」

「ハッ!!」

私は立ち上がり、説明を開始した。

「当家の塩田設立により、海水塩が非常に安価に出回るようになっていきます。また、ゲルマニアからの岩塩供給量は、例年と変わらぬ量を……いえ、むしろ例年より供給量自体は増えています。本来ならば、この状況で塩の値段は下がるはずなのです。しかし、現実に塩の値段は上がっている」

ここでいったん切ると、周りの者達は一様に渋い顔をした。

「当然調べましたが、国外に塩が流れている形跡はありません。巧妙に隠してありますが、一部の人間が塩の買い占めを行っているようです。これは明らかに、トリステイン経済にダメージを与える逆行為です」

私の言葉に、議場がざわめきに包まれた。

「しかし証拠が無ければ、反逆者共を捕まえる事は出来ぬぞ」

陛下の発言に、議場が緊張に包まれた。陛下が塩を買い占めている者達に対し、反逆者とはっきり言ったのが原因だ。

「しかし陛下。領主にとって、塩を含めある程度の備蓄は責務です」

文官の一人が、あわてて陛下に進言する。

「言いたい事は分かるが、限度と言う物がある。昨今の塩高騰の不

安により、ある程度の備蓄の増大は大目に見る」

陛下の言葉に、明らかにホツとした表情を見せる貴族が数人いた。逆に顔色が悪くなつた者も居たが……。

「反逆者を捕えるにも証拠が居る。証拠をそろえるにしても、相当の時間がかかる。それまで高騰した塩の値段を、放置しておく事は出来ぬ。よって急場をしのぐ為に、ゲルマニアに岩塩の供給量を増やしてもらつた為の使者を送ろうと思つ」

当然と言えば当然の流れだろう。そして、この大任を受けるのは……。

「ドリユアス侯爵。我が書状を預ける。ゲルマニアのアルブレヒト3世に見事届けて見せよ」

「ハッ！！ 一命に変えましても」

陛下にとつて、ここで「岩塩輸出量増加の交渉をしろ」と命令しないのが重要だ。失敗すると分かっている交渉を命じて、アホ共に処分の口実を与えるわけにはいかない。私に課せられた任務は、あくまで書状を届ける事だけなのだ。その証拠に、悔しそうちにこちらを見ている者が何人か居た。しかしこれで、失敗した時の責任が陛下に行く事になる。まあ、その対策がこれからの話だ。

「それからドリユアス侯爵」

「ハッ！！」

「以前命じていた塩の増産と備蓄は上手く行っているか？」

「はい。ご命令にあった備蓄量の方は何とか。いつでも放出可能ですが、放出したしますか？」

「いや。必要なら追って指示する」

「ハッ！！」

これで全ての種がまかれた事になる。私と陛下は（表面上）何一つ嘘をついていない。周りの人間は私と陛下の話を知っているだろうが、所詮大した量で無いと思っっているだろう。実際の塩の備蓄量は、トリステイン王国の一年分を越えているが……。

ここまでで私の出番はほぼ終了となる。ここからは公爵を中心に、反逆者捕縛の為の話となる。内心で「本来なら私の専門はこっちなのだがな」と、ボヤしてしまったのは私だけの秘密だ。

ゲルマニア王のアルブレヒト3世への謁見は、驚くほど簡単に終了した。書状を渡し一晩待たされて、帰る前に返事を持たされるだけの簡単なものだった。急ぎの書状であった為、移動に風竜を使ったので3日で帰ってこれた。正直に言っただけであっさりすぎたと思う。

「陛下。アルブレヒト3世からの返書をお預かりしてまいりました」

「ドリュアス侯爵。ご苦労だった。返書をこちらへ」

陛下の隣にいた文官が、私から返書を預かり陛下にお渡しする。陛下は返書を広げ返書に書かれた文章を目で追うと……。

「なんだこの返答は!!」

分かってた事とは言え、かなり頭にきたようだ。それとも演技だろうか？

「陛下。恐れながら返書には何と……」

私がそう聞くと、陛下はため息を吐いた。

「断ってくる可能性は考えていたが、輸出量を削減もしくは輸出自体を停止すると言ってきた」

陛下の言葉に、謁見の間は騒然となった。そして口々に私を非難する言葉が上がった。「ドリュアス侯爵が、何か失礼を働いたに違いない」と言った内容だ。中には私の処罰を求める声もある。

「侯爵。この事態をどうする？」

陛下がプレッシャーをかけながら聞いてくる。

「当家の備蓄を放出するしかないかと……。その上で、買い占めを行っている者を何とか出来れば……」

「備蓄の放出は許可する。そして、明日に対策会議を行う事とする。また、無用な混乱を防ぐため、ゲルマニアとの交渉失敗の口外は堅く禁じる。破った者には、相応の罰を与える」

陛下はそう言い残して、退出してしまった。これでドリュアス家は終わ리と言うイメージを、植え付けられたはずだ。

謁見終了後に、アナスタシアの縁談話が大量に來た。明らかに精靈の交渉役を狙った縁談だ。こちらが弱っていると思ひ、こんな話を持ち出したのだらう。当然すべて断つたのだが、余裕面して「後悔なさいますよ」等と言われた時には、チンケな家ごと叩き潰してやろうかと思つた。後悔するのはお前らだ。

対策會議は昼過ぎに開始する事になつた。当然上級貴族は、全員参加が義務付けられた。参加者の中には、やたら上機嫌なリツシユモンも居た。議場の中は、私を嘲る者が殆どで一部同情の視線も混じっていた。

「これより、第二回塩高騰対策會議を始める」

司會進行役は、前回と同じマザリー二枢機卿が受け持っていた。

「昨今の塩高騰は、一部の者の買い占めが原因であることが分かつた。しかし、そう言つた者達を捕まえるにも証拠が居る。証拠を固めるには、当然多くの時間が必要とされる。よつてその一時をしのぐ為に、ドリユアス侯爵がゲルマニアに岩塩輸出量増加を嘆願する使者としておもむいた。しかしゲルマニアは、我が国の要望に應えないばかりか、輸出量の削減もしくは輸出自体を停止すると言つてきた。この事態を受けて我々は……」

マザリー二枢機卿の説明が長々と続いているが、議場には悲觀的な表情を浮かべている者は居なかつた。それと言つのも、ゲルマニアが岩塩の輸出を停止することなどありえないからだ。今回の返答は、こちらの譲歩を引き出すためのブラフにすぎない。もし本当に

岩塩輸出を停止しようものなら、トリステインとゲルマニアは戦争するしかなくなるのだ。そうなれば、ガリアに漁夫の利を拾われるのは分かり切っている。

多少の譲歩を引き出すだけなら、ここまで強硬な姿勢を見せる事は無い。どこその馬鹿が金を積んで、ゲルマニア貴族を焚きつけたのが原因なのは、共に分かっているだろう。アルブレヒト3世は今回の一件を利用し、トリステイン外交を有利に進めたいのだろう。全ての原因がトリステイン貴族にあるのなら、今回の件に関してトリステインは譲歩に応じるしかないからだ。

……しかし、この外交危機を理解している者が、果たしてこの中に何人いる事か。私の処分どころではないだろうに。

「陛下。これから起こる塩の高騰は、輸出量増加を断られたドリユアス侯爵にあります。侯爵に処罰を与えねば、内外に示しが付きません。どうか侯爵の処罰をご検討お願いします」

ほら出てきた。あいつはリッシュモンと懇意にしていた貴族^{バカ}だったな。

「必要無い」

それに対して国王の返答は、実に簡潔なものだった。

「……しかし……」

「くどい！！ ドリユアス侯爵は、我が書状を届けたただけだ。その返答が満足な物で無かったからと言って、処罰するなどありえん事だ」

国王が私を処分しないと明言した事で、議場がざわめきに包まれる。これで今回の件にかかわったのは、国王陛下のみと言う事になる。まさか、国王を処分するわけにはいかない。普通なら私に責任が無くとも、王家の威信を守る為に私を生贄にするところだ。

「ですが塩高騰の責任はどうされるのですか？」

もつともな意見である。

「なに。塩がこれ以上高騰しなければ、誰の処分も必要ないだろう」

「既に手遅れです。ゲルマニアとの塩取引停止の噂の所為で、塩の値段は凄まじい勢いで上がってます」

「ほう。口外は禁じ、厳しく罰すると宣言したはずだがな」

陛下が不敵な笑みを浮かべると、私に視線を向けた。

「ドリユアス侯爵。塩の放出はどうなっている？」

「ハッ！！ 既に第一陣が市場に出回っている頃と思います」

私の返答に、陛下は満足そうにうなずいた。

「これで当面は、塩の価格上昇を抑えられるだろう。とにかく今はこれからの事について話し合っぞ」

国王にこう言われては、今は頷くしかないだろう。

- - - SIDE アズロツク END - - -

- - - SIDE 行商人??? - - -

トリステイン王都であるトリスタニアに行商にきたのは、ただの偶然だった。酒場で酒を飲んでみると、塩の話題を偶然耳にしたのだ。なんでもゲルマニアとの岩塩取引を、バカな貴族の失敗で止められたというのだ。俺がこの噂を聞いた時には、下らないと思ってた。しかし興味本位で調べてみると、これは貴族の権力争いである事が分かった。本来出るはずが無い噂が大々的に流れているのは、被害を出来るだけ大きくしてドリュアス侯爵の面目を潰すのが狙いなのだ。ならば、この機に儲けない手はないだろう。

次の日の早朝に、俺は塩取引会場に来ていた。混乱と被害を増大させる為だろう。本来なら許可証が無ければ立ち入れないはずなのに、警備の人間にわずかな賄賂を贈っただけで簡単に入れた。これは普段なら考えられない事だ。会場にはトリステインの商人を、全員集めたのではないかと言うくらいに人でごった返していた。俺の同類もいるはずだが、塩を確保しておきたい商店の人間が集まったのが原因だろう。なんにしても、これなら安全に取引できそうだ。俺は開始から塩を買いまくり、ころ合いを見て塩を売りこの場から逃げ出す事にした。塩さえ手元に残しておかなければ、証拠など残らないのだから。

取引を開始した時点で、塩の価格は既に例年の2.4倍に達していた。それでも俺の資金が有るだけ塩を購入した。開始わずか一時間で、俺の資金は底をついてしまった。所詮は行商人の資金だから、それは仕方が無いだろう。しかし塩の値段は、際限なく上がり続けている。午前の取引が終了する時に、例年の50倍を超えていたのは何の冗談かと思った。原因は身なりのやたら良い商人が、馬鹿み

たいに買っているからだ。

「気分悪いな」

今回の件で生贄にされたドリユアス侯爵は、平民だけでなく我々商人にも評判の良い貴族だった。特に侯爵が子爵時代に設立したマギ商会は、俺達商人にとってあこがれの存在だったと言える。損して得取れを地で行く経営戦略は、今の商業界では革新的な物だったと言える。

先ず物を高く買う事により、民に金を与える。金を得た民は、良い道具や物を買って豊かになり商会が儲かる。良い道具を得た民は、より良い物をたくさん作り商会に売る。良い商品が集まれば、商会はより儲かる。……今までのハルケギニアでは考えられない好循環だ。良い領主、誠実な商会、忠誠心あふれる民、そして思想。すべて揃わなければ、とても実現しない奇跡と言って良いだろう。……それが壊れようとしている事に、俺は柄にもなく一抹の寂しさを感じていた。

「午後の取引開始まで時間は……。まあ良いか。気分転換に少し散歩するか」

俺はやるせない気分を紛らすために、少し歩こうと思った。もう午後の取引が始まるが、どの道塩の値段は上がる一辺倒なのだ。会場にかじりついている意味は無い。俺は散歩をする為に、裏へと向かった。表を歩いて警備に捕まり、また賄賂を要求されるのもつまらないからだ。

歩いていると数台の馬車が、裏口から入って来るところだった。興味をひかれた俺は、気分がまぎれると思えば馬車の持ち主らしき中

年の男性に話しかけた。

「こんにちは」

「おう。こんにちは」

中年の男性は挨拶を交わしながらも、荷降ろしの作業を止める事が無かった。ここにきて自分が邪魔にしかならない事に気付いて、内心失敗したと思った。

「若いの。あなたは塩の取引で儲けに来たんじゃないのかい？」

手を止めることなく相手が聞いて来たので、俺は正直に答える事にした。

「その心算で塩を買ったんですがね……」

「ほう。何か有ったのかい？」

そこで初めて手が止まり、中年の男性はこちらを見た。その目は歴戦の商人の目だった。

「自分の浅ましさに、ちょっと自己嫌悪をね……」

「ふん。そうかい。なら気持ち良く行ったらどうだい」

俺よりもかなり年上のはずの男性の顔が、まるで少年の様に思えた。そして荷降ろしを再開した。

「あつ 申し遅れました私はジルダと言います」

「俺はギスランだ。マジ商会に所属している」

ギスランがマジ商会所属と聞いて驚いた。積み荷は良く見たら塩だ。しかし現状の塩の値段を下げるには、あまりにも少ない量だった。たわいない会話をしていると、荷降ろしは直ぐに終わった。すると「カロン。俺は戻るぞ!!」と言って、馬車を引き始めた。

「ジルダ。さっきも言ったが、たまには気持ち良く行ってみたらどうだい」

ギスランは最後にそう言い残して、行ってしまった。

「そうだな。たまには気持ち良く行ってみるか」

俺は会場に戻ると、塩の値段は60倍まで跳ね上がっていた。俺は迷うことなく、自分が持っている塩を盛大に売り払った。少し気持ち良かったが、十倍以上に膨れ上がった財布が少し重かった。俺は無意識のうちに、ギスランに会った裏口に来ていた。驚いた事に、そこではギスランがまた積み荷を降ろしていた。

「おう。ジルダ。また来たのか」

「あれ？ 先程荷を降ろして帰ったのでは？」

ギスランはまた少しだけ手を止めると、少年の様に……いや、子供が悪戯を成功させた時の様に笑った。

「それよりお前、買った塩は如何したんだ？」

「気持ち良く全部うつぱらいましたよ」

そう言うとギスランは、笑顔で「ジルダ 正解だ」と言った。何が正解なのか聞こうとしたら、先にギスランが答えた。

「お前ならもうわかってんじゃないのか？ 会場に高みの見物に行ったらどうだ」

そう言うとギスランは、再び馬車を引いて出て行った。俺は頭をよぎった物が信じられずに、確かめたくて会場に戻った。塩の値段は俺が売った時と変わらず60倍くらいだったが、会場の雰囲気は少し変わっていた。何とも言えない緊張感に包まれていたのだ。これは本来先物取引の場にあるべき空気だ。

「俺はまだ資金が有る。買うぞ！！」

まだ数人の商人が塩を買っていたが、塩の値段は一向に上がらなかった。最後の買いが処理されて、永遠ともとれる緊張した時間が少し経つと……、提示された塩の値段は一気に50倍程度まで落ちた。それを見た商人は全員売りに入る。もはや会場はパニック状態と言ってよいだろう。

このまま阿鼻叫喚の地獄絵図を見て居ても良かったのだが、なんとなくそんな気になれず俺は裏に戻った。裏で暫く待っていると、再びギスランが馬車を引いて来た。積み荷はまた塩の様だ。一体マギ商会は、どれだけ塩の在庫を持っていたのだろうか？ 俺は思わず顔を引き攣らせた。

「塩はまだまだ来るぞ」

嬉しそうに言うギスランに、俺はまた顔を引き攣らせた。

「一体どんだけ在庫持ってんだよ!!」

「トリスティン一年分」

「い いち!!」

ギスランは、固まる俺の腕を引きながら。

「ほら。手伝え」

「いや、手伝えって」

結局俺は、そのままマギ商会の手伝いをするはめになった。だが俺は言いたい。

「塩の在庫多すぎだ!!」

「黙って運べ!! 終わんねえだろう!!」

明日絶対に筋肉痛だ。俺はこの時そう確信した。

全て終わった時には日が暮れていた。そして魅惑の妖精亭と言う、マギ商会の祝賀会の会場らしき場所に連れて行かれた。そこで落ちて着いて話を聞くと、馬鹿貴族共がドリユアス侯爵を罠にはめようと、逆に罠にはめられたという話だった。そして作戦名「塩爆弾大作戦」は無いだろう。まあ、おかげで財布の中身が気分の良い物

になったから良しとしておこう。

次の日に目が覚めると、魅惑の妖精亭の床に転がっていた。

「おう。ジルダ。目が覚めたか？」

「ああ」

俺は頭を振って、寝ぼけた頭の覚醒を促す。

「ほら！！ キリキリ片付ける」

声がした方を見ると、10歳位の黒髪の女の子にせかされて全員片づけをしていた。顔色とのそのそした動きで、グロッキー状態なのが良く分かる。

「ジェシカ嬢ちゃんにはかなわんな」

ギスランは困ったように言いながらも、手を動かしていた。

「ああ。それからジルダ。お前マジ商会に入れ」

「分かった。……？ はい？」

今俺は何を言われた？

「おい。カロン。ジルダ。OKだつてよ」

「分かった。手続きするからジルダは後で商会まで顔を出してくれ」

ちょ 俺の人生勝手に…… まあ、いつか。

- - - SIDE 元行商人ジルダ END - - -

- - - SIDE アズロック - - -

会議が始まって既に5時間近く経っただろうか。会議が終わりにさしかかり、また私を罰するべきだと言い始める馬鹿が出て来た。

「陛下。そろそろ良いではありませんか？」

「分かった。ドリユアス侯爵。許可する」

陛下の許可が出たので、馬鹿共の前でドリユアス家の塩田がトリステインの年間消費量を裕に賄える事を暴露した。

「今まで王家に虚偽の報告をしていたのか？」

数人の貴族が怒りを露わにするが、そんなこと私には関係ない。と言うか、今私が陛下の許可を取ってから喋ったのを理解していないのか？

「陛下の命令で、本当の生産量は伏せさせていただきました。トリステイン国内の貴族に、ガリアやゲルマニアに通じる者がいる様なので……」

私がそう返事すると、陛下が頷いた。

「実際、ガリアには先手を打たれて、法外な税金をかけられました。そして今回の騒ぎは、塩の値が高騰するのを私の責任にできると言

う事で、塩を買い占めている者が出て来た事が原因です。また、この情報をゲルマニアに漏らした者がおり、外交上の劣勢を余儀なくされる所でした。それを当家の塩田の生産力が、トリスティンを救ったと言っただけでしょう」

私がそう言うと、黙る以外の選択肢は無い。元よりドリユアス家には何の落ち度もないのだ。

「ドリユアス侯爵。塩の高騰の不安により、理不尽に高い備蓄をするはめになった者も居るのだ。そう言った者達は侯爵が塩田の生産量を偽っていなければ、このような出費をせずに済んだのも事実だ。侯爵は命令に従っただけとは言え、それが原因で領地経営が苦しくなった者も居るだろう」

殆どの貴族が国王の言葉に頷いていた。まあ、トリスティンは見栄ばかりの貧乏貴族が多いからな。買い占めを行った馬鹿貴族はともかく、今回の一件に煽りを食らっただけの貴族は、敵に回したくない。ならば……。

「でしたら塩の備蓄に使った分の金銭を、補償すると言っただけはどうでしょうか？」

私の言葉に殆どの者が難色を示した。

「その予算はどこから持ってくるのですかな」

ここで初めてリッシュモンが発言した。その表情は引き攣っている。と言うか、今にも倒れそうな表情をしているな。まあ、ドリユアス家の塩田の真の生産量を知ったのだ。今頃外で何が起こっているのか、想像が付いているのだろう。

「当家が負担しましょう」

きっぱりと言い切った私に、リッシュモンはまるで金魚の様に口をパクパクさせる。

「この会議開始直前の塩の値段は、例年の50倍に達していたそうです」

議場に悲鳴のようなざわめきがもれる。

「これを落ち着ける為に、当家が保有していた塩を一気に放出しました。量で言えば、トリステインを一年分賄える量です。今頃トリステイン中の塩の値段は、例年を大きく下回っているでしょうね。まあ、安くなり過ぎないようにある程度買い戻します。その点はご安心ください。また、今回の塩の放出で莫大な金額が当家に入りました。それを今回の補償に当てましょう。ただ……、備蓄と呼べる量をはるかに超える物は、補償いたしかねます」

やっぱりな。リッシュモン含め数人の貴族が、物凄く青い顔をしている。殆どの貴族は、胸をなでおろしているが。

「ドリユアス侯爵の言うとおり、逸脱した備蓄は保障できない。また、明らかに買い占めとみられる量を確保していた者は、宣言通り反逆罪を適用する。具体的にどこまでが備蓄で、どこからが買い占めかはこれからドリユアス侯爵を交え話し合って決定する」

陛下はそこまで言うと、解散を宣言した

結局 適正な備蓄量は3ヶ月分となり、今回の混乱により6ヵ月分まで補償する事となった。補償額の算出は（国に報告されている領民の数）×（一人が一日に必要な食塩量）×（塩の値段・例年の3倍）×（6ヵ月分）となった。ここまでは補償し、これ以上は過剰として自己責任とした。まあ、証書の提出を義務化しなかったので、殆どの貴族が補償額の限界まで受け取ろうとするだろう。仮に全ての領地に、限界まで補償させられたとしても今回の儲けの1割にも満たないのだが。ちなみに1年分を超えると、反逆罪適用である。

リッシュモンは仲間を生贄にささげ責任回避を行った。かなり周到に準備していたらしく、リッシュモンが関与した証拠を見つける事は出来なかった。本当にゴキブリ並みにしぶとい男だ。

- - - SIDE アズロツク END - - -

第五十話 塩爆弾爆発！！でも私は不在です（後書き）

皆様お久しぶりです。パソコンも新しく組み帰ってきました。

一月以上パソコンに触れられなかったのは辛かったです。

それ以上に、地デジ対応テレビをあきらめされられたのが痛いですが、でも、変換機は意地でも買いません。負けた気がするから。

本当はもう少し早く投稿するはずだったのですが……。

はい。我が身の不徳です。ゴメンナサイ。

ご意見ご感想をお待ちしております。

第五十一話 ハルケギニアよ！！私は帰って来た！！（前書き）

今回はちょっとエッチな表現が入っています。
読む際はご注意ください。

第五十一話 ハルケギニアよ！！私は帰って来た！！

こんにちは。ギルバートです。苦節六年（ハルケギニアでは三ヶ月弱）……ようやく……ようやくハルケギニアに帰ってきました。気分はもう「ハルケギニアよ！！私は、帰って来たあー！！！！！！」です。どこぞのソロモンズ・ナイトメア風に叫びたい気分です。

いやもう、ディル＝リフィーナでは色々あったのです。

どっかの半魔神の（元）王様に会ったり……。

義姉弟の和解を手伝わされたり……。 （弟に姉上と呼ばせてやりました）

旅の目的を話をしたら、案内役の名目で暴走王女押しつけられたり……。 （仕返しかな？）

負けじと神殺し様が、紅雪を押し付けてきたり……。 （張り合わないでほしい）

終いにはその二人とレンで、三つ巴の喧嘩に発展したり……。

性魔術の訓練は理性をガリガリ削る上に、相手をしてくれたレンが……。

案内役の二人は全くの役立たずだし、この三人が行く先々で騒動を起こしてくれるし、もし霊体で無ければ私の胃は穴だらけ確実です。……血、吐きますよ。どこぞの錬金術師の師匠みたいに。

しかし、もうそんな生活とはおさらばです。早速肉体に戻ります。

そして気が付くと、そこは知らない町でした。それにやたら目線が高い気がします。

「(重なりし者よ。もう帰って来たのか?)」

体の中から声が聞こえました。今のは木の精霊ですね。

(はい。用事が済んだので帰ってきました。ここは何処ですか?)

「(ヴィンドボナとか言う街だ)」これは、風の精霊か?

(ヴィンドボナと言えば、ゲルマニアの首都ですね。何故こんなところ?)

「(元々トリスタニアで遊んでいたのだが、少々目立ってしまったので、丁度飽きてきた所だったので、少々足を延ばしてみた)」

今のは土の……って、聞き捨てならない単語が有ったような気がする。するのは気のせいでしょうか?

「(我は暴れられたので気持ち良かったぞ)」

アウト!! アウト!! アウト!! 今、火の精霊な何と
言った? 暴れたって何ですか? なんでやねん!! お目付役の
ティアは……ティアは何処ですか? あれほど頼んでおいたのに、
なぜこのような事になったのですか? いや、とりあえず落ち着け。
深呼吸をして乱れた心を落ち着かせます。

(それでティアは何処ですか?)

「（韻竜ならすぐ帰ってくるぞ）」

水の精霊に言われて、私はあたりを見回ります。すると直ぐに、黒髪の美女を発見する事が出来ました。やけに鬩やっれていて、とぼとぼ歩くその姿に哀愁を感じずには居られませんでした。

「ティア」

思わず声をかけると、ティアはビクッと震え顔をこちらに向けました。

「あ　主……なのか？」

私が頷くと、ティアの目からポロポロと涙が流れだします。そして、手に持った木のカップを落とすと、凄い勢いで私に抱きついてきました。よほど辛い思いをしていたのでしょうか。私はティアを抱きしめ、頭を撫でてあげました。体の中で木の精霊が「（勿体ないではないか）」等と騒いでいますが今は無視です。ついでに周りのギャラリーも無視です。

ティアが落ち着くのを待つて、中身がぶちまけられた木のカップを店に返却すると、私達はティアがとっておいた宿に行きました。

部屋に入り鏡で自分の姿を確認すると、凄い事になっていました。私の姿は、スキンヘッドの大柄なオッサン（筋肉ムキムキ）になっていたのです。ティア（人間ver）と並んで歩いたら、美女と野獣と言つ言葉が異様にしっくりきます。おまけとして、体には大きな入れ墨が施してありました。精霊達が刺青の由来を話してくれましたが、私は何故この文様を刺青にするのか理解できませんでした。

「しかし、背や手足の長さが違うだけで、ここまで動き辛くなるとは思いませんでした」

宿に帰る途中で、あまりの動き辛さに精霊に肉体の操作権を譲渡して、代わりに歩いてもらいました。屋台を見かけるたびに、フラフラと立ち寄ろうとするので、そのたびにティアが苦勞して止めて居ました。終いにはティアに泣きつかれ、肉体の操作権を戻す羽目になりました。おかげで何度転びそうになったか……。

「主。もう元の姿に戻っても良いのではないか？」

鏡で今の自分の姿を観察していた私に、ティアが提案してきました。もう仕入のアリバイを作るには、十分すぎるほどの時間が経っています。ここがゲルマニアなのは気になりますが、もう元の姿に戻っても問題ないでしょう。

（精霊達よ《変化》の術を解除してもらえますか？）

私の提案に精霊達の反応は様々でした。特に土の精霊が、私の提案に難色を示したのは意外でした。

「（美しいからこのままで良いのではないか？）」「と、土の精霊。

「（刺青以外は、どう考えても駄目だろう）」と、風の精霊が言うと、他の精霊が同意します。

「（美しいとはこういうことを言うんだ）」

風の精霊がそう言うと、頭の中に男のイメージが流れ込んできました。ひよろひよろの優男でしたが、やたらひらひらした服を着て

いて、髪が地面に引きずるほど長かったです。……ハッキリ言っていて、気持ち悪かったです。それに続き「(違う!! こうだ)」と、火の精霊がイメージを公開しました。それは細くも筋肉質で、真っ赤な髪が真上に向けて立っていました。しかも、何か赤いオーラみたいなものを纏っています。……赤い超野菜人ですね。次が水の精霊で、ケバケバのおかまっぽい男でした。……見なかった事にしよう。精霊達が(人の中で)言い争いを始めましたが、木の精霊だけは我関せずでした。

「(重なりし者よ。元の姿に戻すぞ)」

木の精霊がそう言うと、私は元の姿に戻っていました。慣れ親しんだ姿って素晴らしいです。あんなシヨッキングな姿になりたくありません。元の姿に戻った私を確認すると、ティアは泣きながら「あ あるじ〜!!」と、抱きついてきました。引き剥がそうとも思いましたが、本気で泣いているようなので放っておく事にします。私の中では木の精霊が、他の精霊の仲裁に入っていました。助かります。

暫くしてティアも落ち着いたので、私がない間に何が有ったか聞く事にしました。

「ティア。私が不在だった間に、何があつたか教えてください」

そう言って抱きついたままのティアを放すと、何かこの子舌打ちしましたよ。しかも「レンだけズルイのじゃ」とか、私の中から「(人の交尾が……)」等と、聞こえた様な気がしました。絶対気のせいです。そう思わないと、私の精神がやばい事になります。ああ……純心だったティアは何処へ……。これは絶対にティアとレンが、互いに影響し合っている事が原因ですね。ん? そこでようやく

気付きました。レンは何処へ行ったのでしょうか？

「ま　まずい！！」

「如何したのじゃ？」

今の今まで、すっかり忘れていました。一緒に戻って来たはずのレンが居ないのです。

「ティア。私と一緒に帰ってきたはずのレンが居ません」

「あっ！！」

気分は子供と遊びに行つて、子供を忘れて来てしまったお父さんです。……滅茶苦茶焦ります。……そうだ！！

「ティア。レンを感知できますか？　出来なければ、レンに《共鳴》で呼びかけられませんか？」

「う　うむ。直ぐに呼びかけるのじゃ。……精霊の大樹の前におるぞ」

良かった。とりあえず無事だけは確認出来ました。と言っても、分霊に無事も何もないのですが。

「（黒い鱗が突然白い少女になったので驚いたぞ。重なりし者を探しながら、本体が応えてくれないと泣いていた）」

私の中に居る木の精霊が、突然話しかけてきました。そう言う事は早く言って欲しいです。

「（白い少女も貴様等も、我に助けを求めなかっただろ。我は精霊達の仲裁で忙しかったのだ）」

そう言われると、何も言えませぬ。

「主。レンにはカトレアの所へ行くよう指示を出したのじゃ。もう問題なしじゃ。それから主がデイル＝リフィーナに行っていた時の話じゃな」

やけに急いで次の話題に移ろうとするティアに、違和感を覚えませんでした。……ああ、そう言う事か。

（自分に責任追及が来る前に逃げたな。レンの問い掛けを無視していたから）

「（ほう。気付いたか。しかし見逃してやれ。我等の相手に疲弊していたからな）」

（……そうですね）

私が木の精霊と話していると、ティアは「話せば長くなるのう」と言つて、飲み物を用意し始めました。私はその隙に、魔法の道具袋から杖とデイル＝リフィーナ製の服（こちらの普段着が無かった）を取り出し、ダボダボになった服から着替えます。

（それより黒い鱗がレンに変わったと言いましたが、レン（分霊）の触媒にはティアの髪の毛を使ったはずですが……）

「（たまたま人間の髪に対応した竜の部位が、鱗だったただけだろ。」

そして、重なりし者が向こうへ飛ばされる際に巻き込まれ、触媒のみその場に置いてけぼりをくったのだろう)」

(行きは死者に囲まれ、帰りは置いてけぼりとはレンもついてませんね)

「(行きもか？ まあ、別の世界を堪能出来たのだ。不運の見返りは十分に有ったのだらう?)」

私は苦笑いしながら曖昧に頷くと、そこで木の精霊との話を打ち切り、ティアの様子に目を向けます。ティアが用意している飲み物は水だったので、私は杖を抜き水差しとカップの中にアイス《氷》の魔法で氷を作り出します。三月に入った所為か、今日は温かいので氷はあった方が良いでしょう。

「さすが主じゃな。ぬるい水を飲まなくて済むのは歓迎じゃ」

ティアが嬉しそうに頷き、それぞれのカップと水差しをテーブルに置きます。

私とティアがテーブルに着くと、ティアが口を開きました。

- - - SIDE ティア - - -

水の精霊が腕？をふるうと、主がその場に力尽き倒れたのじゃ。その光景を見た時、吾はこれが仮初かりそめであると同時に、近い将来に本当に起こりえる事態であると、この時に実感したのじゃ。

実感と同時に湧き上がったのは、激しい怒りじゃった。

「上手く逝ったようだな」

怒りの感情を持て余していた吾は、木の精霊の声に正気を取戻す。そうじゃ。警戒は忘れてはならぬが、まだ来ぬ未来を気にしては疲れてしまう。そして、いざ事が起こった時に”疲れて動けませんでした”では、泣くに泣けぬのじゃ。そう自分に言い聞かせ、怒りに乱れた心を落ち着かせる。

「では、分霊を体に入れるぞ」

そう言った木の精霊を皮切りに、精霊達が半サント位の結晶を作り出して主の口の中に放り込んで行った。その作業が終わると、精霊達は用は済んだとばかりに、顕現を解除し消えてしまった。そして気付くと、この場には吾と動かない主だけになっておった。

（オイルーンは離れた場所におるから良いとして、レンは何処へ行ったのじゃ？）

レンを探して視線をさまよわせていると、主の体が起き上がり軽い運動を始めたのじゃ。最初はぎこちない動きじゃったが、肉体の操作に慣れたのか次第に違和感のない動きが出来るようになって行った。やがて精霊達は満足したのか、運動を止めこちらに向き直ったのじゃ。

「韻竜よ。我等の中で、どのイメージで《変化》するかもめている。どの精霊のイメージを使うか貴様が選べ」

主が言葉を発したのじゃ。しかしその口調は、普段の主の物とは

全くの別物じゃった。この口調は間違いなく精霊達の物じゃな。

しかし突然選べと言われて、吾は困ってしまったのじゃ。悩んでも解決せぬと分かった吾は、消去法で候補を一柱ずつ外す事にした。先ず論外（ドジ踏みそう）の水の精霊は候補から外すとして、火の精霊はやたら目立つ姿にしそうじゃし、風の精霊は風にびらびらなびくのが好きそうじゃ。この3柱はやめておいた方がよからう。残りは木と土の精霊じゃが、この2柱の精霊は良識がありそうなので少々悩むのじゃ。しかし木の精霊は、エコエコ言っていて主の体をやたらミニマムにされるかもしれぬの……。

「土の精霊が良いと思うのじゃ」

吾がそう伝えると、「我をまといし風よ、私の姿を変えよ」と、呪文を唱えた。そして風が主の体と包み、主の体が膨張して世紀末な暗殺拳の使い手の様にビリビリと破れたのじゃ。

そこに立っていたのは、やたらとでかい中年の……、しかも服が破れ全裸になったオッサンじゃった。筋肉が大盛になっており、髪の毛が一本もなく人相も悪いオッサンじゃった。そこには当然主の面影など一切なかったのじゃ。……そして何より、暑苦さ満載なのじゃ。

「準備はできた。行くぞ」

吾が現実逃避をしておると、おっさんが猫状態の吾をむんずとつかみ走り出したのじゃ。……全裸のままです。

「ま 待て……」

「先ずは我等の領域（ドリユアス領）からだな」

猥褻物陳列男（精霊）はそう言いながら、人間の限界をはるかに超えた速さまで加速する。このままでは人目に触れ確実に騒ぎになる。止めようと声を出そうにも、走る腕の振りでシエイクされ続け……。まあ、この状況で吾がキレたのは自然な成り行きと言えるのじゃ。

吾は《変化》を解き猥褻物陳列男（精霊）に、自慢の尻尾でムーンサルトテイルアタックくくれてやったのじゃ。吾の位置が男の真上だった為、男は”弾丸らいなー”で飛んで行き、木を数本薙ぎ倒してようやく止まったのじゃ。

「吾の話を聞かんか！！ 愚か……も……。 あ 主の体があー
ー！！！」

吾が焦って主の体に駆け付けると、男は平気な顔で起き上がる。

「痛いじゃないか」

精霊たちの感想は、この一言で終了したのじゃ。吾の近接の切り札が……。

「カウンター《反射》を使ってなければ、この体が死んでいたかも知れんがな」

そう言って、H A H A H A H Aとアメコミのヒーローの様に笑うオッサン（全裸）に、スピントイルアタックを放ってしまった吾は悪くないのじゃ。

「なかなか痛いぞ」

「痛くしておるのだがら当然じゃ!」

なおも攻撃の姿勢を見せる吾に、オッサンは降参のポーズをとったのじゃ。これが5柱の上位精霊（分霊）の集合体と思うと頭が痛くなるのじゃ。

「韻竜よ。貴様の要求は何だ？ これ以上我の眷属が無為に傷つけられるのはかなわん。言ってみろ」

この発言は木の精霊の物じゃな。視線を倒れた木に一瞬だけ向けたのが分かったのじゃ。

「先ずはその恰好を何とかするのじゃ!」

吾の言葉にオッサン（精霊）が頷くと、何やら呪文を唱え始めおった。舞い上がった精霊達が、ようやく話を聞いてくれるようになった事に、吾は内心でホッとしておった。しかしそれもすぐに裏切られたのじゃ。呪文が終わると、オッサンの上半身が大きな入れ墨で覆われておった。……無論全裸のままです。

「それはな」……」

「この文様は、我ら精霊を象った物だ。この胸の中央にあるのが、木の精霊を象ったものだ……」

ドシィー……!」

吾が尻尾を地面に叩きつけると、精霊は途端に大人しくなったの

じゃ。と言つか、吾からにじみ出る殺気に気付いたのじゃろう。

「……服を着ろ」

オッサンが明らかに不満の表情を浮かべる。

「早く」

「そんな煩わしい物着て居られん」

以前吾が主達に言った言葉が、吾にかえってきおった。吾の返答は、主達をここまで苛立たせたのじゃろうか？

「吐くぞ」

吾は殺気を込めながら言った。

「……何を？」

「ブレス」

「この体へ？」

吾は首を横に振る。

「誰に吐く……」

言い終わる前に、首を横に振ってやる。

「では、ど」

「精霊の大樹」

場がシンと静まり返った。固まるオッサン（精霊）を無視して、吾は精霊の大樹へ移動しようとしたのじゃ。

「分かった。韻竜。要求を呑もう。だが問題がある」

「問題？」

我が振り返り問いかけると、オッサンが大きく頷いてから口を開いた。

「この体に合う服が無いのだ」

そこからがまた大変じゃった。服は買うしかないという結論に達した物の、その時になって初めて吾が主から預かった財布を持っていない事が発覚。わたわたしている所に、オイルーンが財布を持って追いついて来て本当に助かったのじゃ。ホツとしたのもつかの間で、服を買うにも人の居る所に行かねばならぬ。人の居る所へ行くのに必要な服が、人が居る所でしか手に入らないと言う矛盾に頭が痛くなったのじゃ。結局カトレアに救援を要請する羽目になったのじゃ。しかしオイルーンに迎えに行ってもらったカトレアが、オッサンを見るなり卒倒したのじゃ。うわごとで、私のギルが……ハゲ・オッサン・変態・全裸と言っていたので、その気持ちは痛いほど良く分かるのじゃ。

カトレアに服の問題（吾の分も含め）を解決してもらったと思えば、オッサンの姿をした精霊はフラフラと移動しては、行った先々で問題を起こすので全く気が休まる時が無かったのじゃ。……何度

食い逃げ扱いされた事やら。

ドリユアス領を一通り見て回った頃には、既に三月も目前に迫っておった。しかしこうなると、精霊達が「領外の町も見てみたい」と言い出すのは、当然だったのかもしれない。治安の良いドリユアス領じゃったから、吾の苦勞（スリ、詐欺、強盗、ボツタクリ等にあわないという意味で）はかなり軽減されていたはず……。となれば、下手に治安の悪い所へ行けば、どうなるかなど考えるまでもないのじゃ。しかし精霊の要望を、無視するわけにもいかぬ。吾は「もうすぐ主が帰ってくるはず」と自身に言い聞かせ、行き先を検討したのじゃ。

（……候補としては、王都トリスタニア、モンモランシ領、ラ・ヴァリエール領、ラ・ロシエール……辺りか、国外はフォローが効かないので却下じゃな）

吾はこの時そう結論を出したのじゃ。そしてオッサン（精霊）に候補地から選択させると、迷わず「王都トリスタニアだ」と返答されたのじゃ。

しかし、この時に吾は知らなかった。ドリユアス家の策略（塩爆弾大作戦）で、王都が混乱している事を……。

王都までの移動手段は、近くの森まで吾が風竜に《変化》して騎獣となり、そこから旅人に扮して王都に入る事にしたのじゃ。わざわざ吾が《変化》を使い人に目撃されるリスクを負ったのは、移動中に逸れる等のトラブルが起きる方が厄介と判断したからじゃ。

吾の思惑は上手く行き、王都トリスタニアに入ったのじゃが……。

「物々しいのう」

「以前と雰囲気が違うな」

吾とオッサン（精霊）が、そう言ったのも無理からぬ事と思う。決して活気が無いわけではないが、時々通りかかる兵士にみな怯えているようじゃ。

「とりあえず魅惑の妖精亭へ行くぞ。そこなら食事・宿・情報と、今欲しい物がすべて手に入るのじゃ」

吾はそう言うと、魅惑の妖精亭へ足を向けたのじゃ。

「その手を放せ」

当然のごとく吾の手は、早速勝手な行動をしようとしたオッサン（精霊）の襟首を掴んでおるのじゃ。油断も隙もないとはこの事じゃ。

魅惑の妖精亭に入ると、ジェシ力達の「いらっしやいませ〜」と言う声が響いたのじゃ。（ジェシ力達の事はカトレアを介した記憶提供で知っていた）そして情報をもらえそうな人物を探す。ざっと目を通したが、時間帯（3時頃）の所為か客の数は9人とまばらで、うち5人が商人と思われる格好をしておった。

（さて、店主に話を聞くのが一番確実じゃが……。ん？）

カウンター席へ数歩進んだ所で、奥のテーブル席に見知った顔があるのに気付いたのじゃ。吾はそこで迷わず進路を変え、奥のテーブルの金髪青年の対面に移動する。ちなみに、勝手に席に座ろうと

する巨漢のオッサン（精霊）の襟首を掴み引きずったので、物凄く目立っているのじゃ。

「相席よろしいかの？」

吾がそう聞くと、金髪青年は「良いですよ」と答えながら、さつと手を上げ何か合図の様な物をする。すると吾の動きに合わせて背後に回っていた二つの気配が、元の席に戻っていくのを感じたのじや。吾はその片割れのテーブルにオッサン（精霊）を座らせると、ウエイトレスに1スウ銀貨を渡し店のお勧めを適当に持ってくるように頼んで、ようやく金髪青年の対面に座ったのじや。

「すまぬの。ファビオ」

「で、何が聞きたいのですか？ 韻竜さん」

不意打ちとはこの事じゃな。これとはカトレアと居る時に、別荘の廊下で一度すれ違っただけのはずじゃが……。

「良く吾の事を知っておったな。その秘密を知るのは、ドリユアス家でもごく一部のはずじゃが……」

「ソース（情報源）は秘密です」

ファビオが意地悪な表情で、人差し指を口に当て秘密のポーズをする。（こんな時に主のマネをされてもな）しかしそのポーズはすぐに崩れ、ファビオの表情が苦笑へと変わったのじや。

「……と言いたいところですが、後でギルバート様達にソースは報告しておきます。まあ『迂闊な御兄弟がいると大変ですね』と、言

う事で……」

この様子では吾が主とカトレア相手に、二重契約している事も知られとるな。ディーネかアナスタシアか分からぬが、主のお仕置きフルコース決定じゃな。御愁傷さまじゃ。！！待て、そのような話題をこの様な場所で……。

「聞き耳防止用のマジックアイテムを作動済みです。更に言えば、あなたの正体も漏れないように細工済みです」

吾の表情を読み取って、先回りして答えられてしまったのじゃ。こいつ本当に優秀じゃな。この若さでとても信じられぬのじゃ。

「で、私に何を聞きたいのですか？」

見事な先制パンチをもらってしまったのじゃ。本当にこの男が敵でなくて良かったのじゃ。

「王都の様子がおかしいのは何故じゃ？」

ファビオは一瞬眉を顰めたが、すぐに元の表情に戻ると口を開いた。

「塩の事はご存知ですか？」

「ああ。『塩爆弾大作戦』じゃろう」

「いえ。今は『オペレーション・ソルトボム』と言ってあげてください。アズロック様の“不名誉”を、これ以上喧伝する事も無いでしょう。マジ商会の新人の発案ですが……」

再び苦笑いを浮かべるファビオじゃが、流石に“不名誉”とハツキリ言うのはどうかと思うぞ。まあ、あのネーミングセンスでは仕方が無いが。

「で、その『オペレーション・ソルトボム』が如何したのじゃ？」

特に変わってない様な気がするのはスルーじゃな。

「はい。この作戦が信じられない位きれいに成功しました。……そう。上手く行きすぎと言う位に」

「それは今回の作戦に巻き込まれて、塩の取引で大量の破産者を出したと言う事か？ ああ、だから犯罪者が増えて……」

吾は合点が行って一人で納得するが、ファビオは首を横に振った。

「いえ、確かに無関係な者の被害は出ましたが、当初の予想と比べると圧倒的に少ないのです」

「どつという事じゃ？」

吾は思わず首をひねってしまった。

「原因は欲に駆られた馬鹿貴族達が、儲けを独占しようとした事です。巻き込まれた者達は、情報操作により一晩で資金を用意しました。しかし借金をしようにも、借りる相手の方も最低限の塩を確保する為に資金を欲していたのです。これにより自然と手持ちの資金を軍資金にするしかなくなりました。これに拍車をかけたのが、馬鹿貴族達が傘下の商会を使い以前から金作をしていた事です。これ

により馬鹿貴族達に資金が集中しました。更に、自分達が仕組んだ事から『塩の値段が下がる事は無い』という油断が重なりました」

「つまり、被害は馬鹿貴族達とその傘下に集中したと……」

「はい。よほどのドジを踏んでいなければ、大きな損をする事は無かったはずですよ」

言い切るファビオじゃが、それがトリスタニアの様子がおかしい事とどうつながるのじゃろう？

「ここからが本題です。馬鹿貴族達やその傘下の商会は、かなり不味い所からも資金を用立てて居た様なのです」

(うわぁー……。出来れば聞きたくないのじゃ)

「あなたもギルバート様から“ロマリアンマフィア”と言うのを、聞いた事があるではないですか？ 神官の特権を利用し、奴隷や麻薬で儲けている蛆虫共ですよ」

やっぱり聞きたくなかったのじゃ。テーブルに突っ伏しそうになるのを、吾は必死に堪えたのじゃ。

「まあ、後の流れは簡単です。ロマリアンマフィアが資金回収に乗り出し、馬鹿貴族達から金をむしり取り傘下の商会を乗っ取ったのです。おかげさまでロマリアンマフィアの活動が、過去に例が無いほど活発化しています。クルデンホルフやマギ商会で、流通関係に先手を打てたので麻薬大量流入の報告は上がっていませんが、奴隷確保の人攫いが最近スラムで多発しています。国王が事態收拾に動いています。神官の特権を盾にされて下手に踏み込めず……」

「状況は最悪じゃな。しかしそこまで強引な手を打つものなのか？
時を置かずに尻尾を掴まれるじゃろう」

吾が率直に言つと、ファビオの眉間にしわが寄つたのじゃ。

「これはあくまで私の予想ですが、ロマリアンマフィアは短期間で
資金を回収し撤退します」

ファビオの眉間のしわが更に深くなり、顔色も怒りで赤みを帯び
てきおつた。

「ロマリアンマフィアの撤退に合わせ、教皇辺りがトリステイン訪
問を行うでしょうね。そしてある程度のパフォーマンスをして、ロ
マリアの威光によりトリステイン王国の治安が回復したと……。要
するに小遣い稼ぎと、ロマリアの威光を見せつけるデモンストレー
ションですよ」

「……なっ！！」

吾は開いた口が塞がらなかつた。話には聞いておつたが、神官と
は何処まで腐つておるのじゃ。

「あくまで私の予想です。しかしロマリアの威光が強まれば、神官
の特権を盾にするロマリアンマフィアも動きやすくなるのは間違い
ありません。まあ、少なくともトリステイン王国の治安が、これか
ら更に悪くなる事は目に見えています。それをどうにかする為に、
トリスタニアまで来たのですが……」

ファビオはそこまで語ると、ため息を吐き黙ってしまった。恐ら

く調査の方が、上手く行っていないのじゃろうな。

吾も今のファビオの発言を検証してみるが辻褄は合うのじゃ。それ以外で考えられるとしたら、高位貴族を抱き込んで大事にならない様になっているか、ロマリアの威光により絶対発覚しないと思っておるかじゃ。前者は王が動き出した事から考えられぬ。後者はいくらなんでも、そこまで無能じゃなからう。……いかん。ファビオの話が正しく思えて来たのじゃ。

どちらにしても、トリスタニアには長居しない方が良いでしょう。ただでさえ吾は、オッサン（精霊）を抱えているのじゃ。これ以上の面倒事は断固として、ご免こうむるのじゃ。

「情報は感謝するのじゃ。今日はここに宿をとり、明日朝一でトリスタニアを立つ事にする」

吾はファビオに軽く頭を下げ席を立つと、空腹を感じオッサン（精霊）の居るテーブルに行き食事を始めたのじゃ。主の情報通り、魅惑の妖精亭の食事は物凄く美味かったのじゃ。しかし、会計の時に度肝を抜かれる羽目になったのじゃ。31エキュ12スウ6ドニエ。かなり高い料理も頼んでいたので、1エキュを超える可能性は十分に考えていた。じゃが31エキュって何じゃ？ ……原因はオッサン（精霊）が頼んだヴィンテージワイン（お値段30エキュ）じゃった。本当にこのオッサン（精霊）は油断ならんのだ。

昨日はブルドンネ街のみを散策（治安が悪くなっているので、メインストリートから外れるのは怖い）し、夜はオッサン（精霊）と

O H A N A S H Iしてトリスタリアからの撤退を了承させるのに苦労したのじゃ。その甲斐あって、朝食が済んだらラ・ヴァリエール領へ移動する事になっておるのじゃ。

「はあく。とりあえず厄介事は回避するに限るのじゃ」

吾は面倒事を回避できた安心感から、油断しておった。顔を洗う為の水を取りに来た井戸の前で、人の気配に気付かなかつたのじゃ。

「スリープ・クラウド《眠りの雲》」

背後からスリープ・クラウド《眠りの雲》をまともに食らってしまったのじゃ。何とか抵抗^{レジスト}しようと試みるも、緊張を解き緩み切っていた吾は眠りへと落ちてしまった。

目が覚めると、そこは檻の中で周りは荷が積まれた広い倉庫じゃった。檻の中には少女が7人ほど囚われておった。服装から察するに、スラムからさらわれて来た者達じゃろう。すぐ近くには数人ほど少年が入れられた檻もある。

「目が覚めたのね」

同じ檻に入れられた少女の一人が、話しかけてくる。

「私はブリジット。身なりは良いみたいだけど……。あなた貴族なの？ お忍びとか？」

吾の服を見てそう言うてくる。吾の服は元々カトレアの服じゃからな……。

ブリジットの年はファビオより少し下の14から15くらいか？
金髪青目で薄汚れた格好をしておるが、体はやや細目じゃが目鼻
立ちは整っておる方じゃ。

「吾は貴族ではないぞ」

「嘘言わないで。こっちはスラムで何年も暮らしているの。平民は
そんな仕立ての良い服は着れないし、まだ新しいから古着でもない
でしょう。商人等の裕福な平民なら、もっとそれっぽい服を着るで
しょう」

（洞察力はあるな。スラムと言う環境故か？　しかし……）

ブリジットの目には、どこか必死さがうかがえた。まるで吾が貴
族でなければならぬような雰囲気じゃ。じゃが嘘を吐く意味は無い
な。

「嘘は言っておらぬ」

「誤魔化さないで。黒髪の貴族なら、ドリユアス家の人間でしょう
？　なら、あの《岩雨》と《乱風》が、助けに来てくれるのでしょ
う？」

ブリジットから懇願の様な物が伝わってきたのじゃ。（……そう
いう事か）得心が行き流石に哀れに思えて来たのじゃ。

「吾は貴族ではない……」

吾がそう言くと、ブリジットの顔が絶望に染まる。

「じゃが、ドリユアス家の縁者と言うのは正解じゃ。助けは来るし、来なければ吾が何とかしよう」

吾は迷いなくそう言い切った。……言ってから不味い事に気付いたのじゃ。これで吾の正体を晒せば、ドリユアス家の縁者に韻竜が居るとばれてしまうのじゃ。吾は内心で「しまった」と思ったが、この娘は吾をドリユアス家の縁者と思い込んでおった。いや、正確には思い込もうとしていたか。ここで吾が否定しても、助かればブリジットはドリユアス家の名前を出すかもしれぬ。なら認めただ上で、口止めした方が確実じゃろう。

まあ、どの道言ってしまった物は仕方が無いのじゃ。たとえ相手にスクウェアメイジが居ても、精霊魔法のカウンター《反射》で十分に対応できる。わざわざ《変化》の魔法を解く必要はないのじゃ。幸いこの場は風が通っているので、風の下級精霊がおるから戦力には困らん。

「そう。やっぱりね。私達は助かるわ!!」

ブリジットの言葉に、囚われた少女達が喜びの声を上げる。しかし全員に共通して言えるが、吾の言葉を真の意味で希望と受け取った者は居ないと言う事じゃ。相手が神官の威光を盾にする犯罪者組織ロムリアンマフである以上、たとえドリユアス家であっても簡単に手を出せる物ではない。それ以前に吾の言葉が“この場に居る者に希望を与える嘘”と、思っている者も居るようじゃ。その証拠に喜び笑顔を見せておるが、目に希望を得た者特有の輝きが無い。

(少し腹立たしいの。我の言葉に説得力は無しか？ 今に見ておれ……)

とりあえず自力で脱出するとして、杖無しで魔法を使ったとなると騒ぎになりかねない。何か杖の代わりになる物は、……都合良くあるわけないか。そう思い周りを見回すと、倉庫自体はかなり大きく目に見える範囲に窓や覗けそうな隙間は無いし出入口は貨物搬入口だけじゃ。じゃが風が流れている事から、奥側に窓や出入口等々の空気の通り道があるはずじゃ。

檻の中と言うのもあるが、搬入口の鉄格子の扉が閉められて居るので、精霊魔法を使わなければ脱出は不可能な状況じゃな。大声を出し助けを呼べればとも思うが、この感じでは聞き耳防止用のマジックアイテムを使っているな。搬入口から覗いたくらいでは、荷物に邪魔されてこちらを視認する事はまず不可能じゃ。

現在位置は精霊達に頼んで把握はあく可能。時間は腹のすき具合と日の傾きから、スリープクラウドを食らってから一時間と少しと言った所か……。現在位置と時間から見て、連れ去られてここに入れられそう時を置かず目覚めたな。

……さて、どうしたものか。

まあ、いざとなれば如何とでもなるか。それより気になるのは、オッサン（精霊）が如何しているかじゃ。吾が居ぬ間に騒ぎを起していないければ良いが。

（……はてしなく不安じゃ。早く脱出せねば）

オッサン（精霊）には、風の精霊に伝言を頼む事にしたのじゃ。現在地と状況に加え「絶対に騒ぎを起こすな」と伝える。……が、どう考えても無駄なんじゃろうな。うう……鬱になってきたのじゃ。

風の精霊にお願いして周りの状況を調べてもらっていると、倉庫の奥に居室兼事務所の様な物があると分かったのじゃ。そこで数人の男が、一人の男に食って掛かっておったのじゃ。

食って掛かる男達は、ギユアギヤア五月蠅いが簡単に言うところ、束通り女奴隷一人を俺達に提供しろ」と言っておる。どうやら男達は、奴隷を確保する為に雇われた人攫いの様じゃ。それに対応する男は「黒髪の女は高値すぎて駄目だ」と答える。デイテクト・マジック《探知》で吾が未通な事を知り、高値で売る為に吾を未通のままにしておきたいのじゃろう。こちらの男は、ロマリアンマフィアの”トリステイン支部長”と言った所か。檻の前に見張りが居ない理由は、この言い争が原因じゃな。

しかも言い争いの原因は“誰が吾の身を汚すか”……か。

……これで馬鹿共の処遇は決まったな。それと同時に、作戦の方向性も決まったのじゃ。方向性さえ決まれば作戦を考えるのも楽じゃ。

先ず木の棚を崩し破壊する。適当な木片を取り寄せ、杖の形に加工する。後は風のメイジを装って、馬鹿共を徹底的に殲滅する。大雑把な作戦じゃが、一人も逃がす心算はないのじゃ。この作戦を確実に成功させるには、一時とは言えこの場の精霊と“契約”が必要じゃろう。“契約”さえしておけば、長い呪文を省略出来るし、もし吾がドジを踏んだ時に風の精霊がフォローしてくれるはずじゃ。

そう思った吾は、周りの人間に悟られぬよう注意しながら、この場に居る精霊達に”契約”をお願いする。

……しかし帰って来た返答は拒否じゃった。

「馬鹿な！！」

つい口から声が漏れてしまい、周りから注目を浴びてしまったが、吾にそれを気にする余裕は無い。

先程まで精霊達は吾の願いを聞いてくれたのじゃ。これは吾が対価を支払い、精霊が労働する小さな“契約”じゃ。それが出来なくなつたと言う事は、場の精霊が他の者と“契約”もしくは“上位の精霊の支配下にある”事を意味する。そしてそんな事が出来るのは……。

ドツカアーーーン！！

派手な音と共に、倉庫の石壁を突き破って何者かが入って来たのじゃ。それは大柄スキンヘッドでムキムキの暑苦しいオッサン（大きな刺青付き）じゃった。その左腕に金髪の青年を抱えておつた。

オッサン（精霊）とファビオは何をやっておるのじゃ！！と、心の中で突っ込みを入れてしまったのは仕方がなからう。

……この状況に檻の中の人間は、完全にフリーズ状態になったのじゃ。馬鹿共も異変に駆け付けたは良いが、あまりの事態に（主に心が）対応できていないようじゃ。（今ならその気持ちがよく分かるのじゃ）

オッサン（精霊）は吾の姿を確認すると、ファビオを後ろにポイントと投げ捨ててサイドチェストのポージングを決める。と同時にオッサンの後ろから、落下音と「へぶう」と言う悲鳴が聞こえたのじ

や。……ファビオは大丈夫じゃろうか？　と言うか、突っ込みどころが多すぎじゃ！！

「悪漢共！！　我が正義の鉄槌をくれてやろう！！」

ポージングを決めながら、オツサン（精霊）が決め台詞？を吐く。そこでわれに返った馬鹿共が、一斉いっせいにオツサン（精霊）に攻撃を開始したのじゃ。そして、そこからの展開は早かったのじゃ。自称火のトライアングル（おそらく事実）やら自称風のスクウエア（間違はなく嘘。おそらくラインクラス）を含め、その場にいた馬鹿共を全て殴り倒したのじゃ。……それもH A H A H A H Aと、アメコミのヒーローの様に笑いながら。

相手からすれば、この状況は恐怖を感じずには居られなかったじやろう。見た目だけでも怖いのに、攻撃がトライアングルクラスの魔法も含め全て跳ね返されたのじゃから。しかも逃げられぬように風で陣を敷き、逃げ出した馬鹿は強制的に走る方向を変えられ、何時の間にかオツサン（精霊）に向かって走っているのじゃ。最後の方は顔や股間からあらゆる物を垂れ流し、許しを乞うていたのじゃ。

本来なら主の様に「ザマーミロ」と言うのじゃろうが、凄惨過ぎてちよっとコメント出来ぬのじゃ。

戦闘“？”終了後に吾は檻から解放され自由の身となったのじゃ。そして吾は、現実を認識出来ずに呆けているブリジット達を連れて倉庫から逃げ出し、適当な所で戻って来ると、ファビオが興奮しながら居室兼事務所の資料を漁っておったのじゃ。ちなみにオツサン（精霊）は、誰も見て居ないのにポージングを繰り返しておった。

……何じゃろう？　このカオスな状況。

ファビオが興奮しながら主の父を呼びに行き、オッサン（精霊）と一緒に魔法衛士隊が引き取りに来るまで馬鹿共の見張りをさせられてのじゃ。待っている間にオッサン（精霊）が、ポーシングを決める度に感想を聞いて来たのじゃ。お願いじゃから止めてほしい。切実に。

そして一番困ったのが事情聴取を求められた事じゃ。当然オッサン（精霊）が、まともな受け答えが出来るはずが無いのじゃ。更に言えば、ばらしてはならぬ事も平気で喋りそうじゃ。その場は興奮状態であることを理由に逃げて、後日主の父にオッサンが精霊である事を話して事情聴取を免除してもらったのじゃ。その際証拠として、オッサンの口から1サント位の木の精霊（分霊）が飛び出したのは、吾も度肝を抜かれたのじゃ。当然、主の体〓オッサンと言う事実は隠したのじゃ。……主の名誉の為に。

安心したのも束の間で、トリステインでオッサンの存在が噂になってしまった。噂の元はブリジット達じゃな。

王都トリスタニアに居づらくなった吾等は、ファビオに誘われてゲルマニアの首都であるヴィンドボナに行く事になったのじゃ。と言うか、ファビオがオッサン（精霊）を誘って、吾が拒否権を発動する前に行き先が決定していたのじゃ。

ヴィンドボナに着いてからは、今までと別の意味で大変じゃった。やたら吾が声をかけられ、最悪の場合オッサン（精霊）との決闘騒ぎにまで発展する。そんな時はオッサン（精霊）の代わりに、吾が決闘を受ける羽目になるのじゃ。……オッサン（精霊）では、精霊魔法（先住魔法）と看破される様な魔法を使いかねないので、これは仕方が無い処置なのじゃ。

そしてオツサン（精霊）に飲み物を買って、戻ってくるとそこには吾を韻竜ではなくティアと呼ぶオツサンの姿が……。

- - - SIDE ティア END - - -

ティアが話し終わると、私は頭を抱えてしまいました。

「で、ファビオは如何したのですか？」

頭は痛いですが、聞く事は聞いておかなければなりません。

「ファビオはアルブレヒト3世に面会した後、調整があると言って一足先にドリュアス領に帰ったぞ」

ティアの話だけでは、不明瞭な部分が多すぎます。これはファビオにも話を聞かなければなりませんね。それに、このままヴィンドボナに居たら、ティアに目をつけた男達と決闘騒ぎになるかもしれないですね。もしその相手がゲルマニアの有力貴族だった場合は、面倒事になりかねません。早く自領に戻るにこした事はありません。

……何だかんだ言って、自分の家でゆっくり休みたいだけです。

「ティア。明日朝一でドリュアス領へ戻りましょう。……精霊達は如何するのですか？」

私はあえて声に出し、精霊達に肉体の操作権を渡します。

「本来の魂が戻って来たのだ。ここで我等が居座ったのでは、肉体に余計な負担をかける。よって吾等は分霊を解き去る事にする。…韻竜よ世話になったな。興味深い時を過ごさせてもらった。次もよろしく頼む」

精霊がそう言葉を発すると、私の中から力が霧散するのを感じました。その事にホツとしていると、突然ティアが私の両肩をガシツ掴んで来ました。

「断固拒否するのじゃ」

なんか……ティアの口から怨念のこもった声が漏れました。（いつものティアじゃない）

そして次の日、全速力で家に帰らせていただきました。絡まれ防止の為に、ティアには猫になってもらいヴィンドボナを脱出。全速力で近くの森へ移動し、風竜に《変化》してもらいドリユアス領まで不休で飛んでくれました。

急いでくれるのは助かるのですが、そこまで急ぐ事は無いのではないのでしょうか？ そう思い聞いてみると……。カトレアと早く再会したくないのか？ と、逆に聞かれてしまいました。しかしその時ティアが、僅かに目をそらしたのに気付きました。……レンを通してカトレアから何か言われたのでしょうか？ まあ、気にしても仕方が無いですね。

別荘に到着すると、出迎えのカトレアに無言で抱きつかれました。

「如何したのですか？」

「もうオツサンにはならないで」

心配して声をかけると、なんかとんでもないお願いをされました。残念ながら30年もすれば、どう足掻いてもオツサンの仲間入りです。私はこの事実苦笑いしか出来ませんでした。カトレアは私の態度を誤解して受け取ったようです。突然泣き出し「ギルの馬鹿！！」と、叫びながら元気に走って行ってしまいました。と言うか、私の心を読めなかったという事は、相当テンパッていたようですね。

しかしこの事実だけ見ると、私がカトレアを泣かせたみたいですよ。（いや、実際そうなんだけど）出迎えに来たディーネやアナスタシアに使用人達は、私に対して非難の視線を向けてきます。ティアに見捨てられました。この場に父上と母上が居ない事を神に感謝したいくらいです。もし母上がこの場に居たら、絶対にエア・ハンマ―《風槌》で吹っ飛ばされています。

この後誤解を解くのに、多大な労力を割く羽目になりました。また、ティアとレンがやたらと纏わりついて来るので、誤解を解く労力が倍増したと付け加えておきます。

そして、ファビオを呼び出して話を聞けるようになったのは、帰還してから三日もの時間が経過していました。（勘弁してほしいです）

「ファビオ。少し話を聞かせてもらいたいのですが……」

「ロマリアンマフィアの件ですね。王家に提出する報告書の原案を持ってきました」

はい。私の欲しい情報が即出てきました。渡された資料をパラパラとめくって目を通していきます。

「神官とマフィアに貴族派の繋がりを示す証拠が結構出ているみたいですね」

「はい。しかし一部の神官との繋がりを示す物ばかりで、ロマリア自体を追い詰める様な物は残念ながら……」

ファビオの顔が悔しそうに歪める。仕方が無いとは言え、ファビオのロマリア嫌いも筋金入りですね。こっちとしては、あまり事を荒立てたくないのですが。

「いえ。トリステインの治安が確保されただけで十分です。陛下が魔法衛士隊を効果的に使ってくれたおかげで、神官はともかくマフィアの捕縛は順調なのでしょう？」

「はい。そちらは問題ありません。ただ……」

「？　ただ？」

言い辛そうにするファビオに、嫌な予感が止まりません。

「トリスタニアではスキンヘッドの大柄ムキムキ男が、ヒーロー扱いと言うか……都市伝説と言うか……」

吐血するかと思いました。その正体が肉体だけとは言え、自分である事は絶対に墓の中に持って行きます。それを知るティアとカトリアは、オッサンがトラウマになっているようなので、そこから

漏れる心配はありません。ファビオ達は正体が精霊であることしか知らないのです、感づかれない事を祈るしかありません。

「……そ　それより、アルブレヒト3世と面会したそうですが何故ですか？」

明らかに話題をそらす私に、ファビオは黙って応じてくれました。

「今回のオペレーション・ソルトボムで、ドリユアス家とマギ商会は多方面から恨みを買っています。当然その中には怒らせたくない相手も居ます。その筆頭がアルブレヒト3世です。……ここまでは良いですか？」

今回の一件に巻き込まれた者の中で、一番怒らせたくないのは確かにアルブレヒト3世です。私は頷く。

「ゲルマニアは始祖の血統ではない事で、他国に軽視される傾向があります。それに拍車をかけているのが、始祖至上主義を謳うロマリアの威光です。よって潜在的にゲルマニアは、反ロマリアの傾向があります。そんな国にロマリア神官の悪事の証拠を、手土産にしたらどうなると思いますか？」

そう言われて私は、もう一度資料に目を落としました。確かにゲルマニアどころか、ハルケギニア中で不正を行う神官の証拠もありますし、その神官と繋がっている貴族の名前も分かっています。資料によれば、ゲルマニアにも少なくない被害を出していますが……。

「しかしこの程度の手土産で、アルブレヒト3世が納得してくれるとは思えません……」

「私も最初は恨みを軽減するのが精々と考えていました。アズロック様も恨みを解消する為の取っ掛かり程度に考えていたようです。しかし今回奪取した証拠資料の中に、この状況を覆す物があったのです」

そこでいったん切って、笑顔を見せるファビオに私は眉を顰めました。

「ゲルマニアの塩取引を牛耳っていたのは、貴族派の筆頭だったのです」

しかし私はまだ納得できませんでした。敵の敵は味方と言いますが、それが当てはまるとは思えません。特に今回は見ようによっては、獲物を横取りしたように見えるかもしれませぬ。現に塩の利益を吹き飛ばしている訳ですし。

「貴族派は塩の市場を破壊した責任で、塩鉱を召し上げられる理由を作ってしまった。ここまでなら回避のしようもありましたが、塩取引にまで手を出して散財してしまったのです。こうなると塩鉱どころではありません。アルブレヒト3世は、苦もなく塩鉱を召し上げる事に成功したのです。これにより塩の値段を、格段に下げる事に成功しました。更に貴族派はかなりの額の横領をしていたので、国内のみ見れば国の収入は増えています」

私はファビオの言に頷く。横領も発覚したと言う事は、かかわった貴族派は領地も召し上げた上に極刑ですね。

「問題の国家間の塩取引についてですが、現状を踏まえてアズロック様はトリステイン市場からゲルマニアの岩塩を追い出すのを避けるつもりの様です。岩塩の価格が下がっているので、価格で海水塩

は岩塩に勝つ事は出来ません。そこで海水塩は平民でも手の届く高級塩として、市場に流す事にしたようです」

ここで塩の輸入を禁止しないと言う事は、ゲルマニアだけが得をしてしまいます。ご機嫌取りにしてはやりすぎです。何か裏がありますね。

「その見返りとして、この証拠を大々的に公表するのを引き受けてもらいました」

「はあ？」

ファビオが凄く良い笑顔で言ってくれました。フリーズし掛けた頭に鞭打って、その理由を分析します。

「えっと……、ドリユアス家がロマリアに目をつけられない為の処置ですね。それにトリステインも一国では、ロマリアに目をつけられる様な事は避けたいと言う事ですか」

もっと言わせてもらえば、ゲルマニアが中心になって、ガリア・アルピオンも巻き込んで反ロマリア感情を煽ってもらおうと言う事です。これでロマリアの威光を失墜させ、ハルケギニアで孤立させてしまおうと言う腹ですね。

「はい 正解です」

容赦ない……と言うか、えげつないですね。物凄く上機嫌なファビオを見て、絶対コイツの発案だと思ったのは秘密です。

ファビオとの話も終わって、この件に関してはノータッチで行こうと決めました。巻き込まれたくないですし。それよりも私には、片づけなければならぬ事があるのです。ディル＝リフィーナから持ち帰った物を……ではなく、カトレアの事です。

……一応、性魔術も習得して来ましたし。

リタ達に性魔術を教えてくれと言ったら、タコ殴りにされたのは良い思い出です。何でだろう……、思い出したら目から汗が出てきましたよ。その後理由を説明したら、一応納得してくれましたが暫く白い目で見られました。

しかもリタに「理論は教えてあげられるけど、習得は相手がいなければ不可能よ」と言われた時の絶望感は、かつて経験した事が無い物でした。如何にもならないと思っていたら、レンが「吾ならカトレアも納得するぞ」と言ってきたので、何故？と聞くとカトレアとある協定を結んだそうです。その言葉を信じて唇のみで練習しました。（……カトレアの嫉妬が怖いし）

当然ですがティアと同じで、レンも物凄い美人なのです。見た目12歳と言うのを差し引いても、理性がガリガリ削られます。最初は性魔術を指導する人が居たので、問題なく耐える事が出来ました。最初が、居なくなつた後が大変でした。「私はロリコンじゃない」「カトレア怖い」を心の合言葉にして、何とか耐えきりました。いったい何度レンを、押し倒すかベッドに引きずりこむ誘惑に駆られ事か……。しかも一年しないうちに、レンから色々とおねだりして来るようになったのです。次第におねだりの手も込んできて、終いには周りの女性陣を味方につけられました。「いい加減抱いてあげたら」とか言われても、本気でカトレア怖いんだもん。

それを六年も耐えた私を褒めて欲しいです。（と言っても、性魔術の熟練度上昇と共に性欲や性感をコントロール出来るようになっていなければ、とうに筆おろし済みですが……）

カトレアの状況ですが、拗ねられました。オッサンの誤解はすぐに解けたのですが、毎日レンと唇を交わしていた事が原因です。苦勞して聞き出したのですが、相手がレンだった事自体は怒っていないようです。と言うか、精気の無い目で私を見ながら「他の人だったり、それ以上していたら……」と言われた時は、背筋が凍るかと思いました。

で、結局何が気に入らなかつたかと言うと、私とカトレアはまだ一度も唇を重ねていなかった事です。本来なら少しの文句と我儘で済む話らしいのですが、私とレンが唇を交わしていたのは性魔術の練習。……つまりカトレアを助ける為の行動だったので、気持ちの持って行き場を無くしてしまったのが原因です。それでも最初は流すつもりだったようですが、一度拗ねて引っ込みがなくなつたみたいですね。

更に、拗ねたカトレアが可愛くて構ってしまった私もダメですし、構ってくれるので三日も拗ねっ放しになってしまったカトレアもダメです。物凄いダメツプルぶりを発揮してしまいました。その光景にティアが「傍から見ると砂糖吐きそうじゃ」と言って居ました。ごめんなさい。

そして、いよいよカトレアを治療する時が来ました。

カトレアの強い要望で、最初は普通にして二回目に治療を行う事

にしました。カトレアの体の事を考えるなら、最初の一回で治療してしまうのがベストなのですが、初めてが治療行為ではあまりにも悲しすぎると言う事で私も同意しました。

「カトレア。準備は良いですか？」

私がそう聞くと、カトレアの体が跳ねて「えっ えーと、体は入念に洗ったし……下着は……」と、独り言を言うようにブツブツと確認しています。結構テンパッているみたいですね。

「ウン ダイジョウブ」

全然大丈夫じゃなさそうです。本当にこんな状態のカトレアとしてしまって良いのでしょうか？

私はガチガチになっているカトレアを、ベッドの上に座らせませす。

「はい。まずは深呼吸しましょう」

深く三回深呼吸させると、カトレアの状態は多少マシになりました。続けて正面から抱きしめて、背中を優しく撫でます。暫くそうしていると、カトレアも私を抱きしめ返して来ました。私は一度ギョッと抱きしめると、体を放しカトレアと正面から見つめ合います。

まだ硬さが取り切れないカトレアに、私はつい吹いてしまいました。

「な 何が可笑しいのよ!!」

怒るカトレアに、私は笑いながら言い返します。

「少し前のカトレアなら、押し倒されていたなと思ひまして……」

カトレアは大いに不満の表情を浮かべましたが、言い返して来る事はありませんでした。そしてカトレアの頬に手を伸ばすと、軽く撫でます。極度の緊張や恐怖感が無い事を確認すると、私はカトレアと唇を重ねました。唇と唇が触れるだけのキスです。

唇を放すと、先程怒りにより霧散した硬さがカトレアに戻って来ました。私は構わず同様のキスを何回か繰り返します。するとなれて来たのか、カトレアの体から余計な力が抜け硬さが取れてきました。次第にキスの時間を長くして行き、頃合いを見てカトレアの唇を軽く舐めます。カトレアの体が驚きでビクツと跳ねましたが、拒絶する事無く私の唇を舐め返してきました。やがて互いの舌が触れ絡める様になると、私達は互いの背中や首に手をまわし貪り合う様に互いの唇を求めました。

暫くそうしていると、六年間の修行の成果があまり良くない形が出てしまいました。無意識にカトレアの病状を読み取ってしまったのです。正直無粋な事をしてしまったと思いましたが、やってしまったものは仕方ありません。幸いカトレアはキスに夢中で、心を読む力も発動していません。

ここは気付かれる前に集中した方が良いと判断し、行為に没頭しようとした所でふと気付いてしまいました。カトレアの治療は最後までしなくとも、キスによる性魔術だけで十分に完治可能であると分かってしまったのです。

この事実の中に迷いが生まれました。婚前交渉は本来不味い事ですし、なによりセックスそれ自体が体力を激しく消耗するので

す。不慣れなら尚更ですし、まして私達はお互いこれが初めてなのです。体力の消耗を考えれば、本来なら病気のカトレアとは絶対にしてはいけない事なのです。

「ん……チュツ　クチュツ……チュツ」

キスに夢中なカトレアには悪いですが、私はこのまま治療を強行する事にしました。

カトレアの背中と首にまわした手を引っ込め、キスを止めるとカトレアの口から「ああ」と、名残惜しそうな声が漏れました。私はそのままベッドにカトレアを押し倒すと、期待と不安の目を無視しカトレアの頬に両手を添えてもう一度キスをします。しかし今回のキスは、愛情を表現するキスではなくあくまで治療です。抵抗できない様にカトレアの体に覆いかぶさり、頬に添えた両手はそのまま頭を固定します。

そして互いの口を通して、私の魔力をカトレアの中に叩きこみました。それと同時に、私の体を跳ね上げようとするカトレアを無理やり押さえつけます。

「むぐっ！！　むっっ！！　んん……んくっ！！」

カトレアは私を押し退けようと手に力を込めますが、性魔術の快感で碌に力が入らないのでどんなに必死になっても無駄です。

「んんんっ！！　んぐう……んくう！！　んっ……むぐう！！」

やがてカトレアの抵抗も、私の胸をドンツドンツと叩いたのを最後に止まりました。腕はくっつと放り出されて、カトレアの喉がコク

ンツと音を立てたのが分かりました。

「んーーーーっ!!!」

カトレアの全身から完全に力が抜けました。どうやら気絶したようです。それとほぼ同時に治療の方も完了しました。それとカトレアから取り出した病巣が、私の口の中で結晶化したようです。

「ぺっ!!!」

吐き出すと、それは長さ4センチ位の青い楕円体のクリスタルの様な物でした。

「これで完治祝いに何か作ってあげるか」

そう言いながらカトレアの方を向くと……。

「あっ!!! これはちよつと不味いかも」

そこには、詳しく描写すると「18歳未満は禁止です」と、言われてしまう様な惨状のカトレアが居ました。未だ気絶したままですが、目を覚ましたらどうなるのでしょうか？ 完治を喜ぶ？それとも、私の行った事に怒る？ 後者だった場合は、地獄を見る事になります。忘れがちですが、カトレアはあの《烈風》の娘でありルイズの姉なのです。

私が如何しようか迷っている内に、カトレアは目を覚まし起き上がります。私はこの時、攻撃されたり泣かれたりする事まで想定していました。

しかし目を覚ましたカトレアは、黙って身だしなみを整え始めたのです。

「あの、カトレア……」

「お願い。今は放っておいて」

複雑な表情を見せるカトレアに、私はただ頷くことしか出来ませんでした。

学院の事もあるので、公爵達にカトレアの完治を手紙で知らせました。

驚いた事に手紙を出して二日で、ヴァリエール家全員が別荘に揃いました。これは驚異的な事です。梟便フクロウ便(伝書梟を飛ばす事)で送ったので、距離を考えると手紙が届くのに一日〜一日半かかります。手紙を受け取ってすぐに出発しないと、ここまで早く集まれません。まさかとは思いますが、仕事ほっぽり出して来た訳ではありませんよね。

学院入学の話したら、入学の準備をすと言ってカトレアはカリーヌ様に連れ去られました。物凄く良い笑顔でした。カトレアと買い物に行けるのが、よほど嬉しかったのでしよう。

ヴァリエール家の対応の速さに、カトレアと仲直りをする機会を

逸してしまいました。

第五十一話 ハルケギニアよ！！私は帰って来た！！（後書き）

作者の理性もガリガリ削られています。

最近テレビの変換機を買いました。

変換機の名前は、…… P S 3 っ て名前なんだ。

せっかく買ったソフトに全然手をつけていません。

これを投稿したら、暫くアルトネリコ3を……。

そろそろ外伝も書くべきか迷っていたりします。

ネタも溜まってきたし……。

ノクタも方もどうしよう？

ご意見ご感想お待ちしております。

第五十二話 モヤモヤは仕事にぶつけ……られない？

こんにちは。ギルバートです。……すみません。何も言わないでください。カトレアはあのあと一言も口きいてくれなかつたし、しよせん私は彼女との初エッチに失敗した愚かな男です。私に価値なんか……。

すみません。鬱入ってました。ごめんなさい。

まあ、レンはカトレアと一緒に行ってしまいました。ティアが私のそばに（ぬこverで）黙って居てくれたので、正直かなり救われました。

それでも、結構な期間落ち込んで居た気がしますが、いつまでも落ち込んで居られません。カトレアが近くに居ないモヤモヤは、仕事にぶつけようと思います。このままだと、ティアの秘密を漏らした二人に八つ当たりしてしまいそうですし……。

しかし仕事をしようにも、ドリユアス家の本邸は既に完成済みでした。一方、アナスタシアは私の留守中に、自分に合った武器を見つけたようです。私に「形になったら見せるから楽しみにしてて」と、自信満々に言って来ました。ディル＝リフィーナで手に入れた魔法金属の加工も考えましたが、領内の産業活性化の方が優先度は高いので後回しです。……どうせ一人前と認められないと、自分用の剣も作れませんし。

先ずメインとなるのが、ディル＝リフィーナより持って帰って来

た農作物です。特に火山の地熱を利用した南国フルーツやスパイス類は、成功すればかなりのリターンを期待できそうです。他にも予定通り竹を入手できたのは嬉しいですし、茄子を見つけた時には思わず種を購入して居ました。

これに成功すれば、別荘周辺はフルーツとスパイスの生産地になります。ドリユアス領の重要な収入源となってくれるでしょう。

農作物は小麦等の既存の穀物や野菜の他にも、タルブで細々と作られてる米を他領に広め増産を目指します。

更に肥料の不足が予想されるので、畜産関係にも力を入れ問題の解決と更なる産業の発展につなげます。現状でハルケギニアの家畜は羊と牛と馬の三種が主ですが、これに豚と鶏で市場に攻め込みたいと思います。特に鶏は、鳥肉が非常に高価な事と卵による収入も見込めるので期待しています。

……それに畜産系は、騎獣達の餌代による財政の圧迫に待ったをかけられる重要な要素です。失敗は許されません。

他にも海産物に関しては、干し物を研究開発する事により活性化が見込めます。これは既に鰹節が生産に成功しているのです、他にも干し昆布・魚や海藻の塩漬けや油漬け等の保存食の生産に成功すれば、新しい産業として成り立つでしょう。成功するかわかりませんが、海苔も研究しようと思います。

温泉を利用して別荘周辺を観光地化する予定なので、ドリユアス家主導で芸能娯楽関係にも力を入れようと思います。色々と案も考えてありますし。

と言う訳で企画書と資料を作り、父上に提出する事にしました。

「父上。母上。お話があります」

今の父上と母上は、ドリユアス家本邸西側の森を切り開き街を作る計画と、旧ドリユアス領から別荘まで伸びた街道をオースムまで伸ばす計画も同時に推し進めています。その為かなり多忙です。

私個人の意見を言わせてもらえば、領内の経済活性化に努め大きな黒字を出せるようにする方が先と思うのですが……。

「それで、話とは何なのだ？ ギルバート」

父上に促されて、私は企画書と資料を父上に渡します。

「領内の経済活性化の為の企画書と資料です。許可いただければ、早急に取りかかろうと思います」

父上は「ふむ」と言いながら、私の企画書と資料に目を走らせて行きます。母上も気になるのか、後ろから覗き込んでいました。

「農業や畜産関係に関しては問題無い。……別荘周辺の観光地化までは良いが、芸能娯楽関係をドリユアス家が主導するのは、独占と思われて良くないのではないか？」

「領主が観光地の芸能娯楽関係を独占する事により、他の商人が入り込むすきを極力潰すのが目的です。流入した商人の主導で歓楽街が出来るのと儲け中心になり、モラルの低いハルケギニアでは治安悪化が懸念されるからです。と言っても、取り締まりは必要ですがガチガチにやる必要はありません。そう言った者達に、“自分達は領主

に見逃してもらえらる範囲でやっているんだ」と、認識させられれば良いのです」

私は心の中で（最低限の見せしめは必要なだろうな）と、嫌な考えをしながらも、予想済みの質問だったので即座に答えました。

「分かった。今回もギルバートが主導で行うのだろうか？ ならば、予算と人員を預けるので好きにやると良い。……期待して居るぞ」

「はい。ありがとうございます」

もっと質問が飛んでくると思ったのですが、アツサリと許可がありました。信頼されているからでしょうか？ まさかとは思いますが、忙しさのあまり投げやりになっていませんか？

ちょっと心配になりましたが、予算が降りたなら何とかなるでしょう。

「ギルバート」

退出しようと思ったら、突然父上に呼び止められました。

「お前もドリユア家を継ぐ身なのだ。そろそろ自分で作業せず人を使う事を覚えろ」

……えーと。父上は何を言っているのでしょうか？ って、聞き返すまでもありませんね。

「私が持っている知識は、ハルケギニアではある意味異端とも言えます。やれと言われて、はいそうですかと出来る類たぐいの物ではありません」

せん」

一応ここは反論しておきます。

「別にいきなり一から十まで全てやらせると言う訳ではない。お前の知識や技術を人に教えて、その人に仕事を任せる事を覚えると言っているのだ。でなければ、お前の負担ばかりが増えてしまうからな」

……うっ。正論です。

「はい。分かりました」

一応頷きましたが、私の知識が完全に無いのがネックとなります。人員不足もありますが、知識の穴を埋めながらの作業があるので、如何しても私が付きつきりになってしまうのです。それが出来ないとなると、何かしらの失敗により余計な経費がかかってしまいます。……いや、部下達の成長を考えるなら、それも必要な事は分かりません。しかし、予算はまだ何とかなるとして、時間の方はキツイしか言いようがありません。

「正直に言わせてもらえば、ギルバートちゃんは生き急ぎ過ぎているように見えるの。周りの貴族共を見習^{バカ}っては言わないけれど、これを機会にユツクリする事も覚えなさい」

更に母上が追い打ちをかけてきます。純粹に私を心配しての言葉なので、全く言い返せませんでした。次の一言は勘弁してほしかった。

「ギルバートちゃんは夢中になると、私達の忠告が頭から抜けちゃ

いそうだから、必要以上に現場の作業をさせない様に通達しておくわ」

執務室を出た後、私は肩をガツクリと落とす羽目になりました。

「ギルバート」

執務室の扉から離れようとした所で、突然扉から出て来た父上から呼び止められました。

「何ですか？」

「言い忘れていたが、本邸西の新しい街の名はドリアードに決まった。それから……」

何故か父上がいよいよどむので、不思議に思っていると……。

「別荘に訪問されたアンリエッタ姫の意向で、温泉の名前は『シユワシユワ温泉』に決定した。それに伴い、別荘周辺の地名も『シユワシユワ』に決定した。よって、お前の反対意見は却下となった」

（アホリエッター！！　なにさらしとんねん！！　と言うか、何で誰も止めないかな！！　シユワシユワ……か、ダサイ名です。それとも私の感性が変なのでしょうか？　いや、そんなはずは……）

父上は「気を落とすなよ」と言って執務室の戻って行きました。

私は両手両膝をつき頂垂れ、落ち込まざる負えませんでした。

何時までも落ち込んで居られないので、作業を開始しようと思いません。

その前に手持ちの資金と人材ですが……

父上も何を血迷ったのか、二十万エキュールもの大金をポンと出して来たのです。いったい何を考えているのでしょうか？

人材もマギ商会から私専属で三人付きました。以前塩田設置で世話になったアンリとジュール。それにマギ商会が『オペレーション・ソルトボム』で獲得した新人で、元行商人のジルダです。アンリが私の補佐を務め、更にジュールとジルダがアンリの補佐を務める形です。補佐に補佐が付くなんて、私の補佐はそんなに大変なのでしょうか？ いや、おそらく私が頑張り過ぎな様にする為の見張りの意味もあるのでしょう。

(……そつちがその気なら)

「バシバシ働いてもらう心算なので、よろしく頼みます」

とつても良い笑顔で挨拶してあげました。それを見たアンリとジュールは、思いつきり顔を引きつらせます。この二人とは以前塩田と一緒に仕事をしたので、私の笑顔の意味に気付いたのででしょう。一方でジルダは、挑戦的な笑みを隠し切れていませんでした。大きなプロジェクトに関われる事に喜んでいるのですが、そんな顔をしていられるのも今の内です。

私は三人に、苦心して作り上げた企画書と資料を渡します。渡し終わった所で「アンリとジュールは既に知っていると思います。が、

私は堅苦しいのは苦手です。公の場や他の貴族が居なければ、普段は同僚として接してほしいです」と言っておきます。ジルダが少し驚いたような顔をしていたが、すぐに平静を取り戻しました。

「さて、先ず私達がしなければいけない事は、ブレス火山のふもとに地熱を利用した巨大温室の建造です。これを設置しなければ、フルーツとスパイスの栽培はまず不可能と言って良いでしょう。また、竹は温暖で湿潤な気候を好むので、同じくブレス火山のふもとで水源の近くに植えようと思います。ここでやってもらいたいのは、必要な人員と建材の確保です。特にメイジは私の方で数人確保しますが、数が圧倒的に足りません。難しいとは思いますが、お願いします」

私がそう説明すると、アンリが頷き「それは私に任せてください」と宣言しました。

「それと同時進行で、ドリユアス領で飼育する豚と鶏の親を購入します。資料にある通り、既にマギ商会に依頼して調査し購入する親候補は決まっているので、後は買い付けだけです。基本的に、豚も鶏も放牧をする予定です。豚はクヌギ・カシ・ナラ・カシワ等のドングリが生る森^なを用意があるので、そこに家畜小屋を建てて飼育します。合言葉は目指せイベリコ豚です。鶏も広めの柵を作り、その中で自由に動き回れるようにする事で肉質を良くします」

三人そろって、（イベリコ豚って何？）と言いたそうな顔をしていましたが、すぐにジルダが「それは俺が担当します」と言って来ました。

「海産物の鰹節・燻製・乾物や塩漬け・油漬けは、人を雇ってやる形ですね。設備を用意してやり方を教えれば、後はまかせっき

りで大丈夫でしょう。これを担当するのはジュールですね」

私がそう言うと「はい」と、元氣良く返事してくれました。はじめて任される大きな仕事なので、やる気に満ち満ちているようです。

「問題は農作物の増産です。如何しても開墾や維持で人手が必要になるからです。街の建設や街道設置に人手が取られている現状ではとても実行に移す事は出来ません。それは米を広め増産するのも同様で、タルブで実際に生産している者を雇いマギ商会のバックアップを付け広めても、実際に田を作る人員が居なければ意味がありません。人を確保でき次第、少しずつ進めて行くしかありません。あとは連作障害等の知識で、何処まで収穫量を伸ばせるかです」

精霊の加護があるとはいえ、農作物の増産を後回しにするのは良くないので、人手が足りないので仕方ありません。後回しです。

「芸能娯楽関係は主に私が担当します。劇・演奏・演舞に詳しい者をそれぞれ集めてください。その中から私が実際に会って選考します」

芸能娯楽関係についてですが、演劇系はマギ知識のシエイクスピアを真似するかアレンジすれば良いです。演奏もクラシックから、いくらかでも引用できます。後は演出関係の見直しです。スポットライト・《拡声》の効果があるマジックアイテム・オペラグラス等の開発や購入が必要ですし、既に完成しているセット切り替えの為の回転床も有効利用しなければなりません。演舞は精霊の住む地を意識して、幻想的な物を目指して開発しようと思います。案は考えてあるので、後でディーネ辺りを実験台にして感想を集めようと思います。大丈夫だと思いますが、ダメなら別の内容も考えないといけません。

いです。

「アンリは人員と建材の確保に動いてください。ジルダは家畜の買い付けをお願いします。ジュールは私と一緒にフラークニッセに飛んでもらいます」

私はあらかじめ決めてあった予算をアンリとジルダに渡し、ジュールと護衛（クリフ+ドナ）を連れてフラークニッセに渡りました。

海産物関係の仕事は、割とあっさり片付きました。

鰹節への不安感が心配でしたが、鰹節を実際に食べさせてたら真面目に作り方を学んでくれました。一食速解です。続いて干し昆布の作り方を教え、魚の塩漬けや油漬けの作り方を教えました。わかめの塩漬けが出来たのは、個人的に嬉しかったです。滞在期間は一週間に満たない時間でしたが、完成した保存食にみんな満足してくれました。

……ちなみに海苔は、上手く行きませんでした。作る事自体は出来たのですが、海苔自体が希少で量はとても不可能でした。一週間では海苔の養殖までこぎつけるのは無理だったので、海苔を養殖する知識を伝えるにとどめました。

ちなみにこの時、工場設置と工場設備の作成で、私とクリフはそこそこ忙しかったです。ティアも害獣避けとして活躍してくれました。

別れ際に殺菌の重要性を入念に説き、より良いレシピの開発と海

苔養殖の検討を依頼して帰還しました。

本邸に戻ると、そのまま地熱温室の設置に駆り出されました。と言つても、着工の挨拶と新人工員の指導のみやらされてお役御免です。時々進行状況をチェックしに行つたり、不明な点や不備がある時に指導しに行くだけになりました。

温室内の作業員も決定していて、完成しても要所要所に私が指導に行く以外はやる事ありませんでした。当然、常に側に居るわけではないので、仕事のスピードにも干渉できません。

……仕事とられました。と言うか、閉めだされた。私が参加すればもつと早く終わるのに。

続いて畜産系ですが、これも仕事にありつけませんでした。それと言つのも王立魔法研究所で孤立していた研究チームを、そのまま引き抜いたからです。彼らは品種の違う家畜を配合して、新しい品種を作ろうとしている研究者達で、合成獣^{キメラ}等の魔法学に頼らない姿勢を上から疎まれていた者達です。エレオノール様経由でその存在を知り、研究所（+牧場）と相応の予算を出すことを条件にドリユアス領に招きました。彼らの中には水メイジも居て、研究の為獣医も兼任してくれる事になりました。窓口になってくれたエレオノール様には感謝しています。

彼らは、最初は私の年齢から良い顔をしていませんでしたが、聞きかじりの現代畜産学をロバ・アル・カリイエの事として教えたらやたら懐かれてしまいました。競馬やひき馬競馬の話をしたのも不味かったです。……待てよ、競馬やひき馬競馬は使えるな。と言つて、この事を父上に話したら即座に許可が下りました。ジルダだけでは手が足りないので、ようやく作業に没頭出来ると思つたら、

マジ商会から新たにギスランと言う商人が派遣されてきました。

……また締め出されました。

更に芸能娯楽関係ですが、忙しかったのは最初の人選を選ぶまででした。劇のシナリオや演奏の話をしている時にディーネが乱入して来たのです。私には、ハルケギニア向けにシナリオをアレンジするのが下手だったので、ディーネが来てくれて正直助かりました。

そして演舞ですが、薄暗い室内で六角形の舞台に半サントほどに水を張り六角形の端に、それぞれ赤（火の精霊）・青（水の精霊）・黄（土の精霊）・水色（風の精霊）・緑（木の精霊）・紫（人間）に色と形を象ったランプを配置して、ディーネに白い衣装を身に纏ってもらい剣舞を踊ってもらいました。ディーネの白い衣装が、動くたびにランプの光の色に染まり幻想的でした。

それが原因とっては何ですが、周りがディーネ中心で動くようになり、何時の間にか私の立場が無くなっていました。この状況で私のポジションが、ディーネの相談役に落ち着いたのは仕方が無いと言えるでしょう。しかもその現状を知った父上が、ディーネを責任者に任命したのです。……泣いても良いですか？

……また仕事を……また締め出されました。凄い凹みました。

仕事がありません。しかし、じっとして居ると余計な事を考えてしまうので、如何にか仕事（没頭出来る物）を探そう頑張りました。そこで私は、樹木が豊富にあるのを利用し製紙産業に手を出す事にしました。私の知識が体験旅行で経験したのは和紙作りのみだった

ので、生産量の都合から手を出す心算は無かったのですが、半ば道楽でやるのでこの際関係ありません。

しかし何が幸いするか分からない物で、和紙を作るのに向く樹木を探し始めた所、何故？と言うか幸運？と言うべきか漆の木を発見したのです。私は喜々として、紙だけでなく漆器しっきの開発に手を出しました。

私は別荘建造時に招いた家具職人から、彫刻の上手いギーと言う職人をスカウトして漆器の試作品を作り始めました。同時に漆器工房を建て、その近くに漆の木を植えました。色を変える方法は、鉄粉を入れる黒色と弁柄（赤色酸化鉄）を入れた赤色しか知らなかったので、とりあえず漆黒と朱色の器を作ってみました。

「なんか、仕上がりは綺麗なんですが、色が味気ない様な……」

（ギー！！ 貴様！！ この漆の良さが分からないのか！！）

腹が立ったので、蒔絵まきえ・沈金ちんきん・螺鈿らでん・拭き漆ふきうるし・彫漆ちやうしつ・堆朱ついしゆ・蒟醬きんま等、知りうる限りの技法について語って聞かせました。……実際に出来るかどうか別だけど。

しかしギーは、話が金箔や銀箔の段になると「金や銀を使うなんて悪趣味」等とほざいたのです。

意地になった私は、エキュール金貨を一枚潰し《鍊金》で不純物から抽出分離し純金に仕上げます。そして、出来た金を羊毛紙ではさんで、ハンマーでひたすら叩いて金箔をでっち上げました。上手く箔状になってくれた物と粉になってしまった物を分けて、蒔絵と沈金に挑戦しました。当然沈金の彫りはギーにやらせませす。

完成品は、二枚の木の板に漆黒の漆をぬり、それぞれ蒔絵と沈金でトリステイン王家の証である百合の花をあしらった物です。双方とも黒と金のコントラストが素晴らしいですが、私が担当した蒔絵の方はお世辞にも美しいとは言えずダメダメです。一方でギーが担当した沈金の方は、実に見事な出来栄えでした。（と言っても、日本の職人と比べちゃいけません）

……根本的な実力差って悲しいです。私が教える側だったのに。

そして完成品を前にして、ギーに「ごめんなさい」言わせてやりました。これで漆器の方は、ギーに任せておけば良いです。

一方で和紙の方ですが、紙漉きの工程で上手く行かず止まってしまいました。紙に如何しても皺や厚みにムラが出来てしまうのです。これは私の熟練度と腕が低いからか？ それとも、道具の再現が上手く行っていないのか？ 原因は不明です。と言っておきながら、間違いなく私の腕が原因ですね。

こちらは人を雇って、上手く行けば弟子を取らせる方向で行こうと思います。と思っていたら、和紙と漆器の事が父上にばれ、人を付けられてしまいました。おかげさまで私の仕事は、視察と書類仕事だけになってしまいました。

結局仕事ではこのもやもやを発散する事が出来ず、イライラしている私を助けてくれたのは、ジャックとピーターでした。彼らは私を剣や騎獣の訓練や遊びに誘うようになったのです。

どうやら私がイライラしているのを見かねたアナスタシアが、二人に相談したのが切っ掛けの様です。

私の仕事は、定期的な視察と少しの書類仕事のみになっていて、この時かなり暇になっていました。更に訓練も、父上や母上だけでなくディーネも忙しくなっていたのです。そしてアナスタシアは、自分に合った武器の扱いを学んでいる最中で、模擬戦が出来ません。当然この状況では、騎獣訓練と剣の訓練は単独でやる事になります。

私は二人の心遣いが嬉しくなり、快く二人の誘いに乗るようになったのです。まあ、訓練や勉強に関しては、完全に私が教える側になっているのは御愛嬌です。逆に遊びになると、私が二人に教わる立場になります。私はハルケギニアの遊びを何一つ知らなかったんだなど、思い知らされました。

ジャックとピーターに押し切られ、アニーの着替えを覗きに行つたのは良い思い出です。まあ、カトレアにばれたら怖いので、ティアに協力してもらい穩便に失敗する様に仕向けさせてもらいました
が……。

そうこうしている内に、ジャックとピーターの魔法の実力が伸びドットからラインにクラスアップしたのです。これに気を良くしたポールさんが、ポーラにもぜひ魔法を教えて欲しいと行って来ました。どうやらポールさんも、アナスタシアから私の事を聞いているようです。

まあ、ポーラには以前にも教えていた事がありますし、工夫して座学を教え杖を持たせられるようにした実績があります。しかし、ポーラはの勉強嫌いは健在で未だに座学から逃げまくりです。これ

では何時まで経っても魔法の成長は見込めません。

「さて、以前と同じ手で良いとして、問題はネタを如何するかだな」
私は無意識の内にそう呟いていました。

そうこうしている内に、時は過ぎ6月（ニューイの月）も下旬にさしかかり、トリステイン魔法学校は夏休みに入ります。

ヴァリエール公爵から少し前に、手紙で“夏休み中に一度家族でシュワシュワに遊びに行く”と連絡を貰っています。私はその手紙を読んで（既に公爵まで毒されているのかよ！！）と、心の中で突っ込みを入れてしまいました。まあ、正式に決定してしまった以上、シュワシュワと言う名前も受け入れるしかないでしょう。

しかし冷静になってみると、公爵家が来ると言う事はカトレアも来ると言う事です。

私は仲直りの一助として、あの時渡せなかった全快記念の品を準備する事にしました。そうと決まれば早速作る事にします。

カトレアから取り出し結晶化した病巣を使います。この結晶はそのままでは割れてしまいそうなので、ダイヤモンドで分厚くコーティングする事にしました。長さ4サントの楕円形の結晶が、直径5サント程の真球になるまで盛り付けたら、ディル＝リフィーナで手に入れたミスリルを贅沢に使って杖を作ります。ワンドのつもりで格闘戦を想定せず、デザイン性を追求して水と螺旋をテーマに、所々チタンの酸化被膜を使って青い色を出しています。

加工に夢中になっていると、何時の間にか宝石部分を含めて全長50センチ近い長さになってしまいました。完成品を眺めていると、ワンドと言うよりロッドと言った感じですが、出来自体は上々と言つて良いでしょう。……アンリエッタが持っていた杖（王錫）より、性能だけでなく見た目も上なのは不味いかな？

後は料理ですね。と言っても、海産物以外は目新しい物はありません。畜産系の豚肉や鳥肉が、まだまだ時間がかかるからです。畜産系で唯一口に出来る状況なのが、試作で届いた卵ですね。有精卵なので、早めに食べないとダメです。フルーツやスパイスは、温室が未完成で種さえ植えていません。

海産物関係は、鰹節や昆布干しを始めワカメの塩漬けと各種魚の塩漬け・油漬けが届いています。

めぼしい物で使えるのは、卵・鰹節・昆布干し・ワカメの塩漬け・魚の塩漬け数種・魚の油漬け数種……か。卵が豊富に有るから、洋菓子類を作れるな。ワカメは水で洗ってサラダやスープにするか。酢の物やワカメご飯は、ハルケギニアに受け入れられるかが問題だな。塩漬け・油漬けは調理に限界があるし。

……ちよつとインパクトが足りないですね。

卵があるなら、卵焼きと相性が良いトマトケチャップを作るか。たしか、トマトを湯むきして裏ごし。すりおろした玉ねぎと一緒に煮て、塩、こしょう、砂糖、ローリエを入れて少し煮たら、酢を入れて完成だったはず。

ケチャップを作るなら、マヨネーズは必須ですね。卵黄・酢・塩・

胡椒の順に入れ攪拌する。少しずつ油を入れながら攪拌を続け、クリーム状になった時点で完成。うん。ちゃんと出来るな。ケチャップもマヨネーズも一部香辛料に代替え品が必要になりますが、作る分には問題ありません。

他に欲しい調味料と言えば……。醤油と味噌は既に有りますし、他に作れそうな物は……。！　そうだ！　魚醤があった！　失敗したな。フラーケニッセで海産物関係の指導の時に伝えておけば……。二度手間になってしまいました。失敗です。

さて、この中でカトレアが喜んでくれそうなのは、……。やっぱり、洋菓子系が一番無難かな？　バームクーヘンでも作るか。専用のオーブンを用意しなくとも、フライパンで作ろうと思えば作れるし。フライパンで焼いた物なら、型を作って抜けば見た目も合格点でしょう。

料理はこんなところでしよう。公爵の手紙では来週到着との事なので、コック達と新しい特産品と調味料を使った料理の創作（再現？）をしなければなりません。

仲直りすると言う明確な目標が出来れば、以前の様なモヤモヤやイライラも感じません。スッキリした顔の私を見て安心したのか、ジャックとピーターもそれぞれの親の手伝いに比重を置くようになりました。

いくつかの料理の創作（再現？）に成功し、公爵達に出すメニューが決まると、途端に暇になってしまいました。

暇になったからと言って、ジャックやピーターは親の手伝いがあります。それを邪魔してまで、私に付き合えとは言えません。

ボーッと何も考えずにいると、アナスタシアが訓練着を着て外に出て行くのが見えました。それを見て居たら、アナスタシアが選んだ武器が気になりました。

始めたばかりの頃は、ロングソード・槍・刀等を振り回していたので放置して居ました。暫くして鞭ムチやダブルブレード等の少し変わった武器を振り回し始めても、まだ私は黙って見ていました。しかしディル＝リフィーナに行く少し前に、ネタで作った洒落武器を振り回している時は流石に止めました。……主に、ハリセン（鉄製）とか、道路標識の斧（一時停止。斧の厚みを感じさせない様にするのに苦労した）とか、仕込簞（アンバーな人が使ってたやつ）とか、終いには樽……いえ、なんでもありません。

アナスタシアの口ぶりからして、新しい武器にもだいぶ慣れて来ているようです。そろそろ見せてもらっても良いでしょう。と言うか、母上を説得する以上、変な武器を選ばれるのは避けたいです。

「アナスタシア」

「なに？ 兄様」

これから訓練に行こうとしているアナスタシアを呼び止めます。

「そろそろアナスタシアが選んだ武器を紹介してほしいのですが」

私がそう言うと、アナスタシアは笑顔になり……

「兄様？ もう 形になるまで秘密って言ったじゃない」

ですが私は、アナスタシアが一瞬だけ目をそらしたのを見逃しませんでした。

「……アナスタシア」

「なに？」

「いったい何を隠しているのですか？」

良く考えてみれば、アナスタシアなら少し前の私に積極的に関わろうとするはずです。ジャックやピーターに頼んで、人任せにするなど考えられません。絶対何かを隠しています。

「ナ ナンノコト？」

声が裏返ってます。……その態度は自白して居る様な物ですよ。

「ナニカクシテル？」

アナスタシアの頭に手を乗せて、殺気を込めながら言っただけです。あまり変な武器を選ばれると、母上への言い訳が効かなくなるので勘弁してほしいのです。……と言うか、イノチニカカワル。ハハウエコワイ。

「……イエ」

……おや？ 普段ならこれで喋るはずなのですが、アナスタシアは口を開こうとしません。私は殺気と手の力を徐々に強くしてい

ました。すると、そろそろ（頭の形が変わると言う意味で）不味いかなと思つた時に、アナスタシアが「言うから許して〜」と、謝つてきました。

「……………です」

聞き違いであつてほしいです。

「とりあえず、どの位扱えるか見せてください」

「ハイ」

本当に聞き違いであつてほしかったですが、本当に適正があるなら無かつた事にするには流石に気が引けます。

私はアナスタシアを中庭に連れて行つて、的として《錬金》で泥人形を5体ほど用意します。

「この泥人形を的にしてください」

「はい」

私が泥人形から離れると、アナスタシアは精神を集中してから「行きます」と呟きました。

するとアナスタシアは、一見無手に見える手を無雑作に振ります。すると、泥人形からトストトストと、乾いた音がしました。泥人形を見ると、棒手裏剣が突き刺さっています。次にアナスタシアが腕を振ると、スローイングナイフ・クナイ・プッシュユダガーナイフ・チャクラムと続いて突き刺さりました。飛び道具がネタ切れ

かと思つた次の瞬間。アナスタシアが距離を縮めたと思うと、一瞬で泥人形の首を糸の様な物で刎ねます。そのままを糸の様な物捨てると、手甲から剣が飛び出し次の泥人形の首を刎ねました。

しかしまだ無傷の泥人形が一体あります。如何するのかとみてみると、そのまま暗器手甲で攻撃するフェイントを入れ、泥人形の咽を足の爪先が霞めるように蹴ります。無傷かと思つた泥人形は、予想に反して咽が大きくえぐれていました。良く見るとアナスタシアのブーツの爪先から、仕込ナイフが飛び出しています。そのまま腰から何か出したと思つたら、咽が抉れた泥人形の頭を殴りつけ首を切断しました。

……糸の様な物が鋼糸で、剣が飛び出した暗器手甲は剣手甲で、最後の武器は鉄扇ですね。と言うか、見事に暗器ばかりです。聞き違いで無かつた事に凹みました。それと、見覚えがある武器と思つたら、サムソン・パスカルと一緒に悪乗りして作つた武器達です。つまり私の自業自得です。

「母様は、この武器達を許してくれるかな？」

難しい問題です。元々暗器は小型で携帯しやすく隠密性が高いので、護身具から暗殺まで幅広く利用された武器の総称です。護身具としてだけ見れば問題ありませんが、問題は暗殺用の武器として使える事なのです。貴族が暗器使いつて、流石に不味いでしょう。

しかし、飛び道具や鋼糸はダメかもしれませんが、鉄扇だけなら同じ大きさのメイスでも代用出来るのでは？ と、考えを巡らせ始めた所で気付きました。

鉄扇だけならそのまま持つていても良いかもしれませんが。見栄え

の良い鉄扇なら、女性が持っていて違和感が無いので大丈夫でしょう。持ち歩くこと前提なので、杖としても使えそうです。

そうになると、鉄扇を使った武術を教える必要があります。教えるなら合気鉄扇術あたりでしょうか？ 合気道なら、アナスタシアと相性が良さそうですし。

「アナスタシア。合気道って言う武術があるのですが……」

私は合気道の概要をアナスタシアに説明しました。マギも剣術の延長で柔術と共に一通り覚えただけなので、アナスタシアの期待に満ちた目が辛かったです。

（果たして私に合気道をまともに教える事が出来るでしょうか？）

滅茶苦茶不安です。

さて、来週にはヴァリエール公爵が来ます。

出来る限りの準備は済ませましたが、上手くカトレアと仲直り出来るか不安でしょうがありません。

「考えても仕方ありません。なるようにしかならないのですから……」

そんな言葉を呟いてしまったのも仕方が無いでしょう。私はスケジュールの都合で、一日暇になってしまったのです。午前中は訓練等で潰しましたが、まだ午後が丸々空いています。

「まあ、たまにはボーっとして過ごすのも良いか」

私は本邸周辺を散歩しながら、見つけたベンチに横になりました。丁度木陰になっていて、森から吹く風が冷たくて気持ち良いです。夏に差し掛かった今なら、この場所は絶好の昼寝スポットです。

良く考えたら、赤ん坊の頃からこんな時間を持った記憶がありません。これじゃあ父上と母上が心配するのも仕方が無いでしょう。でも……

(時々人が通るのが気になるな)

まさか私がユツクリする為に、この場を通行禁止にする訳には行きません。そしてこの時“人の来ない自分だけの秘密の場所を探そう”と言う発想は、私にはありませんでした。

「自分だけの癒しの空間か……。そうか！！ 無ければつくれば良いんだ！！」

こんな結論に達する子供って……。しかし気分は、秘密基地を作る様で楽しくて仕方ありません。

日の光にあたれないのでは、部屋に居るのと大差ありません。見つからない所に一軒家を建てるのが一番でしょう。場所は……。森の中が一番ですね。上からじゃ見つからない様に偽装が必要です。完全に自分用の建物なら、懐かしい木造の平屋が良いですね。なら、こだわるのは地下の方です。毎回森の中に消えるのでは心配をかけてしまいます。本邸付近から隠し地下通路を作って、そこから入れるようにするべきですね。……うわぁ、何か本当に秘密基地っぽく

なってきました。

そんな事を考えている内に、ウトウトと眠りに落ちてしまいました。

(……重い)

体にかかる重量感で目が覚めました。同時に感じる圧迫感から、私の上に人が乗っているみたいです。私にこんな事が出来るの(と言つかするの)は、この領地に一人しかいません。ティアなら絶対に跳ね除けられない猫verでやりますし。

「ナス〜!!」

私は上に乗っている者を、横に少しずらしました。私が寝ているのは狭いベンチなので、当然上に乗っていた者は地面に落下します。落下音と共に「ふぎゅ!!」と言う悲鳴が聞こえましたが、私の眠りを妨げたのですから当然の報いです。

私がボーっとする頭を振りながら起き上がると、何故か館から走って来る影がありました。

「兄様 あたし何もしてないよ!!」

走って来て開口一番言い訳をするのはアナスタシアです。私がナスと呼ぶ時は、本気で怒っている時が多いのでその所為でしょう。と言うか、館から走って来たのがアナスタシアなら、先程まで私の上に乗って居たのは誰なのでしょう? って、このピンクブロンドは……

「あれ？ カトレア姉さま」

はい確定です。アナスタシアに追い打ちをかけられた気分です。無言・無表情で立ち上がるカトレアが、洒落にならない位怖いです。

「ギルとお話があるから借りるわね」

カトレアの声から何かを感じ取ったのでしょうか。アナスタシアがカクカクと頷きます。そしてそのまま逃亡しました。

「さて 先ずはギルの部屋へ行きましょうか」

……………三時間後。

ようやくカトレアの説教が終わりました。

しかし、悪い事ばかりではありませんでした。最後に、治療に踏み切った私の心中を察して“あの態度は無かったわ。ごめんなさい”と、カトレアが謝ってくれたのです。私もすぐに謝罪し、お互い配慮が足りなかったと言う事で落ち着かせました。

しかし、何故カトレアは一人で来たのでしょうか？ カトレアもそんな事をすれば、公爵達が良い顔をしないのは分かっているはず。です。

「私は嬉しいのですが、何故一人で来たのですか？」

「うん。魔法学院で生活して居ると、いろいろと考えてしまっ

カトレアはそこで言葉を切ると、真剣な表情になり数秒ほど黙ってしまいました。そして僅かな違和感を感じ、カトレアの顔を注視すると……

(ギル。《共鳴》を使ったわ) byカトレア

(《共鳴》なぞ使ってなにようじゃ) byティア

(ようやく痴話げんかが終わったのかの?) byレン

(急に《共鳴》なんて使って何の内緒話ですか?) byギル

私はため息を吐きながらも、どんな話が飛び出してくる内心でか戦々恐々としていました。

(単刀直入に言っわ。原作にもっと干渉しましょう) byカトレア

(しかし、それでは今後の展開が読めなくなり、イレギュラーに対応しきれない可能性が高くなります) byギル

(今のドリユアス家を見れば今更よ。既にイレギュラーが出る事が決まっているのだから、少しでも今後を有利に進める必要があるわ) byカトレア

カトレアが言っている事は正論です。反対する理由は今の所ありません。

(具体的には?) byギル

(“無能王誕生阻止” と “モード大公の救済” ね。それと、出来れば “エルフ達との和解” かしら。 “ジョゼットの救出” もあるわね。トリスティン内部は、油断は出来ないけど順調と言えるわ) byカトレア

怖ろしく無茶を言ってくれます。

(“エルフ達との和解” は、精霊達に協力を仰げば何とかなるかもしれませぬ。 “ジョゼット救出” も何とかあります。しかし、 “無能王誕生阻止” と “モード大公救済” は、政治的な物が絡んできますので、成功する確率はかなり低い上に失敗した時のリスクが高すぎます。それに最終的に、全ての問題を解決するのはルイズとサイトです。この二人の成長の機会を奪うのは、良くないと思います) byギル

ガンダールヴの力を認識するギーシュ戦やフーケ戦。敗北を知りデルフリンガーを覚醒させるワルド戦。数え始めたらきりがありません。

(吾も主の意見に賛成じゃ。過剰に干渉するのは良くないと思うのじゃ) byティア

(政治的な話に別に深入りする必要はないわ。チャンスがあれば干渉すれば良いのよ。それにルイズとサイトの成長は、私達が適切な物を用意すれば良いわ。サイトに訓練をして、原作よりも早く成長させるつもりなのでしょう？) byカトレア

……何か腹黒くありませんか？ いや、その方が安全なのは事実ですが。

(ギル風に言うなら“フラグを全て叩き折れ作戦”ね。……それがら感情がこっちに漏れてるから) byカトレア

(ごめんなさい) byギル

(すまぬ) byティア&レン

(あれ？ ティアとレンもなの？) byカトレア

(ぬう。墓穴を掘ったか) byティア

(まあ、仕方が無いの) byレン

(うう。まるで私一人が腹黒いみたいで落ち込むわ) byカトレア

(カトレアが言った事は、確かに一理があります。これから検討しましょう) byギル

「それよりカトレアと仲直りする為に、プレゼントがあるのでですよ」

私は《共鳴》もこの話題も終了と言わんばかりに声を出しました。

「何かしら？」

カトレアが私の話に乗って来てくれました。既に《共鳴》も切っけてくれています。

「新しい杖ですよ。材料が材料なので、既にカトレア専用の杖と言っても良い出来です」

私はそう言いながら、部屋の隅からアルミケースを持ってきます。

「これです」

そう言いながら、カトレアの前でケースを開きました。

「うわ〜!!! これ、本当に私にくれるの?」

私が作った杖を手に持ち、嬉しそうに眺めるカトレアでしたが、すぐにその顔が曇ってしまいます。

「出来が良すぎるわ。王家の杖より、性能も見た目の豪華さも上じゃない。私がこれを持って居たら、王家の顔を潰してしまうわ」

カトレアの言う事は至極もつともです。このままではカトレアはこの杖を使えません。

「うう。せつかく作ったのに……」「うう。ギルからのプレゼントなのに……」

作り直すのも悔しいですし、何よりもカトレアがガッカリしています。……後で公爵に相談してみますか。

仕方が無いのでカトレアには、代わりにミスリルで作った扇をプレゼントしておきました。

それを受け取ったカトレアは、アナスタシアと一緒に合気鉄扇術の訓練を始めました。基礎と型を一通り教えただけで、後は二人で勝手に訓練をしていました。動きの良し悪しを教えてあげられるだ

けで、もうほとんど何も教えてあげられないのが悔しかったです。

三人で合気道の訓練をしていると、あっという間に時間が過ぎ公爵達が別荘に遊びに来ました。公爵は予想通り、カトレアが直接ドリュアス領に来た事にへそを曲げていました。

とりあえず公爵は放っておくとして、カリーヌ様にカトレアが持つ扇に興味をもたれたのは不味かったです。扇の説明から合気鉄扇術にまで話題が移り、護身術と言う言葉にカリーヌ様と母上が共感したのです。カリーヌ様の命令で普段の訓練風景を見せると、そこにカリーヌ様と母上が乱入して来て、何時の間にか旅行が強化合宿に変わって居ました。

巻き込まれたルイズとエレオノール様は泣いていましたが、体を動かせるのが楽しいのか、カトレアは終始嬉しそうにしていました。（マルウエンの首輪の成長効果で逆転し、体力は二人よりカトレアの方が上）しかしそれがカリーヌ様を喜ばせ、訓練がより過酷になったのはルイズとエレオノール様にとって悲劇としか言いようが無いでしょう。

更に言えば、激しい訓練の所為で食欲を無くし、私が用意した（他の人達の評判は非常に良かった）食事にも手を付けられなかったようです。エレオノール様が「母さまの訓練は胸がやせるから受けたくないのよ」と、怨念のこもった声で呟いた時は、皆どう反応して良いか分からず困惑していました。

帰宅日にカリーヌ様が、凄く良い笑顔で「また来るわ」と言っていました。ルイズとエレオノール様はカリーヌ様の後ろで必死に首を左右に振って居ました。この二人には心から同情します。

ちなみに公爵は家族にほったらかしにされ、一人でいじけていました。私がカトレアの杖の事を相談しても、生返事しか返って来ないありさまです。仕方が無いので実物を見せると、正気に戻り製作者は誰なのか問い詰められました。内密にする約束で私が作ったと言つと、あきれられた上に“更に良い物を王家に献上すれば良い”と、投げやりに言われてしまいました。……この時、公爵に依頼されても絶対に何も作らないと決めました。

カトレアに言われた事を検討した結果、マギ商会をガリアとアルビオンに進出させ情報を集める事にしました。

表向きは商業路の開拓と規模拡大なので、それほど大きなリスクは背負わなくて済むでしょう。ここで集めた情報を元に、これから如何言つた対応をするか決めて行こうと思います。

私は今後の調整の為に、ファビオと頻繁に会談するようになりました。そんな時に、突然父上から呼び出されたのです。執務室に入ると、父上とカロンが話しが丁度終わる所でした。

「ギルバート。ファビオ。面倒な事になった」

普段の父上の言い回しから想像すると、かなり不味い状況の様です。私とファビオは緊張して続きを待ち、父上も緊張した面持ちで続けます。

「クルデンホルフが、借金の返却を要請して来た。そして、借金を

帳消しにする代わりにダイヤを奪われてしまった」

「なっ!!!」

現在のクルデンホルフから借りている額は、60万エキューで今年分の利子を含めても63万エキューです。塩取引の利益が残っているとは言え、これほどの大金をいきなり用意出来るはずがありません。向こうがダイヤを奪う気なら、確かに抵抗は難しいでしょう。しかし、それでも私は驚きの声を上げてしまいました。何故なら……

「クルデンホルフ大公には、陛下から口利きをしてもらっているのではないのですか？」

「その通りなのだが、向こうは手紙で一方的に借金の返済を求めて来た。そして返済不能と決めつけ、ダイヤモンドを徴収し借金を清算すると言って来たのだ。これは陛下に対する裏切りと言っても良いだろう」

「何故？」

私が思わずそう聞き返すと、父上は首を横に振った。

「原因は今のところ不明だ。……だが、ヒントが一つある。手紙の送り主が大公ではなく、その弟のポップと言う男だった事だ」

何ですかそれは？ いや、お家騒動の可能性もありますね。

「そこで、クルデンホルフ大公家の現状を調査しようと思う。ギルバートには、その陣頭指揮をとってもらおう。ファビオはそのサポートだ」

「はい」

「これは未確認情報だが、ロマリアンマフィアの生き残りがクルデンホルフに出入りして居ると言う情報もある。くれぐれも注意して行動してくれ」

ただのお家騒動かと思ったら、一気にきな臭くなりました。勘弁してください。

第五十二話 モヤモヤは仕事にぶつけ……られない？（後書き）

次の更新は、ノクタのEinmal mehrですね。
相変わらず遅文で申し訳ありません。

と言うか、二作同時進行は不器用な作者には無理と判明しました。
次までにどちらに集中するか決めておこうと思います。

ご意見ご感想をお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1431n/>

ちょっと違うZEROの使い魔の世界で貴族？生活します

2011年12月28日02時36分発行